

# まもりたい静岡県の野生生物

2019

## 静岡県レッドデータブック

< 動物編 >

平成 31 年 3 月

静岡県くらし・環境部環境局自然保護課



## 御 挨拶



日本人は自然の脅威に畏敬の念を抱きつつも、生物多様性の恵みに感謝し、野生生物と関わり合いながら、同じ土地に共生する仲間として歴史を紡いできました。様々な野生生物が織り成す豊かな日本の自然環境は、人々の感性に大きな影響を与え、固有の文化・自然観を育んできました。

しかし、近年の生活様式の変化や科学技術の発達の中で、自然環境と日本人の関係は変わってきています。さらに、開発による生息環境の急激な変化や外来生物の侵入等が生態系に大きな影響を与えています。

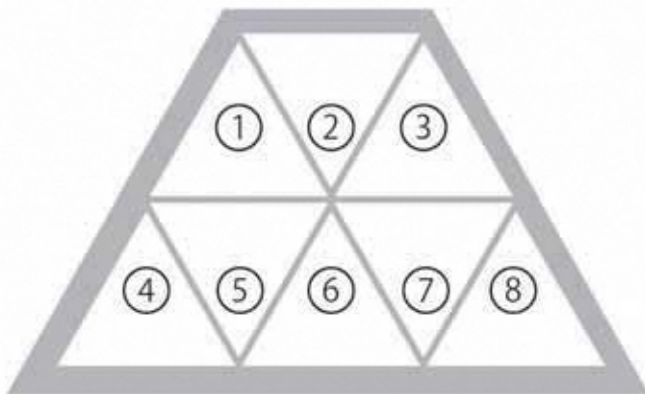
本県には、世界遺産の富士山をはじめ、南アルプス、伊豆半島、浜名湖などに代表される世界に誇る美しい自然があります。これらの自然が有する生物多様性の素晴らしい環境を後世に継承していくため、県では、希少な野生生物の保護に関する方針と対応を定めた「生物多様性地域戦略」を平成 30 年 3 月に策定しました。本書「まもりたい静岡県の野生生物 2019 —静岡県レッドデータブック—」の内容は、この戦略の基礎資料であり、初版発行時（平成 16 年）から 10 年余の間に生じた野生生物の生息・生育状況の変化等を反映し、改定を行っています。

本書の活用により、県民の皆様の自然環境への関心や理解が更に深まるとともに、「生物多様性地域戦略」に掲げられた野生生物の適切な保護、保全を進める取組が着実に推進されることを期待しております。

結びに、平成 21 年から長期間にわたり、県内を調査され、本書の編集に当たられました自然環境保護調査委員会のメンバーをはじめとする調査協力者の皆様、監修をいただいた静岡県レッドデータブック改訂監修委員会の皆様に、心からお礼申し上げます。

平成 31 年 3 月

静岡 県 知 事 川 勝 平 太



**【表紙写真】**

- ①クビワコウモリ
- ②アカモズ
- ③アカウミガメ
- ④フジホラヒメグモ
- ⑤アカイシサンショウウオ
- ⑥カワバタモロコ
- ⑦ペッコウトンボ
- ⑧オモイガケナマイマイ



## 目次

<b>I 概要</b> .....	<b>7</b>
1 本書の目的 .....	9
2 本書の内容 .....	10
3 検討体制・検討内容 .....	15
4 レッドリストの選定方針及び結果 .....	21
(1) 選定方針 .....	21
(2) 結果 .....	22
5 保護方針 .....	32
<b>II 種の解説</b> .....	<b>35</b>
1. 哺乳類 .....	37
2. 鳥類 .....	71
3. 爬虫類 .....	151
4. 両生類 .....	161
5. 淡水魚類 .....	179
6. 昆虫類 .....	235
7. 陸・淡水産貝類 .....	435
8. クモ類 .....	505
調査協力、写真等提供者 .....	531
レッドリスト 2017 公表からの訂正と変更 .....	532
和名索引・環境省カテゴリー対照表 .....	535



# 概要



## 1 本書の目的

静岡県レッドデータブックは、静岡県における絶滅の可能性のある野生生物の分布や生息・生育状況について、詳細にとりまとめたものである。静岡県は、地域レベルの貴重な自然環境の保全を目的として、平成 16 (2004) 年に静岡県レッドデータブック (2004) を作成した。野生生物の生息・生育状況は著しく変化しており、また、野生生物についての新たな知見も得られ、内容の見直しが必要となった。そこで、平成 21 (2009) 年度から平成 29 (2017) 年度まで静岡県内の希少野生動植物を中心に調査を行い、それらに基づいた静岡県レッドデータブックの改訂作業を進めてきた。平成 29 (2017) 年度には静岡県レッドデータブックに掲載すべき各分類群の野生生物について、絶滅のおそれの程度でランク付けしたリスト (レッドリスト) の見直し作業が終了し、平成 29 (2017) 年 10 月に改訂版の静岡県レッドリストを取りまとめて公表した。

本書は、動物編として、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、陸・淡水産貝類、クモ類の静岡県レッドリスト掲載種について、生息状況等にとりまとめ編さんしたものである。

また、豊かな自然環境に恵まれた静岡県の生物多様性の将来像や、その保全に向けた「ふじのくに生物多様性地域戦略 (平成 30 (2018) 年 3 月策定)」の基礎資料としても本リスト及びレッドデータブックが活用される。

静岡県レッドデータブックの主な役割・目的は以下の 4 つである。

- ① 静岡県の実情にあった希少種の位置づけを行う。
- ② 自然保護の基礎データとする (守るべき動植物の種類、生息場所、特性等)。
- ③ 貴重な自然環境が気づかれないうちに劣化していくのを防止する。
- ④ 県民の自然環境保全への関心と理解を深め、自然保護意識の普及を図る。

## 2 本書の内容

本書では、その絶滅の可能性により対象種をカテゴリー区分した。カテゴリー区分は、基本的に静岡県レッドデータブック（2004）のカテゴリー区分を踏襲したほか、環境省のカテゴリー区分（2017）の定性的要件を準用した。また、静岡県独自のカテゴリーとして「要注目種」を採択した。「要注目種」とは、環境省のカテゴリーには該当しないが、静岡県での野生生物保護上重要な種を区分したものである。

カテゴリー区分は、以下のとおりである。

静岡県レッドデータブックカテゴリー一覧

カテゴリー	基本概念
絶滅	静岡県では既に絶滅したと考えられる種
野生絶滅	飼育・栽培下でのみ存続している種
絶滅危惧Ⅰ類	絶滅の危機に瀕している種
ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧	存続基盤が脆弱な種
情報不足	評価するだけの情報が不足している種
絶滅のおそれのある地域個体群	地域的に孤立している地域個体群で、絶滅のおそれが高いもの
要注目種 (静岡県独自のカテゴリー)	
現状不明	現状が不明な種
分布上注目種等	絶滅の危険性は小さいが、分布上注目される種
部会注目種	その他各部会で注目すべきと判断した種

これらのカテゴリーごとに、対象種の解説、分布、生息環境、生息状況、減少の要因と脅威、保護対策、特記事項、主な文献、標本について掲載した。上記以外に分布図（一部の種については保護上の観点から非公表とした）、写真（撮影時期、撮影場所、採集者または撮影者を明示）も掲載した。また、カテゴリーごとに保護方針を掲載した。

なお、この静岡県レッドデータブックは、それ自体が法的規制等の強制力を持つものではないが、効果的な保護対策を推進できるよう、野生生物のおかれている状況を広く一般に理解してもらうために、情報提供するものである。

静岡県レッドデータブック（動物編）種の解説記載内容

記載項目	内容
掲載種名	<p>科名、種名（種・亜種を対象とする）の標準和名を記載した。種の学名は、命名者、記載年まで記載した。一部の種では、標準和名の下に（＝ ）で別名を記載した。</p> <p>静岡県レッドデータブックカテゴリーとカテゴリーの具体的な要件を記載した。</p> <p>静岡県レッドデータブック（2004）からカテゴリーが変わった場合は、その理由を別表（p. 12）の「変更コード」から番号を選び、記載した。</p> <p>環境省カテゴリーを記載した。該当しない場合は「なし」とした。</p>
写真	見やすく、種の特徴のわかりやすい写真を掲載した。生態写真の場合は、撮影日、撮影場所、撮影者を記載した。標本写真の場合は、採集日、採集場所、採集者または撮影者を記載した。
分布図	<p>分類群により、分布図のメッシュの単位は二次メッシュ（1/25,000 地形図に相当）またはその 1/4 に統一した。淡水魚類は図に水系を入れ、地点で示した。</p> <p>また、保護上必要な場合は、詳細な地名及び分布図は非公表にするなど、希少種の保護に最大限配慮した。</p>
1. 種の解説	形態、生態的特性、近似種との区別、生活史などを記載した。
2. 分布	国外、静岡県内外における分布状況の概略について記載した。新規のクモ類以外では、可能な限り静岡県レッドデータブック（2004）からの分布状況の変化を加えた。
3. 生息環境	対象種の生息環境について記載した。
4. 生息状況	静岡県における現在の生息状況を記載した。現在の状況及び可能なものは時代変遷について記載した。
5. 減少の主要因と脅威	減少に至った主な原因について記載した。また、生存に対する脅威を記載し、別表（p. 13～14）の「存続を脅かしている要因のタイプ区分」から該当するタイプ区分を特定し、要因内容の後ろに該当するコード番号を括弧書きで記載した。
6. 保護対策	保護対策のあるものについて記載し、可能なものは他県の保護事例も記載した。また、今後考えられる、期待される保護対策があれば記載した。
7. 特記事項	関連法令、学術的価値等について記載した（天然記念物等の保護規制状況・学術的な価値や位置づけ等）。
8. 主な文献	種の解説等において参考とした文献を記載した。ただし、静岡県レッドデータブック（2004）及び環境省レッドデータブックについては、全般的に参考としており、ここでの記載を原則として省略した。
9. 標本	分布の根拠となる標本が公的機関に保管されている場合、その保管場所等を記載した。また、可能なものについては登録番号も記載した。
執筆者	最終行に執筆者名を掲載した。

別表 変更コード

No.	ランクアップ・新規
1	生息環境が限定される（含む宿主依存）
2	繁殖力がきわめて弱い
3	外敵の分布、食害が拡大している
4	新たに確認され絶滅危険度が高い
5	確認が容易な種だが確認記録がない
6	生息地が消失した
7	研究等の新知見で危急性が示唆された
8	新種記載され1種が複数種に細分化された
9	その他
No.	ランクダウン・削除
10	絶滅したと考えられたが再発見された
11	個体数が多いことが確認された
12	個体数の増加傾向がみられる
13	新産地の確認数が増加している
14	信頼性のある確認記録・標本がない
15	静岡県内では外来個体群に該当する
16	近年記録がなかった種が確認された
17	その他



別表 存続を脅かしている要因のタイプ区分（動物）

（1/2）

要因	コード	適用範囲の例
森林伐採	11	2次林も含む樹木の伐採による森林の減少・消失が原因となる場合に用いる。また、樹洞の減少等の間接的な要因についても広義に含んで使用可能。
湖沼開発	12	湖および池沼、ため池等の開発行為に起因するもの。護岸整備や取水設備の設置や埋め立て等が原因となる場合に使用する。
河川開発	13	河川の開発行為に起因するもの。護岸整備をはじめ、河床の整備、河道の付け替え等が原因となる場合に用いる。ダムをはじめとした横断工作物の設置に起因するものは「ダム建設（25）」に含めて使用すること。
海岸開発	14	海岸や砂浜域の開発行為に起因するもの。海岸の埋め立てに関連して生じた間接的な影響について広義に含んで使用可能。
湿地開発	15-1	湿地の開発行為に起因するもの。湿地の埋め立てや開発に関連して生じた間接的な影響について広義に含んで使用可能。
圃場整備	15-2	水田、畑等の圃場整備に起因するもの。整備に伴う田面の変化や乾田化、水路、畦の消失およびコンクリート化等に関連するものを広義に含んで使用可能。
草地開発	16	草地として維持されている環境の開発に起因するもの。草地自体の消失や開発により生じた環境悪化によるものを広義に含んで使用可能。
石灰採掘	17	石灰の採掘に起因するもの。石灰採掘に係わる人為的な影響によるものを広義に含んで使用可能。
洞窟の消失や環境悪化	18	人為的影響による洞窟の消失、もしくは環境悪化に起因するもの。開発行為をはじめレジャー等によるものを含む。
ゴルフ場	21	ゴルフ場の開発に起因するもの。ゴルフ場の開発に関連して生じた間接的な影響について広義に含んで使用可能。
スキー場	22	スキー場の開発に起因するもの。スキー場の開発に関連して生じた間接的な影響について広義に含んで使用可能。
土地造成	23	宅地開発やリゾート開発など土地の造成に起因するものを含む。場所を問わず特に土地造成が主要因であると判断される場合に用いる。
道路建設	24	道路建設に伴う生息地の改変、消失をはじめ、道路建設後の運用時に生じる生息地の分断化や側溝への転落なども含んで使用可能。轢死によるものはここに含まない。
ダム建設	25	ダム建設のみでなく、砂防ダム、堰堤、樋門、頭首工など河川横断工作物による影響に起因するものを含む。ダム建設等の建設による生息地の消失をはじめ、運用後に生じる遡上阻害や環境悪化なども広義に含んで使用可能。
交通事故	26	轢死等による直接的な事故の場合のみ使用する。
水質汚濁	31	河川、水路、ため池等の水域における水質汚濁に起因するもの。水質汚濁が原因と特定可能な場合のみ使用する。
農薬汚染	32	農地（水田、畑、果樹園等）およびその周辺域（水路、畦等）における農薬汚染に起因するもの。水質汚濁の場合でも特に農薬汚染と特定できる場合はこちらを選択する。
感染症	33	病原体に起因するもの。感染症に係わるものを広義に含んで使用する。
捕獲・狩猟	41	人による捕獲・採集行為に起因するもの。目的は問わず、狩猟、漁獲、ペット業者の採集、研究者の採集、違法採集などすべてを含んで使用する。
人の踏みつけ	51	人による踏みつけ行為に起因するもの。踏みつけによる直接的な生息環境の悪化をはじめ、湿原への侵入による乾燥化に伴う遷移のような、間接的な影響の場合もこちらを使用する。
捕食（外来種*による）	52-3	外来種による捕食に起因するもの。国外国内両方の外来種を含み、人為的に持ち込まれた生物による捕食の影響が主である場合に使用する。
捕食（在来種による）	52-4	在来種による捕食に起因するもの。環境改変等に伴う生態系バランス変化で、もともと同所的に生息していた在来種による捕食の影響が大きくなったことにより生じた弊害に関するもの。

別表 存続を脅かしている要因のタイプ区分（動物）

（2/2）

要因	コード	適用範囲の例
管理放棄	53	人為的な管理により維持されていた 2 次的自然の管理放棄に起因するもの。草地の遷移やため池の湿地化、水田の休耕田化等の管理放棄が原因と考えられる場合に使用する。
遷移進行・植生変化	54	自然に起こる遷移の進行、植生の変化に起因するもの。乾燥化等による遷移でも直接人間が関与していないものはこちらに含む。また、シカやヤギの食害により生じた植生変化についてもここに含む。
自然災害	55	集中豪雨による土砂崩れや洪水、地震、津波、火山噴火などあらゆる自然災害に起因する場合に使用する。
競争（外来種*による）	56-1	外来種との競争に起因するもの。国外国内両方の外来種を含み、人為的に持ち込まれた生物との競争が主である場合に使用する。
競争（在来種による）	56-2	在来種による競争に起因するもの。環境改変等に伴う生態系バランスの変化で、もともと同所的に生息していた在来種との競争の影響が大きくなったことにより生じた弊害に関するもの。国内外来種によるものは「競争（外来種*による）（56-1）」に含める。
交雑（外来種*による）	57-1	外来種との交雑に起因するもの。国外国内両方の外来種を含み、人為的に持ち込まれた生物との交雑が主である場合に使用する。
交雑（在来種による）	57-2	在来種との交雑に起因するもの。環境改変等に伴う生態系バランスの変化で、もともと同所的に生息していた在来種との交雑が起こるようになったことで生じた弊害に関するもの。国内外来種によるものは「交雑（外来種*による）（57-1）」に含める。
局所分布	61	地史的にもともと分布が局限しており、環境改変や自然災害等で容易に絶滅する危険がある場合に使用する。
近親交配	62	生息地の分断化や個体数の急減等による近親交配、遺伝的多様性の低下に起因する。
その他	71	上記にどうしても当てはまらない原因の場合に用いる項目。基本的には上記のいずれかの項目を広義に解釈して当てはめることが望ましいが、それが困難な場合に使用する。本文への記述の際は、「その他（71）」ではなく「具体的な要因の解明（71）」とする。
不明	99	存続を脅かす原因が分かっていない場合や原因がはっきりしない場合は、この項目を選択する。

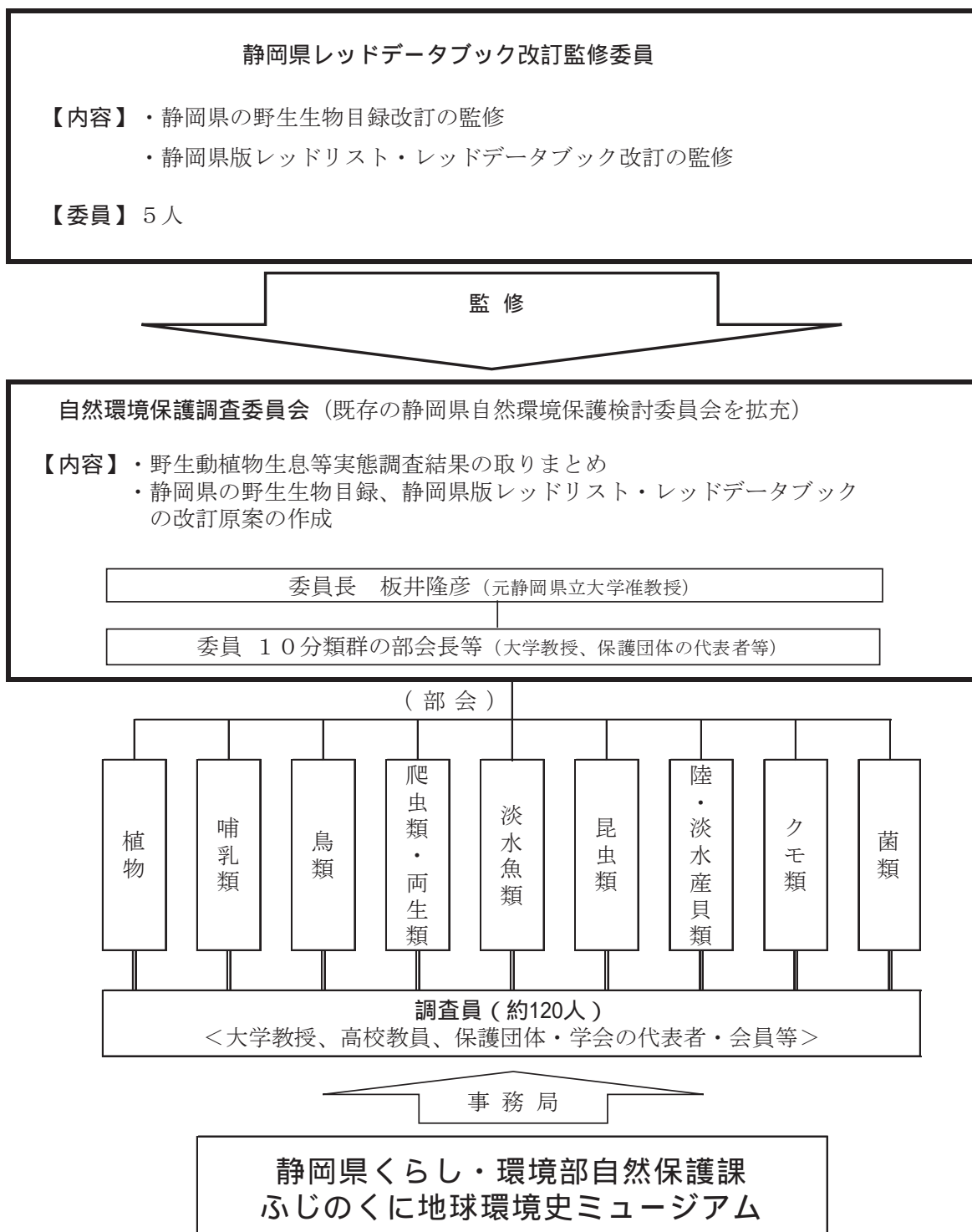
\* ここでの外来種は国内・国外の両方を含む

環境省レッドデータブックより引用

### 3 検討体制・検討内容

静岡県レッドデータブックの改訂に当たっては、動植物に関する国内第一人者の監修をお願いするとともに、静岡県内の野生動植物の専門家からなる「静岡県自然環境保護調査委員会」を設置し、その下に各生物分類群の専門部会を置いて、掲載種の選定方法、調査内容・方法、評価方法等について検討した。今回、検討対象としたのは、改訂前に対象とした植物、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、陸・淡水産貝類の8分類群に、新たにクモ類、菌類を加えた10分類群である。

#### 静岡県レッドデータブック編さん体制



検討に必要な野生動植物の情報は、文献・標本・現地調査により収集した。調査の実施主体は、静岡県内で野生生物の研究を行っている各委員、各部会員及び調査員（約 120 人）である（委員会名簿参照）。そのほか、専門家の厚意により提供された県内各地の希少野生生物の生息・生育等情報を活用して本書は作成されている。

本委員会の調査方法は、必ずしも静岡県レッドデータブック（2004）作成時の調査方法と同一ではないため、静岡県レッドデータブック（2004）と本書に掲載された分布情報を単純に比較し、分布域の変化を考えることは適当ではない。また、直近の現地調査による分布情報がない場合であっても、過去の調査により確認された地域であれば、その種の生息の可能性を完全に否定することはできない。

## 【名簿】

### 監修委員 委員名簿（5人）

氏名	所属	専門
岩槻邦男	東京大学名誉教授 兵庫県立人と自然の博物館名誉館長	植物
近田文弘	国立科学博物館名誉研究員	植物
三浦慎悟	早稲田大学人間科学学術院教授	哺乳類
山岸 哲	兵庫県立コウノトリの郷公園園長 (公財) 山階鳥類研究所名誉顧問	鳥類
石井 実	大阪府立大学大学院生命環境科学研究科教授	昆虫類

### 静岡県自然環境保護調査委員会 委員名簿（10人）

区分	分類群	氏名	所属	役職
委員長	総括・淡水魚類	板井隆彦	静岡淡水魚研究会	会長
副委員長	植物	湯浅保雄	静岡植物研究会	会長
副委員長	哺乳類	三宅 隆	NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク	副理事長
委員	鳥類	北川捷康	静岡県渡り鳥研究会	代表
委員	爬虫類・両生類	國領康弘	志太自然ネットワーク	副会長
委員	淡水魚類	山田辰美	常葉大学	名誉教授
委員	昆虫類	諏訪哲夫	静岡昆虫同好会	会長
委員	陸・淡水産貝類	松本雅道	[博士（農学）]	
委員	クモ類	小林俊樹	日本クモ学会	会員
委員	菌類	池ヶ谷のり子	日本菌学会 静岡木の子の会	会員

静岡県自然環境保護調査委員会 部会員名簿

分類群	氏名	所属
植物 7人	湯浅保雄 *	(前出)
	斎藤 猛	静岡植物研究会
	徳岡 徹	静岡大学理学部
	中池敏之	元千葉県立中央博物館
	内藤宇佐彦	遠州自然研究会
	細倉哲穂	日本シダの会
	宮崎一夫	遠州自然研究会
哺乳類 5人	三宅 隆 *	(前出)
	大場孝裕	静岡県
	小長谷尚弘	日本哺乳類学会
	佐々木彰央	NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク
	鳥居春己	奈良教育大学
鳥類 7人	北川捷康 *	(前出)
	新井 真	静岡猛禽研究会
	宇治土公貞宏	日本野鳥の会沼津支部
	小粥秀治	NPO 法人浜松市動物園協会
	影山秀雄	日本野鳥の会南富士支部
	酒井洋平	伊豆野鳥愛好会
	森田剛則	日本自然保護協会
爬虫類・ 両生類 11人	國領康弘 *	(前出)
	江頭幸士郎 (2016 から)	北九州市立いのちのたび博物館
	大貴貴清 (2015 から)	東海大学海洋学部水産学科
	亀崎直樹	神戸市立須磨海浜水族館
	加藤英明	静岡大学教育学部
	加藤健一 (2015 から)	(株)環境アセスメントセンター
	佐々木彰央	NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク
	富永 篤 (2016 から)	琉球大学教育学部
	疋田 努	京都大学
	松井正文	京都大学
	見澤康充	日本爬虫両棲類学会
淡水魚類 11人	板井隆彦 *	(前出)
	秋山信彦	東海大学海洋学部
	安藤晴康	元静岡県自然環境調査委員会

\* 部会長

分類群	氏名	所属
淡水魚類	大塚善弘	(株)静環検査センター
	金川直幸	静岡淡水魚研究会
	川嶋尚正	静岡県内水面漁業協同組合連合会
	北原佳郎	(株)環境アセスメントセンター
	後藤裕康	静岡県
	渋川浩一 (2015 から)	静岡県
	鈴木邦弘	静岡県
昆虫類 9人	山田辰美	(前出)
	諏訪哲夫 *	(前出)
	石川 均	静岡昆虫同好会
	枝 恵太郎	静岡昆虫同好会
	加須屋 真	静岡昆虫同好会
	白井和伸	静岡昆虫同好会
	高橋真弓	静岡昆虫同好会
	多比良嘉晃	静岡昆虫同好会
	平井克男	静岡昆虫同好会
福井順治	静岡昆虫同好会	
陸・淡水 産貝類 3人	松本雅道 *	(前出)
	加藤 徹	静岡県
	加藤 真	京都大学大学院人間・環境学研究科
クモ類 4人	小林俊樹 *	(前出)
	小林久俊 (2016 まで)	元日本クモ学会
	久保田克哉	静岡県
	谷川明男	東京大学農学部生物多様性科学研究室
菌類 10人	池ヶ谷のり子*	(前出)
	秋山富雄	静岡木の子の会
	小倉辰彦	静岡木の子の会
	大塚健佑 (2015 から)	静岡県
	河村正幸	静岡木の子の会
	岸澤広晶	静岡木の子の会
	佐々木優子	日本菌学会 静岡木の子の会
	高山壽彦 (2015 から)	日本冬虫夏草の会
	福田美津夫	静岡木の子の会
	真橋祐次郎	静岡木の子の会

静岡県自然環境保護調査委員会 調査員名簿

分類群	氏名	分類群	氏名	分類群	氏名	
植物 7人	安藤介二	爬虫類・ 両生類 6人	青木良輔	昆虫類 13人	天野市郎	
	鵜飼一博		井出匡昭		池谷 正	
	佐野 弘		植田健仁		浦山幸夫	
	西口紀雄		小賀野大一		加藤 徹	
	早村俊二		佐藤直己		北野 忠	
	山崎由晴		高山尋彦		酒井孝明	
	山田昌彦	岩田正直	鈴木英文			
哺乳類 9人	大隈 充	淡水魚類 18人	加藤健一		クモ類 5人	竹内克弥
	大橋正孝		北川 学			谷川久男
	勝田節子		倉野由紀夫			間野隆裕
	榊原英幸		佐々木彰央			森田 東
	佐藤顕義		佐藤雄一			森田誠司
	高田 歩		長橋聖一			油井雅樹
	高見宗広		森口宏明	加藤玲衣		
	高山壽彦		湯川洋行	吉田 剛		
	山本幸介		安本洋一	影山史弥		
	鳥類 6人		川合正晃	影山宏一		菌類 3人
近藤多美子			宮崎一夫	先田直裕		
中村裕志			近藤 正	東 勇太		
浜野秀保			小林正明	山本航平		
増田章二			松永幸伸	吉田 譲		
渡邊修治			望月金道			
	堀田 卓					
	矢野靖彦					

## 静岡県カテゴリー

区分及び基本概念		具体的要件（定性的要件）	
<b>絶滅</b> <b>Extinct (EX)</b> 静岡県では既に絶滅したと考えられる種 <sup>(注)</sup>		過去に静岡県に生息・生育したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、静岡県では既に絶滅したと考えられる種	
<b>野生絶滅</b> <b>Extinct in the Wild (EW)</b> 飼育・栽培下でのみ存続している種		過去に静岡県に生息・生育したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、静岡県においては野生では既に絶滅したと考えられる種  <b>【確実な情報があるもの】</b> ① 信頼できる調査や記録により、既に野生で絶滅したことが確認されている。 ② 信頼できる複数の調査によっても、生息・生育が確認できなかった。 <b>【情報量が少ないもの】</b> ③ 過去 50 年間前後の間に、信頼できる生息・生育の情報が得られていない。	
絶滅 危惧  T H R E A T E N E D	<b>絶滅危惧 I 類</b> <b>(CR+EN)</b> 絶滅の危機に瀕している種	次のいずれかに該当する種  <b>【確実な情報があるもの】</b> ① 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ② 既知のすべての生息・生育地で生息・生育条件が著しく悪化している。 ③ 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 <b>【情報量が少ないもの】</b> ⑤ それほど遠くない過去（30～50年）の生息・生育記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	<b>絶滅危惧 I A 類</b> <b>Critically Endangered (CR)</b> ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。  <b>絶滅危惧 I B 類</b> <b>Endangered (EN)</b> I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
	<b>絶滅危惧 II 類</b> <b>Vulnerable (VU)</b> 絶滅の危険が増大している種  現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種  <b>【確実な情報があるもの】</b> ① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息・生育地で生息・生育条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。	



区分及び基本概念	具体的要件（定性的要件）
<p><b>準絶滅危惧</b> <b>Near Threatened (NT)</b> 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息・生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後更に進行するおそれがあるもの。</p> <p>a. 個体数が減少している。 b. 生息・生育条件が悪化している。 c. 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d. 交雑可能な別種が侵入している。</p>
<p><b>情報不足</b> <b>Data Deficient (DD)</b> 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息・生育状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種</p> <p>a. どの生息・生育地においても生息・生育密度が低く希少である。 b. 生息・生育地が局限されている。 c. 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 d. 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。 e. その他ランクを判定するに足る情報が得られていない種。</p>
<p><b>絶滅のおそれのある地域個体群</b> <b>Threatened Local Population (LP)</b> 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>① 生息・生育状況、学術的価値等の観点から、静岡県レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息・生育域が孤立しており、地域レベルで見ただけの場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>
<p><b>要注目種</b>（静岡県独自のカテゴリー） <b>Noteworthy (N)</b></p>	
<p><b>N-I 現状不明</b> 現状が不明な種</p>	<p>過去の記録はあるが、その後30年未満の間情報の得られていない種（偶産種は除く）。</p>
<p><b>N-II 分布上注目種等</b> 絶滅の危険性は小さいが、分布上注目される種</p>	<p>分布が局限されている種、その他、静岡県で遺伝的、形態的に特異な種。</p>
<p><b>N-III 部会注目種</b> その他各部会で注目すべきと判断した種</p>	<p>各専門部会において、学術上・自然保護上注目すべきと判断された種。</p>

(注) 動物では種及び亜種を示す。



## 4 レッドリストの選定方針及び結果

### (1)選定方針

#### ア 評価対象

評価対象は、静岡県内に記録のある、または今回の調査で確認された野生生物とした。原則として外来種（国外・国内）は対象外とした。ただし、外来かどうかの判断が困難な場合は対象とした。

#### 既存分類群

- ・ 以下の7分類群について、種（分類学上亜種に細分される場合は、原則として亜種）を評価の対象とした。
- ・ 哺乳類：海棲の種は対象外とした。
- ・ 鳥類：基本的に全種を対象とした。
- ・ 爬虫類：生涯のすべてを海域で過ごす種は対象外とした。
- ・ 両生類：基本的に全種を対象とした。
- ・ 淡水魚類：河川・湖沼の淡水域から汽水域にかけて生息する種を対象とし、淡水域や汽水域を生活環のうえで必要としない海産魚類は対象外とした。
- ・ 昆虫類：トンボ目、ゴキブリ目、カマキリ目、ナナフシ目、ハサミムシ目、バッタ目、コウチュウ目、チョウ目及びカメムシ目（水生種）を対象とした。
- ・ 陸・淡水産貝類：陸域、淡水ないし汽水域に生息する種を対象とした。

#### 新規分類群

- ・ クモ類（真正クモ類）について、種（分類学上亜種に細分される場合は、原則として亜種）を評価の対象とした。

### イ 評価方法等

#### 既存分類群

- ・ 評価は、平成 15～29（2003～2017）年度（鳥類は平成 19～28（2007～2016）年）に実施した文献、標本調査及び平成 21～29（2009～2017）年度に実施した現地調査の結果を踏まえるとともに、部会員から提供のあった研究成果、知見等に基づき定性的評価を基本とした。
- ・ 定性的評価においては、潜在的な危険性（生息分布の局限、生息環境の限定等）も考慮した。
- ・ 静岡県内のみの生息状況に基づいて評価した。なお、特に全国的な視野での配慮が必要な種（静岡県における生息状況が全国的な分布に大きな影響を与える種、生息環境が全国的に一律に悪化している種等）については、全国的な生息状況も加味して評価した。
- ・ 過去の生息状況との比較は、既知の良好な生息時期を基準とした。
- ・ 生息情報の集積がある昆虫類の一部（トンボ目・チョウ目等）については定量的データを加味して評価した。

#### 新規分類群

- ・ クモ類の評価は、平成 21～29（2009～2017）年度に実施した文献調査及び現地調査の結果を踏まえ、定性的評価を基本とした。

## (2)結果

### ア 掲載種

静岡県レッドリストに掲げられた種（種または亜種）の集計を 24 ページに示す。

### イ 各分類群の特徴・変更理由等

分類群毎の、評価対象とした静岡県産種数に対する絶滅のおそれのある種の割合及び静岡県レッドリスト種の割合を 24 ページに示す。

また分類群毎の減少傾向にある種の特徴等を以下に示す。

#### 既存分類群

##### <哺乳類>

- ・ 絶滅危惧種から情報不足種に選定された 23 種のうち、約 65%にあたる 15 種がコウモリ類であるが、一部の洞窟性のコウモリの減少が顕著であった。原因として、生息できる洞窟の減少（特に伊豆地域の鉱山跡など）や環境の変化が考えられる。なお、樹洞性のコウモリも洞のある大木の減少等、生息環境の悪化が危惧された。
- ・ コウモリ調査によってノレンコウモリ、クビワコウモリ、モリアブラコウモリ、オヒキコウモリの 4 種が新たに確認されたほか、個体数や生息環境の減少状況からアズミトガリネズミ、ハタネズミの計 6 種を新たに追加した。

##### <鳥類>

- ・ 絶滅のおそれのある種に選定された 52 種のうち、シギ・チドリ類が約 3 割、猛禽類が約 2 割であった。シギ・チドリ類は湿地の減少、猛禽類は必要とする広大な生活圏への圧迫及び採餌対象の減少等が原因と考えられる。
- ・ 個体数の減少や生息環境の悪化からヘラシギ、ササゴイ、オオソリハシシギなど 6 種を新たに追加した。

##### <爬虫類>

- ・ 絶滅のおそれのある種とされたのは、アカウミガメ 1 種だけであるが、爬虫類全般に、餌動物である両生類の減少とともに危機水準に近づいていると考えられる。
- ・ 個体数や生息環境の減少状況からニホンイシガメを新たに追加した。

##### <両生類>

- ・ 絶滅のおそれのある種に選定された 5 種のうち、サンショウウオ類が 60%であった。これは、サンショウウオ類が水辺・陸地の両環境が良好に保たれないと生息できないことに起因すると考えられる。
- ・ 遺伝的・形態的に新たに種または亜種として分類されたものについては、それぞれ再評価した。
- ・ 個体数や生息環境の減少状況からアカハライモリ（中部日本系統、南伊豆集団）、ツチガエル、タゴガエル、ネバタゴガエルの 5 種を新たに追加した。

##### <淡水魚類>

- ・ 絶滅のおそれの高いものは純淡水魚のほか、河口・汽水域に生息する種が多く選定された。これは、平地・丘陵地、河口域の干潟など常に開発の危険にさらされている場所を生息地とする種が多いためと考えられる。
- ・ 個体数や生息環境の減少状況からニホンウナギとドジョウの 2 種を新たに追加した。

- ・ 遺伝的・形態的に1種が複数種に細分化されたものについては、それぞれを再評価した。
- ・ 確認情報が不確実なもの、無効分散と考えられる4種を除外した。

#### <昆虫類>

- ・ 海浜、河原、湿地、ため池等を生息地とする種が多く選定された。これらの消失や利用形態の変化、遷移の進行などにより、生息環境の悪化が著しいためと考えられる。
- ・ 草原性の種や里山的環境を生息地とする種が多くあげられた。これは、草刈りや野焼き等の管理が行なわれなくなり、遷移が進行したためと考えられる。
- ・ 個体数、生息環境の減少状況からアマギクチキウマ、オツネントンボ、クモガタヒョウモンなど45種を新たに追加した。
- ・ 分布上の観点から外来種と判断されたミツモンヒゲナガゾウムシの1種を除外した。

#### <陸・淡水産貝類>

- ・ 沿岸部から低山の自然度が高い森林、石灰岩地、そして中小河川の河口部などの陸水域に生息する種が多く選定された。これは、天然林の伐採や水域の改修などによる影響と考えられる。
- ・ 個体数や生息環境の減少状況からベニゴマオカタニシ、ヤマモトゴマオカチグサなど7種を新たに追加した。
- ・ 生態に関する知識が得られ、県下に普遍的に生息することが明らかになったヒラドマルナタネガイなど3種を除外した。

### 新規分類群

#### <クモ類>

- ・ 南アルプス地域など、自然性の高い環境を生息地とする種が多く選定された。これら自然性の高い環境の消失や遷移の進行などにより、生息環境の悪化が著しいためと考えられる。
- ・ 個体数、生息環境の減少状況から、フジマシラグモ、フジホラヒメグモ、ワスレナグモの3種を絶滅危惧種としてあげたほか、カネコトタテグモ、アケボノユウレイグモなど20種を準絶滅危惧または分布上注目種等とした。

### 分類群別、カテゴリー別レッドリスト種数一覧

カテゴリー	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	昆虫類 ※3	陸・淡水産貝類	クモ類	動物合計	
絶滅	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (2)	1 (0)	0	9 (4)	
野生絶滅	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0	0 (0)	
絶滅のおそれのある種	絶滅危惧Ⅰ類	0 (0)	20 (18)	1 (1)	2 (2)	17 (10)	34 (19)	18 (17)	2	94 (67)
	ⅠA類	0 (0)	6 (4)	1 (1)	2 (1)	8 (6)	20 (15)	7 (9)	0	44 (36)
	ⅠB類	0 (0)	14 (14)	0 (0)	0 (1)	9 (4)	14 (4)	11 (8)	2	50 (31)
	絶滅危惧Ⅱ類	3 (2)	32 (26)	0 (0)	3 (3)	6 (6)	26 (24)	11 (14)	1	82 (75)
準絶滅危惧	8 (5)	14 (14)	1 (0)	5 (2)	2 (3)	37 (21)	26 (22)	7	100 (67)	
情報不足	12 (8)	4 (6)	2 (2)	1 (1)	3 (2)	31 (40)	11 (10)	0	64 (69)	
絶滅のおそれのある地域個体群	3 (2)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0	5 (3)	
要注目種	現状不明	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (2)	14 (9)	0 (0)	0	14 (11)
	分布上注目種等	1 (1)	5 (5)	2 (2)	0 (0)	7 (8)	15 (15)	0 (0)	13	43 (31)
	部会注目種	2 (5)	3 (3)	2 (2)	3 (2)	19 (22)	34 (24)	0 (0)	0	63 (58)
合計	31 (25)	78 (72)	8 (7)	15 (10)	54 (53)	198 (155)	67 (63)	23	474 (385)	

作成された県産目録種数※1	60 (52)	409 (378)	19 (17)	20 (18)	218 (166)	7,306 (6,463)	214 (193)	507	8,753 (7,287)
評価対象とした県産種数※2	51 (47)	403 (378)	16 (16)	18 (17)	134 (130)	7,147 (6,357)	191 (178)	506	8,466 (7,123)
絶滅のおそれのある種数の合計	3 (2)	52 (44)	1 (1)	5 (5)	23 (16)	60 (43)	29 (31)	3	176 (142)
絶滅のおそれのある種数の割合(%)	5.9 (4.3)	12.9 (11.6)	6.3 (6.3)	27.8 (29.4)	17.2 (12.3)	0.8 (0.7)	15.2 (17.4)	0.6	2.1 (2.0)
レッドリスト種の割合(%)	60.8 (53.2)	19.4 (19.0)	50.0 (43.8)	83.3 (58.8)	40.3 (40.8)	2.8 (2.4)	35.1 (35.4)	4.5	5.6 (5.4)

新規種数	6	6	1	5	5	44	7	/	74
変更種数	8	9	0	2	10	63	13		105
削除種数	0	0	0	0	4	1	3		8

※1 静岡県産目録種数は現在までに報告されている種及び亜種。

※2 原則として在来種。外来種、偶産種等、各部会で判断したものを除いたもの。

※3 トンボ目、ゴキブリ目、カマキリ目、ナナフシ目、ハサミムシ目、バッタ目、コウチュウ目、チョウ目及びカメムシ目(水生種)に限る。

注) 絶滅のおそれのある種数の割合=評価対象とした県産種数に対する割合

( )内は前回2004年版RDBの種数及び割合を示す。なお、その後一部改訂あり。

選定種一覧（哺乳類）

カテゴリー	種名
絶滅 (EX) 2種	ニホンオオカミ ニホンカワウソ
野生絶滅 (EW)	該当なし
絶滅危惧 I A 類 (CR)	該当なし
絶滅危惧 I B 類 (EN)	該当なし
絶滅危惧 II 類 (VU)	クビワコウモリ チチブコウモリ ノレンコウモリ
準絶滅危惧 (NT)	アズミトガリネズミ カワネズミ キクガシラコウモリ コキクガシラコウモリ モモジロコウモリ ユビナガコウモリ カヤネズミ ムササビ
情報不足 (DD) 12種	ミズラモグラ ヤマコウモリ モリアブラコウモリ ニホンウサギコウモリ ヒナコウモリ カグヤコウモリ クロホオヒゲコウモリ テングコウモリ コテングコウモリ ヤマネ ニホンモモンガ ホンドオコジョ
絶滅のおそれのある地域 個体群 (LP)	オヒキコウモリ (伊東の個体群) ニホンザル (伊豆・愛鷹・熱海地域の個体群) ツキノワグマ (富士地域の個体群)
要注目種	
現状不明 (N-I)	該当なし
分布上注目種等 (N-II)	ヒメホオヒゲコウモリ
部会注目種 (N-III)	ハタネズミ ニホンリス

選定種一覧（鳥類）

カテゴリー	種名
絶滅 (EX)	該当なし
野生絶滅 (EW)	該当なし
絶滅危惧 I A 類 (CR) 6種	ヘラシギ カンムリウミスズメ イヌワシ ブッポウソウ チゴモズ アカモズ
絶滅危惧 I B 類 (EN) 14種	サンカンゴイ ヨシゴイ ミゾゴイ ササゴイ ツルシギ コアジサシ オジロワシ チュウヒ コノハズク コミミズク ヤマセミ ヤイロチョウ サンショウクイ オオセッカ
絶滅危惧 II 類 (VU) 32種	ライチョウ ウズラ トモエガモ ヒクイナ ヨタカ シロチドリ オグロシギ オオソリハシシギ ダイシャクシギ ホウロクシギ アカアシシギ コアオアシシギ タカブシギ オジロトウネン ヒバリシギ ウズラシギ ハマシギ キリアイ タマシギ ハチクマ ハイタカ サシバ クマタカ アオバズク アカショウビン ハヤブサ コシアカツバメ イイジマムシクイ ウチヤマセンニュー マミジロ コサメビタキ コジュリン
準絶滅危惧 (NT) 14種	ヤマドリ シノリガモ ミコアイサ クイナ タゲリ イカルチドリ セイタカシギ ミユビシギ オオタカ フクロウ アリスイ オオアカゲラ サンコウチョウ ミヤマホオジロ
情報不足 (DD) 4種	ヤマシギ オオコノハズク トラフズク アカコッコ
絶滅のおそれのある地域 個体群 (LP)	該当なし
要注目種	
現状不明 (N-I)	該当なし
分布上注目種等 (N-II) 5種	オオジシギ オオハシシギ オオワシ ハイイロチュウヒ ノビタキ
部会注目種 (N-III) 3種	ゴイサギ ミサゴ コチョウゲンボウ

### 選定種一覧（爬虫類）

カテゴリー	種名	
絶滅 (EX)	該当なし	
野生絶滅 (EW)	該当なし	
絶滅危惧 I A 類 (CR)	アカウミガメ	
絶滅危惧 I B 類 (EN)	該当なし	
絶滅危惧 II 類 (VU)	該当なし	
準絶滅危惧 (NT)	ニホンイシガメ	
情報不足 (DD)	ニホンスッポン	シロマダラ
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	該当なし	
要注目種		
現状不明 (N-I)	該当なし	
分布上注目種等 (N-II)	ヒガシニホントカゲ	オカダトカゲ
部会注目種 (N-III)	クサガメ	ニホンヤモリ

### 選定種一覧（両生類）

カテゴリー	種名		
絶滅 (EX)	該当なし		
野生絶滅 (EW)	該当なし		
絶滅危惧 I A 類 (CR)	アカイシサンショウウオ	ナゴヤダルマガエル	
絶滅危惧 I B 類 (EN)	該当なし		
絶滅危惧 II 類 (VU)	ヒガシヒダサンショウウオ	ハコネサンショウウオ	ニホンアカガエル
準絶滅危惧 (NT)	アカハライモリ中部日本系統 カジカガエル	トノサマガエル モリアオガエル	ツチガエル
情報不足 (DD)	ナガレタゴガエル		
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	アカハライモリ南伊豆集団		
要注目種			
現状不明 (N-I)	該当なし		
分布上注目種等 (N-II)	該当なし		
部会注目種 (N-III)	アズマヒキガエル	タゴガエル	ネバタゴガエル

選定種一覧（淡水魚類）

カテゴリー	種名		
絶滅 (EX)	該当なし		
野生絶滅 (EW)	該当なし		
絶滅危惧 I A 類 (CR)	8種 ヤリタナゴ ナガレミミズハゼ シロウオ	カワバタモロコ ユウスイミミズハゼ トビハゼ	ヤマトイワナ イドミミズハゼ類の1種
絶滅危惧 I B 類 (EN)	9種 スナヤツメ北方種 トウカイコガタスジシマドジョウ アカザ	スナヤツメ南方種 ホトケドジョウ チワラスボ属の1種B	ニホンウナギ トウカイナガレホトケドジョウ チワラスボ属の1種C
絶滅危惧 II 類 (VU)	6種 イシカワシラウオ アユカケ (カマキリ)	アマゴ (サツキマス) ウツセミカジカ	ミナミメダカ ヒモハゼ
準絶滅危惧 (NT)	2種 カジカ	エドハゼ	
情報不足 (DD)	3種 アブラボテ	ドジョウ	クルメサヨリ
絶滅のおそれのある地域 個体群 (LP)	該当なし		
要注目種			
現状不明 (N-I)	該当なし		
分布上注目種等 (N-II)	7種 カワムツ ニシシマドジョウ ビリンゴ	タカハヤ ヒガシシマドジョウ	タモロコ カワヨシノボリ
部会注目種 (N-III)	19種 イセゴイ (ハイレン) カワヨウジ アカメ チチブモドキ カワアナゴ ナンヨウボウズハゼ クロコハゼ	オオウナギ テングヨウジ ユゴイ テンジクカワアナゴ カマヒレマツゲハゼ ノボリハゼ	ガンテンイシヨウジ イッセンヨウジ オオクチユゴイ オカメハゼ タネハゼ ヒナハゼ

選定種一覧（淡水魚類）別表（1/2）

カテゴリー	科名	種名	地域			
			西部	中部	東部	伊豆
絶滅 (EX)	該当なし					
野生絶滅 (EW)	該当なし					
絶滅危惧 I A 類 (CR)	コイ	ヤリタナゴ	CR			
	コイ	カワバタモロコ	CR	CR		
	サケ	ヤマトイワナ	CR	CR		
	ハゼ	ナガレミミズハゼ		CR		
	ハゼ	ユウスイミミズハゼ		CR		
	ハゼ	イドミミズハゼ類の1種	CR	CR		
	ハゼ	シロウオ	DD	CR		CR
絶滅危惧 I B 類 (EN)	ヤツメウナギ	スナヤツメ北方種	EN	CR		
	ヤツメウナギ	スナヤツメ南方種	EN			
	ウナギ	ニホンウナギ	EN	EN	EN	EN
	ドジョウ	トウカイコガタスジシマドジョウ	EN			
	ドジョウ	ホトケドジョウ	EN	CR	CR	EX
	ドジョウ	トウカイナガレホトケドジョウ	EN			
	アカザ	アカザ	EN/★	EN/★		★
	ハゼ	チワラスボ属の1種B	EN			
ハゼ	チワラスボ属の1種C	EN	EN		EN	

凡例) ★：地域全体が移入 /★：天然分布区域への移入あり

【淡水魚類分布に関する静岡県の地域区分】

- ・ 西部地域：原則として浜松市、周智郡、掛川市、旧浜岡町以西の地域（遠州灘に流出する区域）
- ・ 中部地域：榛原郡以東から富士川本支川（沼川を除く）の流域以西の地域
- ・ 東部地域：中部地域及び伊豆地域間の地域
- ・ 伊豆地域：旧大仁町以南の狩野川右岸流域及び狩野川放水路より南の狩野川左岸流域並びに熱海市以南の地域

選定種一覧（淡水魚類）別表（2/2）

カテゴリー	科名	種名	地域			
			西部	中部	東部	伊豆
絶滅危惧Ⅱ類（VU）	シラウオ	イシカワシラウオ	VU	VU		
	サケ	アマゴ（サツキマス）	VU/★	VU/★	VU/★	VU/★
	メダカ	ミナミメダカ	NT/★	CR/★	CR/★	CR/★
	カジカ	アユカケ（カマキリ）	VU	VU	VU	VU
	カジカ	ウツセミカジカ	VU	CR	VU	VU
	ハゼ	ヒモハゼ	VU			VU
準絶滅危惧（NT）	カジカ	カジカ	EN	CR/★	VU	NT
	ハゼ	エドハゼ	NT			
情報不足（DD）	コイ	アブラボテ	DD			
	ドジョウ	ドジョウ	DD	DD	DD	DD
	サヨリ	クルメサヨリ	DD			
地域個体群（LP）	該当なし					
要注目種						
現状不明（N-I）	該当なし					
分布上注目種等 （N-II）	コイ	カワムツ	N-II/★	★	★	★
	コイ	タカハヤ	☆	☆/N-II*	★	N-II/★
	コイ	タモロコ	☆	N-II/★	★	★
	ドジョウ	ニシシマドジョウ	N-II	N-II		
	ドジョウ	ヒガシシマドジョウ		N-II	N-II	N-II
	ハゼ	カワヨシノボリ	☆	N-II	★	★
	ハゼ	ピリンゴ	N-II			N-II
	部会注目種 （N-III）	イセゴイ	イセゴイ（ハイレン）	N-III	N-III	N-III
	ウナギ	オオウナギ	N-III	N-III		N-III
	ヨウジウオ	ガンテンイシヨウジ	N-III	N-III		N-III
	ヨウジウオ	カワヨウジ	N-III	N-III		N-III
	ヨウジウオ	テングヨウジ	N-III	N-III	N-III	N-III
	ヨウジウオ	イッセンヨウジ	N-III	N-III	N-III	N-III
	アカメ	アカメ	N-III	N-III		N-III
	ユゴイ	ユゴイ	N-III	N-III		N-III
	ユゴイ	オオクチュゴイ	N-III	N-III		N-III
	カワアナゴ	チチブモドキ	N-III	N-III	N-III	N-III
	カワアナゴ	テンジクカワアナゴ	N-III	N-III		N-III
	カワアナゴ	オカメハゼ	N-III	N-III		N-III
	カワアナゴ	カワアナゴ	N-III	N-III	N-III	N-III
	ハゼ	カマヒレマツゲハゼ	N-III	N-III		
	ハゼ	タネハゼ	N-III	N-III		N-III
	ハゼ	ナンヨウボウズハゼ	N-III			N-III
	ハゼ	ノボリハゼ	N-III	N-III		N-III
	ハゼ	ヒナハゼ	N-III	N-III	N-III	N-III
	ハゼ	クロコハゼ	N-III	N-III		N-III

凡例）★：地域全体が移入 /★：天然分布区域への移入あり ☆：天然分布しカテゴリー外 \*：興津川のみ

【淡水魚類分布に関する静岡県の地域区分】

- ・ 西部地域：原則として浜松市、周智郡、掛川市、旧浜岡町以西の地域（遠州灘に流出する区域）
- ・ 中部地域：榛原郡以東から富士川本支川（沼川を除く）の流域以西の地域
- ・ 東部地域：中部地域及び伊豆地域の間地域
- ・ 伊豆地域：旧大仁町以南の狩野川右岸流域及び狩野川放水路より南の狩野川左岸流域並びに熱海市以南の地域



選定種一覧(昆虫類)(1/2)

カテゴリー	種名		
絶滅 (EX) 6種	スジゲンゴロウ スジグロチャバネセセリ	シルビアシジミ アカセセリ	チャマダラセセリ オオウラギンヒョウモン
野生絶滅 (EW)	該当なし		
絶滅危惧 I A 20種類 (CR)	コバネアオイトトンボ ベニイトトンボ エゾトンボ オオキトンボ コガタノゲンゴロウ ゴマシジミ オオイチモンジ	グンバイトンボ オオイトトンボ ベッコウトンボ イズササキリ ホシチャバネセセリ アサマシジミ ヒメヒカゲ	ヒヌマイトトンボ キイロヤマトンボ キトンボ コバンムシ ヘリグロチャバネセセリ ヒョウモンチョウ
絶滅危惧 I B 14種類 (EN)	ニホンカワトンボ トラフトンボ オオコブスジコガネ ベニモンカラスシジミ ウラナミジャノメ	キイロサナエ ハッチョウトンボ クモツマキキョウ ヒメシジミ オオチャバネヨトウ	フタスジサナエ ゲンゴロウ ミヤマシロチョウ コヒオドシ
絶滅危惧 II 類 (VU)	モートンイトトンボ コサナエ ホッケミズムシ ニセコケシゲンゴロウ オオミズスマシ ヒメミズスマシ ヒメシロチョウ ハヤシミドリシジミ ミヤマシジミ	アオヤンマ タベサナエ カワラハンミョウ キタノツブゲンゴロウ ミズスマシ ヨツボシカミキリ ヤマキキョウ クロシジミ フタスジチョウ	ホンサナエ ハネビロエゾトンボ キボシチビコツブゲンゴロウ ルイスツブゲンゴロウ コミズスマシ ギフチョウ ウラナミアカシジミ クロツバメシジミ
準絶滅危惧 (NT)	アオハダトンボ ネアカヨシヤンマ マイコアカネ アマギクチキウマ ミヤケミズムシ コウベツブゲンゴロウ ガムシ ヤマトオサムシダマシ ハマベゾウムシ クモガタヒョウモン ウラジャノメ コシロシタバ フジシロミヤクヨトウ	オツネントンボ カトリヤンマ クチナガコオロギ ヤマトバツタ (ヤマトマダラバツタ) オオヒョウタンゴミムシ キベリクロヒメゲンゴロウ コガムシ ガガブタネクイハムシ ウラクロシジミ ホシミスジ カバイロシャチホコ クビグロケンモン	ホソミオツネントンボ ヨツボシトンボ ハマズ カケガワフキバツタ コマルケシゲンゴロウ クロゲンゴロウ ヒゲコガネ オオルリハムシ ウラギンスジヒョウモン ツマジロウラジャノメ トラサンドクガ ガマヨトウ
情報不足 (DD) 31種	イソハサミムシ アマギササキリモドキ ヒメタイコウチ クビボソコガシラミズムシ キボシツブゲンゴロウ ヤマトマルドROMシ オオチャイロハナムグリ ナカイケミヒメテントウ ヒメビロウドカミキリ ツヤネクイハムシ タカネキマダラセセリ	ウスバカマキリ テカリダケフキバツタ ウミホソチビゴミムシ クロホシコガシラミズムシ エゾヒメゲンゴロウ クロコブセスジダルマガムシ アシナガミゾドROMシ ケブカマルクビカミキリ トゲムネアラゲカミキリ キヌツヤミズクサハムシ	オオオカメコオロギ ババアメンボ コガシラミズムシ マダラコガシラミズムシ シワムネマルドROMシ ダイコクコガネ アオバヒメコメツキモドキ ミドリヒメスギカミキリ セラネクイハムシ ババズゲヒメゾウムシ
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	ウミコオロギ (ナギサズ) (大崩海岸の個体群)		
要注目種			
現状不明 (N-I)	ルリイトトンボ クギヌキハサミムシ リュウガシメクラチビゴミムシ ヤマトモンシデムシ ジョウザンミドリシジミ	オオトラフトンボ イトアメンボ マルガタゲンゴロウ オオフタホシマグソコガネ オオヒカゲ	マダラナニワトンボ ホソハンミョウ コガタガムシ ムモンアカシジミ
分布上注目種等 (N-II)	フジアキタクロナガオサムシ オオチャバネセセリ カラスシジミ クモマベニヒカゲ クロヒカゲモドキ	ギンイチモンジセセリ オナガシジミ オオミスジ ベニヒカゲ シュゼンヅフユシヤク	コキマダラセセリ ウスイロオナガシジミ コムラサキ キマダラモドキ キタダケヨトウ

選定種一覧(昆虫類)(2/2)

カテゴリー	種名																																				
部会注目種 (N-III) 34種	<table border="0"> <tr> <td>オオクサキリ</td> <td>スルガセモンササキリモドキ</td> <td>ハネナガイナゴ</td> </tr> <tr> <td>セグロイナゴ</td> <td>タカネヒナバツタ</td> <td>アカイシコバネヒナバツタ</td> </tr> <tr> <td>フジコバネヒナバツタ</td> <td>エサキアメンボ</td> <td>コオイムシ</td> </tr> <tr> <td>タガメ</td> <td>ミヅナシミズムシ</td> <td>アイヌハンミョウ</td> </tr> <tr> <td>ヒョウタンゴミムシ</td> <td>スナハラゴミムシ</td> <td>タナカツヤハネゴミムシ</td> </tr> <tr> <td>オオサカアオゴミムシ</td> <td>アリスアトキリゴミムシ</td> <td>ムツボシツヤコツブゲンゴロウ</td> </tr> <tr> <td>ケシゲンゴロウ</td> <td>キベリマメゲンゴロウ</td> <td>シマゲンゴロウ</td> </tr> <tr> <td>マルヒラタガムシ</td> <td>スジヒラタガムシ</td> <td>アカマダラコガネ</td> </tr> <tr> <td>ヒゲナガヒラタドロムシ</td> <td>ヘイケボタル</td> <td>アサカミキリ</td> </tr> <tr> <td>ゴマギケブカハムシ (クロヘリウスチャハムシ)</td> <td>フジミドリシジミ</td> <td>ギンボシヒョウモン</td> </tr> <tr> <td>オオムラサキ</td> <td>サトキマダラヒカゲ</td> <td>ヒメジャノメ</td> </tr> <tr> <td>オキナワリチラス</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	オオクサキリ	スルガセモンササキリモドキ	ハネナガイナゴ	セグロイナゴ	タカネヒナバツタ	アカイシコバネヒナバツタ	フジコバネヒナバツタ	エサキアメンボ	コオイムシ	タガメ	ミヅナシミズムシ	アイヌハンミョウ	ヒョウタンゴミムシ	スナハラゴミムシ	タナカツヤハネゴミムシ	オオサカアオゴミムシ	アリスアトキリゴミムシ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	ケシゲンゴロウ	キベリマメゲンゴロウ	シマゲンゴロウ	マルヒラタガムシ	スジヒラタガムシ	アカマダラコガネ	ヒゲナガヒラタドロムシ	ヘイケボタル	アサカミキリ	ゴマギケブカハムシ (クロヘリウスチャハムシ)	フジミドリシジミ	ギンボシヒョウモン	オオムラサキ	サトキマダラヒカゲ	ヒメジャノメ	オキナワリチラス		
オオクサキリ	スルガセモンササキリモドキ	ハネナガイナゴ																																			
セグロイナゴ	タカネヒナバツタ	アカイシコバネヒナバツタ																																			
フジコバネヒナバツタ	エサキアメンボ	コオイムシ																																			
タガメ	ミヅナシミズムシ	アイヌハンミョウ																																			
ヒョウタンゴミムシ	スナハラゴミムシ	タナカツヤハネゴミムシ																																			
オオサカアオゴミムシ	アリスアトキリゴミムシ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ																																			
ケシゲンゴロウ	キベリマメゲンゴロウ	シマゲンゴロウ																																			
マルヒラタガムシ	スジヒラタガムシ	アカマダラコガネ																																			
ヒゲナガヒラタドロムシ	ヘイケボタル	アサカミキリ																																			
ゴマギケブカハムシ (クロヘリウスチャハムシ)	フジミドリシジミ	ギンボシヒョウモン																																			
オオムラサキ	サトキマダラヒカゲ	ヒメジャノメ																																			
オキナワリチラス																																					

選定種一覧(陸・淡水産貝類)

カテゴリー	種名																											
絶滅 (EX) 1種	カタヤマガイ (ミヤイリガイ)																											
野生絶滅 (EW)	該当なし																											
絶滅危惧 I A 類 (CR) 7種	<table border="0"> <tr> <td>タケノコカワニナ (レベックカワニナ)</td> <td>ヒダリマキモノアラガイ</td> <td>ノミガイ</td> </tr> <tr> <td>ハナコギセル</td> <td>オモイガケナマイマイ</td> <td>タメトモマイマイ (ミヤケチャイロマイマイ)</td> </tr> <tr> <td>マツカサガイ</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	タケノコカワニナ (レベックカワニナ)	ヒダリマキモノアラガイ	ノミガイ	ハナコギセル	オモイガケナマイマイ	タメトモマイマイ (ミヤケチャイロマイマイ)	マツカサガイ																				
タケノコカワニナ (レベックカワニナ)	ヒダリマキモノアラガイ	ノミガイ																										
ハナコギセル	オモイガケナマイマイ	タメトモマイマイ (ミヤケチャイロマイマイ)																										
マツカサガイ																												
絶滅危惧 I B 類 (EN) 11種	<table border="0"> <tr> <td>ベニゴマガイ (オオヤマベニゴマガイ)</td> <td>マメタニシ</td> <td>ヤママメタニシ</td> </tr> <tr> <td>ナニワクチミゾガイ</td> <td>ホウライジギセル</td> <td>シイボルトコギセル</td> </tr> <tr> <td>ヒロクチコギセル</td> <td>レンズガイ</td> <td>カタマメマイマイ</td> </tr> <tr> <td>ミカワマイマイ</td> <td>ヤセアナナシマイマイ</td> <td></td> </tr> </table>	ベニゴマガイ (オオヤマベニゴマガイ)	マメタニシ	ヤママメタニシ	ナニワクチミゾガイ	ホウライジギセル	シイボルトコギセル	ヒロクチコギセル	レンズガイ	カタマメマイマイ	ミカワマイマイ	ヤセアナナシマイマイ																
ベニゴマガイ (オオヤマベニゴマガイ)	マメタニシ	ヤママメタニシ																										
ナニワクチミゾガイ	ホウライジギセル	シイボルトコギセル																										
ヒロクチコギセル	レンズガイ	カタマメマイマイ																										
ミカワマイマイ	ヤセアナナシマイマイ																											
絶滅危惧 II 類 (VU) 11種	<table border="0"> <tr> <td>ミズコハクガイ</td> <td>マキスジコミミガイ</td> <td>ウスコミミガイ</td> </tr> <tr> <td>ナガナタネガイ</td> <td>キバサナギガイ</td> <td>ヤマトキバサナギガイ</td> </tr> <tr> <td>オオトノサマガセル</td> <td>ツバクロイワギセル</td> <td>マイマイ属の一種</td> </tr> <tr> <td>メルレンドルフマイマイ</td> <td>ミノブマイマイ</td> <td></td> </tr> </table>	ミズコハクガイ	マキスジコミミガイ	ウスコミミガイ	ナガナタネガイ	キバサナギガイ	ヤマトキバサナギガイ	オオトノサマガセル	ツバクロイワギセル	マイマイ属の一種	メルレンドルフマイマイ	ミノブマイマイ																
ミズコハクガイ	マキスジコミミガイ	ウスコミミガイ																										
ナガナタネガイ	キバサナギガイ	ヤマトキバサナギガイ																										
オオトノサマガセル	ツバクロイワギセル	マイマイ属の一種																										
メルレンドルフマイマイ	ミノブマイマイ																											
準絶滅危惧 (NT) 26種	<table border="0"> <tr> <td>ベニゴマオカタニシ</td> <td>マルタニシ</td> <td>オオタニシ</td> </tr> <tr> <td>クロダカワニナ</td> <td>ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ (ムシヤドリカワザンショウガイ)</td> <td>ヨシダカワザンショウガイ</td> </tr> <tr> <td>ヤマモトゴマオカチグサ (ヤマモトミジンオカチグサ)</td> <td>ホラアナゴマオカチグサ</td> <td>ヤマトクビキレガイ</td> </tr> <tr> <td>モノアラガイ</td> <td>ヒラマキガイモドキ</td> <td>ヒラマキミズマイマイ</td> </tr> <tr> <td>トウキョウヒラマキガイ</td> <td>ナガオカモノアラガイ</td> <td>ナタネガイモドキ</td> </tr> <tr> <td>ナタネキバサナギガイ</td> <td>クチマガリスナガイ</td> <td>オクガタギセル</td> </tr> <tr> <td>ヒメギセル</td> <td>スジキビ</td> <td>カサネシタラガイ</td> </tr> <tr> <td>イシマキシロマイマイ</td> <td>ミヤマヒダリマキマイマイ</td> <td>イシガイ</td> </tr> <tr> <td>ヤマトシジミ</td> <td>マシジミ</td> <td></td> </tr> </table>	ベニゴマオカタニシ	マルタニシ	オオタニシ	クロダカワニナ	ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ (ムシヤドリカワザンショウガイ)	ヨシダカワザンショウガイ	ヤマモトゴマオカチグサ (ヤマモトミジンオカチグサ)	ホラアナゴマオカチグサ	ヤマトクビキレガイ	モノアラガイ	ヒラマキガイモドキ	ヒラマキミズマイマイ	トウキョウヒラマキガイ	ナガオカモノアラガイ	ナタネガイモドキ	ナタネキバサナギガイ	クチマガリスナガイ	オクガタギセル	ヒメギセル	スジキビ	カサネシタラガイ	イシマキシロマイマイ	ミヤマヒダリマキマイマイ	イシガイ	ヤマトシジミ	マシジミ	
ベニゴマオカタニシ	マルタニシ	オオタニシ																										
クロダカワニナ	ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ (ムシヤドリカワザンショウガイ)	ヨシダカワザンショウガイ																										
ヤマモトゴマオカチグサ (ヤマモトミジンオカチグサ)	ホラアナゴマオカチグサ	ヤマトクビキレガイ																										
モノアラガイ	ヒラマキガイモドキ	ヒラマキミズマイマイ																										
トウキョウヒラマキガイ	ナガオカモノアラガイ	ナタネガイモドキ																										
ナタネキバサナギガイ	クチマガリスナガイ	オクガタギセル																										
ヒメギセル	スジキビ	カサネシタラガイ																										
イシマキシロマイマイ	ミヤマヒダリマキマイマイ	イシガイ																										
ヤマトシジミ	マシジミ																											
情報不足 (DD) 11種	<table border="0"> <tr> <td>トウカイヤマトガイ</td> <td>カワネミジンツボ</td> <td>イボイボナメクジ (ツブツブナメクジ)</td> </tr> <tr> <td>シイノミミミガイ</td> <td>マルクチコギセル</td> <td>サドタカキビ</td> </tr> <tr> <td>タンザワキビ</td> <td>ヤマコウラナメクジ</td> <td>オオコウラナメクジ</td> </tr> <tr> <td>コベソマイマイ</td> <td>ミニピロウドマイマイ</td> <td></td> </tr> </table>	トウカイヤマトガイ	カワネミジンツボ	イボイボナメクジ (ツブツブナメクジ)	シイノミミミガイ	マルクチコギセル	サドタカキビ	タンザワキビ	ヤマコウラナメクジ	オオコウラナメクジ	コベソマイマイ	ミニピロウドマイマイ																
トウカイヤマトガイ	カワネミジンツボ	イボイボナメクジ (ツブツブナメクジ)																										
シイノミミミガイ	マルクチコギセル	サドタカキビ																										
タンザワキビ	ヤマコウラナメクジ	オオコウラナメクジ																										
コベソマイマイ	ミニピロウドマイマイ																											
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	該当なし																											
要注目種																												
現状不明 (N-I)	該当なし																											
分布上注目種等 (N-II)	該当なし																											
部会注目種 (N-III)	該当なし																											

選定種一覧(クモ類)

カテゴリー	種名		
絶滅 (EX)	該当なし		
野生絶滅 (EW)	該当なし		
絶滅危惧 I A 類 (CR)	該当なし		
絶滅危惧 I B 類 (EN)	2 種	フジマシラグモ	フジホラヒメグモ
絶滅危惧 II 類 (VU)	1 種	ワスレナグモ	
準絶滅危惧 (NT)	7 種	カネコトタテグモ サンロウドヨウグモ ニシキオニグモ	キシノウエトタテグモ コガネグモ キノボリトタテグモ オニグモ
情報不足 (DD)	該当なし		
絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	該当なし		
要注目種			
現状不明 (N-I)	該当なし		
分布上注目種等 (N-II)	13 種	アケボノユウレイグモ エンシュウナミハグモ エゾコモリグモ タカネヒメグモ タカネエビスグモ	カザアナマシラグモ ミヤマナミハグモ キヌキリグモ ミドリアシナガグモ アベマシラグモ イナズマクサグモ シロタマヒメグモ ヤマキレアミグモ
部会注目種 (N-III)	該当なし		

## 5 保護方針

ふじのくに生物多様性地域戦略（2018）では、カテゴリーごとに保護方針に基づく対応を掲載した。対応については環境省総合環境政策局環境影響評価課監修（2017）「環境アセスメント技術ガイド生物の多様性・自然との触れ合い」にしたがい、環境保全措置の方向として、回避、低減、代償措置とした。

レッドデータブックに掲載された種に対する保護は、すべてを回避することが理想であるが、現実的には事例ごとに、回避から代償措置までの多様な対応が必要となろう。したがって、この保護方針は、関係機関の前向きな取り組みを規制するものではなく、生息・生育環境への影響の回避または低減を優先するものである。

保護方針及び対応

カテゴリー		保護方針	対応
絶滅危惧	I A類	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響及び要因は最大限の努力をもって排除する必要がある。	回避を原則とする
	I B類	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響及び要因は軽減又は排除する必要がある。	回避又は低減を原則とする
	II類	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響及び要因は最小限にとどめる必要がある。	低減を原則とする
準絶滅危惧		このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響は可能な限り生じないように注意する。	低減又は代償措置を原則とする
情報不足		このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響は可能な限り生じないように配慮する。	可能な限り代償措置*
地域個体群		このカテゴリーに該当する地域個体群の個体数を減少させる影響及び要因は最小限にとどめる必要がある。	低減を原則とする
要注目種	現状不明	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響及び要因は軽減又は排除する必要がある。	回避又は低減を原則とする*
	分布上注目種等	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響は可能な限り生じないように注意する。	低減又は代償措置を原則とする
	部会注目種	このカテゴリーに該当する種の個体数を減少させる影響は可能な限り生じないように配慮する。	可能な限り代償措置*

\* 該当種の中には、新たな情報または知見が得られた場合、絶滅危惧 I A類など上位カテゴリーに位置づけられるような種も含まれている。したがって、対応も記載された内容だけでなく、現地調査の結果などから、より上位の対応が好ましいと判断された場合は、それに基づいて取り組むこととする。

### 対応の考え方

環境保全措置	内 容
回避	<p>行為（環境影響要因となる事業行為）の全体又は一部を実行しないことによって影響を回避する（発生させない）こと。重大な影響が予測される環境要素から影響要因を遠ざけることによって影響を発生させないことも回避といえる。つまり、影響要因またはそれによる生態系への影響を発現させない措置といえる。</p> <p>〔例〕事業の中止、事業内容の変更（その影響要因が発生しない事業内容への変更等）、事業実施区域やルートの変更等。</p>
低減	<p>低減には、「最小化」、「修正」、「軽減／消失」といった環境保全措置が含まれる。最小化とは、行為の実施の程度又は規模を制限することによって影響を最小化すること、修正とは、影響を受けた環境そのものを修復、再生又は回復することにより影響を修正すること、軽減／消失とは、行為の実施期間中に、環境の保護又は維持管理を行うことにより、影響を軽減又は消失させること。</p> <p>要約すると、何らかの手段で影響要因又は影響の発現を最小限に抑えること、又は、発現した影響を何らかの手段で修復する措置といえる。</p> <p>〔例〕工事工程の変更、施設構造の変更、緑化、防音壁の設置等。</p>
代償	<p>損なわれる環境要素と同種の環境要素を創出することなどにより、損なわれる環境要素の持つ環境保全の観点からの価値を代償すること。つまり、失われる又は影響を受ける環境に見合う価値の場や機能を新たに創出して、全体としての影響を緩和させる措置といえる。</p>

※環境省総合環境政策局環境影響評価課監修

(2017) 環境アセスメント技術ガイド生物の多様性・自然との触れ合い. p53～54.



# 種の解説





## 1. 哺乳類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

静岡県内における陸生の哺乳類は、8目20科60種である。内訳は、トガリネズミ形目2科9種、ハリネズミ形目1科1種、翼手目3科18種、霊長目1科1種、齧歯目4科16種、兎目1科1種、食肉目5科11種、偶蹄目3種である。この中には外来種9種が含まれる。

60種という種数は、本州に生息する哺乳類の殆どであり、静岡県の生態系が豊かであることを示している。特にコウモリ類が18種と多く確認されており、南アルプス地域や富士山地域の樹林帯、溶岩洞窟、伊豆地域の採石跡洞窟などが重要な生息場所となっている。またこの県内生息種の中では、オコジョとアズミトガリネズミは国内の生息地の南限となっている。外来種、特にアライグマやクリハラリス、ヌートリアの分布拡大が在来種に与える影響が懸念される。

### (2) 調査の概要

基本的には現地調査を実施した。ただし、調査費や調査体制の制約上、いわゆる普通種などの全県的な調査ができず、RDBとしては、その点、十分な調査はできなかった。そのため、当初はレッドリスト種の多いコウモリ類を主体とし、洞窟などの生息及び森林性コウモリの捕獲調査に重点を置いたほか、小型哺乳類の食虫類、齧歯類の捕獲調査及びセンサーカメラによる写真撮影、痕跡調査も併せて実施し、地域に生息する動物の確認に務めた。絶滅種については、文献の再調査を実施した。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

前回(2004年)の県内哺乳類目録掲載種に加え、今回新たに生息確認された8種を含め、県内確認哺乳類60種の中から、外来種9種を除外して、調査結果や状況を加味して、明らかに生息が減少していないと思われる哺乳類を除き、32種をレッドリストの対象として検討した。前回(2004年)のレッドリスト種については、その後の状況を検討し一部ランクの修正を実施した。ただし、コウモリ類を除き、調査や情報が不十分な種(オコジョ、モモンガ、ヤマネ、ムササビなど9種)については、次回のRDB調査まで、現状のランクを継続することとした。

新規レッドリスト種は6種であるが、新たに確認されたコウモリ類4種(クビワコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、オヒキコウモリ)については、その希少性等を考慮し、ランクを決定した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

レッドリスト種は、前回(2004年)では25種で、今回は31種であり、6種増加した。また、絶滅のおそれのある種の総数は、前回(2004年)では2種であったが、今回は3種(絶滅危惧Ⅱ類(VU)3種)である。新たに、絶滅危惧Ⅱ類として、クビワコウモリ、チチブコウモリ、ノレンコウモリがランクされ、前回Ⅱ類のモモジロコウモリ、ユビナガコウモリは生息地や生息数の増加が認められ、準絶滅危惧にランクを下げた。コウモリ類は、絶滅危惧Ⅱ類3種、準絶滅危惧4種、情報不足8種、地域個体群1種、要注目種1種と、県内確認18種の内、アブラコウモリを除くすべての種がレッドリストにランクされている。この理由としては、生息確認の困難さから、調査が十分なされないことや、調査の難しさなどが理由としてあげられる。さらに捕獲しないと確認できない種(アズミトガリネズミ、カワネズミ、ハタネズミなど)も今後の調査継続の必要性がある。

### (5) 減少の主要因と脅威

絶滅危惧種の多くを占める翼手目の種については、洞窟性のコウモリでは、洞窟の閉鎖や崩落、森林性のコウモリについては、開発などによる生息地の改変などが主要因となりうる。コ

ウモリ類については、その確認が難しく、知らないうちに絶滅する可能性も排除できない。

カワネズミに関しては、河川の改変や汚染が主要因となる。カヤネズミについては、生息する湿地帯の減少が、ムササビについては、寺社林の減少など、ヤマネ、モモンガについては生息地の自然林の開発破壊などが主要因となる。ただ、これらの樹洞利用種については、近年人工林のスギ、ヒノキ林の利用も報告されており、今後の調査継続が望まれる。ニホンリスについては、外来種のクリハラリスの分布拡大による競合も危惧される。

## (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

今回絶滅危惧Ⅱ類に挙げたコウモリ類3種は、殆どが新たに県内で発見されたコウモリである。

チチブコウモリは、静岡県内では2006年に浜松市天竜区において約120年ぶりに再発見され、その後も毎年数頭は県中西部で確認されているが、非常に希少なコウモリである。

クビワコウモリは、2009年に県内では初めて南アルプスの原生林で確認され、そこではその後毎年確認されており、妊娠個体もあり、この地域で繁殖していることが判明した。国内で集団繁殖が確認されている場所は、長野県乗鞍高原だけであり、この地域は貴重な繁殖地であり、今後の保護対策が望まれる。

ノレンコウモリは、県内では2007年に川根本町の隧道で発見され、その後繁殖も確認され、頭数も増えてきている。調査の進展に伴い、南アルプスなどでも、少しずつ確認され始めているが、まだ、情報は少ない。

地域個体群にランクされたオヒキコウモリは、2009年伊東市の城ヶ崎海岸で発見された。ここでは、海岸の絶壁の岩の割れ目内に、アマツバメと共存しており生態が興味深い。

## (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

減少の主要因と脅威に書かれた事項を、対策として考慮、検討すべきである。

哺乳類に関しては、現在、生態系加害獣として、シカやイノシシの駆除が進められているが、適正な生息頭数への確保が求められる。これらの獣の増加拡大は、生息地におけるレッドリスト種に限らず、すべての動物にまで、影響が及ぶ可能性がある。

特定外来生物のアライグマやクリハラリス、ヌートリアの分布拡大も深刻である。特にアライグマは、分布と生息数を増加拡大し続けており、在来種の生存にとって、大きな脅威である。官民一体となって、その対策、対応にあたるべきである。

また、今回の調査実施状況を鑑み、次回に向けて、県内の調査を継続していく必要性が求められる。このRDBの県民への周知、理解を広めることがその出発点になることを期待する。

## (8) 文献(多くの種で参考とした文献)

鳥居春己(1989) 静岡県の哺乳類—静岡県の自然環境シリーズ—。第一法規出版、東京、231 pp.  
静岡県自然環境調査委員会 哺乳類部会 三宅隆編(2000) 静岡県の哺乳類【資料編】。静岡、149 pp.

Ohdachi Satoshi D., Ishibashi Yasuyuki, Iwasa Masahiro A. & Fukui Dai (2015)

The Wild Mammals of Japan Second Edition. 506 pp., Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

コウモリの会(2011) コウモリ識別ハンドブック改訂版。文一総合出版、東京、88 pp.

(三宅 隆)

### 1. 種の解説

頭胴長 95～114 cm、尾長 30 cm 位。オオカミでは最も小形の亜種で、とくに四肢と耳が短く、前腕下部前面に暗色の斑紋があるなどが特徴。国内では、1905 年 1 月に奈良県鷲家口で捕獲されたオスの個体を最後に、その後の記録はない。

### 2. 分布

本州、四国、九州の山地に生息していたと考えられる。県内では、江戸諸国産物帳に駿河国駿東郡御厨領に「山之犬」、伊豆国に「狼、山いぬ」、遠江国懸河領に「狼、山いぬ」の記載があり、広く生息していたと思われる。頭骨や毛皮などの標本も県内各地に存在する。また、旧中川根町の地名「山犬の段」や、旧水窪町の穂積神社では狼を奉ってあるなどの関わりも多い。

### 3. 生息環境

具体的な記載資料は特になし。

### 4. 生息状況

山地に群れをなして、シカやイノシシを捕食していたと思われる。富士山麓には多く生息していたようで、オオカミに関する昔話も多く残っている。特に半野生馬を管理する愛鷹山麓の愛鷹牧では、オオカミによる被害対策が重要な施策となっていたようである。聞き取り情報では、伊豆地域の西天城山系には、明治初頭までオオカミが生息していたことが示されている。

### 5. 絶滅の主要因と脅威

決定的な要因は不明であるが、開拓の進行による狩猟圧や捕食動物の減少、狂犬病対策のための捕殺、ジステンパーの流行などが複合的に作用した結果と考えられる。静岡県内における絶滅過程に関する資料はほとんどなく、詳細は不明である (99)。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

静岡県内におけるオオカミの資料、標本のうち、裾野市立富士山資料館に展示してあるオオカミの頭骨は、1859 (文政 11) 年に富士市勢子辻で獲られたものとされている。また、1533 (天文 2) 年に富士山南麓の十里木で捕獲されたオオカミのメスの頭骨が神奈川県個人宅に保存されているという。さらに現在の状況は不明であるが、徳川時代に遠江で捕獲された個人蔵 (名倉當太郎氏) のオオカミの頭骨もあることが報告されているほか、静岡市葵区の旧家には麻機村で捕獲されたオオカミの頭骨とその皮が保管され、裾野村産の頭骨は 1737 (元文 2) 年に捕獲されたとの記録がある。

そのほか、伊豆雲見には文久 (1861～1864) 生まれの人が獲ったオオカミの尾が伝えられているという。

### 8. 主な文献

- 中村一恵 (2004) ニホンオオカミの頭骨記録. 神奈川県立博物館研究報告 自然科学, (33): 91-96
- 野本寛一 (1979) 大井川 その風土と文化. 静岡新聞社, 静岡, 218 pp.
- 大村和男 (1987) 山犬伝承とその民俗文化. 静岡の文化, 11: 34-37
- 安田 健 (1987) 江戸諸国産物帳. 晶文社, 東京, 139 pp.

### 9. 標本

富士市勢子辻産 頭骨標本: 裾野市立富士山資料館



©2019 Susono City. 富士市勢子辻産 1859 年 裾野市立富士山資料館所蔵



## ニホンカワウソ *Lutra lutra nippon* (Imaizumi & Yoshiyuki, 1989)

イタチ科 Mustelidae

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅 (EX) ]

### 1. 種の解説

全長約 1 m、体重 4~11 kg ほどで、オスはメスより大きい。ユーラシアカワウソの日本本土亜種。背は黒褐色、腹部は白っぽく、頭は扁平で、四肢には水かきがあり、尾は太く円錐形をしている。水生生活に適し、魚、甲殻類などを食べる。1979年の高知県での目撃例以降の記録がなく、2014年環境省が絶滅宣言した。その後 2017年対馬で自動カメラによりカワウソの生息が確認されたが、DNA鑑定により、ニホンカワウソではなく、韓国からの大陸系亜種の個体であろうとの推測がなされた。

### 2. 分布

日本固有亜種で、本州、四国、九州のほか壱岐、対馬にも生息していたと考えられる。県内では江戸諸国産物帳に伊豆国に「獺」、遠江国懸河領に「かわうそ」の記載があり生息していた模様である。また、農林省の狩猟統計表では 1923年に静岡県で 4頭の捕獲の記録がある。

### 3. 生息環境

河川の中下流域、海岸域に生息していたとされている。

### 4. 生息状況

県内でも昭和初期までは天竜川、大井川、狩野川などの大きな河川の中下流域から沿岸部に広く生息していたと考えられるが、1928年に捕獲禁止となつてからの県内の記録がなく詳細は不明である。

### 5. 絶滅の主要因と脅威

毛皮の需要のための乱獲や河川の環境変化によるものと考えられている。静岡県内における絶滅過程の資料はなく、絶滅に至る経緯は不明である (99)。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

静岡県農林技術研究所森林・林業研究センターにカワウソの毛皮が存在する。

県内のカワウソに関する伝聞や文献は確認できておらず、生息状況などは不明である。

### 8. 主な文献

安田 健 (1987) 江戸諸国産物帳. 晶文社, 東京, 139 pp.

### 9. 標本

福島県須賀川産 仮剥製: 静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター

静岡県産標本の存在は不明。



©2019 Shizuoka Res. Inst. of Agric. and For.

福島県須賀川産 1935年

静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター所蔵



分布位置に関する資料なし

(三宅 隆)



# クビワコウモリ *Eptesicus japonensis* Imaizumi, 1953

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

前腕長 38～43 mm、頭胴長 54～68 mm、尾長 35～43 mm、体重 8～13 g。体毛は背面が黒褐色で腹面は明黄褐色。頸部にかすかな淡色の横帯があるのでこの和名がある。日中のねぐらとして家屋を利用する事例が多い。日没後に開放空間を飛行して採餌する。長野県の乗鞍高原の家屋では最大 300 個体の出産哺育集団が確認されている。冬季の観察例はない。再捕獲による生存記録は 13 年が知られている。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の中部以北に分布し、福島県、栃木県、埼玉県、石川県、山梨県、長野県、富山県及び岐阜県で発見例があり、長野県の乗鞍高原は国内で唯一知られた出産哺育場所である。本県は主たる分布の南限に当たる。1975 年 7 月に富士山麓での捕獲記録があるが詳細は不明で、確実な記録は 2009 年 7 月に静岡市葵区田代の標高 2,000 m 付近での記録である。その後も同所において個体数は少ないものの毎年確認されている。



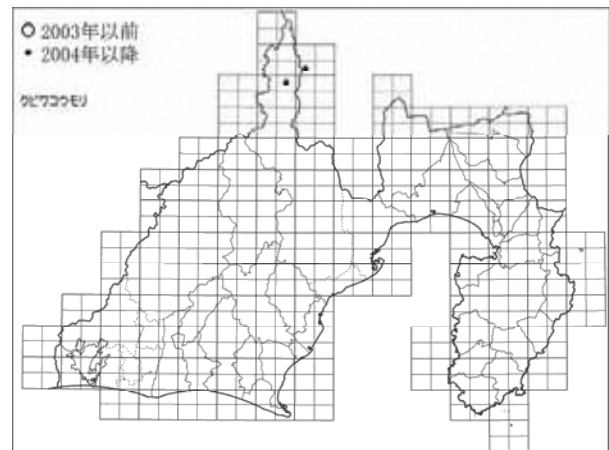
静岡市葵区田代 2015 年 8 月 15 日 三宅 隆

## 3. 生息環境

県内では針葉樹・広葉樹混交の原生林に生息すると考えられるが、記録が少なく詳細は不明である。南アルプスの山梨県側では標高 1,450 m 付近のカラマツ植林、長野県側では標高 450 m の 2 次林の溪畔林で確認されている。

## 4. 生息状況

南アルプスでは妊娠個体が確認され、長野県・山梨県側の南アルプスでも出産哺育に係る情報がえられていることから、県内の南アルプスで出産哺育が行われていると考えられる。2016 年 8 月には 2010 年 7 月に標識された授乳痕のあるメスが再捕獲されている。



## 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認個体数が少なく、減少の主要因は不明である (99)。本県は主たる分布の南限に当たることから、元来、生息個体数が少ない種であるかもしれない。しかし、局所的に分布している可能性があり、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少 (11) が脅威になると推察される。

## 6. 保護対策

長野県の乗鞍高原ではコウモリ専用の小屋が建設され、継続的なモニタリング調査が実施されている。県内でも生息状況把握のための継続調査を実施し、長野県同様のコウモリ小屋の整備が望まれる。

## 7. 特記事項

長野県では、長野県希少野生動植物保護条例で指定希少野生動植物に指定されている。

## 8. 主な文献

Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, (52): 54-62

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. *東海自然誌*, (5): 51-68

## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)

# チチブコウモリ *Barbastella darjelingensis* (Hodgson, 1855)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更コード1

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種) :

環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) 本州のチチブコウモリ]

## 1. 種の解説

前腕長 38~43 mm、頭胴長 47~62 mm、尾長 40~52 mm、体重 8~15 g。耳介は幅広で大きく、その基部は結合して耳珠は三角形。吻は幅広く両側に毛を密生した腺状の隆起がある。体毛は上下面とも黒褐色で霜降り状を呈する個体もいる。日中は洞窟、樹洞、建造物などをねぐらとする。夜間に樹冠付近を飛翔し昆虫類を採餌する。

## 2. 分布

国外では、イスラエルからコーカサス、インド北部、中国西部に分布し、国内では北海道、本州、四国で確認されているが、本州の記録はきわめて少ない。県内では1886年の旧豊田郡野部村(現在の磐田市下野部付近)での確認以降記録がなかったが、2006年に浜松市天竜区において120年ぶりに発見された。その後、毎年数頭が川根本町の隧道や廃隧道で越冬している。2016年には活動期の9月に静岡市葵区田代において確認された。

## 3. 生息環境

県内の活動期の主な生息環境は、ねぐらとなる樹洞を有する自然林と考えられるが詳細は不明である。岐阜県で8月に乳腺が発達したメスが捕獲されていることを考慮すると、県内の9月の捕獲場所は出産哺育場所に近い可能性が高いが、通過個体の可能性もある。

## 4. 生息状況

活動期の生息状況は確認例が少ないことから不明である。南アルプスの長野県側では、冬期に30個体程度が確認される地域があるが、県内では1~2個体と少ない。なお、2010年2月に標識したメス個体が2015年2月に同じ場所で再捕獲されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

減少の主要因は不明である(99)。冬眠場所として少数個体が利用する隧道は人の出入りが可能であることから、隧道の改修や人の立ち入りの影響が脅威となる。活動期の生息場所については、森林の伐採や植生の単一化によるねぐら環境の減少及び開発行為による餌昆虫類の減少が脅威と推察される(11)。

## 6. 保護対策

本県では越冬場所の隧道を保全することが第一である。また、今後は活動期の生息場所を把握するための調査や、既知冬期確認場所の継続的調査などを行い、個体群としての情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

久松問考・増田勇次郎(1891)蝙蝠通信. 動物学雑誌, 3: 507-508

佐藤顕義・勝田節子(2006)天竜川上流域で越冬したチチブコウモリとヒナコウモリ. コウモリ通信, 14(1): 5-9

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

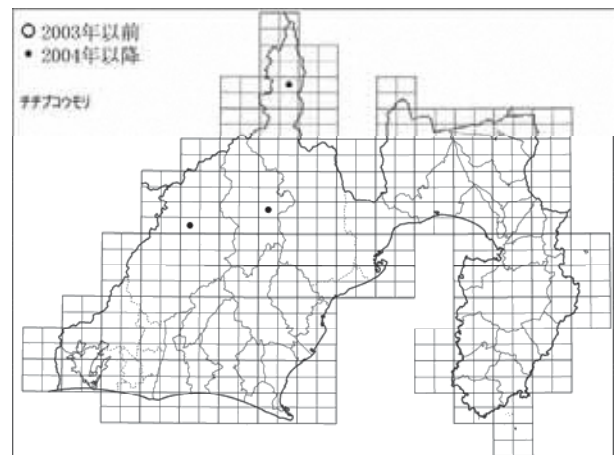
## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



川根本町 2010年1月31日 三宅 隆



### 1. 種の解説

前腕長 37～43 mm、頭胴長 44～55 mm、尾長 38～48 mm、体重 5～10 g。体毛は背面が明～灰褐色、腹面は白色。耳介は長く耳珠は 9 mm 以上。腿間膜後縁に細毛が列生していることが、その和名の由来となっている。日中のねぐらは主に洞穴を利用するが、家屋内や樹洞も利用する。主に林内や林縁で小型の飛翔昆虫や造網性のクモを食べる。再捕獲による生存記録は青森県で 16 年 2 カ月が知られている

### 2. 分布

国外では西ヨーロッパから東アジアに分布し、国内では北海道から鹿児島県にかけて局地的に知られる。県内では 2007 年に浜松市と川根本町の隧道で出産哺育集団が発見され、その後、静岡市葵区田代の標高 2,000 m 付近でも確認された。富士山では山梨県側で記録がある。

### 3. 生息環境

常緑広葉樹林帯の隧道で、活動期及び越冬期ともに確認されている。越冬期は単独でいることが多かった。活動期は常緑針葉樹林帯の高標高地でも確認された。

### 4. 生息状況

川根本町の隧道は 2007 年より出産哺育が確認され、年々集団を構成する個体数が増加している。越冬期は周辺の隧道で数個体ずつ確認されることがある。浜松市のお産哺育集団は 2010 年の大雨によるねぐら部分の崩壊により、隧道を利用しなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

2010 年のねぐら崩壊 (55) により、2ヶ所あったお産哺育場所の一つが消失したことは、減少の主要因となることは明らかである。残ったお産哺育場所も、隧道の改修や人や車両の通行による影響 (18) が直接的な脅威となる。さらに森林伐採や開発行為による餌昆虫類の減少 (11、23) も脅威である。

### 6. 保護対策

家屋でもお産哺育を行うことから、コウモリ専用の小屋の建設が有効となる可能性がある。早急の課題としてはお産哺育が確認されている唯一の隧道を保全し、周辺の隧道などを含めた継続調査の実施、さらに他地域での生息確認調査を行い、情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正 (2008) 大井川水系および天竜川水系で確認したノレンコウモリ *Myotis nattereri* のお産哺育と周年動態. コウモリ通信, 16(1): 2-9

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

吉行瑞子 (1971) 富士山の翼手類. 黒田長久編, 富士山地域の動物相 (in 富士山総合学術調査報告書), pp. 829-833. 富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会, 富士吉田.

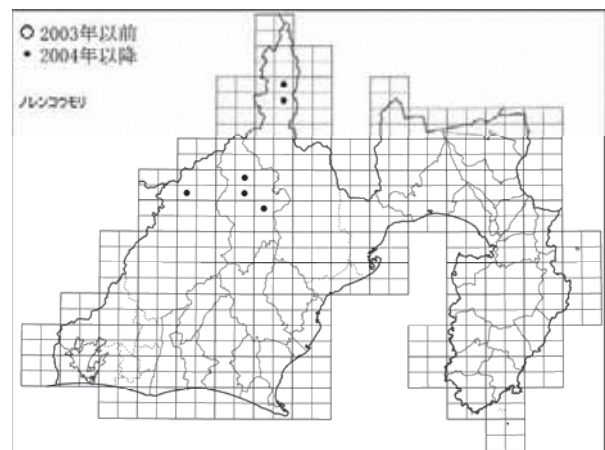
### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



川根本町 2013年6月29日 三宅 隆





### 1. 種の解説

頭胴長 47~65 mm、尾長 46~52 mm、体重 2~5 g。  
本州に生息する小型のトガリネズミ類。形態及び遺伝子情報から本種は北海道及びユーラシア北部に分布するチビトガリネズミに近縁と考えられている。同所的に分布するシントウトガリネズミとは上顎単尖歯の大きさ、脳頭蓋骨の形状、頤孔と臼歯との位置関係、頭骨最大長から識別できる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州に分布し、富山、石川、栃木、群馬、山梨、長野、岐阜、静岡県の高標高域に生息している。静岡県では南アルプス地域の池の沢小屋、茶臼岳手前、聖平小屋周辺、千枚小屋周辺、三伏小屋、本谷山、権衛門沢、熊ノ平小屋から確認されている。一方、伝付峠や山伏岳の調査では確認されていない。

### 3. 生息環境

県内ではダケカンバやオオシラビソなどが生育する森林林床の苔が繁茂する環境で確認されている。礫間や小さな坑道近くで捕獲されていることから、これらを利用しているものと考えられるが、詳細は不明である。

### 4. 生息状況

捕獲調査の結果から生息数はシントウトガリネズミより少ないと考えられるが、十分な調査が行われていないため不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

森林伐採(11)による生息環境の乾燥・攪乱、ニホンジカの摂食による下層植生の衰退・表土の不安定化(54)、高山域へのイノシシ進出・採餌に伴う表土攪乱(56-2)が、本種の減少の主要因として懸念される。

### 6. 保護対策

南アルプスの稜線部周辺は国立公園特別保護地区や特別地域に指定され、土地の改変や森林伐採が規制されている。国立公園外の高標高域では、森林の保全が必要である。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

阿部 永 (2000) 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 290 pp.

阿部 永・石井信夫・伊達徹魯・金子之史・前田喜四男・三浦慎悟・米田政明 (2005) 日本の哺乳類[改訂版]. 東海大学出版会, 秦野, 206 pp.

三宅 隆 (2005) アズミトガリネズミ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 (編), 静岡県の哺乳類【資料編】, pp.13-14. 同会, 静岡.

Ohdachi S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa & D. Fukui (2015) The Wild Mammals of Japan Second Edition. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, 506 pp.

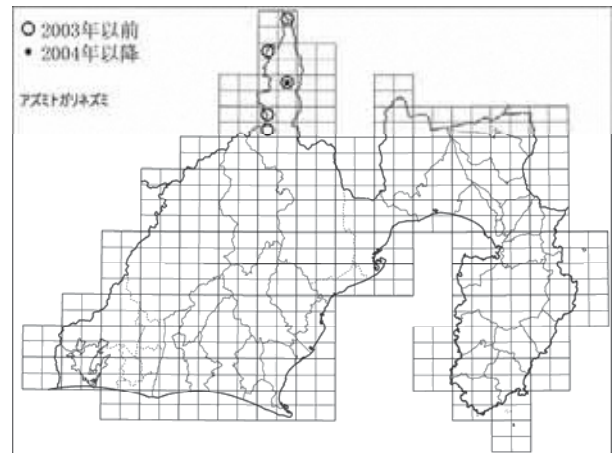
佐々木彰央・高田 歩 (2015) 静岡県南アルプスにおけるトガリネズミ属. 東海自然誌, (8): 27-34

### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製：ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代産 2014年8月17日 佐々木彰央



(佐々木彰央)



# カワネズミ *Chimarrogale platycephala* (Temminck, 1842)

トガリネズミ科 Soricidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 94~144 mm、尾長 87~113 mm、体重 24~56 g の大型のトガリネズミ。油分を多く含む黒褐色の柔らかな毛で覆われ、水中では水をはじいて銀色に見える。また足の裏には剛毛が密生し水かき代わりとなり、水中を自由に泳ぐことが可能である。山間の溪流に住み、日中にも活動し、水中を泳ぎながら小魚、水生昆虫、ヒル、サワガニなどを捕食する。春と秋に2~4頭の子を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。低地から標高 2,000 m までの山間の溪流に生息する。県内では河津川、狩野川、興津川、安倍川、大井川、天竜川の各水系の上流部の溪流で生息が確認されている。2004 年以降の調査でも大井川水系東河内・千石沢・木賊沢・西俣・東俣、興津川水系黒川などで記録されている。

## 3. 生息環境

水の澄んだ山間の溪流に生息する。落葉広葉樹主体の溪畔林が分布する溪流での確認が多い。河川形態では、短い距離で瀬から淵へと滝のように流れ込む河道が連続する溪流 (Aa 型) で主に捕獲され、まれに平瀬が長い中流 (Bb 型) でも捕獲された。また、減少の主要因と考えられる砂防堰堤が存在していても、供用後長い時間が経過しているような場所では確認されている。

## 4. 生息状況

主に県内主要河川の上流で確認されているものの、生息密度は高くない。瀬と淵が連続し、滝のような急勾配で、流路幅が 1 m 程度の枝沢で、かつ通年を通して流水があり、溪畔林が分布している淵での捕獲が多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

山間の溪流を生息地としているため、砂防堰堤 (25) や河川改修等 (13) の河川工事や河川の水質に影響を及ぼすような開発 (31) は本種の生息に影響を及ぼす。

## 6. 保護対策

現状の河川形態を保全しつつ施工材料には自然素材や多孔質材料を使用し、溪畔林の再生を想定した施工に努める。改変する河川の事前調査と個々の保護対策が必要と思われる。

## 7. 特記事項

通常捕獲調査はカゴ罠を使用するが、捕獲個体回収時には低体温などにより死亡していることが多い。そのため、カゴ罠とパイプで連結した保温材と餌を備えた退避室を用意することで、延命を図る方法が生み出されている。また、生息確認が目的の場合は、水際でのセンサーカメラ調査も有効と思われる。

## 8. 主な文献

阿部 永 (2003) カワネズミの捕獲、生息環境および活動. 哺乳類科学, 43(1): 51-65

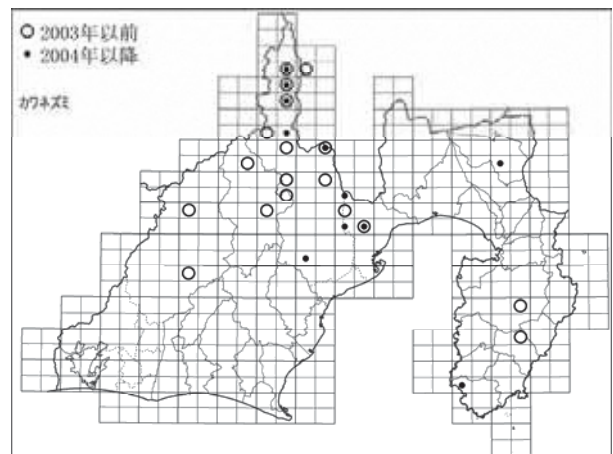
藤本竜輔・安藤元一・小川 博 (2011) カワネズミ *Chimarrogale platycephala* における効率的な捕獲調査方法の検討. 東京農業大学集報, 55(4): 290-296

## 9. 標本

静岡市葵区田代産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



©2019 T.Miyake  
静岡市葵区田代 2000年5月7日 三宅 隆



(榎原英幸)

# キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 53~82 mm、尾長 28~45 mm、前腕長 52~65 mm、体重 17~35 g。比較的大型の種で、顕著な鼻葉を持つ。体毛は淡い褐色である。洞窟などで休眠し、中・大型のガなどの昆虫類を餌とする。広短型の翼をもち、休眠時はその翼で体を覆っている。メスは秋に交尾し、初夏に一仔を産む。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ、アジア中南部などに、国内では北海道、本州、四国、九州、三宅島などに分布する。県内では下田市、松崎町、小山町、静岡市、川根本町、袋井市、浜松市などで確認されている。海岸付近から南アルプスの高標高域まで記録があり、洞窟を主なねぐらとするコウモリ類の中では最も確認場所が多い。

## 3. 生息環境

休眠場所としては、内部が狭く曲がりくねった洞窟や、内部が広い溶岩洞窟など様々な洞窟を利用する他、廃屋なども利用することがある。県内では石灰岩洞窟、石切場跡、廃坑、溶岩洞窟などに生息する。夜間は森林内などを飛行し、ガ類などの飛行性昆虫類などを捕食する。

## 4. 生息状況

川根本町で夏季や冬季に 300~500 頭が集まる大きなコロニーが見られる。松崎町、静岡市、袋井市、浜松市でも 100 頭を超えるコロニーが確認されるなど、場所や時期によっては数多く見られることがある。出産哺育場所は下田市、浜松市などで確認されている。2003 年以前の調査で個体数が比較的多かった場所では、近年も同程度の数が見られる。また、2004 年以降、出産哺育場所や数の多い生息地を含む新たな生息地が見つかっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

近年特に減少傾向は認められていないが、生息地には隧道、観光洞窟、資材置場としての利用形跡がある石切場跡などは人の利用があるため、利用 (18) が増加すると生息環境が悪化すると考えられる。また、危険防止対策に伴う廃隧道などの改修・封鎖や廃坑の埋没 (18) は、ねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート (人は入れないがコウモリ類は通過できる柵) の設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置 (ねぐら消失の代償措置) などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。過去に記録のある御殿場市の観光洞は、国指定天然記念物に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

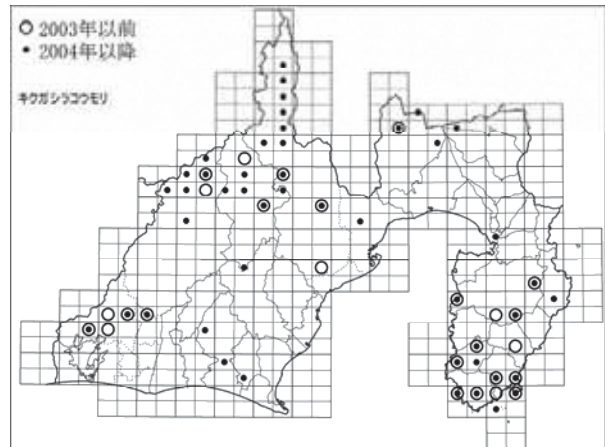
## 9. 標本

川根本町産 仮剥製、骨格標本: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・三宅 隆)



川根本町 2013年7月6日 三宅 隆



# コキクガシラコウモリ *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834

キクガシラコウモリ科 Rhinolophidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 35～50 mm、尾長 16～26 mm、前腕長 36～44 mm、体重 4.5～9 g。小型の種で、小さな鼻葉を持つ。体毛は淡い褐色である。主に洞窟で休眠し、小・中型のガやガガンボなどを餌としている。また、特徴的な周波数帯の超音波を出すことが知られている。メスは秋に交尾し、初夏に1仔を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州、三宅島、対馬、奄美大島などに分布する。県内では下田市、松崎町、伊豆市、沼津市、富士宮市、静岡市、川根本町、浜松市など11の市町で記録がある。海岸近くから南アルプスまでの比較的広い範囲に分布する。過去には御殿場市などでも記録がある。

## 3. 生息環境

休眠場所としては比較的高温多湿で、年中洞内の微気象が一定している洞窟が主に利用される。県内では溶岩洞窟、石灰岩洞窟、石切場跡、廃坑、廃隧道などで確認されている。

## 4. 生息状況

富士宮市の溶岩洞窟で夏季に2,000～3,000頭、伊東市や川根本町の廃隧道で夏季に500～2,000頭が確認されるなど、場所や時期によっては数多く見られることがある。出産哺育場所は伊豆市、富士宮市などで確認されている。2003年以前の調査で個体数が比較的多かった場所では、近年も同程度の数が見られる。

また、2004年以降、出産哺育場所や数の多い生息地を含む新たな生息地が見つかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

近年特に減少傾向は認められていないが、生息地には隧道、観光洞窟、資材置場としての利用形跡がある石切場跡などの人の利用がある場所が含まれるため、利用(18)が増加すると生息環境が悪化すると考えられる。また、危険防止対策に伴う廃隧道などの改修・封鎖や廃坑の埋没(18)は、ねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート(人は入れないがコウモリ類は通過できる柵)設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置(ねぐら消失の代償措置)などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。過去に記録のある御殿場市の観光洞は、国指定天然記念物に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

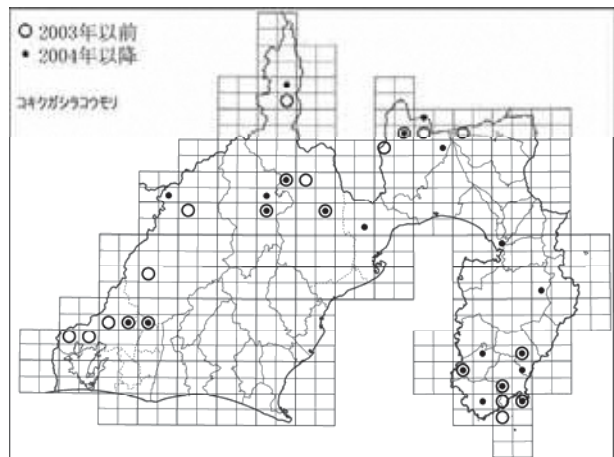
## 9. 標本

川根本町産 仮剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・三宅 隆)



川根本町 2014年8月9日 三宅 隆





# モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長34~42 mm、頭胴長40~63 mm、尾長29~49 mm、体重6~11 g。体毛は灰~黒褐色で、後足が大きく下腿長の半分以上の長さがある。下腹部から大腿部にかけて本種の名前の由来となっている白い毛が生えている。日中のねぐらは主に洞窟であるが、河川敷などの石の下で発見された例もある。初夏に洞窟内で50~500頭の出産哺育集団を形成する。ガやカゲロウなどの飛翔昆虫を主要な餌とする。再捕獲による生存記録は山口県で18年10カ月が知られている。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部、サハリンに、国内では北海道、本州、四国、九州、佐渡島、対馬に分布する。県内では南伊豆町、松崎町、河津町、富士宮市、静岡市、川根本町、菊川市、掛川市、浜松市の9市町で確認され、過去には伊東市、長泉町、磐田市でも記録がある。海岸近くから南アルプスの標高約1,400 mまで分布する。

## 3. 生息環境

石切場跡、廃坑、溶岩洞窟、石灰岩洞窟、隧道、用水路トンネルなどで休眠が確認され、河川沿いなどの森林内では飛翔個体が捕獲されている。多数の個体が確認されたのは廃隧道、石切場跡、溶岩洞窟で、いずれも比較的内部空間が広い場所であった。

## 4. 生息状況

松崎町の石切場跡、富士宮市の溶岩洞窟、川根本町の廃隧道では夏季に500~1,000頭程度が確認され、出産哺育場所にもなっている。これら以外では、越冬期などに1~50頭程度が確認されている。2004年以降、新たな生息地や出産哺育場所が確認されている。既知の出産哺育場所の川根本町の廃隧道での生息状況は、2003年以前から大きな変化は見られない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息洞窟の一部では観光地整備(18)により個体数が減少している可能性がある。また、用水路トンネルや廃隧道、廃坑などの人工洞穴が生息地の場合には、改修や封鎖、埋没(18)がねぐら消失などの脅威になる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート(人は入れないがコウモリ類は通過できる柵)設置や、人工洞穴改修時のとまり場設置(ねぐら消失の代償措置)などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。

## 7. 特記事項

富士宮市の一部の溶岩洞窟は、「人穴富士講遺跡」として世界遺産構成資産の一部に指定されている。

## 8. 主な文献

佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

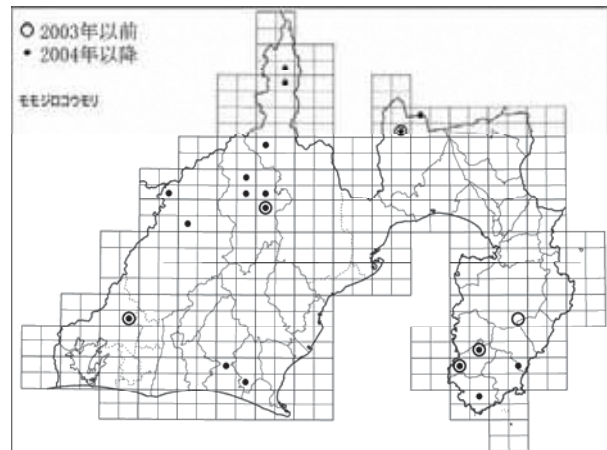
## 9. 標本

川根本町産 剥製♂♀: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・佐藤頭義・三宅 隆)



川根本町 2015年12月15日 三宅 隆



# ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

ユビナガコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長45~51 mm、頭胴長59~69 mm、尾長51~57 mm、体重10~17 g。体色は黒~茶褐色で、第3指の第2指骨が非常に長く第1指骨の約3倍となる。洞窟をねぐらに利用し、時に数万頭の群れを作り、初夏に1仔を産む。小・中型のガを主な餌とする。長距離を飛翔することが可能で、これまで下田市から滋賀県まで340 kmを移動した事例がある。

## 2. 分布

国外ではインドや東アジア、国内では本州、四国、九州、佐渡島、屋久島などに、県内では主に伊豆地域に分布する。南伊豆町、下田市、沼津市などの8市町で確認されている。過去には御殿場市でも記録がある。

## 3. 生息環境

多数確認されているのは、主に洞内及び出入りが広い石切場跡と廃隧道である。夜間は樹冠上空などの開けた場所を飛行し採餌する。

## 4. 生息状況

下田市の石切場跡では冬季に5,000頭程度、夏季に100頭程度が見られることがあり、当地または周辺に出産哺育場所が存在する可能性がある。その他、伊豆市の廃隧道や松崎町の廃坑などでも、冬季に300~500頭程度が確認されている。伊豆地域以外では袋井市の防空壕で1個体が確認されただけである。2003年以前に個体数が比較的多かった場所では近年も同程度の数が見られ、2004年以降は伊豆市や松崎町などで個体数の多い新たな生息地も見つかっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息洞窟の一部では観光地整備 (18) により個体数が減少した可能性がある。また、危険防止対策に伴う洞窟坑口封鎖や廃坑の埋没 (18) はねぐらの消失となる。資材置き場に利用されていた形跡のある洞窟では利用の再開 (18) が生息の脅威に、高空飛翔時には風力発電施設への衝突死 (26) が脅威となる。

## 6. 保護対策

観光洞になっている生息洞窟では一部が立入禁止になっている場合がある。他県では、洞窟出入口へのバットゲート (人は入れないがコウモリ類は通過できる柵) 設置などの保護対策が行われており、本県でも同様の対策が必要である。また、風力発電施設における衝突死の状況を把握する必要がある。

## 7. 特記事項

過去に記録のある御殿場市の観光洞は国指定天然記念物に、伊東市のねぐらは「大室山」として国指定天然記念物に指定された範囲内に存在している。

## 8. 主な文献

澤田 勇 (2005) バンディング法によって明らかにされたコウモリの飛翔行動について. 長崎県生物学会誌, 59: 1-7

下泉重吉・森 弘安 (1976) 伊豆半島におけるユビナガコウモリ (*Miniopterus schreibersii*) の生態学的研究(2)-帰洞性 (Homing) について-. 生物教育, 16: 9-11

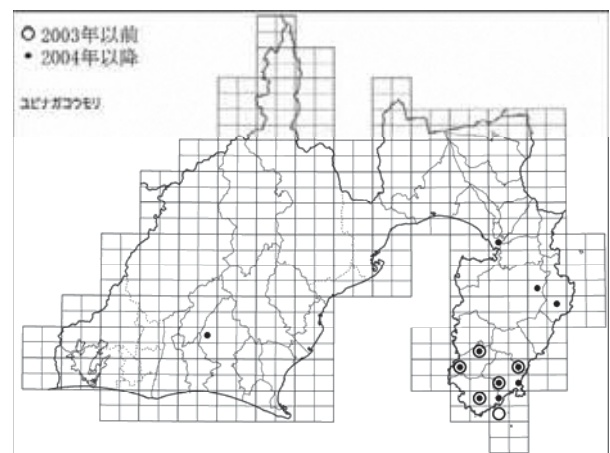
## 9. 標本

下田市産 剥製♂♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム

(小長谷尚弘・佐藤顕義・三宅 隆)



松崎町 2013年1月15日 三宅 隆



# カヤネズミ *Micromys minutus* (Pallas, 1771)

ネズミ科 Muridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 50~80 mm、体重 7~14 g。日本の啮歯目中最小種で、尾は頭胴長よりも長い。毛色は背面が暗褐色で、腹面は白色である。低地の草地などに、ススキの葉などを用いて鳥の巣のような球形の巣を作る。春と秋の年2回の繁殖期を持つが、地域により夏にも繁殖する。1回の産子数は2~8頭である。

## 2. 分布

旧北区に広く分布し、日本では福島県以南の本州、四国、九州、隠岐諸島や対馬などに分布する。県内では、海岸部、天竜川、大井川及び狩野川周辺、富士山山麓、伊豆半島南部などで記録がある。河川沿いや農耕地周辺などの高茎草地に分布している可能性があるが、確認記録が少なく、詳細な分布は不明である。

## 3. 生息環境

低地の草地、水田、休耕田、沼沢地、荒地などイネ科植物が生育するところを好む。水場を好み、泳ぐともいわれるが、南アルプスでは標高 1,000 m の尾根のススキ草原でも確認されている。

## 4. 生息状況

湿地帯の開発や河川敷の公園化、グラウンド化などにより生息可能な草地が減少し、生息域ならびに生息数は減少していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

カヤ場などの開発、遷移の進行、樹林化による生息環境の減少 (16, 54) が脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果などの記録も活用することが望まれる。

## 8. 主な文献

鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

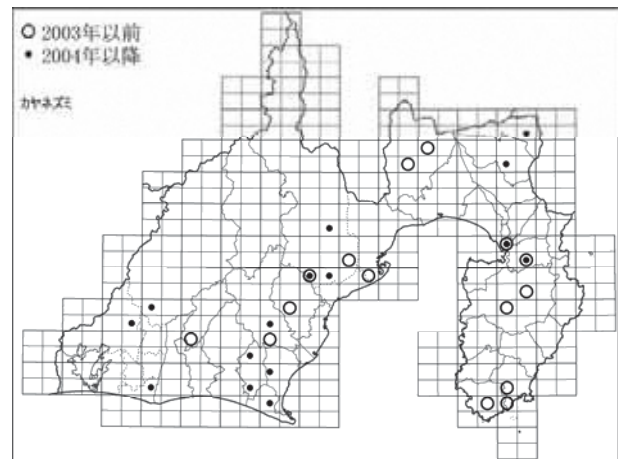
鳥居春己 (2005) カヤネズミ. 静岡県自然環境調査委員会 哺乳類部会編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 83-84. 同会, 静岡.

## 9. 標本

富士宮市産 : ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区麻機遊水地 2006年7月30日 伴野正志



(大場孝裕)



# ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827)

リス科 Sciuridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 27~48 cm、尾長 28~41 cm、体重 700~1,300 g。夜行性で、樹上で活動する。前後肢の間にある皮膜を広げ、100 m 以上も滑空できる。巣は大木の樹洞などに作る。ほぼ完全な植物食で、木の葉、芽、花、果実、種子などを採食し、時にヒノキの樹皮も食べる。メス同士はなわばりを持つが、オス同士の行動圏は重なる。春と秋に1~4頭を出産する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では海岸部から富士山麓、南アルプス亜高山帯まで広く分布すると見られるが、確実な生息情報の記録は少ない。

## 3. 生息環境

低地の社寺林から亜高山帯の天然林まで生息する。樹洞に営巣するため、樹洞ができるような広葉樹大径木のある森林が生息環境である。本種が滑空して移動するには、高い幹から飛び立つために、大径木の存在が必要条件である。平地では、社寺林がそのような条件を満たしている。

## 4. 生息状況

県内に広く生息すると思われるが、情報が不足している。

## 5. 減少の主要因と脅威

社寺林などの大径木の伐採 (11)、周囲開発による生息域の孤立化 (23、24) が減少の主要因として考えられる。

## 6. 保護対策

1994年以降狩猟鳥獣から除外されている。皆伐の減少によりスギ人工林の高齢大径化が生じており、各所でキツキ類の営巣 (穿孔) が確認されているとともに、本種の営巣も確認されている。低地帯から山地帯の人工林でも、本種を含む2次樹洞営巣種の生息環境の増加が期待できる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

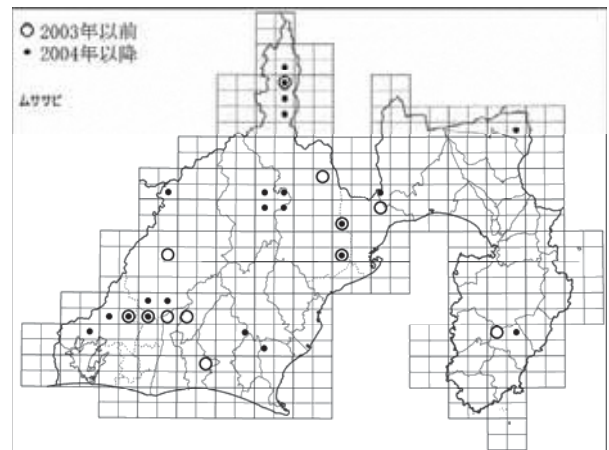
鳥居春己・大場孝裕 (2005) ムササビ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 74-75. 同会, 静岡.

## 9. 標本

静岡県産: ふじのくに地球環境史ミュージアム



牧之原市 2013年6月13日 三宅 隆



(大場孝裕)

### 1. 種の解説

頭胴長 77~107 mm、尾長 20~26 mm、体重 26~36 g。世界的にみても小型の真性モグラで、尾が長いのが特徴。前肢は大きく発達し、後肢は小さい。国内に生息する他のモグラ亜科よりも下顎歯数が1対多い。毛色は灰褐~黒色まで地域によって異なる。自然下では昆虫類やミミズ類、ジムカデ類、ヒル類などを食べている。

### 2. 分布

日本固有種で、青森県から広島県にかけての山地に局所的に分布する。県内では、富士山の須走、高鉢、南アルプスの千石沢、樫島、中俣、光岳、寸又川左岸林道で記録がある。

### 3. 生息環境

低山帯から高山帯までの森林に生息するが、生息数は多くないとされる。

### 4. 生息状況

県内では、2003年以前、2004年以降ともに数例の記録があるだけで、生息状況の詳細は不明である。国内の生息状況や県内の記録を考慮すると、山地帯から亜高山帯の落葉広葉樹林や針葉樹林などに低密度で生息していると推察される。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息状況が十分分かっていないため減少の主要因などは不明であるが、森林伐採(11)や生息地周辺の大規模な改変(23)が脅威となりうる。

### 6. 保護対策

土壌動物を主な食物としていることから、落葉層の発達した落葉広葉樹林などの保全が必要と考えられる。

### 7. 特記事項

生きた状態での確認は高鉢で偶然道路上に出てきた個体を捕獲した1例のみで、他は死亡個体の拾得記録があるのみである。本種が以前まで属していた *Euroscaptor* とは骨格の形状などが異なることから、2016年に新たな属 *Oreoscaptor* に移動となった。

### 8. 主な文献

阿部 永 (2000) 日本産哺乳類頭骨図説. 北海道大学図書刊行会, 札幌, 290 pp.

阿部 永・石井信夫・伊達徹魯・金子之史・前田喜四男・三浦慎悟・米田政明 (2005) 日本の哺乳類改訂版. 東海大学出版会, 秦野, 206 pp.

Kawada, S. (2016) Morphological review of the Japanese mountain mole (Eulipotyphla, Talpidae) with the proposal of a new genus. *Mammal study*, 41: 191-205

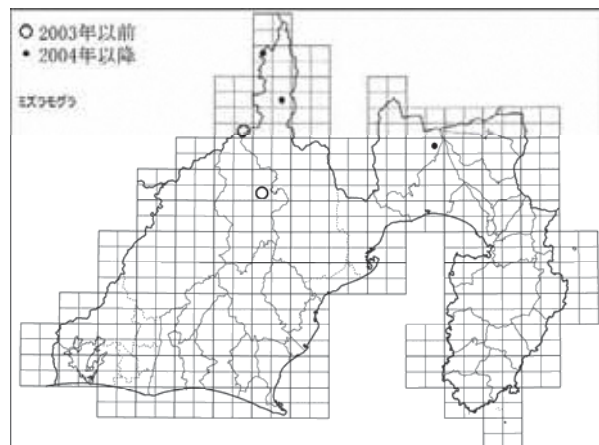
### 9. 標本

静岡市葵区産 : ふじのくに地球環境史ミュージアム (SPMN-MA-1301)

(佐々木彰央)



富士宮市高鉢 2004年7月4日 三宅 隆





### 1. 種の解説

前腕長 57~65 mm、頭胴長 79~108 mm、尾長 45~67 mm、体重 26~60 g。体毛は光沢のある褐色。日中のねぐらは主に樹洞を利用するが、近年、人工物でも確認されている。夜間上空を高速で飛びながら昆虫類を捕食するが、鳥類を捕食する場合もある。越冬期前後は日中も飛翔することがある。栃木県日光から埼玉県鴻巣市までの約 74 km を移動した事例がある。標識再捕獲による生存記録は 6 年以上が知られている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島や台湾、中国、シベリア東部に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。沖縄県では偶然飛来したと考えられている 2 事例がある。県内では 1975 年 7 月 26 日の富士山麓で捕獲された詳細場所不明の記録及び 1987 年に旧清水市日本平で怪我をした個体の保護記録があるだけである。

### 3. 生息環境

樹洞のある大木のある天然林や人工林(社寺林など)に生息するが、県内での樹洞ねぐらは確認されていない。埼玉県の市街地では新幹線高架下の隙間を 9 月から翌年 5 月まで最大 230 個体のねぐら利用がある。

### 4. 生息状況

2003 年以前、2004 年以降の調査ともに確実な記録は得られていない。2004 年以降、県内の高架橋などでのねぐら調査などを行ったが確実な生息情報は得られておらず、生息個体数は少ないと考えられる。なお、本種のものと思われる超音波音声は南アルプス及び富士山での調査で数回感知されているが、比較的高空を飛翔する特性から捕獲には至っていないものと考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

過去 30 年以上前の 2 事例のみであることから減少の主要因は不明(99)であるが、生息の安定・増加を妨げる森林伐採や社寺林の樹洞伐採等によるねぐらの減少(11)、風力発電施設への衝突死(バットストライク)(26)は脅威と推察される。

### 6. 保護対策

京都府において「ヤマコウモリ保全回復事業計画」が策定されている。県内では生息場所の把握のための調査の継続とともに、原生林の保全や樹齢の高い大木の保護などが求められる。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 52: 54-62

京都府(2012) ヤマコウモリ保全回復事業計画. 京都府告示第 653 号 平成 24 年 11 月 13 日.

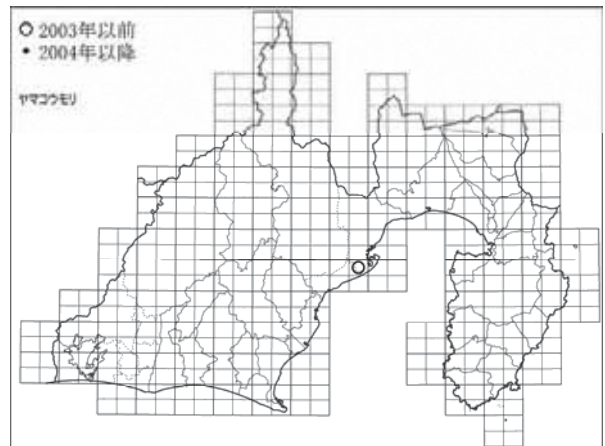
佐藤顕義・大沢夕志・大沢啓子・勝田節子(2013) 埼玉県におけるヤマコウモリ(*Nyctalus aviator*)の越冬生態 1 上越新幹線における分布と季節移動. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 7: 101-108

### 9. 標本

静岡県産標本の所在は不明。



埼玉県 2013 年 4 月 13 日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

# モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 30～33 mm、頭胴長 40～50 mm、尾長 28～39 mm、体重 5～9 g。皮膜は黒褐色で体毛は背面が濃い橙褐色。腹部は黄褐色。類似種のアブラコウモリとは本種の上顎犬歯が短く細く、後方の突起が大きいという点で異なる。陰茎骨は横から見て本種が直線状であるのに対し、アブラコウモリはS字状に湾曲している。日中のねぐらは樹洞や樹皮下を利用し、夜間、樹冠や河川上空で昆虫類を採餌する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州及び四国に分布する。県内の記録は、2009年に静岡市葵区田代の標高2,000 m付近の林道で捕獲された1例のみである。

## 3. 生息環境

天然林などに生息しており、ブナ、スギなどの樹洞をねぐらや出産哺育のためのコロニーの形成場所としていることが観察されている。また、東京都では春季に標高200 m前後のスギ・ヒノキ林で確認され、宮城県では越冬期に海岸近くの標高4 mの洞穴で確認されている。県内では確認記録が少ないため生息環境は不明だが、針葉樹広葉樹混交林などの自然林に生息していると考えられる。

## 4. 生息状況

県内では南アルプスで1例が確認されているだけであるため、活動期及び越冬期の生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

2003年以前の調査では確認がないため、減少の主要因は不明である(99)。隣接する長野県及び山梨県での近年の記録もない。自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少(11)が主な脅威と推察される。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。

## 7. 特記事項

今後は県内の生息場所を把握するための調査を行い、情報を収集する必要がある。

## 8. 主な文献

重昆達也・浦野守雄・安藤陽子・高木雄治(2006) 東京都奥多摩地域におけるモリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi* の春季ねぐら(day roost)について. ANIMATE, 6: 19-26

Kawai, K., M. L. Echenique-Díaz, O. Takahashi & C. Saito (2015) Insights into the Natural History of *Pipistrellus endoi* Imaizumi, 1959 from Survey Records in Miyagi Prefecture. *Research Bulletin of Environmental Education Center, Miyagi University of Education*, 17: 49-53

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

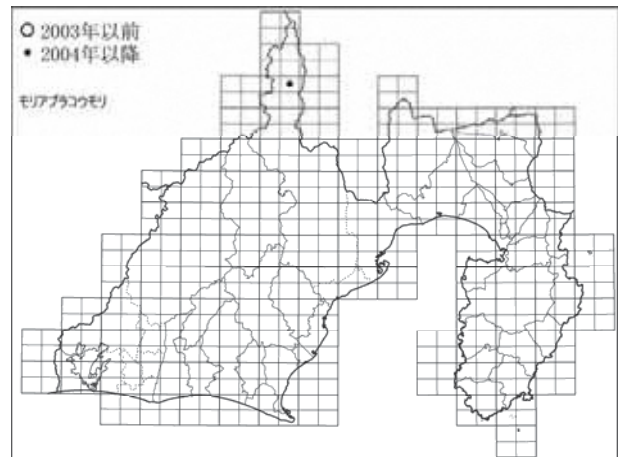
## 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂：ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



静岡市葵区田代 2009年7月18日 三宅 隆



# ニホンウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* G. M. Allen, 1908

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-b)変更コード1

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長 37~44 mm、頭胴長 42~63 mm、尾長 41~58 mm、体重 6~11 g。体毛は灰褐~褐色で、耳介が大きい。日中のねぐらは樹洞を利用するが、洞窟や家屋で出産哺育集団を形成する事が多い。越冬期は洞穴などにおいて単独で見つかる場合が多く、確実な集団越冬地は知られていない。本州中部では6月中~下旬に1仔を出産する。再捕獲による生存記録は静岡県で4年が知られている。

## 2. 分布

国外ではイギリス、フランスから中国東北部に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。西日本での記録は少なく、本県は主たる生息地の南限に当たる。県内では南アルプス（静岡市葵区、川根本町）及び富士山（富士宮市、小山町）で確認され、伊豆地域での記録はない。

## 3. 生息環境

南アルプスでは標高 500~2,050 m 程度、富士山では標高 700~1,600 m 程度の常緑針葉樹林帯などの森林内で確認されている。越冬期は隧道で少数が確認されている。

## 4. 生息状況

静岡市の既知出産哺育場所は、施設閉鎖のために利用できなくなった。また、小山町の廃屋は消失し、富士宮市の洞穴も利用しなくなり、県内の既知出産哺育場所はすべて消失した。森林内での捕獲事例は少なくないものの、出産哺育に利用されてきたねぐらが消失したため詳細は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

出産哺育地の消失 (18) は生息個体数に大きな影響を与えると考えられる。また、森林の伐採 (11) はねぐらの消失につながり、脅威となると推察される。

## 6. 保護対策

山梨県では出産哺育場所に地下室を利用している本種のため、バットゲート（人は入れないがコウモリ類は通過できる柵）が設置されている。県内でも静岡市の既知出産哺育場所で再繁殖できるように、コウモリ類が通過できる柵部を施設の扉に設けることが必要である。

## 7. 特記事項

岩手県の龍泉洞で本種及びコキクガシラコウモリの集団越冬地が確認され「岩泉湧窟及びコウモリ」として国指定天然記念物に指定（1938年12月14日）されたが、本種は生息せずコキクガシラコウモリのみであった可能性が示唆されている。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己（2012）静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

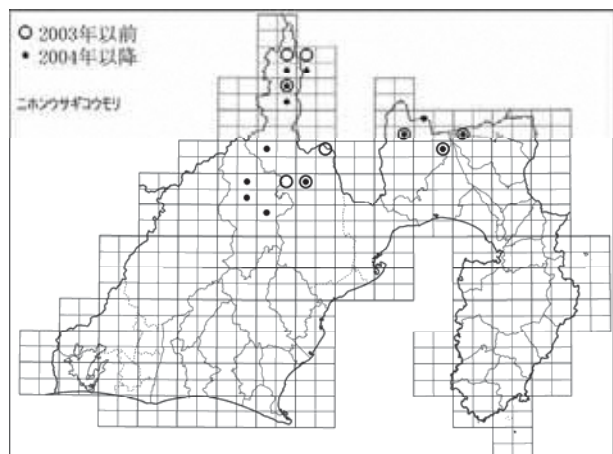
吉倉智子・村田浩一・三宅 隆・石原 誠・中川雄三・上條隆志（2009）ニホンウサギコウモリの出産保育コロニーの構造と繁殖特性. 哺乳類科学, 49: 225-235

## 9. 標本

静岡市南アルプス産 剥製♀：ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2015年8月15日 三宅 隆



(佐藤顕義・小長谷尚弘・三宅 隆)



# ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-b)変更コード1

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長 44~54 mm、頭胴長 60~79 mm、尾長 33~50 mm、体重 14~30 g。冬季は黒褐色の体毛に先端の白い刺毛が混ざり霜降り状。夏季のメスは明茶色。年1回初夏に2仔を出産する。日中のねぐらは樹洞や家屋などの人工物を利用し、夜間、比較的高空を飛行して昆虫類を採餌する。近年、新幹線高架を集団で出産哺育や越冬に利用していることが判明している。再捕獲による生存記録は青森県で11年が知られ、青森県から京都府までの約784 kmを移動した事例がある。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部、中国東部、台湾に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では2003年に富士宮市の東京農業大学富士畜産農場で約100年ぶりに確認されている。その後、浜松市天竜区水窪町及び静岡市葵区で越冬集団が、南アルプスで単独個体が捕獲または目視で確認されている。

## 3. 生息環境

南アルプスの越冬集団は、常緑広葉樹林帯の隧道の繋ぎ目で9個体、家屋の隙間で20個体が確認されている。単独での確認事例のうち、静岡市葵区田代の記録(標高約850 m)以外は比較的低標高地の記録である。

## 4. 生息状況

南アルプスでは集団越冬地が2ヶ所確認されたが、出産哺育に係る情報は得られていない。単独で確認された時期も越冬期前後の記録が多かった。富士山及び伊豆地域での確認はなく、2004年以降に実施した高架橋などのねぐら調査でも確認がなかったことから、現状の生息個体数は少ないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

これまでの確認記録が少なく、減少の主要因は不明である(99)。しかし安定・増加を妨げる森林伐採や社寺林の樹洞埋設等によるねぐらの減少(11)、風力発電施設への衝突死(26)は脅威と推察される。

## 6. 保護対策

青森県ではコウモリ専用の小屋が建設され、現在まで出産哺育が継続している。県内では活動期の生息状況調査や既知冬季確認場所の継続調査などを実施するとともに、可能な場合は青森県同様の人工的なコウモリ小屋の整備が望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

重昆達也・本多宜仁・佐藤顕義・三宅 隆 (2018) 静岡県西部の風力発電所で見つかったコウモリ類2種の死骸について. 東海自然誌, (11): 51-57

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

佐藤顕義・谷本雅紀・重昆達也 (2017) 静岡県藤枝市におけるヒナコウモリの記録. 東海自然誌, (10): 67-69

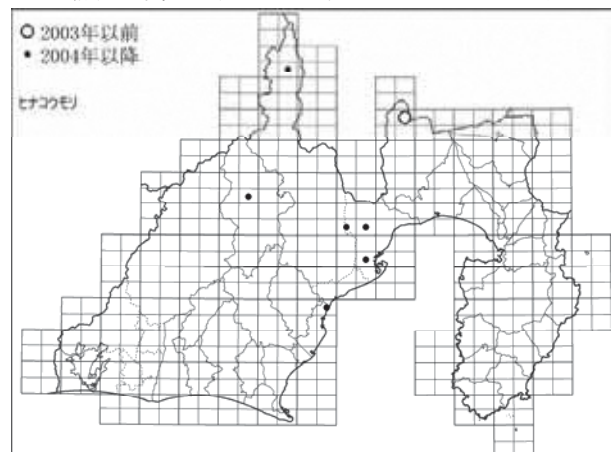
土屋公幸 (2004) 農大富士畜産農場でヒナコウモリを保護. Animate 通信, (9): 1

## 9. 標本

静岡市葵区産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2014年6月18日 三宅 隆



(佐藤顕義・三宅 隆)

### 1. 種の解説

前腕長 36~42 mm、頭胴長 41~55 mm、尾長 37~46 mm、体重 6~11 g。体毛は黒褐色または褐色。類似種のヒメホオヒゲコウモリと比較して、本種は下腿長が 17 mm 以上と長い。日中のねぐらは主に樹洞を利用し、夜間に飛翔する昆虫を採餌する。新潟県及び石川県などでは隧道を集団でねぐらとして利用している。再捕獲による生存記録は石川県で 14 年、長野県で 17 年が知られている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島及び中国とロシアの一部に分布し、国内では中部以北の本州、北海道に分布する。静岡県は主たる分布の南限に当たる。県内では 1975 年 7 月 25 日の富士山麓での捕獲記録があるが詳細は不明である。南アルプスでは 1999 年に静岡市葵区田代の大井川上流標高 1,850 m 付近の東俣で確認され、その後 2012 年東俣、2015 年樫島で確認された。富士山では山梨県側でも確認されている。

### 3. 生息環境

確実な生息環境は、大井川上流域の針葉樹、落葉樹の混交林である。

### 4. 生息状況

県内では南アルプスのみで確認されており、局所的に生息している可能性が考えられるが、詳細は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認数が少ないため減少の主要因は不明 (99) であるが、南アルプスは国内の南限に当たることから、元来、生息個体数が少ない種であるのかもしれない。しかし、局所的に分布している可能性があり、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少 (11) が脅威になると推察される。

### 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所の把握のための調査などを行い、情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

Kagei, N., I. Sawada & T. Kifune (1979) Helminth Fauna of Bats in Japan XX. *Annotationes Zoologicae Japonenses*, 52: 54-62

山本輝正・松本和馬 (2016) カグヤコウモリ (*Myotis frater*) オス個体群の 21 年間にわたる個体群調査. 哺乳類科学, 56: 135-144

吉行瑞子 (1971) 富士山の翼手類. 黒田長久編, 富士山地域の動物相 (in 富士山総合学術調査報告書), pp.829-833. 富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会, 富士吉田.

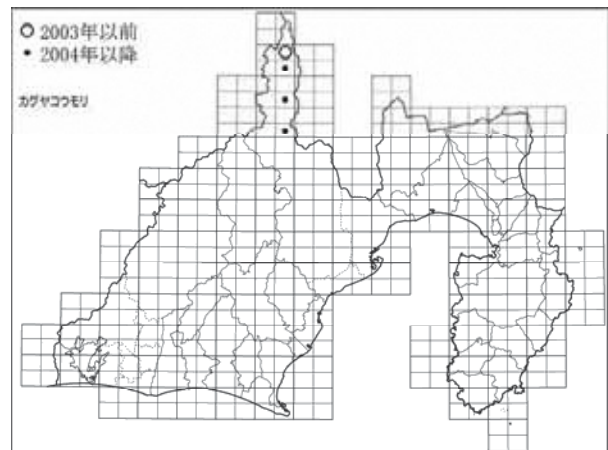
### 9. 標本

静岡市南アルプス産 剥製♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤頭義・三宅 隆)



静岡市葵区田代 2012年7月16日 三宅 隆



# クロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinosus* Yoshiyuki, 1971

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 30~35 mm、頭胴長 37~45 mm、尾長 31~40 mm、体重 3~5 g。体毛は黒褐~灰黒褐色で背面に先端が銀色の刺毛をもち、類似種のヒメホオヒゲコウモリと比較して腿間膜の血管走行線は直線的。森林内で捕獲される場合が多いため、日中のねぐらは主に樹洞を利用していると考えられているが、愛媛県、熊本県及び滋賀県では隧道をねぐらとして利用している。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州から知られるが、確認記録は少ない。県内では南アルプス（静岡市葵区、川根本町、浜松市天竜区水窪町）のみで確認されている。

## 3. 生息環境

ホオヒゲコウモリ属中、南方系の種群に属する。夏緑広葉樹林帯下部に生息し、それ以上の高地に住むヒメホオヒゲコウモリと住み分けすると考えられている。県内では標高 600 m 程度での確認が多かったが、静岡市の標高約 2,000 m 及び 1,500 m の常緑針葉樹林帯でも捕獲され、ヒメホオヒゲコウモリと同所的に生息している場所も存在する。

## 4. 生息状況

南アルプスでは浜松市の森林内で当歳獣が捕獲されている。2014年11月には川根本町の標高 600 m 付近の隧道で1個体が確認された。局所的に確認され、個体数は少ないものの、山間地の河川沿いに広く分布している可能性が考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認場所と確認個体数が少なく、減少の主要因は不明 (99) であるが、主たる生息環境が低標高地の自然林が残る河川沿いや急斜面地であることから、自然林の伐採や開発行為によるねぐらの減少 (11) が脅威になると推察される。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所把握のための調査などを行い、情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

前田喜四雄 (2001) 日本コウモリ研究誌. 東京大学出版会, 東京, 203 pp.

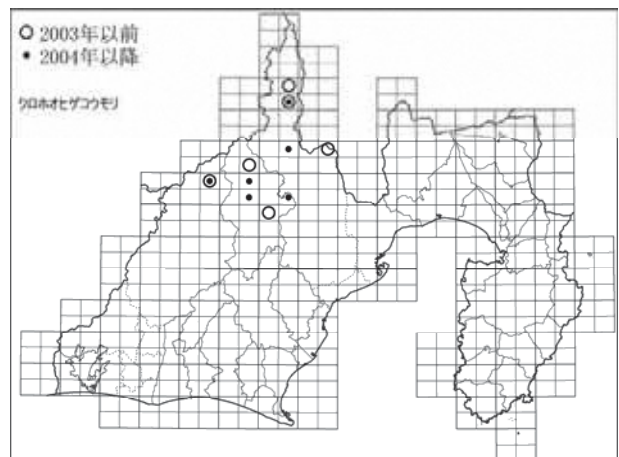
佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己 (2012) 静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

## 9. 標本

川根本町産 剥製♂♀ : ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2010年8月26日 三宅 隆



(佐藤頭義・三宅 隆)



# テングコウモリ *Murina hilgendorfi* (Peters, 1880)

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし ]

## 1. 種の解説

前腕長 40~46 mm、頭胴長 47~70 mm、尾長 32~47 mm、体重 8~19 g。体毛は背面が灰褐色で銀色に長毛がまばらに生える。腿間膜の上面は長毛が密生する。鼻孔先端は管状で左右に広がる。日中のねぐらは生葉、枯葉、洞穴、橋や廃屋などを利用する。夜間に林内を飛翔し、地表付近の昆虫類を採餌することがある。再捕獲による生存記録は山口県で7年11カ月が知られる。

## 2. 分布

国外では東南アジア、中国、サハリンなどに広く、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内の確認例は少ないが、南アルプスで主に確認されているほか、富士地域及び伊豆地域でも記録がある。

## 3. 生息環境

南アルプスでは、活動期及び越冬期に常緑広葉樹林帯上部を中心に確認され、富士山でも同様の環境で生息していると考えられる。伊豆地域では、松崎町の標高100 m程度にある廃坑で確認されている。南アルプスの長野県側では、周辺にスギ・ヒノキ林が分布する隧道に5月から集まりだし、隧道を出産哺育場所に利用していたことが報告されている。

## 4. 生息状況

南アルプス及び富士山では、常緑広葉樹林帯に広く分布する可能性があるが、当該樹林帯上部の記録が中心である。富士宮市の溶岩洞窟では2006年6月11日に9頭の群塊が確認されたが、その後は確認されていない。伊豆地域では2004年以降の記録がない。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認事例は多くないが、南アルプス及び富士山地域での減少は見られていない。伊豆地域では今回の調査期間では確認がなかった。減少の主要因は不明(99)であるが、森林内に強く依存している傾向があることから、森林伐採によるねぐらの減少(11)、森林の分断や開発による移動阻害と餌昆虫類の減少(11、23、24)が脅威となる。

## 6. 保護対策

本種の具体的な保護対策は知られていないが、巣箱を用いた調査で確認される場合があるため、一時的な保護対策として有効となる可能性がある。今後は県内の生息場所把握のための調査を行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

佐藤頭義・勝田節子(2006)天竜川水系で確認したテングコウモリ *Murina leucogaster* の繁殖と周年動態. コウモリ通信, 15(1): 2-5

佐藤頭義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

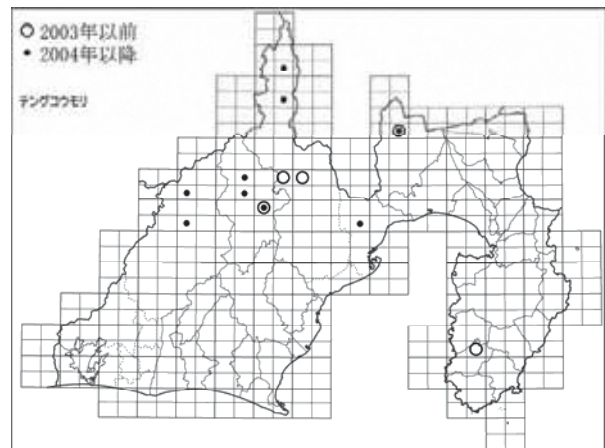
## 9. 標本

川根本町産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤頭義・三宅 隆)



川根本町 2013年9月7日 三宅 隆



# コテングコウモリ *Murina ussuriensis* Ognev, 1913

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-b)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

前腕長 28~35 mm、頭胴長 41~54 mm、尾長 26~33 mm、体重 4~8 g。体毛は背面が明茶色で腹面は白色。腿間膜の上面に長毛を密生する。鼻孔先端は管状で左右に広がる。日中のねぐらは樹皮の下、広葉の中、洞穴内、家屋内などを利用し、夜間に林内を飛行する昆虫類を採餌する。冬季は洞穴内で見つかる場合が多い。再捕獲による生存記録は鹿児島県でオス4年、メス4年半が知られている。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部及び北東部などに、国内では北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では南アルプスや富士山で記録があり、伊豆地域では確認されていない。南アルプスでは活動期に標高 450~2,450 m の範囲で確認され、出産哺育情報もえられている。

## 3. 生息環境

南アルプス及び富士山では、活動期に常緑広葉樹林帯上部から常緑針葉樹林帯まで分布している。冬季は南アルプスにおいて標高 450~700 m 程度の隧道を越冬ねぐらとして利用している。

## 4. 生息状況

南アルプス及び富士山では、常緑広葉樹林帯から上部の範囲に広く生息していると考えられるが、出産哺育が示唆された場所は2ヶ所のみである。伊豆地域では記録がないが、元々生息していないか絶滅したかは不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

前回調査と比較して確認地点は増加しているが、森林の伐採(11)や植生の単一化によるねぐら環境の減少(71)及び開発行為による餌昆虫類の減少(23、24)が脅威となる。

## 6. 保護対策

本種の具体的な保護対策は知られていない。ただし、枝葉トラップを用いた調査でも確認されていることから、一時的な保護対策として有効になる可能性がある。今後は県内の生息場所の把握のための調査及び冬期確認場所の継続的調査などを行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

船越公威・長岡研太・竹山光平・犬童まどか(2009)コテングコウモリ *Murina ussuriensis* におけるアカメガシワトラップのねぐら利用と繁殖生態. 哺乳類科学, 49: 245-256

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正(2010)南アルプス地域におけるコテングコウモリの分布とねぐら利用. 森林野生動物研究会誌, 35: 33-41

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

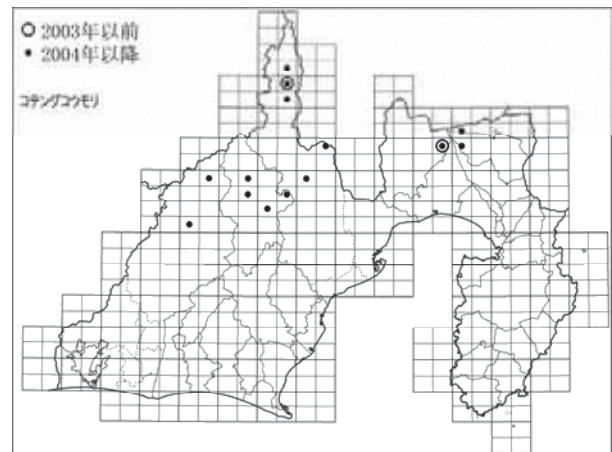
## 9. 標本

静岡市葵区南アルプス産 剥製: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



静岡市葵区田代 2012年7月12日 三宅 隆





### 1. 種の解説

頭胴長 68~84 mm、尾長 44~54 mm、体重 14~20 g。小さな体に大きな目と平らな顔、フサフサとした尾、背中の黒筋などが特徴である。冬期は樹洞などで丸くなって冬眠する。夜行性で、樹上を移動し、昆虫、液果や果実、種子などを食べる。1属1種で国の天然記念物に指定されている。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐に断続的に分布する。県内では低山帯から亜高山帯まで広く分布すると思われるが、確認例は多くない。聖平小屋や井川県民の森などの南アルプスに点在するほか、伊豆市、小山町、富士宮市などで記録されている。

### 3. 生息環境

本州の中部地帯以北の山地に多く生息し、山地帯から亜高山帯の落葉広葉樹林が主な生息地とされてきた。しかし近年、暖温帯低標高の常緑広葉樹林でも多数発見されている。

### 4. 生息状況

情報が不足しているため、生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

情報が不足しているため、生息数や、生息地の状況が判らず、要因と脅威について現時点ではコメントできない (99)。

### 6. 保護対策

特別な保全対策は行われていない。

### 7. 特記事項

「日本特有の動物で著名なもの及びその棲息地」として国指定天然記念物 (昭和 50 年 6 月 26 日指定) に指定されている。

### 8. 主な文献

春田亜紀 (2005) ヤマネ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 76-77. 同会, 静岡.

中島福男 (2001) 日本のヤマネ. 信濃毎日新聞社, 長野, 169 pp.

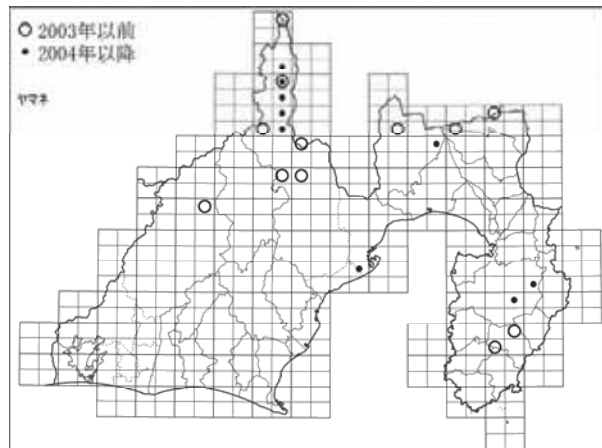
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

なし。



©2019 T. Miyake  
静岡市葵区井川 2011年2月8日 三宅 隆



(大場孝裕)

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 14~20 cm、尾長 10~14 cm、体重は 150~220 g。大きな目と、前後肢の間の皮膜で滑空するのが特徴である。植物食で、木の葉や芽、花、果実、樹皮などを食べる。樹上で生活し、巣は天然の樹洞やキツキ類の古巣を利用する。比較的高地に多く、夜行性の小型種であり、樹上で活動するため生息確認が難しい。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では、天城峠、富士山、南アルプス前衛の山地から大井川の上流域で記録があり、低山帯から亜高山帯までの森林に分布すると思われる。

### 3. 生息環境

比較的標高の高い森林地帯に生息していると考えられるが、確認例が少なく、生息環境の詳細は不明である。人家に近い場所での確認例はなく、これはムササビとの競合の影響が考えられる。

### 4. 生息状況

2003年以前に実施したレッドデータブック作成のための調査では、伊豆天城峠、富士山須走5合目、南アルプスの樫島、浜松市天竜区水窪町戸中林道などで記録がある。2004年以降は、静岡市葵区の中山間地から南アルプスにかけて記録がある。県内の山地森林に広く生息すると思われるが確認例が少なく、詳細な生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息状況などについての情報が不足しているため、減少要因と脅威については不明 (99) である。

### 6. 保護対策

間伐の減少によりスギ人工林の高齢大径化が生じており、各所でキツキ類の営巣 (穿孔) が確認されている。本種を含む2次樹洞営巣種の生息環境の増加が期待できる。

### 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果等も活用することが望まれる。

### 8. 主な文献

川道武男 編 (1996) 日本動物大百科 I 哺乳類 I. 平凡社, 156 pp.

春田亜紀・三宅 隆・大場孝裕 (2005) ホンドモモンガ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp. 72-73. 同会, 静岡.

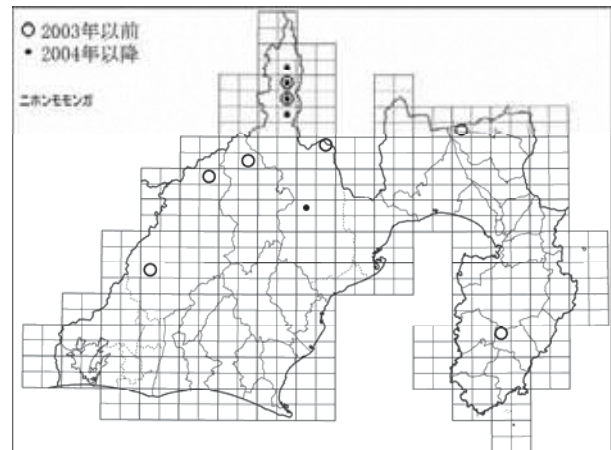
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

静岡市葵区産 : ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区横沢 2008年12月19日 三宅 隆



(大場孝裕)

### 1. 種の解説

オスは頭胴長 182~198 mm、尾長 48~67 mm、体重 200 g 程度。メスはオスに比べて少し小さい。胴長短足で、毛色は腹面が白色で尾の先端は黒色、夏毛の背面は濃い茶褐色で冬毛は白色となる。肉食でネズミ類やモグラ類などの小型哺乳類、鳥類とその卵、昆虫類を主に捕食する。肉食で同性に対して数十 ha のなわばりを形成するため、生息密度は低い。

### 2. 分布

国外ではユーラシア北部と北アメリカに広く分布し、国内では北海道と本州中部以北の山地帯上部から高山帯に分布する。県内では 2001~2002 年に行ったアンケート調査で、南アルプスでは標高 1,000 m 付近から 3,189 m の間ノ岳山頂直下で目撃情報がえられた。また、情報は少ないが、富士山にも分布している。

### 3. 生息環境

南アルプスの稜線登山道やガレ場での目撃情報が多く、水場のほか山小屋でも目撃されている。体つきを活かし、主な餌の一つであるネズミ類やモグラ類などを捕食しやすい地表や石の隙間が多いところを好んで利用していると考えられる。

### 4. 生息状況

2001~2002 年に行ったアンケート調査では、南アルプス全域で目撃情報がえられている。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息域は限られるが、環境が大きく改変される危険性は低い。生息密度が低いいため、減少した場合に個体群が維持されていくのか心配されるが、その要因と脅威は不明 (99) である。

### 6. 保護対策

本種の生息地にもなっている南アルプスの稜線部周辺は、国立公園特別保護地区や特別地域に指定され、土地の改変や森林伐採が規制されている。

### 7. 特記事項

静岡県は、国内の生息域の南限となっている。

### 8. 主な文献

大橋正孝 (2005) オコジョ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, pp.121-122. 同会, 静岡.

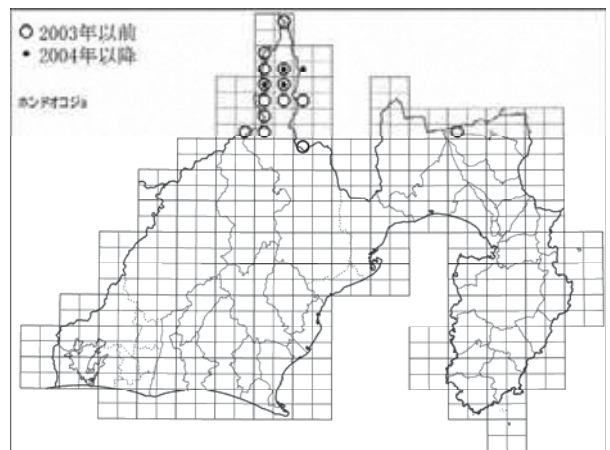
鳥居春己 (1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

なし。



静岡市葵区井川県民の森 2008年12月21日 佐藤元一 ©2019 M. Sato



(大場孝裕・三宅 隆)



# オヒキコウモリ 伊東の個体群 *Tadarida insignis* (Blyth, 1861)

オヒキコウモリ科 Molossidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更コード4

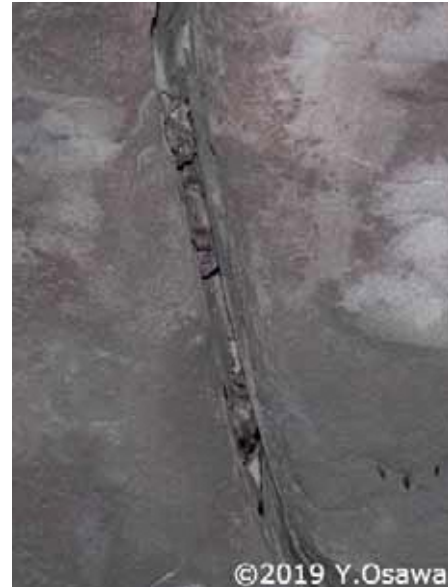
[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

前腕長 57～66 mm、頭胴長 81～94 mm、尾長 46～58 mm、体重 30～45 g。日本に生息する食虫性コウモリの中で最も大型。耳介は丸くて大きい。尾が長く、翼は狭長で高空を高速度で飛翔することができる。国内では広島県の学校校舎のつなぎ目で確認された 500 頭前後の出産哺育集団が最大である。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。国内では北海道から九州までの広い範囲で確認されているが、死体などが偶然拾得された記録が多い。国内では 1996 年に宮崎県批榔島で最初に出産哺育集団が確認され、ねぐらから 3.5 km 離れた林冠上で採餌していることが示唆されている。高知県、京都府及び広島県でも集団が確認されている。近年、九州では新幹線高架でねぐらが発見された。県内では 2009 年に伊東市城ヶ崎海岸に生息するアマツバメの調査に訪れた研究者によって、海岸から離れた岩礁の隙間で群れが発見された。



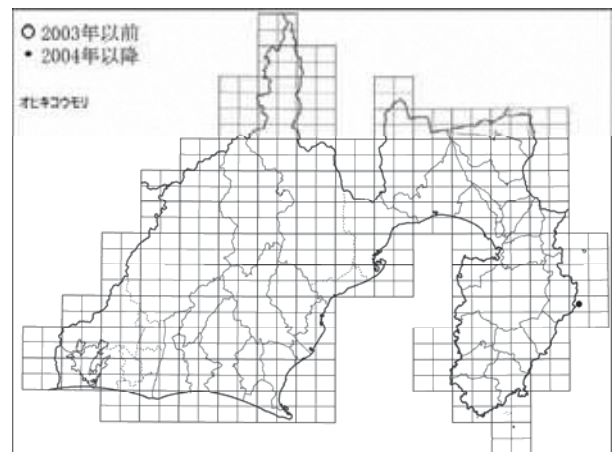
伊東市 2010年 大沢夕志

## 3. 生息環境

発見されたねぐらは洋上の岩礁で、現在でも夏季は岩礁の亀裂隙間をアマツバメと共存してねぐらを利用している。

## 4. 生息状況

県内で確認されている生息地は伊東市の 1ヶ所だけで、最大で 200 頭前後がねぐらに利用している。1年を通じてねぐらとして利用しているが、出産哺育場所となっているかは不明である。日没 30 分から 1 時間後に出巢し、海岸沿いを飛翔しながら主に広い空間で採餌している。超音波音声調査では、伊豆半島の他の地域でも生息している可能性が確認されている。



## 5. 減少の主要因と脅威

確認されているねぐらは人が容易に近づけない場所であり、減少の脅威は少ないと考えられる。しかし、採餌環境として高空を利用していることから風力発電施設への衝突死 (26) が脅威となる。

## 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。確認されたねぐらでの個体数モニタリング及び出産哺育の確認、県内の他の生息場所の把握、風力発電施設における衝突死の把握を実施する必要がある。

## 7. 特記事項

確認されたねぐらはアマツバメ集団生息地として伊東市指定天然記念物に指定されている。同じ岩礁の隙間を、アマツバメとオヒキコウモリが共有している状況は、国内的にも珍しいと考えられる。

## 8. 主な文献

佐藤顕義・三宅 隆・山本輝正・大場孝裕・中川雄三・大沢夕志・大沢啓子・山口喜盛・山口尚子・吉倉智子・高山壽彦・勝田節子 (2011) 静岡県伊東市城ヶ崎海岸燕黒岩におけるオヒキコウモリの集団ねぐら. コウモリ通信, 18(1): 2-4

## 9. 標本

なし。

(佐藤顕義・三宅 隆)

## ニホンザル 伊豆・愛鷹・熱海地域の個体群 *Macaca fuscata* (Blyth, 1875)

(=2004年版のニホンザル(熱海、伊豆地域の個体群))

オナガザル科 Cercopithecidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 50~60 cm、体重 10~18 kg で、メスはオスに比べてやや小さい。尾は短く、体毛は茶褐色で顔と尻が裸出して赤い。10 数~100 頭以上の群れで 1 年を通して数~数十km<sup>2</sup>の範囲を遊動する。群れは複数の成獣のオスを含む母系集団。オスは生後数年で群れを離れ、単独行動になる。植物主体の雑食性。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では富士川以西、愛鷹山麓、伊豆半島東南部と熱海市以東に群れが連続分布する。富士川以東では、森林域の分断、針葉樹林化による生息地の質の低下及び被害防止目的の捕獲の影響などから群れ分布の孤立化が進行し、地域的な絶滅が懸念される。

### 3. 生息環境

常緑及び落葉広葉樹林を中心に生息する。南アルプスでは、ハイマツやお花畑も利用する。開発などで広葉樹林が少ない地域では、農林作物への依存度が著しく高くなり耕作地が利用の中心となっている。

### 4. 生息状況

伊豆地域の群れの情報は、1981年の旧12市町村から1993年の旧6市町村まで減少した。愛鷹地域には春山川・須津川沿いを中心に複数の群れが生息するが、他の地域から孤立している。熱海地域(熱海市北部~神奈川県南西部)の個体数は、1990年頃に200頭を超えていたが現在100頭以下にまで減少している。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の好適生息環境である広葉樹林の減少により、耕作地等作物への依存度が著しく高くなったこと(71)、被害の深刻化に伴い耕作地周辺で強度の捕獲圧(41)が掛かったことなどが、分布の縮小や個体数減少の主要因と考えられる。今後も被害が続く、過度の捕獲圧がかかると個体群の存続は厳しくなる。

### 6. 保護対策

群れの連続分布を妨げる開発や捕獲の回避、耕作地等の作物に依存せずに生活できる生息環境の整備、防護柵と追い払い等による耕作地に近づけない管理、被害防止のための捕獲の最小化が必要と考えられる。

### 7. 特記事項

mtDNAのDループ可変域、約412塩基対を比較分析した結果から、富士川以西地域、愛鷹地域、伊豆地域、熱海地域は、それぞれ他地域と異なるハプロタイプであることが明らかになっている。

### 8. 主な文献

静岡県生活・文化自然保護課(1996)静岡県ニホンザル調査報告書—分布・被害の実態と被害回避対策の方向性—。静岡県, 41 pp.

Kawamoto, Y., T. Shotake, K. Nozawa, S. Kawamoto, K. Tomari, S. Kawai, K. Shirai, Y. Morimitsu, N. Tagi, H. Akaza, H. Fujii, H. Hagihara, K. Aizawa, S. Akachi, T. Oi & S. Hayaishi. (2007) Postglacial population expansion of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) inferred from mitochondrial DNA phylogeography. *Primates*, 7: 94-103

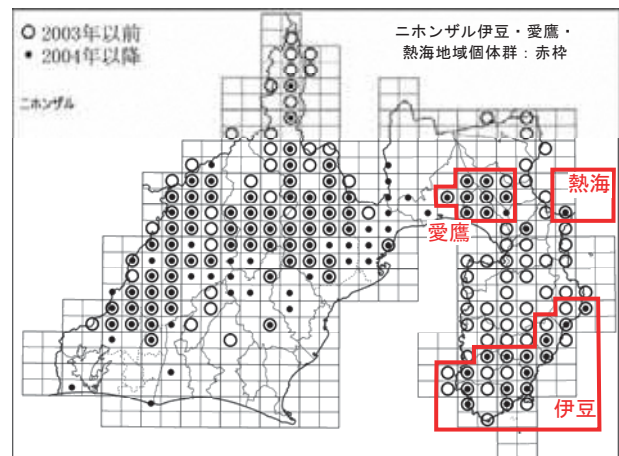
### 9. 標本

静岡市葵区梅ヶ島産: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(大橋正孝・三宅 隆)



南伊豆町波勝崎 2015年6月13日 三宅 隆





# ツキノワグマ 富士地域の個体群 *Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823

クマ科 Ursidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

: 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (静岡県該当なし)]

## 1. 種の解説

頭胴長 120~145 cm、体重 70~120 kg。県内最大の陸上哺乳類である。全身黒色で、胸部の白い三日月形の斑紋は個体により異なり識別に利用できる。雑食性で、春には若芽や草本類、夏には果実や昆虫類、秋には堅果類を多く摂食する。樹洞などで冬眠する。

## 2. 分布

国外ではヒマラヤの南側山麓部から東南アジア北部、中国東北部、台湾など、国内では本州、四国に分布する。九州では絶滅した可能性が高い。県内では、県中・西部と富士地域に分布し、伊豆地域では絶滅した。移動能力は高く、秋季に 20 km 以上を往復した県内追跡個体もいた。

## 3. 生息環境

山地帯のミズナラなどの落葉広葉樹林を中心に生息する。富士地域は天然林の面積が少なく分断化されているため生息環境が限られ、頭数も少ないと考えられる。本地域では、木が傾いて浮いた根の下にできた隙間や溶岩樹型の中での冬眠も確認されている。

## 4. 生息状況

県中・西部では 1992 年以降分布拡大や個体数増加が推察されるが、富士地域では富士山、天子ヶ岳～毛無山、三国山～不老山で生息が確認されているものの、愛鷹山では 2006 年の確認を最後に生息情報がない。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士地域は生息に適した落葉広葉樹林が少なく、森林の不連続性(23、24)も負の要因である。加えて、ニホンジカの採食圧による林床植物の衰退に伴い、食物資源の減少、カバー(遮蔽)の喪失が生じている(71)。さらに、ニホンジカ捕獲用の足くりわなに本種が錯誤捕獲(41)されている。

## 6. 保護対策

狩猟獣だが、静岡県猟友会は 1992 年から狩猟による捕獲を自粛している。足くりわな、箱わなで錯誤捕獲された場合は、放獣に努めている。県は、被害防止目的の捕獲について、市町に許可権限を移譲していない。また、原則、県中・西部のクマハギ(造林木の樹皮はぎ)被害に対してのみ捕獲許可を出している。

## 7. 特記事項

愛鷹山では、2016 年に愛鷹山～前岳稜線、裾野大沢、須津川など 15ヶ所での誘引を伴う自動撮影と聞き取り調査を行ったが、生息情報はえられなかった。

## 8. 主な文献

静岡県(1978)第2回自然環境保全基礎調査 動物分布調査報告書(哺乳類). 24 pp.

静岡県環境部自然保護課・静岡県林業技術センター・(株)野生動物保護管理事務所(1998)特定鳥獣生息調査報告書-静岡県におけるツキノワグマの生息実態-. 20 pp.

静岡県林業技術センター・静岡県環境森林部自然保護室・静岡県野生動物研究会(2005)静岡県ツキノワグマ生息調査報告書(1998~2002年度). 104 pp.

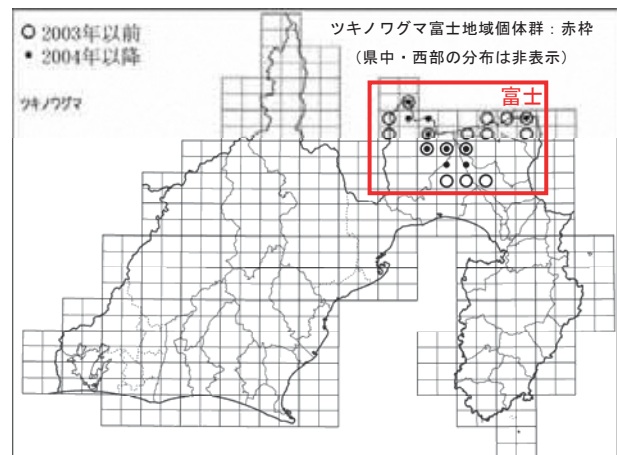
## 9. 標本

静岡市葵区産: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(大場孝裕)



静岡市葵区田代二軒小屋 2015年7月15日 三宅 隆



## ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912

ヒナコウモリ科 Vespertilionidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード11

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

前腕長 31~36 mm、頭胴長 39~55 mm、尾長 31~41 mm、体重 4~8 g。体毛は黒褐~茶褐色で背面の先端は金属光沢を帯びる個体もある。国内では4種または4亜種(エゾ、シナノ、オゼ、フジホオヒゲコウモリ)に分類する意見もある。類似種のクロホオヒゲコウモリと比較して腿間膜の血管走行線は「く」の字状。日中のねぐらは主に樹木の樹皮下や幹の割れ目を利用するが、隧道などの人工物も利用する。再捕獲による生存記録は5年が知られている。

### 2. 分布

本州及び四国に分布する。静岡県は主たる生息分布の南限に当たる。県内では富士山(富士宮市、御殿場市、小山町)及び南アルプス(静岡市、浜松市、川根本町)で確認されている。伊豆地域での確認はない。

### 3. 生息環境

標高 500~600 m 以上の常緑広葉樹林帯から標高約 2,000 m の常緑針葉樹林帯で広く確認され、出産哺育は標高約 700~2,200 m の範囲で確認された。主として広葉樹・針葉樹の混交林、特に天然林に依存して生息するようである。越冬期は標高約 500 m の隧道を利用していた。

### 4. 生息状況

今回の調査でも伊豆地域では確認されず、活動期の主な生息地は南アルプス及び富士山の森林地帯のみであった。一部はクロホオヒゲコウモリと同じ場所で確認された。さらに2007年7月10日に川根本町の隧道で標識されたオス個体が、同所において2014年11月8日に再捕獲され、約7年4カ月の生存記録がえられた。

### 5. 減少の主要因と脅威

減少の主要因は不明(99)であるが、比較的天然林が残る地域で確認されていることから、良好な森林の指標種になると考えられ、森林の伐採によるねぐらの消失(11)が脅威になると推察される。

### 6. 保護対策

本種における具体的な保護対策は知られていない。今後は県内の生息場所把握のための調査などを行い、特に伊豆地域の情報を収集する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

佐藤顕義・勝田節子・山本輝正(2011)南アルプス地域におけるヒメホオヒゲコウモリの分布とねぐら利用. 森林野生動物研究会誌, 36: 1-7

佐藤顕義・三宅 隆・佐々木彰央・高山壽彦(2014)標識5年後に再捕獲されたヒメホオヒゲコウモリ. 東海自然誌, (7): 31-33

佐藤顕義・勝田節子・三宅 隆・大場孝裕・山本輝正・小長谷尚弘・高山壽彦・佐々木彰央・藤井直紀・鳥居春己(2012)静岡県中西部のコウモリ類. 東海自然誌, (5): 51-68

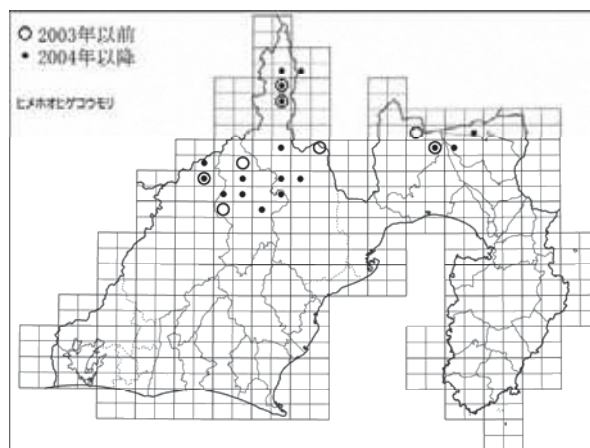
### 9. 標本

静岡市葵区田代産 剥製♂♀: ふじのくに地球環境史ミュージアム

(佐藤顕義・三宅 隆)



静岡市葵区田代 2012年7月15日 三宅 隆



# ハタネズミ *Microtus montebelli* (Milne-Edwards, 1872)

ネズミ科 Muridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 9.5~13.6 cm、尾長 2.9~5.0 cm、体重 22~62 g。  
背面の毛色は茶色または灰黄赤色で、腹面は灰白色となる。通常春と秋に繁殖期があり、1回の出産で3~8頭の子どもを産み、直後に再び妊娠し、繁殖期に2~4回出産する。このため、条件がよいと個体数は急速に増える。捕食者はイタチ、キツネ、ヘビなどである。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州、佐渡島、能登島に分布する。鳥居(1989)によると、県内では伊豆地域、富士地域の多数の場所で捕獲により確認されているほか、南アルプス地域や遠州灘海岸付近で記録がある。

## 3. 生息環境

陽あたりのよい伐採地や造林地、牧草地、高山のハイマツ帯、河川敷や田畑などの地表から地中約50 cmの間に、網目状の巣穴を掘り生活している。草食性で、秋になると巣穴に食料を貯える。

## 4. 生息状況

過去には時々大発生が見られ、イネ、サツマイモなどの根菜、造林木や果樹の樹皮はぎ被害を引き起こしていた。1960年から1970年頃には、年間数千haの造林地被害が発生していたが、2006年以降は造林地における被害報告はない。2003年以前に実施したレッドデータブック作成のための調査では3ヶ所でしか確認されておらず、生息に適した環境での調査でも本種が捕獲できない場所が多かった。2004年以降の調査では1頭も捕獲できず、また生息情報もえられなかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種が好む草地的環境の減少(16)が主要な要因として考えられるが、残存する草地的環境でも本種の確認が難しくなっていることから、別の要因(99)が影響している可能性がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県環境影響評価条例に基づく環境アセスメントの調査結果など(未捕獲も含めて)の記録を有効に利用することが望まれる。2014年頃から県中・西部でスズタケの一斉開花が確認されており、結実が本種の増加に寄与する可能性もある。

## 8. 主な文献

鳥居春己(1989) 静岡県の哺乳類. 第一法規出版, 東京, 231 pp.

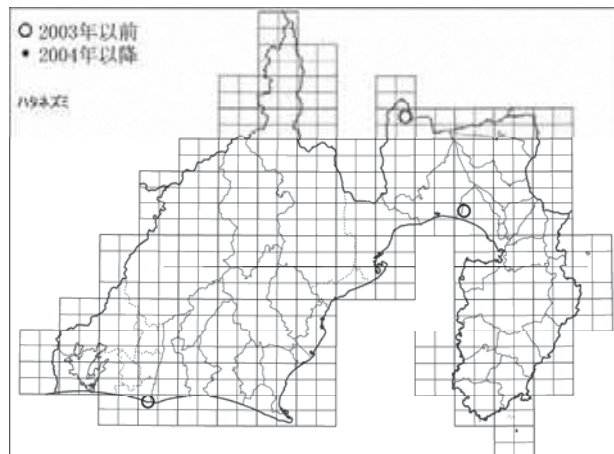
三宅 隆(2005) ハタネズミ. 静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編, 静岡県の哺乳類【資料編】, p. 82. 同会, 静岡.

## 9. 標本

富士宮市産：ふじのくに地球環境史ミュージアム



富士宮市産 1983年12月8日 石川 均



(大場孝裕)



静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

頭胴長 18~20 cm、尾長 15~17 cm、体重 210~310 g。夏毛の一部は赤褐色、冬毛は灰褐色になり、耳の先の毛が伸びる。腹は純白である。昼行性。樹上に木の枝や樹皮で、鳥のような球形の巣を作る。食性は種子、果実など植物食だが、昆虫や野鳥の卵なども食べる。春から夏に 1~2 回出産する。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国に分布する。西日本には少なく、九州では 1970 年代以降確実な生息情報がない。県内ではアカマツ林の残る県立森林公園（浜松市浜北区）などの低地帯から、南アルプスのトウヒ林などの亜高山帯まで広く分布する。

### 3. 生息環境

アカマツ（マツ属）やトウヒ（トウヒ属）は、枝が輪生（同じ高さから四方八方に伸びる）し、横方向に伸びる。本種にとって巣を設けやすく、隣り合う木の枝を伝って樹上の移動もしやすい。さらに、球果は食物となる。他の樹種での営巣や種子などの採食も行われるが、県立森林公園では、アカマツを好んで利用する行動が観察された。

### 4. 生息状況

2003 年以前、2004 年以降ともに県内の低地帯から亜高山帯で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

かつては広く存在したマツ林がマツ材線虫病により減少した影響が大きい。マツ科の樹木が多い森林の減少は、本種にとって生息環境の悪化と考えられる（54）。伊豆半島東海岸では、本種より大型のクリハラリスが野生化し、競合も危惧される（56-1）。浜松市で野生化しているクリハラリスの分布拡大は本種の生息に影響するおそれがある。

### 6. 保護対策

1994 年以降狩猟鳥獣から除外されている。県立森林公園など一部のマツ林は薬剤散布などにより保全を図っている。

### 7. 特記事項

伊豆市や浜松市天竜区などでは、本種がシイタケ栽培用のほだ木をかじり剥いてしまう被害が発生する。

### 8. 主な文献

鳥居春己（1989）静岡県の哺乳類。第一法規出版，東京，231 pp.

大場孝裕（2005）ニホンリス。静岡県自然環境調査委員会哺乳類部会 編，静岡県の哺乳類【資料編】，pp.69-71. 同会，静岡。

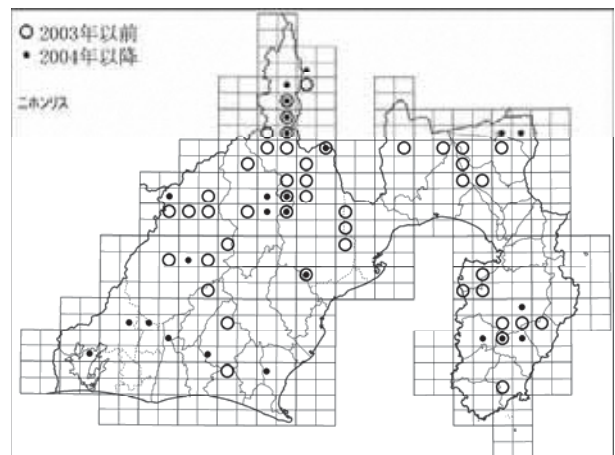
鈴木 圭・鳥居春己（2016）静岡県浜松市における *Callosciurus* 属外来リスの分布拡大。哺乳類科学，56(2)：199-205

### 9. 標本

静岡県産：ふじのくに地球環境史ミュージアム



富士市大淵 2007年7月20日 小泉金次



(大場孝裕)

## 2. 鳥類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

鳥類が他の生物と大きく異なる点は強力な飛翔力を持つことである。県境はもとより海を越えて往来するものの方がむしろ多い。彼らの生息は県内の状況だけにとどまらず、国内の他地域のほか、繁殖地のシベリアや越冬地の東南アジアなどの気象、経済活動、食文化などさまざまな因子に影響されている。このことは、グローバルな時代に生きる私たち人の生存が身の回りのことだけでは済まないこととまったく同じで、“Today birds, tomorrow men”といわれるゆえんである。

静岡県内における在来種鳥類は、22目72科403種である。これは日本産鳥類633種（日本鳥学会、2012）のほぼ63.7%に及ぶ。内訳はキジ目4、カモ目35、カイツブリ目5、ネッタイチョウ目2、ハト目3、アビ目4、ミズナギドリ目18、コウノトリ目2、カツオドリ目7、ペリカン目19、ツル目13、カッコウ目4、ヨタカ目1、アマツバメ目3、チドリ目105、タカ目19、フクロウ目6、サイチョウ目1、ブッポウソウ目5、キツツキ目5、ハヤブサ目4、スズメ目138である。一県の生息種数としては全国屈指である。本県の鳥類相が豊かである理由としては、次のことが考えられる。

- ・ 海拔0 mから富士山・南アルプスの3,000 m級の山岳に及ぶ日本一の標高差があること。
- ・ 多数の湖沼・河川及び内湾や長い海岸線など豊富な水系に恵まれていること。
- ・ 四季を通じて温暖な上に本州の中央部にあり夏鳥・冬鳥双方の生息に適していること。
- ・ 本州中央部の立地はまた、繁殖・越冬以外の多種の渡り鳥の中継地に当たっていること。

このような地理的に恵まれた条件は県全域に遍在している訳ではない。たとえば1,000 m級以上のブナあるいはトウヒなどを中心とした自然林は中部奥、富士山、伊豆の山岳地帯に多いが、サンコウチョウ、オオタカなどの主な生息地である里山的環境は西部から中部に広がっているし、シギやチドリ類などが依存する広い湿地や内陸水系は圧倒的に西部地域に偏るなどの地域差がある。しかし、各種のカテゴリーは、極力県全体の視野から判断するように努めた。

### (2) 調査の概要

部会員と調査員が現地調査及び資料調査を実施した。現地調査は2009～2016年の8年間と長い期間に見えるが、当初の数年は予算も調査体制も十分でない形でのスタートを余儀なくされた。えられた記録は限定されたものであったので、スタッフの個人的な調査記録の提供を受け、2017年には補足調査を実施した。現地調査は夜行性の種を対象とする夜間調査も実施した。しかし、東部・伊豆の一部に調査未実施地域が残った。資料調査として、スタッフの2007年以後の個人の研究、フィールドノートの資料の提供を受けた。現状の記録を2007年以後としたのは、「10年ひと昔」と言われているが、環境変化の著しく速い現在において10年を超えたものは「現在と比較すべき過去の記録」と判断したためである。なお、視認観測しにくい種については環境省が推進する標識調査のライセンスを持つ部会員・調査員の個人的な標識調査に依存した。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

静岡県レッドデータブック（2004）にリストアップされたものについては、現状の調査を実施しながら16種を取り上げてカテゴリーと現状との整合性の検討を行い、6種をランクアップ、3種をダウンした。また、リストアップされていなかった種から12種を新たに上げ、それ以後の状況及び今回の調査でえられた知見から判断し、6種をリストアップした。

本来の生息地以外への迷行や1980年以降の記録が1～2例のものは選定しなかった。また、人為的に外国から移入された「外来種」は繁殖定着歴の長短に関わらず選定対象外とした。

#### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は、前回(2004年)は72種、今回は78種で6種増加した。絶滅のおそれのある種の総数は、前回(2004)は44種で今回は52種である。内訳は絶滅危惧ⅠA類(CR)6種、絶滅危惧ⅠB類(EN)14種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)32種である。このうち水系に依存するチドリ目は18種34.6%と最も多く、猛禽類のタカ・ハヤブサ・フクロウ目の計11種21.2%と併せて55.8%と過半数を占めている。その他は準絶滅危惧14種、情報不足4種、要注目種8種である。

地図表示については保護の観点からイヌワシ、ブッポウソウ、ヤイロチョウは表示せず、その他必要な種は2次メッシュにとどめた。また、夏鳥は保護対象が繁殖地であることから渡り途中の記録は表示しなかった。例外として我国では夏鳥でありながら県内に繁殖地のないイイジマムシクイ、ウチヤマセンニュウを前回(2004)情報不足(DD)としたのは、ともに希少鳥類であり(前者は天然記念物でもある)、伊豆諸島で繁殖する個体群のすべてが県内を渡りの中継地とすると推定されつつ実態がほとんど知られていなかったからである。今回標識調査などで渡りの時期や中継地の環境が明らかになったので、中継地を表示するとともに絶滅危惧Ⅱ類(VU)にランクアップした。

#### (5) 減少の主要因と脅威

ひとくくりに言えば生息地の減少、生息環境の悪化ということになる。絶滅危惧種の最も多いチドリ目については生息基盤の湿地の減少、干潟の浚渫などによる餌場の消失、植生遷移、レジャーなどの人為的攪乱による繁殖阻害が従来からの脅威であるが、新たに誤食による弊害など、マイクロビーズの問題が加わった。その次に絶滅危惧種の多い猛禽類についても、必要とする広大な生活圏の開発やそれに伴う採餌対象生物の減少などが憂慮される。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

特に注目される該当種はない。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

長期的な視点に立った生息環境の保全や適正化が必要である。たとえばコアジサシの例では、天竜川中州の裸地環境を復元したケースでは、重機を使った嵩上げ造成をして好適環境を作り出しても、植生遷移の速度は速く数年で草に覆われさらに数年でヤナギの灌木林地になる。この造成からその後のメンテナンスまで民間のボランティアに支えられてきたが限度がある。行政あるいは当委員会が重点目標を集約し、管理者への啓発・要請にあたることも必要であろう。

#### (8) 文献(多くの種で引用した文献)

鳥類は生態の多様性があり科学機器の長足な進歩を伴って様々な分野で研究が進んでいる。幅広い文献を網羅するすべもないが、鳥類部会では参考文献ではなく「引用文献」に限って記すことにした。中でも多くの種で利用したものは以下のとおりここに記し、各種の記述では省いた。①は学名、分布に関して全種で利用した。②は詳細な食性や生態、③は計測値、食性、形態、生態、過去の繁殖分布など全般。④⑤は計測値、特徴、分布などを多くの種で利用した。これら以外の各文献の利用は各種の中に記載した。

① 日本鳥学会 編(2012) 日本鳥類目録 改訂第7版。日本鳥学会、兵庫、438 pp.

② 清棲幸保(1978) 増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ～Ⅲ。講談社、東京、1002+236 pp.

③ 清棲幸保(1966) 野鳥の事典。東京堂出版、東京、413 pp.

④ 真木広造・大西敏一・五百澤日丸(2014) 決定版日本の野鳥650。平凡社、東京、788 pp.

⑤ 叶内拓哉・阿部直哉・上田秀雄(2014) 山溪ハンディー図鑑7 新版日本の野鳥。山と溪谷社、東京、671 pp. (北川捷康)



# ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR) (要件-①②)変更コード9

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A類 (CR) ]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm。小型のシギ。成鳥夏羽は頭部から胸部が赤褐色になり、背面の羽縁も同色。冬羽は頭部から背面は灰色で下面は白い。幼鳥は成鳥冬羽に似るが、上面は黒褐色で羽縁は白っぽい。雌雄同色。先端が幅広いスプーン状の嘴が最大の特徴で、その部分を水中に入れて左右に振りながら開閉して小さな甲殻類やその幼生などを挟みとって食す。世界的な希少種で推定個体数は多く見積もっても 400 羽、少なく見積もると 250 羽程度とされている。旅鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

国外ではシベリア北東端のチュコト半島からカムチャツカ北部の限られた地域の海岸部だけに繁殖し、中国南部からインドシナにかけての沿岸部で越冬する。国内では旅鳥として全国で記録はあるが、個体数は極めて少ない。県内では 2000 年までに伊豆から東・中・西部までごく少数ながら記録があった。

## 3. 生息環境

静岡県を含めて国内では渡り期中継地として砂浜海岸とそれに続く河口、干潟を利用している。

## 4. 生息状況

1960 年代から 2000 年までは伊東大川河口(酒井)、富士川河口(神谷)、菊川河口(北川)、太田川河口(宮本)で各 1 例、御前崎海岸で 3 例(坂本, 大石, 伊久美)の記録があり、ほとんどが 1 羽であったが 1985 年の御前崎では 6 羽を観測(北川)した。しかし、2001 年以降は 2004 年の太田川河口及びその隣接地(今井)での生息記録しかない。いずれも秋の渡り期の 8~10 月の記録である。単独あるいはトウネンなどの小型のシギ類の小群に混じっていることが多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

重要な渡りの中継地である静岡県内の砂浜の海岸や河口部は、一年中レジャー圧を受け続けている(71)。海岸砂浜の痩せ細り(25)の中で、釣り(夜の釣り人口も昼に劣らない)、サーフィン、パラグライダー、四輪駆動車などの往来により、餌場と休眠場所の消失(71)による影響が今後とも続く。

## 6. 保護対策

生息環境創出として養浜に期待したいが、急深な駿河湾・遠州灘の海底構造では不可能と思われる。

## 7. 特記事項

何千 km という長距離の移動をする種にとって最も命に危険をもたらすのは渡りである。安全な渡りの中継地の意味は、天候の急変(海の藻屑)、膨大なエネルギーの補給、天敵(人のレジャーが最大の脅威)を避けて疲れをいやす休眠場所の確保などの困難をクリアしたものだけが、次の繁殖期に子孫を残せるのである。また、採餌に関してマイクロプラスチックを誤飲する問題もある。なお、東南アジアの越冬地では、かすみ網で大量のシギ類を密猟しており、本種が 1 シーズンに 10 羽も捕獲されたとの情報もある。

種の保存法に基づく国内希少野生動物種(平成 29 年)。

## 8. 主な文献

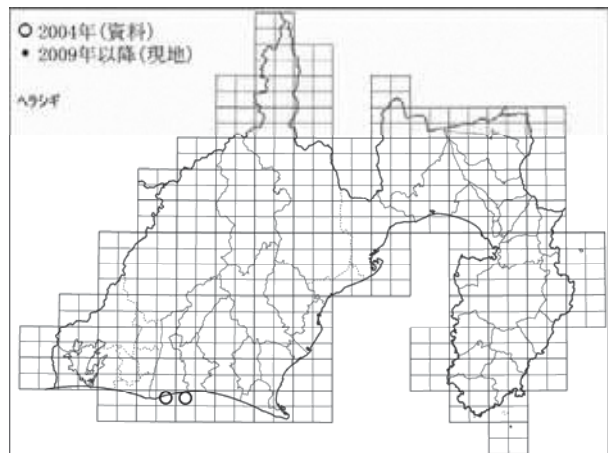
北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料。遠州の自然, (41): 25-29

静岡県の鳥編集委員会(1998) 静岡県の鳥類, pp. 85. 静岡県環境部自然保護課, 静岡。

富田 宏・柏木 実 ラムサール・ネットワーク日本(2014) 絶滅の危機! ヘラシギを救うために パードリサーチ水鳥通信 4: 4 (北川捷康)



太田川河口 2004年9月25日 北川捷康



# カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1836)

ウミスズメ科 Alcidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類(VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 24 cm。ウミスズメ *S. antiquus* に似るが、本種は夏羽には頭部に 3~5 cm ほどの冠羽がある。ウミスズメ類のなかでは唯一暖海域で繁殖する。雌雄同色。つがいあるいは小群で行動することが多いが、時には数十羽の群れを形成する。潜水時には半開きの翼を空飛ぶ鳥のように羽ばたかせて推進力を得、小魚などを捕食する。留鳥(対象:繁殖地)。

## 2. 分布

分布は日本周辺に限定され、国外では韓国全羅南道九屈諸島での繁殖記録がある。国内の繁殖地の北限は石川県七ツ島、南限が伊豆諸島の鳥島である。主な繁殖地は宮崎県門川町枇榔島や伊豆諸島などである。県内では伊豆下田沖の神子元島で繁殖する。繁殖後は伊豆半島から天竜川にかけての沿岸域で観察される。

## 3. 生息環境

沿岸域や離島の波の届かない崖穴や岩の隙間を利用して繁殖する。親は孵化後 1~2 日の雛と共に巣を離れ、次の繁殖期まで洋上生活を続ける。

## 4. 生息状況

1983 年以前には下田市沖の神子元島で繁殖していたが、それ以後の繁殖記録は途絶えていた。(公財)日本野鳥の会(東京)が 2010 年から神子元島の繁殖の復活に取り組み、試行錯誤の末に 2016 年に人工巣による繁殖に成功した。この年は人工巣 3 巣、続く 17 年は同 2 巣で巣立ちに成功している。

非繁殖期の動向は、かねて駿河湾・相模湾で冬期に観察されており、それらは伊豆諸島の繁殖群と考えられてきた。しかし、最近のジオロケータ装着調査により、福岡・宮崎・高知県で繁殖期に装着された個体が、5 月頃に関東地方、7~9 月には北海道の沿岸で過ごしていることが判明した。天竜川河口~御前崎にかけて 3 月に 4~30 羽がしばしば観察されている(今井敦氏私信)。繁殖に入る直前の伊豆諸島の個体群と推測される。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内唯一の繁殖地の神子元島(61)は無人島だが、多くの磯釣り客を渡船が運んでいる(51)。他の繁殖地では、ネズミの侵入により激減した例やカラス類による捕食が知られている。神子元島の自動カメラに、巣をのぞき込むハシブトガラスが映り(52-4)、離島でも残飯などによる天敵の誘引が確認された。また、餌の魚を追って時には水深 40 m まで潜水するといわれ、この時に刺し網に掛かって命を落とす(41)ケースは海鳥全体の宿命であろうか。海難事故で重油流出による海洋汚染(71)も大きな脅威である。

## 6. 保護対策

(公財)日本野鳥の会の保全プロジェクト推進室が 2009 年から海洋環境保全のシンボルとして本種の調査・保護・啓発活動に取り組んでいる。本県としてもこの活動に協力するべきであろう。

## 7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物(昭和 50 年)。

## 8. 主な文献

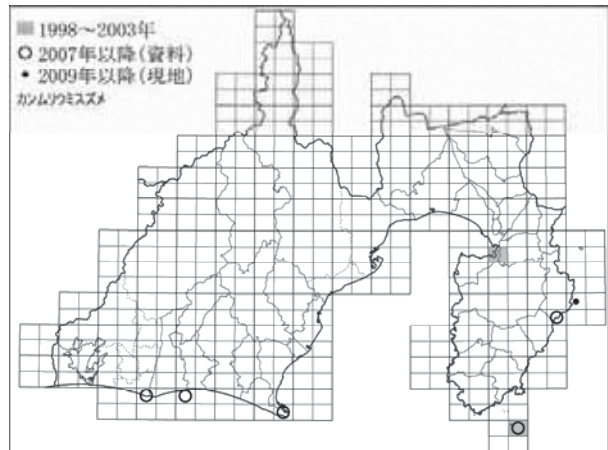
(公財)日本野鳥の会(2016) Annual Report 2015 カンムリウミスズメ保護事業活動報告書: 2-5

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



©2019 Wild Bird Society of Japan  
三宅島三本岳付近 2008年4月29日 日本野鳥の会





# イヌワシ *Aquila chrysaetos* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

大型の猛禽類で全長オス約 81 cm、メス約 89 cm である。翼開長 167~213 cm。成鳥はほぼ全身が暗褐色で後頭部から後頸が金色を帯びる。幼鳥はほぼ黒褐色であり、飛翔時に翼の風切基部と尾羽の基部の大きな白色部が明瞭である。飛翔力が大きく、つがいごとに広い行動圏を持ち、留鳥として周年同じ場所に生息する。ノウサギ、シカ、カモシカ、テンなどの哺乳類のほか、ヤマドリなどの鳥類やヘビ類も捕食する。繁殖期は 12 月からの求愛に始まり、1~2 月産卵、4~5 月育雛を経て、6 月頃が巣立ちである。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では北半球に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州の山岳地域で生息が確認されており、四国をのぞく地域で繁殖が確認されている。県内では天竜川、大井川、安倍川の各河川中・上流域、富士山周辺、伊豆などで観察例があるが、東部から伊豆では一時的な記録が多い。

## 3. 生息環境

山岳や高原地域が主な生息環境である。人為的影響を受けやすく、外敵の近づけない急峻な地形の場所が生息地となっていることが多い。巣をつくることのできる岩場や大木、豊富な餌量と適当な狩場 (草地、伐採地、疎林などのギャップ、深い谷など) の存在が生息環境の条件と考えられる。

## 4. 生息状況

以前より長野県、山梨県に接する県境周辺のほか、東部から伊豆では、少数の観察例があった。1990 年代後半頃より南アルプス山系を中心に観察例が増え、つがいと思われるものも複数ヶ所で観察されている。繁殖については、日本イヌワシ研究会の調査などによるごく少数の確認例はあるが、県内の生息情報は依然として部分的、断片的である。

## 5. 減少の主要因と脅威

全国的な繁殖成功率低下の原因として挙げられている餌不足 (71)、無作為な開発 (11) や林業の低迷 (54)、狩場の減少 (53) は、本県においても該当すると考えられる。大型猛禽類の生息に最も重要とされる環境要素は餌生物である。県内の森林は生物相の貧弱なスギ、ヒノキなどの人工林が多くを占めていることから、餌不足が減少の主要因として挙げられる。

## 6. 保護対策

森林の多様性を高めるための低密度植栽、広葉樹林化などのあらゆる施策が、生態系の底辺を担う生物相を豊かにし、ひいては高次消費者の大型猛禽類の長期的な保護対策につながるものと考えられる。

## 7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 40 年)。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成 5 年)。

## 8. 主な文献

近藤多美子・山田律雄 (2012) 静岡地区におけるイヌワシと調査のあゆみ. *Aquila chrysaetos*, 23:24: 48-50

日本イヌワシ研究会 (2017) 全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告 (1981-2015). *Aquila chrysaetos*, 26: 1-8 (新井 真・近藤多美子)



静岡県 2014年10月20日 峰岸郁生



## ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* (Linnaeus, 1766)

ブッポウソウ科 Coraciidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) ]

### 1. 種の解説

全長約 30 cm。嘴は幅広く赤い。頭部は黒色で他の部分は青緑色をしている。翼の初列風切羽に大きな白斑があり、飛翔時によく目立つ。雌雄同色。繁殖期には濁った声で「ゲッ ゲゲゲ・・」などと賑やかに鳴く。給餌期の餌内容は夜行性を含む甲虫類が多く、日中にはトンボ類、バッタ類、セミ類なども与える。育雛中の雛には餌の他に陶器片、小石、貝殻などを与えることがあり、消化を助ける「碾き臼（ひきうす）」と考えられている。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではヒマラヤから中国北東地方、ロシア極東南部、朝鮮半島で繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では本州、四国、九州に夏鳥として渡来する。県内では、2001年以降の繁殖は天竜川水系のみである。

### 3. 生息環境

平地の社寺林、低山・山地の林が従来の生息環境であったが、近年は山間部を流れる大河の橋梁付近のみを生息環境とするようになった。

### 4. 生息状況

かつては旧天竜市二俣町、山東、相津など市街地に接した社寺林など及び水窪町のスーパー林道付近、寸又峡付近などで繁殖していたが、2000年以降は営巣場所が2ヶ所に限られ、その後は1ペアという危機的な状況に追い込まれた。さらに、2015年以降に飛来はあったが、繁殖はなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内最後となった営巣場所は橋のアーチ下部に開いたハンドホールであり、ある年にはオシドリとアオバズクとともに、隣接する3個のハンドホールの中に繁殖した。このことから樹洞を繁殖に利用する種にとっていかに住宅難であるかが読み取れる。樹洞のある大径木の減少（11）、他生物との樹洞などの利用の競合（56-2）、餌になる昆虫の減少（71）などのほか、アオダイショウによる卵・ヒナの捕食（52-4）や写真撮影のプレッシャー（71）による繁殖放棄と判断される状況まで生じるようになっていた。

### 6. 保護対策

営巣場所の確保。繁殖に利用している橋梁などの改修及び付近の工事は繁殖期を避けること。無知な写真撮影者へのマナーの啓発などが必要である。

### 7. 特記事項

中国地域では電柱などにかけた保護用巣箱の利用が多いし、長野県では天然記念物及び天竜村の「村の鳥」指定により、村民挙げての監視が写真撮影者の無茶な接近から守るなど、成果をあげている。しかし県内では筆者らが橋の欄干や林縁の樹木に継続的に巣箱をかけているがまだ成功例はない。ただ、標識調査により鳥取県と天竜村との個体群間の交流が明らかになったこと、県内複数ヶ所でペアが観察されていることなどから、新たな方式で繁殖復活を目指している。

### 8. 主な文献

公益財団法人 山階鳥類研究所（2018）IV-2-3-2 その他の希な回収記録（1）ブッポウソウ. 平成29年度 環境省委託業務 2016年 鳥類標識調査報告書, pp. 26-27. 同研究所, 我孫子市.

（北川捷康）



©2019 K.Kitagawa  
浜松市天竜区春野町 2003年6月5日 北川捷康



### 1. 種の解説

全長約 18.5 cm。体重 25～33 g。オスは頭頂から後頭は青灰色で額からの過眼線は黒い。背から尾の上面は赤褐色で黒褐色横斑がある。喉、頬、体下面は白く、脇に褐色の横斑のある個体もある。嘴は黒く、他のモズよりも太い。脚は灰黒色。メスは頭部が灰褐色。過眼線が不明瞭で特に目先は淡い。側胸から脇に褐色の横斑がある。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではウスリー、中国東北部、朝鮮半島に渡来し繁殖する。冬期は中国南部、インドシナ半島、マレー半島、フィリピン、インドネシアに渡る。国内では本州中部から東北地方に夏鳥として渡来し、繁殖する。県内では富士宮市朝霧高原ほか数ヶ所で観察記録がある。

### 3. 生息環境

低地から山地の針広混交林・アカマツ林・落葉広葉樹林・雑木林などの林縁部、果樹園、クワ畑などで繁殖する。モズよりも樹木の多い場所を好み、高枝に営巣する傾向がある。新潟県から北の日本海側では、クロマツの防風林の背後に畑地が広がるような環境で多くの繁殖が確認されている。

### 4. 生息状況

県内では富士宮市朝霧高原で 1986 年まで繁殖期に生息が確認されていた。また、そのほか繁殖期の記録が数例あるが、1987 年以降は観察記録がない。全国的には、1978 年に実施された自然環境保全基礎調査で生息確認された場所の大部分が 1998 年には記録できなくなり、繁殖メッシュ数は 20 から 2 へ、繁殖の可能性のあるメッシュ数は 8 から 1 へ、生息を確認したが繁殖は不明というメッシュ数は 20 から 7 へと激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

富士宮市朝霧高原の生息環境に大きな変化は見られない。越冬地や渡り中継地の環境変化についての研究や分析はなく、減少の原因は不明である (99)。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

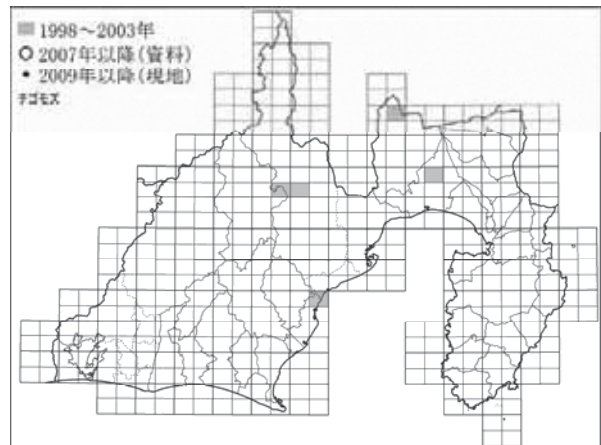
### 8. 主な文献

- 山岸 哲 (1997) チゴモズ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科第 4 巻 鳥類 II, p. 88. 平凡社, 東京.
- 影山秀雄 (2004) チゴモズ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック (動物編), p. 56. 羽衣出版, 静岡.
- 植田睦之 (2005) 全国的に減少しているモズたち. BIRDER, 19(10): 32-37
- 渡辺健三・渡辺喜美恵 (2007) 広島県内におけるチゴモズの繁殖記録. Strix, 25: 151-167
- 日本鳥学会編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

(渡邊修治)



山形県酒田市遊佐町 2016年6月25日 渡邊修治





### 1. 種の解説

全長 17~20 cm。体重はオス 27~34 g、メス 28~37 g。頭から尾羽までの上面は赤褐色。翼は黒褐色で羽縁は赤褐色。額、眉斑、喉、頬は白色。太くて黒い過眼線がある。胸以下の下面は黄白色で、側胸から脇は淡い橙黄色。嘴と脚は黒色。性的二型は顕著ではないが、オスは上面の赤褐色がより鮮やかで、額の白帯の幅が広い。メスには脇に褐色波状斑を持つものがある。夏鳥(対象:繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではロシアのチュコト半島、カムチャツカ、アルタイ、ウスリーからモンゴル、中国東北部、朝鮮半島などで繁殖し、インド、中国南部、東南アジアで越冬する。国内では夏鳥として北海道から本州、四国に渡来するが、分布はやや局地的である。県内では富士山麓の朝霧高原や御殿場高原に夏鳥として渡来する。

### 3. 生息環境

低地から山地の落葉広葉樹林の林縁、二次林、農耕地や草地の縁の藪、果樹園など、低木の疎林や藪の多い所を好む。富士山麓では樹高の低い落葉広葉樹林に囲まれた草地や牧草地を好み、密生した枝やノイバラなどの藪に巣を架ける。

### 4. 生息状況

朝霧高原では2000年には山梨県側を含めて15つがいの繁殖を確認したが、2017年には両県でそれぞれ1つがいの計2つがいの繁殖を確認したに過ぎず、激減している。生息に適した環境と思われる東富士演習場周辺でも生息は確認できていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原ではゴルフ場・オートキャンプ場・フードバレーなどの為の土地造成(21、22、23)があり、1つがいは観察者・撮影者による迫害(71)が原因と考えられる。しかし、他のつがいでは原因不明である。

### 6. 保護対策

渡り性のモズ類は繁殖地に対する執着が強く、一度繁殖地を失うと復活させることはきわめて困難である。現在分かっている繁殖地の環境が現状変更されることのないよう監視する必要がある。また、越冬地や渡り中継地の環境を調査する必要がある。

### 7. 特記事項

フードバレーの開発に当たっては環境調査が行われ、アカモズの繁殖が確認された。しかし、周辺に繁殖適地があるという理由で開発は可能であると報告された。渡り性のモズは執着性が強いという認識に欠ける判断であった。有識者の意見を求める体制を構築することが必要である。

### 8. 主な文献

山岸 哲(1997) アカモズ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第4巻 鳥類II, p. 88. 平凡社, 東京.

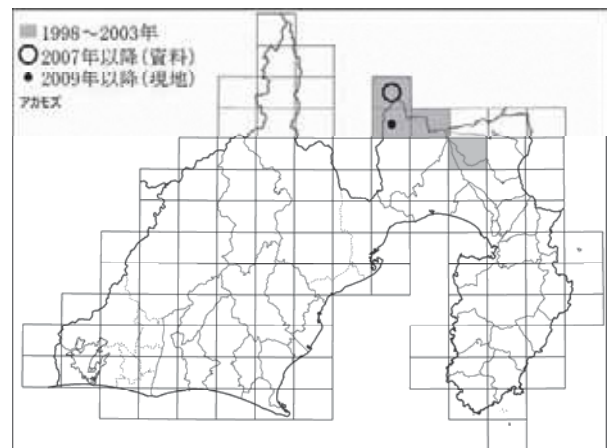
植田睦之(2005) 全国的に減少しているモズたち. BIRDER, 19(10): 32-37

高木昌興(2014) アカモズ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編, レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類, pp. 118-119. ぎょうせい, 東京.

(渡邊修治)



富士宮市人穴 2009年6月1日 渡邊修治



# サンカノゴイ *Botaurus stellaris* (Linnaeus, 1758)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 IB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

全長約 70~80 cm。中型のサギ。全身バフ色で頭頂と腮線は黒褐色、背面は黒褐色の斑が密にある。冬期に、生息する枯れたヨシ原でのカムフラージュ効果がある。雌雄ほぼ同色。生息環境と体色が似ているヨシゴイは、小さいこと、上面の黒褐色の密な斑がないこと、飛翔時に風切羽が黒いことなどで区別できる。

採餌は主として早朝と夕暮れ時に行うが、昼間でも行なう。魚類をはじめ、両生類、齧歯類、水生昆虫などを餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

## 2. 分布

国外では2亜種のうちの1亜種はアフリカで繁殖する。日本に分布するもう1亜種はヨーロッパでは分散しているが、ユーラシアの中北部を幅広く通ってオホーツク海沿岸までとサハラで繁殖する。温帯から冷温帯南部、北アフリカ、南アフリカで繁殖する。ユーラシアの個体群は、非繁殖期にアジアのやや南部に渡る。国内では北海道及び本州の東北から近畿にかけての一部で繁殖し、その他の地域では冬鳥である。県内では伊豆、東・中・西部に少数の分布記録がある。

## 3. 生息環境

大きな河川の河口部に近い河川敷や、低地の池沼、養鰻場跡地などの広いヨシ原に生息する。

## 4. 生息状況

2000年以前には例数はきわめて少ないながら伊豆、東・中・西部の各地に観察例があった。生態と保護色とから発見しにくい傾向があるが、1シーズンだけの観察例が多く、個体数は極めて少ないと思われる。2007~2017年現在、舞阪町の旧養鰻池で継続して越冬が記録されており、年により1~3羽生息していたとの情報もある。早い年には10月後半に飛来し、4月に渡去する。なお、2017年には静岡市駿河区で1羽が観察された。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息には魚類や両生類などの餌の豊富な水辺に接した広いヨシ原などの抽水植物群落が必要である。埋め立て(15-1)や過剰な河川改修工事による水辺の植生の破壊(13)が大きな脅威となる。現在10年以上継続して越冬している旧養鰻池の環境は水量とアシ原は好ましい状況であるが、周辺が埋め立て(12)やソーラーパネル設置の蚕食が続く中で、存続は不透明である。

## 6. 保護対策

限定された生息地が私有地であることと周辺の開発状況から、適切な対策は考えられない。

## 7. 特記事項

特になし。

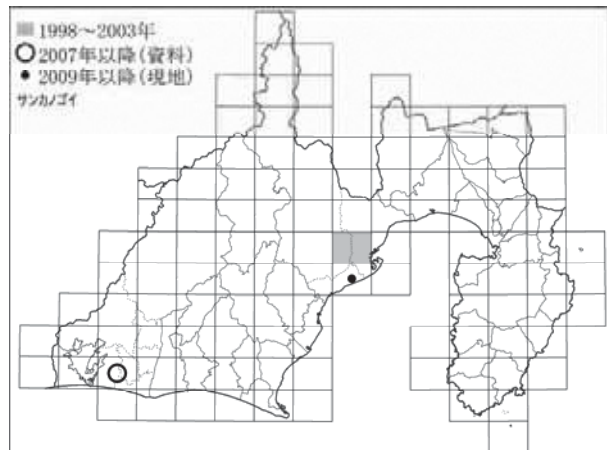
## 8. 主な文献

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



静岡市駿河区下川原 2017年11月20日 小岸順子





### 1. 種の解説

全長約 37 cm。日本産サギ類中最も小さい。全身淡茶褐色でほぼ雌雄同色であるが、オスは頭上黒く、メスには喉から腹にかけて数本の褐色縦斑がある。飛翔時には風切羽の黒色が目立つ。小魚類を主食とするほか、カエル類やエビ類なども捕食する。ヨシの茎を足指でつかみながら伝い歩く。外敵の接近には、嘴を真上に向け首を伸ばしてじっとして、ヨシに紛れる擬態をする。繁殖期には夜間「オーオー」という声で鳴く。夏鳥（対象：繁殖地）。



磐田市大池 1993年10月14日 中村裕志

### 2. 分布

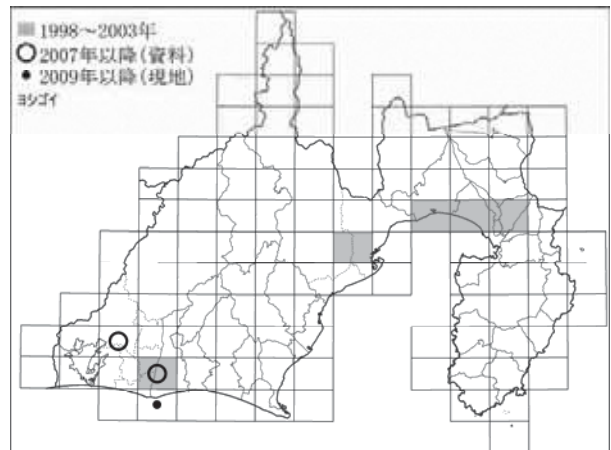
国外では東アジアからインドにかけての南アジアに分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、琉球列島以南で越冬する。県内では磐田市大池などの広いヨシ原のある湿地に分布する。

### 3. 生息環境

河川、池沼周辺や休耕田などのヨシ、マコモ、ガマなど広い抽水植物に恵まれた環境に生息、繁殖する。

### 4. 生息状況

もともと個体数は多くないものの、かつては各地の広い抽水植物に恵まれた湿地には生息していた。しかし、浮島ヶ原では開発によるヨシ原の減少が続き、磐田市大池では湛水防除工事の浚渫に絡むヨシ原の広い刈り取りや除去など各地でヨシ原の減少傾向が続いており、現在は多くの地域で生息しなくなるなど生息域が限られ、個体数の減少も憂慮されている。現在、繁殖期に繁殖していると思われる複数個体が観察された（2017.6 中村裕志氏私信）のは磐田市大池だけになったようである。



### 5. 減少の主要因と脅威

国内的には河川、池沼、水田などの埋め立て、整備、改修など（12、13）によるヨシ原など生息環境の消失、減少が最大の要因であり、それらの環境変化の状況が引続き進行するであろうと予測される。次いで餌の小魚などの供給量の問題もある。磐田市大池では、小鳥のすり餌の原料としてモツゴやタイリクバラタナゴを多量に採捕していた。そのこと自体は問題にならない程度であったが、突然オオクチバスが多数みられるようになった（71）。その後オオクチバスは見られなくなったが、小魚採捕者が来ることなくなり、本種の採餌行動の観察機会も極端に減った。稲の生育期を除く一年の大半を閉鎖的な「ため池状態」としたことによる水質の悪化の影響が大きいと思われる。なお、国外では越冬地における食材としての乱獲（41）の影響があると思われる。

### 6. 保護対策

広いヨシ原などのある湿地の保存、水質管理が基本である。本種の餌となる小魚を大量に捕食するオオクチバスの生息などの生態系管理も必要である。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

清棲幸保（1978）ヨシゴイ．増補改訂版 日本鳥類大図鑑 III，pp. 936-937．講談社，東京．

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，（41）： 25-29

（北川捷康）

### 1. 種の解説

全長約 50 cm。全体に褐色であるが、上面は首の辺りに赤みがあり、他の部分は暗色がかっている。雌雄同色。夏鳥として4月中・下旬頃に渡来し、夕闇に包まれるころから一音ずつ区切って「ポッ ポッ ポッ・・・」と低い声で数声から 10 数声続けて鳴く。さえずる時間帯からは夜行性の傾向があるが、繁殖地など暗く深い林中では昼間に採餌する。暗い林の中では保護色になる上、害敵の接近には嘴を上に向けて首を伸ばし、じっとして木の枝に擬態する。サワガニ、魚類、水生昆虫、ミミズなどを餌にする。夏鳥（対象：繁殖地）。



伊東市八幡野 2017年4月21日 酒井洋平

### 2. 分布

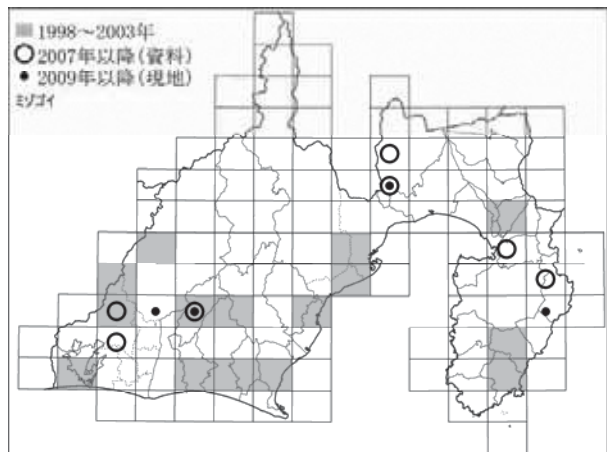
国外では中国南部、台湾、フィリピン等で越冬する。国内では本州、四国、九州で繁殖し、県内では伊豆・東部・中部にはきわめて少なく、西部地域に偏っている。繁殖地として知られているのは日本だけである。

### 3. 生息環境

丘陵や低山の、沢のあるよく繁った広葉樹林などの暗い森林を好む。サギ類の中では林中に生息する特異な種である。

### 4. 生息状況

1980年頃までは県西部地域においては平地の屋敷林（たとえば旧浜北市東原）や社寺林（たとえば旧浜松市広沢町）などにも広く繁殖していたが、その後10年ほどの間に平地での繁殖はほとんど見られなくなり、2000年頃には丘陵部や低山のごく限られた場所でのしか生息が認められなくなった。急激な減少状況は注目に値する。伊豆・東部・中部においては、もともと生息数は少なかったが、現在ではごく稀な存在となっている。



### 5. 減少の主要因と脅威

国内的には平地では市街化の進行（23）、水路の改修、農耕地の減少などがあげられ、低山では森林伐採（11）、交通網の拡大（24）、砂防堰（13）の建設などが挙げられる。国外では越冬地のフィリピンなどの森林伐採（11）による生息地の縮小も打撃となっていると考えられる。

### 6. 保護対策

日本でしか繁殖していない事実から、主な繁殖場所である低山は開発されやすいので、大規模開発事業の事前調査で繁殖が認められた場合には、保全対策に十分配慮されなければならない。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

高野伸二 編（1985）山溪カラー名鑑 日本の野鳥，山と溪谷社，東京，591 pp.

（北川捷康）

# ササゴイ *Butorides striata* (Linnaeus, 1758)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B類(EN)(要件①②)変更コード7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 52 cm。雌雄同色。頭部は黒く同色の冠羽が後頸まで伸びている。翼を含めて体のほぼ全体が青灰色をしており、雨覆羽から風切羽が細い白線で縁どられており、笹の葉模様に見えるのが特徴である。虹彩は黄色。採餌は昼間も夜間も行ない、特に夜間には採餌場への往來の飛翔中に「ピョウ」あるいは「キュウ」とよく聞こえる声を一声発する。コロニー以外では群れを作らず、単独で採餌することが多い。主な採餌場は河川で、小魚を主要な餌とするほかカエルなどの両生類や水生昆虫なども餌とする。習性や外見が類似するゴイサギよりやや小さい。成鳥では、ゴイサギは喉から腹が白く、冠羽も白、虹彩が赤いなどの点で区別できる。夏鳥（対象：繁殖地）。



天竜川 1995年6月24日 北川捷康

## 2. 分布

国外ではウスリー地方などの極東から東南アジア・オーストラリア・インドにかけて、及び南米・アフリカ中南部に広く分布する。国内では全国的に記録があるが夏鳥としての繁殖は本州以南であり、奄美諸島以南で越冬する。県内ではかつては東・中・西部及び伊豆地域の水辺に分布した。

## 3. 生息環境

一級河川を含めて河川が主になるが池沼、水田、海岸でも見られることがある。採餌は開けた水辺を好み河川での採餌が多い。コロニーは河畔林に形成するが公園の大木を利用することもある。

## 4. 生息状況

もともと個体数は少ない種であった。コロニーは他のサギ類のように複数種で構成することではなく、単独種でしかもせいぜい 10 巣程度の規模であることが多い。天竜川水系、清水区、浮島ヶ原等に数十年来のコロニーが知られていたが、後二者はすでに消滅した。天竜川水系で継続していた 10 巣ほどのコロニーも、1990 年頃から写真撮影者が集中して以後激減し消滅したと思われたが、2017 年に 1 ペアの利用があった。コロニー以外の採餌風景の観察機会も著しく減少したことから、各地ともコロニーが他へ移ったということではなく、個体数が減少したと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

国内的にはレジャー圧 (71) 及び水辺環境の悪化 (13、15-1) がある。国外的には越冬地での捕獲圧 (41) が推測される。

## 6. 保護対策

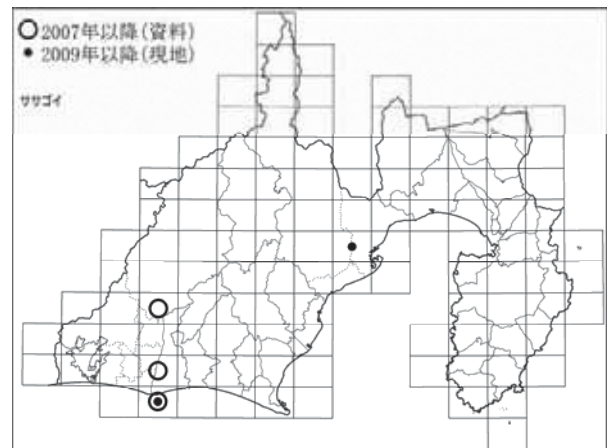
観察・撮影のマナーに対する啓発が必要と考えられるが、それには限界がある。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量などに係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29 (北川捷康)





# ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas, 1764)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B類(EN)(要件①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B類 (EN)：環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 32 cm。雌雄同色。夏羽は頭部から胸・腹部がすすけた黒色で、白いアイリングが目立つ。冬羽は下面が白く頭から背面が灰褐色になる。嘴は細くて長い。脚も長めで秋冬は赤くなる。飛ぶと背から腰が白い。水生昆虫の幼虫などやミミズ、小ガニなども餌にする。「チュイッ」と鋭い声で鳴く。本種の冬羽は脚が赤いアカアシシギに似るが、アカアシシギは嘴の基部が上・下嘴ともに赤みがあり、飛ぶと次列風切羽が白いことで区別できる。旅鳥（対象：生息地）。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の極北部で繁殖しアフリカ中央部や南アジア・地中海沿岸で局所的に越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。本州以南ではごく少数が越冬する。県内では内陸湿地の多い西部地域の休耕田、池畔などに飛来する。

## 3. 生息環境

水田、休耕田、池沼畔、ハス田、干潟などの内陸湿地に生息する。

## 4. 生息状況

春秋に旅鳥として各地の水田に渡来していた。早いものは2月下旬に渡来し始め、5月に入ると全身黒い夏羽の装いを見せていた。春に多い傾向があり、他のシギ類に先駆けて渡来していたが、1979年5月浜松市村櫛16羽以後、1990年4月磐田市大池7羽、1991年4月浜松市篠原4羽（いずれも筆者）を最後に春期の夏羽の姿は見られなくなった。それは1980年ごろから進んだ圃場整備により、冬にも水のあった水田が乾田化されたからである。現在では秋季に磐田市大池、浅羽町休耕田、天竜川河口等に1~3羽程度が飛来し、大池では時に1羽の越冬が見られるという状況である。

## 5. 減少の主要因と脅威

主要因は高度経済成長期から続く湿地の埋立て（15-1）と1980年頃から進んだ圃場整備による乾田化（15-2）の結果、最も重要な採餌場が失われたことである。

## 6. 保護対策

各地で実施され始めた「冬水田んぼ」の広がりには期待はしたいが、現状はあまりに小規模に過ぎるか。

## 7. 特記事項

筆者は東京湾奥で1963年5月3日に450羽をカウントした。同じ太平洋側にこのように多数生息していたが、その数年後に同所で埋立てが始まり、ディズニーランドができた。この高度経済成長期の各地の湿地の埋め立てに続く圃場整備で、本県では25年以上前から主な春の飛来が絶えていたのに、環境省のレッドデータブックへの記載は2014年版を待たねばならなかった。太平洋側の埋め立てや圃場整備が先に進み、遅れた日本海側との間に減少率のズレが生じていたからと推測した。全国のモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は30年前比-88.2%で、いかに全国的に減少したかは明らかである。

## 8. 主な文献

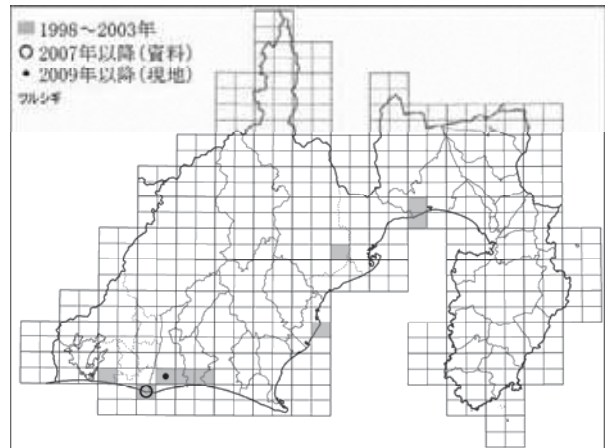
北川捷康（1967）新浜附近（千葉県）の鳥類 “ふたまた”（2）：50-80.

北川捷康（2018）静岡県RDB改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，（41）：25-29

守屋年史（2014）ツルシギ レッドデータブック 2014 2 鳥類 日本の絶滅のおそれのある野生生物 環境省編：172-173. (北川捷康)



浜松市村櫛 1979年5月5日 北川捷康



静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) ]

### 1. 種の解説

全長約 26 cm。雌雄同色。成鳥夏羽は頭上から後頸が黒く額は白い。上面は淡青灰色で下面は白い。嘴は黄色く先端が黒い。脚は橙色をしている。水面上数 m でホバリングしながら餌の小魚などに狙いをつけ、水中に飛び込んでくわえ捕る。繁殖期には広い裸地に多数が集まりコロニーを形成する。夏鳥(対象:生息地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸からヨーロッパ、北アフリカ、北アメリカ、オーストラリアで、国内では本州、四国、九州、琉球列島で繁殖する。一級河川における大規模なコロニー形成は静岡県のみであり、現在も繁殖し続けているのは天竜川だけである。

### 3. 生息環境

大河川の砂利の中州や埋立地、海岸の広い砂浜に集団でコロニーを形成する。裸地を好み、丈が低くても広く草が生えているような環境は忌避する。

### 4. 生息状況

2000 年以前には、東海型一級河川の中州や河口砂嘴、海岸の砂浜など広い範囲で多数繁殖していたが、やせ細った海岸砂浜では、小規模なコロニーすら繁殖不能になった。最近 5 年間で数百羽規模のコロニーが形成されたのは天竜川、安倍川、太田川河口砂嘴に限られ、毎年繁殖が行われているのは天竜川だけである。繁殖の長い歴史があった富士川では 2007 年を最後に繁殖しなくなったという(渡邊修治氏私信)。

### 5. 減少の主要因と脅威

天竜川では県内 3 つのダムに伴う砂利の供給遮断、過度の砂利採取により、中州の貧弱化及び河床の低下が進んだ(13)。その結果、梅雨期の冠水による卵及びヒナの流失(55)が恒例化している。また、ダム貯水に伴う恒常的な流量の低下は中州の植生遷移(54)を進め、ヤナギの樹林化が中州を含む下流全域で進んだ(54)。自然状態での安全な営巣場所は県全域で失われた。さらに、四駆車走行などのレジャー圧(71)及びカラス・チョウゲンボウなど天敵によるヒナの捕食(52-4)もコロニー壊滅の主要因である。

### 6. 保護対策

冠水の障害を受けても海岸砂浜より天竜川の中州を繁殖場所を選ぶという本種の生態特性がある。天竜川では、周囲を水に囲まれた冠水しにくい裸地の中州を造成することが最適な対策である。静岡県渡り鳥研究会及び地球環境と自然を愛する会が協力し、重機を用いた嵩上げ造成などにより、繁殖が支えられてきた経緯がある。河川行政の三本柱の一つ「環境」の面からの行政の積極的な対応が望まれる。

### 7. 特記事項

標識調査により天竜川と越冬地のオーストラリア南東部との往復 16,300km 余の往来を確認した。天竜川は 1994 年には営巣数全国一であった(環境省「全国コアジサシ定点調査」)。

### 8. 主な文献

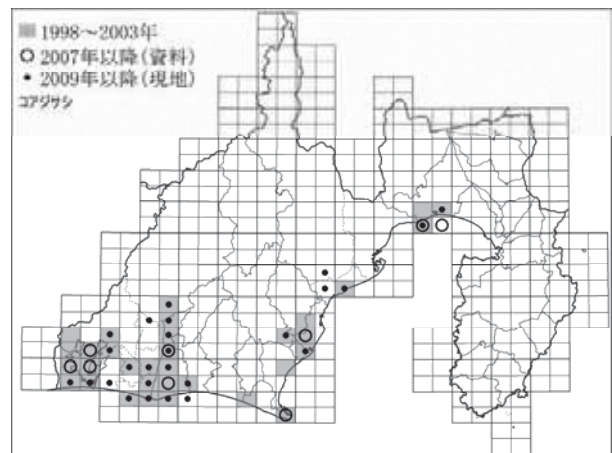
北川捷康(1995)天竜川下流部の鳥たち. 国土交通省浜松工事事務所 : 8-9

北川捷康(2011)一級河川天竜川の下流中州におけるコアジサシの繁殖戦略とその破綻-40 年の繁殖の歴史から見たこと-. 日本鳥学会 2011 年度大会 講演要旨集 B35, : 110

(北川捷康)



天竜川 2007 年 7 月 12 日 北川捷康





### 1. 種の解説

全長はオスが約 82 cm、メスが約 92 cm でオスよりメスの方が大きい。翼開長は大型個体では 220 cm を超える。雌雄同色。成長は全身褐色で頭部はクリーム色がかかり、下方へ行くほど濃い褐色になる。尾は白く、嘴は黄色い。若い個体は尾に褐色が混じり、嘴も黒い。トビよりずっと大きく、開いた翼の前後の幅が広い。そのために尾が短く見える。主な餌は魚類だが、カモ類やカモメ類なども捕食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

### 2. 分布

国外ではヨーロッパから極東ロシアのカムチャツカまで広く分布する。国内では北海道で少数が繁殖するが、冬鳥として本州以南にも渡来する。県内では大河川の河口部には不定期に 1 羽程度が飛来していたが、天竜川だけは長年複数個体が越冬していた。関東以西の太平洋側の河川で毎年複数個体が越冬していたのは県内外を問わず天竜川だけであった。

### 3. 生息環境

大きな河川、湖沼などに生息するが、主な餌になる数 10 cm の魚が常に供給されることが必要条件になる。

### 4. 生息状況

1970 年代には西部地域の天竜川を中心に浜名湖、太田川などの広い範囲に 5 羽以上が生息していた。その当時はミサゴが捕らえた大きなボラと思われる魚を 2 羽の本種が挟み込むように襲い、取り落とした魚を空中でさらいとるという生態を見ることもできた。その後次第に生息範囲を狭め、天竜川周辺に限られてきた。その天竜川でも下流域では 2008~2009 年に磐田市匂坂付近の記録 (今井敦氏私信) が最後と思われる。これは天竜川河口左岸の 5 本の大規模風車の建設時期に対応している。その後は 2010~2011 年に佐久間ダムで観察されている (国土交通省浜松河川国道事務所による天竜川ダム再編事業の調査に関する聞き取りにて)。今後は大河川で稀に不規則な渡来がある程度と推測される。

### 5. 減少の主要因と脅威

コアジサシの項でも触れたが天竜川の下流域では植生遷移が進み中州までヤナギの林になるなど、見通しが悪くなり、安心できる休息場所も失われた (54) ことが、警戒心の強い大型の猛禽にとって安住を脅かす要因になったと思われる。全国的には狩猟に使われる鉛の散弾や化学物質が食物連鎖を経てオジロワシの体内に蓄積された (32) 影響も大であろう。ただしこの件については、現在北海道ではすべての狩猟の鉛ライフル弾及び鉛散弾使用を禁じている。

### 6. 保護対策

天竜川の低水路や中州のヤナギ林の伐採管理は、河川の裸地を利用する生物はもとより、流量管理上も必要なことと思われる (53)。

### 7. 特記事項

種の保存法に基づく国内希少野生動物植物種 (平成 5 年)、文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 45 年)。

### 8. 主な文献

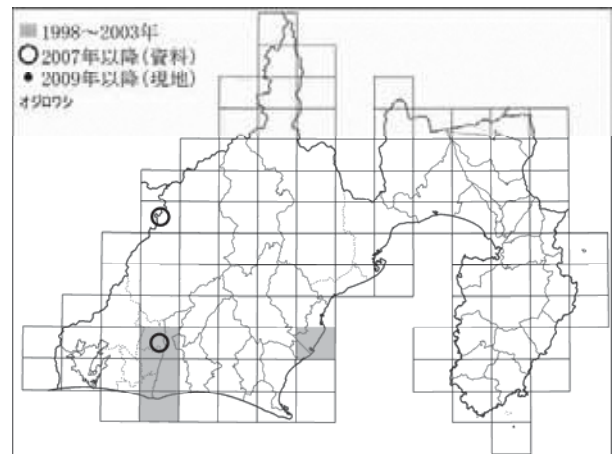
北川捷康 (1998) 浜北市の野鳥 浜北市・浜北市教育委員会 : 13

北川捷康 (2005) 竜洋町の鳥たち 竜洋町教育委員会 : 30

(北川捷康)



磐田市匂坂 1995年2月24日 北川捷康



### 1. 種の解説

全長オス約 48 cm、メス約 58 cm。オスよりメスの方が大きい。雌雄、成・幼鳥で個体による羽色の変異が多様である。メスと幼鳥は基本的には全身褐色をしている。オスの成鳥の代表的な個体は上面が灰色に黒色のまだら模様があり下面が白いが、メスのように褐色のものもいる。ヨシ原などの上を、翼を逆への字型に保って滑空したり羽ばたきながら餌となるネズミや両生類、鳥類などを探す。越冬期、昼間は単独で行動するが、日没後にばらばらに集まり、数羽が同じ場所にねぐらをとる習性がある。休むのは地上や草の上が普通で、高い立木に止まることはない。冬鳥（対象：越冬地・ねぐら）。

### 2. 分布

国外ではモンゴル、中国北東部、ウスリーにかけて繁殖し、中国南部から東南アジアにかけて越冬する。国内では北海道と本州の一部で繁殖し、繁殖数は約 90 つがいと推測されている。静岡県には冬鳥として渡来し、かつては浮島ヶ原、富士川河口などで姿が見られたが、現在では越冬期を通じて生息するのは天竜川・太田川付近と浜名湖畔の一部だけとなった。

### 3. 生息環境

広いヨシ原のあるような湿地や埋立地の草生地を好んで生息する。冬期にはその地域に生息するものが一ヶ所に集まってねぐらをとる習性がある。ねぐらにはヨシ原を利用するのが普通である。

### 4. 生息状況

渡りの時期に単発的に姿を見せる場所はあるが、定期的な越冬地は西部地域だけで、その数も一桁にすぎない。1980年代まで天竜川河口右岸の松島湿地のヨシ原が県内のねぐらとして唯一知られていたが、環境の悪化で掛塚橋右岸下流のメダケ群落に移り、そこも 2002～2003 年にかけて低水路横の砂利採取工事により利用しなくなった。その後、浜名湖畔の養鰻池跡地のヨシ原で 10 羽弱の利用が続いたが、次第に数を減じて 2017 年の利用は認められなかった。天竜川筋では、ごく少数が利用している。

### 5. 減少の主要因と脅威

餌場になるヨシ原のある湿地や草生地の開発 (13, 15-1, 16) や植生遷移 (54) による採餌地やねぐらの消滅が主な要因である。外傷のない死体が回収されたことから食物連鎖による殺鼠剤などの影響 (32) が憂慮されている。

### 6. 保護対策

生息が確認されている地域のヨシ原やねぐら環境の保存が必要である。

### 7. 特記事項

ねぐらにメダケの群落を利用する例は全国的に見て他にない特異な例と思われる。

種の保存法に基づく国内希少野生動物植物種 (平成 29 年)。

### 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

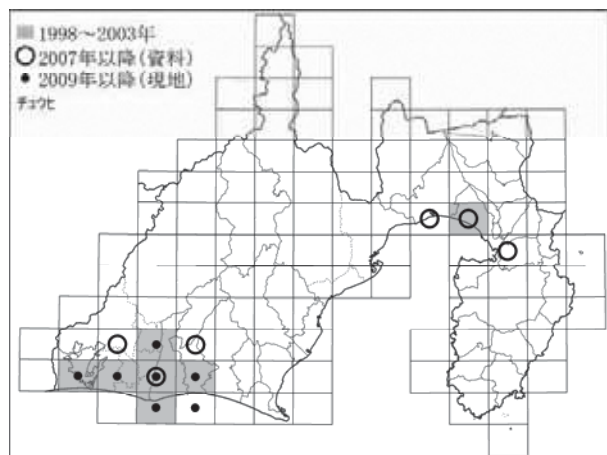
北川捷康 (2005) チュウヒ. 竜洋町の鳥たち 竜洋町教育委員会 : 32

中川富雄 (2014) チュウヒ. 環境省 編, レッドデータブック 2014 2 鳥類 : 98-99

(北川捷康)



富士川河口 2007年9月25日 渡邊修治



## コノハズク *Otus sunia* (Hodgson, 1836)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN)(要件①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 20 cm。日本産最小のフクロウ。頭部から背面が灰褐色をしている褐色型と赤さび色をした赤色型の 2 タイプがある。よく茂った暗い林の中ではよい保護色になる。雌雄同色。虹彩は黄色で、類似するオオコノハズクは赤橙色なので区別できる。夜行性であるが、繁殖期には昼間でも「ブッポソウ」と聞こえる声でさえざることがある。餌はコガネムシ、ガ、バッタなどの昆虫類を主食にする。夏鳥(対象:繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではパキスタン北部から東南アジア、中国からシベリア南東部にかけて繁殖する。国内では夏鳥として北海道から九州まで繁殖する。県内では標高 1,000 m 前後～2,000 m 以下の山地に局所的に分布する。

### 3. 生息環境

大径木の落葉広葉樹があり、餌とする昆虫類を多数生産する広い林で繁殖する。営巣は樹洞を利用する。

### 4. 生息状況

1980 年代までは天竜川、大井川、安倍川の上流及び愛鷹山などの広い落葉広葉樹林に生息していたが、今回の調査期間内には、大井川奥の畑薙第二ダム付近以北の 3ヶ所でさえざりを聞いたばかりにとどまった。秋の渡りの時期に磐田市桶ヶ谷沼において標識調査で記録されたことがあり、平地を通過するものもある。

### 5. 減少の主要因と脅威

過去に行われた植林などのためのブナ林の伐採(11)の影響は大きいと思われる。伐採が行われていない標高 1,000 m を超える広葉樹林、たとえば西部地域では、スーパー林道奥の門桁山の野鳥の森や麻布山、あるいは蕎麦粒山などでは大径木のブナやミズナラが 1980 年頃から多数枯れたり倒れた状況(55)を見ている。少なくとも大径木の樹洞を利用している営巣環境の悪化は否めない。

### 6. 保護対策

生息環境の植物の問題か、餌生物の昆虫の問題なのか、温暖化の影響なのか原因が判然とせず、残念ながら巣箱かけ以外に実施可能な対策があげられない状況である。

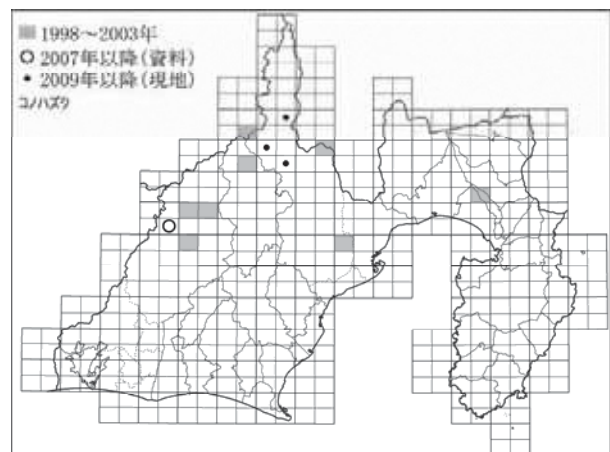
### 7. 特記事項

環境省は現在もレッドリストに入れていない。東北地方では果樹園で繁殖していることが知られ、北海道の津軽海峡に突き出た白神岬で組織的に行われている標識調査では毎年の秋の渡りで、本種の標識数が 2010 年-67 羽、2011-139、2012-8、2013-36、2014-82、2015-29 という状況であることから北海道を基準として危機的状況とは見ていないと推測される。しかし、隣県の愛知県でも本種の生息地として有名な鳳来寺山ではすでに絶えて久しい。ブッポウソウやアオバズクなどと「繁殖に樹洞を利用」し「昆虫を主食」とする「夏鳥」と共通の習性を持つ仲間が軒並み個体数、生息地を減少させていることは、中部地方としての共通の要因があると思われる。

### 8. 主な文献

財団法人 山階鳥類研究所(2012) 松前白神 2 級ステーション日別放鳥一覧. 平成 23 年度 環境省委託業務 2010 年鳥類標識調査報告書(鳥類観測ステーション運営), 財団法人 山階鳥類研究所, 我孫子市.  
: 81-83 (北川捷康)

NO IMAGE





# コミミズク *Asio flammeus* (Pontoppidan, 1763)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 38 cm。全身淡黄褐色で、褐色の斑がある。夕方から採餌活動に入る。主にネズミを餌にするが鳥類も好んで捕食するようである。耳のように見える羽角は 2 cm と短く、虹彩は黄色である。よく似たトラフズクは羽角が 4~5 cm、虹彩が橙色であるのが識別点になる。地上で休むことが多い。冬鳥 (対象: 越冬地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸から北米大陸北部に広く繁殖し、冬は南へ渡る。国内では北海道から琉球諸島まで冬鳥として生息する。県内では冬鳥として伊豆・東部・西部などで記録されているが、観察機会はきわめて少ない。

## 3. 生息環境

河川敷や湿地、農耕地、丈のあまり高くない草地などに生息する。

## 4. 生息状況

1990年代には天竜川、磐田市大池、太田川、大井川、静岡市麻機、朝霧高原、浮島ヶ原など東・中・西部地域それぞれに複数メッシュ、全 10 メッシュ以上で記録されていたが、静岡県レッドデータブック (2004) 調査時には 6 メッシュであった。今回の調査でも 6 メッシュであったが、越冬期に記録されたのは 2014 年冬の朝霧高原のみで、天竜川河口、太田川河川敷、浮島ヶ原、伊東市池などの 5 メッシュはすべて渡り期のもので、越冬地として利用されたかは不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川敷や堤防法面などの植生遷移 (53、54) 及び広い草原や湿原の減少 (15-1、16) 等があげられる。

## 6. 保護対策

河川管理に関して、採餌場となる河川敷や堤防法面の植生の管理が求められる。

## 7. 特記事項

一級河川の中州、一級・二級両河川の高水敷及び高水敷から低水路にかけての法面を中心とした植生遷移は、異常である。ヤナギ林・竹林あるいは草地とはいえクズやアレチウリに覆われているのは、採餌場所としての機能は完全に失われている。この状況から影響を受けるのは本種だけではなく、多くの猛禽類に共通した問題である。人や車を水辺へ行かせない河川行政が進められていることと無縁ではない。かつて「よい子は川で遊ばない」に始まり、現在では多くの河川で水辺へ行くには管理する事務所の許可を得て車止めの鍵を借りなければならず、堤防から車止めのカギを外して駐車場などにおりたのはよいが、その先は 1 m を超すやぶに囲まれていて川へ行けなかったところもある。かつて少なくとも二級河川はどこからでも水辺へおりられた。コンクリート護岸になり、各所に階段が設けられた。階段自体も数 m 幅のコンクリートであるにもかかわらず、現在その何ヶ所がグズに覆われずに機能しているだろうか。

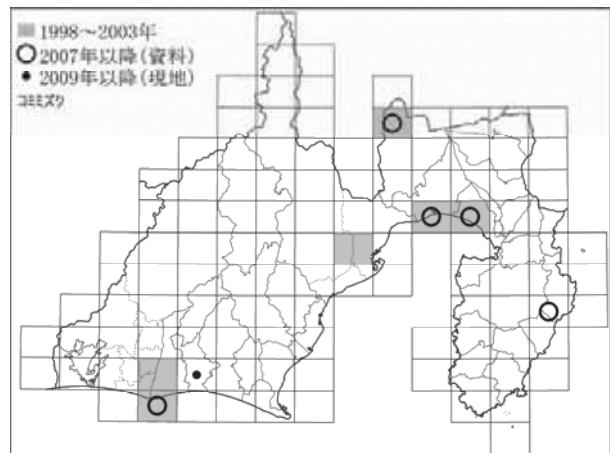
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(北川捷康)



沼津市原浮島ヶ原 2012年1月22日 渡邊修治



# ヤマセミ *Megaceryle lugubris* (Temminck, 1834)

カワセミ科 Alcedinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 38 cm。日本に生息するカワセミ類で最大。体の上面は白と黒のまだら模様で下面は白い。頭の羽は長く冠羽状。雌雄ほぼ同色だがオスの胸には橙色の斑があり、メスにはない。オスの翼下面は白色でメスは橙色をしている。水中を泳ぐアユ、アマゴ、ウグイ、オイカワなど主に魚類を枝から飛び込んで捕食する。人に対する警戒心が強い。留鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

国外ではヒマラヤ、ミャンマー、ラオス、ベトナム北部、中国雲南省などに分布する。国内では本州、四国、九州に分布し、北海道には亜種エゾヤマセミ *M. l. pallida* が分布する。県内では山間地の河川などに分布する。



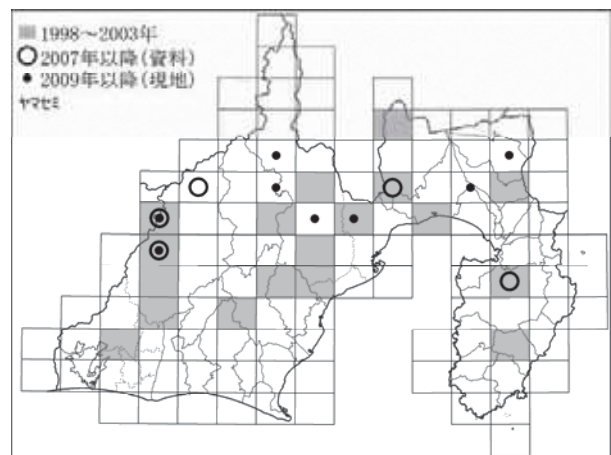
富士宮市芝川町 2011年12月20日 渡邊修治

## 3. 生息環境

河川の中流から上流、ダム湖などの水辺に生息する。生息地に近い土や砂地の崖や土手に直径約 10 cm、奥行き約 1 m の横穴を掘って営巣する。

## 4. 生息状況

1980年代には県内各地の河川に広く生息していた。1990年代前半の西部地域では、天竜川の飛竜大橋東の磐田市神田・敷地、浜松市浜北区宮口の蛭沢奥池付近の崖地など平地と丘陵部の境付近に営巣していた。その後上流部への後退が続き、現在では秋葉ダム湖から上流でないと生息しなくなった。この傾向は県内全域でみられ、個体数も著しく減少している。分布図で新旧の記録を見比べると、伊東市の1例をのぞいて、全域で北緯 35 度 0 分以上に後退していることがわかる。



## 5. 減少の主要因と脅威

1970~80年代には船明ダム付近や敷地の獅子鼻公園などの道路脇の手の届く場所に巣穴を掘って営巣していたが、その巣穴を大人の靴大の石で塞いであるものを2例見ている。1例は石を除けると本種の親が飛び出してきた。もう1例は飛び出してこなかったもので、中で死んでいるものと思われた。このようなたずらの対象になるほど一般的であったが、1990年代には高い崖の上の方にしか営巣しなくなった。さらに生息河川の護岸改修(13)や川辺の木の伐採(11)、また林道の崖への崩落防止のコンクリート吹付や金網張りなど(24)による営巣適地の減少が主要因と考えられる。なお、本種の減少と餌資源が競合するカワウの山間地への進出の時期が似ており、因果関係については今後の研究課題である。

## 6. 保護対策

近年の著しい減少を考慮し、河川上流域の生息環境と営巣に必要な土崖の保全対策が必要と考えられる。

## 7. 特記事項

県内でも減少の著しい伊豆では、2000年以降つがいの観察例はない。

## 8. 主な文献

北川捷康(2018)静岡県RDB改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(酒井洋平・北川捷康)



### 1. 種の解説

全長約 18 cm。横から見ると頭部は褐色、眉斑は黄白色でその下に黒く太い過眼線がある。喉から胸と脇腹は黄白色で、腹の中央から下尾筒にかけては赤い。背面から肩の羽、三列風切羽は緑色。尾羽は黒色で腰と上尾筒及び尾羽先端はコバルト色。初列風切羽の基部には白斑があり、飛ぶとよく目立つ。雌雄同色。雌雄ともに「ホホヘン」と聞こえる尻上がり声を二度繰り返してさえずる。餌としてカミキリなどの昆虫類やサワガニ、ムカデなどを食すが、育雛中の親鳥はミミズを最も多く運んでいた。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

日本に生息する亜種は、国外では朝鮮半島及び中国、台湾にかけて繁殖する。国内では本州中部以南で繁殖する。県内では迷鳥として伊豆・東・中・西部各地でいくつかの渡来記録があった。2003年に西部で繁殖が確認されて以後、中・西部での記録が増えている。

### 3. 生息環境

過去の県外における生息環境は常緑広葉樹林とされていた。県内で同様の例は少なく、低山の落葉広葉樹の混ざったスギなどの針葉樹の植林地で、沢や急傾斜地のあるような場所を好んで生息・繁殖する。

### 4. 生息状況

2005年以前の記録は少なく、年度も場所もまちまちで、既知の繁殖も1例であった。しかし、今回の本調査において複数年渡来の繁殖地を含む6ヶ所の記録があった。このうち5例が中部地域の記録である。なお、これらから現時点における本種の飛来数が増加していることは明らかである。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息密度が高かった宮崎県での個体数の減少が著しいなど、現在継続して生息している地域は四国の一部と本州中西部の一部のみのものである。国外の状況では、繁殖する中国、台湾では最近の確実な記録がほとんどなく、全土で生息が確認されていた台湾での生息数が大きく減少しているという。越冬地を含めた熱帯及び温帯地域の伐採による森林面積の減少(11)が憂慮されている。

### 6. 保護対策

かつて繁殖場所が知られ、全国から多数の写真撮影者が集まり、本種の繁殖も危惧されたばかりでなく地域の住民にも多大な迷惑をかけた事例が県内であった。アセスメントなどでの記録に関しても、情報管理は徹底するべきである。

### 7. 特記事項

「5. 減少の主要因と脅威」で記したことを踏まえて静岡県の生息・繁殖記録の増加を考えると、生息域がやや北へシフトしているという状況が推測できる。静岡県の現況がこのまま続くかどうかは即断できないが、県内の生息状況が把握できたと判断しカテゴリーの変更をした。

種の保存法に基づく国内希少野生動物種(平成5年)。

### 8. 主な文献

中村滝男・金井 裕(2014)ヤイロチョウ. 環境省 編, レッドデータブック 2014 2 鳥類 : 116-117 (北川捷康)



静岡県 2017年6月 鳥類部会提供



# サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles, 1822)

サンショウクイ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN)(要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm。背は灰色で下面が白いスマートな体型の小鳥。雌雄ともに背面が灰青色をしている。オスは額が広く白く、頭頂から後頸が黒い。メスは頭頂から後頸が灰色である。鳴き声は「ヒリリ」あるいは「ジリリ」と聞こえる。夏鳥として4月下旬から5月中旬にかけて渡来する。近年北上して県内にも生息するようになった別亜種のリュウキュウサンショウクイ *P. d. tegimae* は、額の白色部が狭く、胸が灰茶色に汚れた感じで、背面はオスではかなり黒く、メスではかなり暗色である。夏鳥(対象:繁殖地)。

## 2. 分布

国外ではアムール川下流域、ウスリー、マンチョウリから朝鮮半島の付け根にかけて繁殖し、インドシナ半島からフィリピン、ボルネオ、スマトラにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州に分布する。県内全域で減少したが、西部寄りにやや多く分布する。

## 3. 生息環境

丘陵地や低山の落葉広葉樹林に生息する。標高 1,000 m 以上の山地でも繁殖期に観察されているが、繁殖は確認されていないようである。

## 4. 生息状況

西部地域においては、1980年代前半までは繁殖終了後から渡り前の8月には20~30羽の群れをよく見かけたが、1980年代後半からはまったく見られなくなった。県内各地で減少していたが、ここ数年復活傾向にある。この減少と復活傾向の県内的な要因は不可解である。

亜種リュウキュウサンショウクイが東上傾向にあり、ここ数年の間に伊豆地域で急増し、周年生息するようになった。繁殖は確認されていないようだが、かつて亜種サンショウクイが普通にいたところに見られた繁殖後の集団行動が亜種リュウキュウサンショウクイで見られるようになってきている(2015.10.3, 21羽, 伊豆市, 酒井洋平氏観察)。亜種サンショウクイの復活傾向が亜種リュウキュウサンショウクイの県内侵入と増加の動きに連動しているように見えるが、今のところ関連があるのかどうかは不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

エネルギー革命以後薪炭林の保存活用が低迷し、次第に常緑広葉樹林が増えてきたが、従来生息していた丘陵から低山にかけての落葉広葉樹林の林そのものは残っていても生息が認められない地域が広がっていた。この状況は全国的に共通していたようである。国内での減少の原因は明らかではないが、越冬地の森林伐採などの環境問題(11)が影響していたのではないかと推測された。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

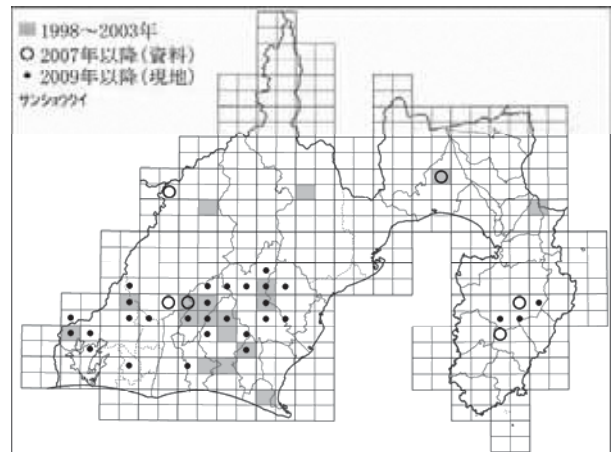
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説(p72)の引用文献に挙げたものを利用した。

(北川捷康)



周智郡森町 2002年6月19日 北川捷康



# オオセッカ *Locustella pryeri* (Seebohm, 1884)

センニュウ科 Locustellidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) ]

## 1. 種の解説

全長約 13 cm でスズメより小さい。上面は尾羽まで茶褐色で、頭頂から背にかけて黒い縦斑がある。眉斑は不明瞭。腮から下面中央部は白い。雌雄同色。春の渡去前には「ジुकジुकジुक…」と数回から 10 回ほど連続して鳴くので、存在を認めやすい。主として昆虫類を餌にする。冬鳥 (対象: 越冬地)。

## 2. 分布

国外では中国東北部及びロシアの日本海沿岸の一部で局所的に繁殖する。国内では青森、秋田、茨城、千葉などで局所的に繁殖し、冬には本州中・西南部、四国などにも生息する。県内では東・中・西部で少数の記録があるが、最近 10 年ほどでは西部の記録がやや多い。なお、中国東北部及びロシアの日本海沿岸の一部に分布するのは別亜種オナガオオセッカ *L. p. sinensis* で、亜種オオセッカ *L. p. pryeri* は日本の固有亜種とされる。

## 3. 生息環境

河川敷や池沼のヨシ原や草丈の低いイネ科、イグサ科などの生育する湿った草地に生息する。

## 4. 生息状況

西部、東部の河川敷・耕作地・池沼の草地で観察あるいは標識調査で確認されているがきわめて少ない。越冬期には草むらから出ることがほとんどないために目視による観察機会は少なく、標識調査か渡去前のさえずりによる確認例が多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川敷やその他の湿地は造成が行われやすい (13、15-1) うえに植生遷移 (54)、水位の増減や土砂堆積に見舞われる (55)。耕作地周辺の草地も圃場整備 (15-2) などの影響を受けやすい。

## 6. 保護対策

河川敷や湿地の造成や圃場整備には、草地の構成や本種の生息の有無など、精査が必要である。

## 7. 特記事項

東部の湿地では、繁殖地の茨城県鹿島郡神栖町からの渡来が標識調査により確認されている (神谷)。古い記録であるが、4 月 12 日に浮島ヶ原で採集したオス 1 羽の解剖結果から繁殖の可能性ありと報告されている (黒田, 1937)。しかし、筆者は西部の複数の場所で渡去前のさえずりをしばしば聞いており、4 月 11 日の記録もある。このことから、黒田の記録は渡去前の可能性がある。

種の保存法に基づく国内希少野生動物種 (平成 5 年)。

## 8. 主な文献

黒田長禮 (1937) オオセツカの新分布地. 鳥, 9(44): 343

財団法人 山階鳥類研究所標識研究室 (1992) (2) 注目に値する回収例 10 オオセッカ. 環境庁委託調査 平成 3 年度鳥類観測ステーション報告, p. 22. 財団法人 山階鳥類研究所, 我孫子市.

北川捷康 (2012) 桶ヶ谷沼の鳥類生息調査-平成 23(2011)年度-. : 3

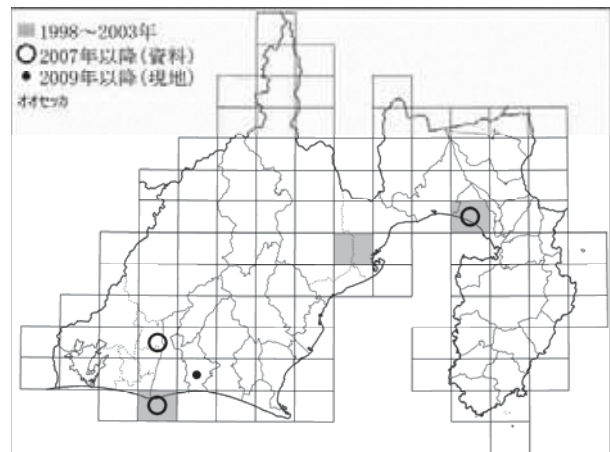
平野敏明 (2015) 渡良瀬遊水地における繁殖期のオオセツカの生息状況の変化と生息環境. Bird Research, 11: A1-A8

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



磐田市 (標識調査) 2008 年 11 月 13 日 北川捷康





# ライチョウ *Lagopus muta* (Montin, 1781)

キジ科 Phasianidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー : 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

全長約 37 cm。体形はニワトリ型。春から秋にかけては雌雄で差はあるが、白・黒・茶の斑模様で、冬期は尾羽をのぞいてほぼ全身真っ白に換羽する。目の上に皮膚の赤い部分があり、オスは繁殖前になると大きく膨らみ、目立つ肉冠となる。繁殖期の産卵後の抱卵・育雛はすべてメスが担当し、オスは抱卵期まで見張り役の任に当たる。日中は猛禽類などの天敵の目を避けハイマツ群落を利用することが多いが、早朝や夕方、ガスや雨などの悪天候時には開けた場所に出て採食する。高山植物及び矮生常緑低木の芽・葉・花・漿果・種子や昆虫類を餌とする。留鳥（対象：繁殖地）。

## 2. 分布

国外では種ライチョウが北半球の北極を取り巻く地域に広く分布する。国内に生息する亜種ライチョウ *L. m. japonicus* は最終氷期に大陸から移り住んだものとされており、本州中部の頸城山塊・北アルプス・乗鞍山・御嶽山・南アルプスの高山にのみ生息する。県内では南アルプスに生息し、イザルガ岳が本種の繁殖分布の南限にあたる。なお、南アルプスは他地域とは異なる遺伝集団であることが確認されている。

## 3. 生息環境

南アルプスでは標高 2,600 m 以上のハイマツ群落が繁殖場所であり、天敵から身を隠す場所として必要不可欠である。繁殖期はハイマツ群落とその周辺のガンコウランなどの矮生常緑低木群落が生息環境である。

## 4. 生息状況

県内では南アルプスのハイマツが分布する主稜線沿いに生息する。南限のイザルガ岳では現在 1 ペアのみが生息するが、北へ行くほど生息個体数は多くなる傾向にあるという。積雪の多い地域では冬期に森林限界付近まで下るといふが、県内の南限生息地における厳冬期の生息場所は明らかになっていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

猛禽類のイヌワシ、チョウゲンボウなどのほかに、近年高山帯に進出した哺乳類による捕食 (52-4) がある。シカによる高山植生の食害 (54) や温暖化による生息環境の縮小 (71) など挙げられている。温暖化は、分布周縁の南端部に当たる本県のライチョウが最も早く影響を受ける可能性も考えられる。

## 6. 保護対策

他県では、人工増殖（生息域外保全）のほかに、2015 年から開始された生息域内保全の取組（死亡率が著しく高い孵化直後のヒナをメス親とともに 1 カ月間ケージで保護）があり、現在は有効性の検証と実験段階にある。本県では縄張り期におけるつがい数の経過観察が、まずは必要と考えられる。

## 7. 特記事項

本県では、上記減少の主要因を裏付ける確認は得られていないものの、南限分布地におけるなわばり数の減少が懸念されており、注意が必要である。種の保存法に基づく国内希少野生動物種（平成 5 年）。文化財保護法に基づく国の特別天然記念物（昭和 30 年）。

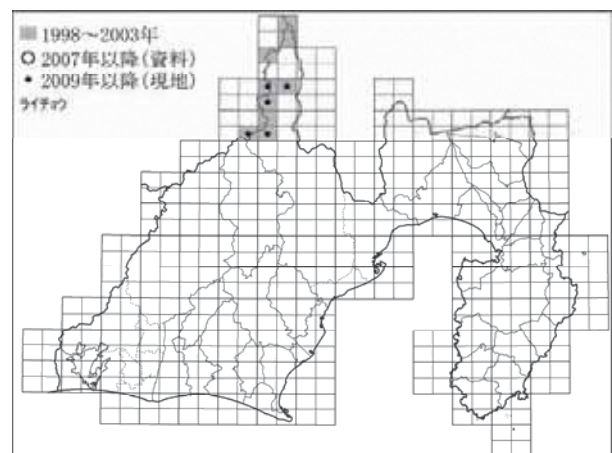
## 8. 主な文献

朝倉俊治・増田章二・近藤多美子・堀田昌伸（2011）南アルプス南部（赤石山脈）におけるライチョウ *Lagopus mutus japonicus* の標識調査。日本標識研究会誌, 23 : 47-54

（北川捷康・近藤多美子）



南アルプス荒川岳 2010年8月3日 北川捷康





### 1. 種の解説

全長約 20 cm。雌雄ほぼ同色。全身黄土色で黒褐色の斑模様があり、淡黄色の眉斑がある。背面、胸、脇腹に後端がとがった縦斑が目立つ。オスは頬から喉にかけて赤茶色をしている。人の気配には敏感で、畔や草むらにじっとうずくまるので見つけにくい。越冬期には小群でいることが多い。渡去前の 3 月末から 4 月初めにはよくさえずる。声は「アジャパー」と聞きなされている。イネ科やタデ科など多種類の植物の種子やゴミムシ、チョウの幼虫、ケラなどの昆虫類、クモ類を餌とする。外来種のコジュケイより二回り小さい。冬鳥(対象:生息地)。

### 2. 分布

国外ではモンゴル北部からロシア極東のアムール、ウスリー地方、サハリン、中国北東部で繁殖し、朝鮮半島、中国南部、インドシナで越冬する。国内では、本州北部以北で繁殖し、中部以南で越冬する。県内の分布は局所的で、冬鳥として主に西部地域の一部に生息する。

### 3. 生息環境

河川敷の草原や牧場、耕作地、耕作放棄地、丈の低い草地などに生息する。

### 4. 生息状況

接近すると、突然キュルあるいはプルルと聞こえる羽音を残して一直線に飛び去るため、ウズラより先に観察者の方が見つけるという例は少ない。近年の西部地域の生息地はすべて 2007 年の捕獲禁止措置以後の記録である。特に 2014 年頃から渡去前のさえずりが聞かれるようになったことなど、個体数が少しずつ増えているのではないかと感じられる。

かつて繁殖していた富士山麓では、ここ数十年確認事例はない。

### 5. 減少の主要因と脅威

長年の狩猟圧 (41) に生息環境の悪化が拍車をかけたと思われる。かつて河川敷には丈の低い草地が多かったが、グラウンド造成 (16)、治水・利水の進行による植生遷移 (54)、たとえばつる性植物の蔓延や樹林化が進んだために生息適地はほとんど失われた。圃場整備など (15-2) による草地の減少も憂慮される。

### 6. 保護対策

生息に適した丈の低い草原の造成は求めようもない。狩猟鳥獣から外されたことがせめてもの拠り所である。なお、対策ではないが、海岸に近い平地の水田の多くで稲刈り後の二番穂の結実したものがそのまま放置されている。餌場でもある草地の減少に代わる餌の供給源としてきわめて好ましい状況である。

### 7. 特記事項

狩猟鳥獣として長年捕獲され続けた結果、個体数の減少が憂慮されるようになり、2002 年までに一部の府県で狩猟が禁止された。その後、2007~2012 年に全国で一時的な捕獲禁止措置が実施され、さらに 2012 年に環境省レッドリストに記載されたことを踏まえて、2013 年に狩猟鳥獣から外された。

なお、卵などを食用にしているウズラは、本種を家禽化したものである。

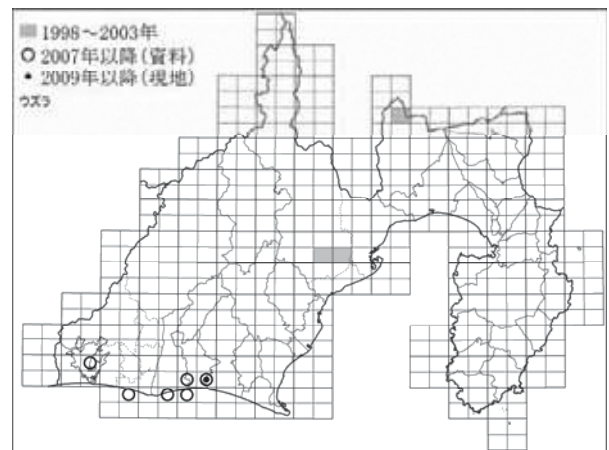
### 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



袋井市浅羽 2018年3月9日 小岸宣夫



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

全長はオスが約 43 cm、メスが約 38 cm。オス成鳥の顔の色（黄、黒、緑）の組合せで巴（ともえ）模様を想わせるのが特徴。胸脇の白線も目立つ。メスはコガモのメスに似た地味な褐色をしているが、嘴基部に小さな白斑があるのが特徴である。冬鳥として少数が渡来する。他のカモ類より警戒心が相当強い。昼間は休眠し、日没後に飛び立ち、水田、湿地などへ採餌に行く。主食はイネ、タビエ、タデなどの種子で、水生小動物なども捕食する。冬鳥（対象：越冬地）。

### 2. 分布

国外ではシベリアのバイカル湖より北東部のツンドラ・森林地帯の湿地で繁殖し、朝鮮半島、中国南部で越冬する。国内では本州、四国、九州で越冬する。日本海側にはやや多く、太平洋側では少ない。県内では西部地方でも少なく、東・中部ではきわめて稀である。毎年越冬するのは磐田市の桶ヶ谷沼だけと考えられている。

### 3. 生息環境

主に湖沼を好むが、河口、ダム湖などにも姿を見せる。周囲が樹林や抽水植物に囲まれているような環境を好み、広々として視界をさえぎるものがないような環境には長期の滞在はしない傾向が見られる。

### 4. 生息状況

静岡県レッドデータブック（2004）で毎年桶ヶ谷沼では 10 羽前後が越冬すると報告した。その後の 2004～2013 年の 10 年間の各年の最多越冬数を比較すると、最少が 2006 年の 11 羽、最多が 2011 年の 125 羽、年による多寡はあるが平均すると約 46 羽で、以前より増えている。桶ヶ谷沼以外の場所では同じ磐田市の大池、太田川河口でしばしば観察されており、他の地域においても 1～2 羽が観察されるようになった。生息期間は 11 月～2 月中旬前後で、寒気が厳しい年には、少数が 3 月に見られることがある。

### 5. 減少の主要因と脅威

桶ヶ谷沼での越冬数は県の自然環境保全地域に指定されて保護の実を上げてきた。しかし、近年の野鳥写真ブーム（71）で見境のない行動に走る者があり、ここ数年は越冬数も減り落ち着かない状況が続いている。本種のメスは狩猟鳥のコガモに酷似し、他地域へ分散すれば狩猟の誤射（41）を招きかねない。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は鳥獣保護区に、太田川河口と大池は銃猟禁止区域に指定されている。

定期的な越冬地である桶ヶ谷沼で本種の休息場所は決まっているが、2016 年の渡来初期に本種の写真を撮影しようと秘密裏に休息場所付近へ繰り返し侵入した者がいた。並外れて警戒心の強い本種は以後の越冬期間を通して 1 羽も姿を見せなかった。当沼の環境の保全及び管理をより徹底させる必要がある。

### 7. 特記事項

なし。

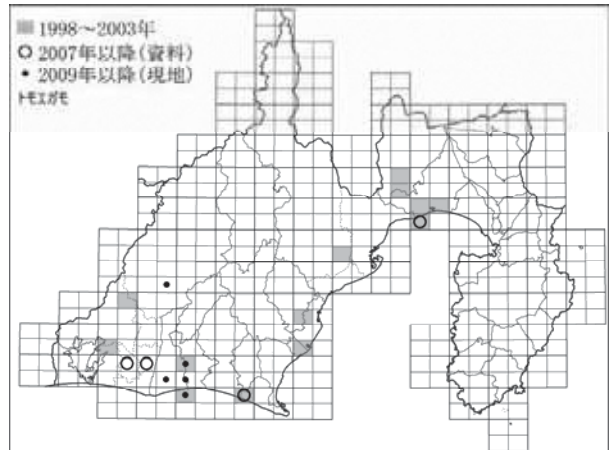
### 8. 主な文献

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，41：25-29

北川捷康・武田由紀夫（2005～2014）桶ヶ谷沼の鳥類生息調査—平成 16（2004）～ 25（2013）年度—、桶ヶ谷沼を考える会。



浜松市中区上島 2012 年 1 月 15 日 中村裕志



（北川捷康）

# ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus, 1766)

クイナ科 Rallidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②)変更コード 12

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧類 (NT) ]

## 1. 種の解説

全長約 23 cm。後頭部から体上面は暗緑褐色、前頭部から顔、首、胸、腹にかけて赤茶色で脚も赤い。脇から下尾筒には白い横縞模様がある。雌雄同色。さえずりは 3 月から聞かれ、コッ・コッ・コッと 1 音ずつ区切った声で始まり、次第にテンポを速めて尻下がりにココココココ・・・と続ける特徴がある。夜間の方がよく鳴くが、昼間でも鳴く。かつては夏鳥とされていたが、現在は県内の生息地では多くが留鳥と思われる。餌は昆虫類、両生類、腹足類などのほかにイネ科の種子などである。(対象：生息地)

## 2. 分布

国外では中国北東部から朝鮮半島、中国南東部を通過してパキスタンまでと東南アジアの島々に分布する。国内では北海道から沖縄までの全国で繁殖し、北海道、本州北部のものは越冬のために南へ渡る。県内では湿地の多い西部地域に集中して広く生息し、湿地の少ない東部・伊豆地域にも少数が生息する。

## 3. 生息環境

かつては、水田地帯が主な生息場所と考えられていた。しかし圃場整備が進んだ地域では、刈り取りから代掻きまでの半年間は生息に適する場所とは言えなくなった。現在は、池沼や河川敷、養鰻場跡地など、ヨシやマコモなどの生えた湿地、ハス田により多く生息する。

## 4. 生息状況

繁殖期に特徴のあるさえずりを聞いて生息確認をするという方法が主であり、手間のかかる割に効率の良いものではない。河川の大・中・小を問わず河川敷・低水路、浜名湖周辺に広がる養鰻場跡地、圃場整備の行われていない水田の周辺などの湿地や草むらなどに予想を超えて生息する実態が明らかになった。全国的に繁殖域が北上している傾向があることから、県西部の生息メッシュ数、生息個体数の増加は、越冬個体を含んでいる可能性もある。伊豆地域には生息適地が非常に少ないが南伊豆町蛇石大池で確認している。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息メッシュ数・生息個体数の増加は間違いのないことなのでカテゴリーを 1 ランク下げたが、このことを単純には喜べない。圃場整備 (15-2) に加えて、最も生息個体数の多かった浜名湖周辺の養鰻池跡地や浜松市志都呂町の湿地などでは埋め立て (15-1) が急速に進められており、その多くが太陽光発電施設へと変貌している現実がある。河川の植生もクズやアレチウリなどに覆われ、樹林化などの植生遷移 (54) が進行している。この事実こそが最大の脅威である。

## 6. 保護対策

河川の植生管理、ソーラーパネル設置場所の検討、圃場整備地などの冬水田んぼ化など課題が多い。

## 7. 特記事項

なし。

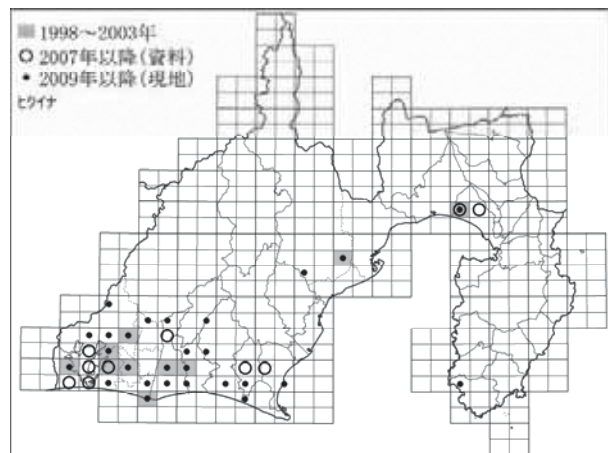
## 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



沼津市原浮島ヶ原 2015年6月6日 渡邊修治





### 1. 種の解説

全長約 29 cm。全体に黒褐色で、灰褐色や橙褐色の斑紋が虫食い状に入る。雌雄同色。夜行性の地味な鳥だが、細長い翼と長めの尾をもつ横長の体形で、樹枝に平行に止まって眠り、生息環境に見事に溶け込む。飛翔は速く、昼間であれば翼の白斑がよく目立つ。繁殖期には「キョッキョッキョッ・・・」と連続して鳴き、「コワ、コワ、コワ」という声も発する。夜間、飛びながら昆虫を捕食する。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外では東アジアから東南アジア、南アジアにかけて分布し、東アジアで繁殖するものは南方へ渡って越冬する。国内では夏鳥として渡来し、九州以北の平地から山地の林に生息する。県内では中部や西部、富士山麓周辺に分布する。

### 3. 生息環境

山間部の草原や伐開地、畑などが混在する林地に生息する。かつて 1970 年代には標高 100 m 程度の県立森林公園など、平野部周辺の丘陵地帯でも観察されたが、このような生息環境は諸々の造成により減少し、生息域は自ずと山間部へ追いやられている。

### 4. 生息状況

県内では標高 300 m から 1,000 m 程度の山間部での記録が多いが、生息域は縮小し、その数は総じて減少傾向にある。一方、比較的高い生息密度を保っているところもあり、西部地方の山間部では、夜明け前の 3 時半頃から 50 分程度、数羽のヨタカが鳴き交わす様子を観察した地点がある。もともと伊豆地域での記録は少なく夜行性種の生息の把握は容易ではないこともあり、今回繁殖期の記録はえられなかった。なお、渡りの時には市街地でも目にする可能性がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

住宅地・工場用地などの拡大（23、24）が生息域を山間部へ追いやるとともに、山間部では高規格道路の整備（24）や観光施設などの建設に伴う開発行為（23）が生息を脅かす一因となっている。また、中山間地の過疎化や国内林業の不振に伴う森林の荒廃（53）も、生息環境に影響を及ぼしている可能性がある。

### 6. 保護対策

直接的な保護対策は特にないが、ヨタカの生息域である中山間地の道路整備や諸々の開発行為に関しては、トンネルを増やして動植物の生息域を保護したり過度な照明設備を控えるなど、自然環境や野生生物との共存に配慮した工法が求められる。

### 7. 特記事項

特になし。

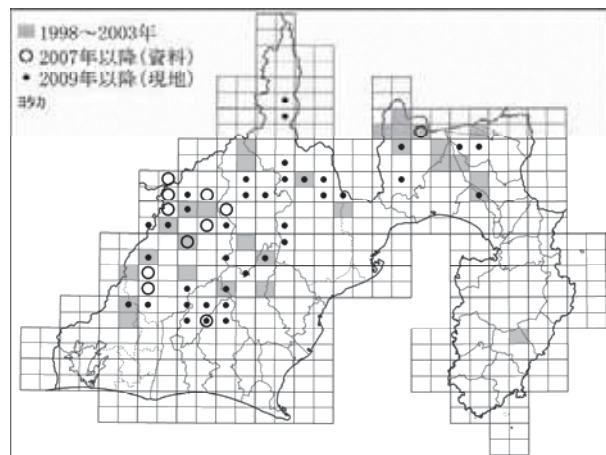
### 8. 主な文献

高野伸二（1981）日本産鳥類図鑑。東海大学出版会，東京：313-314。

高野伸二（2012）フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版。（財）日本野鳥の会，東京：204-205。



富士市大淵 2001年7月25日 渡邊修治



(中村裕志)



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

全長約 17 cm。背面は灰褐色で下面は白い。脚は黒い。肩から胸に張り出してくる黒線が、胸の正面でつながっていないのが普通である。飛ぶと翼に白帯が出る。餌はゴミムシ、ゴカイ、クモ、トビムシなど多彩で、砂礫地でも干潟や砂地同様に数十 cm 小走りしてピョコンとお辞儀をするように地面の餌をついばむ。繁殖期はペアでテリトリーを持つが、それ以外の時期は小群で過ごす。留鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外では北半球の温帯域に広く繁殖する。国内では北海道から沖縄諸島まで分布し繁殖する。県内では主に天竜川、遠州灘海岸に留鳥として生息し、それ以外の地域での生息記録は少ない。

### 3. 生息環境

海岸砂浜、河口の干潟、大河川の河川敷や中州、埋立地などに生息する。繁殖場所は海岸砂浜では海浜性植物群落の中やその縁辺であり、大河川では河川敷や中州の砂礫地である。浜名湖や海岸線に接した埋立地では草に覆われるまでの数年間利用する。

### 4. 生息状況

繁殖期には遠州灘海岸の砂浜や大河川の中州の砂礫地に営巣するが、さまざまな阻害を受けて繁殖成功率は低い。例えば天竜川において 2004 年には下流側の 4 つの中州に 14 ペアおり、その 12 巣のうち 4 巣で孵化したが、台風によりすべての中州が冠水し、ヒナも卵もすべて流された。その直後繁殖のやり直しは 2 巣のみであった。なお、2017 年に 2004 年と同地域・同期間のチドリ類の繁殖状況を調べたが、本種成鳥は 2 羽のみ、繁殖の兆候は見られなかった (以上北川)。

### 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖場所である海岸の砂浜は痩せ細り (25)、オフロード車による轢き潰しなどのレジャー圧 (71) は高まり、繁殖の成功は稀な状況になった。河川では最大の繁殖数のあった天竜川でも、現在はコアジサシ同様に天敵 (主にハシブトガラス) による卵の捕食 (52-4)、繁殖場所の低水路や中州の植生遷移 (54) による裸地の被覆、冠水による卵とヒナの流失 (55) などの阻害を恒常的に受けている。特に冠水被害は、最近の異常気象で頻度が高まったことが大きな脅威である。

### 6. 保護対策

オフロード車との住み分け。天敵対策。植生遷移や冠水に対する安全な繁殖場所の創出が必要である。

### 7. 特記事項

1973~1985 年に (公財) 日本野鳥の会によって実施されたシギ・チドリ類全国一斉調査結果では、この期間における減少の著しい種として、「営巣環境の保全は急務である」と警鐘を鳴らしていた。県内の繁殖の現況から、ランクアップも検討されている。

### 8. 主な文献

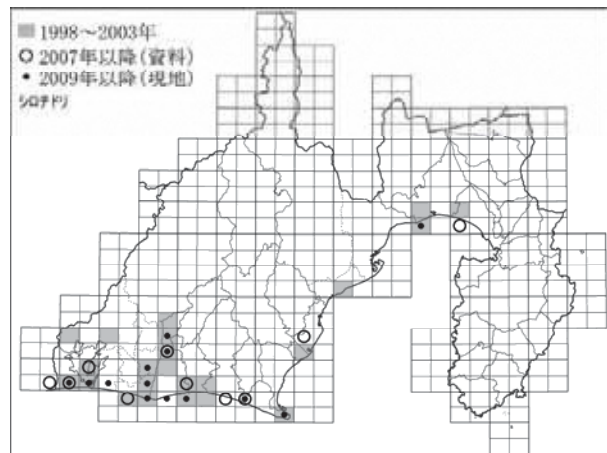
北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料。遠州の自然, (41): 25-29

(公財) 日本野鳥の会 (1985) 日本野鳥の会全国一斉調査結果報告 I 特筆すべき種の経年変化. Strix, 4: 86

(北川捷康)



天竜川河口 2003年12月5日 北川捷康



# オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 40 cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は上面が灰褐色で下面は白色である。夏羽は頭から胸が赤褐色で、背は赤褐色と黒白のまだら模様となる。飛翔時には尾の先の黒色部と、白い上尾筒及び翼帯が目立つ。嘴は直線的で長く先端が黒い。脚は黒色で長い。水田、湿地などでミミズや昆虫類などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯、亜寒帯で繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では北海道から琉球諸島まで全国で記録されている。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸の内陸湿地での記録が数ヶ所知られる。

## 3. 生息環境

水田や湖沼などの内陸湿地を好み海岸や河口干潟に出ることは少ない。

## 4. 生息状況

1984年には磐田市鮫島で38羽という記録があり、その後の多数渡来として磐田市大池で1989年9月に7羽、1997年10月に3羽といった観察例がある(北川捷康氏私信)ものの、近年の渡来数はきわめて少なく、2011年9月に袋井市浅羽地域、2016年11月に大池でそれぞれ1羽の記録がある。2003年頃には単独から数羽が比較的定期的に渡来していた浅羽地域でも最近ではほとんど見られなくなってしまった。

## 5. 減少の主要因と脅威

圃場整備による水田の乾田化(15-2)及び河川や湖岸の改修(12、13)が挙げられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊の影響(71)が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

現在ある内陸湿地の保存と休耕田の有効利用が必要である。袋井市浅羽地域における農作業の一環として、8~10月に水田への水張りにより本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が創出されている事実があったが、このような措置はシギ・チドリ類の誘引に効果がある(しかし、水張りの行われた一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺到して近隣住民とのトラブルが発生するといった状況が起こり、保護上の新たな問題となっている)。

## 7. 特記事項

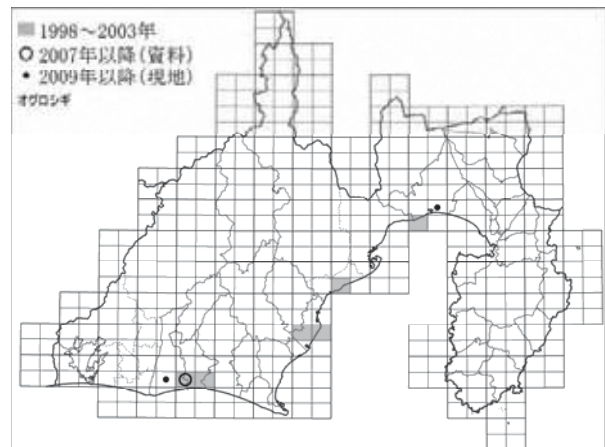
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



磐田市大池 2016年11月8日 中村裕志



(小粥秀治)

# オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

全長約 40 cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は上面が黒褐色に灰褐色の羽縁があり、下面は白っぽい。夏羽は頭部から腹部にかけて赤褐色で、背は黒褐色に赤褐色及び白色の羽縁がある。嘴は長くてやや上に反り先端が黒く基部は肉色。脚は黒い。干潟や州でゴカイや小エビ、昆虫などの小動物を採食する。オオソリハシシギ *L. l. baueri* とコシジロオオソリハシシギ *L. l. menzbieri* の 2 亜種が旅鳥として渡来する。旅鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸とアラスカの一部の寒帯で繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では本州以南の各地で記録されている。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけての海岸付近で観察されている。

## 3. 生息環境

主に河口や海岸などの干潟や砂浜に飛来する。内陸湿地に入ることは稀である。

## 4. 生息状況

従来はごく普通に観察された種である。近年になって急速に渡来数を減じ、観察の機会も減少した。シギ類は総体的に減少が目立つが、その中においても特に急激な減少が顕著である。過去の多数渡来としては太田川河口において 2001 年 9 月に 11 羽、2009 年 4 月に 7 羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2007 年以降では上記太田川河口の他に浮島ヶ原、富士川河口、浜名湖南部などで生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地の埋立て(15-1)や海岸部の埋め立て(14)などの開発行為が、要因として相当の影響を及ぼしているのは事実である。長距離を移動するシギ類にとっては国内外の渡りの通過地域における環境変化(99)が個体数の変動に大きく関わっていることは十分に考えられる。また、状況の把握は困難であるが、温暖化の影響(71)が関わっている可能性もある。それから水鳥全般に関わることではあるが放置された釣り糸が足に絡むといった事故(71)も度々目にするようになって久しい。

## 6. 保護対策

ダイシャクシギやホウロクシギと同様、シギ類のうちでは大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全(または創出)が求められる。

## 7. 特記事項

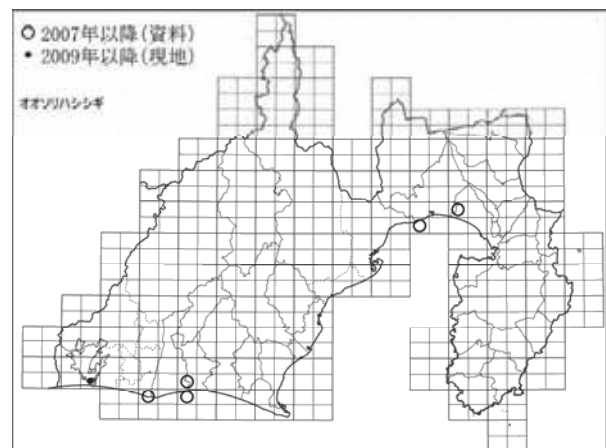
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985)山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



沼津市原 2006年4月9日 渡邊修治



(小粥秀治)



# ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 55 cm。上面は淡褐色に暗褐色の縦斑があり、下面は白い。飛翔時には腰及び上尾筒の白色が目立つ。嘴は長く下に湾曲し、黒くて基部は淡紅色。脚は青灰色である。主に干潟や三角州に生息し、1羽から小群でカニや貝類、ゴカイなどの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で広く繁殖し、温・熱帯地域で越冬する。国内では全国で記録されているが、北海道から本州北部は旅鳥、本州中部以南では旅鳥及び冬鳥として分布する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけて海岸付近での記録があるが、渡来数は少ない。浜名湖南部では例年観察されている。

## 3. 生息環境

主として干潟や三角州などの砂泥質の部分に生息するが、海岸に近い水田などに飛来することもある。

## 4. 生息状況

県内では大規模な干潟が生じる場所が少ないこともあり、生息適地はもともと限られていたが、最近では観察の機会が一層減少してきている。1998年4月には太田川河口で3羽、2003年8月に天竜川河口で5羽の観察例がある(北川氏私信)。2009年以降では太田川河口、浜名湖南部、富士川河口で生息が確認されている。昨今飛来するものはほとんど1~2羽である。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸部の埋め立てなどによる水辺環境の悪化(14)、昼夜を問わない釣りの四輪駆動車の往来をはじめ、ウォーターバイクなどレジャー圧の増加(71)による採餌や安息への阻害などが考えられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧(41)や環境破壊の影響(71)の可能性もある。

## 6. 保護対策

シギ類ではハウロクシギとともに最も大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全(または創出)が求められる。また水辺のレジャーが与える影響については、人と生物の住み分けを考えていく必要がある。

## 7. 特記事項

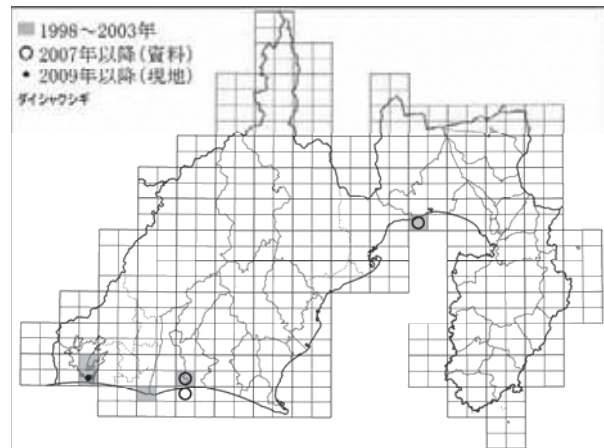
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士川河口 2006年4月1日 渡邊修治



(小粥秀治)



# ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 61 cm。上・下面とも淡褐色で黒褐色の縦斑がある。ダイシャクシギに似るが、褐色味が強く、腰と翼下面が白くない。嘴は長く下に湾曲している。脚は青灰色である。主に干潟などでカニや貝類、ゴカイなどの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では、ウスリー、カムチャツカ半島などユーラシア大陸の北東部で局地的に繁殖し、フィリピンからニューギニア、オーストラリアにかけて越冬する。国内では春秋に旅鳥として全国に渡来するが、琉球諸島などでは少数が越冬する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけて海岸付近での記録があるが、渡来数は少ない。

## 3. 生息環境

主として広い干潟や河口部、海岸付近の水田などに飛来する。

## 4. 生息状況

県内では大規模な干潟が生じる場所が少ないこともあり、生息適地はもともと限られていたが、最近では観察の機会が一層減少してきている。太田川河口においては1996年5月には5羽、2009年4月には7羽を数えたこともある(北川捷康氏私信)が、昨今一地域に飛来するものはほとんどが1~2羽である。2012年以降の近年では太田川河口の他、富士市、浮島ヶ原、浜名湖南部で生息が確認されているが、春は3~4月、秋は9月に観察されることが多いようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸部の埋め立てなどによる水辺環境の悪化(14)、昼夜を問わない釣りの四輪駆動車の往来をはじめ、ウォーターバイクなどレジャー圧の増加(71)による採餌や安息への阻害などが考えられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧(41)や環境破壊の影響の可能性(99)もある。

## 6. 保護対策

シギ類ではダイシャクシギとともに最も大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全(または創出)が求められる。また水辺のレジャーが与える影響については、人と生物の住み分けを考えていく必要がある。

## 7. 特記事項

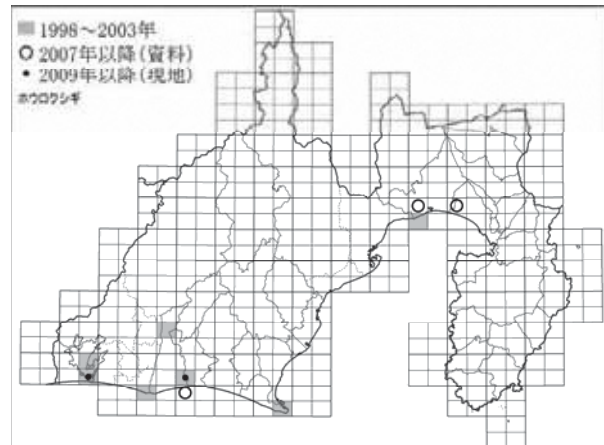
2007年3月16日に太田川河口において、越冬地のオーストラリア・ヴィクトリア州南部でフラッグを装着して放鳥された個体が、繁殖地へ向けて北上中に確認された(今井 敦氏私信)。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士川河口 1998年4月29日 渡邊修治



(小粥秀治)

# アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 27 cm。雌雄同色。冬羽は上面が灰褐色で下面は白色である。夏羽は上面に黄褐色と黒色の斑があり、下面の縦斑が目立つ。飛翔時には腰の白色と次列風切の白色が目立つ。脚は赤色であるが幼鳥は黄色味がある。干潟や海岸付近の水田、湿地で昆虫類やミミズなどの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯を中心に広く繁殖し、温・熱帯地域で越冬する。国内では北海道東部で繁殖、琉球諸島では越冬し、その他の地域へは主に秋に旅鳥として分布する。県内では沿岸内陸部に記録が点在するが、渡来例は少ない。

## 3. 生息環境

内陸の水田や河川、池沼、湿地などに生息する。ごく稀に河口部のような干潟へ出ることもある。

## 4. 生息状況

県内においては渡来数の非常に少ない種で、出現頻度が低いこともあり、過去の渡来地は限られている。2003年頃まで数年にわたり連続して渡来があった袋井市浅羽地域の水田でも現在では稀な状況となってしまった。県内での観察例はほとんど秋季であるが、2017年4月に磐田市西貝塚において1羽が観察されている(小岸順子氏私信)。過去の多数渡来としては2003年9月に袋井市浅羽地域において27羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。なお、2014年以降では太田川河口、富士川河口、浮島ヶ原(8羽)で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

もともと県内での観察例は少ない種であるが、近年の出現頻度は更に低下している。生息環境からみれば全国各地の干潟の減少(14)や、水田の圃場整備(15-2)、湿地の開発(15-1)が本種に及ぼす影響は決して少なくないと思われる。

## 6. 保護対策

まとまった水田地帯の保全が望まれる。湿地の確保や再生も重要である。

## 7. 特記事項

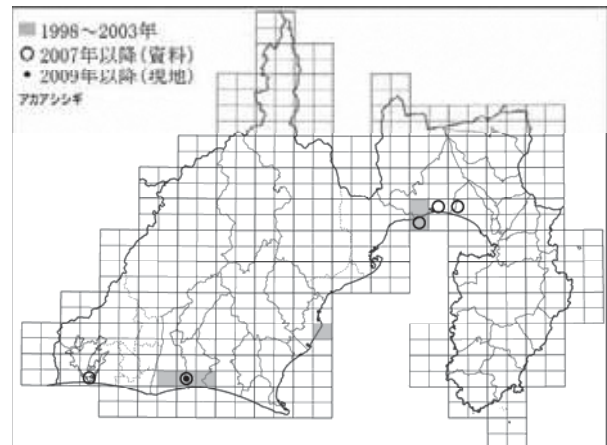
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



袋井市浅羽 2003年9月12日 北川捷康



(小粥秀治)

## コアオアシシギ *Tringa stagnatilis* (Bechstein, 1803)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 24 cm。冬羽は上面が青灰色で下面は白色である。夏羽は上面が灰褐色地に白と黒の斑があり、頭から胸にかけては黒褐色の斑がある。嘴は細長く直線的で黒く、脚は細長い。水田や池沼などの湿地で歩きまわりながら昆虫類や甲殻類などの小動物を採食する。水に腹まで浸っているような場所でも、1羽か小群でせわしげに探餌していることがある。旅鳥(対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸内陸部の温帯域で繁殖し、アフリカ大陸南部、オーストラリアなどで越冬する。国内では主に秋に旅鳥として分布するが、本州、九州では越冬するものがあり、琉球諸島では冬鳥として分布する。県内では局地的に分布し、渡来数は少ない。

### 3. 生息環境

海岸に近い水田や池沼などの湿地に主に秋季渡来する。海岸付近の干潟へ出ることはほとんどない。

### 4. 生息状況

県内においては従来から渡来数の多い種類ではなかったが、最近ではさらに見かける機会が減ってきている。過去には定期的に渡来していた磐田市大池においても、近年では確認できないケースが増えてきた。過去の多数渡来としては 2003 年 9 月に袋井市浅羽地域において 17 羽の観察例がある。春の渡来例は稀であるが、2007 年 4 月に磐田市大池で夏羽の個体が 1 羽記録されている(北川捷康氏私信)。2014 年以降では焼津市田尻、浮島ヶ原、浅羽地域(5 羽)で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種のような淡水を好むシギ類にとっては共通の生息場所である平野部の水田や湿地は、乾田化(15-1)や埋め立て(15-2)などによる開発行為により減少を続けてきており、今なお最も開発の対象とされやすい場所となっている。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊の影響(71)が関わっている可能性もある。

### 6. 保護対策

袋井市浅羽地域においては、農作業の一環として水田地帯の一部で土地所有者が 8~10 月に田に水を引き入れることにより、本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が一時的に創出されている事実があったが、保護にはこうした方法を見ならうべきである(しかし、水張りの行われた一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺到して近隣住民とのトラブルが発生するといった状況が起こり、保護上の新たな問題となっている)。

### 7. 特記事項

特になし。

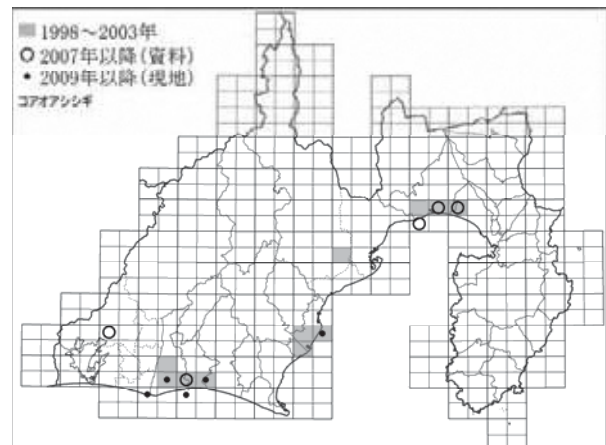
### 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥。山と溪谷社、東京、591 pp.

(小粥秀治)



袋井市浅羽 2003年9月16日 中村裕志





静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

### 1. 種の解説

全長約 21 cm。夏羽は上面が黒褐色地に白色の小斑があり、胸部、脇には黒褐色斑がある。腹は白色である。冬羽は上面や胸の斑は不明瞭になる。雌雄同色。嘴は黒く直線的で脚は黄緑色である。水田や河畔、池沼、湿地で主として昆虫類を採食する。稀に越冬する個体もいる。旅鳥(対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の亜寒帯から寒帯で広く繁殖し、アフリカ南部、インド、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。国内では全国に旅鳥として分布するが、本州、四国、九州では一部越冬するものもいる。県内では伊豆半島を除いた各地の平野部に分布する。

### 3. 生息環境

水田や河畔、池沼など淡水域の湿地に生息する。河口部のような海岸付近へ出ることはない。泥質の環境を好み、泥地が広がっているような場所では小群で採食しているところを見かける。

### 4. 生息状況

従来はごく普通に観察された種である。1970年代には100羽ほどの群れの記録(2003年9月袋井市浅羽地域における113羽の観察例: 北川捷康氏私信)もあるが、近年著しくその数を減じ、観察の機会も減少している。シギ類は総体的に近年減少が目立つが、その中でも特に急激な減少が顕著な種である。2013年以降では、掛川市(7羽)、湖西市、磐田市福田、富士市、浮島ヶ原、浜名湖北部、浅羽地域で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種を含む淡水域を好むシギ類の減少は、共通の生息場所である平野部の水田の乾田化(15-2)や湿地の埋め立て(15-1)などの開発行為が、要因として相当の影響を及ぼしているのは事実である。しかし環境変化がそれほど顕著ではないと思われる地域での減少も進んでいて、長距離を移動するシギ類にとっては国外の渡りの通過地域における捕獲圧(41)や環境変化(71)が個体数の変動に大きく関わっていることも十分に考えられる。なお、水田においては定期的な農薬散布が実施されているところも多いが、これについての影響は不明である。

### 6. 保護対策

袋井市浅羽地域では、農作業の一環として8~10月に田に水を引き入れるため、本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が一時的に創出されている事実があったが、保護にはこうした方法を見ならうべきである(しかし、水張りした一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺して近隣住民とのトラブルが発生し、保護上の新たな問題となっている)。

### 7. 特記事項

特になし。

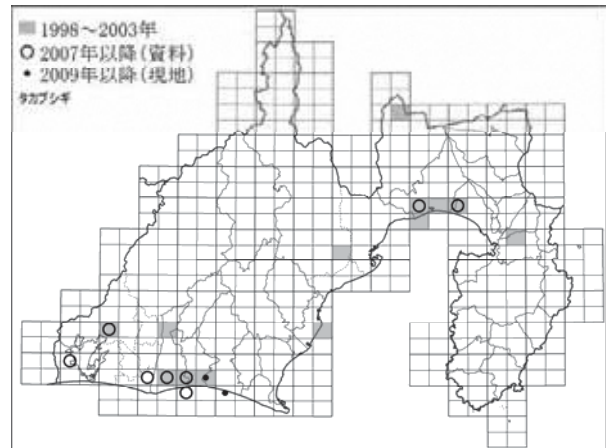
### 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説(p72)の引用文献に挙げたものを利用した。

(小粥秀治)



磐田市鎌田 1991年4月30日 北川捷康





# オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leisler, 1812)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 14 cm。雌雄同色。夏羽は頭上から胸にかけて黄褐色で黒い縦斑がある。上面も黄褐色で黒い軸斑がある。腹は白い。冬羽の上面及び胸は暗灰色である。嘴は短くて黒く、脚は黄褐色である。水田や河川、湖沼、湿地で昆虫類の幼虫やミミズなどの小動物を採食する。旅鳥、一部越冬（対象：生息地）。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の寒帯で繁殖し、アフリカ大陸中央部、インド、東南アジアなどで越冬する。国内では旅鳥として全国的に分布するが、一部越冬する。県内では秋季旅鳥として通過する個体と越冬する個体があり、富士市から浜名湖にかけての平野部に記録があるが、生息地は限られる。

## 3. 生息環境

水田や河川、池沼、湿地の泥地などに生息する。

## 4. 生息状況

浜名湖、天竜川、磐田市大池、袋井市浅羽地域の水田、大井川河口付近の廃養魚場、富士川河口、浮島ヶ原などに生息していたが、湿地の埋め立て、河川改修により数少ない生息場所はさらに限定されてきている。過去の多数渡来としては 2009 年 10 月に磐田市大池において 7 羽の観察例がある（北川捷康氏私信）。2008 年以降は、上記大池の他、浜松市鶴見町の天竜川河川敷、浅羽地域、浮島ヶ原で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修工事による河川内の州の消失（13）、湿地の埋め立て（15-1）により、生息適地は減少している。元来、生息地が限定されていた種だけに、生息環境の破壊はそのまま地域的な絶滅につながるおそれ大きい。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧（41）や環境破壊、温暖化の影響（71）が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

従来からの定期的な渡来地、生息地を再確認のうえ、当面は現存する生息環境の保全・維持対策が急務と考える。一時的な飛来地である水田などの確保も重要である。

## 7. 特記事項

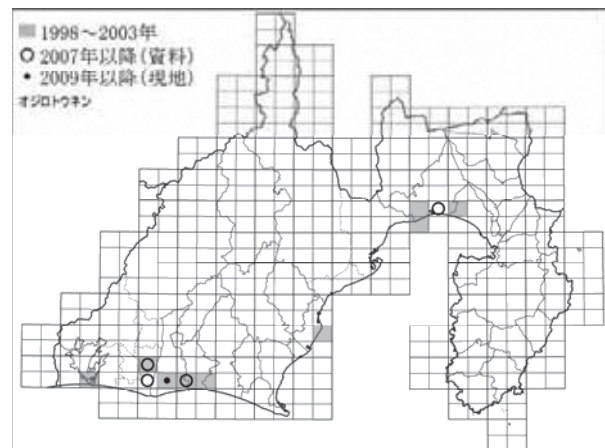
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編（1985）山溪カラー名鑑 日本の野鳥。山と溪谷社，東京，591 pp.



浜松市中区上島 1987年11月15日 中村裕志



(小粥秀治)

## ヒバリシギ *Calidris subminuta* (Middendorff, 1853)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 14 cm。雌雄同色。夏羽は頭上から上面は茶褐色で、頭中央線両側の白線が目立つ。胸側には茶褐色と黒色の小斑があり、腹は白色である。冬羽は全体的に茶褐色味が乏しくなる。嘴は黒色で脚は黄緑色である。水田や湿地を好み、昆虫類の幼虫などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではシベリア北東部の亜寒帯で繁殖し、インド、東南アジアやオーストラリアで越冬する。国内では主に秋に旅鳥としてほぼ全国に分布するが、本州、九州では一部越冬する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸に沿った内陸湿地で記録があったが、近年は観察機会・個体数ともひどく減った。

### 3. 生息環境

内陸の水田や河川、池沼、湿地などに生息する。ごく稀に河口部のような干潟へ出ることもある。

### 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の少ない種類であったが、過去に生息していた場所においても、現在では生息できない環境に変化してしまったケースが多くなった。春季の渡来例はほとんどない。過去の多数渡来としては2003年9月に袋井市浅羽地域において6羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2003年以降は、掛川市(4羽)、磐田市大池、浅羽地域(3羽)で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種のような内陸湿地を好むシギ類にとって共通の生息場所である平野部の水田の圃場整備による乾田化(15-2)や湿地の埋め立て(15-1)などの開発行為により減少を続けてきており、この傾向は今後も続く予測される。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊、かすみ網による大規模な捕獲圧(41)、温暖化の影響(71)などが関わっている可能性もある。

### 6. 保護対策

本種が利用する水田や湿地のような場所が一般的な認識ではさほど重要視されていない。そのような環境が本種にとって重要であるという事実もほとんど知られておらず、啓発が必要である。

### 7. 特記事項

特になし。

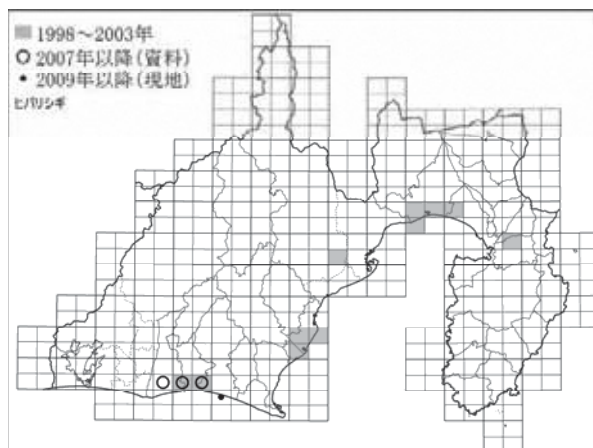
### 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥。山と溪谷社、東京、591 pp.

富田 宏・柏木 実 ラムサール・ネットワーク日本(2014) 絶滅の危機! ヘラシギを救うために パードリサーチ水鳥通信 4: 4



袋井市浅羽 2003年9月16日 中村裕志



(小粥秀治)

# ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 21 cm。雌雄同色。オスがやや大きい。夏羽は上面黒褐色で羽縁が褐色、頭頂は赤褐色である。顔から脇にかけて黒斑があり、腹は白色である。冬羽の上面は褐色味が少なく、下面の斑も不明瞭となる。嘴は黒色で脚は黄緑色である。水田や湖沼、草地や湿地を好み、昆虫類などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部の寒帯で局所的に繁殖し、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬する。国内では春秋に旅鳥として渡来し、全国に記録がある。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸に沿った内陸湿地に渡来するが、分布地も個体数もきわめて少ない。

## 3. 生息環境

水田や河川、池沼、草地や湿地などに生息する。

## 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の多い種ではなかったが、過去に生息していた場所においても、生息不可能な状態になってしまっているか、または渡来が途絶えるなどして現在は渡来数が非常に少なくなってきている。過去の多数渡来としては1979年5月に浜松市村櫛町で21羽、1996年10月には磐田市大池で5羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2007年以降は、御前崎、浮島ヶ原、磐田市大池で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種のような淡水を好むシギ類にとっては共通の生息場所である平野部の水田や湿地は、埋め立て(15-1)などによる開発行為により減少を続けてきており、この傾向は今後も続くと思われる。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に最大の脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊、かすみ網による大規模な捕獲圧(41)、温暖化の影響(71)などが関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

本種が利用する水田や湿地のような環境が一般的な認識ではさほど重要視されていない。そのような環境が本種にとって重要であるという事実もほとんど知られておらず、啓発が必要である。

## 7. 特記事項

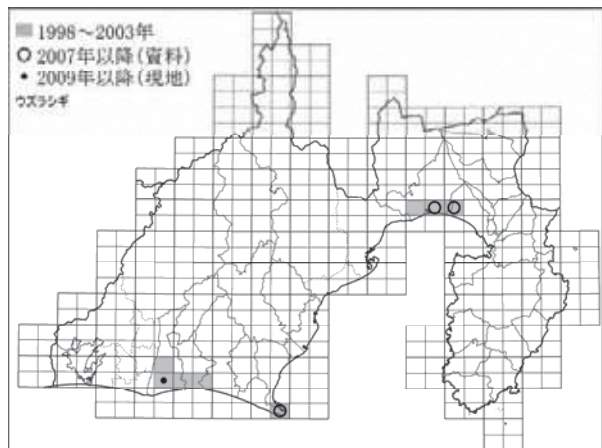
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



©2019 S.Watanabe  
富士市檜浮島ヶ原 2012年5月8日 渡邊修治



(小粥秀治)



# ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm。渡来期から越冬期の冬羽は上面が灰色、顔と腹面は白い。飛行時に翼の白帯が目立つ。渡去前には夏羽になり、背面は黒い軸羽のある赤褐色羽に、腹には大きな黒い斑ができる。雌雄同色。長めの嘴はやや下方に曲がっている。餌は小貝類、トビムシ、ミミズ、ゴカイのほか昆虫類、クモ類など。干潟での採餌法は泥中に嘴の先端を入れたまま歩きながら獲物を捕らえる。干潟では干潮に合わせて夜間でも採餌する。日本を含む東アジアで越冬するのは北アメリカ北極海沿岸で繁殖する亜種キタアラスカハマシギ *C. alpina arctica* である。冬鳥 (対象：越冬地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア、北アメリカの極北の沿岸部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ中北部、中東、中国、北アメリカなどの沿岸部で越冬する。国内では本州以南で越冬する。県内では東・中・西部の大河川の河口部及び西部では河川の内陸部、満潮時には海岸に近い内陸湿地にも分布する。

## 3. 生息環境

干潮時に干潟が出る環境を最も好む。一般的には内陸部へはあまり入ることがないが、西部地域はおそらく全国的にも特別なようで、遠州灘の海岸から比較的近い内陸湿地にも生息し、天竜川では内陸部の低水路、中州の砂礫や広場の芝生地にも多数が入る。

## 4. 生息状況

浜名湖、天竜川河口、太田川河口などに最も多く、干満差の少ない河口部にも少数が生息する。磐田市大池や袋井市浅羽の水田など海岸から 2~4 km の内陸部の湿地や、天竜川では河口から内陸 23 km 付近まで採餌に入る (飛竜大橋南, 2008. 2. 12 25 羽)。筆者の調査 (太田川・天竜川河口) では 1996 年の 520 羽から 2017 年の 33 羽に至るまで、急激な減少を示している。なお、富士川河口では 2008 年までは 100 羽台と安定していたが、2010 年以降はまったく観察されない年もあるという (渡邊修治氏私信)。

## 5. 減少の主要因と脅威

干潟の浚渫や造成 (13)、天竜川では中流部までの砂利採取 (13) が最大の脅威になる。主な採餌や休息場所の天竜川や太田川の砂嘴付近やそれに続く海岸線が、生息期全体を通して釣り、ウィンドサーフィン、エンジン付きパラグライダー、四駆車往來のレジャー圧 (71) を受け続けていることが挙げられる。

国外の状況では、北米の北極圏内を繁殖地とするシギ・チドリ類 6 種の雪解け時期・気温などは生存率への影響はなく、唯一本亜種のみ生存率が低かった。その理由が、東アジアの中継地・越冬地の減少やかすみ網による大規模な捕獲圧 (41) と考えられている。

## 6. 保護対策

干潟の浚渫や造成及び河川環境の安定に留意することが必要である。

## 7. 特記事項

なし。

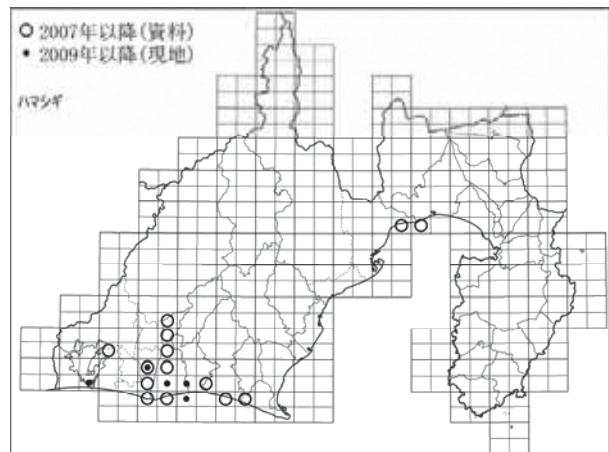
## 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

守屋年史 (2018) 冬のハマシギが減少中. バードリサーチ水鳥通信, 1: 1



浜松市村櫛 1997年5月5日 北川捷康



(北川捷康)



# キリアイ *Limicola falcinellus* (Pontoppidan, 1763)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 17 cm。雌雄同色。夏羽は上面が赤褐色で黒色の軸斑があり、白い頭側線及び眉斑が目立つ。胸から脇にかけては黒斑があり、腹は白色。冬羽の上面は灰褐色を呈する。嘴は黒くて先端部がやや下に曲がり、脚は黒色である。干潟や水田、湿地を歩きまわりながら、昆虫類、水生の小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の寒帯で局地的に繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では春秋に旅鳥として渡来し、ほぼ全国に記録がある。県内での観察例はほとんどが秋季であり、伊豆半島を除く駿河湾から遠州灘沿岸に、主として幼鳥が1~数羽渡来する程度で分布地も個体数も少ない。

## 3. 生息環境

河口部や干潟、海岸に近い水田、湿地に生息し、泥質の場所を好む。県内では泥質干潟が出る場所が少ないこともあって、水田に飛来するものを見かけることが多い。

## 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の多い種類ではなかったが、さらに渡来数、渡来頻度は減少している。湿地などの生息環境に大きな変化が生じた場合には、地域的な絶滅の可能性も否定できない。過去の多数渡来としては2005年5月に御前崎海岸で10羽(北川捷康氏私信)、2007年8月に太田川河口で18羽の観察例がある(今井敦氏私信)。2011年以降は、太田川河口の他、浅羽地区、浜名湖南部、浮島ヶ原で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

水田の圃場整備による乾田化(15-2)や湿地の埋め立てなど(15-1)により生息場所は減少を続け、今なお最も開発の対象とされやすい場所となっている。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動する本種にとって中継地点となる当該環境の消失は生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊や温暖化の影響(71)が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

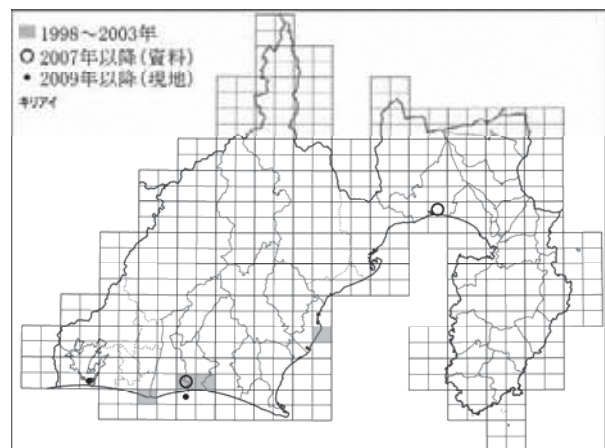
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士市五貫島 2006年8月15日 渡邊修治



(小粥秀治)

# タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)

タマシギ科 Rostratulidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 24 cm。オスは頭中央線があり、上面は褐色で喉から胸は黒褐色。上面はメスに比べて褐色味がある。メスは頭が灰褐色で淡黄色の頭中央線がある。アイリングとその後方は白、額から頸は濃赤褐色で胸から脇にかけ白線があり、背にある黄褐色の線につながる。上面は緑色味を帯びた灰褐色。水田、休耕田で甲殻類、貝類、昆虫類の幼虫、ミミズなどを採食する。メスがさえずり、地味な色彩のオスが抱卵や育雛などを行う。雌雄の形態と習性の特徴が普通の鳥と逆になっている一妻多夫の変わった生態を持つ。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では中国、東南アジア、インド、アフリカ南東部・中西部などで留鳥として生息する。国内では北海道、南千島、本州、四国、九州、佐渡、見島、対馬、種子島、トカラ列島、奄美大島、琉球諸島に生息し、本州中部以南では留鳥または漂鳥である。県内では伊豆のぞく地域に分布する。

## 3. 生息環境

留鳥として、平地の淡水湿地、水田、河川敷、用水路、草地に生息する。繁殖期の観察は水田が主となり、冬期では河川敷、水路での観察例が多い。西部の一地域では、水田に囲まれた放棄水田 (1反程のヨシを中心とした高茎草地) での繁殖が稀ならず確認され、同地ではヒクイナ、オオヨシキリも例年のように繁殖が確認される。

## 4. 生息状況

静岡県 RDB 2004 以後の推移として、伊豆は本調査でも確認記録はなかった。東部は 3 メッシュから 2 メッシュに、中部は 5 メッシュから 2 メッシュに、西部は 8 メッシュから 12 メッシュとなったが、本種は夜行性の傾向が強く、その生息環境は踏査困難な場合があるため記録出来ない可能性も残る。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13)、水田の乾田化、用水路の 3 面護岸化 (圃場整備) により餌となる土壌生物や水生生物の消滅及び退避地、営巣地としての草地消滅 (15-2) など利用可能な生息地の減少が主要因である。

## 6. 保護対策

1970 年に施行された米の減反政策も 2018 年 4 月を持って終了となる (政府発表)。これを機にコメ農業の大規模化や会社組織の法人化などが加速し新たな開発問題が危惧される。現存する水田の保持継続は絶対条件であり、保全に際しては農家の理解と協力が不可欠である。

## 7. 特記事項

特になし。

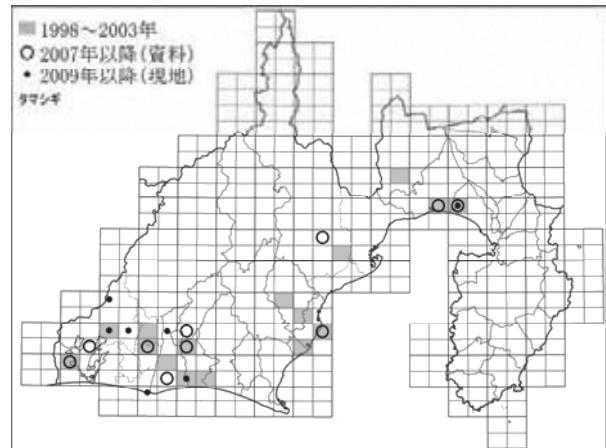
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(森田剛則)



左：オスと雛 浜松市 1992年5月20日 北川捷康  
右：メス 浮島ヶ原 2006年6月2日 渡邊修治



# ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* (Temminck, 1821)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 57 cm、メス約 60 cm である。翼開長 121~135 cm。体色は上面が褐色ないし暗褐色であるが、下面はかなり白っぽい個体から暗褐色の個体まで、個体によって様々である。体下面の斑や、喉の模様、尾羽の黒色帯も個体により違いがある。また、オス成鳥の眼は暗褐色で、メス成鳥の眼は黄色である。日本には夏鳥として渡来する。ハチの幼虫を好んで採食することや、翼を上方で打ち合わせるディスプレイ飛行を行うなど、タカ類の中でも特異な習性がある。夏鳥(対象:繁殖地)。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ及びアジアに、国内では北海道、本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖する。県内ではこれまでの観察例から低山帯に広く分布していると考えられる。標高 500 m 以下の低山が中心であり、高標高の山間地では少ない。

## 3. 生息環境

本種の分布は、広葉樹林など自然性の高い林の広さと密接な関係があるといわれている。餌はハチの幼虫を主とする昆虫や、カエル、トカゲなどであることから、これらが多く生息する落葉広葉樹林、草地、山間の水田、湿地などが重要な生息環境となる。採餌のために営巣地から数 km 先まで出かけることも稀ではなく、生息地には多様な環境が含まれている。

## 4. 生息状況

きわめて広範囲を飛行することから、生息はしていても営巣地が発見されることは稀である。もともと、静岡県には高密度で分布していたわけではないが、近年の減少傾向は顕著である。以前には常緑及び落葉広葉樹林が比較的多い西部の丘陵地で繁殖例が多かったが、現在の繁殖情報はきわめて少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息適地である平野部から低山にかけての里山環境が、道路建設(24)、平坦化する宅地・農地などの様々な開発行為(11、23)により改変されていることが減少の主要因と考えられる。本種は食物をハチに強く依存していることから、生息の動向はハチの発生状況や乱獲にも関係している可能性がある。

## 6. 保護対策

自然林や草地、湿地などを含む環境を保全する必要があるが、その規模は複数の市町村にまたがるほどとなる。そのため、造林地や農地も含めた広範な地域の中で、落葉広葉樹林や草地、湿地などを含む多様な環境を育成することが保護につながるものと考えられる。

## 7. 特記事項

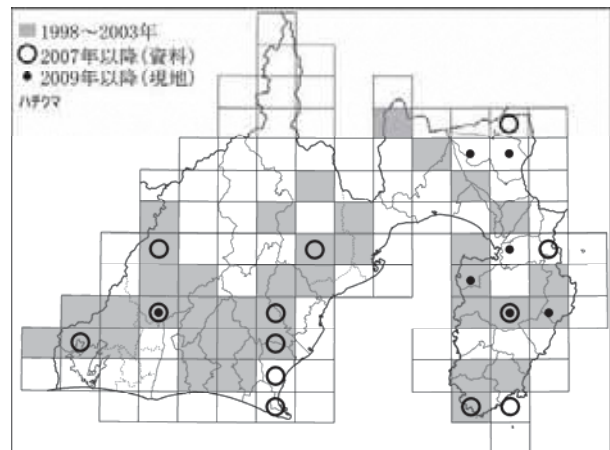
越冬地の中心は東南アジアであり、中国内陸部を通過する長距離の渡りをすることで知られている。

## 8. 主な文献

久野公啓(2015)ハチクマ. バードリサーチニュース, 12(9): 1-2



牧之原市 2010年7月21日 新井 真



(新井 真・近藤多美子)



# ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

オオタカと近縁でやや小型のタカである。全長オス約30 cm、メス約37 cmである。翼開長オス60.5~64 cm、メス71.5~79 cm。成鳥は頭部から背面、尾上面が灰色、下面は白っぽく胸から腹にかけてオスはオレンジ色、メスは褐色の横縞がある。幼鳥はメス成鳥に似るが褐色味が強い。森林性のタカであり、小鳥類を捕食する。留鳥または冬鳥(対象:繁殖地、越冬地)。

## 2. 分布

国外では極北を除くユーラシア大陸に広く分布する。国内では本州中部以北で繁殖し、冬期は全国で見られる。県内では山地で周年観察されるが、渡りをするタカであることから、冬期には低山で見られる機会が増える。

## 3. 生息環境

営巣地は標高のやや高い山地の林で、中型のタカよりもやや密な林を利用する。採餌には林縁や開放的な環境も利用している。冬期に観察されるものは、茶畑、果樹園やその周囲の林、時には水田や市街地上空などで小鳥を狩る。

## 4. 生息状況

県内での繁殖の確認は少なく、繁殖期における生息の確認は、中部から西部地方の北部と、東部地方の標高1,000 m前後の山間地である。小型ゆえに確認が難しく、繁殖状況に関する不明な点が多い。冬期に低山や平野部で見られるものは大陸や北方から飛来する越冬個体である。

## 5. 減少の主要因と脅威

詳細は不明だが、人工林の割合が多い県内の山林では、繁殖期における小鳥類の生息密度が低いため、餌環境が悪い(71)と推測される。

## 6. 保護対策

山地における自然林の保全、育成が必要と考えられる。

## 7. 特記事項

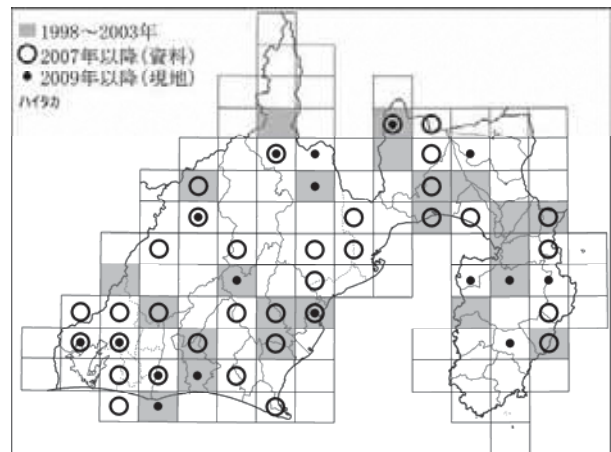
特になし。

## 8. 主な文献

平井克亥(2013)ハイタカ. バードリサーチニュース, 10(6): 3-4



沼津市原浮島ヶ原 2005年11月25日 渡邊修治



(新井 真・近藤多美子)



## サシバ *Butastur indicus* (Gmelin, 1788)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 47 cm、メス約 51 cm。翼開長 102~115 cm。成鳥は顔が灰色、頭部から背面、尾の上面が赤褐色で、下面は白っぽく胸から腹にかけて褐色の横縞がある。尾には褐色の横帯が 3~4 本ある。幼鳥は成鳥に似るが胸から腹にかけて縦斑がある。「ピッ、クイー」と特徴的な声でよく鳴く。カエル、ヘビなどの両生類、爬虫類と、バッタなどの昆虫類を主食とする。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

### 2. 分布

国外では極東の一部で繁殖し、冬季は東南アジアに渡り越冬する。国内では主として東北地方以南に夏鳥として渡来する。県内における最近約 10 年間の主な観察例は、標高 200 m 以下の山麓農村部にある。

### 3. 生息環境

樹林と水辺や湿地、草地がある谷戸環境を有する里山が生息適地であるが、本県における水田との関連性は高くはないと考えられる。営巣地は、生息地の中でも比較的樹齢の高い林で、林縁部に近い場所に架巢することが多い。採餌環境としては林縁または農耕地、山林内のギャップも利用される。

### 4. 生息状況

1980 年頃までは県内全域の低山で普通に見られたが、その後減少傾向が著しく、特に中部・東部では繁殖期の確認が非常に少ない。西部と伊豆ではまだ連続的に分布しているところもあるが、繁殖つがい数の減少は、掛川市では平成 17 年の約 6 割減と報告され、静岡空港周辺でも同程度減少している。近年の道路整備、農地造成などにより生息が途絶えた場所がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

餌の両生類、爬虫類やバッタなど昆虫類が生息する環境の減少が主要因と考えられる。これには、道路建設 (24)、宅地開発 (23)、農地開発 (15-2) など様々な開発行為が直接関係している。農地開発においては、農業規模の大型化や機械化に伴う農地形状の変更が餌生物を減少させる。また、里山における小規模耕作地 (水田のほか茶畑、ミカン園など) の放棄による樹林化 (53) が、採餌環境の減少につながる。

### 6. 保護対策

生息環境である里山や内陸部の湿地の保全や復元、餌生物を含む総合的で早急な環境保全を考えなくてはならない。開発にあたっては、餌となる小動物の生息に配慮した構造及び工法にする必要がある。

さらに、近年鳥獣害対策として普及した電気柵やネットなどが採餌の障害になる可能性を示唆する情報があり、保護対策として、詳細な生態や生息状況に関する調査も必要と考えられる。

### 7. 特記事項

秋の渡りで中部地方を通過するサシバは、静岡県で数千~1 万羽記録されている。渡りの中継地や越冬地の生息環境の変化や密猟も個体数の増減に関係している可能性がある。

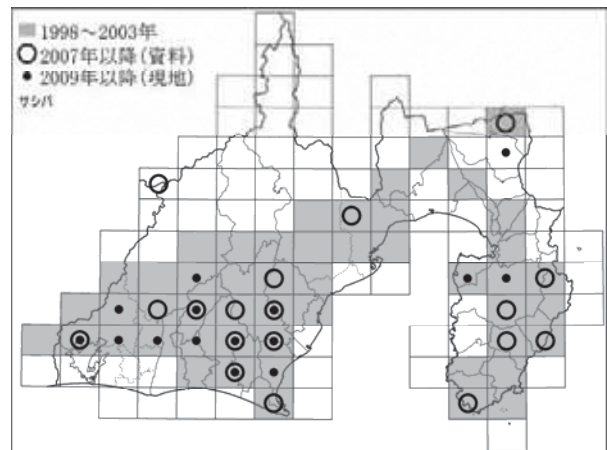
### 8. 主な文献

掛川市 (2016) 平成 27 年度掛川市自然環境調査集約事業報告書。掛川市, 掛川, 282 pp.

静岡県文化・観光部空港振興局空港運営課・静岡県静岡空港管理事務所・常葉学園 富士常葉大学・自然環境巡視連絡会 (2016) 富士山静岡空港自然誌-人と自然にやさしい空港をめざして-。静岡県, 静岡, 353 pp.  
(新井 真・近藤多美子)



富士宮市 2011年9月29日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

### 1. 種の解説

イヌワシと並ぶ大型の猛禽類で全長オス 70～74 cm、メス 77～83 cm である。翼開長オス 140 cm、メス 165 cm。成鳥は顔が黒く、後頭に冠状に逆立つ羽毛がある。頭部から背面は褐色で、下面は白っぽい。胸には縦斑、腹には横縞がある。尾には黒い横帯が 4～5 本ある。幼鳥は全体的に成鳥よりも淡色で、顔から胸は特に白く見える。森林性のタカであり、ノウサギ、ムササビやヤマドリのほか、小型の哺乳類や小鳥、ヘビ、カエルなど多様な生物を捕食する。留鳥（対象：生息地）。

### 2. 分布

国外ではアジア南部から東部に分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に生息し、各地で繁殖が確認されている。県内では標高 300 m 以上、高標高地に至る山地に広く分布し、周年生息する。富士山と箱根山麓では、地形的要因のためか、生息地は確認されていない。

### 3. 生息環境

山地の森林が主な生息環境である。営巣地は樹齢の高い林中で、営巣木は特に樹高のある大木を利用する。採餌行動は山間の伐採地などで観察されることが多いが、林内でも利用する。森林地帯での狩りに適応しており、多様な環境を含む森林地帯が生息適地である。

### 4. 生息状況

複数の地域での観察情報をあわせると、前回（2004年）以降、分布状況に大きな変化はないようだが、低標高地における新たな繁殖例がいくつか観察されている。繁殖成功率の低下が懸念される一方で、連続または隔年繁殖が観察される例もあるなど、地域による差が散見される。

### 5. 減少の主要因と脅威

過去からの個体数データは少なく増減は不明であるが、生物相豊かな自然林の減少（11）は、本種の生息環境の質を低下させ、生息への脅威になると考えられる。本県では伐採跡地や植林直後の幼齢林など開放された空間の他、間伐や枝打ちがされて林床に光が入り下層植生が発達した林も狩場として利用する。しかし、近年は植林地の手入れが少なく（53）、それが生息環境を悪化させていることも報告されている。

### 6. 保護対策

猛禽類の餌場環境創出を目的とした列状間伐が各地で実施され、他県では餌となるノウサギの増加が報告されている。針葉樹人工林の多い本県の場合、森林の多様性を高めるための低密度植栽、広葉樹林化などのあらゆる施策が、生態系の底辺を担う生物相を豊かにし、ひいては高次消費者の大型猛禽類の長期的な保護対策につながるものと考えられる。

### 7. 特記事項

種の保存法に基づく国内希少野生動物種（平成 5 年）。

### 8. 主な文献

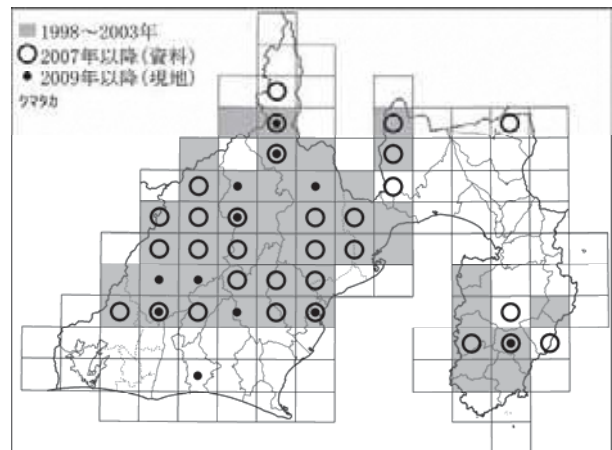
掛川市（2016）平成 27 年度掛川市自然環境調査集約事業報告書。掛川市，掛川，282 pp.

静岡県くらし・環境部環境局自然保護課（2006～2016）自然環境保全協定資料。

日本鳥学会（2008）森林性大型猛禽類の採餌環境改善の取り組みとその課題。2008 年日本鳥学会自由集会要旨集。



©2019 S.Watanabe  
静岡県内 2009年2月7日 渡邊修治



（新井 真・近藤多美子）

## アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles, 1822)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 29 cm。雌雄同色。体上面は濃褐色、体下面は白色で濃褐色の粗い縦斑がある。頭に羽角はなく丸坊主風、顔盤があまり発達していない。虹彩は黄色。夏鳥として 4 月下旬から 5 月中旬頃に渡来し、10 月頃に渡去する。ガ、コウチュウ、セミなどの昆虫類が主な餌で、小鳥やコウモリも食物とする。夜行性で、夕闇とともに、「ホッ ホッ」と二声ずつ続けて鳴く。夏鳥(対象:繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではインド、東南アジア、中国南部、朝鮮半島、ウスリーに、国内では夏鳥として全国に分布する。県内では平野部から低山にかけての市街地周辺、里地、里山に分布する。

### 3. 生息環境

平地から低山にかけての広葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

社寺のクスノキなどの大木の樹洞を巣として利用する傾向が強い。繁殖には、毎年同じ樹洞を使う。繁殖後は、分散して里地・里山の広葉樹林に生息する。かつては、各地に生息し、フクロウとともに最もなじみのあるフクロウ類であった。近年では、生息数が極端に減り、鳴き声を聞くことも珍しくなってしまった。

### 5. 減少の主要因と脅威

社寺の営巣できる樹洞のある大木は、以前と比べ大きく減少しているようには感じられないが、オシドリなどとともに河川に架かる橋梁を利用した繁殖例もあり、自然の営巣環境の悪化は否めない。里地・里山の荒廃(54)による採餌環境の悪化の影響も大きいと思われる。全国的に減少しており、越冬地の開発に伴う環境破壊(71)によるところも大きい。ネオニコチノイド系農薬の使用(32)により、餌の昆虫類が減少していることも危惧される。

### 6. 保護対策

社寺林や里山の大木を含んだ緑地を保護する必要がある。全国各地で、設置した巣箱による繁殖が確認されており、営巣が可能な林に巣箱をかけることも有効である。

### 7. 特記事項

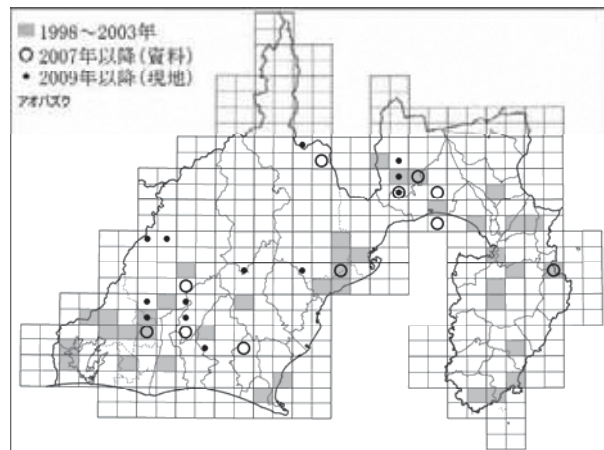
43の都府県のレッドデータブックに記載されている。

### 8. 主な文献

日本野鳥の会静岡支部(1982) 静岡市におけるアオバズクの分布と生息環境. Strix, 1: 93-102



磐田市中泉 1995年8月14日 北川捷康



(川合正晃)



## 1. 種の解説

全長約 27 cm。太くて大きな赤い嘴を持ち、全身が赤褐色のカワセミ類。腰の部分に青い羽毛がある。雌雄ほぼ同色である。梅雨の時期に「キョロロロロロ・・・」と尻下がりの特徴的なさえずりが聞かれることから、水乞い鳥の方言名がある。餌としてモリアオガエルなどのカエル類、サワガニ、小魚などの他に昆虫類も捕食する。夏鳥(対象:繁殖地)。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島からやや北の地域及びヒマラヤからインドネシアまで繁殖する。国内では北海道から南西諸島まで夏鳥として繁殖し、台湾以南で越冬する。県内では西部地域には多く、東部・伊豆地域にはきわめて少ない。

## 3. 生息環境

標高 200 m 前後の丘陵地から山地の沢や湿地のある落葉広葉樹林に生息する。朽ち木に穴を穿って営巣する。大径木の朽ち木が少なくなり、住宅難から大きなスズメバチの巣に穴をあけて営巣した例が 1988 年に初報告されて以来、各地で聞かれるようになった。50 年以上も前に、全国屈指の野鳥の多い富士山麓地域にはよい落葉広葉樹林が広がっているのに、本種だけが稀であることとその理由を指摘した学者がいた。水(沢)が乏しいからであると(清棲, 1966)。

## 4. 生息状況

5 月下旬頃に渡ってきて落葉広葉樹林に生息し繁殖する。東部・伊豆地域は以前どおり少なかったが、西部・中部地域では 2016 年に精査した結果、予想以上に生息していることが明らかになった。温暖化の影響かどうか、この状態が続くのかどうかは即断できないが、個体数の面だけを見れば当面の危機はないと思われるので、カテゴリーを 1 ランク下げて様子を見ることにした。

## 5. 減少の主要因と脅威

戦後の拡大造林から近年に至るまで奥地に至る広大な落葉広葉樹林が伐採(11)されてスギ・ヒノキの人工林に変わり、生息適地の森林環境と営巣可能な大径木が減少した。

## 6. 保護対策

樹洞を利用する種は巣箱設置により保護が可能になるが、全国各地で巣箱設置が行われているにもかかわらず、本種が巣箱を利用したとの報告例はなかった。そこで、コルクを用いた新たな巣箱が開発され、期待が寄せられている。

## 7. 特記事項

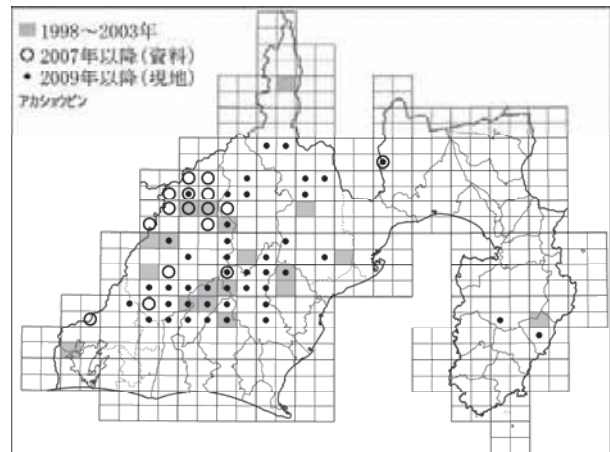
生息・繁殖環境ともに悪化しているし、保護用に設置した巣箱も利用していないのにも関わらず個体数が維持されている状況は理解の域を超えている。夏鳥の多くが減少傾向にある一方で、サンコウチョウ、キビタキ、サンショウクイなど増加あるいは復活の傾向が見られる種もあり、今後の動向が注目される。

## 8. 主な文献

- 清棲幸保(1978) アカショウビン. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I, pp. 435-437. 講談社, 東京.  
美馬秀夫・中村正博・中坂学夫(1988) アカショウビン *Halcyon coromanda* がスズメバチの古巣で繁殖. Strix, 7: 283



静岡県内 1996年6月3日 渡邊修治





静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス 38~44 cm、メス 46~51 cm である。翼開長オス 84~104 cm、メス 111~120 cm。性的二型が顕著で、メスの方がかなり大きい。頭部から背面、尾の上面が黒く、下面は白っぽい。胸は白地に細かな縦斑があり腹部には横縞がある。顔にはハヤブサ類特有のほおひげ状の模様がある。幼鳥は全体に褐色味が強く、胸から腹に顕著な縦斑がある。翼は細長く、先が尖っている。開けた場所での狩りを得意とする。留鳥または冬鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外では南極大陸とニュージーランドなどを除き、ほぼ世界中に分布する。国内では北海道、本州、四国、

九州に周年生息し繁殖する。ほとんどの地域では留鳥だが、冬期には北方から飛来している個体もあり、繁殖していない地域でも越冬個体が観察される。県内では主に冬鳥として全域で観察される。

### 3. 生息環境

海岸や河川などの開放的な環境に生息し、高速で巧みな飛翔や急降下による狩りで鳥類を捕食する。飛翔能力が高く、広範囲を移動するので山間地にも出現することもある。県内でも繁殖が確認されたが、繁殖地では高い崖の岩棚や穴を使用して営巣する。

### 4. 生息状況

最近是一年を通して見られる地域や、伊豆の一部で繁殖が確認されている地域がある。数はごく少ないものの、繁殖例は定常化しつつある。冬の間は、市街地のビルに居着き、ドバトなどを餌としている個体も見られる。市街地や平野部に近い里山、山地に生息するが、海岸近くや平野部の河川、遊水地、緑地などの広い開放的な場所で観察されることが多い。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種は、1950~1970年代に有機塩素系農薬 (32) により世界的に激減した。日本においても同様な原因が考えられている。1990年代以降は復活傾向にある。本県では、海岸線や河川の崖などの営巣適地は少なく、狩りに適した開放的で捕食対象の鳥が多い場所も開発 (13、14) やレジャー (71) などにより少なくなっている。

### 6. 保護対策

県内において海岸線や河川の崖などの営巣適地は限られており、保全する必要がある。

### 7. 特記事項

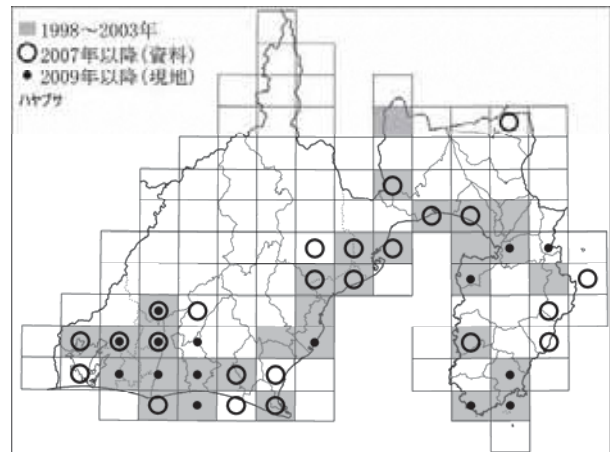
種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成5年)。

### 8. 主な文献

北沢善政 (1996) ハヤブサ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類Ⅱ, p. 175. 平凡社, 東京.



天竜川 2008年2月12日 北川捷康



(新井 真・近藤多美子)

### 1. 種の解説

全長約 19 cm。体上面は藍黒色で、眼の上から後頸部の一部と腰及び下尾筒は橙褐色。頬、喉、腹部は白褐色で黒褐色の細い縦斑がある。雌雄同色。尾羽は一番外側が他より長い燕尾形。ツバメより大きく、ツバメ類の中では腰が橙褐色で胸から腹に細い縦斑点があるので識別は容易である。ツバメより遅い4月中～下旬頃に渡来し、10月中・下旬頃に渡去する。餌はカやハエ類、カメムシ類、ユスリカ類などの小型昆虫類である。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではロシアウスリー地方、韓国、中国から小アジアまでとバルカン半島、アフリカ中部で繁殖する。国内では北海道から九州まで夏鳥として渡来し繁殖する。県内では主に標高の低い市街地や農村部に分布する。

### 3. 生息環境

市街地、村落、池、河川、河口付近に生息する。飛翔する小型昆虫類を飛びながら捕食するので、これらの昆虫類の多い地域に生息し、コンクリートやモルタルなどの建造物に、泥と糞に唾液を混ぜ合わせて徳利を縦に割って天井に張り付けた形の巣を造る。

### 4. 生息状況

県内の平地の広い範囲で繁殖し、もともと集団でコロニーを形成し毎年同じコロニーを利用する習性があった。しかし、前年使用した巣が、留鳥のスズメやヒメアマツバメに奪われるケースが増え、県内最大の JR 菊川駅にあるコロニー（50 巣ほど）も 25 年以上前に消滅した。各地でコロニーの消滅が目立ち、10 巣を超えるコロニーはほとんどなくなった。川幅 10～20 m ほどの川に架かる橋の裏側に数巣のコロニーを形成するケースもある。筆者の秋の渡り時の調査では、1960 年代には旧天竜市街の二俣川双竜橋付近の電線にびっしりと並んで止まる 600～1,000 羽ほどの集団が見られた。現在は、川や湿地で餌の補給ができる場所に数十羽の群れが見られる程度になった。

### 5. 減少の主要因と脅威

スズメやヒメアマツバメなど他の種に巣を奪われ（56-2）、巣材の泥が付着しにくい営巣場所の新建材（71）に苦勞して造り直しても、カラスに繁殖中の巣を壊されて卵やヒナを捕食される（52-4）、という状況が減少の主要因である。なぜスズメが本種の巣を奪うようになったのか。かつて私たちの住んでいた和風の家は軒端を含めて隙間が多くそれらをスズメが巣に利用していたが、洋風の新建材を用いた建物には巣に利用すべき隙間がなくなったことが原因である。それらに加えて、ツバメ類を益鳥として保護しようという意識が薄れたようで、家が汚れた、糞が汚いと人によって巣が壊される事態（71）まで生じるようになった。

### 6. 保護対策

人為的な巣の破壊については、本種の置かれた状況の啓発が必要であろう。

### 7. 特記事項

特になし。

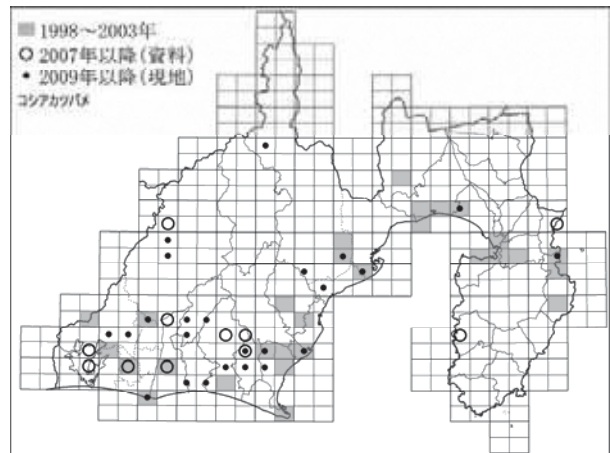
### 8. 主な文献

高野伸二 編（1985）ロシアカツバメ．山溪カラー名鑑 日本の野鳥，山と溪谷社，東京，：390

（北川捷康）



©2019 H.Nakamura  
浜松市中区上島 1987年11月15日 中村裕志



# イイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* (Stejneger, 1892)

ムシクイ科 Phylloscopidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②)変更コード7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 11.5 cm。雌雄同色。本種はセンダイムシクイに極似しており、上面は淡いオリーブ緑色で下面は淡い黄白色、眉斑は細い。両者の違いは、本種には頭中央線がなく、また、目の下側の黄白色が目立つ場合が多い。さえずりは他と全く異なるため、春の渡りの時には、鳴き声で本種と確認できる。本県には、伊豆諸島で繁殖した個体が旅鳥として春秋に通過する。旅鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

本種は世界で伊豆諸島の大島から青ヶ島までとトカラ列島の中の島にのみ、夏鳥として渡来、繁殖する。本種が最も多く生息するのは、伊豆諸島の三宅島である。県内では春に遠州灘沿岸の照葉樹林を通過する個体が観察される。秋季の記録は、天竜川河口付近の河畔林の標識調査と南伊豆町のわずかな観察記録のみである。

越冬地はフィリピンなど東南アジアと思われるが、もともと生息数も少なく観察による識別も困難なことから詳細は不明である。

## 3. 生息環境

繁殖地の伊豆諸島は、スダジイやタブノキが優占する常緑広葉樹林で生息密度が高く、落葉広葉樹の二次林にも生息する。本県では渡り中継地として、広葉樹林、平地の照葉樹が茂る公園、河畔林などで観察されている。

## 4. 生息状況

本県では、3月末から4月にかけて、山地の自然林や照葉樹が茂る公園、ヤナギを主とした河畔林でさえずりや標識調査により確認されている。センダイムシクイより渡りの期間が早く、4月下旬にはほぼ渡り終わるが、天竜川河口で5月2日の標識記録(北川, 2007)もある。南伊豆町では、2016年に18羽が確認されている(渡部良樹氏私信)。

一方、秋季は8月下旬から9月にかけて本県を通過しているものと思われるが、近年の確実な記録は、天竜川河口付近のヤナギ林で標識調査による数例があるのみである。和歌山県や愛媛県の標識調査から、秋季は主として山地帯を通過して越冬地に渡っているようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖地の三宅島では、地上付近に営巣する本種がネズミ駆除のために放獣されたイタチの捕食(52-3)により個体数を減少させていることが懸念される。また、渡来地・越冬地の環境悪化(54)も懸念される。なお、三宅島の噴火を原因とした生息数の減少は、火山活動の鎮静化とともに植生が回復し、その影響は徐々に収まってきているものと推測する。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物(昭和50年)。

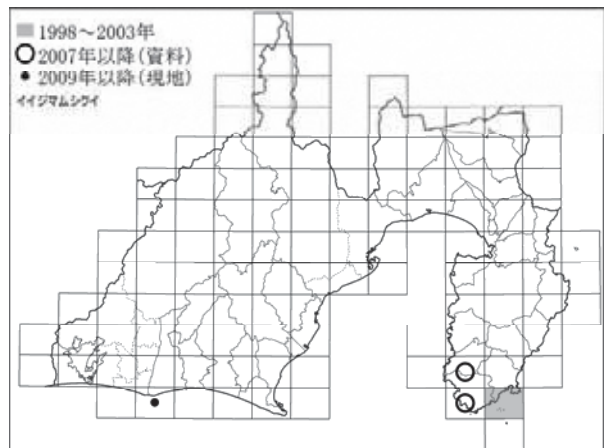
## 8. 主な文献

樋口広芳(1973)伊豆諸島の鳥類(Ⅱ)イイジマムシクイの伊豆半島通過例と伊豆諸島における越冬例。鳥, 22: 24-25

北川捷康(2007)2006年天竜川河口鳥類の渡り調査報告ー渡りルート上への巨大風車群増設計画の問題点を踏まえてー。遠州の自然, 31: 6



天竜川河口(標識調査) 2014年4月13日 川合正晃



(川合正晃)



# ウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* Taczanowski, 1890

センニュウ科 Locustellidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更コード7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

全長 16.5 cm。雌雄同色。羽色は全身灰褐色。近縁のシマセンニュウと比較すると全体にやや大きく、嘴、足ともにやや長い。羽色は黒味が強い。広げた尾羽はセンニュウ類の特徴である扇状を呈するが、シマセンニュウに比べ丸みが緩やかで汚白斑はやや小さい。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島周辺、国内では九州近海、紀伊半島周辺のいくつかの小島、伊豆七島の三宅島を中心とした島嶼に夏鳥として渡来、繁殖する。非繁殖期は、中国南部、インドシナ半島に渡り越冬する。県内では伊豆諸島で繁殖する個体が春秋に旅鳥として通過する。

## 3. 生息環境

繁殖地では、笹藪、ススキ原、海岸付近の矮性照葉樹林に生息する。一方、県内では、近年、天竜川河口のヨシ原が、渡りの中継地として定期的に利用されていることが標識調査により確認されている。

## 4. 生息状況

1990年代に天竜川河口における標識調査により、8月下旬から9月にかけて数例の生息が確認された(武田由紀夫氏私信)。その後筆者の2011年から2017年の継続調査により、8月上・中旬に毎年複数個体(最多11個体)が標識され、伊豆諸島で繁殖した個体が秋の渡りの時期に定期的に本県を通過していることが明らかとなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖地の三宅島では、地上付近に営巣する本種がネズミ駆除のために放獣されたイタチの捕食(52-3)により個体数を減少させていることが懸念される。また、渡来地・越冬地の環境悪化(54)も懸念される。なお、三宅島の噴火を原因とした生息数の減少は、火山活動の鎮静化とともに植生が回復し、その影響は徐々に収まってきているものと推測する。

## 6. 保護対策

本種が渡りの時に利用する、河口や沿岸付近のヨシ原を保全する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

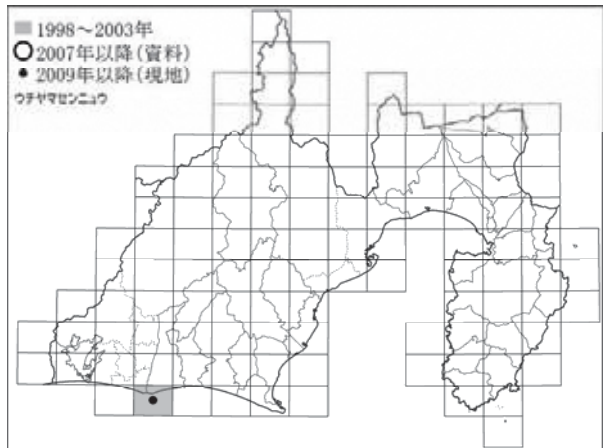
## 8. 主な文献

永田尚志(2008)ウチヤマセンニュウ. バードリサーチニュース, 5(5): 2-3

川合正晃(2012)ウチヤマセンニュウの渡り-2012年春秋の天竜川河口の状況より-. ALURA, 45: 14-16



天竜川河口(標識調査) 2017年7月30日 川合正晃



(川合正晃)



### 1. 種の解説

全長約 23 cm。オスは全身が黒色で、眉斑が白い。メスは頭上から上面がオリーブ褐色で、顔、胸、脇の羽毛は白く先端が褐色なので白と褐色の斑模様になっている。繁殖期にはあたりが薄暗くなったところによく鳴き、「チョロン・チー」と聞こえる、あまり大きくなく澄んだ声でさえずる。メスも同様にさえずる。さえずる朝の時間帯は日の出前から鳴き出し、日の出後 30 分ほどで鳴き止む。昆虫類と植物の実を主に食するが、富士山麓の育雛期にはミヤマザクラの漿果をヒナに給餌するものが多い、という調査結果がある。夏鳥 (対象：繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではシベリアの中部、東部の温帯から亜寒帯にかけて繁殖し、冬期は東南アジアの中国南部、ミャンマー、マレー半島、スマトラなどに分布する。国内では北海道と本州で繁殖する。県内では西部・中部・富士山・伊豆に、個体数は少ないが分布している。

### 3. 生息環境

標高 1,000 m 未満からさらに高い範囲のブナやミズナラを主にした落葉広葉樹林に生息し、亜高山帯では針葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

西部では蕎麦粒山、水窪野鳥の森など、中部では安倍峠、井川県民の森など、富士山では浅黄塚、十里木、太郎坊など、伊豆では西天城、万三郎岳などに生息する。かつて標高 1,000 m 付近の門桁山周辺では夕刻に降るようなさえずりが聞かれたが、現在では西部及び伊豆で個体数が激減している。中部の詳細は不明、富士山は安定しているようである。

### 5. 減少の主要因と脅威

越冬地域での大規模な森林伐採の影響が考えられる (11) が、はっきりした要因は不明 (99) である。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

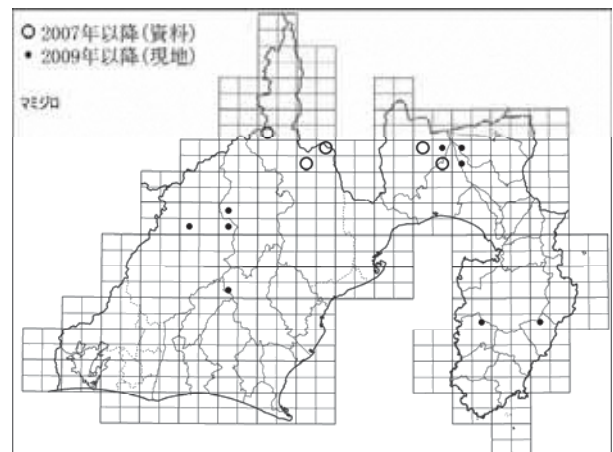
本種の越冬地の解明を目的として、2010 年 6～8 月に富士山において 15 個体にジオロケータを装着した調査が行われた。2011 年 6 月以降に 2 個を回収し、そのうちの 1 羽は 11 月中旬から 2 月下旬まで、カンボジア南西部を中心とするインドシナ半島南部に滞在しており、越冬したと考えられている。

### 8. 主な文献

- 清棲幸保 (1978) マミジロ. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I, 講談社, 東京. : 207-209  
 高野伸二編 (1985) マミジロ. 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京. : 443  
 仲村昇ほか (2011) ジオロケータを用いたブッポウソウとマミジロの渡り追跡. 2011 年度大会講演要旨集, 日本鳥学会, 東京. : 110



左：オス 裾野市 2011年6月8日 渡邊修治  
 右：メス 富士宮市 2013年5月14日 渡邊修治



(北川捷康)

### 1. 種の解説

全長約 13 cm。体重 10～16 g。頭部からの上面は灰褐色。喉からの下面は汚白色で、胸と脇は淡灰褐色。胸から脇の暗色の斑紋が不明瞭であり、この点で類似するサメビタキやエゾビタキと区別できる。眼が大きく、白いアイリングは太い。眼先に広い白色部がある。黒い嘴は長めで、下嘴基部は橙黄色。とまり木から飛び立ち、羽虫を捕えてまた元の枝に戻るフライングキャッチを行う。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではバイカル湖周辺からアムール・ウスリー、中国東北部、サハリンと、これらの地域から離れたインド・ヒマラヤで繁殖し、インドから中国南部・東南アジアで越冬する。国内では九州以北に夏鳥として渡来し繁殖する。県内では伊豆半島をのぞく全域で記録があるが多くない。確実な繁殖の記録は富士山麓、愛鷹山以外ではきわめて少ない。

### 3. 生息環境

平地から標高 1,600 m くらいまでの低山の落葉広葉樹林に生息する。密生した林よりも比較的樹高が高く、中層が開けた明るい林を好む。富士山麓では標高 1,600 m 以上に生息するサメビタキと標高の違いで棲み分けをしていると思われる。

### 4. 生息状況

1997 年以前には龍山村、佐久間町、静岡市井川、富士山周辺で繁殖期の記録があった。富士山麓では繁殖期に標高 600 m から 1,600 m の落葉広葉樹林で毎年観察されているが、徐々に減少傾向にある。一方、平地での繁殖記録は殆どない（2017 年浜松市天竜区での繁殖記録あり、標高 150 m）。

### 5. 減少の主要因と脅威

平地での減少は、宅地開発など人間の行動圏の拡大により生息地である落葉広葉樹林が失われた（11）ことが原因と思われる。しかし、森林が残されていても個体数が減少している所がある。その原因は不明であるが、越冬地や渡り中継地の環境悪化（54）の可能性もある。

### 6. 保護対策

富士山麓では現在繁殖が確認されている 1,600 m 以下の落葉広葉樹林を保全する必要がある。また、平地での繁殖を把握するための調査を行うことも必要であろう。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

高野伸二（1991）野鳥識別ハンドブック。日本野鳥の会，東京，327 pp.

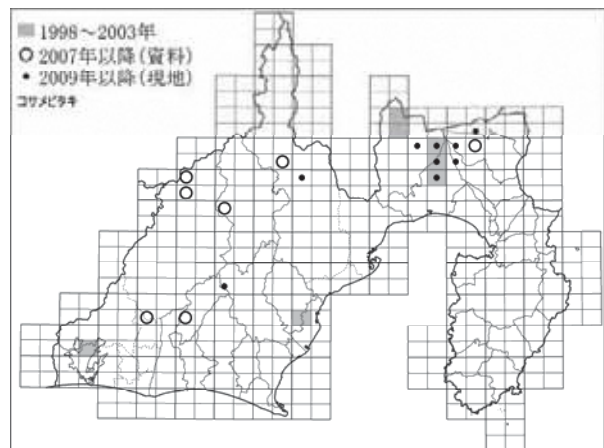
中村登流（1997）コサメビタキ。樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編，日本動物大百科 第 4 巻 鳥類Ⅱ，p. 125. 平凡社，東京。

影山秀雄（2004）コサメビタキ。静岡県自然環境調査委員会 編，まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック-（動物編），p. 95. 羽衣出版，静岡。

（渡邊修治）



富士市大淵 2009年5月27日 渡邊修治



# コジュリン *Emberiza yessoensis* (Swinhoe, 1874)

ホオジロ科 Emberizidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm。オスの夏羽は頭部と喉が黒色、後頭から胸横は赤褐色、胸と腹は淡灰褐色、背は赤茶色で黒い縦斑がある。メスは眉斑と頬線、喉は白っぽい。背面はオスに似ている。オスの冬羽はメスに似ている。餌として夏期には昆虫類やクモ類を主とし、冬期は種々の雑草の種子を主とする。冬鳥（対象：越冬地）。

## 2. 分布

国外では中国東北地方、ウスリー地方、朝鮮半島で繁殖し、中国東部で越冬する。国内では本州北・中部及び九州の阿蘇地方で繁殖し、関東以西、四国、九州などで越冬する。県内では東部の沼津市の湿地、西部の磐田市の草原で渡り期に比較的安定した生息が確認されている。

## 3. 生息環境

河川敷や湖沼周辺、耕作地縁辺、休耕田などの草地及びヨシ原に生息する。ただし、越冬期には単純なヨシ原ではなく、丈の高くないイネ科植物の繁った草原の方が餌となる草の実が多いので好まれる。

## 4. 生息状況

上記沼津市の湿地帯では毎年秋の渡り期に 20 羽前後が標識放鳥されており（渡邊修治氏私信）、西部の磐田市の同調査では最多年で 7 羽であった（北川）。西部の遠州平野は、越冬期の生息場所として広大な面積であり、実際にはさらに多くの生息数が推測され、今後調査が求められる。なお、伊豆及び中部地域は好適環境が少ないために記録例も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地の埋立て（15-1）、河川敷などにおける河川開発（13）、植生遷移（54）、圃場整備による縁辺の草地の減少（15-2）。

## 6. 保護対策

経済的には生産性がないと考えられているヨシ原、湿地、耕作地縁辺の草むらなどへの価値の啓発。

## 7. 特記事項

かつて、現富士宮市を含む標高 850 m～1,115 m の富士山麓の高標高の草原で繁殖が記録された（清棲, 1978）が、それらの個体群は現在すべて消失している。繁殖地と越冬地である本県との関係は次のとおりである。2011 年 10 月 21 日に繁殖地の青森県三沢市仏沼で標識放鳥した個体が 38 日後に 650 km 離れた磐田市の回収放鳥された（北川）。青森の繁殖地からの飛来はこのほかに沼津の 2 例（神谷）がある。また、2009 年冬に浜松市北区で標識放鳥した個体（武田由紀夫氏私信）が 2010 年繁殖地の新潟県新発田市で回収放鳥された（千葉）ことと 2016 年繁殖地の秋田県大湯村で標識放鳥した（杉野目）個体を 2017 年磐田市の回収放鳥した（北川）例は、ともに太平洋側の越冬地と日本海側の繁殖地との往来を示したものである。

## 8. 主な文献

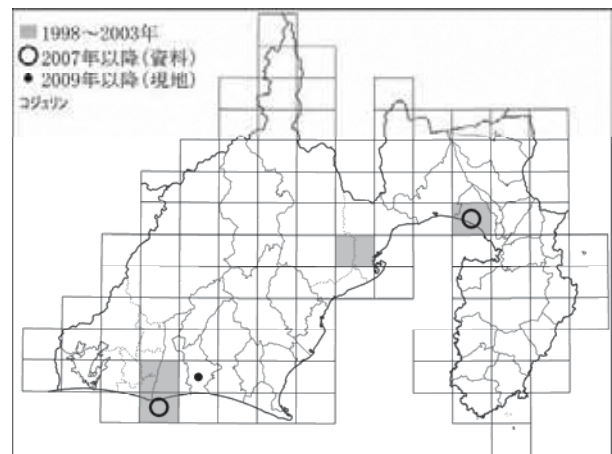
永田尚志（2014）チュウヒ．環境省 編，レッドデータブック 2014 2 鳥類：220-221

清棲幸保（1978）コジュリン．増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I，pp. 32-33．講談社，東京．

財団法人 山階鳥類研究所（2002）53 コジュリン．渡り鳥アトラス 鳥類回収記録解析報告書，p. 102．同研究所，我孫子市．（北川捷康）



沼津市原 2000年1月14日 渡邊修治





# ヤマドリ *Syrmaticus soemmerringii* (Temminck, 1830)

キジ科 Phasianidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

オスは全長約 125 cm、このうち尾は長く 90 cm にもなる。全体に赤味の強い褐色で、眼の周りの皮膚が裸出し顔が赤く見える。メスは全長約 55 cm で尾は短い。声はほとんど出さず、繁殖期のオスは翼を羽ばたいて「ドドド・・・」と言う音を出す。地上で種子、漿果、ミミズ、昆虫類などを食う。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

日本特産種で、本州、四国、九州に留鳥として分布し、5 亜種が生息する。県内では伊豆半島に亜種ウスアカヤマドリ *S. s. subrufus*、他地域に亜種ヤマドリ *S. s. scintillans* が生息すると言われているが、近年その分布域が明確ではない可能性がある。

## 3. 生息環境

山地の落葉広葉樹林、スギ、ヒノキなどの植林地、針広混交林の薄暗い林中に生息する。林の草むらや木の根元を浅く掘り、簡単な巣を作って繁殖する。

## 4. 生息状況

県内では西部と伊豆の山間地に記録が多い。生息環境が薄暗い森林で、地上での生活が多いことから、その存在を目にする機会は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

山間地のスギ・ヒノキ植林地の管理放棄による生息環境の悪化 (53) と狩猟鳥としての重圧 (41) が危惧される。また、放鳥事業が生息分布における亜種・個体群間の交雑をもたらすおそれがある (57-1)。

## 6. 保護対策

スギ、ヒノキの人工林を適正管理することにより、下層植生の生育を促し本種の生息環境を維持することと、狩猟鳥から除外することが必要である。

## 7. 特記事項

ヤマドリの亜種による羽色の変化は、気温と湿度に関係する (山階, 1926)。伊豆半島の亜種ウスアカヤマドリは天城山系の南北でも変異があるという。

## 8. 主な文献

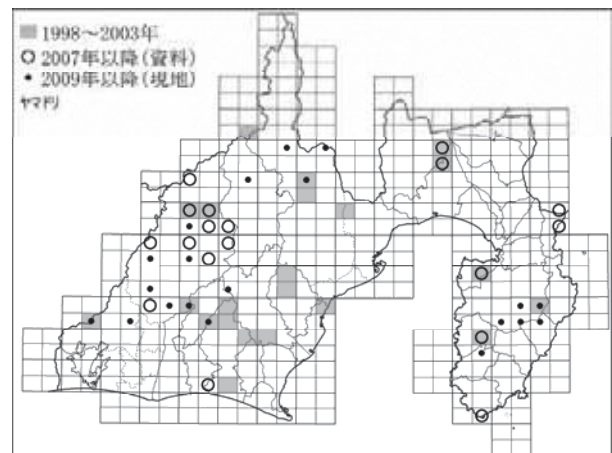
北川捷康 (2018) 県版 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

黒田長久・盛岡弘之 監修 (1987) 分類と飼育 キジ目. 世界の動物, p. 113. 東京動物園協会, 東京.

山階芳麿 (1926) 伊豆半島に於けるヤマドリ類 (*Graphophasianus soemmerringii*) の羽色其の他の地方的変異に就いて. 動物学雑誌 38(452) : 157-162



周智郡森町 1999年5月9日 北川捷康



(酒井洋平)



# シノリガモ *Histrionicus histrionicus* (Linnaeus, 1758)

カモ科 Anatidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)  
(静岡県該当なし) ]

## 1. 種の解説

全長約 43 cm。オスの体は青味がかった黒と橙色に複雑な模様の白斑が散在する。メスは顔に白斑があるが、全体が黒褐色である。冬鳥として渡来する。岩礁帯で、貝、カニ、海藻などを食う。河川に入る例は少ないが、カワゲラなどの水生昆虫を捕食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

## 2. 分布

国外ではグリーンランド、バイカル湖から東シベリア、アラスカなどで繁殖し、アリューシャン列島、北アメリカ沿岸などで越冬する。国内では冬鳥として北海道、本州に分布するが、中部以南には少ない。東北、北海道の山地溪流で、少数が繁殖する。県内では岩礁の多い伊豆の海岸や、御前崎海岸などに渡来する。

## 3. 生息環境

外洋に面した波打つ磯や、岩礁のある海岸を好んで生息するが、消波ブロックなどを利用することもある。

## 4. 生息状況

県内では12月から4月頃まで、荒磯の海岸などで越冬する。岩礁のある海岸を好むため、長い海岸線を有する県内でも、渡来地に限られる。かつて10羽ほど越冬していた御前崎海岸では1996年に9羽(北川)、2016年には1羽(小粥)と減少している。伊豆では海岸、河口部で少数がみられている。変わったところでは、2009年11月に富士川中流の富士市大北での観察例(影山)及び2010年12月に浜名湖の岩場の多い礫島で6羽の観察例(北川)がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

渡来数の減少は、越冬地となる海岸や港湾、河口などの改変に伴うこと(13、14)が多い。過去に毎年渡来が見られた御前崎海岸は港湾施設の改変後は減少が著しい。

## 6. 保護対策

越冬地として必要な港湾、岩礁の環境維持と保全が望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

清棲幸保 (1978) シノリガモ. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 II, pp. 416-417. 講談社, 東京.

黒田長久・盛岡弘之 監修 (1980) 分類と飼育 (ガンカモ目). 世界の動物, p. 78. 東京動物園協会, 東京.

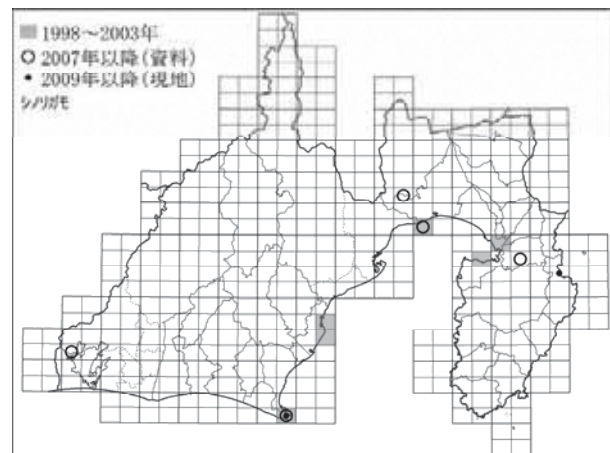
日本鳥学会 編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

(酒井洋平)



御前崎市 御前崎海岸 1996年1月20日 北川捷康



### 1. 種の解説

全長約 42 cm。オス成鳥は背が黒いほかはほぼ全身が白く、黒い線条が幾本か走る。嘴の基部から目を囲む大きな黒斑はパンダに似た趣きを持つ。メスは頭部の栗色と前頸の白が目立つが、その他の部分は灰褐色をしている。渡来直後のオスのエクリップス個体はメスと同じ羽色をしているが、次第に換羽していく。メスに求愛する時のオスは前頭部の羽毛を立てる。カモの間では珍しく、水中にもぐって小魚などを捕食するアイサの仲間属する。冬鳥として少数が渡来する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

### 2. 分布

国外ではスカンジナビアからユーラシア大陸の亜寒帯一帯で繁殖し、中部ヨーロッパ、黒海、カスピ海、中国、韓国などで越冬する。国内では北海道 (一部繁殖)、本州、四国、九州に分布する。県内では西部には毎冬定期的に渡来するが、東・中部ではきわめて少ない。

### 3. 生息環境

湖沼、河口、現・旧養魚池などに生息する。

### 4. 生息状況

1980年代までは浜松市の佐鳴湖に多数渡来し、多い時には 50~90 羽生息していたが、現在越冬するものは数羽程度に減少してしまい、西部の各地に分散する傾向がみられた。2000年代に入ってから 10 羽程度が越冬するのは天竜川 1ヶ所になりその状態がしばらく続いたが、現在では細江、舞阪、磐田市大池などさらに少数分散化傾向が強まっている。

### 5. 減少の主要因と脅威

全体数の減少及び少数分散化傾向の要因は、水質の悪化 (31)、レジャー圧の増加 (71) が考えられるが、はっきりしない。

### 6. 保護対策

要因が特定できないため、有効と思われる対策は挙げられない状況である。

### 7. 特記事項

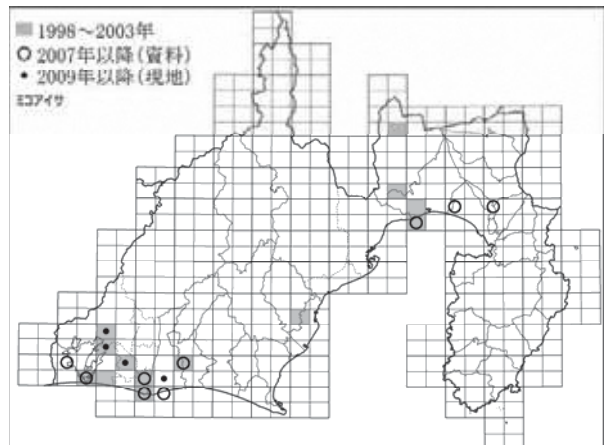
日本に渡来し初めの時期の 11 月上~中旬に集結が見られる北海道の濤沸湖では、2009~2017 年の間に最少は 2014 年の 320 羽、最多は 2017 年の 1,633 羽が見られたという (渡辺義昭氏私信)。

### 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29



浜松市 佐鳴湖 1986年2月7日 北川捷康



(北川捷康)

### 1. 種の解説

全長約 29 cm。雌雄同色。額から尾羽までの上面が茶褐色で、黒い縦斑がある。顔から胸までは青灰色で黒い過眼線がある。下腹部は白黒の横斑がある。湿地環境で昆虫類、甲殻類、軟体動物、魚類や植物の種子などを餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

### 2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地域などで繁殖し、冬期には南へ移動して越冬する。国内では北海道、南千島、本州、佐渡、舩倉島、隠岐、見島、四国、九州、対馬、伊豆諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島、に生息する。県内では冬鳥として湿地の多い西部地域に集中して生息し、湿地の少ない

他の地域では少ない。

### 3. 生息環境

平地の水田や湿地、湖沼・河畔のヨシ原、谷戸環境の湿地などに生息する。

### 4. 生息状況

浜名湖周辺域の湿地環境での確認例は比較的安定しているように感じられる。ただし、本種は湿地環境への依存度が高いため、皮肉にも生息環境の減少に伴い、残された湿地への集中・避難することにより観察頻度が増している可能性もある。

### 5. 減少の主要因と脅威

遷移進行による湿地の乾燥化 (54)、湖沼岸辺の改修工事などによる湿地消滅「湿地開発 (15-1)」。また、残された生息環境では、観察頻度増とともに轢死個体、他の動物による捕食残骸 (羽) の記録も報告され、本種と同様の環境を好む外敵となる捕食動物の侵入が危惧される (52-3、52-4)。河畔ヨシ原では、増水時における漂流物 (ペットボトル・発泡スチロールなどの石油製品) の堆積による餌場消失 (71) も脅威である。

### 6. 保護対策

乾田化防止、湿地・湖沼・河畔のヨシ原保全、谷戸環境の湿地保全が望まれる。

### 7. 特記事項

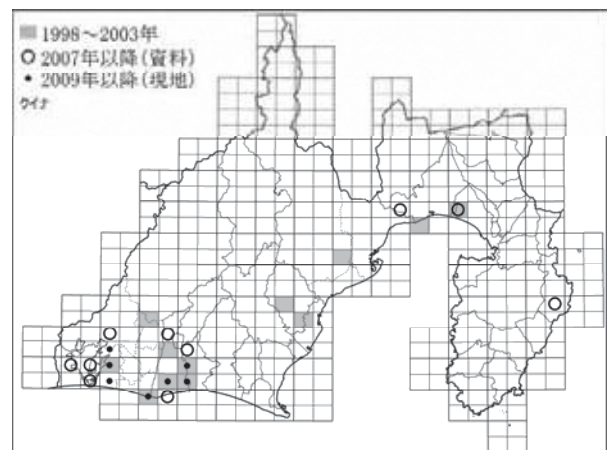
特になし。

### 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



磐田市鎌田 1991年4月30日 北川捷康



(森田剛則)



# タゲリ *Vanellus vanellus* (Linnaeus, 1758)

チドリ科 Charadriidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 32 cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は頭が黒褐色で、後頭に長い冠羽がある。体上面は緑色光沢があり、赤紫色の光沢が混じる。尾羽の先半分は黒く、基部は白い。胸には黒い帯がある。飛び立つ時には「ミュー」と特徴的な声を出す。水田、畑、湿地などで水生昆虫類やミミズなどを採餌する。冬鳥（対象：越冬地）。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地方などで繁殖し、冬期には南へ移動して越冬する。国内では北海道(旅鳥)、本州、四国、九州、琉球諸島など全国に渡来する。本州中・北部地方では繁殖記録がある。県内では冬鳥として主に西部に広く分布する。

## 3. 生息環境

開けた水田の刈跡や耕作地、草地などに群れで生息する。

## 4. 生息状況

東部で 4 メッシュ、西部では 14 メッシュが記録され、静岡県レッドデータブック (2004) と同様の西部に偏った分布状況である。個体数においては、2009 年 11 月磐田市 50 羽 (北川捷康氏私信)、2011 年 11 月富士市 40 羽 (渡邊修治氏私信) の大きな群れが確認されているが、以後は少数の観察のみである。減少傾向にあるともとれるが年による渡来数の変化が大きい傾向があるので正確な判断は難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

水田からの転作による開けた環境の消滅 (15-2)、耕作放棄田畑の管理放棄に伴う草地化 (53) などにより、生息環境の消滅が危惧される。具体的な減少の状況については不明である。

## 6. 保護対策

平地の水田、畑、草地、磐田市大池の干潟などの開けた環境の保全が望まれる。

## 7. 特記事項

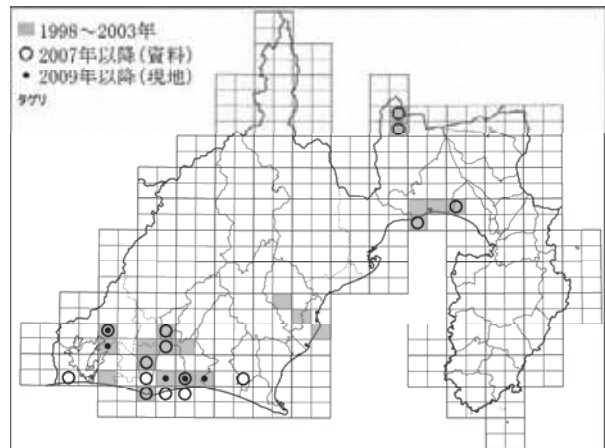
特になし。

## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



磐田市 1990年2月13日 北川捷康



(森田剛則)



静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 21 cm。雌雄ほぼ同色。額が白く、前頭は黒い。背面は灰褐色で下面は白い。コチドリに似るが大きく、目を囲むリングの色が不鮮明であること、飛翔時の翼上面に淡色帯が出ること、動きがゆったりしていることなどで区別できる。繁殖期は他のチドリ類より早く始まり、3~7月である。繁殖中に擬傷行動を行う。留鳥（対象：生息地）。

### 2. 分布

国外では中国北東部、ウスリー地方、朝鮮半島などで繁殖する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、本州北部以北のものは冬季南へ移動する。県内では全域の砂利河川に分布し、大河川では上流まで分布する。

### 3. 生息環境

主に砂礫の河川敷や中州のある環境に生息・繁殖するが、稀に広い埋立地で繁殖することもある。繁殖期以外には湖沼畔や水田に生息することもあるが、干潟や海岸に出ることは稀である。

### 4. 生息状況

主な営巣場所である河川の河川敷及び中州の砂礫地は、植生遷移により営巣適地が極端に狭められており、残された裸地はオフロード車の通行や野外活動の影響を受けている。植生遷移の影響のない低い砂礫地は少しまとまった雨が降ればすぐに冠水被害を受ける、といった具合に繁殖を取り巻く環境は阻害要因が多い。繁殖中はつがいごとに縄張りを構えて集団化しないが、繁殖期終了とともに7月のうちに小群をつくる傾向がある。太田川では数羽~10羽ほど、天竜川では数羽~20羽ほどになり、その後やや数を増やして越冬群になる。天竜川では静岡県レッドデータブック(2004)時には30羽を超える越冬群がいたが、現在は20羽を超えるものは稀である。一方、河口から10数kmまで前記2河川よりも砂利の裸地がはるかに広い安倍川や大井川では、繁殖後に大きな群れを見ない(北川)。なお、繁殖期に大井川上流部の畑薙第一ダム~榎島まで3メッシュの生息を確認している。

### 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖場所である河川の砂利の裸地では植生遷移(54)が進み、天竜川や大井川では中州までヤナギの林になっているところも多くなっている。狭められた裸地はオフロード車の通行で卵やヒナが轆かれる被害に遭い(51)、気象においてもゲリラ的な集中雨に見舞われることが多くなり、冠水被害による卵やヒナの流失という繁殖の阻害(55)も増加している。

### 6. 保護対策

特に有効な対策は挙げられないが、河川管理計画に減少の主要因を排除する対策を求めたい。

### 7. 特記事項

全国的には主に河川の中流以上に生息するとされるが、東海型の砂利河川が多い静岡県では河口まで低水路や中州が砂利であるため、海岸からわずかに数100mあたりで生息繁殖する。ただし、天竜川だけは砂利採取過多による河床の低下と植生遷移のため、河口から3km以上でないとは繁殖できない。

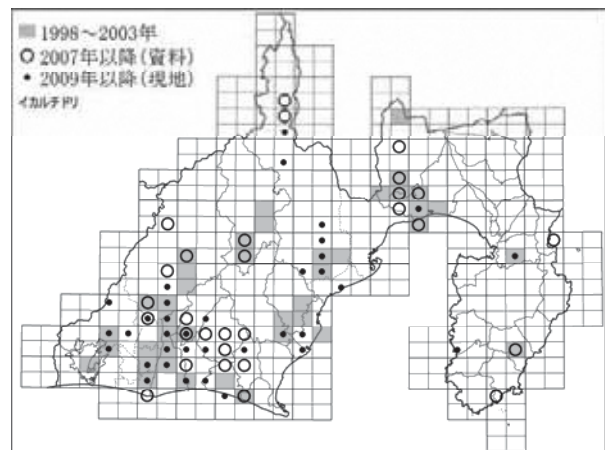
### 8. 主な文献

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

北川捷康(1998) 浜北市の野鳥. 浜北市教育委員会, 浜北市, 18 pp.



©2019 K. Kitagawa  
浜北区天竜川 2003年6月3日 北川捷康



(北川捷康)

# セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus, 1758)

セイタカシギ科 Recurvirostridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長 35~40 cm。喉から体の下面は白く、黒い上面とのコントラストははっきりしている。頭部から後頸、上面の黒さは雌雄、成・幼鳥により異なる。オス成長夏羽の上面は黒に緑色光沢がある。頭部から後頸は黒いものから白いものまで個体差がある。メスや若鳥の上面は褐色をしている。桃赤色の長い脚と細長い針のような黒い嘴も特徴で、長い脚を生かして他のシギ類よりも深い場所で採餌できる利点がある。餌は小さなカエル、オタマジャクシ、小魚、ゲンゴロウ類、小貝などである。旅鳥、一部夏鳥・冬鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸南部、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアなどに広く分布。国内では北海道、本州、四国、九州に、主に春秋に旅鳥として渡来する。千葉県、東京都、愛知県、静岡県などで繁殖記録がある。県内では内陸湿地に局地的に分布する。

## 3. 生息環境

主として休耕田や池沼畔などの内陸湿地に生息する。かつては稲刈り取り後の水田が良い生息場所になっていたが、圃場整備後の乾田化が進み、それまで見られなかった河川、河口部へも一時的に姿を見せるようになった。

## 4. 生息状況

県内では内陸湿地が少なく、生息適地はもともと限られていた。観察されるのは1~数羽であることが多い。2001年浜名湖畔の埋立地において県内唯一の繁殖記録があったが、その後造成が進み消滅した。目にする機会はやや増えたと言われるが、湿地の減少に伴い限られた場所に集中するようになったことと観察者の増加によることも考えられる。磐田市大池、浅羽町休耕田、浮島ヶ原などの湿地に局地的に生息する。多数記録としては2003年に袋井市浅羽で16羽観察した (北川)。ふつうは1羽であることが多いが、磐田市大池では毎年複数個体が生息し、越冬するものもいる。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地の造成 (15-1)、圃場整備による耕作期以外の乾田化 (15-2) などの影響が大きい。

## 6. 保護対策

稲刈り取り後の冬水田んぼの活動に期待したい。

## 7. 特記事項

国内で亜種オーストラリアセイタカシギ *H. h. leucocephalus* が少数記録されている。県内ではまだ記録はないが、将来記録される可能性がある。しかし、環境省ではレッドリスト対象外としている。

## 8. 主な文献

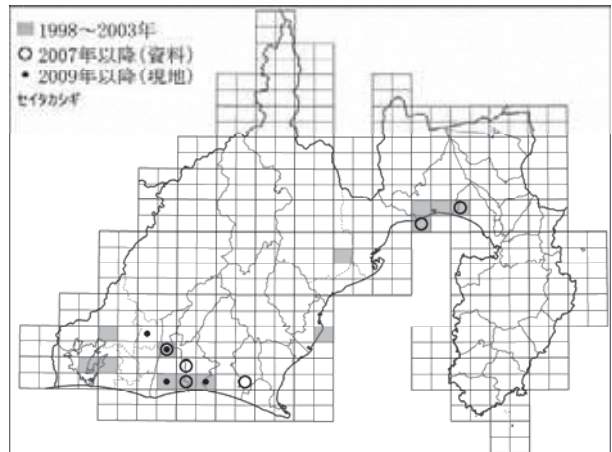
高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



磐田市竜洋 1997年5月6日 北川捷康



### 1. 種の解説

全長約 19 cm。雌雄同色。冬羽は下面が白く上面が灰白色で、シギ・チドリ類の中で最も白く見える。渡去前の 5 月には頭、胸、背が赤褐色になる。旅鳥として春秋に通過するものと越冬するものがある。海岸の砂浜の波打ち際で、寄せては返す波に合わせて群でスピーディーに進退し、波が運んできた餌を採る様子は特徴的である。餌は主に小さな甲殻類、貝類、多毛類などである。旅鳥・冬鳥（対象：生息地）。

### 2. 分布

国外ではシベリア中部と北アメリカの北極海沿岸の一部で繁殖し、非繁殖期は温帯から南半球全域の沿岸部に飛来する。国内では北海道、本州、四国、九州に旅鳥として渡来し、関東以西では越冬するものがある。県内の分布は伊豆・東部・中部では稀で、主に西部に生息する。

### 3. 生息環境

砂浜の海岸、干潟、河口などに生息するが、砂浜の海岸を最も好む。内陸部の湿地に入ることにはめったにない。

### 4. 生息状況

主に外海の波が打ち寄せる遠州灘の砂浜の海岸が生息適地であるため、東部・中部地域では少なく、伊豆地域では記録されていない。西部地域では遠州灘海岸で数羽から時に数十羽の越冬群が見られるが、2004 年には馬込川河口～天竜川河口間で 48 羽が生息、2015 年には御前崎で 84 羽、2016 年の太田川河口では 7 羽が観察されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

主な生息場所である遠州灘海岸の砂浜は、中田島海岸を初めとして全域で縮小 (25) している。当然のこととして餌の供給量が減る。また、現在では真冬でもサーフィン、ウインドサーフィン、釣りなど四駆車往來のレジャー圧が強まり、採餌場、休息場所は縮小し、安息も阻害されている (71) 現状がある。最近世界で心配されているのがマイクロプラスチック (マイクロビーズ) と呼ばれる 5 mm 以下のプラスチック片の拡散である。海に流された膨大なプラスチックが波と紫外線などの影響で細分化され、海岸に打ち寄せられたこれらを甲殻類の幼生や魚卵と間違えて飲込むと消化管などの閉塞、プラスチック成分の浸出と濃縮などの被害、不消化物をペレットとしてまとめて吐き出す習性があるシギ類でも、消化吸収されないものの満腹感に騙されて餌の摂取量が減るなど々の被害 (71) が懸念されている。

### 6. 保護対策

海岸管理計画に減少の主要因を排除する対策を求めたい。

### 7. 特記事項

特になし。

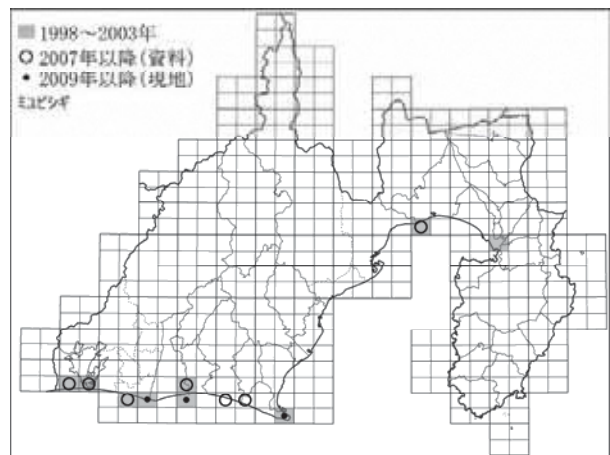
### 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



©2019 K.Kitagawa  
遠州灘海岸 1996年5月4日 北川捷康





# オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 17

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 50 cm、メス約 56 cm。翼開長 106~131 cm。成鳥は頭部から背面、尾の上面が青灰色で、下面は白っぽい。胸から腹にかけては白地に細かな横縞があり、尾には黒い横帯が 3~4 本ある。幼鳥は上面が褐色、下面は淡黄褐色で、胸から腹にかけて褐色の縦斑がある。森林性のタカであり、主に林内や林縁部で狩りをする。餌は主に小~中型の鳥類で、ハト類が多い。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア及び北アメリカ大陸の北部に、国内では北海道から九州に広く分布する。繁殖は近畿以北で確認されている。留鳥だが幼鳥は分散のため移動する。冬季には南下する個体もあると考えられる。県内では西部から伊豆にかけて広く分布する。

## 3. 生息環境

平野部から低山の里山環境が生息適地だが、海岸林や山間地に生息するものもある。採餌環境としては林内や林縁部のほか、林縁に近い農地や、灌木が点在する河川敷などの開放的な環境も利用する。

営巣地では樹齢が高く林内に十分な飛翔空間がある林の大径木に架巢することが多いが、比較的密な林の林縁近くに架巢することもある。

## 4. 生息状況

1998年に調査した営巣地 46ヶ所のうち 20ヶ所を 2015年に再調査したが、それらすべてで繁殖が確認されなかった。繁殖数は、静岡空港調査では平成 10~21年と平成 21~25年の比較で約 4割減、掛川市自然環境調査では平成 17と 26年の比較で約 4割減と報告がある。最近約 10年の傾向は、山間地の繁殖記録がほぼなくなり、里山及び市街地周辺が主な生息地である。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息条件として餌動物の生息密度と採餌環境があげられる。近年、道路建設 (24)、宅地開発 (23)、農地開発 (15-2) などによる直接的あるいは間接的影響で一部の生息地が消失している。種間関係では、クマタカが捕食者脅威 (52-4) に、ノスリは餌場と営巣地の競合相手 (56-2) になっている可能性がある。

## 6. 保護対策

耕作地や植林の管理放棄に伴い、重要な林縁の採餌環境は悪化する。森林及び耕作地周辺に広く手を入れて管理する行為が、最も有効な保護対策になると考えられる。静岡空港では営巣林はある程度保全されたものの繁殖数は減少したことから、採餌環境の保全が課題であると言える。

## 7. 特記事項

種の保存法の国内希少野生動植物種解除 (平成 29年 9月)。1980年以前は情報がきわめて少なかったが 1980年頃を境に目撃情報や繁殖情報がしだいに増加した経緯がある。実際の生息数も 1980年頃から 2000年頃にかけては増加傾向にあったと考えられるが、その後は減少している可能性がある。

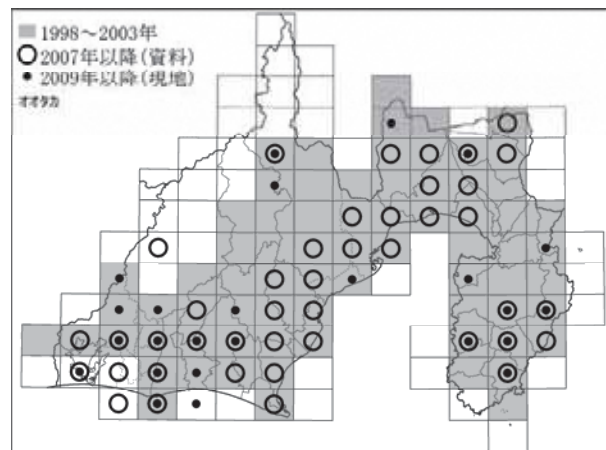
## 8. 主な文献

静岡県文化・観光部空港振興局空港運営課・静岡県静岡空港管理事務所・常葉学園 富士常葉大学・自然環境巡視連絡会 (2016) 富士山静岡空港自然誌-人と自然にやさしい空港をめざして-。静岡県, 静岡, 353 pp.

(新井 真・近藤多美子)



©2019 S. Watanabe  
富士市神谷浮島ヶ原 2005年 3月 5日 渡邊修治





# フクロウ *Strix uralensis* Pallas, 1771

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長 50 cm で頭が大きく顔盤の発達した大型の猛禽類。雌雄同色。頭部から体上面は灰褐色で、黒褐色の斑がある。胸から下の体下面は淡灰褐色で黒褐色の縦斑がある。灰褐色をした顔は、正面から見ると特徴的なハート形の淡灰褐色をした縁取りがある。夜行性で、餌はネズミ類が主であるが鳥類も捕食する。留鳥（対象：生息地）。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の亜寒帯気候中央部にかけて帯状に広く留鳥として分布する。国内では北海道、南千島に亜種エゾフクロウ、本州北部に亜種フクロウ、本州北・中部に亜種モミヤマフクロウ、本州中・南西部、淡路島、四国、九州、伊豆諸島に亜種キュウシュウフクロウの4亜種が分布するとされる。亜種エゾフクロウ以外は分布域が明確ではなく今後の研究が待たれる。県内では平地から山地まで広域に分布する。

## 3. 生息環境

平地から山地の、採餌環境を有するかあるいは隣接している、樹洞が出来るような大径木のある森林、社寺林などに生息する。街灯のある公園などでも見られることがある。

## 4. 生息状況

全県的には大きな変動は見られない。

## 5. 減少の主要因と脅威

平地部の里山林や社寺林を囲む道路で、轢死個体（ロードキル）の目撃が増えている（26）。主な餌となるネズミの生息する草地環境の消滅・荒廃（16）と森林伐採（11）に伴う営巣環境のバランスの崩れ、生息地の分断化や、森林の施業放棄（53）による生息環境の減少が脅威である。

## 6. 保護対策

樹洞のできる大径木のある森林と餌場となる生物多様性豊かな環境を備え持った「生息域内保全」が望まれる。巣箱設置など営巣環境の整備、野鳥写真撮影愛好家による繁殖阻害などの攪乱も予想されることから生息地への立入り規制も有効である。

## 7. 特記事項

特になし。

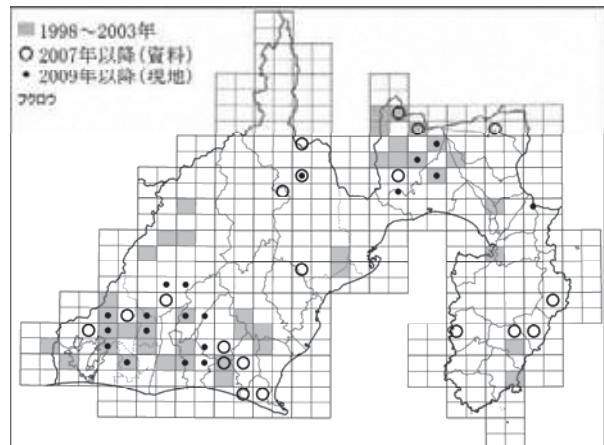
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説（p72）の引用文献に挙げたものを利用した。

（森田剛則）



富士宮市人穴朝霧高原 2012年1月19日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 18 cm。雌雄同色。茶褐色で複雑な模様の羽色をしている。灌木の混じるススキなどの草原やヨシ原に生息し、灌木の低い横枝に止まることが多い。秋の渡りの頃、「キィキィキィ・・・」とモズに似た声で鳴く。昆虫類やクモ類を餌とするが、特にアリを好み、朽ちた樹皮を剥がし、長い舌で巻き取るなどして食う。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではヨーロッパ、北アメリカ、シベリア、オホーツク海沿岸、アムール川流域などで繁殖し、冬はアフリカ中部、インドシナ半島、中国南部などに渡り越冬する。国内では北海道から東北の一部で繁殖し、本州中部以南で越冬する。県内では平地の広い西部地域に広く分布し、他地域での観察例は少ない。

3. 生息環境

海浜、農耕地、河川敷、村落周辺などの草地、ヨシ・オギ群落、疎林などに生息する。

4. 生息状況

秋の渡来時、伊豆・石廊崎のススキ草地の低木で数羽の鳴き合う姿が毎年観察されるが、伊豆地域で越冬する個体数はきわめて少ないものと思われる。静岡県レッドデータブック (2004) と比較するとメッシュ数はほぼ同じであり、西部地域に集中している傾向は変わらない。しかし、記録収集の 10 年間の前半と後半を比べると、後半の生息数はひどく減少している。

5. 減少の主要因と脅威

冬期の生息地となる灌木の混じる草原、河川敷、休耕田のヨシ原などに関して、湿地の埋め立て (15-1)、河川改修 (13) などの影響が大きいと考えられる。そして伊豆を初めとして近年各地で問題となっている風力発電施設、太陽光発電施設による大規模開発など (23) が、大きな脅威と考えられる。

6. 保護対策

数少ない越冬環境となる湿地や草地、農耕地などの保全、大規模風力発電、太陽光発電施設の規制強化の必要性が考えられる。

7. 特記事項

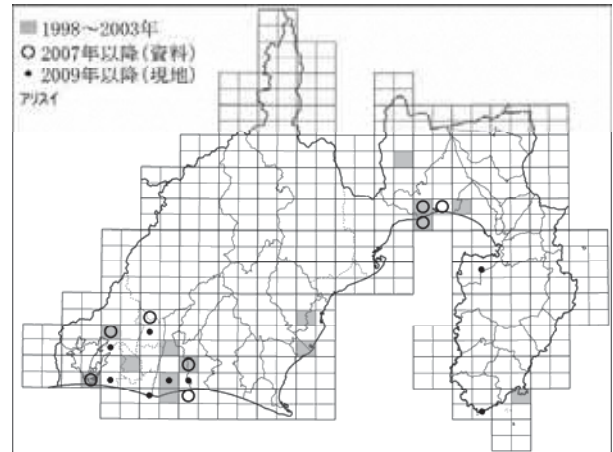
特になし。

8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29 (酒井洋平)



富士川河口 2007年1月10日 渡邊修治



# オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* (Bechstein, 1802)

キツツキ科 Picidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 28 cm。後頭から上面は黒く白い横斑がある。額から顔、喉、胸、脇腹は淡褐色で白っぽい。胸から脇腹にかけて黒くて細い縦斑があり下腹部は赤い。雌雄の違いは、オスは頭頂が赤くメスは黒いことである。枯木中に潜む甲虫類の幼虫やアリなどを捕食する。秋から冬には木の実なども食う。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ東部、中央アジア、シベリア南部、モンゴル、中国東北地区、朝鮮半島、サハリン、台湾などに生息する。国内では北海道、本州、四国、九州、奄美大島に生息し、北海道にエゾオオアカゲラ、本州北・中部、佐渡にオオアカゲラ、本州中・南西部、隠岐、四国、九州にナミエオオアカゲラ、奄美大島にオーストンオオアカゲラの 4 亜種が分布する。なお、ナミエオオアカゲラについての分布域の詳細は今後の検討が待たれる。県内では東部、中部、西部の山地のブナやミズナラを中心とした自然林に局所的に生息している。

## 3. 生息環境

巣穴の利用や枯木中に潜む甲虫類の幼虫やアリなどを採餌するため、大径木の枯木、倒木の多い夏緑樹林や針広混交林を好む。

## 4. 生息状況

東部 (富士裾野)、中部 (井川県民の森周辺)、西部 (水窪野鳥の森・蕎麦粒山周辺) などの自然林に生息する。本種の繁殖期のテリトリーは 200 ha 程といわれ、観察するには偶然の出会いを期待せざるをえず正確な生息状況の把握は難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

西部の北遠においては、1970年代までの材木需要 (パルプ・建築資材) による森林伐採で生息域が分断・孤立化し (11)、現在に至っても生息環境の回復には至っていない。現存する自然林では営巣木となっている立枯れ樹木の倒木消滅 (54) が散見され、生息環境の縮小が危惧される。

## 6. 保護対策

現存する生息地の夏緑樹林、針広混交林の保全が絶対条件である。

## 7. 特記事項

奄美大島に生息する固有亜種オーストンオオアカゲラは文化財保護法に基づく天然記念物 (昭和 46 年)。

## 8. 主な文献

日本鳥学会 編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

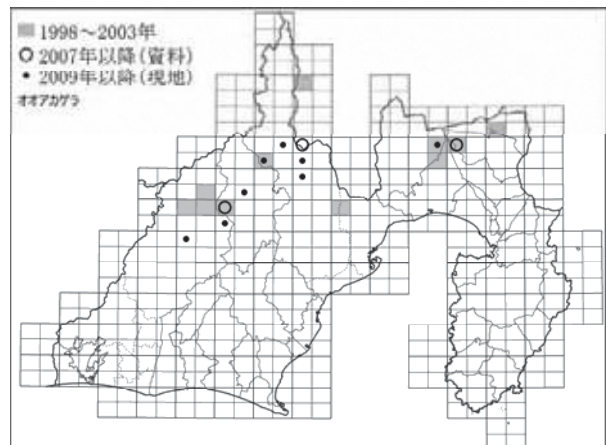
叶内拓哉・阿部直哉・上田秀雄 (2014) 山溪ハンディー図鑑 7 新版日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 671 pp.

真木広造・大西敏一・五百澤日丸 (2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京, 788 pp.

(森田剛則)



富士市大淵高鉢遊歩道 2011年5月5日 渡邊修治





# サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* (Eyton, 1839)

カササギヒタキ科 Monarchidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー : なし]

## 1. 種の解説

オスは全長約 45cm、メスは約 18cm。オスは頭、胸が黒紫色で背は褐色、腹は白い。中央の尾羽は黒色で著しく長く、成熟したものは 30cm を超える。メスは頭と胸は黒色から暗灰色、背と尾は褐色で尾は特に長くはない。雄雌共にさえずる。「ツキ(月)・ヒ(日)・ホシ(星)・ホイホイホイ」と聞きなされて三光鳥の名の由来となっている。最後の「ホイ」音の繰り返しは 3 回が普通であるが、もっと多いものもあり、静岡市清水区の丘陵部でいつも 24 回繰り返す個体があった。餌は主にハエ類、アブ類、トンボ類など飛ぶ昆虫である。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

## 2. 分布

国外では韓国、台湾、フィリピンなどで繁殖し、国内では夏鳥として本州以南に渡来し、インドシナ半島からスマトラなどで越冬するようである。県内では西部から中部にふつうに分布しているが、東部、伊豆はかなり少ない。

## 3. 生息環境

平地から低山帯のスギ・ヒノキの植林、落葉広葉樹林、針広混交林に生息する。中でも沢が流れている環境を特に好む。

## 4. 生息状況

平地から低山帯に広く生息する。かつて新東名路線による影響が心配されていた。今回 2016~17 にこの一帯を含めて精査したところ、道路ができた部分のはのぎ、全体として安定した生息状況であった。

袋井市に長年複数ペアが生息する場所があった。しかし、環境に大きな変化はないのに、突然 2016 年及び 17 年に各複数回の調査を行ったが、姿が見られなくなった。理由は分からない。一方、御前崎市ではエネルギー革命以後樹木の伐採が行なわれることがなくなった結果、それまでいなかった本種が生息するようになり、今回の調査でも生息を確認している (宮本勝海氏私信)。生息地の標高については、今回の調査で最も低いのは磐田市の 15 m、最も高いのは大井川上流の 800 m であった。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息状況は「安定している」と前項に記したが、新たに心配される事態が生じている。東海地震などとそれに伴う沿岸部の津波予測が出されて以後、沿岸部から丘陵部へ移る企業が増えている。例えば、その 1 社の移転先には 1 メッシュ内に 10 羽以上と県内で最も生息密度の高い場所があり、さらに同メッシュ内には地方自治体の清掃工場の計画も進められている。このような大規模工場などの移転・新設に伴い、本種の好適生息地が造成されて消滅する事態 (23、24) が各地で生じていることは脅威である。

## 6. 保護対策

サンコウチョウが多く生息するような環境はミゾゴイやヤイロチョウなどの生息適地でもある。県及び地方自治体の環境影響評価審査会などが適切に機能することが望まれる。

## 7. 特記事項

1964 年に静岡県の鳥に指定されている。

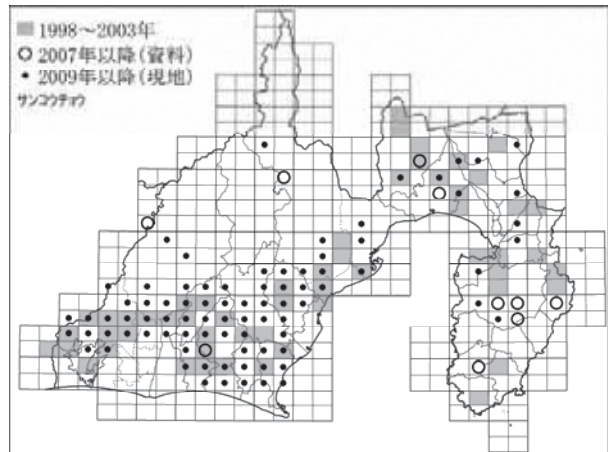
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(北川捷康)



菊川市西富田 2016年6月2日 中村裕志





静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 16 cm。背面は淡褐色で褐色の縦斑がある。腹は白色、腰は灰色。成鳥オスは頭頂、顔、胸が黒く、眉斑と喉の黄色とのコントラストが鮮やかである。メスはオスの黒と黄色を抜いた程度に地味な褐色をしている。雌雄ともに冠羽があり、よく立てる。冠羽を立てる点ではカシラダカに似るが、本種はメスにも眉斑と喉に淡い黄色味があるので区別できる。餌としてマツの種子、イネ科・タデ科・ハコベなど多種の種子を採る。冬季は小群で生活することが多い。冬鳥(対象:越冬地)。

### 2. 分布

国外では中国の南西部と北東部から朝鮮半島、ウスリー河流域などで繁殖する。国内では全国に飛来し北海道の南西部の一部と本州以南で越冬する。渡来数はそう多くないが西南日本の方が比較的数量が多い。朝鮮半島経由で渡ってくるものが多いからと思われる。長崎県対馬と広島県での繁殖例がある。県内にも広く分布するが、伊豆では今回は記録されなかった。

### 3. 生息環境

低地から山地の明るい林や林縁に生息する。林内の地上や山道において採餌する。

### 4. 生息状況

低地から山地にかけての落葉広葉樹主体の林たとえば丸火自然公園や、アカマツ主体の林たとえば県立浜北森林公園のような明るい林に生息数が多い。中部地域の記録はもともと少ないが、西部地域での減少が著しい。たとえば 1997 年まで継続的に越冬していた桶ヶ谷沼では、エネルギー革命及び自然環境保全地域指定で地域の生活活動が森林に及ばなくなったこと、松枯れの急速な進行による照葉樹林化が進んだ結果、2006 年までは断続的に渡来していたが、それ以後の 10 年間ではホオジロ科の越冬数が顕著に多かった 2015 年の 2 羽のみの記録にとどまっている。植生の変化による影響が大きいと思われる。県立浜北森林公園でも著しい松枯れの影響を受けて植生の変化があり、減少している。

### 5. 減少の主要因と脅威

里地里山の人の生活とのかかわりで管理され、安定していた植生の変化 (53) による影響が大きいと思われる。

### 6. 保護対策

広域的な植生の維持や過度に遷移した植生の回復は、きわめて難しいことである。しかし、浜北森林公園で現在アカマツ林に関して枯死木の伐採や再生事業に力を入れていることは、今後の植生環境及び餌事情に関して本種にとって好ましいことと思われる。

### 7. 特記事項

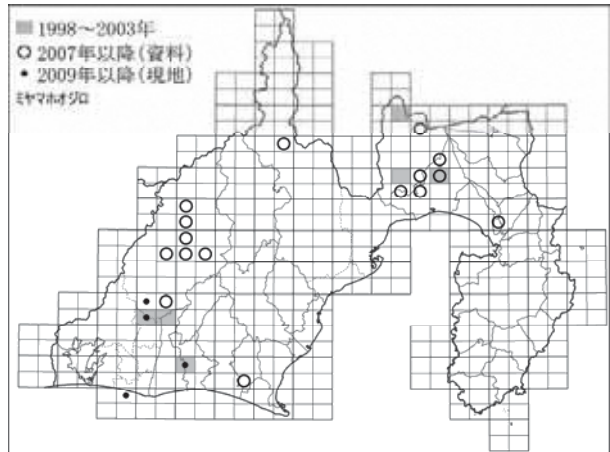
特になし。

### 8. 主な文献

- 高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.  
北川捷康 (2016) 桶ヶ谷沼の鳥類生息調査—平成 28(2016)年度— :3-4.



©2019 K. Kitagawa  
浜北区県立森林公園 2007年3月 北川捷康



(北川捷康)

### 1. 種の解説

全長約 34 cm。雌雄同色。頭頂から後頭に黒褐色の太い横斑があり、灰褐色の眉斑と黒い過眼線、背は黒褐色で雨覆は赤褐色で黒、白、灰色など複雑な模様をしている。淡褐色の体下面には褐色の横斑がある。眼は頭頂近くにある。長い嘴で主に地中のミミズなどを採食し、昆虫類の幼虫や陸産貝類なども採食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

### 2. 分布

国外ではヨーロッパや中央アジア・シベリア南部、モンゴル・中国東北地区で繁殖し冬は南へ渡る。国内では北海道、南千島、本州北部、本州中部、本州南西部、佐渡、隠岐、見島、四国、九州、対馬、男女群島、屋久島、種子島、伊豆諸島、小笠原諸島、トカラ列島、奄美諸島、琉球諸島、大東諸島に分布する。北海道では夏鳥、本州中部以北で留鳥、本州中部以南では冬鳥として分布する。県内では広域で記録はあるが、主に夕刻から採餌活動に入りほとんど鳴くこともないので観察例は少ない。

### 3. 生息環境

平野部から山地の落葉樹林や針葉樹林のやや湿った林床、公園などの芝地、畑、水田、湿地、河川敷、竹林、果樹園、低山の谷戸環境などに生息する。

### 4. 生息状況

本種の習性から平地から低山まで記録はあるが少ない。静岡県レッドデータブック (2004) 後も、伊豆、東部、中部では各 1 メッシュのみ、西部では 8 メッシュの記録となり大きな変動は見られない。分布が西部に偏る傾向も同じである。本種が主に夕刻から採餌活動に入るので観察し難いことが推察され、正確な生息状況の把握は難しい。私信として、2016 年 12 月に花川河口湿地で轢死個体 1 羽を、2017 年 2 月に細江天池 (谷戸環境) で捕食された残骸 (羽) を確認している。

### 5. 減少の主要因と脅威

雑木林、竹林、耕作地、水田、湿地などの開発による消滅 (15-1、15-2)、施業放棄林の生物多様性の劣化 (54) が加速し餌場としての生息環境の消滅が危惧される。里山林の荒廃に伴う遷移の影響 (53) もあげられる。

### 6. 保護対策

「狩猟鳥」からの指定解除と、主な餌となるミミズが生息できる環境の創出・育成が望まれる。

### 7. 特記事項

特になし。

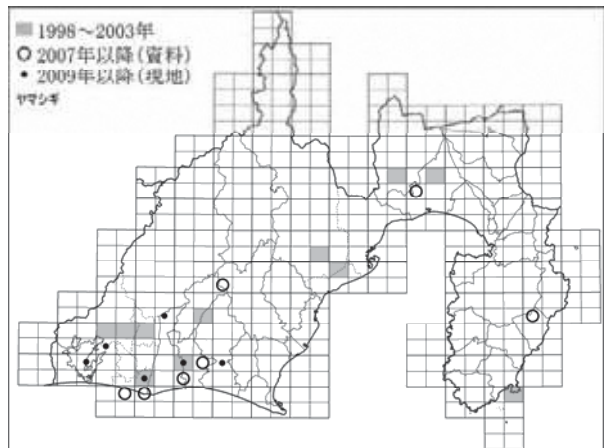
### 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(森田剛則)



富士市岩本岩本山公園 2018年2月9日 渡邊修治



# オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield, 1821)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 24 cm。全身茶褐色で黒褐色の細かい斑がある。雌雄同色。3.4 cm ほどの羽角がある。黒い瞳の周りの虹彩は橙色である。形態がよく似て少し小型のコノハズクは、虹彩が黄色く脚の指を羽毛が覆っていないことで区別される。餌は小鳥類、昆虫類も食うが、特に冬期はネズミ類が多いようである。留鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではサハリン、ウスリー地方、中国東部からインド東部にかけての東南アジアに分布する。国内では全国の低地から山地の林に分布する。北方で繁殖したものの一部は秋冬に南方へ移るものもいる。県内では記録は少ないが、繁殖期にも記録されている。

## 3. 生息環境

繁殖期は標高 500~1,000 m ぐらいの山地の針葉樹林や広葉樹林に生息すると言われるが、冬期は平地の人の生活圏にも生息する。樹洞に営巣するため、大きな樹木のある比較的発達した常緑あるいは落葉広葉樹林を好む。冬期には木の茂みや竹林の中の常緑樹などを休み場にしてしているとされるが、樹洞や巣箱を利用することもある。

## 4. 生息状況

夜行性でありさえずりも姿も目立たないために生息状況はよく分かっていない。冬期に事故によるケガで動物園に持ち込まれる例や死亡例が他の猛禽類より多いこと及び最近 8 年間の筆者の冬期標識調査によれば、32 ポイントのうち 6 ポイントで標識放鳥をしており、従来の認識より越冬数は少なくないのではないかとの印象を持っている。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内ではアオバズク、コノハズク、ブッポウソウなど、繁殖に樹洞を利用し昆虫食で大きさの似た仲間が軒並み個体数・生息地を減少させている。本種の食性は昆虫類が主ではないが樹洞を提供する大径木の減少(11)の影響は無視できない。

## 6. 保護対策

越冬期に巣箱を利用することがわかっていることから、地域限定的には巣箱かけが有効と思われる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

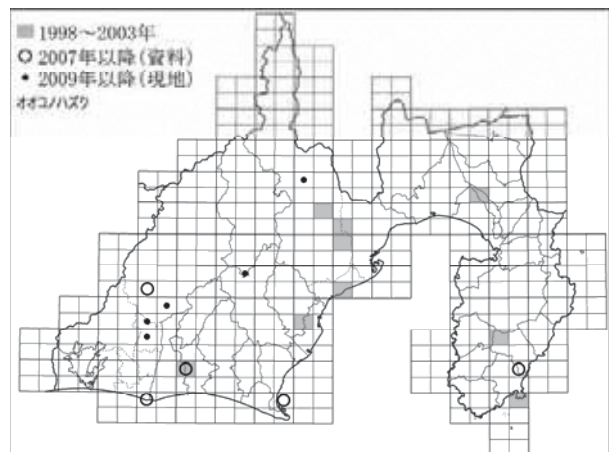
高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

(北川捷康)



©2019 S.Watanabe  
静岡県 1995年12月27日 渡邊修治





### 1. 種の解説

全長約 36 cm。橙褐色の体色に黒褐色の縦斑がある。体上面は茶褐色で濃淡の斑がまじり、下面腹側は白っぽく黒褐色の細い縦斑がある。羽角は 4~5 cm あり、虹彩は橙色である。よく似たコミミズクは羽角が 2 cm と短く、虹彩は黄色であることで区別できる。夜間に活動し、餌はネズミ類を好むが、モグラ類、小鳥類、昆虫類も食う。冬鳥 (対象: 越冬地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸と北米大陸の温帯から亜寒帯にかけて繁殖し、北部のものは南へ移動して越冬する。国内では本州中部の一部を含めてそれ以北で繁殖し、その他の地域では冬鳥として分布する。県内では冬鳥としてごく少数が局地的に分布する。

### 3. 生息環境

平地から山地の森林に生息する。山地では針葉樹林にも生息する。県内の観察例では、平地の農家の屋敷林、工場の片隅の数本まとまった常緑広葉樹、小学校の敷地内の常緑樹、海岸保安林などにねぐらをとっていた。越冬期には数羽の群れでねぐらをとる習性がある。平地の採餌場所は河川敷、農耕地、疎林などと思われる。

### 4. 生息状況

1994~98 年にかけて、磐田市竜洋で 4 羽前後の越冬が記録されている。今回の調査期間には 2007 年に浜松市の海岸保安林、2009 年に浮島ヶ原で渡り途中と思われるものが記録された。また、2012~14 年にかけての 2 越冬期に西部の小学校の敷地内で各年とも 1 羽の利用があった。敷地内のカナリーヤシの木をねぐらにしていたが、2013 年 12 月に周辺の樹木の枝打ちなどの手入れをした後は利用しなくなった (山田久子氏私信)。夜行性であることとほとんど声を発することがないので観察機会が少ないことは否めない。ふつうは数羽が集まってねぐらをとるが、今回の記録はすべて 1 羽であることから、越冬個体数が少なくなったことが推測される。

### 5. 減少の主要因と脅威

採餌場となる河川敷、農耕地、休耕地、草原などの減少 (13、16) や環境悪化。植生遷移 (54) による裸地や丈の低い草地の減少に関して、ツル性植物の蔓延による広範囲の被覆が採餌場を奪っている状況は憂慮される。

### 6. 保護対策

河川管理に関して、採餌場となる河川敷や堤防の法面の植生の管理が求められる。

### 7. 特記事項

植生遷移の問題について、コミミズクの「7. 特記事項」の項 (p88) 参照。

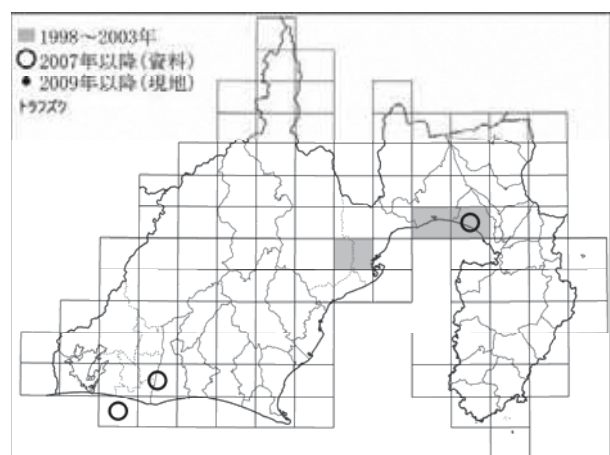
### 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



磐田市 2012 年 12 月 25 日 小岸宣夫





静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

全長約 23 cm。背面はやや赤味のあるオリーブ褐色で、腹と胸は赤褐色。成鳥オスは頭部から首、胸が黒色で、鮮やかな金色のアイリングが目立つ。メスは淡色でアカハラ *T. chrysolaus* のメスに似る。択捉島で繁殖し冬鳥として県内にも飛来するアカハラの亜種オオアカハラ *T. c. orii* のオスには頭部がかなり黒色の個体があるので、識別には注意を要する。昆虫類や植物の実を餌とすることなど一般習性はアカハラによく似る。冬鳥 (対象: 越冬地)。

## 2. 分布

日本固有種として伊豆諸島とトカラ列島に留鳥として生息する。伊豆諸島の主要な生息地は三宅島、八丈島、青ヶ島で、大島では 1992 年に繁殖が確認された。伊豆諸島南部の島での生息密度は高いが伊豆諸島北部の島やトカラ列島での生息密度は低い。県内では冬期の標識記録、観察記録がある。

## 3. 生息環境

繁殖地では常緑広葉樹林、落葉広葉樹林の自然林から二次林まで広く分布しており、常緑広葉樹の自然林で低木層がまばらな環境での生息密度が高い。県内では常緑広葉樹の繁った社寺林などでの観察例がある。

## 4. 生息状況

主要な繁殖地である三宅島ではネズミ駆除のために導入されたイタチによる食害に加えて、2000 年に起きた火山活動により、個体数が大きく減少している。県内には伊豆諸島で繁殖する個体が大島を経由して伊豆半島に渡り、各地に分散すると考えられている。近年の県内での記録はきわめて少なく、今回の調査期間には 2008 年伊東市の文献記録 1 例があるだけである。

## 5. 減少の主要因と脅威

三宅島、八丈島、青ヶ島では、道路工事などに伴う生息地の自然林や二次林の伐採や分断化 (11、24) により、生息環境が悪化しているという。さらに三宅島では天敵の捕食 (52-3)、2000 年の火山活動 (55) の植生の回復が進まないなど繁殖地の問題が大きい。伊豆大島で長年鳥類の生息調査を続けている望月英夫氏によると近年は大島での生息はほとんど記録されていないとのことである (私信, 2017)。県内における観察記録の減少は、県内の事情とは関係なく、繁殖地の要因によるものと思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 50 年)。1996 年 2 月 29 日下田市爪木崎で本州初の標識放鳥個体が、3 月 3 日に同地で再放鳥され、本種の越冬地を示唆するとされた (公財 山階鳥類研究所, 1997)。

## 8. 主な文献

望月英夫 (1993) 伊豆大島でのアカッコの繁殖. 鳥, 41(1): 22-23

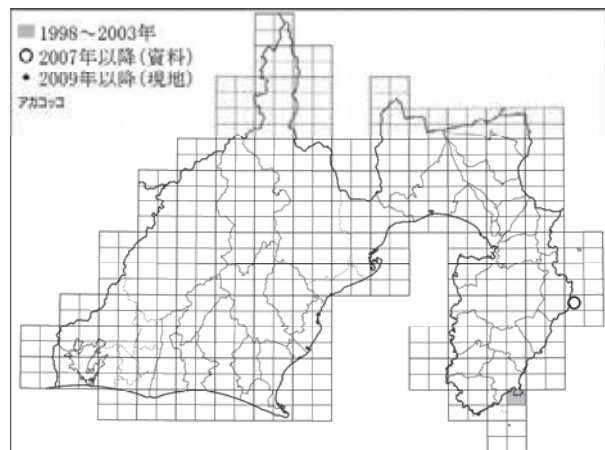
財団法人 山階鳥類研究所 (1997) その他の希れな記録 4 アカッコ. 平成 8 年度 鳥類標識調査報告書 (鳥類観測ステーション運営), p. 17. 財団法人 山階鳥類研究所, 我孫子市.

北川捷康 (2018) 県版 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

静岡の鳥編集委員会 (2010) 静岡県の鳥類 第 2 版. 静岡の鳥編集委員会, :306 (北川捷康)



東京都大島町 1989 年 5 月 28 日 望月英夫



# オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray, 1831)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

全長 28~33 cm。長くまっすぐな嘴と短い脚を持ち、ずんぐりした体形のジシギ類の中で最も大型で淡色である。尾羽は 16 枚または 18 枚。オスは繁殖期に「ジッ、ジッ、ジッ、ズビヤーク、ズビヤーク」と鳴きながら飛び回り、「ゴゴゴゴ…」という音を出しながら急降下するディスプレイフライトを行う。地上から飛び立つとき「ゲッ」と太い声で鳴き他のジシギと区別できる。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

## 2. 分布

国外ではサハリン南部、ロシア極東南部でも繁殖するが、日本が主な繁殖地である。冬期はオーストラリア東部からタスマニアに渡る。国内では主に本州中部から北海道、南千島にかけて夏鳥として渡来するが、広島県などの中国山地での繁殖も少数ある。県内では富士山麓の朝霧高原や御殿場高原に夏鳥として渡来する。春秋には旅鳥として水田や湿地などに立ち寄る。

## 3. 生息環境

草地、牧場、農耕地、河川敷、湿原など開けた環境で繁殖するが、灌木が点在する環境を好む傾向がある。

## 4. 生息状況

低地で繁殖する北海道とは異なり、県内では標高の高い広い草原で繁殖する。この条件を満たす朝霧高原と御殿場市の東富士演習場に渡来する。朝霧高原では繁殖地が開発で失われ、2017 年時点では渡来が確認されていない。それに対し環境変化のない東富士演習場では個体数は維持されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原では最も多数が生息していた灌木の点在する草原が、ゴルフ場 (21) やオートキャンプ場 (23) へと開発された。また、税制上優遇されるという理由で植林 (16) されたために生息環境が失われたところもある。

## 6. 保護対策

現在残された生息地である東富士演習場は現状変更の可能性は比較的低いが、監視を続ける必要がある。

## 7. 特記事項

本種を要注目種 (N-II 分布上注目種等) に選定したのは、分布上注目すべき繁殖群としての位置づけである。したがって、春秋の渡りの時期に県内各地を通過するものは対象外である。

## 8. 主な文献

飯田知彦 (1991) オオジシギ *Gallinago hardwickii* の繁殖行動と生息環境. Strix, 10: 31-50

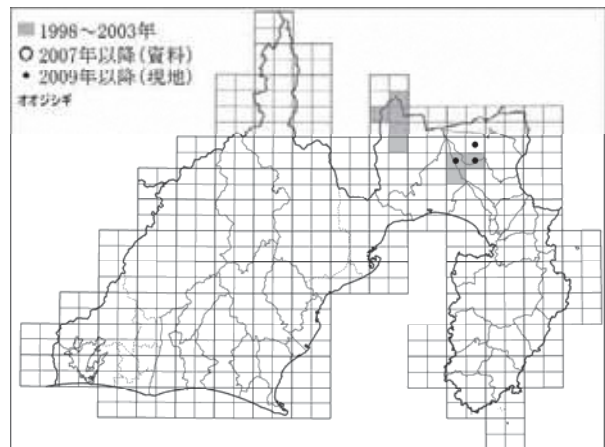
中村浩志 (1996) オオジシギ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類 I, p. 103. 平凡社, 東京.

影山秀雄 (2004) オオジシギ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック- (動物編), p. 108. 羽衣出版, 静岡.

(渡邊修治)



沼津市原浮島ヶ原 2006年9月9日 渡邊修治



### 1. 種の解説

全長約 29 cm。まっすぐな長い嘴の中型のシギ。冬鳥として渡来する。雌雄同色。冬羽は全体に灰褐色の地味な羽色であるが、春の渡去前には全体に赤褐色の夏羽になる。体形の似たジシギ類とは体色が灰色であることと飛んだ時に腰上の白と次列風切羽の外縁の白線で区別できる。冬鳥（対象：越冬地）。

### 2. 分布

国外ではベーリング海峡を挟んだ両大陸の極北部の一部で繁殖する。国内では北海道、本州、四国、九州に冬鳥あるいは旅鳥として渡来分布する。県内では旅鳥として希に記録されることがあるが、磐田市の大池には例年渡来し越冬した。

### 3. 生息環境

水田、ため池、河口などにも生息するが、泥質の内陸湿地を好む。

### 4. 生息状況

磐田市の大池には毎年 1~3 羽が越冬していた。県内で越冬するのは大池だけで、その他の地域ではきわめて希な旅鳥として秋に短期間滞在するだけである。大池では早い年には 10 月初旬に渡来し、越冬後の 4 月下旬まで滞在し、夏羽になって渡去する。1995-96 年には 2 羽、1996-97 年には 3 羽が越冬している。ちなみに、渡来数の多かった 1996 年秋には、9 月 17 日に本種に近縁で嘴の短いアメリカオオハシシギの夏羽の残る個体 1 羽も観察している（北川、県内 2 例目）。オオハシシギ属にとっては、大池が好適な環境であると思われる。その後も毎年 1~2 羽の越冬があり、2008 年秋にも 3 羽飛来し越冬、2009 年 4 月まで滞在した。しかし、2009 年秋以降は記録が途絶えていたが、2014 年 10 月（中村）、2017 年 11 月（小岸）に各 1 羽が記録された。大池以外の記録は、2007 年 12 月に富士川河口、2016 年 11 月に焼津市田尻の記録がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

2008-09 年に 3 羽も越冬したのに、その後突然、数年間飛来が記録されなくなった。直接的な理由は分からない。湛水防除事業で池底を広く深く浚渫（15-1）して以後、ヨシ原も縮小され、小魚の姿もほとんど見なくなった。水質及び本種の採餌場の泥質の干潟環境の悪化が指摘されている（ヨシゴイの項 p80 参照）。

### 6. 保護対策

磐田市大池の水質及び泥干潟環境の保全は必須である。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

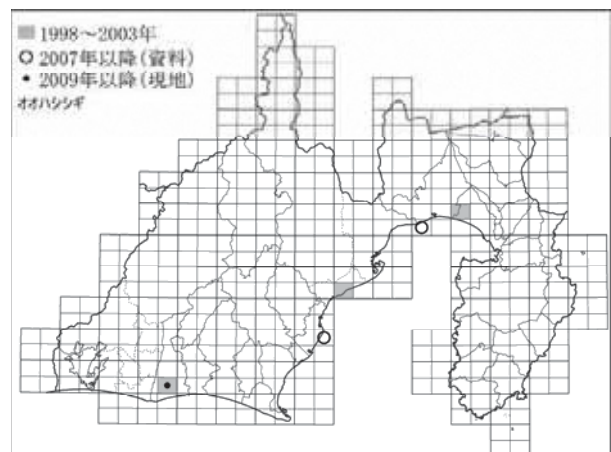
北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, 41: 25-29

鈴木 昇 (2018) 「大池の水質調査」(第 II 報) 現状の水質状態の把握と水質改善への提言:28-35

(北川捷康)



磐田市大池 2003年2月27日 北川捷康





# オオワシ *Haliaeetus palagicus* (Pallas, 1811)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

大型のワシで全長オス約 88 cm、メス約 102 cm である。翼開長オス約 221 cm、メス約 244 cm。成鳥は額と翼の前縁、脛から尾の部分が純白で他の羽毛はほとんど黒く、嘴と足は鮮やかな黄色である。幼鳥はほぼ全身褐色で白いまだら模様がある。年齢とともに成鳥の羽毛に近づき 5~6 年で成鳥羽になるとされている。サケ・マス類、スケソウダラなどの魚が主な餌である。冬鳥 (対象: 越冬地)。

## 2. 分布

国外では極東ロシアに繁殖分布し、国内では冬期、北海道、本州北部に渡来する。県内には希な冬鳥として海岸や河口部に渡来する。

## 3. 生息環境

餌は魚類、海鳥類などであるので、渡来地は海岸部や河口部であるが、時には河川沿いに上流部に移動することもある。他の大型鳥類同様に警戒心が強いので、採餌や休憩地は人が近づきにくい場所を選んでいると思われる。

## 4. 生息状況

以前はきわめて少ないながらも 1~2 羽の渡来数があり、ほぼ毎年県内のいずれかの場所で確認され、浜名湖、天竜川河口、大井川河口、富士川河口、駿河湾、焼津港などで記録があった。海岸や河口部で採餌し、夜は近隣の山中で“ねぐら”をとることが多いようであった。かつて定期的渡来があった場所でも、2010 年以降確認が途絶えている状況である。

## 5. 減少の主要因と脅威

詳細は不明だが、本種の生息環境を大きく低下させる要因は特になし (99) と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

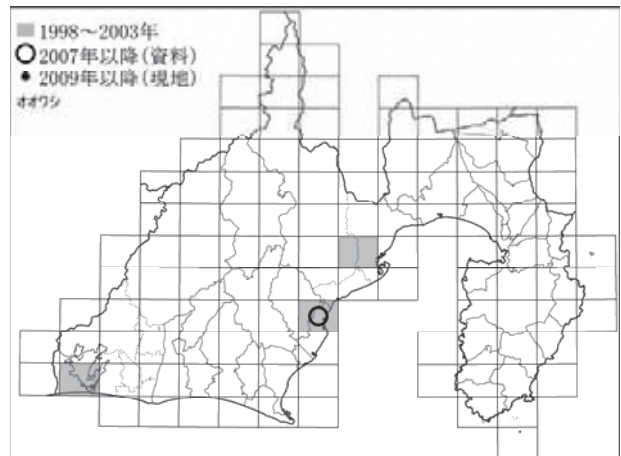
文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 45 年)。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成 5 年)。

## 8. 主な文献

森岡照明・叶内拓哉・川田 隆・山形則男 (1995) 日本のワシタカ類。文一総合出版、東京、631 pp.  
静岡の鳥編集委員会 (2010) 静岡県の鳥類 第 2 版。静岡の鳥編集委員会、静岡。 : 108



焼津市小川港 2007年2月12日 伊久美隆



(新井 真・近藤多美子)



# ハイイロチュウヒ *Circus cyaneus* (Linnaeus, 1766)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長オス約 45 cm、メス約 50 cm。オス成鳥は頭部から胸と背面は灰色で下面は白い。初列風切羽の 6 枚のみ黒い。メスは褐色で腰が白い。翼上下面の風切羽にタカ斑が出るので、チュウヒのメスと識別できる。なお、チュウヒには羽色に個体変異が多く、オスの若鳥や褐色系には腰の白っぽい個体があるので、識別には注意を要する。チュウヒと同じように翼を逆への字形に保って飛ぶ。哺乳類のノネズミ類、鳥類（たとえばカモの仲間、ムナグロ、ツグミなど）を餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパからユーラシア大陸の亜寒帯を

通ってオホーツク沿岸までと北アメリカで繁殖する。国内では冬鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来する。県内では局地的で朝霧高原、天竜川、中遠地域、浜名湖周辺の農耕地・湿地にごく少数渡来する。

## 3. 生息環境

主に平地の開けた農耕地や草生地を主な餌場として生息するが、標高 800 m ほどの朝霧高原にも生息する。チュウヒ同様低空飛行して採餌するが、採餌場としての草生地の草丈はチュウヒよりも低い植生を好む。

## 4. 生息状況

きわめて少ない冬鳥として渡来する。いずれの分布地においても 1 羽が観察されている。チュウヒと同様に天竜川から太田川及び浜名湖付近に記録が集中して

いるのは、天竜川や太田川の河川敷及び中州のヨシ原、浜名湖周辺の養鰻池跡地のヨシ原が他地域よりも広く残っていることによると思われる。天竜川河口付近では 2002 年にはチュウヒと同一のねぐらを利用していたが、2002-3 年にかけて低水路内の隣接地で砂利採取の工事が行われ、ねぐらに入る時間帯より前に作業を終える配慮がなされたが、事後の利用はなくなった。その後、浜名湖畔の養鰻池跡地のヨシ原でもチュウヒとねぐらをともししていた。朝霧高原では以前に比べて観察頻度が著しく低下した。

## 5. 減少の主要因と脅威

餌場になるヨシ原のある湿地や草生地の開発 (15-1、16) あるいは遷移による植生の変化 (54) で、採餌地やねぐらの消滅が直接的な主要因と思われる。

## 6. 保護対策

生息が確認されている地域のヨシ原やねぐら環境の保存が必要である。

## 7. 特記事項

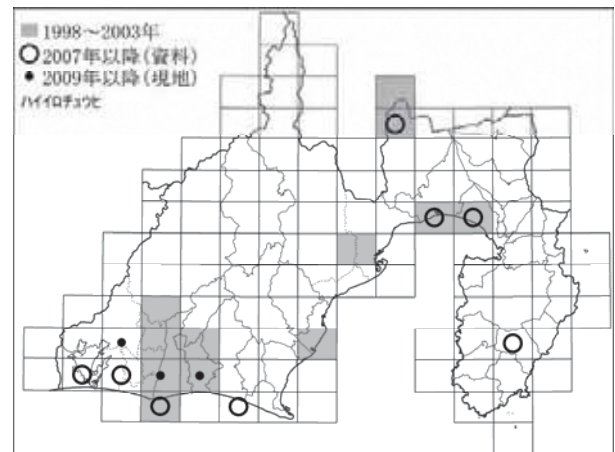
特になし。

## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。



袋井市浅羽 2012年3月12日 大杉正也



(北川捷康)

# ノビタキ *Saxicola torquata* (Linnaeus, 1766)

ヒタキ科 Muscicapidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 13 cm。オスは頭部からの上面が黒く、翼と腰から上尾筒に大きな白斑がある。胸はオレンジ色。頸側と腹以下の下面は白い。嘴、脚は黒い。メスは頭部からの上面は褐色で、黒褐色の縦斑がある。翼に白斑がある。淡褐色の不明瞭な眉斑がある。喉からの下面は淡褐色で、胸にオレンジ味がある。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸中部及び南部、アフリカ東部及び南部などで繁殖し、冬季は地中海周辺、アフリカ大陸北東部、アラビア半島、インド、東南アジアから中国南部に渡る。国内では夏鳥として本州中部以北で繁殖する。旅鳥として日本全国を通過する。先島諸島では越冬する。県内では朝霧高原や御殿場高原など富士山麓の高原で繁殖する。

## 3. 生息環境

平地から山地の灌木の点在する草地、牧草地、湿地、河川など開けた環境に生息する。渡り時には草地や河川敷だけでなく農耕地でも見られる。

## 4. 生息状況

県内では繁殖に適する山地の草原が富士山麓に限られ、東富士演習場と富士宮市の朝霧高原の一部でのみ繁殖が確認されている。東富士演習場では安定的に個体数が維持されているが、朝霧高原では 2000 年当時 4 つがいが繁殖していた北東部で、2017 年には繁殖が確認されなくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原ではヒノキの植林 (16) のため繁殖地が失われている。朝霧高原北東部での減少の原因は不明である。

## 6. 保護対策

繁殖適地の、灌木が点在する草地の維持が重要である。

## 7. 特記事項

朝霧高原では草地がワイン用のブドウ畑に代わりつつあり、ノビタキが好んで採餌する大根畑が減少する傾向がある。一方、東富士演習場は毎年野焼きが行われ、草原が維持されている。

なお、本種を要注目種 (N-II 分布上注目種等) に選定したのは、分布上注目すべき繁殖群としての位置づけである。したがって、春秋の渡りの時期に県内各地を通過するものは対象外である。

## 8. 主な文献

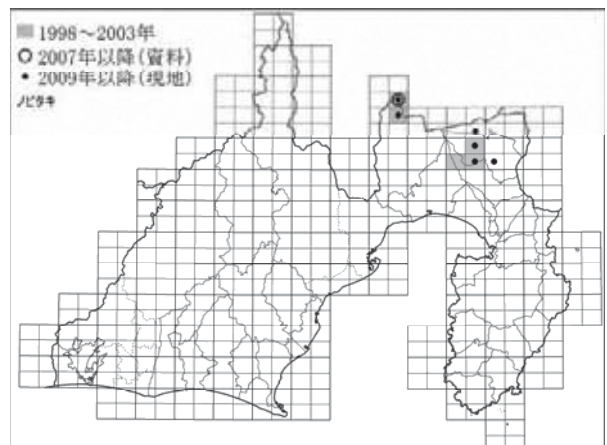
中村登流 (1997) ノビタキ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第4巻 鳥類II, p. 105. 平凡社, 東京.

影山秀雄 (2004) ノビタキ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブック- (動物編), p. 109. 羽衣出版, 静岡.

(渡邊修治)



左: オス 朝霧高原 2000年5月10日 渡邊修治  
右: メス 浮島ヶ原 2000年9月15日 渡邊修治



### 1. 種の解説

全長約 57 cm。成鳥は頭から後頸及び背は濃紺色。他の部分は白か薄い灰色。後頭から 12~20 cm の白く細長い飾り羽がふつう 1~2 本伸びている。虹彩は赤い。雌雄同色。幼鳥は上面が褐色で白またはバフ色の斑が密にある。下面はバフ色に褐色の縦斑がある。夜行性であるが、育雛期には昼間も採餌をする。魚類、甲殻類、両生類、昆虫類などを餌にする。夜間に「コァッ」と聞こえる声でよく鳴くので「夜ガラス」という方言名がある。主に夏鳥として渡来するが留鳥として越冬するものもある。留鳥・夏鳥(対象：繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシアの温帯以南、アフリカ、南北アメリカ大陸に広く分布する。国内では北海道ではほぼ夏鳥、本州以南では留鳥とされるが、標識調査により多くのものが越冬のためにフィリピン、インドシナ半島、台湾、中国南東部などに渡ることが明らかになっている。県内では平地に広く分布している。

### 3. 生息環境

海岸付近から丘陵地の水田、池沼、河川、湿地などを採餌地とし、林にコロニーを形成する。

### 4. 生息状況

もともとふつうに生息していたが、20年ほど前から減少が顕著となった。1989年に伊東市に約3,000羽のサギ類のコロニーが形成された。そのうち約3割の900羽ほどがゴイサギであったという。カタクチイワシ養畜の生簀を狙って集結したものであった。しかし、有害鳥獣駆除と活餌料需要の減少などで伊豆東海岸のサギ類のコロニーは衰退した(木部裕正氏私信)。その後の変遷は不明だが、2016-17年現在は沼津市(20巣ほど、渡邊)、藤枝市(幼鳥30羽、近藤)、焼津市(25巣、近藤)、静岡市清水区(20巣、小泉)、袋井市(成鳥15羽、北川)、浜松市北区(5巣、北川、10羽、森田)などのコロニーがある。

### 5. 減少の主要因と脅威

コロニーをめぐる人との軋轢がもたらす有害鳥獣駆除(41)、護岸整備や埋立などの池沼や湿地開発(13、15-1)、圃場整備(15-2)、河川改修(13)などによる餌場環境の悪化が大きな影響を与えている。

### 6. 保護対策

住宅地の近隣にコロニーを形成することがしばしばあり、育雛期の騒音・悪臭・糞害などで有害鳥獣駆除の対象になる場合がある。軋轢の予測が可能であれば、営巣開始前に追い払うという選択肢も考えられる。

### 7. 特記事項

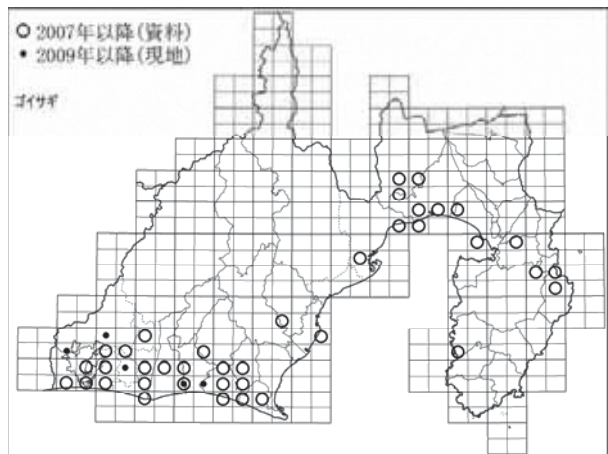
2016年からの全国鳥類繁殖分布調査中間報告によると、関東以西で分布の縮小が顕著であり、本種の増減率が「-54」で最も縮小している状況が明らかになった。一方、桶ヶ谷沼など静岡県の保全すべき湿地2ヶ所でアメリカザリガニが爆発的に増加し、希少種の水生昆虫類や植物を捕食・切断するという被害が起こっている。同地の古老から、昔からザリガニはいたが、本種がたくさんいて食っていたという話を聞いた。本種が生態系のバランスを保つ役割を果たす可能性と、今後見守る必要性から部会注目種とした。

### 8. 主な文献

植田睦之他(2018) 分布の縮小した鳥・拡大した鳥。全国鳥類繁殖分布調査ニュースレター, 13: 1 (北川捷康)



浜松市北区細江町 1995年6月10日 中村裕志





### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 57 cm、メス約 59 cm である。翼開長オス約 159 cm、メス約 163 cm。成鳥、幼鳥とも背面、翼と尾の上面が褐色で、下面は白い。頭部は白く、目から頸にかけて太い黒帯がある。特に胴体はほとんど無斑で純白に近く、飛翔時はきわめて白い鳥に見える。もっぱら魚を捕食する。留鳥または冬鳥(対象:生息地)。

### 2. 分布

国外では全世界に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に生息し繁殖する。秋には南に渡る個体もあり、冬期には繁殖していない地域でも観察される。県内では周年観察されるが、冬期には見る機会が増える。

### 3. 生息環境

海上、海岸、河川、湖、池など魚類を捕食できるところに広く生息する。捕った魚をつかんで数 km 移動し、安全な山中で食べることもある。営巣地では崖や樹上、鉄塔などの頂部に皿状の巣を造る。

### 4. 生息状況

県内でも、海岸や河川、ダム湖、ため池などに飛来する。伊豆では周年生息しており、繁殖が確認されている。他の地域でも周年見られる場所が多くなっている。

近年は全国的に新たな繁殖記録や山間地への進出もある。越冬期、河口部周辺で多数個体が観察されることは珍しくなくなった。富士川河口では最大 15 羽の記録もある(渡邊修治氏私信)。

### 5. 減少の主要因と脅威

特になし。

### 6. 保護対策

四国では、マツの枯死により自然繁殖巣が落下し、人工巣台設置による対策を実施した事例がある。

### 7. 特記事項

近年の観察例の増加は、個体数が増加しているためと考えられる。海岸・河口部周辺の環境変化や餌となる大型魚類の増加が関係しているのか、今後とも生息の動向を注視していく必要がある。

### 8. 主な文献

遠藤公男(1996) ミサゴ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類 I, p. 147. 平凡社, 東京.

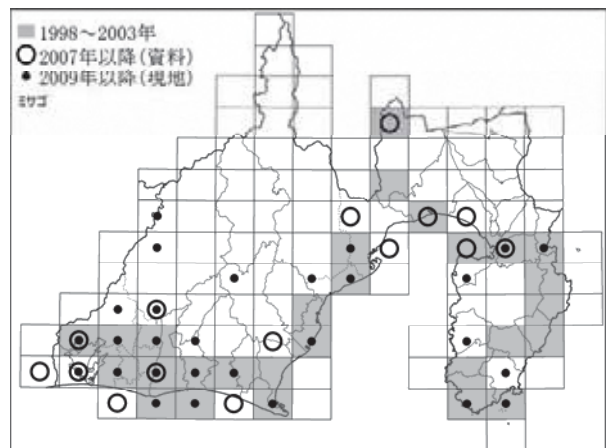
中屋敷誠司(2009) 中筋川ダムにおけるミサゴの保護活動について. 平成 21 年度国土交通省国土技術研究会(プログラム自由課題(一般部門)).

渡辺靖夫・越山洋三・先崎啓究・伊関文隆(2012) フィールドガイド日本の猛禽類 Vol.1 ミサゴ. 西本真理子植物画工房マカロン, 岡山, 13 pp.

東 淳樹(2014) コラム 6 山間地のダム湖および溪流の鳥類. ダムと環境の科学 III エコトーンと環境創出, pp. 233-236. 京都大学学術出版会, 京都.



©2019 S.Watanabe  
富士川河口 2007年9月25日 渡邊修治



(新井 真・近藤多美子)



### 1. 種の解説

全長オス約 28 cm。メス約 32 cm。チョウゲンボウに似ていてさらに小型のハヤブサの仲間。オスは上面が青灰色、メスの上面は暗褐色をしている。よく似たチョウゲンボウは尾が長く、上面が雌雄ともに明るい褐色で羽端の黒色の小斑が目立つこと、頻りにホバリングをするが本種は滅多にしないことなどで区別できる。また本種の方が動きは敏捷で、飛んでいる小鳥類をスピーディーな飛翔で追跡し、ハヤブサのように蹴落とす方法を得意としている。小鳥類の他にネズミや昆虫も捕食する。冬鳥(対象:越冬地)。



天竜川 2002年12月30日 北川捷康

### 2. 分布

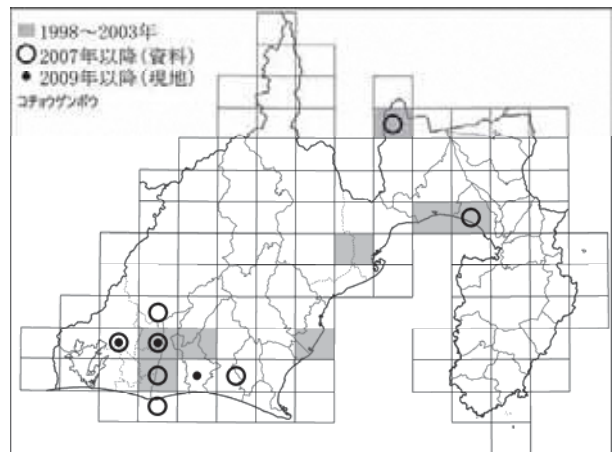
国外ではヨーロッパからベーリング海沿岸に至るユーラシア大陸北部及び北アメリカ北部に幅広く繁殖し、南へ渡って越冬する。国内では冬鳥として北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では西部にやや広く分布し、東部では局地的に分布する。

### 3. 生息環境

主に平地の農耕地、河川敷、草生地、湿地、灌木林など広々とした環境に生息する。似たような環境があるところでは標高 800 m 以上ある朝霧高原などにも生息する。

### 4. 生息状況

天竜川や太田川などの河川敷、朝霧高原、浮島ヶ原などで生息が記録されているが、どの生息地においても単独で生息し、個体数は少ない。小鳥を主食にし、天竜川河川敷の食事場にしていた場所の下にはカララヒワやホオジロの仲間の翼などの羽毛が多数落ちていた。ねぐらは愛知県などで数羽が共有することが知られているが、本県ではまだ記録されていない。生息密度が関係しているのだろうか。



### 5. 減少の主要因と脅威

主な生息環境である農耕地、河川敷、草生地、湿地などの造成・改変・管理放棄など(13、15-1、16、53、54)が影響を与えていると考えられる。

### 6. 保護対策

主な生息環境である農耕地、河川敷、草生地、湿地などの造成・改変・管理放棄は最小限にとどめる配慮が求められる。

### 7. 特記事項

なし。

### 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)

### 3. 爬虫類

#### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

日本で知られている爬虫類は、カメ目 15 種、有鱗目トカゲ亜目 46 種、有鱗目ヘビ亜目 47 種（日本爬虫両棲類学会ホームページ、2017 年 10 月 1 日現在）である。この中には国外外来種も含まれている。近年、日本各地でカミツキガメの生息確認の報告があり、静岡県でも県東部で生息と繁殖の確認の報告があるため生息種に加えた。また 2006 年磐田市の天竜川東部の一部地域でスウィンホーキノボリトカゲの定着が確認され、駆除作業により一時見られなくなったが、2017 年には、同地区で頻繁に確認されている。これらを考慮すると、静岡県に生息する爬虫類は、カメ目 6 種、有鱗目トカゲ亜目 5 種、有鱗目ヘビ亜目 8 種となり、日本全体と比べるとその比率はカメ目 40 %、トカゲ亜目 10.9%、ヘビ亜目 17 %になる。

#### (2) 調査の概要

RDB 作成のための基礎データは野外調査と室内調査によって集積した。野外調査では県内のできるだけ多くの地域を踏査し、新産地の発見と既知の産地での現況確認に努めた。また、ヒガシニホントカゲとオカダトカゲの分布の境界と考えられる交雑個体がみられる地域では、広範囲でのサンプリングと DNA 解析を行った。他のいくつかの種についても DNA 解析のための組織サンプルをできるだけ多くの地点で収集するよう努力した。

#### (3) レッドリスト種の選定経緯

前回（2004 年）の県内爬虫類目録掲載種に加え、今回新たに生息確認された 2 種を含め、県内確認目録の爬虫類 19 種の中から、外来種 3 種を除外して、調査結果や生息状況を加味し、16 種を RDB の対象として検討した。前回（2004 年）のレッドリスト種については、その後の状況を検討し、一部ランクを修正した。

#### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は、前回（2004 年）の 7 種に対し、今回は 8 種で、1 種（ニホンイシガメ）の増加があった。また、絶滅のおそれのある種の総数は、前回（2004 年）同様、今回もアカウミガメ 1 種のみである。一方、将来絶滅のおそれのある種となる可能性の高い準絶滅危惧は前回より 1 種増加している。

#### (5) 減少の主要因と脅威

淡水生カメ類の減少は河川改修によるものが多いと考えられる。洪水による被害防止の為に、より強固で画一的なコンクリート護岸の設置と、流木防止のための河畔林の皆伐により生息の要所である淵やワンドが消失してしまうのである。また国外外来種のミシシippアカミミガメの増加により、在来種は餌と住みかを奪われている。しかし、一番心配されるのは海産のアカウミガメで、海岸線の砂浜が消失し、産卵環境が急激に減少していることである。ダム建設や河川の砂利採取により砂の供給が少なくなったことが原因であるが、分量は少ないといっても現在も安倍川、藁科川で行われていることは驚きとともに脅威である。

ヘビ類の一部は、餌となるカエルの減少により個体数が減少していると考えられるが、個体数推定は困難で正確な数字は把握できていない。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

ニホンイシガメが準絶滅危惧に指定されたが、河川水辺の国勢調査のデータからも捕獲箇所、個体数の減少が見てとれる。たとえば、春季の日光浴の観察結果ではニホンイシガメの記録は消え、ほとんどがミシシippアカミミガメにすり替わっているのである。また、「ウンキウ」や「イシクサガメ」と呼ばれるクサガメとの交雑個体を確認されているが、ニホンイシガメの個体数が減少する中、遺伝的な汚染も深刻な問題である。

### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

近年頻発する豪雨災害と、想定される東海沖地震・東南海沖地震の対策として今までにない規模の河川改修が計画され進行しつつある。また、浜松海岸には巨大な防潮堤が作られているが、他の市の海岸線にも建設要望が上がってくることは必至であろう。工事を回避することはできないため、大きな河川では高水敷地に繁殖や生息できる場所を創出することが重要である。浜松海岸の防潮堤建設に際しては、考え得る保全対策を提案し、採用されてきたが、今後開始される工事についても同様に保全対策を行う必要がある。浜松の防潮堤では天竜区から建設用土砂を運んでいるが、この土砂採取地にも貴重動植物が生息していたため、別途、保全対策を行っている。将来に向け健全な自然環境を残すことが責務である。

### (8) 文献（多くの種で参考とした文献）

関慎太郎（2016）野外観察のための日本産爬虫類図鑑。緑書房，東京，207 pp.

（國領康弘）

# アカウミガメ *Caretta caretta* (Linnaeus, 1758)

ウミガメ科 Cheloniidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

甲長 80~90 cm。背面は頭部や四肢を含めて褐色で、腹面は淡い黄褐色を呈する。ウミガメ類の中では相対的に頭部が大きく顎の力が強い。これは固い貝などの底生動物を餌とするためだと考えられている。5月下旬より産卵が始まり8月中旬まで続く。1回の産卵で100~120個程度の卵を産み、1シーズンに複数回産卵する。孵化する子ガメの甲長は4 cmで、黒褐色。

## 2. 分布

インド洋、太平洋、大西洋、地中海の水温 15℃以上の海域に分布する。それぞれの大洋において、暖流が近くを流れる砂浜海岸に上陸して産卵するが、北太平洋の産卵場は沖縄から関東地方までの外海に面した砂浜のみに限られる。県内では湖西市・新居町・浜松市から御前崎市・牧之原市にかけての砂浜、また伊豆半島の小規模な砂浜でも産卵する。

## 3. 生息環境

孵化した幼体は黒潮・北太平洋海流によって北太平洋あるいはカリフォルニア半島の沖まで流される。その後、直甲長が 60 cm を超えると日本沿岸に戻ってくる。日本の南方海上では、黒潮を利用しながら回遊するが東シナ海で定着する個体もある。産卵する海岸は外洋に面して、黒潮の流れる太平洋岸に多い。

## 4. 生息状況

静岡県における年間の産卵回数は1990年代より、数百回から1,000回の間で変化している。産卵回数は1,000回を超えることはないことから、毎年の産卵個体数は数百個体と予想される。九州南部など多くの産卵地では1998年以降増加傾向にあるが、静岡県の場合はその傾向は認められない。

## 5. 減少の主要因と脅威

一般的には定置網漁と延縄漁などによる混獲が最大の脅威と考えられている(41)。また、静岡県では卵を孵化場で管理し、幼体が一時的に放流される傾向がある(71)。これが減少の要因となっている可能性も高い。

## 6. 保護対策

御前崎市では砂浜の砂の侵食が激しく、自然の産卵巣は波で冠水する可能性が高い。そのために陸域に孵化場をつくり孵化させている。また、浜松市やその東側でも卵は浜松市の孵化場に移植されているが、多くの卵は自然孵化する状態にあると考えられ、移植が保護になっているのかが疑問視されている。

## 7. 特記事項

北太平洋の個体群の産卵地は日本に限定されている。

## 8. 主な文献

亀崎直樹 監修 (2012) ウミガメの自然誌. 東京大学出版会, 東京, 307 pp.

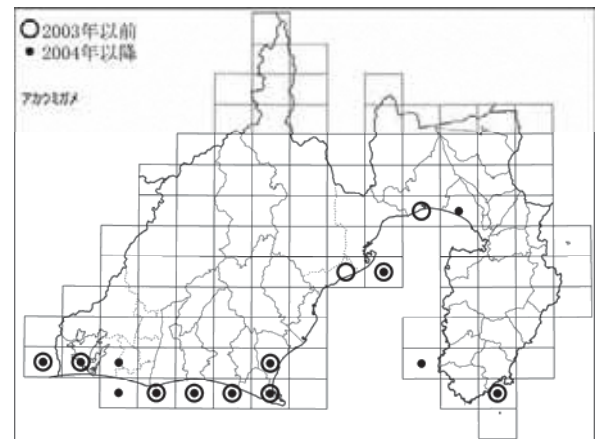
環境省自然環境局・日本ウミガメ協議会 (2006) ウミガメ保護ハンドブック. 環境省, 34 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球自然史ミュージアム



©2019 A.Yamamoto  
牧之原市相良 2005年7月27日 山本明男



(亀崎直樹)



## ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (Temminck & Schlegel, 1835)

イシガメ科 Geoemydidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

甲長 13~20 cm。オスは小さく、メスの甲長の 2/3 くらいである。甲羅の椎甲板には隆起があり、甲羅後縁は鋸歯状だが、老齢個体では摩耗して不明瞭となる。背甲は黄褐色で、腹甲は黒色である。頭部はクサガメに比べ小さく暗黄色で、側頭部には黒い斑紋がある。幼体の甲羅は扁平で、後方の縁甲板には突起が 2 つある。尾は長く、甲羅の長さの 3/4 ほどを占めるが、成長とともにその割合は小さくなる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐諸島、五島列島、対馬、淡路島、壱岐、佐渡島に分布する。県内では天竜川や瀬戸川、安倍川、巴川、狩野川、青野川など主要水系の他、浜名湖や佐鳴湖につながる河川などで各地で記録されている。

### 3. 生息環境

山間部の谷川から中流域、下流域までの流水域で透明度が高い河川を好むが、水田や池沼、湿原でも見られる。川底が礫質で、日光浴に適した土手や石がある環境を好む。夏季は谷川から水田やため池に移動することもある。

### 4. 生息状況

県内に広く分布し、低地から丘陵地まで生息が確認されている。個体数は、中部及び東部で減少傾向にあり、特に伊豆半島では個体数が少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の個体数減少は、コンクリート垂直護岸による陸地への移動と繁殖の阻害 (13、15-2) のほか、愛玩飼養や商業目的による乱獲 (41) が原因と考えられる。また、外来カメ類との競合や交雑による遺伝子汚染 (56-1、57-1) の進行が危惧される。

### 6. 保護対策

2013 年にワシントン条約附属書 II に掲載され、輸出が規制された。背甲長 8 cm 以上の野生個体は輸出禁止となったが、国内においては流通に規制はなく、野生個体の搾取と販売が続いている。各地で外来カメ類を取り除く活動は進んでいるが、本種の保護を目的とした特別な対策はとられていない。

### 7. 特記事項

静岡県を含む国内各地でクサガメとの交雑が確認されており、遺伝子汚染の現状を把握するとともに保護のための対策が必要とされる。

### 8. 主な文献

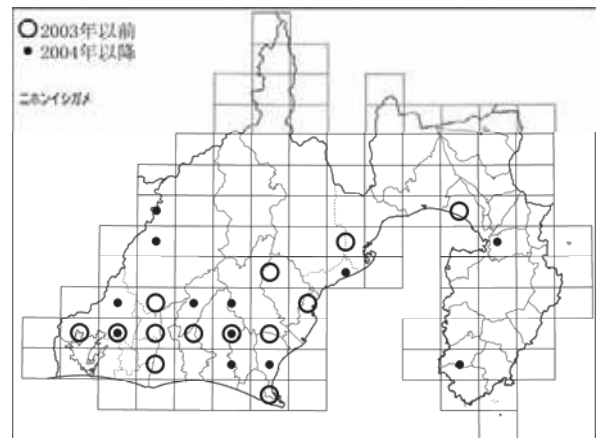
Kato, H., K. Kishida, T. Sasanami, N. Kansaku, H. Etoh & M. Toriyama (2010) Detection of Hybrid Individuals between *Mauremys japonica* and *Chinemys reevesii* by RAPD. *Biogeography*, 12: 39-42

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



狩野川 2006年3月11日 加藤英明



(加藤英明)

## 1. 種の解説

甲長 20~40 cm。本草綱目啓蒙に琵琶湖に径二尺のものがいるとあるので、甲長 60 cm に近いものもいるかも知れない。甲は丸く、滑らかに皮膚に覆われる。背面はオリーブ~灰色で、暗色の斑点が散在することもある。腹面は白い。手足には水かきが発達しており、第 1~3 指に爪がある。鼻孔の先端は突出しており、頸が長く伸びる。

## 2. 分布

国外では台湾、朝鮮半島、ロシア沿海州、中国東北部から東南部、ベトナムまで、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。琉球列島では、奄美諸島には日本列島から、八重山・宮古諸島、沖縄諸島には台湾から移入された。食用のため、東南アジア、ハワイ諸島などにも移入され定着している。県内では浜松市、掛川市、榛原郡吉田町、焼津市、静岡市、沼津市、下田市から記録がある。他のカメ類に比べると目撃されにくい種なので、他の河川にも生息している可能性は高い。

## 3. 生息環境

河川の中・下流域や、池、沼に生息する。

## 4. 生息状況

大きな河川の中流から下流域で観察される。繁殖期に農業用水路などを伝って田んぼの畔に産卵することがあり、10 数個体が集まっていたのが観察された。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川の護岸工事、水路のコンクリート 3 面化により産卵場所が減少している (13、15-2)。また、水質の汚濁により生息環境は悪化している (31)。

## 6. 保護対策

河川改修の際、産卵できる環境を残し、ニホンスッポンが登ることができる護岸にすることが望ましい。

## 7. 特記事項

養殖は主に養殖場近くで得られた日本産のものを選んで行われているが、中国産が輸入され、逃げ出したものなどが定着、日本産と交雑を起こしているという報告もある。中国産を別種とする研究者もおり、注意が必要である。中国産は甲が縦長で、甲の丸い日本産と区別ができる。しかし、交雑個体の判別は形態では不可能である。

## 8. 主な文献

大田英利 (2014) 日本に見られるスッポン個体群の起源について. 亀楽, (7): 6

佐藤寛之・吉野哲夫・太田英利 (1997) 沖縄県内の島嶼におけるスッポン (*Pelodiscus sinensis*) (爬虫綱, カメ目) の起源と分布の現状について. 沖縄生物学会誌, 35: 19-26

Suzuki, D. & T. Hikida (2014) Taxonomic status of the soft-shell turtle populations in Japan: A molecular approach. Current Herpetology, 33(2): 171-179

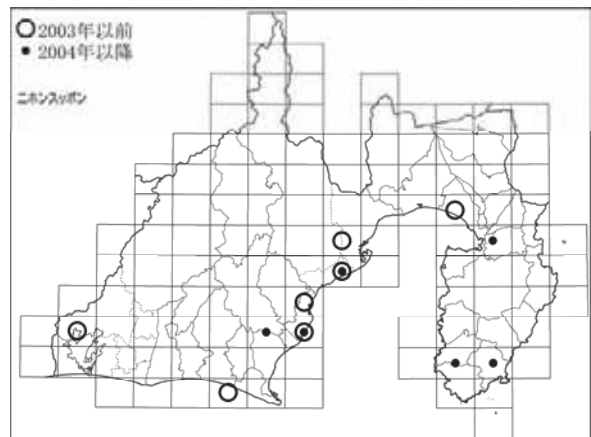
安川雄一郎 (2016) スッポン科の分類と自然史 6. クリーパー Creeper, (76): 1-20

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



浜松市南区 2016年7月12日 加藤健一



(疋田 努)

# シロマダラ *Dinodon orientale* (Hilgendorf, 1880)

ナミヘビ科 Colubridae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長 30~70 cm。頭部の背面は黒く、背面の地色は桃色がかった淡褐色や褐色、灰褐色で、黒褐色の横帯がある。似た模様のアオダイショウの幼蛇が本種と誤認されることがある。主に小型の爬虫類を捕食する。静岡県に分布する種では、ヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビ、ヒバカリ、タカチホヘビなどが記録されている。ヒガシニホントカゲの卵を食べた例があり、爬虫類の卵も食べるのであろう。記録はないがニホンヤモリも捕食される可能性がある。6~8月に1~9個の卵を産む。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州と周辺の島嶼に分布する。県内では伊東市、熱海市、駿東郡愛鷹山、富士宮市朝霧高原、静岡市、焼津市、牧之原市、袋井市から記録されている。

## 3. 生息環境

山地から平地にまで生息している。主な餌であるヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビが生息する場所が生息環境であろう。昼間は石や倒木の下などに隠れる。また、最近の観察で、本種が壁を登ることができることが明らかになったため、樹洞などに潜んでいる可能性もある。

## 4. 生息状況

夜行性で目撃の難しい種であるために、生息状況についての情報が得られていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な餌であるヒガシニホントカゲ、オカダトカゲ、ニホンカナヘビの生息地が減少すると、シロマダラの生息地も減少することになる(71)。本調査では、2004年より前の古い記録の場所で生息が確認できていないので、これらの場所で生息数が減少している可能性がある。

## 6. 保護対策

生活史、生息状況などの情報を収集することが必要である。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

浜中京介・森 哲・森口 一 (2014) 日本産ヘビ類の食性に関する文献調査. 爬虫両棲類学会報, 2014(2): 167-181

前澤勝典 (2016) シロマダラの棲む小屋. 爬虫両棲類学会報, 2016(2): 111-114

大野正男 (1989) シロマダラに関する知見総説. 日本の生物, 3(8): 52-60

関慎太郎 (2016) 野外観察のための日本産爬虫類図鑑. 緑書房, 東京, 207 pp.

照井滋晴 (2014) 福島県南相馬市で確認されたシロマダラ (*Dinodon orientale*) の隠れ家. 爬虫両棲類学会報, 2014(2): 89-92

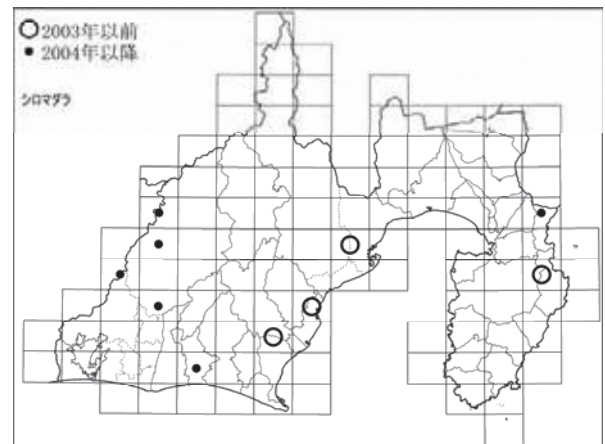
徳田龍弘 (2015) 改訂版北海道爬虫類・両生類ハンディ図鑑. 北海道新聞社, 札幌, 95 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



周智郡森町小国神社 2006年11月3日 國領康弘



(疋田 努)



# ヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* Okamoto & Hikida, 2012

(=2004年版のニホントカゲ)

トカゲ科 Scincidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

頭胴長 5.5~7.0 cm。胴中央部の体鱗数は普通 26 列(24~28 列)である。小さな後鼻板が上唇板に接する。後鼻板がない個体も少数いる。幼体と若いメスは尾が青く、黒い背面に 5 本の明るい縦条が走り、正中の縦条は頭頂部で二叉する。成体オスや老熟メスでは体側の黒褐色の縦筋を残して褐色となる。繁殖期は 4~5 月で、繁殖期のオスは頭部とのがオレンジ色になる。巣穴で産卵したメスは孵化まで卵の世話をする。

## 2. 分布

国外ではロシア沿海州、国内では伊豆半島を除く近畿地方以東の本州、北海道に分布する。県内ではオカダトカゲと分布を接しており、富士川河口右岸以西、富士宮市の北西部、駿東郡小山町と御殿場市北縁に分布する。

## 3. 生息環境

海岸付近の低地から高山にまで分布しており、人家周辺にも生息している。春先には日光浴によって体温を上げるので、日光浴に適した開けた場所があり、さらに採餌のための草むらがある場所で、よく見られる。石垣や積まれたがれきなどを隠れ場所としている。

## 4. 生息状況

伊豆半島地域に分布するオカダトカゲと比べると密度は低い。人家周辺にも生息するが、石垣などがコンクリート化されると、隠れ場所が失われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

特定外来生物などの侵入により捕食圧が高まることは脅威である(52-3)。近年、駿府城公園、藤枝市蓮華寺池公園、大井川野鳥公園などに大量の捨てネコが生息しているが、トカゲ、ヘビなどの姿を見ることがなくなった。捕食されていると考えられる。

## 6. 保護対策

開発行為が行われた際、法的に必要な緑地帯や調整池に生息環境を作ることなどが考えられる。

## 7. 特記事項

日本列島にはニホントカゲ 1 種だけが、広く分布すると考えられてきたが、遺伝的な地理的変異を調べた結果、2012 年に新種記載された。遺伝的解析により本種とオカダトカゲとの交雑個体が静岡市清水区、富士市富士川町、富士宮市、裾野市、御殿場市、駿東郡小山町で確認された。

## 8. 主な文献

Motokawa, J. & T. Hikida (2003) Genetic variation and differentiation in the Japanese five-lined skink, *Eumeces latiscutatus* (Reptilia: Squamata). *Zoological Science*, 20(1): 97-106

Okamoto, T. & T. Hikida (2009) Three genetic lineages of the Japanese skink *Plestiodon japonicus* (Scincidae, Squamata) and the genetic composition of their contact zones. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research*, 47(2): 181-188

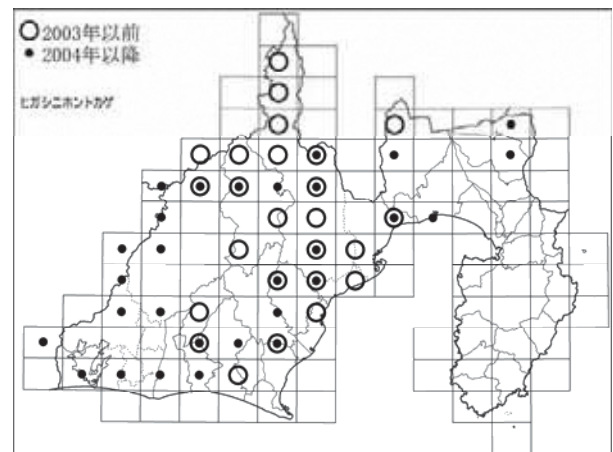
Okamoto, T. & T. Hikida (2012) A new cryptic species allied to *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. *Zootaxa*, 3436: 1-23

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学総合博物館



静岡市清水区 2016年9月15日 加藤健一



(疋田 努)



# オカダトカゲ *Plestiodon latiscutatus* Hallowell, 1861

トカゲ科 Scincidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等):環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
(静岡県該当なし)]

## 1. 種の解説

頭胴長は6~9 cm。胴中央部の体鱗列数は24~26列である。後鼻板はないか、前頬板により上唇板から隔てられる。小さな後鼻板が上唇板に接するものは少数である。体色は幼体と若いメスは尾が青く、背面は黒褐色で5本の明るい縦条が走り、正中の縦条は頭頂部で二叉する。成体オスと老熟メスは黒い体側の縦筋を残して褐色になる。繁殖期は4~5月で、繁殖期のオスは頭部とのどから腹面全体がオレンジ色になる。巣穴で産卵したメスは孵化まで卵の世話をする。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆半島周辺と初島、伊豆諸島に分布する。静岡県では富士山の東部の御殿場市まで、富士山の西側は富士宮市の中中部までである。ヒガシニホントカゲとの境界は、東は酒匂川、西は富士川の河口部、北は富士山の南麓である。

## 3. 生息環境

海岸から標高約2,000 mの高地まで生息する。畑や人家周辺にも多く生息している。

## 4. 生息状況

ヒガシニホントカゲよりも生息密度は高い。

## 5. 減少の主要因と脅威

伊豆半島とその周辺は本州における唯一の分布地域なので、チョウセンイタチやアライグマなど外来捕食者が定着すれば(52-3)、生息状況の監視が必要である。

## 6. 保護対策

今のところ特に保護対策は必要ない。

## 7. 特記事項

遺伝的解析により本種とヒガシニホントカゲとの交雑個体が静岡市清水区、富士市富士川町、富士宮市、裾野市、御殿場市、駿東郡小山町で確認された。

## 8. 主な文献

Brandley, M. C., T. Kuriyama & M. Hasegawa (2014) Snake and bird predation drive the repeated convergent evolution of correlated life history traits and phenotype in the Izu Island skink lizard (*Plestiodon latiscutatus*). *PLoS One*, 9(3): e92233

Motokawa, J. & T. Hikida (2003) Genetic variation and differentiation in the Japanese five-lined skink, *Eumeces latiscutatus* (Reptilia: Squamata). *Zoological Science*, 20(1): 97-106

Okamoto, T. & T. Hikida (2009) Three genetic lineages of the Japanese skink *Plestiodon japonicus* (Scincidae, Squamata) and the genetic composition of their contact zones. *Journal of Zoological Systematics and Evolutionary Research*, 47(2): 181-188

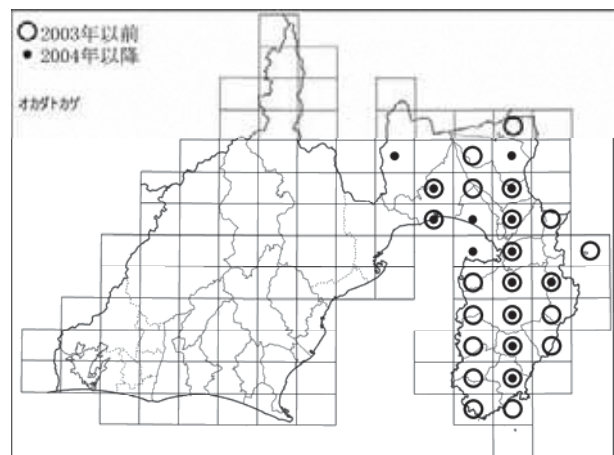
Okamoto, T. & T. Hikida (2012) A new cryptic species allied to *Plestiodon japonicus* (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. *Zootaxa*, 3436: 1-23

## 9. 標本

京都大学総合博物館



沼津市下香貫 2016年5月31日 國領康弘



(疋田 努)

# クサガメ *Mauremys reevesii* (Gray, 1831)

イシガメ科 Geoemydidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

甲長 20~24 cm。オスは小さく、メスの甲長の 2/3 くらいである。甲羅は俵型で、椎甲板と肋甲板に隆起があり、甲羅後縁は滑らかである。背甲は黒色または褐色で、腹甲は黒色で甲板の継ぎ目は黄白色である。頭部は大きく、黒色や暗褐色で、側頭部には黄白色の縦条や不規則な斑紋がある。成体のオスは、虹彩を含めた体全体が黒化する。危険を感じると、体側の臭腺から臭いのある液を分泌する。

## 2. 分布

国外では韓国、中国、台湾、国内では北海道南西部から本州、四国、九州、佐渡島、淡路島、壱岐、隠岐、対馬、五島列島、奄美大島、沖縄島、久米島などに分布する。県内では西部から東部まで広く分布し、伊豆半島の南伊豆町でも確認されている。

## 3. 生息環境

低地の河川や池沼などに生息し、流れが緩やかで濁りのある底質が泥の環境を好む。水田と周辺の水路にも生息し、特に公園の池や住宅地周辺の水辺では数多く確認されている。

## 4. 生息状況

池沼における個体数は増加している一方、河川では垂直コンクリート護岸が繁殖の妨げとなっている。本種は水質が悪化した環境に耐えるため、住宅地を流れる河川や排水溝でも生息が確認されており、個体数は市街地周辺の水辺で多い傾向がある。愛玩用に数多く流通しており、それらが野外に侵入することで、人為的に拡散して分布域を広げている。

## 5. 減少の主要因と脅威

国外では、乱獲による個体数の減少により絶滅が危惧されている。国内のものは過去に人為的に持ち込まれた移入個体と考えられ、県内各地で日本固有種であるニホンイシガメや、国内外から持ち込まれたミナミイシガメとの交雑個体が野外で確認されており、遺伝子汚染による種の消失が危惧される(57-1、57-2)。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

遺伝子汚染の程度を調査するとともに、交雑個体を野外から取り除く必要がある。

## 8. 主な文献

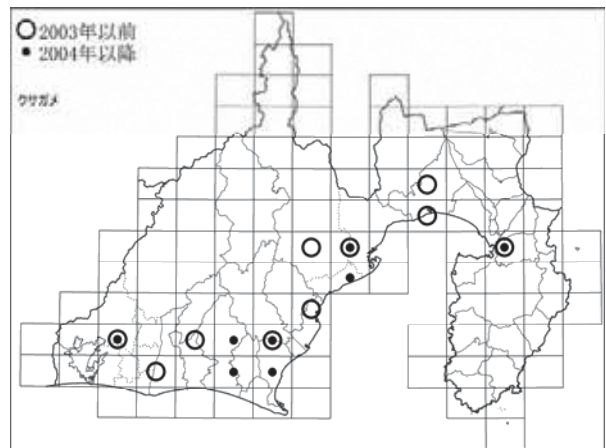
Suzuki D., H. Ota, H. -S. Oh & T. Hikida (2011) Origin of Japanese Populations of Reeves' Pond Turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as Inferred by a Molecular Approach. *Chelonian Conservation and Biology*, 10(2): 237-249

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市 2017年 加藤英明



(加藤英明)

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長 10～14 cm。体は扁平で、細かい粒状鱗に覆われ大型の粒状鱗が散在する。前後肢とも第1指の爪を欠く。指下板は2つに分かれず下面全域を覆い、その先端の細かな鉤状の突起を引っ掛けることで垂直なガラスを登ることができる。尾の基部には2～4対の大型鱗があり、オスは前肛孔を6～9個もつ。

### 2. 分布

国外では韓国、中国、国内では秋田県以南の本州、四国、九州、対馬などに分布する。県内では西部から東部までの低地と丘陵地に広く分布するが、内陸部の高地では見られない。伊豆半島の西部では記録がない。

### 3. 生息環境

主に民家の周辺に生息し、壁や木材の隙間に住む。夜行性で明かりに集まる虫を捕食するため、電灯や民家の窓に度々出現する。越冬や産卵に適した隙間を必要とし、木造の住宅や薪などの木材が置かれた環境を好む。

### 4. 生息状況

県内では森林周辺の住宅地で個体数が増加傾向にあり、新しい住宅地でも確認されている。廃屋では数多くの個体が確認されており、沿岸部から山間部までの家屋周辺に生息している。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の定着には、越冬や産卵に適した隙間が必要であり、木造の住宅や薪などの木材が置かれた環境が消える(18)ことで、個体数が減少すると考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

人間の生活が大きく影響し、建築資材などに紛れて人為的に拡散する。県外では日本固有のタワヤモリとの交雑が確認されており、非意図的な移動を防ぐ必要がある。ニホンヤモリは国外由来の外来生物として扱われることがある。

### 8. 主な文献

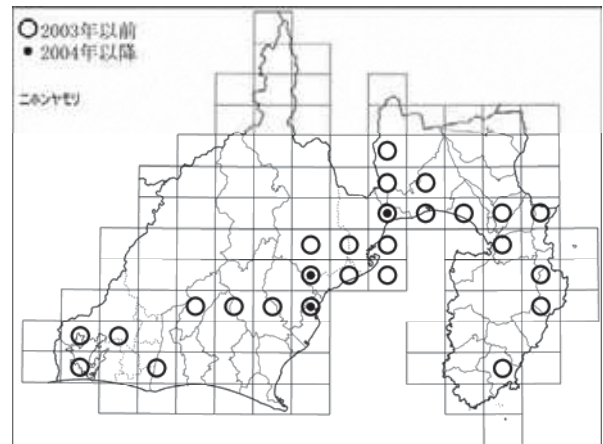
Toda, M., S. Okada, T. Hikida & H. Ota (2006) Extensive natural hybridization between two geckos, *Gekko tawaensis* and *Gekko japonicus* (Reptilia: Squamata), throughout their broad sympatric area. *Biochem Genet*, 44: 1-17

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市 2017年 加藤英明



(加藤英明)



## 4. 両生類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

日本で知られている両生類は、有尾目 32 種、無尾目 47 種（日本爬虫両棲類学会ホームページ、2017 年 10 月 1 日現在）である。この中には国外外来種も含まれている。近年、日本各地でアフリカツメガエルの生息確認の報告があるが、静岡県でも県西部を中心に生息と繁殖の確認の報告があるため、生息種に加えた。その結果、静岡県に生息する両生類は、有尾目 4 種、無尾目 20 種となり、日本全体と比べるとその比率は有尾目 12.5%、無尾目 41.7% である。

静岡県は、西部、中部、東部、伊豆の 4 つに地域分けされることが多いが、両生類の分布には地史的な要因や標高差など地形的な要因による地域ごとの特色がある。たとえばニホンアカガエル、ネバタゴガエルのように、4 地域のうち伊豆地域にのみ分布しない種もある。また、静岡県の県境近くに分布の境界線があるものとして、トノサマガエルを挙げることができる。本県と隣接する神奈川県には、本県と異なりトノサマガエル、ナゴヤダルマガエルは分布しておらず、その代替種として、これらに近縁なトウキョウダルマガエルが生息している。このように静岡県は生物地理学的にも非常に重要な地域であるといえる。

### (2) 調査の概要

RDB 作成のための基礎データは野外調査と室内調査によって集積した。野外調査では県内のできるだけ多くの地域を踏査し、新産地の発見と既知の産地での現況確認に努めた。また、ネバタゴガエルとタゴガエルの分布状況確認のための鳴き声録音も行うとともに、いくつかの種については DNA 解析のための組織サンプルをできるだけ多くの地点で収集するよう努力した。室内調査では、DNA 塩基配列の解析、録音された鳴き声の声紋分析、またネバタゴガエル、タゴガエルの判別のための染色体検査を行った。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

前回（2004 年）の県内両生類目録掲載種に加え、今回新たに生息確認された 2 種を含め、県内確認目録の両生類 20 種の中から、外来種 2 種を除外して、調査結果や生息状況を加味し、18 種を RDB の対象として検討した。前回（2004 年）のレッドリスト種については、その後の状況を検討し、一部ランクを修正した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は、前回（2004 年）の 10 種に対し、今回は 14 種で、4 種の増加があった。また、絶滅のおそれのある種の総数は、前回（2004 年）同様 5 種（絶滅危惧 IA 類 (CR) 2 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 3 種）であったが、CR の 1 種は今回ランクアップしたものである。また、将来絶滅のおそれのある種となる可能性の高い準絶滅危惧も前回（2004 年）より 3 種増加し 5 種となっている。

### (5) 減少の主要因と脅威

かつて田んぼに行けばいつでも見られたトノサマガエルやツチガエルは、前回（2004 年）には、少なくなっただけでなくなったものの生息を確認できた。ところが、比較的良好な環境がある富士市と沼津市にまたがる浮島湿地では、今回、何回も調査をしたにもかかわらずニホンアマガエル、ヌマガエル、ウシガエルしか確認できなかった。静岡市の麻機湿地、磐田市の桶ヶ谷沼でも同じ状況であった。確かに水田は継続して耕作されてはいる。しかし、構造改善、機械化のための圃場整備、それに伴う乾田化、効率を上げるための水路と畔のコンクリート化、中干を必要とするコシヒカリなどの特定米選択、除草剤などの農薬の使用などにより、両生類は急激に減少した。さらに深刻で対策の難しい問題が生じつつある。それは地方の人口の減少、米離れ、小麦・トウモロコシ・レタスなどへの転作による水田の減少、田園地域での大型ソーラー発電



施設の進出である。中山間地ではこのような問題は少ないと考えられていた。しかし、イノシシ、シカ、サルなどの有害鳥獣被害による谷津田の放棄、高齢化による耕作放棄地域の増加が全県に広がってきた。新東名高速道路の工事をはじめ、津波からの危険回避や、過疎地の有効利用としての大型事業の誘致は全県に及び、多くの両生類は生息地を失っている。新東名高速道路の開通に伴い、インターチェンジ周辺に大規模開発が計画され、残されていた地域にも風力発電施設、焼却場、廃棄物処理場及び二輪車のテストコースが浜松市の北部に隣接して計画されているなど、工事が集中する地域があり、それは国立公園内にまで及んでいる。これらの地域の周辺にはニホンアカガエル、アカハライモリ、モリアオガエル、トノサマガエルが生息している。山岳地帯では、開発による心配は少ないと思われたが、ユネスコエコパークに登録された南アルプスに、リニア中央新幹線の建設計画が決定し、トンネル残土の処理場がヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ナガレタゴガエルの生息を脅かすことは明らかであり、アカイシサンショウウオについては影響予測の調査さえされていない。南アルプス地域では、前回（2004年）の調査時には湿潤で苔が石の上を厚く覆っていた場所が、今回苔の量が極端に少なくなっていた。湿潤な環境を好む両生類にとっての影響が少ないことを祈るばかりである。

#### **(6) 注目される種のカテゴリーと変更理由**

アカイシサンショウウオ（CR）の生息地は標高 500～1,000 m の森林地帯であるが、生息地の上方には林道が通っていることが多い。この林道が崩落して生息地を埋めている箇所が確認されていることから、生息地は確実に減少していると思われる。

アカハライモリの南伊豆集団（LP）は東日本系統から分化した集団であると考えられるが、その生息地は3次メッシュの2区画で確認されているにすぎない。これら以外の県下のアカハライモリは中部日本系統であり、南伊豆集団は遺伝的にも、生物地理学的にも貴重な存在と考える。しかし、耕作者の高齢化、過疎化に伴う耕作放棄が多く、前年生息を確認した場所でも、水が引かれないうえに確認されなかった例があり、存続が懸念される。

#### **(7) 考えられる保全対策、今後の留意点**

里山に生息地を持つ両生類は人間の活動と結びついて存続してきたため、それが放棄され、人の手が入らず、水の供給がなくなるとたちまち姿を見せなくなる。多くの谷津田、棚田は効率の悪さから放棄された。最近、これを復活させようとする地域が出てきてはいるが、そこにいた生き物、特に両生類は、自然発生的には戻ってこない。開発行為を完全に止めることは難しいが、そこに生息する動植物が未来にも残るような仕組みを確立しなければならない。県有地に保護地域を設け、保全するなど具体的な保護対策を早急に考えていく必要がある。

#### **(8) 文献（多くの種で参考とした文献）**

関慎太郎（2016）野外観察のための日本産両生類図鑑。緑書房，東京，197 pp.

松井正文（2016）日本のカエル。誠文堂新光社，東京，255 pp.

（國領康弘）

### 1. 種の解説

全長約 10 cm の小形種。背面は紫褐色で、部分的に小さな銀白色斑点をもつ。腹面は淡褐色。後肢の第 5 趾は短く、完全がないこともある。卵や幼生は野外ではまだ確認されたことがないが、メスの 1 腹卵数は 10 個前後と少なく、個々の卵はクリーム色で大きいことから、地下の伏流水中で繁殖することが推定されている。

### 2. 分布

日本固有種で、静岡県西部、長野県東南部の赤石山脈南端に沿った山地から記載されたが、近年、愛知県三河東部及び山梨県南部でも確認されている。県内の分布域は中・西部の山地に限られ、静岡市葵区及び清水区、浜松市天竜区、藤枝市、榛原郡川根本町から記録がある。

### 3. 生息環境

標高 500~1,200 m の小さな溪流源流域を含む針広混交林に生息する。溪流付近の崩れやすい礫の多い斜面で、礫の間や落ち葉の下から見ついている。産卵場所、幼生の生活場所は溪流の水源にある伏流水中と思われる。

### 4. 生息状況

分布域の一部はヒダサンショウウオの分布域と重なり、両者は混生していることもあるが、低標高の場所では本種のみが分布している。森林環境に変化のない場所では安定して生息しているようである。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息地は山地森林に限られるため比較的安定している。しかし、生息地にかかる道路建設工事等における森林伐採、河川改修の予定がある。これらの行為に伴う溪流の埋立、土砂の溪流への流入、水質汚濁、地下水脈の変化が存続を脅かす可能性がある (11, 13, 24, 31)。ペットマニアによる捕獲も懸念されている (41)。

### 6. 保護対策

長野県では指定希少野生動植物となっており、捕獲は禁止されているが、特別な保護対策がなされていないわけではない。繁殖生態さえ分かっていない現状では、個体の移殖などは保護策になるとは考えにくく、分布域にかかる環境改変が行われる場合には、生息環境の現状維持が最良の保護策である。

### 7. 特記事項

本州産流水産卵性の種としては分布域が極めて狭いこと、分子系統学的には四国産のイシヅチサンショウウオと近いことなど、日本産流水産卵性小型サンショウウオ類の進化を探るうえで貴重な存在である。

### 8. 主な文献

國領康弘 (2010) アカイシサンショウウオ. NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク 編, しずおか自然史, pp. 182-183. 静岡新聞社, 静岡.

松井正文 (2006) 小型サンショウウオ. 森林技術, (774): 38-39

Matsui, M., Y. Kokuryo, Y. Misawa & K. Nishikawa (2004) A new species of salamander of the genus *Hynobius* from central Honshu, Japan (Amphibia, Urodela). *Zool. Sci.*, 21(6): 661-669

佐々木彰央 (2015) 静岡市興津川流域から得られたアカイシサンショウウオ. 東海自然誌, (8): 23-25

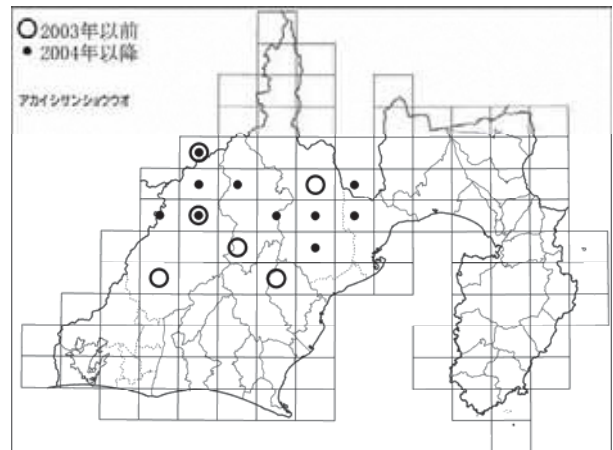
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科標本 (KUHE) 14664-14665, 16302, 16676, 17004, 17945-17953, 18349, 18351, 18352 他.

(松井正文)



浜松市天竜区 2016年6月23日 國領康弘



# ナゴヤダルマガエル *Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)

(=2004年版のダルマガエル)

アカガエル科 Ranidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②④)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

体長はオスが 3.5~5.5 cm。メスは 4~6 cm。背中の体色は緑色から褐色、ふつう暗褐~赤褐色をした左右の背側線の上に円みを帯びた黒斑が 10 から 25 個点在する。背中の中央を通る白または緑の縦条を持つものと持たないものは半々である。トノサマガエルに似るが斑紋は丸く後肢はより短い。繁殖期は 4 月下旬から 7 月中旬で、水田などで 1,300~2,200 個の卵を少数ずつ、何度にも分けて産み出す。

## 2. 分布

日本固有種で、長野県伊那谷、東海、近畿、瀬戸内地方に分布する。1975 年までは沼津市平沼を東限とし、水田地帯を中心として生息していたが、大井川以東ではここ 35 年記録がない。県内では湖西市、浜松市北区・浜北区、磐田市、周智郡森町で確認された。

## 3. 生息環境

産卵場所は低地の湿地や水田の浅い止水域である。クモや昆虫を食べ、冬眠は浅い土中で行う。生息が確認された場所は、湿潤な環境で、水田では稲刈り後も水が残っているところであった。

## 4. 生息状況

確実な生息記録のある磐田市の桶ヶ谷沼、静岡市麻機沼、富士・沼津市にまたがる浮島湿地のそれぞれの個体群は 1980 年代に絶滅したと考えられる。西部に残された生息地でも生息数はわずかで、数個体を確認するのも時間を要した。1970 年代以前の環境がなくなっていると感じる。

## 5. 減少の主要因と脅威

市街地に近い平野部の水田は、住宅地、工業団地、流通基地として埋め立てられ消失し (15-1、23)、圃場整備に伴う水路のコンクリート 3 面化、畔のコンクリート化などは、本種の生息環境を奪っていった (15-1、15-2)。また、除草剤、殺虫剤の散布によって餌となる昆虫が減少することも脅威である (32)。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。数少ない生息地を保全していくことが喫緊の課題である。

## 7. 特記事項

奈良県 特定希少野生動植物保護管理事業計画 2015 年 4 月

広島県 安田地域における絶滅危惧種 ダルマガエルの保護・保全活動

西日本では大規模な保護活動が行われている。

## 8. 主な文献

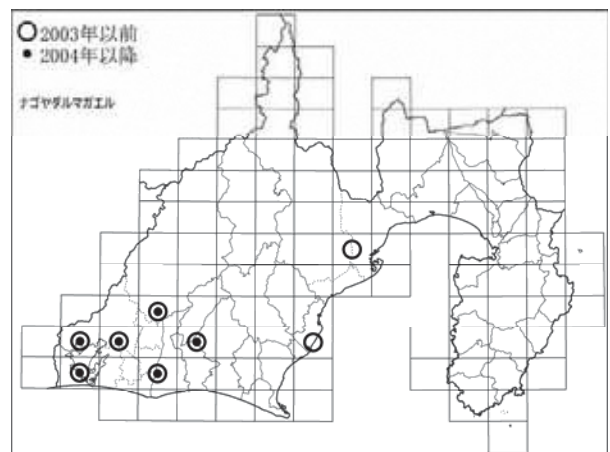
松井正文 (2016) ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ。誠文堂新光社、東京、255 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



浜松市北区都田町 2014 年 10 月 16 日 加藤健一



(國領康弘)



# ヒガシダサンショウウオ *Hynobius fossigenus* Okamiya, Sugawara, Nagano & Poyrkov, 2018

(=2004年版のヒダサンショウウオ)

ンショウウオ科 Hynobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

全長は 14.2~19.1 cm。体は太くて胴が長く、尾は末端ほど扁平となる。メスはオスよりも体が大きい。紫褐色の背面に黄色斑点や斑点が連続した黄色斑紋をもつ。腹面に斑紋をもつことはほとんどないが、稀に黄色や青白色の小点をもつ。溪流中の岩の下に一对の卵嚢を産み付ける。卵嚢の外皮は強靱で青みがかった虹色を呈し、内部に黄白色で直径約 5 mm の卵を含む。メスの 1 腹卵数は 23~72。孵化直後の幼生はバランスーを持たず、十分に成長した幼生の多くで指先に黒い爪が発達する。

## 2. 分布

日本固有種で、関東・中部地方の山地に分布する。県内では富士川、安倍川、大井川、天竜川水系の源流部付近に分布する。標高約 300~1,500 m で確認され、標高 1,000 m 前後で多くみられる。

## 3. 生息環境

落葉広葉樹林、混交林、針葉樹林の谷や斜面に生息し、川幅が狭く水量の少ない溪流の源流部で 2~3 月にかけて繁殖する。産卵場所は水中の大きな岩の下で、幼生は溪流の流れのゆるやかな淵で生活する。幼生の大半は越冬し、翌年に変態して陸上で生活する。変態後は山の斜面に分散し、適度な湿度が保たれている倒木や岩の下に隠れて、夜間や雨の日に活動する。

## 4. 生息状況

詳細な情報はほとんど知られていないが、生息環境の条件は明らかに悪化しつつあり、確認されている本種の個体数は比較的少ない。例えば、ハコネサンショウウオの幼生と同所的に生息している富士川水系では、本種の幼生は前者にくらべて個体数が少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大規模なダム建設による生息地の消失、林道や砂防ダム建設に伴う生息環境の改変や溪流への土砂流入、森林伐採による林床の乾燥化が挙げられる (11、13)。その他に、生息地を分断する道路に現れる個体が車に轢かれたり (26)、道路の側溝に落下して脱出できずに乾燥死する事が懸念される (24)。

## 6. 保護対策

奥大井県立自然公園特別地域内では指定動物として捕獲が規制されている。

## 7. 特記事項

愛知県付近を境にして東に本種が、西にヒダサンショウウオが分布している。体の大きさ、黄色斑点の大きさや数には地域個体群間で変異が見られ、静岡県産は他にくらべて大型で小さな黄色斑点が密集しているのがふつう。

## 8. 主な文献

Matsui, M., Y. Misawa, K. Nishikawa & S. Tanabe (2000) Allozymic variation of *Hynobius kimurae* Dunn (Amphibia, Caudata). *Comp. Bioch. Physiol. B*, 125(1): 115-125

Okamiya, H., H. Sugawara, M. Nagano & N. Poyarkov (2018) An integrative taxonomic analysis reveals a new species of lotic *Hynobius* salamander from Japan. *PeerJ*, 6(6), e5084-40.

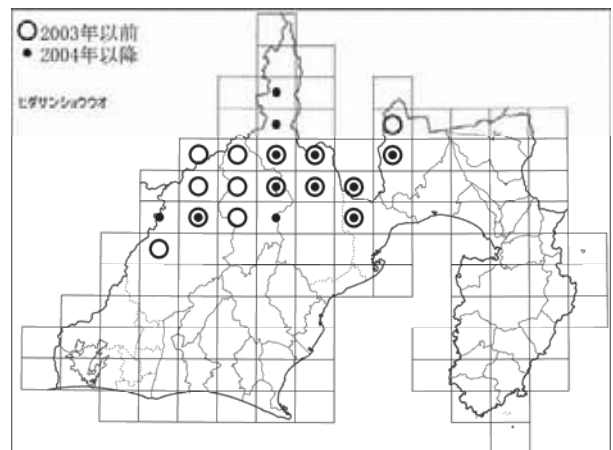
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科

(見澤康充)



©2019 Y. Kokuryo  
浜松市天竜区水窪町 2006年3月11日 國領康弘





# ハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Hottuyn, 1782)

サンショウウオ科 Hynobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長は13~19 cm。体は細長くて尾が長く、眼が突出する。体の地色は黒褐色や褐色。背面に褐色や黄褐色、橙色の帯状模様や斑点がある。腹面は色が淡くて血管や内臓が透ける。卵嚢は長卵形で2~18個のクリーム色の卵を包む。幼生は指先に黒い爪を有し変態までに2年以上の期間を要する。

## 2. 分布

日本固有種で、東は茨城県北西部、北は新潟県中北部、南は和歌山県、西は山口県に囲まれた本州に分布する。県内では狩野川、富士川、安倍川、大井川、天竜川水系の標高約300~3,000 mの源流部付近で確認されているが、伊豆半島及び県東部では標高600 m付近、それ以外の地域では標高1,000 m前後で多くみられる。

## 3. 生息環境

成体は皮膚呼吸に依存するため乾燥に弱く、冷涼な山地溪流や湿潤な森林内の倒木下、落葉下、苔下に潜む。主に地表徘徊性の小昆虫や土壤動物を捕食する。幼生は水中の岩下や落葉下に潜み、夜間水中を徘徊して水生昆虫などを捕食する。産卵場所は滝壺の奥や湧き水、伏流水の穴などで報告されているが、報告例が少ない。

## 4. 生息状況

本種は伊豆半島の狩野川水系、東部の富士川水系、中部の大井川水系にかけて多く、西部の天竜川水系での確認はわずかである。確認された個体の多くは幼生で、成体の確認例は稀である。大井川や天竜川水系では大規模な工事が行われており、生息環境は悪化している。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川や地下の大規模工事に伴う水量の減少(13)の他、森林伐採による林床の乾燥化(11)、林道、ダム建設による環境改変(24、25)、溪流への土砂や農薬などの流入による水質悪化(31、32)が挙げられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

本種が属するハコネサンショウウオ属は2012年以降5種が加えられ、さらに本種の中にも隠蔽種がいるとされている。本県では富士宮市と静岡市を境にして異なるグループの存在が報告されており、学術的にも重要な位置を占める。

## 8. 主な文献

Yoshikawa, N., M. Matsui, K. Nishikawa, J. Kim & A. Kryukov (2008) Phylogenetic relationships and biogeography of the Japanese clawed salamander, *Onychodactylus japonicus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its congener inferred from the mitochondrial cytochrome b gene. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 49: 249-259

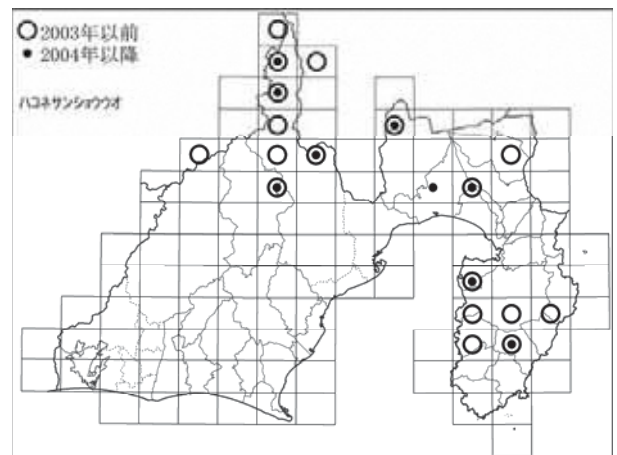
吉川夏彦(2015) 最近の日本産ハコネサンショウウオ属の分類に関する雑記. 両生類誌, (27): 1-8

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市葵区田代 2010年7月18日 佐々木彰央



(佐々木彰央)

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②③)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長はオスが4~5 cm、メスは5~7 cm。体色は黒褐~赤褐色。背面に黒い斑紋が出ることもあるが腹面には模様がない。目から体側に伸びる背側線はほぼ直線的でヤマアカガエルと区別ができる。繁殖期は12月から3月中旬の冬季から早春にかけて行われる。湿地や水田などの水の残った止水に500~3,000個の卵を塊として産む。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島などに分布する。八丈島などに移入されている。県内では静岡市葵区、島田市、磐田市、掛川市、菊川市、牧之原市、浜松市北区・天竜区で確認されている。伊豆半島の市町からは確認記録はない。

### 3. 生息環境

平地や丘陵地の水田や湿地、池などを繁殖場所に使っている。周辺の草地、森林地帯を生活場所として利用している。繁殖時期に水辺があることが生息条件として必要である。

### 4. 生息状況

大井川より東の生息地はすべて危機的な状況になっており、絶滅したと考えられる地域が増加している。

### 5. 減少の主要因と脅威

市街地に近い平野部の水田は住宅地、工業団地、流通基地として埋め立てられ消失し(15-1)、水路のコンクリート3面化、畔のコンクリート化、機械化に伴う圃場整備などは、本種の生息環境を奪っていった(15-2)。また、除草剤、殺虫剤の散布により餌となる昆虫が減少することも脅威である(32)。生息環境として山間部の谷津田が挙げられるが、耕作放棄による水環境の悪化が特に目立ってきた(53)。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。数少ない生息地を保全していくことが喫緊の課題である。

### 7. 特記事項

東北地方と本州西南部で遺伝的分化が進んでいる。

### 8. 主な文献

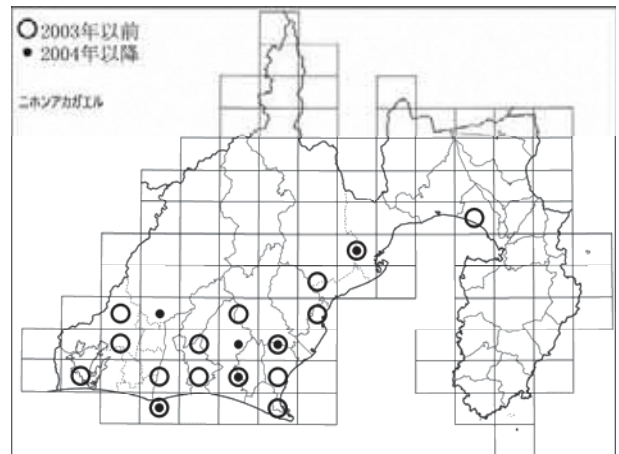
松井正文(2016)ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ。誠文堂新光社、東京、255 pp.

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



静岡市 2009年2月27日 石川 均



(國領康弘)

アカハライモリ中部日本系統 *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826), central clade

イモリ科 Salamandridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-①②)変更コード 6, 7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

オスの頭胴長 4~5 cm、全長 8.5~10.5 cm、メスの頭胴長 5.0~6.5 cm、全長 10~13 cm のアカハライモリの地域系統で、大きさは地域によってばらつく。背面は黒色、腹部は赤~赤橙色で不規則な黒色の模様が入ることが多い。産卵期は他の系統のアカハライモリと同じく春から初夏と考えられる。

### 2. 分布

日本固有種で、本系統は国内では岡山県、鳥取県以東から長野県、山梨県、静岡県以西までの広い範囲に分布する。県内では伊豆半島南部を除くすべての地域に分布する。南伊豆集団と本系統の分布域は重なっていない。

### 3. 生息環境

山際の水田やその周辺の水路やため池、山間部に見られる湿地、溪流脇の溜まりなどに多く生息する。

### 4. 生息状況

分布域は比較的広く、生息域では多産することが多いが、密度の低い地域も見られる。放棄水田では、過去に生息していた地域で確認できなくなった地域もある。

### 5. 減少の主要因と脅威

繁殖場所となっていた水田が耕作放棄に伴い乾燥化しつつあると考えられ、それに伴う個体群の縮小や消失が懸念される (53)。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

アカハライモリは遺伝的に 5 つの系統または集団に区分されており、本種の中部日本系統とは先行研究により中部地方から中国地方までの広域に分布するとされる central clade を指す。伊豆半島南部に分布する南伊豆集団とは、別種レベルの遺伝的分化が見られる。神奈川県、山梨県、長野県以東に分布する東日本系統とも別種レベルの遺伝的分化が見られ、それぞれ個別の保全単位として捉えていく必要がある。

### 8. 主な文献

Tominaga, A., M. Matsui, N. Yoshikawa, K. Nishikawa, T. Hayashi, Y. Misawa, S. Tanabe & H. Ota (2013) Phylogeny and historical demography of *Cynops pyrrhogaster* (Amphibia: Urodela): taxonomic relationships and distributional changes associated with climatic oscillations. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 66: 654-667

Tominaga, A., M. Matsui and Y. Kokuryo (2015) Occurrence and evolutionary history of two *Cynops pyrrhogaster* lineages on the Izu Peninsula. *Current Herpetology*, 34(2) : 19-27

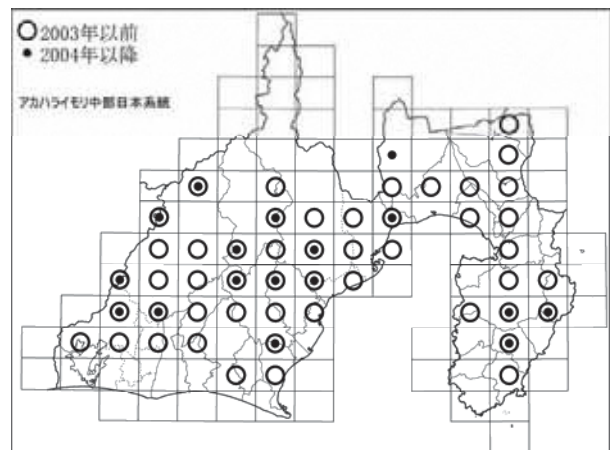
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、琉球大学教育学部両生類資料 URE1960-1968

(富永 篤)



賀茂郡河津町 2014年6月22日 富永 篤





# トノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)

アカガエル科 Ranidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-②) 変更コード 5, 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長はオスが 4.8~7.6 cm、メスは 6.4~9.3 cm (静岡市産)。本種は日本のカエルとしては例外的に性差がある。メスは基色が白色または灰色で、黒斑が多数くっつきあった模様がある。オスは基色が黄緑色で、斑紋は不明瞭。静岡県の繁殖期は4月下旬から5月中旬で田植えの時期によく見られる。2,000~4,000個の卵を扁平した球形の塊として産む。クモや昆虫を食べ、冬眠は水田の畔や近くの畑などで行う。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシアの一部、国内では本州 (関東平野から仙台平野を除く)、四国、九州に分布する。北海道や対馬の一部に移入。県内では湖西市、浜松市、磐田市、掛川市、菊川市、榛原郡川根本町、島田市、藤枝市、静岡市、沼津市、田方郡函南町、伊豆の国市、伊豆市、下田市、賀茂郡南伊豆町で確認された。

## 3. 生息環境

水田や湿地にある池などに産卵する。大きな河川では高水敷にある湿地や水たまりでも見られる。

## 4. 生息状況

市街地周辺の水田などの生息地では、今回の調査では確認できない場所があった。静岡市の麻機湿地や富士・沼津市にまたがる浮島湿地でも確認できなかった。一方、標高のやや高い低山地にある水田などでは確認することができた。

## 5. 減少の主要因と脅威

市街地に近い平野部の水田は住宅地、工業団地、流通基地として埋め立てられて消失し (15-1)、圃場整備に伴う水路のコンクリート3面化、畔のコンクリート化などが、本種の生息環境を奪っていった (15-2)。また、除草剤、殺虫剤の散布によって餌となる昆虫が減少していることも脅威である (32)。中山間部にある谷津田などでは耕作放棄などが顕著で、これにより水環境が消失し生息地として不適になっている。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。数少ない生息地を保全していくことがこれからの課題である。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

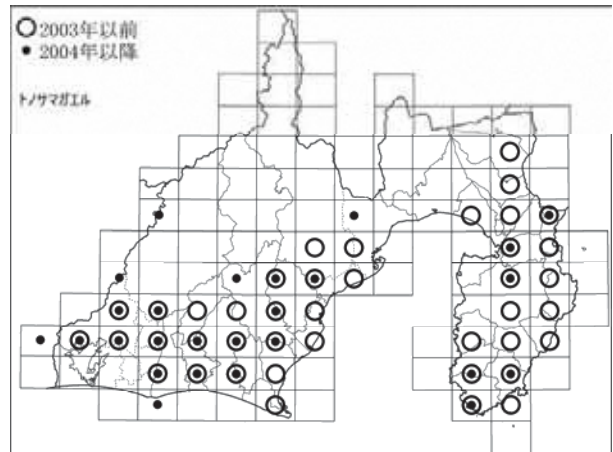
松井正文 (2016) ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ. 誠文堂新光社, 東京, 255 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



島田市湯日 2010年5月9日 國領康弘



(國領康弘)



# ツチガエル *Glandirana rugosa* (Temminck & Schlegel, 1838)

アカガエル科 Ranidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長は 4~5 cm。背中/bodyの体色は暗灰~灰褐色であり、背中線を持つ個体もいる。背面は多数のイボに覆われており、腹面も顆粒に覆われる。繁殖期は5~9月で、水田、池、沼、溝、用水路、湿原、湿地の水たまり、広い河川の河原にある水溜まりなどの浅い止水や緩い流れに、小さな卵塊を数回に分けて産む。オスはのど元の鳴のうを膨らませて、「ギュウ、ギュウ、……」と鳴く。幼生で越冬し、翌年の5~8月に変態する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐、五島列島などに分布し、北海道や伊豆大島には移入している。県内では浜松市北区・浜北区・天竜区、湖西市、磐田市、袋井市、掛川市、菊川市、御前崎市、周智郡森町、牧之原市、榛原郡川根本町・吉田町、島田市、藤枝市、焼津市、静岡市葵区・駿河区・清水区、沼津市、三島市、裾野市、御殿場市、駿東郡清水町・長泉町・小山町、田方郡函南町、伊豆の国市、伊豆市、伊東市、下田市、賀茂郡松崎町・南伊豆町で確認されている。

## 3. 生息環境

平地から山地に分布し、水田や湿地、河川、山間部の水辺でみられる。幼生で越冬するため、周年を通して水環境が必要となる。

## 4. 生息状況

県内に広く分布しているが、富士山周辺では確認されていない。低地や丘陵地にある水田周辺での確認が多いが、天竜川、大井川などの河川でも確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

水田の圃場整備や乾田化 (15-2)、用水路や河川の護岸のコンクリート化 (13) などにより生息環境が悪化している。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

本種は遺伝的に5つの地域グループに大別され、本県を含む東海地方にはXY集団が分布している。

## 8. 主な文献

前田憲男・松井正文 (1999) 改訂版日本カエル図鑑。文一総合出版、東京、223 pp.

松井正文 (2016) ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ。誠文堂新光社、東京、255 pp.

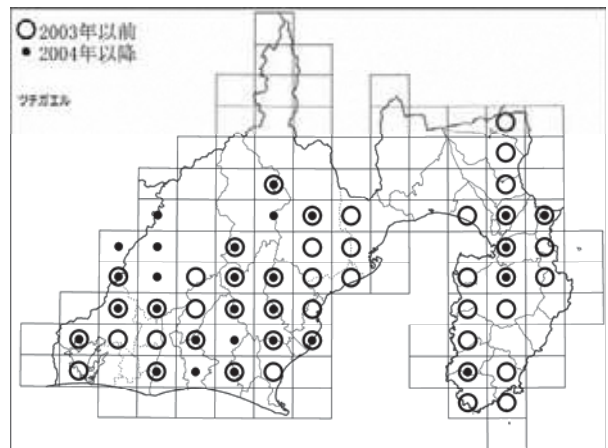
Ogata, M., Y. Hasegawa, H. Ohtani, M. Mineyama & I. Miura (2008) The ZZ/ZW sex-etermining mechanism originated twice and independently during evolution of the frog, *Rana rugosa*. *Heredity*, 100 : 92-99

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



浜松市北区三ヶ日町 2016年5月26日 加藤健一



(加藤健一)

# カジカガエル *Buergeria buergeri* (Temminck & Schlegel, 1838)

アオガエル科 Rhacophoridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長はオスが 3.3~4.5 cm、メスは 4~8 cm でオスよりもメスの方が大きい。背面の体色は灰褐色や茶褐色でまだら模様で覆われ、腹面は白い。体は扁平で、すべての指先に吸盤があり、後肢のみに発達したみずかきをもつ。オスは 4~7 月の繁殖期に美しい声で鳴く。総卵数は 200~600 個。産卵は浅瀬の水中で行い、転石下に小さな卵塊として産む。幼生は水中の石の表面の藻類を削りとりて食べる。幼生の頭胴部は長卵形で尾は細長く、筋肉が発達する。口器は大きい。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では富士山周辺と天竜川以西を除き広く分布する。

## 3. 生息環境

山地の川幅が広い河川や溪流に生息する。川底や川岸に石が多く、水面から石や岩が多く露出する清流を好む。日中は森林内の樹洞や岩の隙間などに潜み、日没後、河川周辺で活動し小昆虫類を捕食する。そのため河川と森林との連続性を必要とする。

## 4. 生息状況

狩野川、富士川、安倍川、大井川、天竜川水系などの大規模河川や小規模河川の中・上流域に生息する。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修、ダム建設による繁殖環境の消失 (13)、生活排水など水質汚染による生息環境の悪化 (31)、近年分布域を拡大している特定外来生物のアライグマによる捕食 (52-3) が懸念される。また、静岡県特有の問題として、茶、みかんの栽培が平地から山地まで広い範囲で行われているため、農薬や過剰施肥に伴う水質悪化が危惧される (32)。そのほか現在、大井川上流ではリニア中央新幹線建設による大規模工事が行われており、水量減少による生息環境の悪化が危惧される (71)。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

松井正文 (2016) ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ。誠文堂新光社、東京、255 pp.

高田榮一・大谷勉 (2011) 原色爬虫類・両生類検索図鑑。北隆館、東京、292 pp.

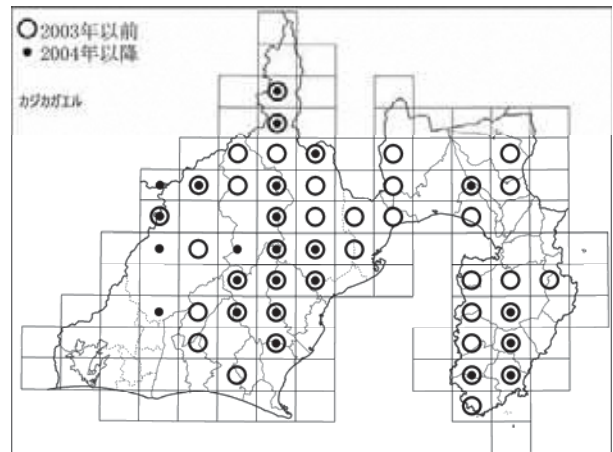
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、神奈川県立生命の星・地球博物館

(佐々木彰央)



静岡市葵区田代 2016年6月1日 佐々木彰央



# モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* (Okada & Kawano, 1924)

アオガエル科 Rhacophoridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長はオスが 5~7 cm、メスは 6~9 cm。背面の体色は緑色で、伊豆半島などでは顕著な赤褐色斑紋が出る。眼の虹彩は赤色で、黄色のシュレーゲルアオガエルと区別できる。発達した吸盤をもち、上手に木に登る。繁殖期は 4~7 月で、池や水田近くの木の枝や地上に産卵する。水辺に張り出た木に白く鈴なりに下がる卵塊は初夏の風物詩である。卵塊の中にはクリーム色の卵が 300~800 個入っている。

## 2. 分布

日本固有種で、茨城県を除く本州の山地に広く分布する。県内の分布は浜松市北区・浜北区・天竜区、掛川市、榛原郡川根本町、藤枝市、静岡市葵区・駿河区・清水区、富士宮市、富士市、駿東郡清水町、田方郡函南町、賀茂郡河津町、下田市で確認されている。

## 3. 生息環境

低地から高地まで生息し、主に山地にみられる。繁殖場所は池、沼、水田などの止水で、周囲には産卵のなされる樹木、草木などがあるが、これらが無い場合は石垣などが利用される。繁殖場所周辺には森林が続いているのが普通で、繁殖期以外は森林内で樹上生活をする。

## 4. 生息状況

低地に点在するため池などでは、外来生物のブラックバスやブルーギルによって捕食され生息が確認できなくなっている。一方、山間地にある防火用水の貯水池などが産卵池として利用されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

山地でも地域によっては森林伐採 (11)、道路の建設 (24) やそれに伴う産卵場所の水質汚濁 (31) によって生息状況は悪化している。また、産卵場所付近では、繁殖期に移動する個体が轢死する事例も多い (26)。加えて、捕食性外来生物の放流や (52-3)、池の埋め立て (12) など繁殖環境の消失により、生息環境は急速に悪化している。

## 6. 保護対策

いくつかの公共事業の保護対策として人工的なビオトープの創出や建設計画のルート変更など、少しずつでも行われるようになってきたが十分とは言えない。数少ない生息地を保全していくことがこれからの課題である。

## 7. 特記事項

岩手県大揚沼、福島県平伏沼の繁殖地は国の天然記念物に指定されている。南伊豆町シラヌタの池の繁殖地は県の天然記念物に指定されている。

## 8. 主な文献

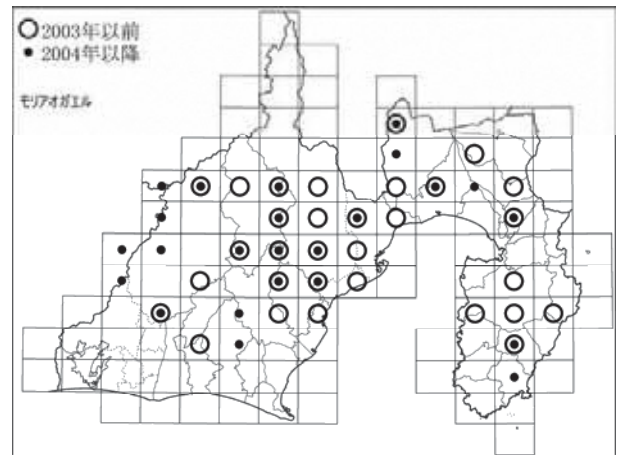
松井正文 (2016) ネイチャーウォッチングガイドブック日本のカエル 分類と生活史~全種の生態、卵、オタマジャクシ。誠文堂新光社、東京、255 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム



藤枝市瀬戸ノ谷 2010年5月10日 國領康弘



(國領康弘)



### 1. 種の解説

体長はオスが4~5 cm、メスが5~6 cm前後。背面は褐色で、鼓膜後方で折れ曲がる背側線隆条をもち、下あごに黒色の細点をもつなどの点はタゴガエルと共通であるが、本種のほうが後肢の水かきがよく発達する点で区別できる。山地性のアカガエルで、この属としては珍しく溪流中で繁殖する。

### 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州の山地に分断分布する。静岡県では静岡市葵区、川根本町、浜松市天竜区水窪町、富士宮市に分布記録がある。

### 3. 生息環境

主に山地の溪流に沿って生息する。繁殖場所は溪流の滝下や淵などで、水中の岩の下に産卵し、孵化後の幼生はこうした岩の下や河川中の落ち葉溜まりなどに留まる。変態して上陸した後は、溪流付近の林床で生活する。

### 4. 生息状況

静岡市や川根本町では比較的個体数が安定していると思われるが、県の西部では個体群密度が低い。また、本種の生息には道路や砂防ダム建設などに伴う生息地破壊が脅威となるため、開発の進んだ地域では個体数が減少していると思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

道路や砂防ダム、リゾート施設建設に伴う森林・河川環境の破壊が本種の生息を脅かす主要因である(11、13、21、22、24、25)。

### 6. 保護対策

本種の生息地で開発を行う際には、溪流環境とその周囲の森林環境に配慮することが望ましい。

### 7. 特記事項

本種は東西で遺伝系統的に分化しており、その太平洋側の境界が静岡市-川根本町付近に位置している。したがって、この地域の集団は本種の史的生物地理を考察する上で学術的価値の高い個体群である。

### 8. 主な文献

Eto, K., M. Matsui, T. Sugahara & T. Tanaka-Ueno (2012) Highly complex mitochondrial DNA genealogy in an endemic Japanese subterranean breeding Brown frog *Rana tagoi* (Amphibia, Anura, Ranidae). *Zoological Science*, 29(10): 662-671

Eto, K. & M. Matsui (2014) Cytonuclear discordance and historical demography of two brown frogs, *Rana tagoi* and *R. sakuraii* (Amphibia: Ranidae). *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 79: 231-239

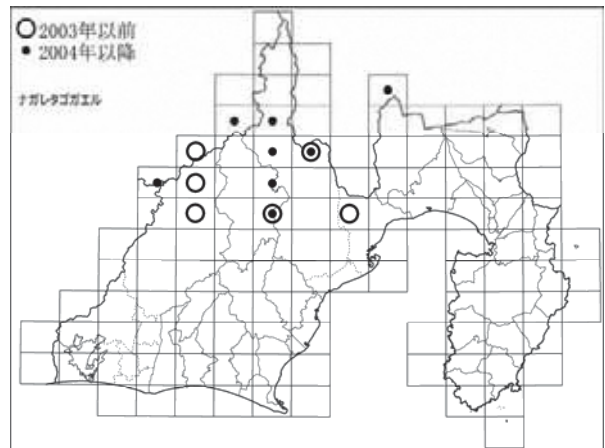
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科 (KUHE 44254、44256、44257、44260、44282、44283、44286 など)

(江頭幸士郎)



©2019 Y.Kokuryo  
浜松市天竜区水窪町 2006年3月11日 國領康弘





## アカハライモリ南伊豆集団 *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826), southern Izu lineage

イモリ科 Salamandridae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)変更コード6,7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

オスの頭胴長 4.2 cm、全長 8.8 cm、メスの頭胴長 5.0 cm、全長 10.3 cm 程度の小型なアカハライモリの地域集団で、背面は黒色、腹部は赤～赤橙色で不規則な黒色の模様が入るが模様のない個体も多い。本地域集団は他の地域集団よりも、皮膚表面がなめらかで顆粒が目立たないという特徴が見られる。産卵期は他のアカハライモリ集団と同じく春から初夏と考えられる。

### 2. 分布

日本固有種で、本地域集団は南伊豆町の一部地域にのみ分布する。本地域集団に最も近縁な東日本系統は、神奈川県、山梨県、長野県以東の東日本に広く分布するが、本種の中日本系統が、東日本系統と南伊豆集団の間の地域（伊豆半島北部）に分布しており、南伊豆集団と東日本系統の分布域は接しない。今のところ、南伊豆集団と中日本系統の混在する地域も見つかっておらず、両者は側所的に分布しているようである。

### 3. 生息環境

谷間の集落沿いの水田やその周辺、山間部に見られる湿地に生息する。

### 4. 生息状況

分布域が非常に狭いが、生息域では多産するようである。しかし、放棄水田では、過去に生息していた地域でも確認できなくなった地域がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

繁殖場所となっていた水田が耕作放棄に伴い乾燥化しつつあると考えられ、それに伴う個体群の縮小や消失が懸念される (53)。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

アカハライモリは遺伝的に 5 つの系統または集団に区分されており、本種の南伊豆集団とは先行研究により南伊豆町のみで生息が確認されている southern Izu lineage を指す。伊豆半島が半島化した後に半島南部まで南下した東日本系統の残存集団と考えられる。半島北部に分布する中日本系統とは、別種レベルの遺伝的分化が見られる。東日本系統との間にもほどほどの遺伝的分化が見られる。これらのことから、本地域集団は中日本系統、東日本系統のどちらも異なる独立した保全単位として個別に保護していく必要があると考えられる。

### 8. 主な文献

Tominaga, A., M. Matsui & Y. Kokuryo (2015) Occurrence and evolutionary history of two *Cynops pyrrhogaster* lineages on the Izu Peninsula. *Current Herpetology*, 34(2): 19-27

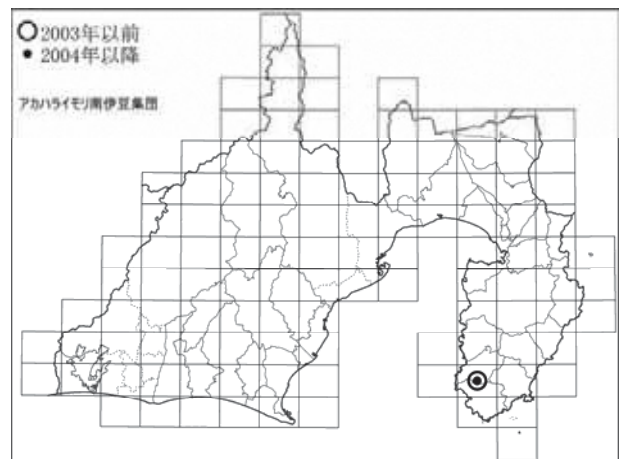
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、琉球大学教育学部両生類資料 URE1881-1890

(富永 篤)



賀茂郡南伊豆町 2018年6月5日 富永 篤



### 1. 種の解説

体長 14 cm に達する大形種で背中に多くのいぼをもち、眼の後ろには大きな耳腺をもつ。鼓膜の長径は眼からの距離より大きいことで近縁種・亜種と区別される。背面はオスで黄褐色、メスで濃い褐色、腹面は薄い黄白色で、黒褐色の雲状斑紋をもつことが多い。海岸近くから高山まで広く分布。3~5月に、溝、池、湿原などの止水に長い紐状卵塊を産む。

### 2. 分布

日本固有亜種で、北海道南部(函館:たぶん人為移入)、本州東北部(近畿及び山陰まで)に分布し、北海道西北部、佐渡島、伊豆大島、三宅島などには人為移入されている。県内では低地から高地まで広く分布しており、ほぼ全市町からの記録がある。

### 3. 生息環境

繁殖期に止水域に出現するが、水田環境はほとんど利用しない。非繁殖期は、ほぼ完全に陸生であるが猛暑季には溪流近くにも出現する。山地では森林域に、低地では公園の草地などに生息するが、変態直後の餌となる微小な土壌昆虫、ダニなどの生息することが重要である。

### 4. 生息状況

生息状況は、山地では安定していると推定されるが、低地での減少が著しい。最新の調査ではかつての確認市町村のほぼ半数で確認されておらず、県下全体としての生息状況は悪化していると思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

低地では道路の建設(24)、都市化による繁殖場所と生活場所の減少(23)、それに伴う交通事故死(26)などが生存の脅威となっている。山地でも道路の舗装化とU字溝の設置などによる生息地破壊(24)と、これらに伴う水質汚濁(31)などが生存を脅かしている。

### 6. 保護対策

現在残されている繁殖場所の保全が生息の維持に必要で、そうした場所を含む地域の開発を避けることが重要である。やむを得ず環境改変を行うためには、十分に水量の保証された産卵場所の造成と、卵ないし幼生の移殖は可能である。しかし、その場合には遺伝的多様性の保全への配慮が必要である。

### 7. 特記事項

在来種としては最大の日本固有亜種であり、古来様々な形で人間に親しまれてきた種でもある。同様に親しまれているニホンアマガエル、トノサマガエルなどとともに、代表的なカエルの普通種として身近に出会える状態を保っていくべき種である。

### 8. 主な文献

Matsui, M. (1984) Morphometric variation analyses and revision of the Japanese toads (Genus *Bufo*, Bufonidae). *Contrib. Biol. Lab., Kyoto Univ.* 26(3/4): 209-428

松井正文 (1987) 種類と分布、繁殖の地理的変異とその要因。浦野明央・石原勝敏 編, ヒキガエルの生物学, pp. 1-31. 裳華房, 東京.

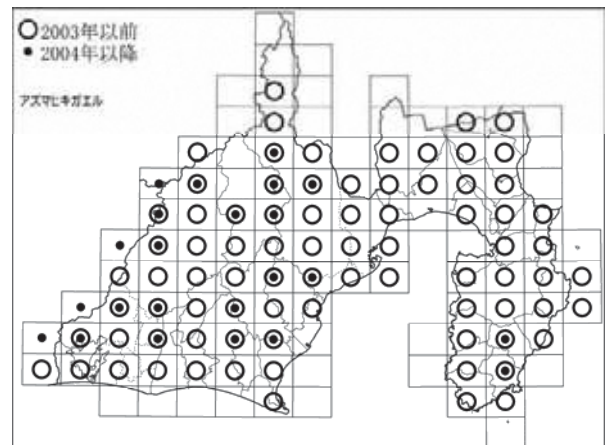
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科 (KUHE)資料 0053, 0054, 0056, 0232, 0233, 0266-0270 他.

(松井正文)



周智郡森町 2005年6月17日 小長谷尚弘



# タゴガエル *Rana tagoi tagoi* Okada, 1928

アカガエル科 Ranidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード7,8

[2004年版カテゴリー なし:環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長は4~5 cm前後の山地性アカガエルで、背面は褐色、鼓膜後方で折れ曲がる背側線隆条をもち、下あごに黒色の細点を持つのが特徴である。伏流水中で繁殖するなど、アカガエルとしては特異な生態をもつ。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。従来県内には広く分布するとされてきたが、ネバタゴガエルが新種記載されたことを受け、既知産地について全面的に見直す必要がある。これまで調べられている限り、県内ではネバタゴガエルのほうがより普通にみられるようで、タゴガエルの確実な産地は伊豆市、賀茂郡などの伊豆半島周辺のみである。

## 3. 生息環境

主に山地の溪流に沿って生息する。繁殖場所は溪流の源流部や湧水地などで、岩や礫の間隙を流れる伏流水中に産卵し、幼生は孵化後もこうした環境に留まる。変態して上陸した後は、溪流付近の林床で生活する。

## 4. 生息状況

県内の分布域が変更されたこともあり、詳しい生息状況についてはまだ不明である。県内の主な分布域である伊豆半島中部の山地では、最近でも比較的多くの個体が確認されているが、本種の生息には道路や砂防ダム建設などに伴う生息地破壊が脅威となるため、開発の進んだ地域では個体数が減少していると思われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路や砂防ダム、リゾート施設建設に伴う森林・河川環境の破壊が本種の生息を脅かす主要因である(11、13、21、22、24、25)。県内の既知産地が伊豆半島周辺のみと比較的局所的であるため、特にこの地域での環境改変の影響を強く受ける(61)。

## 6. 保護対策

既知産地で開発を行う際は、溪流環境とその周囲の森林環境に配慮することが望ましい。

## 7. 特記事項

従来は山地に広く分布する普通種とみなされてきたが、近年、東海地方の一部の集団が独立種ネバタゴガエルとして新種記載されたことを受け、静岡県内の分布域は限定的となった。伊豆半島のタゴガエルは関東地方の中でも遺伝的に固有の系統を成しており、本種の史的生物地理を考察する上で学術的価値の高い個体群である。

## 8. 主な文献

Eto, K., M. Matsui, T. Sugahara & T. Tanaka-Ueno (2012) Highly complex mitochondrial DNA genealogy in an endemic Japanese subterranean breeding Brown frog *Rana tagoi* (Amphibia, Anura, Ranidae). *Zoological Science*, 29(10): 662-671

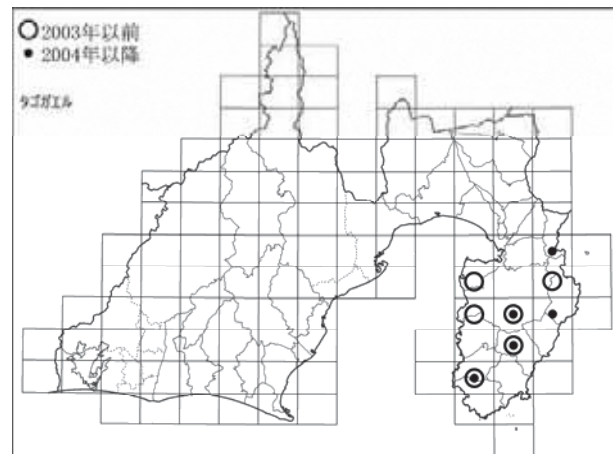
Eto, K. & M. Matsui (2014) Cytonuclear discordance and historical demography of two brown frogs, *Rana tagoi* and *R. sakuraii* (Amphibia: Ranidae). *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 79: 231-239

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科 (KUHE 36715、39971 など)  
(江頭幸士郎)



伊豆市 2013年5月28日 江頭幸士郎





### 1. 種の解説

2014年に記載されたタゴガエルの近縁種。外部形態や繁殖生態はタゴガエルと酷似し、外見で両種を識別するのは困難である。繁殖時のオスの広告音がタゴガエルのそれより高い優位周波数を示すこと、染色体数が $2n=28$ とタゴガエル( $2n=26$ )より多いことから独立種として分けられた。他県にある両者の分布境界では、両者の雑種と思われる $2n=27$ の個体が見つまっている。

### 2. 分布

日本固有種で、種の記載当初は東海地方の長野・愛知・静岡県境付近のごく限られた地域からのみ知られていたが、その後の調査で東海地方に広く見られることが分かってきている。県内でこれまでタゴガエルとされてきたものの大部分は、実際にはこのネバタゴガエルであり、伊豆半島周辺をのぞく県内全域の山地に広く分布しているものと考えられる。

### 3. 生息環境

基本的にタゴガエルの生息環境と同じである。溪流の源流部や湧水地などの伏流水環境で産卵し、そこで幼生期を過ごす。変態した後は溪流付近の林床で生活する。

### 4. 生息状況

近年記載された種であるため、詳しい生息状況についてはまだ不明である。県内の山地に広く分布し、全体として個体数は安定しているように見える。ただし、開発の進んだ地域などで局所的に個体数が減少している場所はあると思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

道路や砂防ダム、リゾート施設建設に伴う森林・河川環境の破壊が本種の生息を脅かす主要因である(11、13、21、22、24、25)。

### 6. 保護対策

本種の生息地で開発を行う際には、溪流環境とその周囲の森林環境に配慮することが望ましい。

### 7. 特記事項

他県にある本種とタゴガエルの分布境界では、両者の雑種と思われる $2n=27$ の個体が見つまっている。県内においても、伊豆半島周辺にみられるタゴガエルとの分布境界付近では、このような交雑が起こっている可能性がある。ただし、そのような分布境界はこれまでも自然下で長期間維持されてきたものであり、両種の存続を脅かすものではないと思われる。

### 8. 主な文献

Eto, K. & M. Matsui (2014) Cytonuclear discordance and historical demography of two brown frogs, *Rana tagoi* and *R. sakuraii* (Amphibia: Ranidae). *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 79: 231-239

Eto, K., M. Matsui & Y. Kokuryo (2016) A note on natural triploidy in a Japanese brown frog, *Rana neba* (Anura; Ranidae). *Current Herpetology*, 35(2): 128-131

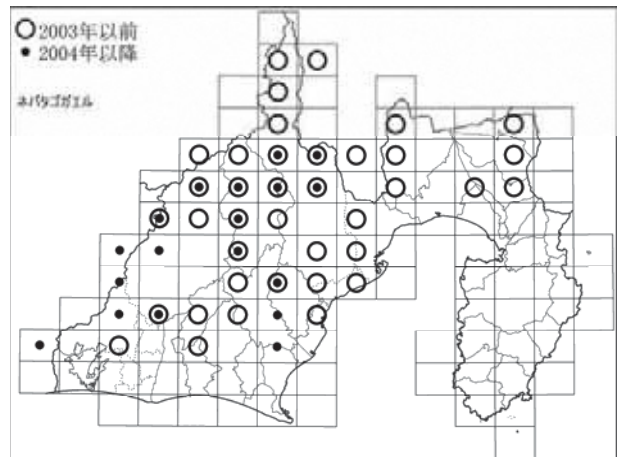
Ryuzaki, M., Y. Hasegawa, & M. Kuramoto (2014) A new brown frog of the genus *Rana* from Japan (Anura: Ranidae) revealed by cytological and bioacoustic studies. *Alytes*, 31: 49-58

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム、京都大学大学院人間・環境学研究科 (KUHE 49845-49847、49849-49851、55181-55197 など) (江頭幸士郎)



浜松市北区引佐町 2015年6月28日 江頭幸士郎





## 5. 淡水魚類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

改定版レッドリスト公表時までには静岡県の淡水域及び汽水域で確認された魚類は、66科 219種・亜種となった。これは、2005年版目録であげられた50科 167種・亜種に、新たに記録された種、以後に分離された種を加えたほか、県内での生息について疑義のある種を削除したものである。新たに目録に採用した種は、河口域の魚類、種が分離されたもの及び外国産・内地産の外来種などである。偶来種、生活史において淡水域・汽水域を必ずしも必要としない海産種及び外来種を除き、静岡県に在来と考えられる魚種の生活型の内訳は純淡水魚 23.4%、通し回遊魚 20.4%、汽水魚は 56.2% で、海と関わりをもつ通し回遊魚、汽水魚が豊富にみられる点が静岡県の淡水魚類相の大きな特徴となっている。この特徴は、地理的な条件と地史によって形成されたものである。静岡県は日本列島の中央に位置し東西に長く、北側には南アルプスや富士山などの 3,000 m を超える高い山岳地帯を有し、南側は太平洋に広く面して黒潮の影響を強く受けているため、ヤマトイワナなど冷水性の魚が高山の源流部に生息する一方、川の中・下流部には通し回遊魚や周縁魚（汽水魚）が豊かにみられるのである。また、西方から分布を拡大してきた純淡水魚は静岡県に入ってから次々と地形的な障害により東進が阻害されたため、西部地域から、中部地域、東部・伊豆地域へと向かうにつれてコイ科、ドジョウ科などの純淡水魚が少なくなっていく。一方、通し回遊魚や周縁魚は、そのような分布上の障害がほとんどなく、県下の全域で豊かに見られる。このように、静岡県では西部地域から東部地域まで各地域の淡水魚類相が少しずつ異なり、地域ごとのまた全体としての多様性にすこぶる富んでいる。

### (2) 調査の概要

調査は、「静岡県希少野生動植物保護条例」の指定希少野生動植物の選定を主目的とし、2009年から南アルプス、富士、伊豆、里山その他の地域ごとに各 1～2 年かけ、レッドリストのカテゴリーが高いものを中心に実施した。また、調査期間の終盤には地域や対象を広げた補足調査もあわせ実施された。魚類調査では、これらの地域や魚種にあまりこだわらず、できるだけ広範囲にまたカテゴリーの低い魚種をも対象として実施した。しかし、地域間やカテゴリーの低いものに対する調査密度に多少の偏りを生じたことは否めない。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

淡水魚類におけるレッドリスト種の選定は 2004 年版に準じて行った。改定版のレッドリスト公表時（2017 年）までに静岡県内の淡水域及び汽水域において確認された 66 科 219 種・亜種のうち偶来種、生活史において淡水域・汽水域を必ずしも必要としない海産種及び外来種を除いた 133 種・亜種をレッドリスト種の評価対象として選定した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

レッドリストに掲載された種数は、2004 年版から改定版において 53 種から 54 種とほとんど変わらないが、絶滅危惧種が 16 種から 23 種、とくに絶滅危惧 I 類が 10 種から 17 種に増加しており、2004 年版時に比べ絶滅の危惧がさらに高まった種類がかなり多くなったのである。また、すでに絶滅危惧 I 類となっていた種でも、生息地の減少、生息域の縮小、個体数の減少などがさらに進行したものが多い。

### (5) 減少の主要因と脅威

静岡県内での淡水魚類の生息地・生息数の減少は、多くの種にわたって認められるが、その原因については種、地域、場所により異なる。カワバタモロコやヤリタナゴのような平地、あるいは平地近くに生息域をもつ種は、諸開発事業や圃場整備によって生息地が埋め立てられて

消失し、あるいはそこまでには至らないまでもコンクリートを多用した護岸や横断工作物の設置による生息環境の悪化と分断などによって、生息域の減少・縮小と、生息密度の低下を引き起こしている。ホトケドジョウ、トウカイナガレホトケドジョウ、スナヤツメ類などは湧水を必要とするため、生息地周辺の林地などの消失による湧水の枯渇・減少によっても生息環境の悪化が生じている。上流域に生息するヤマトイワナ、アマゴ及びカジカは、開発や林地の管理放棄などを原因とする流域からの土砂流入によって生じた河床上昇と荒廃、またダムや堰堤の河川横断工作物による生息地の分断の影響がとくに大きい。また、前2種は遊魚を対象とした異なる亜種や他地域産の魚の放流によって、生息地が狭められあるいは交雑が進行し、在来個体群の存続が危うくなっている。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

ヤマトイワナは、別亜種との交雑がさらに進み、生息域、生息数が減少しており全県CRに選定された。分類学的な研究が進み、2004年版でドウクツミミズハゼの一種とされた種はコウスイミミズハゼ、イドミミズハゼの一種 sp.2はナガレミミズハゼとして、ともにCRに選定された。同様にスナヤツメは同北方種と南方種の2種、チワラスボもチワラスボ属の sp.Bと sp.Cの2種に分けられ、いずれもENに選定された。また、ニホンウナギ、ドジョウを新たにレッドリストに加えた。なお、ネコギギについては生息情報がなお届けくもの確認されず過去の採集記録や標本がないことから、トウヨシノボリ池沼型は内地産外来のシマヒレヨシノボリやビワヨシノボリあるいはその交雑種の可能性が示唆されたことから、コンジキハゼとクロミナミハゼは主な生息域が南方であり静岡県における確認は黒潮の潮流に伴う偶発的なものと考えられるため、それぞれリストから除外した。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

減少の原因が種・地域などにより異なることから、保全の対策もそれぞれ異なる。そのため、生息地を急速・大規模に改変することは回避すべきである。急で大きな生息環境の変化には多くの魚は耐えられず、とくに特殊な環境に生息する種や、寿命の短い種はそのような変化に弱いのである。また、絶滅危惧種については、静岡県が定めた保護方針を遵守し、生息環境をよりよく保全する必要がある。さらに、生息域が局限化した種にとってはその隣接地などに生息条件を備えた環境を再生させ、生息域の自然的拡大と、生息数の増大を図ることも絶滅の危機を乗り越える有効な保全手段となろう。なお、従来は普通種とされてきた種についても絶滅の危機が及んでいる可能性がある。今後、このような種も含めて継続的な調査を行いつつ、種の生息状況についての監視が必要となる。

#### (8) 文献(多くの種で参考とした文献)

- 板井隆彦(1982) 静岡県の淡水魚類. 第一法規出版, 東京, 208+4 pp.  
板井隆彦・金川直幸(1989) 静岡県の淡水魚類 追補1. 静岡女子大学紀要, 21: 71-87  
板井隆彦・金川直幸・杉浦正義(1990) 静岡県の淡水魚類 追補2. 静岡女子大学紀要, 22: 65-94  
金川直幸(1988) 静岡県の河口域魚類. 神奈川自然誌資料, (9): 1-13  
川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(2001) 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京, 719 pp.  
中坊徹次 編(2013) 日本産魚類検索 全種の同定 第三版. 東海大学出版会, 秦野, 2428 pp.  
瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾(2004) 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京, 534 pp.

(板井隆彦)

# ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) / 西部 絶滅危惧 IA 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

全長約 10 cm のコイ科魚類。タナゴ類としてはやや細長い。口元にやや長い口ひげが 1 対ある。側線は完全で、体側中央をやや下方に湾曲しながら尾柄端まで走る。繁殖期のオスは体側の前半部が赤みを帯び、背鰭前部の上縁と臀鰭の辺縁は鮮やかな赤色となる。タナゴ類の繁殖には二枚貝が必要であり、本種は産卵母貝としてマツカサガイを利用する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、国内では本州から南九州にかけて比較的広域に分布する。県内では、かつては天竜川左岸以西にかなり広い分布域があったようである。しかし、年々分布域を狭め、現在繁殖が確認されているのは都田川水系のきわめて限られた水域だけである。

## 3. 生息環境

平野部の農業水路など流れのある小流のほか、それらにつながる本川や池沼にも生息する。孵化後、仔魚や未成魚は緩流域で小型の動植物を食べて生活する。成長とともに水生植物が繁茂する大きな流れに移り、付着動植物を摂餌するようになる。繁殖期には産卵のためマツカサガイの生息地まで溯上して産卵する。

## 4. 生息状況

現在、生息が確認されているのは、都田川水系の本川と井伊谷川流域のごく限られた水域だけである。各生息場所の範囲は狭い。また、生息個体数も少なく、年変動も大きいようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内全体での生息場所の減少には多くの要因が重なっていると思われるが、共通するのは、小川や水路が河川整備 (13) あるいは圃場整備 (15-2) に伴う河岸や川底のコンクリート化によって、単調な流れに変えられたこと、本川との合流部や小川・水路にも落差工が随所に施され、流れが不連続になってしまったことである。これらの整備によって、産卵母貝であるマツカサガイの生息地が著しく減少したほか、かつての生息地の多くで、繁殖のための溯上ができなくなってしまった。

## 6. 保護対策

「静岡県希少野生動植物保護条例」の「指定希少野生動植物」に指定され捕獲が禁止されている。保護対策が講じられることになったが、地元の住民を中心とした保護監視員に生息地の管理を依頼している程度にとどまっている。また、それに先んじて絶滅の危険を減少させるため、地元住民による水路の管理や改善、大学の研究者による保護増殖実験園での増殖を含めた実験的な試みも続けられている。

## 7. 特記事項

全国的に減少傾向にあり、隣県の神奈川県からは絶滅が報告されている。

## 8. 主な文献

山田辰美・法月直也・関川文俊 (2010) ヤリタナゴ・マツカサガイの保全・復元のための水系管理手法に関する研究. 応用生態工学会 第 14 回研究発表会講演集: 53-54

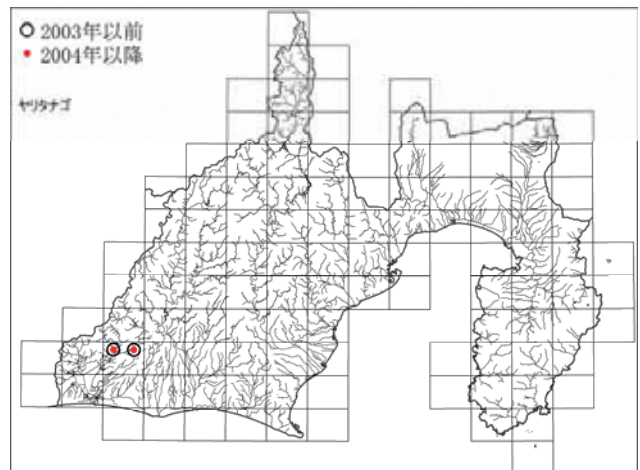
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦・山田辰美・北原佳郎)



都田川水系 2013 年 (飼育個体) 山田辰美





# カワバタモロコ *Hemigrammocypris rasborella* Fowler, 1910

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類(CR)/西部・中部 絶滅危惧 I A 類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA 類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類(EN)]

## 1. 種の解説

全長約 4~6 cm のコイ科魚類。オスはメスより小型で体高が低く、成熟すると眼の虹彩も含め頭部や体側に黄金色の婚姻色を呈する。繁殖の盛期は初夏で、水生・湿生植物の根や茎などに産卵する。満 1 年で成熟し、オス個体では体長約 2 cm で成熟するものもいる。

## 2. 分布

日本固有種で、九州北西部、山陽・四国の瀬戸内海側、静岡県瀬戸川水系以西の近畿・東海地方の太平洋側に分布する。県内では西部の笠子川水系本支川と池沼、天竜川水系本支川と池沼、太田川水系支川と池沼、菊川水系本支川、新野川支川、大井川下流扇状地、瀬戸川水系支川と池沼で確認されている。

## 3. 生息環境

平地の流れが緩い河川及び細流や池沼などの止水環境に生息し、泥底で水生・湿生植物が繁茂する場所でみられる。生息地周囲の主な環境は、河川や細流では水田、池沼では雑木林や湿原である。

## 4. 生息状況

主な生息地は、太田川水系の 2 池沼と瀬戸川水系支川だが、モニタリングで常に確認できるわけではない。天竜川本川のワンドにあった生息地は、周囲の雑木林を伐採され、出水時に消失した。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川開発 (13) による流路の直線化やコンクリート護岸化、河川敷ワンド周囲の雑木林の伐採 (13)、圃場整備 (15-2) による河川連続性の分断化、水位変動を阻害することによる一時的水域の消失 (71) などの生息環境の悪化や消失のほか、オオクチバスやブルーギルによる捕食 (52-3)、鱗を損傷させる疑いが認められたカダヤシの影響 (56-1)、他地域由来のカワバタモロコとの交雑 (57-1) も懸念される。

## 6. 保護対策

「静岡県希少野生動植物保護条例」の「指定希少野生動植物」に指定され、捕獲が禁止されている。藪田川では保全水路が設けられ、行政と保護監視員が草刈りや捕獲などの防止を目的とした巡視を行っている。また、天竜川ワンド産の個体は、事前に捕獲された魚の一部を継代飼育し、再導入に備えている。

## 7. 特記事項

近年、九州集団とそれ以東の集団は、遺伝的に大きく分化していることが明らかになった。

## 8. 主な文献

金川直幸・板井隆彦 (1998) カワバタモロコの生息地と河川改修. 森 誠一 編, 魚から見た水環境— 復元生態学に向けて/河川編一, pp. 61-80. 信山社サイテック, 東京.

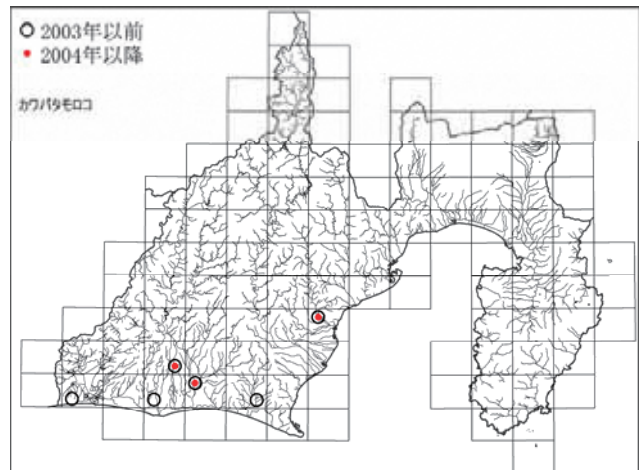
Watanabe, K., S. Mori, T. Tanaka, N. Kanagawa, T. Itai, J. Kitamura, N. Suzuki, K. Tominaga, R. Kakioka, R. Tabata, T. Abe, Y. Tashiro, Y. Hashimoto, J. Nakajima & N. Onikura (2014) Genetic population structure of *Hemigrammocypris rasborella* (Cyprinidae) inferred from mtDNA sequences, Japan. *Ichthyological Research*, 61: 352-360

## 9. 標本

近畿大学魚類資料 (KUN-P 41341)



藪田川 2007年7月16日 金川直幸



(金川直幸・板井隆彦)

# ヤマトイワナ *Salvelinus leucomaenis japonicus* Oshima, 1961

サケ科 Salmonidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) / 西部・中部 絶滅危惧 IA 類 (CR) (要件-②④) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

サケ科魚類のイワナ *Salvelinus leucomaenis* の亜種。他の亜種は体側背部を中心に多数の白い斑点を終生にわたってもつが、ヤマトイワナは白い斑点が目立たず、とくに背部には全くないものが多い。体側下部を中心に橙色の有色斑点をもつ個体が多いが、地域によって差があり、全く斑点がない集団もみられる。なお、幼時には白い斑点を有し、成長とともに背側は消失し、腹側は有色斑点に変化していくものが多い。

## 2. 分布

日本固有亜種で、富士川または相模川から紀伊半島までの太平洋側の河川の源流域に分布し、県内では大井川と天竜川の上流域の本支川に分布する。

## 3. 生息環境

夏季の最高水温が約 15°C 以下の大河川の源流域に生息し、大井川では標高 2,000 m 以上の源流域にも生息している。春季には水生昆虫も利用するが、夏季などの活動期には陸生昆虫が主食となるため、流域の豊かな植生も生息条件として重要である。

## 4. 生息状況

現在、県内で生息が確認されているのは、大井川と天竜川の上流の本支川の、ごく少数の河川の最上流域の一部に限られている。現在、1980年代まで確認があったいくつかの河川では生息が途絶えた。

## 5. 減少の主要因と脅威

電源開発 (25) や林地開発 (11) によって生息環境が悪化してきているが、最も重要な問題は、別亜種の放流に伴う遺伝子汚染である (57-1)。溪流釣りが盛んな河川では、増殖事業や個人放流によってニッコウイワナなどの外来イワナが放流され、交雑することにより在来のヤマトイワナが著しく減少している。

## 6. 保護対策

外来イワナの遺伝子を完全に除去することは困難で、大井川水系では、現時点で純粋な在来集団の特徴が外部形態・遺伝子とも明確でない。外来イワナの放流と分布拡大を完全に防止したうえで、在来集団の特徴と識別方法を釣り人などに周知し、外来イワナの特徴を有する個体を選択的に除去していくべきである。また、在来集団の保護・増殖のためには、種苗放流をやめ、産卵場造成などの手法を採用すべきである。

## 7. 特記事項

紀伊半島のヤマトイワナ (キリクチ) は、環境省レッドリストの「絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)」に選定されている。

## 8. 主な文献

後藤裕康 (2010) ヤマトイワナ. NPO 静岡県自然史博物館ネットワーク 編, しずおか自然史, pp. 246-247. 静岡新聞社, 静岡.

川合範明・中村永介・植松久雄・加藤博之 (2006) 2004年夏季の大井川源流におけるイワナの食性. 静岡県水産技術研究所研究報告, 41: 21-28

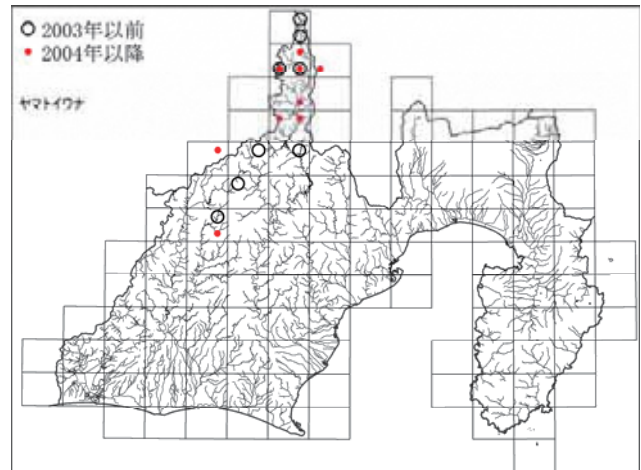
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、近畿大学農学部 (FKUN 35409)

(後藤裕康・板井隆彦・川嶋尚正)



大井川水系寸又川 2009年10月15日 後藤裕康



# ナガレミミズハゼ *Luciogobius fluvialis* Kanagawa, Itai & Senou, 2011

(=2004年版のイトミミズハゼの一種 *Luciogobius* sp. 2)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧類 I A 類 (GR) / 中部 絶滅危惧 I A 類 (GR) (要件-①②) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー 要注目種 現状不明 (N-I) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長約 3~4 cm のハゼ科魚類。眼は小さく、固定後は不明瞭となる。体は細長く、背鰭は 1 基で背鰭 1 棘 9 軟条、臀鰭 1 棘 9 軟条、胸鰭 15 軟条、脊椎骨数 32 (腹椎骨数 16) である。生時の体色は半透明で薄く黄色みを帯びた淡い赤緑~桃色を呈する。河川に生息するミミズハゼ属では、唯一中流域に生息する。4~5 月頃に礫の下面の空隙に白色でナス型の卵を産卵する。流下する仔魚は 5 月下旬頃まで観察される。近年、秋に下流域で未成魚が確認された。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県の安倍川水系藁科川の中流域に分布する。近年、大井川でも確認された。

## 3. 生息環境

中流域の伏流水が湧出する淵や瀬の、直径約 3~5 cm の礫に覆われ、踏み込むと沈み込むような柔らかい河床下の間隙水域に生息する。

## 4. 生息状況

2008~2009 年に藁科川中流域一帯で行われた河川工事によって本種の生息環境が著しく悪化した。2010 年からのモニタリングでは、工事前と比較して努力量あたりの確認個体数が著しく減少した。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川開発 (13) によって発生した濁水に含まれる細粒土砂や重機の転圧による河床間隙の目詰まり、打設されるコンクリート構造物からの灰汁による水質汚染 (31)、森林伐採 (11) による細粒土砂の流出に伴う間隙水域の消失、地下水の取水に伴う湧水の枯渇 (71) などが原因と考えられる。

## 6. 保護対策

2008 年に河川管理者の国土交通省静岡河川事務所内に事務局を置く「安倍川・大井川希少魚類保全対策連絡会」が立ち上げられた。ナガレミミズハゼなどの希少種の生息情報が共有され、河川工事の際に濁度と pH について現場管理目標値が設定されるなど、さまざまな配慮がなされている。

## 7. 特記事項

相澤・國領 (1980) の「イトミミズハゼ」は本種である。

## 8. 主な文献

相澤裕幸・國領康弘 (1980) 静岡県で得られたイトミミズハゼ. 淡水魚, (6): 51-53

Kanagawa, N., T. Itai & H. Senou (2011) Two new species of freshwater gobies of the genus *Luciogobius* (Perciformes: Gobiidae) from Japan. *Bulletin of the Kanagawa Prefectural Museum Natural Science*, 40: 67-74

渋川浩一・金川直幸・國領康弘 (2018) 大井川で確認されたナガレミミズハゼ. 東海自然誌, (11): 45-50

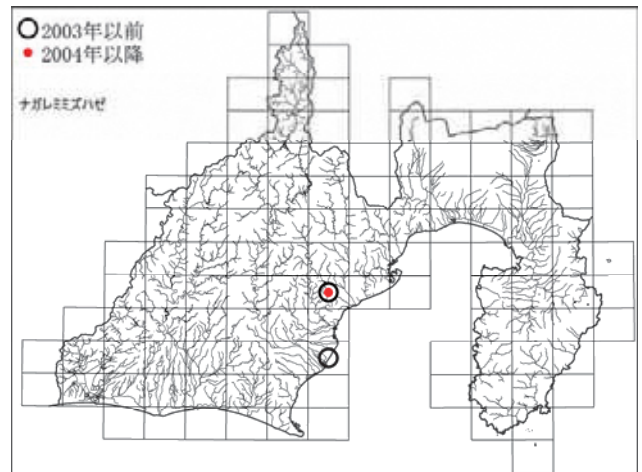
## 9. 標本

神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵ホロタイプ (KPM-NI 23668)

(金川直幸・板井隆彦)



藁科川 2013年5月23日 金川直幸





## ユウスイミミズハゼ *Luciogobius fonticola* Kanagawa, Itai & Senou, 2011

(=2004年版のドウクツミミズハゼの一種 *Luciogobius* sp.1)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧類 I A 類 (GR) / 中部 絶滅危惧 I A 類 (GR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA(CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

### 1. 種の解説

体長約 3 cm のハゼ科魚類。眼は小さく、固定後は不明瞭となる。体は細長い。背鰭は 1 基で背鰭 1 棘 8 軟条、臀鰭 1 棘 8 軟条、胸鰭 15 軟条、脊椎骨数 31 (腹椎骨数 15) である。生時の体色は透明感のある淡い黄～淡い赤黄色を呈する。ナガレミミズハゼと比べると、頭が大きく眼が小さく、腹椎骨数が少ない。5～6 月頃に礫下面の空隙に産卵する。

### 2. 分布

日本固有種で、静岡県の大井川と安倍川に分布する。

### 3. 生息環境

河川下流域の伏流水が湧出する場所で、礫径約 3～5 cm で踏み込むと沈み込むような柔らかい河床の間隙水域に生息する。

### 4. 生息状況

大井川では 2008 年の平水時に、生息地の約 1 km 上流で行われた河川工事現場から濁水が流出し、生息地に細粒土砂が厚さ 90 cm ほど堆積した。以後、陸化が進み、生息地周辺での個体数が減少した。しかし、継年のモニタリングでは、ほぼ毎年連続して生息が確認されている。安倍川では 2000 年頃に大規模な砂利採取に伴って仮設道路が造られ、ダンプや重機によって生息地周辺が踏み固められた。また、残された細粒土砂が堆積し伏流水の湧出が著しく減少した。1997 年まではある程度の個体が確認されたが、2002 年以降に時折不ずかな個体が確認される程度で、安倍川の生息状況は不安定と思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川開発 (13) によって発生した濁水に含まれる細粒土砂や重機の転圧による河床間隙の目詰まり、打設されるコンクリート構造物からの灰汁による水質汚染 (31)、地下水の取水に伴う湧水の枯渇 (71) などが原因と考えられる。

### 6. 保護対策

ナガレミミズハゼの項を参照。

### 7. 特記事項

生息地周辺で地下水を汲み上げている井戸で、地下水中の生物を目的とした調査の際に仕掛けられたネットによって伏流水性のミミズハゼ属が混獲された事例がある。

### 8. 主な文献

金川直幸・板井隆彦・瀬能 宏 (2014) 淡水産希少ミミズハゼ属類似 2 種の識別. 日本生物地理学会会報, 69: 77-82

Kato, M., A. Kawakita, & T. Kato (2010) Colonization to aquifers and adaptations to subterranean interstitial life by a water beetle clade (Noteridae) with description of a new *Phreatodytes* Species. *Zoological Science*, 27: 717-722

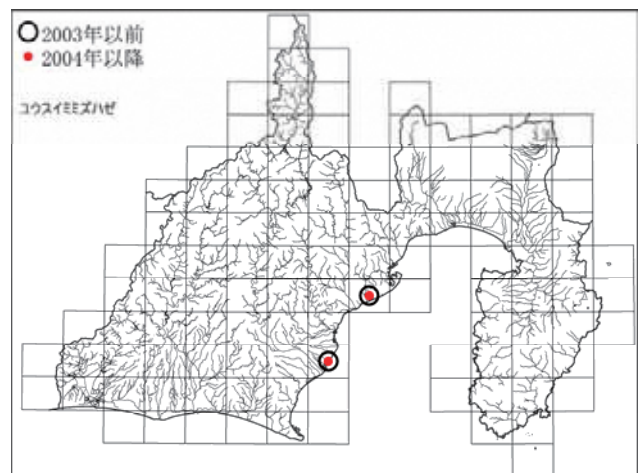
### 9. 標本

神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵ホロタイプ (KPM-NI 27293)

(金川直幸・板井隆彦)



大井川 2013年5月27日 金川直幸



## イドミミズハゼ類の1種 *Luciogobius* sp. 1

(=2004年版のイドミミズハゼの一種 *Luciogobius* sp. 3)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類(CR) / 西部・中部 絶滅危惧 I A 類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類(CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (イドミミズハゼとして)]

### 1. 種の解説

体長約4cmのハゼ科魚類。本種は、現在分類学的精査が進められているイドミミズハゼとその類似種からなる一群（以下、イドミミズハゼ類）に含まれる。眼は小さく、皮下に浅く埋没し、固定後は不明瞭となる。体は細い。背鰭は1基で、臀鰭とほぼ対在する。臀鰭起部は肛門のすぐ後にあり、腹鰭をもち、胸鰭には遊離軟条がない。脊椎骨数は34~36、生時の体色は半透明で赤みを帯びた淡褐色。河川の下流域に生息する。11月に抱卵個体が得られている。

### 2. 分布

国外では韓国済州島、国内では茨城県・新潟県から鹿児島県にかけての各地で記録されている（多くは「イドミミズハゼ」として）。その中に本種も含まれると思われるが、標本に基づく詳細な記載を伴った報告が少ないため、特定は難しい。県内では、西部の太田川と中部の大井川で確認されている。

### 3. 生息環境

大井川では下流域の伏流水が湧出する瀬やワンドで、浮き石の多い礫底の間隙水域で確認された。太田川では下流域の流水域とワンドの砂泥底の砂利の中から確認された。

### 4. 生息状況

大井川では1997~2005年に計11個体、太田川では2005年に計2個体確認されて以後、確認がない。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川開発(13)によって発生した濁水に含まれる細粒土砂や重機の転圧による河床間隙の目詰まり、打設されるコンクリート構造物からの灰汁による水質汚染(31)、森林伐採(11)による細粒土砂の流出に伴う間隙水域の消失、地下水の取水に伴う湧水の枯渇(71)などが原因と考えられる。

### 6. 保護対策

大井川での保護対策はナガレミミズハゼの項を参照。太田川での保護対策はとくに行われていない。

### 7. 特記事項

現在、イドミミズハゼとの種の異同や、静岡県レッドデータブック(2004)で示した体高/体長比が異なる「別種と思われる個体」との関係などを含めた精査が進められている。

### 8. 主な文献

藍澤正宏(1998)イドミミズハゼ. 水産庁編, 日本の希少な野生生物に関するデータブック, pp. 186-187. 日本水産資源保護協会, 東京.

金川直幸・板井隆彦(2009)静岡県の河川より得られたミミズハゼ属魚類 *Luciogobius* sp. 3 の外部形態. 2009年度日本魚類学会年会講演要旨: 98

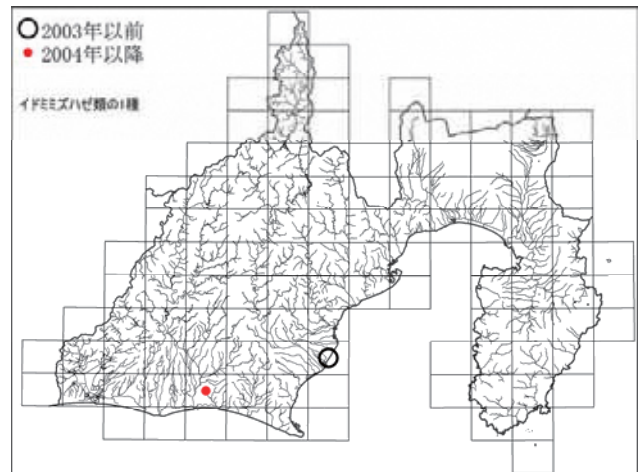
### 9. 標本

神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵標本(KPM-NI 24392 他)

(金川直幸・板井隆彦・渋川浩一)



大井川 2002年11月9日 金川直幸



# シロウオ *Leucopsarion petersii* Hilgendorf, 1880

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) / 西部 情報不足 (DD) 中部・伊豆 絶滅危惧 IA 類 (CR) (要件-①②) 変更なし  
[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 II 類 (VU)]

## 1. 種の解説

全長約 5 cm のハゼ科魚類。体は半透明で、死ぬと乳白色になる。背鰭は 1 基で、鱗が全くない。成熟したメスは、腹部に 1 列の黒点列がある。生活環の大部分を海で過ごし、2~3 月に川の下流部に溯上して砂礫地の河床の石裏に透明な短バット状の卵を産卵する。オスは孵化するまで卵を保護する。寿命は 1 年である。

## 2. 分布

国外では東シナ海沿岸、国内では北海道南部から九州までの太平洋沿岸及び日本海沿岸に分布する。県内の溯上河川は、伊豆の青野川から稲生沢川、中部の富士川から萩間川にかけての駿河湾西岸河川で、稀に御前崎の西の菊川からも確認される。

## 3. 生息環境

海域では沿岸域や閉鎖的な内湾で過ごす。繁殖期には群れとなって河川感潮域から下流域に溯上する。産卵は水通しのよい汚れていない砂礫底で行われ、拳大より大きな石の石裏を利用する。

## 4. 生息状況

県内の主な個体群は、中部の清水港に流入する庵原川と波多打川を中心とする駿河湾西岸の個体群、伊豆の青野川から稲生沢川までの伊豆南部の個体群と考えられる。前者は、各河川で産卵可能範囲が狭まり、個体群が縮小していると考えられる。後者は、溯上河川が 3 河川だけで、確認個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

駿河湾西岸の庵原川では、感潮域及びその上流の河川横断工作物 (25) による溯上可能域の局所化、波多打川では水質と底質の汚濁 (31)、興津川では清水港との間への埠頭の増設 (14) による沿岸流の変化も原因と考えられる。

## 6. 保護対策

山口県と長崎県では、河床の攪乱と投石による産卵場造成が行われている。

## 7. 特記事項

遺伝的に分化した日本海型と太平洋型の 2 系統が存在する。太平洋型は日本海型より体サイズが小さい。

## 8. 主な文献

秋山信彦・北野 忠・引地邦夫・小笠原義光 (1995) シロウオの営巣と砂粒径・流速との関係. 水産増殖, 43: 289-296

板井隆彦・金川直幸・杉浦正義 (1998) 静岡県の希少淡水魚シロウオ *Leucopsarion petersii* の生息地の現状. 環境システム研究, (5): 59-75

松井誠一 (1996) シロウオ. 水産庁 編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (III), PP. 128-135. 日本水産資源保護協会, 東京.

竹垣 毅・永瀬翔一・井手勇旗・佐々木学人・天谷貴史・金谷洋佑・寺田龍介 (2015) シロウオ *Leucopsarion petersii* の産卵場造成効果の検証. 日本水産学会誌, 81 (4): 722-724

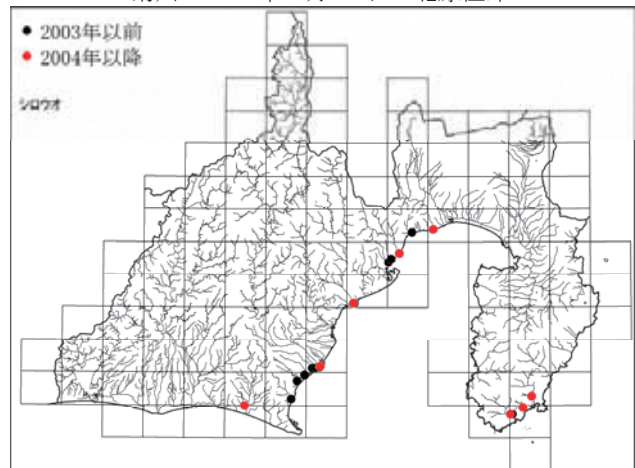
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40592, 40778~40780)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P17051~17055)、国立科学博物館動物研究部門魚類資料 (NSMT-P 100874)

(板井隆彦・北原佳郎・渋川浩一)



菊川 2018年3月31日 北原佳郎





# トビハゼ *Periophthalmus modestus* Cantor, 1842

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) / 西部 絶滅危惧 IA 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IA 類 (CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

全長約 10 cm のハゼ科魚類。体は灰褐色で背から体側中央にかけて数個の暗色の不規則な斑紋がみられる。両眼間隔は狭く、背方に突出する。第 1 背鰭は先端が丸く暗色帯がない。左右の腹鰭は膜蓋によってつながる。干潟で干潮時に水中から出て活動し、泥表面の小動物を捕食する。繁殖期は夏季で、オスが泥を掘って巣を作り、求愛ジャンプをしてメスを呼び込む。静岡県での繁殖期の詳細は不明である。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾、国内では東京湾から九州までの太平洋沿岸、瀬戸内海沿岸、玄界灘沿岸、奄美から沖縄に分布する。県内では西部の遠州灘に面した数河川で記録されている。かつては駿河湾西岸の勝間田川などの河口にも生息していたようである。

## 3. 生息環境

河口域や下流域下部の海水の影響が多少ともある干潟の泥底に生息し、ヨシ原が存在するところに多い。干潟の発達していない河川ではみられない。

## 4. 生息状況

1968 年に浜名湖の魚類目録に記録されて以降、2003 年まで県内での記録が途絶えていた。確認された河川数は 2004 年版よりも増えたが、個体数が比較的多く、生息が安定している河川は 1 河川だけである。他の河川は個体数が不安定で概して少なく、再生産の有無が明らかではない。菊川では 2003 年に確認されたが、その後、2012 年まで消息が途絶えた。

## 5. 減少の主要因と脅威

ヨシ群落が全面的に失われるような干潟の土砂浚渫や護岸整備 (13) による生息場所の喪失や悪化が主要因と考えられる。河口域に水門が設置される場合には周辺の環境が大きく変わってしまうため、設置場所について十分に配慮する必要がある。

## 6. 保護対策

現在、生息が安定している河川では、河口から下流域にかけての堆積土砂の浚渫をその影響が最小限になるようヨシ原を残してワンドが形成されるように実施され、そのワンドの干潟で生息が確認されている。

## 7. 特記事項

九州以北と種子島以南の個体群との間に遺伝的変異があることが報告されている。

## 8. 主な文献

萩原清司 (1996) トビハゼ. 水産庁 編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料Ⅲ, PP. 136-139. 日本水産資源保護協会, 東京.

向井貴彦・杉本真奈美 (2006) 日本産トビハゼのミトコンドリア DNA 多型に基づく遺伝的集団構造の解析. 魚類学雑誌, 53(2): 151-158

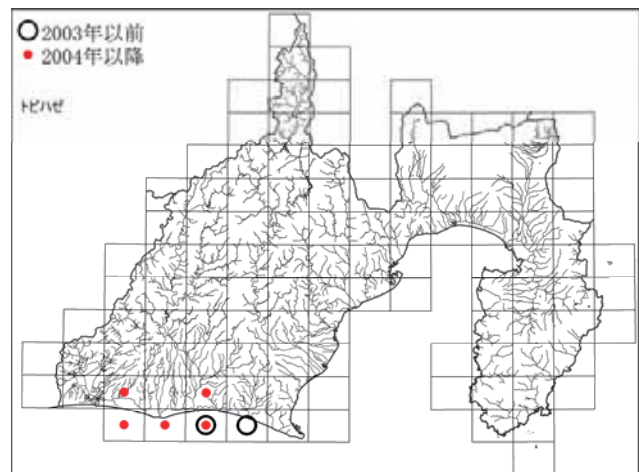
静岡県水産試験場浜名湖分場 (1968) 浜名湖、浅海漁場開発事業報告書 (昭和 40-42 年度). 静岡県水産試験場浜名湖分場, 浜松. 299 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、豊橋市自然史博物館魚類資料 (TMNH-F-2316) (板井隆彦・渋川浩一・森口宏明)



馬込川水系 2014 年 6 月 1 日 森口宏明



## スナヤツメ北方種 *Lethenteron* sp. N. (*sensu* Nakabo & Kai, 2013)

(=2004年版のスナヤツメ (一部))

ヤツメウナギ科 Petromyzontidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) / 西部絶滅危惧 I B 類 (EN) 中部絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件①②) 変更コード 8

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

### 1. 種の解説

全長約 15 cm のヤツメウナギ科魚類。体は細長い。形態は南方種に酷似する。眼の虹彩は著しく黒みを帯びる。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、目は発達せず、口は上唇が突出し下向きに開口する。体色は全体的に茶褐色だが鰓穴の付近はうすく赤紫色を帯びる。幼生は砂泥中で 3~4 年間過ごし有機物や珪藻を摂餌し、冬期に変態し成熟する。変態後は餌をとらず産卵後は死亡する。産卵は礫底で行うと思われる。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、琵琶湖流入河川及び三重県海蔵川以北の本州に分布する。県内では西部の都田川水系、太田川水系、中部の飯渕川水系、安倍川水系で生息が確認されている。

### 3. 生息環境

平野部の小・中河川の中流域や、安倍川水系のような大河川では比較的標高が低い支川の中流域に生息する。生息が確認された地点やその近傍には湧水がみられる。幼生と成体ともに淵や瀬脇のリターや砂を含む泥中から確認された。

### 4. 生息状況

生息地は著しく局限され、それぞれ孤立した状態となっている。都田川水系や太田川水系では、河川改修後に個体数が減少した場所、確認されなくなった場所もみられる。安倍川水系では個体数が多い河川もあるが、河川規模が小さく生息範囲も狭い。また、分布河川がそれぞれ離れており、近年確認されなくなった河川もある。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川開発 (13) による流路の固定や直線化及び河床掘削に伴う砂泥の減少、森林伐採 (11) や河川開発 (13) や地下水の取水に伴う湧水の枯渇 (71) 及び流域からの生活排水の流入 (31) に伴う水質・底質の悪化、森林伐採 (11) に伴う土砂の流出による産卵場の埋没などが原因と考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

同属のスナヤツメ南方種と形態が酷似し、とくに幼生では DNA 解析法を用いないと識別が困難である。南方種も分布している都田川水系では、両種ともに確認された場所もある。

### 8. 主な文献

向井貴彦 (2017) 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社, 岐阜, 214 pp.

向井貴彦・北野 聡・浅香智也・地村佳純・金川直幸・森口宏明・北川 学・板井隆彦 (2017) 東海地方におけるスナヤツメ 2 種の分布. 平成 29 年度ゴリ研究会講演要旨.

中坊徹次・甲斐嘉晃 (2013) ヤツメウナギ科. 中坊徹次 編, 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp. 144-145. 東海大学出版会, 秦野.

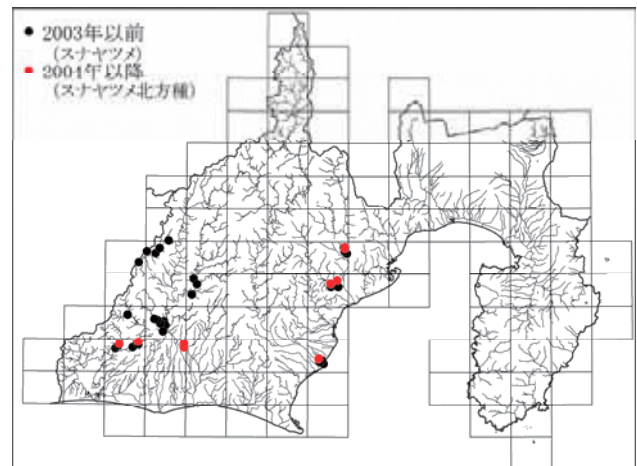
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(金川直幸・板井隆彦)



都田川 2014年2月17日 金川直幸





## スナヤツメ南方種 *Lethenteron* sp. S. (*sensu* Nakabo & Kai, 2013)

(=2004年版のスナヤツメ (一部))

ヤツメウナギ科 Petromyzontidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IB 類(EN) / 西部 絶滅危惧 IB 類(EN) (要件-①②)変更コード 8

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類(EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類(VU)]

### 1. 種の解説

全長約 15 cm のヤツメウナギ科魚類。体は細長い。顎はなく胸鰭と腹鰭もない。成体は口が丸く吸盤状をなす。目の後方に 7 個の鰓穴を持つ。体色は背が茶褐色、体側と腹側は淡白色で、眼の虹彩は白みが強い。幼生はアンモシーテスと呼ばれ、目は発達せず、口は上唇が突出し下向きに開口する。体色は全体的に茶褐色で鰓穴の付近はうすく赤紫色を帯びる。幼生は砂泥中で 3~4 年間過ごし、有機物や珪藻を摂餌する。冬期に変態し成熟する。変態後は餌をとらず産卵後に死亡する。礫底で産卵すると思われる。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島南部、国内では秋田県の檜木内川以南の本州、四国、九州北部に分布する。県内では西部の都田川水系、天竜川水系で確認されている。

### 3. 生息環境

天竜川のような大河川の本川や比較的標高が高い支川、また都田川のような中規模河川の支川上流域に生息する。成体は浮き石が多い瀬、幼生は淵や瀬脇のリターや泥を含む砂中でみられる。

### 4. 生息状況

都田川水系では支川で確認されている。個体数は少なく、比較的まとまって確認された場所でも、局所的な分布をしている。天竜川水系では広域で確認されたが、上流の支川以外では個体数が少なかった。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川開発 (13) による流路の固定・直線化・河床掘削に伴う砂泥の減少、森林伐採 (11) や河川開発 (13) 及び地下水の取水に伴う湧水の枯渇や河川水温の上昇 (71)、森林伐採 (11) に伴う土砂の流出による産卵場の埋没などが原因と考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

同属のスナヤツメ北方種と形態が酷似し、とくに幼生では DNA 解析法を用いないと識別が困難である。北方種も分布する都田川水系では、両種ともに確認された場所もある。両種の生理的・生態的な関係が興味深い。

### 8. 主な文献

向井貴彦 (2017) 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社, 岐阜. 214 pp.

向井貴彦・北野 聡・浅香智也・地村佳純・金川直幸・森口宏明・北川 学・板井隆彦 (2017) 東海地方におけるスナヤツメ 2 種の分布. 平成 29 年度ゴリ研究会講演要旨.

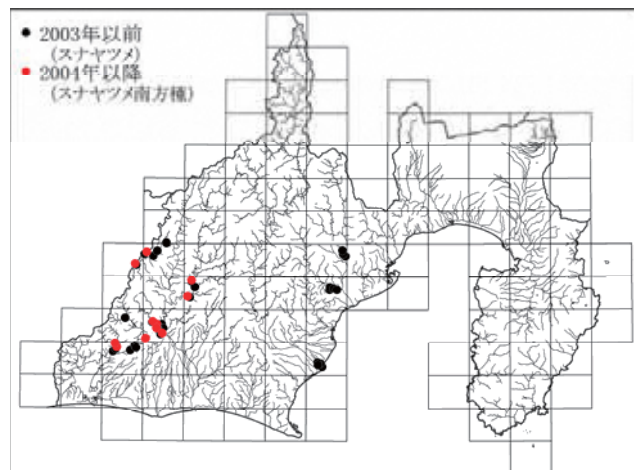
中坊徹次・甲斐嘉晃 (2013) ヤツメウナギ科. 中坊徹次 編, 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp. 144-145. 東海大学出版会, 秦野.

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)



天竜川水系 2015年4月18日 金川直幸



(金川直幸・板井隆彦)



### 1. 種の解説

全長約 60 cm のウナギ科魚類。円筒状で細長い。背鰭、尾鰭、臀鰭が連なっているが腹鰭を欠く。背鰭起部は胸鰭後端と肛門の間点かそれよりも後方に位置する。西マリアナ海嶺南部海域で夏の新月に産卵する。レプトケファルス(葉形仔魚)の状態では海流によって運ばれ、シラスウナギに変態して接岸する。クロコを経て黄ウナギとなり河川中流や湖沼から内湾までさまざまな場所に生息する。4~15 歳で銀ウナギに変態して海に下り、海域で産卵回遊を行う。



伊東仲川 2015 年 7 月 30 日 鈴木邦弘

### 2. 分布

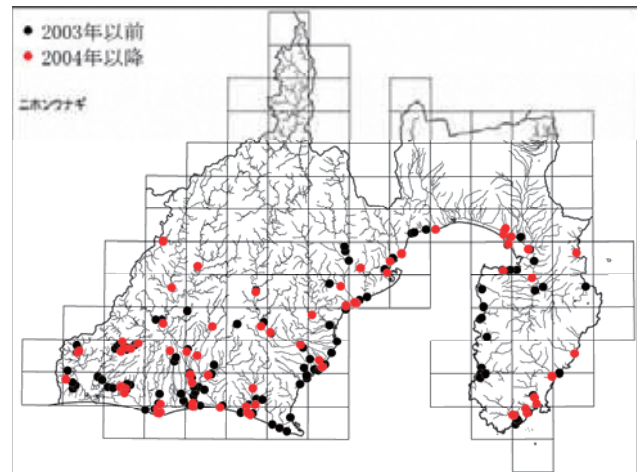
北海道太平洋岸から南シナ海北部の海南島に至る東アジアに分布する。県内全域の河川の下流から中流域に広く分布し、浜名湖などの汽水湖にも生息する。

### 3. 生息環境

成長段階に応じて好む環境が異なる。シラス期やクロコ期は砂泥底やツルヨシ群落の根元、黄ウナギ以後は砂礫底の転石下、巨石の間などに生息する。

### 4. 生息状況

国内及び県内におけるシラスウナギ並びに川ウナギの漁獲量は、数十年間で約 1/10 にまで減少した。漁獲量の推移から、ウナギ資源は減少していると考えられる。一方で、県内での生息河川は多く、河床整備や汚濁が進んだ都市型河川にも生息している。伊東市宇佐美湾に注ぐ鳥川、伊東仲川、伊東宮川での調査では、河川間で資源構造(生息密度、大きさ、性比、成長率)が大きく異なっており、河川水温や底質などの河川環境の違いが本種の生息に大きな影響を与えている。



### 5. 減少の主要因と脅威

養殖用としてのシラスウナギの乱獲(41)、河川や沿岸の護岸整備や平坦化(13、14)、河川横断物による移動阻害(25)のほか、産卵や仔魚の回遊に係わる海洋環境の短期的変動(71)が原因と考えられる。

### 6. 保護対策

国内では、資源保護やその持続的利用のため、養鰻業の大臣許可制への移行、シラスウナギの池入量制限、黄ウナギの生息場確保のための石倉カゴの設置、産卵親魚保護のための河川における禁漁措置や浜名湖での親ウナギ買上げ放流などが行われている。

### 7. 特記事項

深海の産卵場で捕獲された親魚 13 個体は汽水履歴を有していただけでなく、うち 9 個体には淡水履歴が認められ、日本の河川で生息していたと推定される個体も含まれていたことから、日本の河川溯上個体も再生産に大きく寄与することが確認された。東アジア一帯で単一の任意交配集団を形成する。

### 8. 主な文献

望岡典隆(2014)ニホンウナギ：現状と保全。魚類学雑誌, 61(1): 33-35

波戸岡清峰(2013)ウナギ科。中坊徹次 編, 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp. 240. 東海大学出版会, 秦野。

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3214, 3243, 3269, 40595, 40617)

(鈴木邦弘・板井隆彦)

# トウカイコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima, 2012

(=2004年版のスジシマドジョウ小型種東海型)

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN)/ 西部 絶滅危惧 IB類(EN) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN)]

## 1. 種の解説

全長約 6 cm のドジョウ科スジシマドジョウ種群。同種群の中でも最も小さく、オスはメスに比べてひとまわり小さい。体形は円筒形で、オスは胸鰭に丸い骨質盤をもつ。体色は淡い茶褐色で、生時には透明感のあるあめ色をしている。体側には数条の斑紋列がある。体側中央の斑紋は、オスでは繁殖期に縦条となるが、メスや未成魚では点列のままである。尾鰭には 3~4 列の横帯が弧状に分布する。尾鰭基底上下には黒色の小斑紋があり、上方が濃く、下方は不明瞭。繁殖期は 5~7 月で、水田周辺の細流に移動して産卵すると考えられる。



太田川水系 2013年7月14日 森口宏明

## 2. 分布

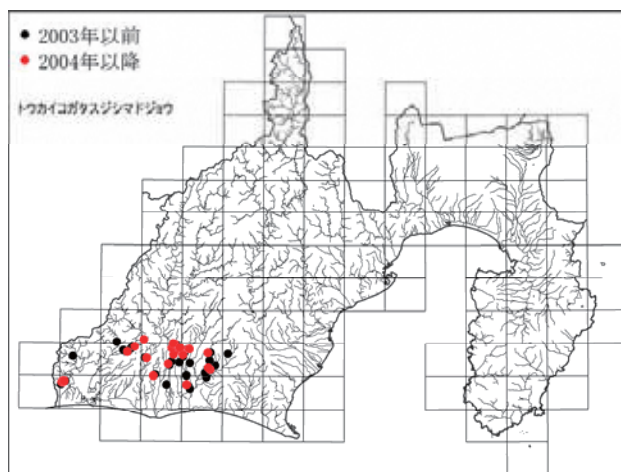
日本固有亜種で、三重県、岐阜県、愛知県、静岡県に分布する。県内では西部の都田川水系入出太田川から太田川水系原野谷川までの河川に分布する。

## 3. 生息環境

河川中・下流域に接続する小川や農業水路の緩流域、また接続する河川の淵などの汚れの少ない砂泥底あるいは砂底に生息する。

## 4. 生息状況

静岡県レッドデータブック (2004) 時に比べて大きな変化はないが、生息河川における生息域や生息密度は全体として大きく減少している。河川整備や圃場整備が進んだ馬込川水系御陣屋川、天竜川水系一雲済川の本支川、太田川水系敷地川の本支川などで減少が著しい。



## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13) や圃場整備 (15-2) による流路の直線化、河床や護岸のコンクリートブロック化による淵などの砂泥底の生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

愛知県の家下川では、地元の環境保護団体と農業者及び関係行政が主体に、コンクリート張り河川底面の一部を剥がしたうえ砂や石を投入して 50 cm ほどの淵を造成し、生息環境の創出が試みられている。

## 7. 特記事項

これまで、分類の混乱から学名・和名が不確定なままスジシマドジョウ小型種東海型として扱われてきたが、近年、学名の確定及び和名の提唱がなされた。

## 8. 主な文献

井上大輔 (2017) トウカイコガタスジシマドジョウも増えた！—愛知県・家下川リバーキーパーズの試み—。北九州・魚部 井上大輔・中島 淳 編, 特盛どじょう本, p. 112. 北九州・魚部, 福岡.

Nakajima, J. (2012) Taxonomic study of the *Cobitis striata* complex (Cypriniformes, Cobitidae) in Japan. *Zootaxa*, 3586:103-130

中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治 (2012) 日本産シマドジョウ属魚類の和名の提唱. 魚類学雑誌, 59(1): 86-95

中島 淳・内山りゅう (2017) 日本のドジョウ. 山と溪谷社, 東京, 233 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、徳島県立博物館魚類標本 (TKPM-P17347)  
(板井隆彦・北原佳郎・森口宏明)

# ホトケドジョウ *Lefua echigonia* Jordan & Richardson, 1907

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類(EN) / 西部 絶滅危惧 I B 類(EN) 中部・東部 絶滅危惧 IA 類(GR) 伊豆 絶滅 (EX) (要件-①②) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB 類(EN)]

## 1. 種の解説

全長約 8 cm のドジョウ科魚類。体は円筒状でやや細長く、背鰭はかなり後方につき、4 対のひげがある。体側には暗色の小斑点が散在する。中層や下層を遊泳することが多く、砂や泥にはあまり潜らない。繁殖期は春から初夏で、沈水植物や水に浸かった湿生植物の葉や茎に卵を産み付ける。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の東北地方から近畿地方に分布する。県内では高地を除き、西部の都田川、馬込川、天竜川、太田川、菊川、中部の萩間川、勝間田川、栃山川、瀬戸川、安倍川、巴川及び富士川（沼川を除く）、東部の沼川、狩野川水系黄瀬川、柿田川、源兵衛川、大場川、酒匂川水系の鮎沢川まで広く分布する。伊豆の狩野川水系深良流域の水路でも記録がある。

## 3. 生息環境

湧水や山地からの浸出水がある細流及び水田周りの用水路など緩やかな流れに生息する。砂礫底や砂泥底で沈水植物や岸際に湿生植物が繁茂するところを好む。冬期にはやや深場に移動する。本種の生息密度の高いところでは、他の魚種の生息は少ない。

## 4. 生息状況

大部分の生息地は孤立し、局所化している。とくに中部、東部で顕著で、既知の生息地の多くが失われた。西部では今回新たに確認された生息地もあったが、いずれの地点でも個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地の減少や孤立化は、工場・宅地などの用地開発 (23)、道路建設 (24)、圃場整備 (15-2) や、河川整備 (13) が原因と考えられる。生息環境の悪化は、細流の付け替えやコンクリート水路化 (15-2)、水田の管理放棄 (53) による荒地化や周辺水路の水枯れ、湧水や浸出水の枯渇、農薬や汚水の流入による水質の悪化 (32) が原因と考えられる。とくに道路建設に伴う複合的な土地整備・河川整備によって生息地の多くが消失し、わずかに残る生息地でも絶滅寸前に陥っている。また、観賞魚としての需要もあり、専門業者による捕獲圧 (41) にも警戒すべきである。

## 6. 保護対策

ビオトープや生息地造成による保全事例がある。掛川市では「掛川市自然環境の保全に関する条例」の「指定希少野生動植物種」に指定されており、捕獲などが原則禁止されている。

## 7. 特記事項

県内の事例からみて、本種の生息地は小規模な開発や整備でも容易に消失するため、事業規模によらず、開発や整備に際し現地調査によって生息地の有無や生息状況をよく把握し、保全に努める必要がある。

## 8. 主な文献

板井隆彦・杉浦正義・金川直幸 (1999) 静岡県の希少淡水魚ホトケドジョウ *Lefua costata echigonia* の生息地の現状. 環境システム研究, (6): 51-74

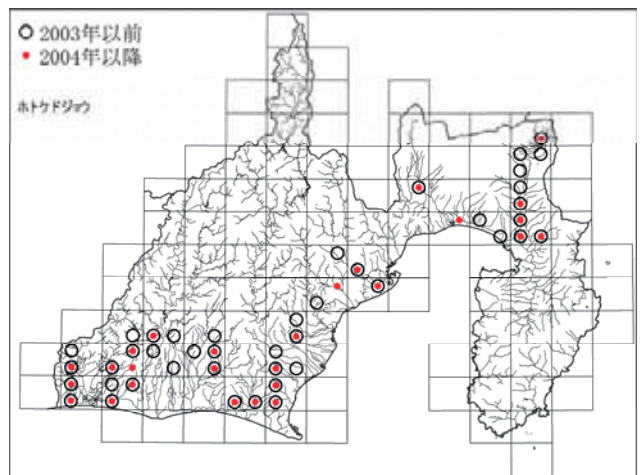
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦・森口宏明・小林正明)



安倍川水系 2013年9月10日 北原佳郎





## トウカイナガレホトケドジョウ *Lefua* sp. 2

(=2004年版のナガレホトケドジョウ)

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN)/ 西部 絶滅危惧 IB類(EN) (要件-①②) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧(NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN)]

### 1. 種の解説

全長約7cmのドジョウ科魚類。体は円筒状でやや細長い。4対のひげがある。ホトケドジョウに比べ、眼は上方につき、背鰭は後方に位置する。体色は淡く、体側の暗色の小斑点も淡く少ない。背鰭や尾鰭には明瞭な暗色斑紋がない。春から初夏に、淵などの岩の隙間に卵をばらまくように産卵する。

### 2. 分布

日本固有種で、分布域は愛知県矢作川水系以東から静岡県西部のごく一部地域に限られる。県内では西部の都田川水系(浜名湖流入河川を含む)、天竜川水系、太田川水系の3水系の河川だけでみられる。

### 3. 生息環境

標高があまり高くない山地の源流近くの浅い淵などのほか、水の潤れた沢の伏流水中にも生息する。生息河川ではその源流部の細流に限られ、それぞれの生息地は孤立している。他の魚は同所的にはほとんど住まない。川底の礫間や川岸の岩の隙間に潜み、幼魚は落葉、落枝が溜まった淵尻の岸寄りに多い。

### 4. 生息状況

生息域が河川の源流域にあり、詳しい生息状況は不明である。しかし、生息が確認された水系では、生息確認河川に隣接して多くの未確認河川があるものと思われる。水田その他の水路整備などに伴いカワムツなどの中型遊泳魚が侵入した河川では、本種の生息域は源流側に偏る。

### 5. 減少の主要因と脅威

分布域が東海地方の一部に限られるため、ごく局所的な生息地の消滅や個体数の減少でも種全体の存続への影響は大きい。すでに大部分の生息地は堰などで分断され孤立化しており(25)、いったん生息地が消失すれば、自然的に回復する可能性はない。生息地の減少や孤立化の原因として、ゴルフ場(21)や工場などの土地造成(23)、道路建設(24)、圃場整備(15-2)、森林の伐採(11)のほか、現在では逆に植林が放棄(54)され、その荒廃に伴う林床からの土砂流入と、浸出水の減少が重要な要因となっているところもある。また、観賞用に本種が大量に捕獲されているとの情報も寄せられている(41)。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

遺伝的にみると、西日本に分布するナガレホトケドジョウと差異がみとめられたほか、ホトケドジョウとかなり近い関係にあることが報告されている。

### 8. 主な文献

Miyazaki, J., M. Dobashi, T. Tamura, S. Beppu, T. Sakai, W. Mihara & K. Hosoya (2011) Parallel evolution in eight barbel loaches of the genus *Lefua* (Balitotolidae, Cypriniformes) revealed by mitochondrial and nuclear DNA phylogenesis. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 60: 416-427.

中島 淳・内山りゅう (2017) 日本のドジョウ. 山と溪谷社, 東京, 223pp.

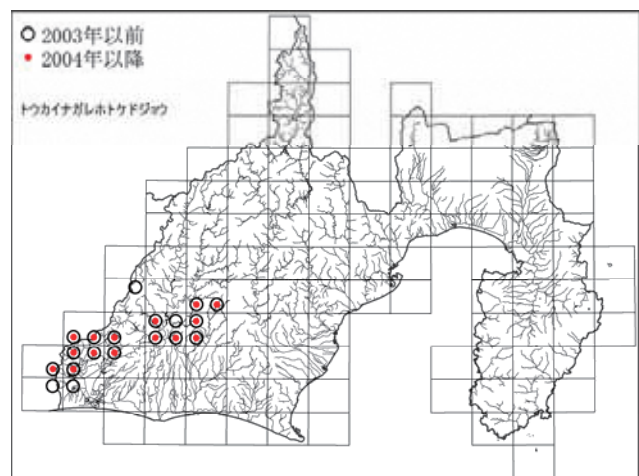
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、杉浦正義氏所蔵

(板井隆彦・北原佳郎・森口宏明)



浜松市天竜区 2003年 杉浦正義



# アカザ *Liobagrus reinii* Hilgendorf, 1878

アカザ科 Amblycipitidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) / 西部・中部 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

## 1. 種の解説

全長約 12 cm のアカザ科魚類。鱗を持たず、体側の側線は胸鰭上方にあるだけで不完全。体色は赤褐色のものが多いが、ときに暗褐色の個体もみられる。背鰭は前方につき、尾鰭の前に大きな脂鰭がある。尾鰭の後端は円い。背鰭と胸鰭の先端に毒腺のある棘をもつ。主に夜間に行動し、水生昆虫などを捕食して生活している。繁殖期は晩春から初夏で、浮石の下面などに寒天質にくるまれた卵塊を産み付け、オスが保護する。

## 2. 分布

日本固有種で、秋田県、宮城県以南の本州、四国、九州に分布する。県内では西部の都田川（浜名湖流入河川）から中部の瀬戸川水系まで自然分布する。なお、伊豆の河津川からも記録されているが、人為分布であることは明らかである。

## 3. 生息環境

河川の中流域上部から上流域下部にかけての瀬で、巨石の浮石のあるところに生息する。ごく若い個体は川岸の岩のくぼみや倒木などの陰にも潜む。

## 4. 生息状況

生息が確認されている水系の河川において、これまでも不在となった河川が増加していることが指摘されてきたが、今回記録されず、生息環境の変化からみて絶滅したと推測される河川が増加している。各生息地での生息数は調査時の捕獲状況からみてかなり減少していると判断される。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13) による河床・護岸のコンクリート化や流れの平坦化のほか、流域の林地、とくに植林地の荒廃 (53) による土砂流入で礫間隙が失われたことが挙げられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

河川の中・上流域に生息し、とくに支流でみつかることの多い魚で、水系や河川ごとにかなり遺伝的な隔離が進んでいると思われるため、遺伝的多様性に関する研究の進展が期待される。近年、ミトコンドリア DNA 解析によって、県内河川の一部で人為的に導入された個体群が存在することが示唆された。

## 8. 主な文献

Nakagawa, H., S. Seki, T. Ishikawa & K. Watanabe (2016) Genetic population structure of the Japanese torrent catfish *Liobagrus reinii* (Amblycipitidae) inferred from mitochondrial cytochrome *b* variations. *Ichthyological Research*, 63(3):333-346

中谷祐也・乾 隆帝・川岸基能・中島 淳・鬼倉徳雄 (2009) 筑後川水系小石原川におけるアカザの卵と初期発育. *水産増殖*, 57(2): 315-320

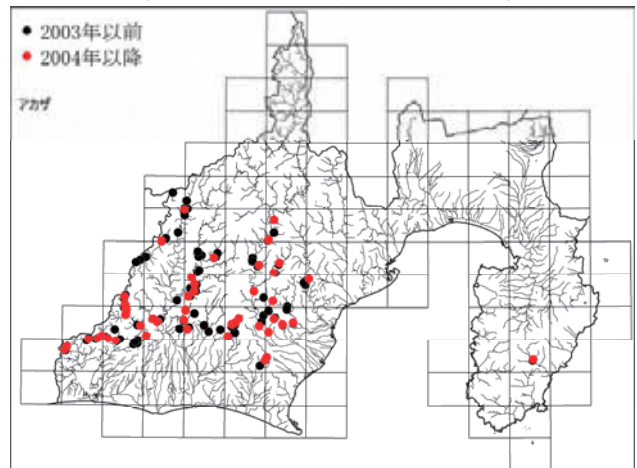
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、庄原市立比和自然科学博物館魚類資料 (HMNH-P 626)



©2019 Y.Kitahara

上：大井川水系 2015年8月5日 北原佳郎  
下：大井川水系 2015年8月5日 北原佳郎



(板井隆彦・金川直幸・北原佳郎)

## チワラスボ属の1種 B *Taenioides* sp. B (*sensu* Kurita & Yoshino, 2012)

(=2004年版のチワラスボ (一部))

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN)/ 西部 絶滅危惧IB類(EN) (要件②) 変更コード8

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧II類(VU): 環境省カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN) (チワラスボとして)]

### 1. 種の解説

全長約20~30cmのハゼ魚類。頭部にはしわ状の皮質の隆起があり、下顎から後方に伸びる隆起の後端は、眼付近から鰓蓋に向けて伸びる隆起の近くに達する。下顎に6本(3対)のひげ状の突起がある。頭部と腹面は暗赤~灰桃色、尾柄部は灰青~深紫色を帯びる。繁殖期は6~11月と考えられる。生活史の詳細は不明である。

### 2. 分布

国外ではインド~西太平洋に広く分布する。国内では神奈川県、静岡県、愛知県、和歌山県、岡山県、広島県、徳島県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県に分布するとされるが、本属の分類は混乱しており、標本に基づく慎重な検討が必要である。県内産の標本を精査した結果、西部の太田川、弁財天川、菊川で確認されている。

### 3. 生息環境

河口付近の干潮時に干潟ができるような場所に生息し、柔らかい泥から砂泥底中に生息する。

### 4. 生息状況

県内では西部の河口域が発達して柔らかい泥底が広範囲にみられる河川に生息する。チワラスボ属の1種Cと同所的にみられるが、個体数は本種のほうが少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削(13)や浚渫(14)、河口域の水門建設(25)による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

これまでチワラスボ *Taenioides cirratus* とされてきた種には、遺伝的・形態的に異なる4種(*T.* sp. A~D)の存在が報告されている。本種は *Taenioides snyderi* Jordan & Hubbs, 1925 である可能性があり、分類学的検討が進められている。

### 8. 主な文献

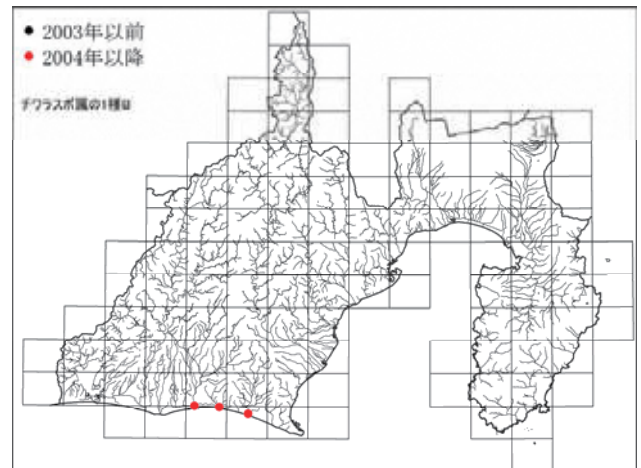
- 道津喜衛 (1958) アカウオ及びチワラスボの生態・幼期. 九州大学農学部学藝雑誌, 16(3): 371-380
- Kurita, T., & T. Yoshino (2012) Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taenioides* (Gobiidae: Amblyopinae), in Japan. *Zoological Science*, 29(8): 538-545
- Takagi, K. (1988) Cephalic sensory canal system of the goioid fishes of Japan: Comparative morphology with special reference to phylogenetic significance. *Journal of Tokyo University of Fisheries*, 75(2): 499-568

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40561)



太田川 2018年10月6日 北原佳郎



(渋川浩一・金川直幸・北原佳郎)



## チワラスボ属の1種C *Taenioides* sp. C (*sensu* Kurita & Yoshino, 2012)

(=2004年版のチワラスボ(一部))

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN)/西部・中部・伊豆: 絶滅危惧IB類(EN) (要件-②) 変更コード8

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧II類(VU): 環境省カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN) (チワラスボとして)]

### 1. 種の解説

全長約20~30cmのハゼ科魚類。チワラスボ属の1種Bに酷似し、頭部には、しわ状の皮質の隆起がみられるが、下顎から後方に伸びる隆起の後端は、眼の付近から鰓蓋に向けて伸びる隆起の近くには達しない。下顎に7本(3対+不對1本)のひげ状の突起がある。背面は黒褐色で側面は金属光沢を帯びた黄褐色、下面はやや赤みを帯びる。中部の河川で11月に全長2~4cmの幼魚が採集されていることから、繁殖期は夏と思われる。河口では幼魚から成魚が周年みられる。

### 2. 分布

国外ではインド~西太平洋に広く分布する。国内の分布状況はチワラスボ属の1種Bの項を参照。県内産の標本を精査した結果、西部の天竜川、太田川、弁財天川、菊川、中部の勝間田川、坂口谷川、小坂川、巴川、伊豆の青野川で確認されている。

### 3. 生息環境

河口付近の干潮時に干潟ができるような場所で、重さ約2.3kgのコーンペトロメーターが自重で約30~60cm沈み込むような柔らかい泥から砂泥底中に生息する。周辺にはカキ殻があることが多い。

### 4. 生息状況

県内では西部から中部の河口域が発達した河川に生息する。柔らかい泥底の環境が広範囲にみられる西部の太田川、菊川、中部の勝間田川と坂口谷川では、比較的採集個体数が多い。

### 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削(13)や浚渫(14)、河口域の水門建設(25)による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。中部の勝間田川では、水門が本種の生息地である干潟を回避して作られた。しかし施工中に滞筋が変化し、出水時に生息地の泥底が一部流出した。

### 6. 保護対策

現在計画中的の坂口谷川の水門工事では、干潟の泥の流出を抑制するため、左岸・中央・右岸側と三分割して建設工事が行われている。

### 7. 特記事項

これまでチワラスボ *Taenioides cirratus* とされてきた種には、遺伝的・形態的に異なる4種(*T. sp. A~D*)の存在が報告されている。県内では *T. sp. B* と *T. sp. C* が確認されており、多くは後者である。本種は *Taenioides gracilis* (Valenciennes *in* Cuvier & Valenciennes, 1837) である可能性があり、分類学的検討が進められている。

### 8. 主な文献

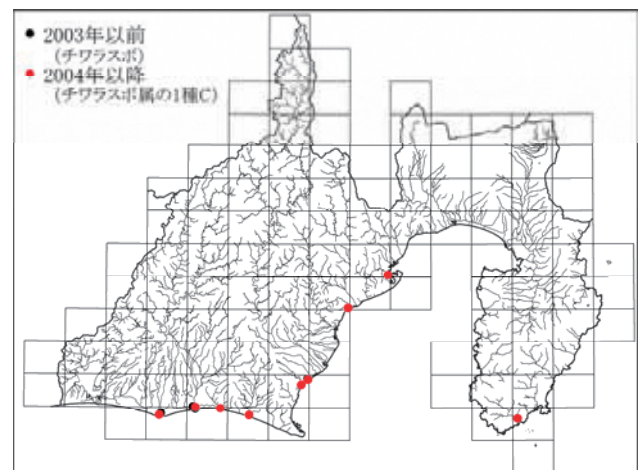
Kurita, T. & T. Yoshino (2012) Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taenioides* (Gobiidae: Amblyopinae), in Japan. *Zoological Science*, 29(8): 538-545

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3284, 40562, 40683, 40684~40686, 40769, 43478)  
(金川直幸・渋川浩一・北原佳郎)



小坂川 2016年8月18日 北原佳郎



# イシカワシラウオ *Salangichthys ishikawae* Wakiya & Takahasi, 1913

シラウオ科 Salangidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部・中部 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 7 cm のシラウオ科魚類。体はほぼ透明で細長く、頭部はやや縦扁する。尾鰭は透明で黒色斑は存在せず、尾鰭基底の上下には輪郭が明瞭な小さい黒色斑紋がある。成熟するとオスは臀鰭がその基底とともに伸長し、基底に 23~29 枚の鱗をもつ。周縁魚であり、繁殖期は 1 月下旬から 5 月で、天竜川河口周辺では主に 3 月頃と考えられる。岩礁域にある水深約 5 m の砂底で産卵する。寿命は 1 年。

## 2. 分布

日本固有種で、青森県から和歌山県にかけての本州太平洋岸に分布する。県内では天竜川を中心とする浜名湖(湖内を含む)から菊川河口付近までの遠州灘、大井川を中心とする大井川河口西岸から興津川河口付近までの駿河湾西岸に分布する。

## 3. 生息環境

河口付近にある沿岸の砂浜浅海域に生息するが、天竜川では夏期に未成魚が河口周辺の汽水域へ進入する。海水温の高い水域では浸透圧調節能が増大し、低塩分濃度の水域でも生活可能となり、海水温の上昇時に水温の低い河川内に進入すると推測される。

## 4. 生息状況

県内の主な個体群は、天竜川河口沿岸と大井川河口沿岸の個体群と考えられる。大井川河口沿岸の個体群は天竜川沿岸に比べて個体群サイズ・体サイズともに小さい。

## 5. 減少の主要因と脅威

天竜川河口域では 1980 年代から漁獲が減少し、この原因は不明である(99)。繁殖期直前まで漁獲されており(41)、漁獲圧が関与している可能性がある。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。繁殖期前の漁期の短縮などが有効な保護対策と思われる。

## 7. 特記事項

本種は、シラウオよりもひとまわり小型ではあるが、比較的高価で流通している。天竜川河口沿岸、大井川河口沿岸で小規模な漁業が行われているが、ここ 30 年間で専門の漁船が減少している。

## 8. 主な文献

- 板井隆彦・金川直幸・影山佳之(1989) イシカワシラウオ *Salangichthys ishikawae* WAKIYA et TAKAHASI の天竜川河口域への溯上に関する研究(予報). 静岡県立大学生活科学研究センター年報, 2: 37-42  
板井隆彦・金川直幸・影山佳之(1990) 同Ⅱ, 同, 3: 5-14  
板井隆彦・金川直幸・影山佳之(1991) 同Ⅲ, 同, 4: 5-14  
沖山宗雄(1994) イシカワシラウオ. 水産庁編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(1), pp. 169-177. 日本水産資源保護協会, 東京.

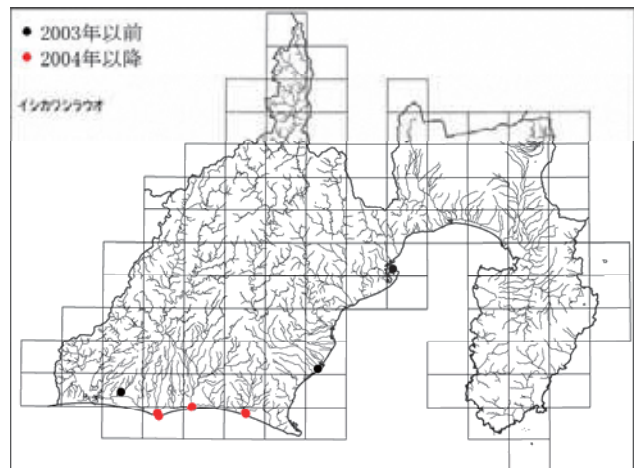
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料(SPMN-PI 40770~40772)、横須賀市自然博物館魚類資料(YCM-P 17003)

(板井隆彦・金川直幸)



天竜川河口付近沿岸 2018年2月8日 北原佳郎  
上:メス 下:オス



# アマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan & McGregor, 1925

(=サツキマス)

サケ科 Salmonidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部・中部・東部・伊豆 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-④) 変更コード7

[2004年版カテゴリー 要注目種 分布上注目種等(N-II) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

サケ科魚類のヤマメ *O. masou* の亜種。河川残留個体では体側中央に小判型のパーマークを7~9個もつ。その上方に大きな黒色斑紋をもつ個体もある。体側には小さな朱点があり、ヤマメとの区別点とされる。河川での成長の程度に依存するが、1~2年を河川で過ごした後、一部の個体は11~12月に降海し、4~5月にサツキマスとして溯上する。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州の神奈川県酒匂川以西の太平洋側、瀬戸内海、四国、九州の大分県まで分布する。県内では、小河川を除きほぼ全域の河川で見られる。都田川など本来は生息していなかった河川にも移殖され定着している。

## 3. 生息環境

夏の水温が20℃を超えないような冷水域に生息する。河川改修や土砂流入によって河床に砂礫が堆積し河床の変化の乏しくなった流域や、河畔林が消滅している流域の生息数は少なく、成長も遅い。

## 4. 生息状況

中規模以上の水系の本支川の上流域に生息する。上流側の分布限界は、伊豆半島では標高600m付近、本州側では1,000m付近と考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

山地渓流域での利水、砂防、ダム建設(25)によって垂直的な連続性が絶たれ、稚魚期や出水時の流下とその再溯上、繁殖のための移動、海との通し回遊が阻害されている。さらに、他産地の個体が移殖され、遺伝的な攪乱(57-1)が生じている。

## 6. 保護対策

一部の河川で禁漁区間が設定されているが、他に特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

近年、移殖によって在来群がほとんど確認できなくなっているが、在来群では川ごとに異なる遺伝子組成を持ち、パーマークの形状やその上方の黒色斑の存在でも地域性がある。伊豆半島の個体群のパーマークは形状が丸く、他地域の個体群に比べ特徴がある。また、ヤマメの生息水系である酒匂川のうち、静岡県側から流入する鮎沢川はアマゴの生息域とされている。しかし、鮎沢川流域などではヤマメが自然分布する可能性があるため、現在、東部から伊豆の河川に生息する個体の遺伝的な解析がすすめられている。

## 8. 主な文献

川嶋尚正(2014) 静岡県の在来アマゴに見られた地域変異. 日本生物地理学会会報, 60: 11-21

川嶋尚正(2015) 静岡県に生息するアマゴの形質と遺伝構造. 神奈川工科大学環境化学研究所研究成果報告書(別冊), 6: 15-18

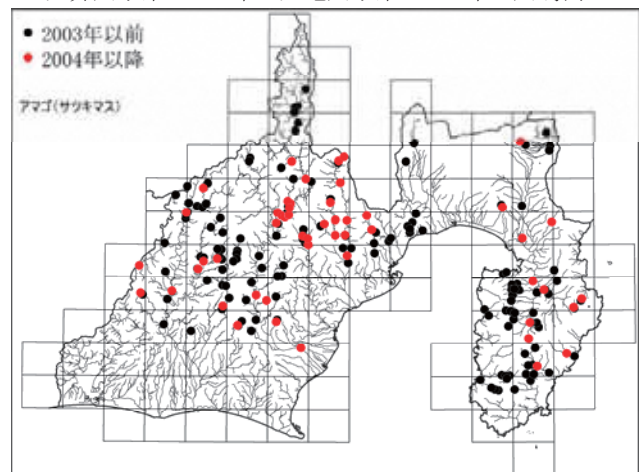
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料(SPMN-PI)

(川嶋尚正・板井隆彦)



上から狩野川水系 2006年 富士川水系 2006年  
大井川水系 2009年 天竜川水系 2008年 川嶋尚正





# ミナミメダカ *Oryzias latipes* (Temminck & Schlegel, 1846)

(=2004年版のメダカ)

サケ科 Salmonidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部 準絶滅危惧(NT) 中部・東部・伊豆 絶滅危惧ⅠA類(CR)

(要件①②) 変更なし [2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

全長約4 cmのメダカ科魚類。背中線に沿って黒条がある。背鰭は後方につく。オスでは背鰭の後端には大きい切れ込みがあり、臀鰭は幅広い。繁殖期は春から秋にわたる。受精卵はしばらくメスの肛門付近に塊状についているが、やがて水草などに産み付けられる。

## 2. 分布

日本固有種で、日本海側では京都府以西、太平洋側では岩手県以西の本州、四国、九州、琉球列島などに分布する。県内では、ほぼ全域の平野部に分布する。

## 3. 生息環境

平野部の水田や周辺の農業水路など、河川下流、池沼や湿地などの水生植物群落周りに広く生息する。

## 4. 生息状況

西部では生息地が連続的にみられるが、中部及び東部と伊豆では著しく局限化し孤立している。また、中部の巴川水系のように一度絶滅した後に他産地産が移殖されたり、沼川流域の浮島沼のようにカダヤシとほぼ置き換わった例など、在来個体群の存続が危機的な状況にある。伊豆では南伊豆や西伊豆の数河川に飛び地的にみられるが、以前の調査では未記録のところからも得られており、一部あるいは全部について移殖の可能性も否定できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

圃場整備(15-2)に伴う水路のコンクリート化による生息環境の消失、水質の汚濁などが原因と考えられる。中部・東部では、カダヤシによる競争(56-1)や孵化仔魚の捕食(52-3)も原因として挙げられる。また、静岡市内の安倍川や巴川水系で確認されている個体の一部は県内他産地の遺伝子の侵入(57-1)が示唆されている。

## 6. 保護対策

静岡市内の個体群について、地元団体によって市施設の敷地内にある池への保護移殖が行われた。このような活動では、その後の管理も重要である。また、本種との競争が問題となるカダヤシについては、分布拡大の監視とともに、地方公共団体や市民が協働して駆除していく必要がある。

## 7. 特記事項

これまで、メダカ1種として扱われていたが、遺伝的に別種レベルに分化した「北日本集団」と「南日本集団」の存在が知られていた。近年、形態的差異から2種に分離され、学名の確定及び和名の提唱がなされ、「北日本集団」に相当するものはキタノメダカ *Oryzias sakaizumii* となった。

## 8. 主な文献

- Asai, T., H. Senou & K. Hosoya (2011) *Oryzias sakaizumii*, a new ricefish from northern Japan (Teleostei: Adrianichthyidae). *Ichthyological Exploration of Freshwaters*, 22(49): 289-299
- 小林正明 (1998) 再発見された静岡市産メダカの静岡市中島浄水場における保護. *ざこ*, (14): 41-43
- 酒泉 満 (1990) 遺伝学的にみたメダカの種と種内変異. 江上信雄・山上健次郎・嶋 昭紘 編, *メダカの生物学*. pp. 143-161. 東京大学出版会, 東京.

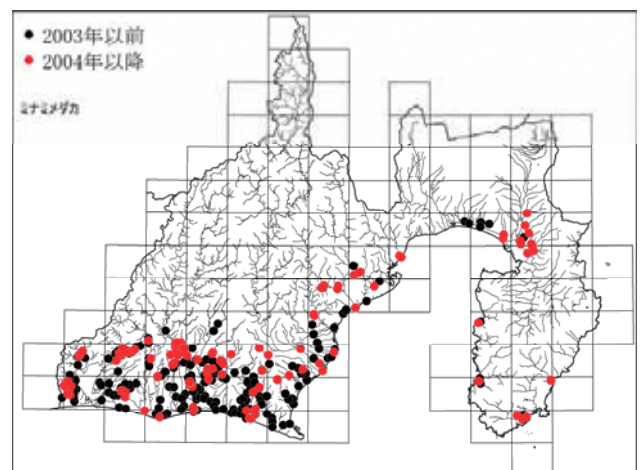
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 000001~001539, 700032~700063, 3213)

(板井隆彦)



安倍川水系 2013年9月10日 北原佳郎



# アユカケ *Cottus kazika* Jordan & Starks, 1904

(=カマキリ)

カジカ科 Cottidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部・中部・東部・伊豆 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件②) 変更コード9

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧(NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

全長約 30 cm のカジカ科魚類。頭部が大きく鰓蓋の後縁に 4 本の上向きの棘がある。体色は灰褐色で、背から体側にかけて 4 個の黒褐色の斑紋がある。川底に潜み底生動物や魚類を捕食して生活し、生長すると魚類をほぼ専食するようになる。降河回遊魚で、晩秋から冬期に川を下り、河口や河口付近の海域沿岸の巨礫の下面などに産卵し、オスが保護する。初春に稚魚またはごく若い未成魚となって川に入る。



都田川水系 1992年9月 小杉正則

## 2. 分布

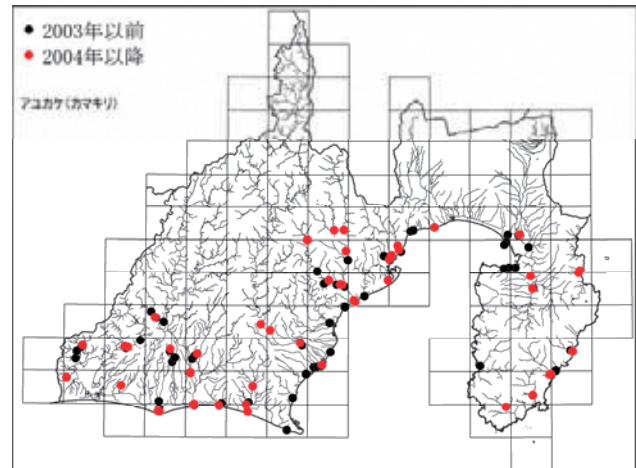
日本固有種で、福島県以北の太平洋側を除く本州、四国、九州に分布する。県内では浜名湖流入河川から伊豆半島まで東西に広く分布する。個体数が比較的多いのは、西部では都田川、天竜川及び支川阿多古川、太田川、中部では大井川、安倍川及び支川藁科川、興津川、東部では狩野川下流域、伊豆では狩野川中流域、仁科川、河津川である。

## 3. 生息環境

河口付近から中流域にかけて生息し、成魚は夏期には中流域に多い。礫底に生息し、瀬や淵の浮石の間や載石の陰に潜む。湖上力があまり大きくはなく、堰堤などの落差があるところは越えられない。

## 4. 生息状況

県内の分布河川は多いが、分布域の縮小、河床間隙に富んだ生息適地の減少、繁殖地である河口周辺の環境悪化によって、多くの河川で生息数が減少している。弁財天川や沼川など生息適地がほとんどない川では、定着しているかどうかは明らかでない。



## 5. 減少の主要因と脅威

中・下流域に堰 (25) が存在すると、魚道が設置されていても湖上を阻害されやすく、その上流にはみられなくなる。天竜川、大井川、富士川、仁科川などでは最下流のダムや堰が分布上流端となり、本来の生息域が狭められている。河川整備 (13)、ダムや堰での取水による流量減少 (25) に伴って淵や早瀬の形成が阻害され、河床の浮石空間が減少・悪化して生息場所が大きく失われた河川も多い。また、河口や沿岸域における整備や浚渫 (14) による繁殖環境の悪化や消失も減少要因となっている。

## 6. 保護対策

狩野川では、沼津港の整備に伴う河口の改修に際して、本種の産卵場所の造成が行われたことがある。

## 7. 特記事項

20 世紀前半の学術的な文献(Jordan *et al.*, 1913)ではカマキリの和名があげられているが、県内ではアイカケ、アイカギ、アユカケなどの方が多い用いられているため、アユカケ (カマキリ) と表記した。

## 8. 主な文献

Jordan, D. S., S. Tanaka & J. O. Snyder (1913) A Catalogue of the Fishes of Japan. *Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University*, 33(1): 1-497

杉本 剛士 (1995) カマキリ. 水産庁 編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅱ), pp. 370-375. 日本水産資源保護協会, 東京.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 49776)

(板井隆彦)

# ウツセミカジカ *Cottus reinii* Hilgendorf, 1879

(=カジカ小卵型)

カジカ科 Cottidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部・東部・伊豆 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 中部 絶滅危惧ⅠA類(CR)

(要件②) 変更コード9 [2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN)]

## 1. 種の解説

全長約 18 cm のカジカ科魚類。体色は淡褐～濃褐色で、背から体側にかけて暗色の斑紋が約 4 個ある。鱗はなく、側線は完全。胸鰭条数は 15～17 本。水生昆虫などの底生動物を専食する。両側回遊性の底生魚で、晩冬に繁殖を行い、川底の浮石や載石の裏に卵(卵径約 2 mm)を塊状に産卵し、オスが卵を守る。狩野川では中流域(河川形態 Bb 型)から下流域上部(Bb-Bc 移行型)の瀬で繁殖する。早春に海から川へ溯上する。満 3 歳で成熟する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州から四国に分布する。県内では、西部の都田川、天竜川、太田川、東大谷川、菊川、中部の大井川、安倍川水系藁科川、浜川、興津川、富士川、東部の沼川、東部から伊豆にかけての狩野川、伊豆の河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

主に下流域上部から中流域下部にかけての浮石や載石のある礫底に生息する。成長した個体は中流域の急流中でもみられるが、未成魚は緩流部に多い。

## 4. 生息状況

県内での主な生息河川は、西部の都田川、天竜川、東部・伊豆の狩野川で、水系内の生息域も広く、本川だけでなく支川にも生息する。しかし、天竜川では中流域下部に船明ダムが建設されて以来、ダム上流の生息地が失われた。同様のことは都田川の本支川でも生じている。また、狩野川の本川では、下流側の生息範囲が狭まっている。その他の河川では生息密度が低く、河口近くで溯上期のごく若い未成魚が確認される程度である。まれに成長した個体が見られることもあるが、個体数はごく少ない。ただし、中部の興津川のように個体数が少なくても、断続的に確認されている河川もある。確認河川の繁殖・定着の有無を明らかにするための調査も必要である。

## 5. 減少の主要因と脅威

下流域から中流域にかけてのダム建設による生息域の分断(25)、護岸整備(13)や浚渫(14)に伴う瀬の消失や減少、水質悪化に伴う生息環境の悪化が主な原因となっていると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

本種と琵琶湖産のウツセミカジカとの種の異同については諸説があり、まだ解決されていない。

## 8. 主な文献

福井謙太郎・藤井亮吏・田原大輔・早川洋一・古屋康則(2007)飼育下におけるカジカ(小卵型)の生殖腺組織及び血中ホルモン濃度の周年変化. 魚類学雑誌, 54(2): 173-1286

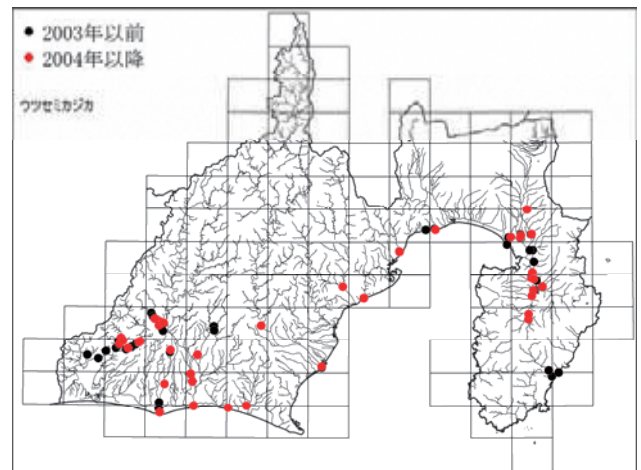
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料(SPMN-PI 40775)

(板井隆彦)



安倍川水系 2015年11月30日 北原佳郎





# ヒモハゼ *Eutaeniichthys gilli* Jordan & Snyder, 1901

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) / 西部・伊豆 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

全長約 6 cm のハゼ科魚類。体は細長く、やや側扁した円筒形。頭は小さく、吻は上唇を被う。通常、体側に 1 本の黒色縦帯がある。福岡県での繁殖期は 5～8 月で、河口干潟にあるアナジャコやスナモグリ類の巣孔を産卵室として利用する。産卵室は泥底表面から 10～15 cm の深さの箇所につくられ、壁面に産卵する。産卵後約 8 日で孵化する。寿命は満 2 歳。生後満 1 歳 (全長 3.5 cm) で成熟する。

## 2. 分布

国外では、朝鮮半島、渤海、黄海、国内では青森県の太平洋及び日本海側から九州、瀬戸内海沿岸、対馬、五島列島に分布する。県内では西部の浜名湖、馬込川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、伊豆の青野川で確認されている。

## 3. 生息環境

河川河口域や周辺の干潟に生息する。主に砂泥底にみられ、カキ殻のある場所にも多い。干潮時にアナジャコやスナモグリ類の巣孔を利用する。

## 4. 生息状況

県内では河口域の発達した河川の汽水域で確認されている。西部の浜名湖、太田川、菊川では比較的個体数が多いが、その他の河川での生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削や浚渫 (13)、干潟域の埋め立て (14)、河口域の水門建設 (25) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

奄美大島と西表島には、本種と遺伝的・形態的に異なる同属の未記載種が存在することが報告されており、現在、分類学的検討が進められている。

## 8. 主な文献

道津喜衛 (1955) ヒモハゼの生活史. 日本生物地理学会会報, 16-19: 338-344

江口勝久・乾 隆帝・中島 淳・鬼倉徳雄・及川 信 (2008) 九州におけるヒモハゼの分布の現状. 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌, 63(1): 27-33

邊見由美・岩田洋輔・伊谷 行 (2014) ヒモハゼとクボハゼによる干潮時のヨコヤアナジャコの巣穴利用. 日本ベントス学会誌, 69: 69-75

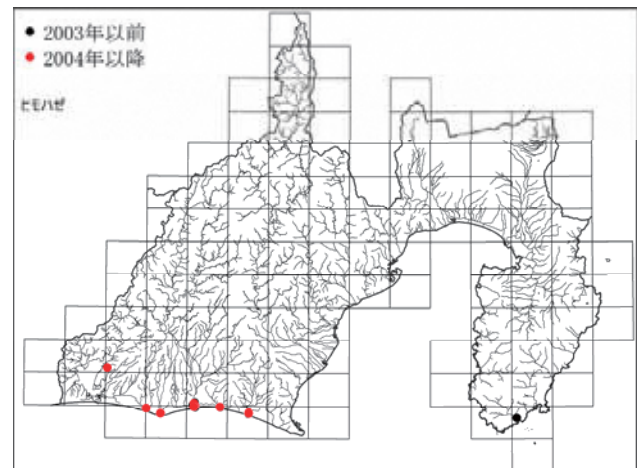
Mukai, T., T. Suzuki & M. Nishida (2003) Genetic differentiation of the brackish water goby, *Eutaeniichthys gilli* (Perciformes, Gobiidae), between the Japanese and the Ryukyu Archipelagos. *Biogeography*, 5: 49-53

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40768)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI12240)



浜名湖 2016年10月19日 渋川浩一



(渋川浩一・板井隆彦・北原佳郎)

## カジカ *Cottus pollux* Günther, 1873

カジカ科 Cottidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) / 西部 絶滅危惧 IB 類 (EN) 中部 絶滅危惧 I A 類 (CR) 東部 絶滅危惧 II 類 (VU) 伊豆 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

### 1. 種の解説

全長約 15 cm のカジカ科魚類。体色は濃褐～淡褐色までさまざまである。背部に暗色の斑紋が 3～4 個ある。前鰓蓋骨後縁に 1 本の棘がある。胸鰭条数は 12～14 本。主に水生昆虫の幼虫などを食べて生活するが、ときに小型魚類も捕食する。繁殖期は 2 月末から 4 月頃で、瀬の巨礫の下面に産卵し、オスが卵塊をまもる。卵サイズは大きく (直径 2.6～3.7 mm)、孵化した仔魚はそのまま河川に留まる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州のほぼ全域、九州北部に分布する。県内では比較的大きな水系に分布する。西部の天竜川水系気田川より上流の支川、中部の大井川及び安倍川の上流の支川、興津川、富士川水系、東部の酒匂川水系、東部・伊豆の狩野川水系に分布する。

### 3. 生息環境

主に河川上流域下部の清澄な冷水の流れに生息する。大型個体は瀬の巨礫の間隙、小型個体は瀬の川岸や淵の礫間や落葉落枝の中でみられる。

### 4. 生息状況

西部の天竜川水系、東部・伊豆の狩野川水系では確認地点は多いが、個体数の減少傾向がある。中部の大井川水系及び安倍川水系では確認河川はそれぞれ 1 支川だけとなり、個体数も著しく少ない。中部・東部の富士川水系では、芝川など支川では広域にみられるものの、沼川などの支川では確認は限定的である。東部の酒匂川水系では、土砂災害やその復旧工事、圃場整備工事などによって整備を受けて生息確認できなかったところもあるが、生息確認できた 1 河川では多数の個体を確認した。

### 5. 減少の主要因と脅威

道路事業などに伴う河川整備 (24)、森林の荒廃による林床の裸出 (53) に伴う土砂流入による瀬の礫底の間隙が埋められるなど生息環境の悪化が原因と考えられる。また、河川横断工作物 (25) による生息環境の悪化や連続性の遮断などの影響も大きい。大井川や安倍川ではダムや砂防ダムが連続するため自然的な回復は困難であり、水系から絶滅する可能性がきわめて高い。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

中部の興津川の個体群は、河川規模や分布状況から移殖の可能性がある。現在、分布や遺伝的な検討が進められている。

### 8. 主な文献

秋山信彦・北野 忠・板井 隆彦 (1996) 堰堤が魚類の遡上に与える影響—静岡県興津側での調査—。神奈川県自然保全研究会報告書, 14: 1-7

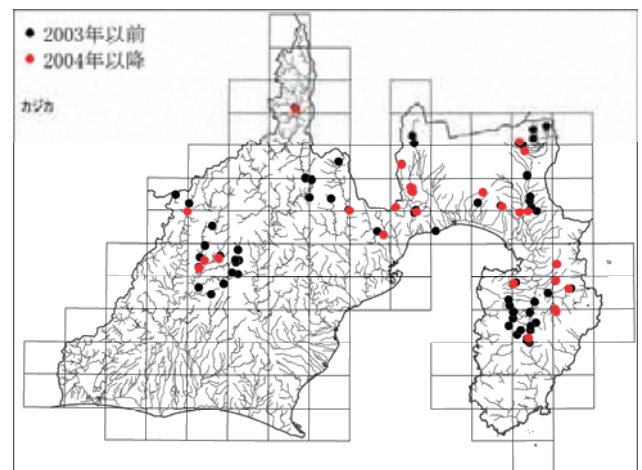
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦・小林正明)



安倍川水系 2017 年 10 月 5 日 北原佳郎



### 1. 種の解説

全長約 5 cm のハゼ科魚類。頭部はやや縦扁し、体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁下よりも後方に達する。体側に数本の不明瞭な暗色横斑がある。繁殖期は 3~5 月で、繁殖場所は、成魚の生息域に存在するアナジャコ類などの生息孔を利用すると考えられている。4 月下旬~5 月下旬に河口域などで仔稚魚が採集される。生後約 1 年で成熟する (全長 3.5~3.9 cm)。

### 2. 分布

国外ではロシア沿海州、渤海、黄海、国内では宮城県から宮崎県にかけての太平洋、兵庫県の日本海、兵庫県から大分県までの瀬戸内海、有明海に面した地域に分布する。県内では西部の浜名湖、佐鳴湖、新川、太田川、菊川で確認されている。

### 3. 生息環境

河口干潟の泥底から砂泥底のところを生息し、アナジャコ類などの巣孔を利用する。河口干潟のうちでも海側の塩分が高い場所を好む。

### 4. 生息状況

西部の浜名湖と佐鳴湖では生息密度が比較的高い。佐鳴湖では 6 月頃に表層でのイサザアミ採集の際、稚魚が大量に混獲される。

### 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削や浚渫 (13)、干潟域の埋め立て (14)、河口域の水門建設 (25) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

本種は、ウキゴリ属 *Gymnogobius* のタイプ種 (属の基準となる種) に該当する。

### 8. 主な文献

Eguchi, K., R. Inui, J. Nakajima, T. Nishida, N. Onikura & S. Oikawa (2007) Geographical distribution of two endangered goby species, *Gymnogobius uchidai* and *G. macrognathos* (Perciformes, Gobiidae), in the Kyushu Islands, Japan. *Biogeography*, 9: 41-47

金川直幸・森口宏明・北原佳郎・渋川浩一 (2018) 菊川水系感潮域の魚類相 (予報). 東海自然誌, (11): 21-43

加納光樹・小池 哲・渋川浩一・河野 博 (1999) 東京湾の河口干潟で採集されたチクゼンハゼとエドハゼの仔稚魚. うみ, 37: 59-68

北野 忠 (2009) 東海地方における河口干潟の底質環境とウキゴリ属魚類の生息状況との関わり. 東海大学教養学部紀要, 40: 411-413

Stevenson, D. E. (2002) Systematics and distribution of fishes of the Asian goby genera *Chaenogobius* and *Gymnogobius* (Osteichthyes : Perciformes : Gobiidae), with the description of a new species. *Species Diversity*, 7(6): 251-312

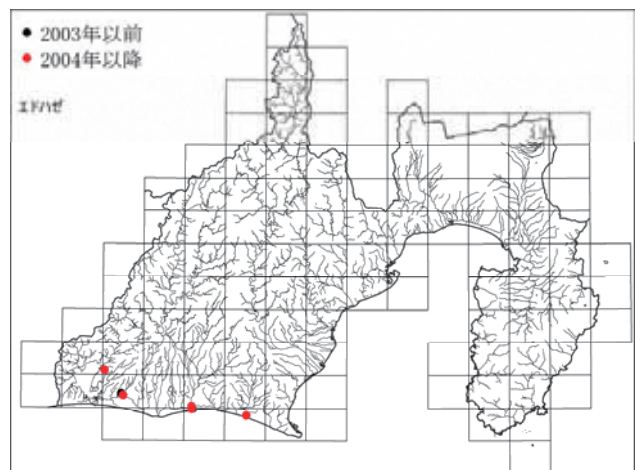
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40618~40620)

(渋川浩一・板井隆彦・金川直幸・北原佳郎)



浜名湖 2015年12月8日 渋川浩一





## アブラボテ *Tanakia limbata* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー DD / 西部 情報不足 (DD) (要件-a) 変更コード 9

[2004年版カテゴリー 要注目種 現状不明 (N-I) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

### 1. 種の解説

全長約 7 cm のコイ科魚類。ヤリタナゴに似るが体色は暗濃褐色で、体側に縦条がない。婚姻色を帯びたオスの臀鰭には帯状の彩りがあり、その基部は暗色、中程は橙色、縁辺は黒色である。繁殖期は 4~8 月で、マツカサガイなどの二枚貝に産卵する。県内での生態は不明である。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、国内では濃尾平野以西の本州、四国、九州に分布する。県内では西部の馬込川水系及び都田川水系から記録されている。ただし、自然分布域から外れていること、分布河川が限られていることから、移殖の可能性も捨てられない。

### 3. 生息環境

山際近くの小流や灌漑用排水路などの川水がある程度きれいで、やや流れがあるところに生息する。また、繁殖のためにマツカサガイなどの二枚貝が生息することも必要である。

### 4. 生息状況

1980年代までは現浜松市の馬込川水系御陣屋川と都田川水系新川の佐鳴湖に流入する支流の 2ヶ所の生息地が知られていた。前所は河川整備によって 1980年代末に消滅した。後所は宅地開発に伴う河川整備後に人工的な湿地環境が整備されたものの、生息環境は不適なものとなった。この人工水域に現在もわずかに生息が確認できるようである。また、都田川水系新川の小流では、比較的新しい採集記録があるが、本調査では確認できなかった。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川整備による生息地の分断と生息環境の悪化や消失 (13) が原因となったと考えられる。

### 6. 保護対策

新川支流では、河川整備の実施に際して、新たな生息地の造成などが試みられ、地元の自然愛護団体が保護活動を続けていたが、生息環境の悪化を食い止められなかったようである。

### 7. 特記事項

環境省レッドデータブック (2014) では、都田川本川に流出する水路での記録によって自然分布を都田川以西としているが (河村私信)、馬込川水系については触れられていない。新川小流の個体群は、地元の愛護団体によって個体群維持のため何度か移殖されており、以前みられた系統が残されているか不明である。

### 8. 主な文献

中村孝市 (1993) 佐鳴湖西岸, 根川の魚類. 遠州の自然, (16): 33-37

河村功一 (2015) アブラボテ. 環境省 編, レッドデータブック 2014, 一日本の絶滅のおそれのある野生生物— 4 汽水・淡水魚類, p. 345. ぎょうせい, 東京.

木村昭一 (1996) 東海地方の淡水貝類相. 全国高等学校水産教育研究会 編, 全国高等学校水産教育研究会研究彙報, pp. 14-34. 愛知県立三谷水産高等学校内全国高等学校水産教育研究会, 蒲郡.

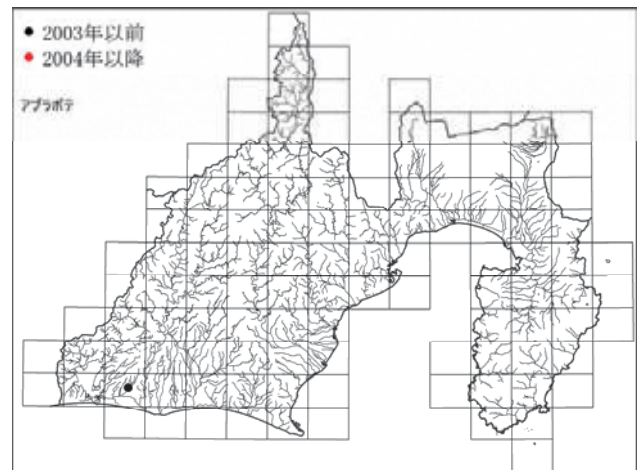
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 43802)

(板井隆彦)



都田川水系 1987年12月27日 小杉正則



# ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor, 1842)

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) / 西部・中部・東部・伊豆 情報不足(DD) (要件-a) 変更コード7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm のドジョウ科魚類。口ひげは 5 対あり、体型は円筒形で細長い。体色は橙褐色でやや緑色を帯び、背側は濃く、腹側はごく淡い。また、体側に不明瞭な暗色斑点がある。底泥に付着する微小藻類や底に溜まった有機物の半分解物などを摂食する。繁殖期は春から初夏にかけてで、水中の植物などに卵を付着させ、あるいは泥底の上にはばらまく。水田では、水入れ直後に進入し、産卵する様子がみられる。

## 2. 分布

国外ではアムール川から中国、台湾を経てベトナムまで、国内では北海道から琉球列島まで広く分布する。県内では高山地域を除くほぼ全域で広く確認されている。しかし、伊豆では南部の数河川でみられる程度で、伊豆半島東部ではほとんど確認されない。

## 3. 生息環境

主に緩流や止水の泥底に生息する。水田や周辺の用排水路に多く、それに続く河川や池沼でもみられる。

## 4. 生息状況

広域に生息する種であり、これまで普通種として扱われてきたため、生息地や生息密度の変化について詳細には把握できていない。しかし、整備が進んだ都市周辺では、生息場所が失われたり、悪化して、生息がみられなくなったり、生息数が著しく減少したところもみられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

宅地の開発や圃場の整備(15-2)に伴う河川の3面コンクリート水路化や落差工による不連続化が水田周辺の用排水路で広く進められたことが大きい。また、外来種のカラドジョウとの競争(56-1)も原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

西部の天竜川水系と太田川水系では、食用や釣り餌用に輸入・販売由来と思われる、日本産と遺伝的に異なる中国産のドジョウが野外で確認されている。また、カラドジョウの分布拡大にも注意が必要である。

## 8. 主な文献

小出水規行・竹村武士・渡部恵司・森 淳 (2009) ミトコンドリア DNA によるドジョウの遺伝子特性一チトクローム *b* 遺伝子の塩基配列による系統解析一. 農業農村工学論文集, 77(1): 7-16

中島 淳・内山りゅう (2017) 日本のドジョウ. 山と溪谷社, 東京, 223 pp.

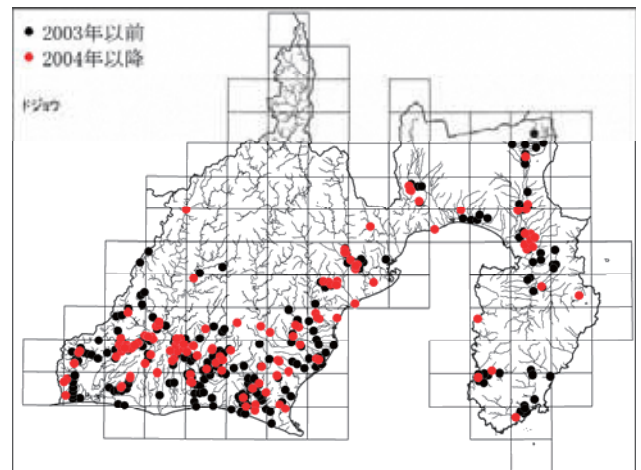
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦)



太田川水系 2017年7月7日 北原佳郎



## クルマサヨリ *Hyporhamphus intermedius* (Cantor, 1842)

サヨリ科 Hemiramphidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD)/ 西部 情報不足(DD) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー情報不足(DD): 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

### 1. 種の解説

全長約 20 cm のサヨリ科魚類。体は細長い。下顎が嘴状に伸長し頭長より長く、下顎下面は黒い。一般に繁殖期は 4 月下旬から 8 月上旬で、アマモ場などの海藻やヨシなどからなる抽水植物帯に産卵し、生後 1 年で斃死する。表層を泳ぎ、カイアシ類やミジンコ類などの動物プランクトンを摂餌する。県内における生態の詳細は不明である。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島南部から黄海、東シナ海、南シナ海を経てベトナムまで、国内では青森県以南の本州、北九州に分布する。県内では西部の浜名湖、その流入河川の都田川河口及び佐鳴湖で確認されている。

### 3. 生息環境

海水の影響を受ける湖沼や河口域が発達した比較的大きな河川の河口の汽水域に生息する。浜名湖内ではアマモ場で見つかることが多いようで、仔稚魚はアマモ場やヨシ帯付近で成長した後、9 月頃に河口近くの水域に移動すると考えられている。

### 4. 生息状況

県内では浜名湖及び都田川河口、佐鳴湖から記録されているが、確認頻度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

アマモなどの水生植物帯（いわゆる藻場）や岸際のヨシ帯の減少が関係しているものと思われるため、海岸付近の埋め立て（14）、河口域の護岸整備（13）による抽水植物帯の消失が挙げられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。アマモ場や河口域のヨシ帯を確保することが重要と思われ、とくに仔稚魚の成育場として河口域にヨシ帯（奥行き 2 m 以上）を確保することが重要である。

### 7. 特記事項

カテゴリーの正しい策定のために、今後の詳しい調査が必要である。浜名湖などにおける藻場や湖岸際のヨシ帯の変化についても調査を行う必要がある。

### 8. 主な文献

後藤裕泰（1986）浜名湖の魚類。はまな，300：3-11

金川直幸（1988）静岡県の河口域魚類—神奈川県との比較—。神奈川自然誌資料，9：1-13

田中亮三（1984）佐鳴湖の自然—II 篇水生生物群—浜松短期大学研究論集，30：212-168

碓井星二・加納光樹・荒山和則・中里亮治（2010）北浦の沿岸帯におけるクルマサヨリ仔稚魚の生息場所利用パターン。日本生物地理学会会報，65：29-38

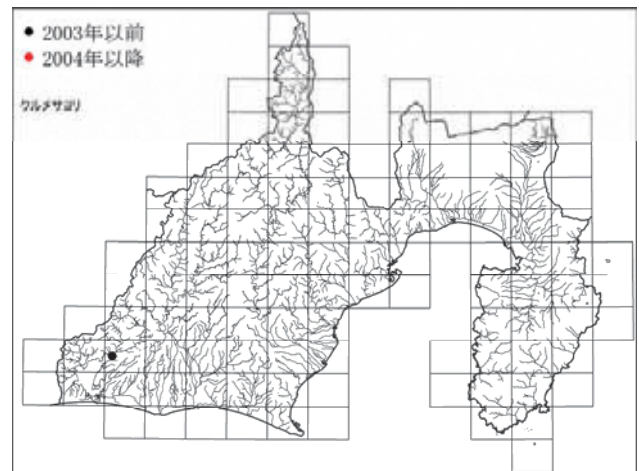
### 9. 標本

横須賀市自然博物館魚類資料（YCM-P 17004）

（板井隆彦・金川直幸）



都田川 1986年8月8日 金川直幸





# カワムツ *Candidia temminckii* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種)/ 西部 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm のコイ科魚類。背部は褐色で腹部は白色、体側中央部に暗藍色の太い縦条がある。胸鰭と腹鰭の前縁は黄色で赤くならない、側線鱗数は 43~51 枚、臀鰭の分枝軟条数は 9 本などの特徴によって同属のヌマムツと区別できる。底生動物から付着藻類まで摂食するが、アマゴなど優勢な魚が不在のところでは、大型魚が淵に定位して流下する水生昆虫や落下した陸上昆虫などを捕食する。繁殖期は 5~8 月で、オスは婚姻色を呈して頭部下面と腹部下面が赤くなり、頭部に顕著な追星が現れる。主に淵や平瀬の岸辺で産卵する。仔稚魚は淵の川岸に群れる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島南部、国内の自然分布域は、中部地方以西の本州、四国、九州である。県内では西部、中部、東部、伊豆の広域に分布するが、自然分布域は西部の新野川以西に限られ、御前崎以东のものは人為分布とみなされている。

## 3. 生息環境

河川上流域下部から中流域下部までの淵や平瀬、下流域や水田排水路などの緩流域や池沼沿岸に生息する。川岸にツルヨシやヤナギ類が繁茂する場所で多くみられる。生息場所はアマゴ、アユなどの共存魚種によっても変わるほか、タカハヤやアブラハヤなどの生息場所にも影響を与える。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川整備 (13) による流れの直線化や明瞭な淵の消失、川岸のコンクリート化、水際の植物帯の消失に伴う生息環境の悪化が大きい。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

本種の属名はかつて *Zacco* とされていたが、現在は *Candidia* に変更され、同属とされたオイカワは *Opsariichthys* に移された。これらの魚種の稚魚やごく若い未成魚は、魚類調査の現地での査定が難しく、これまでは一括して *Zacco* spp. として個体数を計上されることが多かったが、現在はそのような扱いができなくなっていることに留意する必要がある。

## 8. 主な文献

Chen, I. S., J. H. Wu & C. H. Hsu (2008) The taxonomy and phylogeny of *Candidia* (Teleostei: Cyprinidae) from Taiwan, with description of new species and comments on a new genus. *The Raffles Bulletin of Zoology supplement*, 19: 241-247

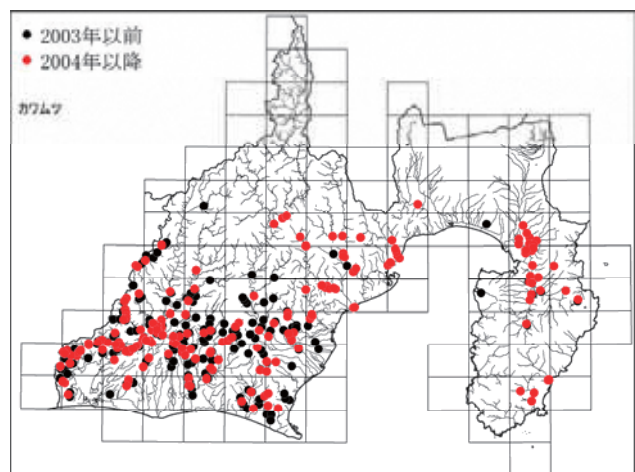
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、比和町立自然科学博物館魚類資料 (HMNH-P 602, 622)

(板井隆彦)



太田川水系 2016年10月8日 北原佳郎



# タカハヤ *Phoxinus oxycephalus juyi* (Jordan & Snyder, 1901)

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/ 中部・伊豆 要注目種 (N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm のコイ科魚類。体色は黄褐～やや緑がかかった褐色。体側中央の暗色縦条は、とくに繁殖期にオスは明瞭になることが多いが、アブラハヤに比べて不明瞭である。体側に広く暗色の小斑点が不規則に分布する。オスはメスより小さく、繁殖期には生殖突起が突出する。底生動物や落下昆虫から付着藻類や植物種子までさまざまなものを摂食する。繁殖期は晩春から初夏で、淵尻などの砂礫底で産卵する。

## 2. 分布

*Phoxinus oxycephalus* は、日本のほか朝鮮半島の南海岸及び西海岸から中国東北部に分布する。本亜種は日本固有亜種で、中部地方以西の本州、四国及び九州に分布する。自然分布の東限は太平洋側では静岡県、日本海側では富山県である。県内では西部の天竜川水系から中部の興津川水系、伊豆の一部の河川に分布する。西部の馬込川や都田川水系には同属のアブラハヤは生息するが、本亜種はみられない。東部・伊豆の狩野川で見られるものは、人為分布とされている。

## 3. 生息環境

大河川の上流域をのぞき河川の上流域のほか山際の水の清い小流などにも広く生息する。カワムツやアブラハヤの生息域より上流に生息するが、それらが不在の川では中流域でもみられる。主に淵に住む。

## 4. 生息状況

人家の並ぶ溪流沿いの小流では、兩岸のほか川底までコンクリートで固められて、本種を含めほとんどの水生動物の生息ができなくなっているところが多い。また、カワムツが不在であった中部の多くの河川にカワムツが導入され、本亜種の生息域が上流側に狭められている。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な要因は、河川改修によるコンクリート化に伴う生息環境の消失や減少 (13) であると考えられる。また、カワムツとの競合 (56-1) による生息場所の狭小化も懸念される。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

遺伝的な調査によって、関東の個体群は愛知以西産の遺伝子を有し、伊豆の個体群も関東と同一の遺伝集団であることから、人為分布の可能性が示唆されている。

## 8. 主な文献

板井隆彦 (1997) タカハヤ. 水産庁 編, 水産庁委託“希少水生生物保存対策試験事業”日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料 (IV), pp. 224-229. 日本水産資源保護協会, 東京.

西田一也・小出水規行・皆川明子・渡部恵司・森 淳・竹村武士 (2015) 関東地方の国内外来魚タカハヤはどこから移殖されたのか?. 平成27年度農業農村工学会大会講演会 2015 : 278-279

## 9. 標本

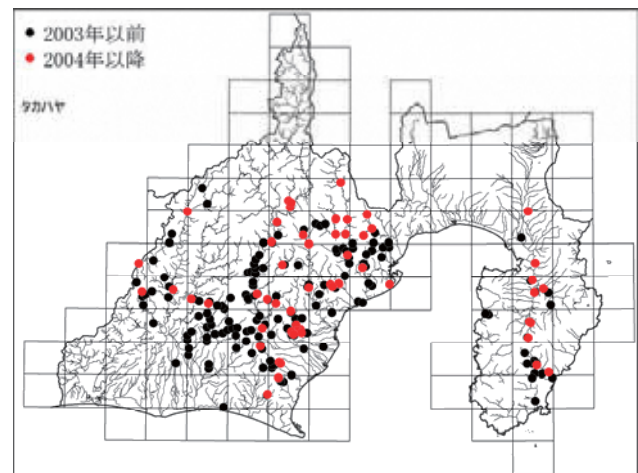
ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦)



©2019 Y.Kitahara

菊川 2016年6月1日 北原佳郎



# タモロコ *Gnathopogon elongates elongates* (Temminck & Schlegel, 1846)

コイ科 Cyprinidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/ 中部 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 10 cm のコイ科魚類。本種の体型は地理的変異が大きく、静岡県内のもは一般にずんぐりし、紡錘形というよりは円筒形に近い。口ひげが 1 対ある。体色は背面が暗緑褐色、腹面が銀白色である。体側中央に暗色の縦帯が走り、尾柄末端でいったん途切れ、尾鰭基底中央に暗色斑点として現れる。動物質に偏った雑食で、繁殖は春に行われる。卵は水中にある植物の茎、根や葉に産み付ける。



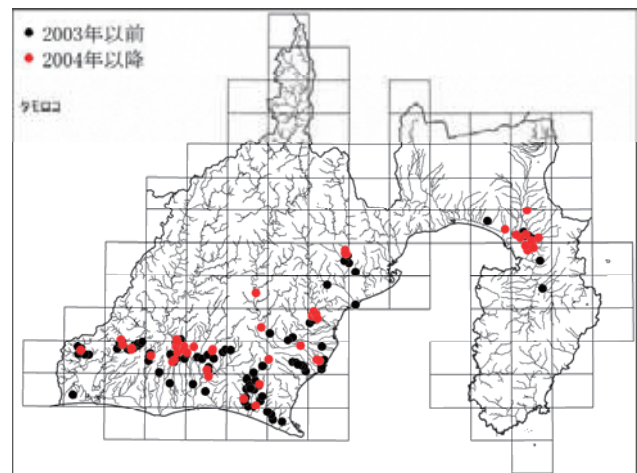
## 2. 分布

日本固有種で、太平洋側では静岡県以西、日本海側では新潟県以西の本州及び四国が自然分布域とされるが、関東以北の本州や九州にも移殖され広がっている。板井(1982)は、県内における自然分布の東限を中部の瀬戸川あたりと考えたが、静岡県レッドデータブック(2004)では分布東限はその東方の安倍川あるいは沼津市あたりまで広がる可能性を示した。中部地域以東では分布がかなり不連続になっており、自然分布の範囲については今後の検討が必要である。

太田川水系中沢川 2013年7月14日 森口宏明

## 3. 生息環境

河川中流域から下流域や池沼まで広く生息し、川や農業水路などの緩流で多くみられる。



## 4. 生息状況

生息地の小流や農業水路などの多くがコンクリートなどの固い基質のもので整備され、水際の植生が失われるなど生息環境が悪化し、本種の生息域が失われたり生息密度が減少しているところが少なくない。詳しい調査を行っていないため減少の程度は明らかでないが、生息密度が高いところは少なく、絶滅危惧種として扱う必要がでてくるかもしれない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種には自然分布域での生息地の減少や生息密度の減少の問題があるが、それはほとんど生息水域の人為的改変(12、13、15-2)によるものと考えられる。その一方で、本種は東部の狩野川水系などの河川にも移入し生息地を広げており、これについても問題としてとらえる必要がある。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

遺伝的な解析がより進めば、自然分布域の境界がより明確になってくるものと思われる。岐阜県では、中部地方に自然分布する在来系統の個体群と、県外から持ち込まれたと考えられる近畿地方以西に分布する系統の分布拡大及びホンモロコとの交雑が進行していることが示唆されている。

## 8. 主な文献

- 板井隆彦・金川直幸・小林正明(2004) タモロコ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物—県版レッドデータブック—<動物編>, p. 150. 羽衣出版, 静岡.
- 向井貴彦(2017) 岐阜県の魚類. 岐阜新聞社, 岐阜, 214 pp.
- 中村守純(1969) 日本のコイ科魚類. 資源科学研究所, 東京, 455 pp.

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦・金川直幸)



## ニシシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type B (*sensu* Nakajima *et al.*, 2012)

(=2004年版のシマドジョウ (一部))

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/ 西部・中部 要注目種(N-II 分布上注目種等) 変更コード8

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長約8~10cmのドジョウ科魚類。口ひげは3対。体側中央には円~楕円形の褐色斑紋が約10個並ぶ。尾鰭基底には黒色斑が2つあり、上側は大きく明瞭な半円形で、下側は不明瞭。尾鰭には斑紋状の横帯が3~4列みられる。オスの胸鰭の骨質盤はくちばし状になる。繁殖期は4~6月。野外での寿命は2年以上と考えられるが、生活史の詳細は不明。

### 2. 分布

日本固有種で、中部地方以西の本州と隠岐に自然分布する。静岡県は太平洋側の分布東限にあたる。県内では西部の都田川水系から中部の興津川水系まで広く分布する。西部の天竜川では支川相川とそれに続く本川のごく一部以外は確認されておらず、不連続な分布がみられ生物地理学的に興味深い。

### 3. 生息環境

河川中流部から下流域上部の砂や砂礫底の場所に生息する。

### 4. 生息状況

県内では興津川以西の多くの河川で確認されており、各水系での生息密度は高いが、天竜川水系ではあまり高くない。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息環境である河川の砂・砂礫底の場所及び繁殖環境である流速が遅くて堆積物が存在する浅場、そして河川と水路との連続性の確保が必要なため、河川改修・護岸整備(13)や砂防ダムや堰堤の建設(25)による生息環境の悪化や消失及び河川の分断化が個体数減少の原因となると考えられる。

### 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

これまで、シマドジョウ *Cobitis biwae* 1種として扱われていたが、核型、遺伝的・形態的な特徴によって4集団(オオシマドジョウ、ニシシマドジョウ、ヒガシシマドジョウ、トサシマドジョウ)に大別された。西部の都田川水系では、体側中央の斑紋がない本種の変異個体が確認されている。

### 8. 主な文献

北原佳郎・森口宏明・北川 学 (2016) 静岡県都田川水系で採集された特異な斑紋パターンを持つニシシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type B. 東海自然誌, (9): 37-41

中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治 (2012) 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59(1): 86-95

Kitagawa, T., M. Watanabe, E. Kitagawa, M. Yoshioka, M. Kashiwagi & T. Okazaki (2003) Phylogeography and the maternal origin of the tetraploid form of the Japanese spined loach, *Cobitis biwae*, revealed by mitochondrial DNA analysis. *Ichthyological Research*, 50: 318-325

### 9. 標本

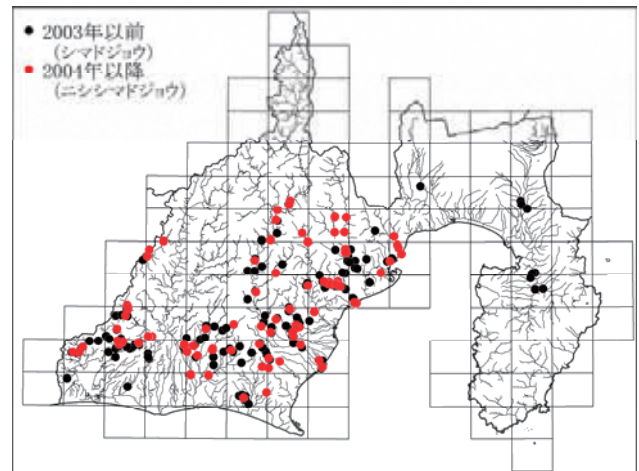
ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3193~3195, 3215)

(北原佳郎・板井隆彦)



©2019 Y.Kitahara

安倍川水系 2017年7月10日 北原佳郎



# ヒガシシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type C (*sensu* Nakajima *et al.*, 2012)

(=2004年版のシマドジョウ (一部))

ドジョウ科 Cobitidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/中部・東部・伊豆 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード8

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等):環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長約 5~10 cm のドジョウ科魚類。口ひげは 3 対、体側中央には円形から楕円形の褐色斑紋が約 10 個並び、尾鰭基底には眼径より小さい黒色斑が 2 つある。尾鰭には細かい斑紋状の横帯が 3~6 列みられる。オスの胸鰭の骨質盤は幅が狭い棒状になる。繁殖期は 4 月中旬から 6 月で、河川敷の浅い湿地、水田などの一時的な水域、用水路などの分流部などの植物残渣などの堆積物や適度な植生がある場所を利用する。卵は、水深が浅く流速が遅い底質が泥や砂の場所でみられる。体長約 50 cm 以上で成熟して繁殖に加わると考えられる。

## 2. 分布

日本固有種で、中部地方以東の本州と佐渡島に自然分布する。静岡県は太平洋側の分布西限にあたる。県内では中部・東部の富士川水系、東部の酒匂川水系鮎沢川、東部・伊豆の狩野川水系狩野川の本支川の一部に分布する。中部・東部の富士川では支川稲瀬川、芝川、潤井川、沼川支川の滝川などのごく一部以外は確認されておらず、不連続な分布がみられ、生物地理学的に興味深い。

## 3. 生息環境

河川中流部から下流域上部にかけての砂底や砂礫底の場所に生息する。

## 4. 生息状況

県内では富士川以東の河川で確認されている。各水系での生息密度はあまり高くない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境である河川の砂・砂礫底の場所及び繁殖環境である流速が遅くて堆積物が存在する浅場、そして河川と水路との連続性の確保が必要なため、河川改修・護岸整備 (13) や砂防ダムや堰堤の建設 (25) による生息環境の悪化や消失及び河川の分断化が個体数減少の原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

山梨県富士川水系の個体群は、斑紋の特徴は本種に類似するものの、ミトコンドリア DNA の特徴はニシシマドジョウ群に含まれることが報告されている。

## 8. 主な文献

中島 淳・内山りゅう (2017) 日本のドジョウ。山と溪谷社、東京、223 pp.

西田一也・藤井千晴・皆川明子・千賀裕太郎 (2006) 一時的な水域で繁殖する魚類の移動・分散範囲に関する研究。農業土木学会論文集, 244: 151-163

吉田 豊 (2013) ヒガシシマドジョウの産卵期における水路への遡上と産卵場所の特徴 (平成 23 年度)。栃木県水産試験場研究報告, 56: 4-11

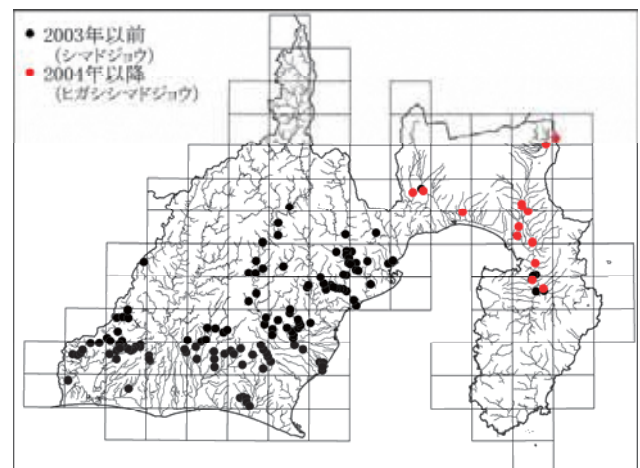
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(北原佳郎・板井隆彦)



狩野川水系 2017年7月4日 北原佳郎



# カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* (Mizuno, 1960)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/ 中部 要注目種(N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 6 cm のハゼ科魚類。頬部に小さい赤色斑が散在する。他のヨシノボリ属の種より胸鰭条数が少なく(15~17 vs 19~22)、脊椎骨が多い(28 vs 26)。繁殖期は5~8月上旬で、平瀬のはまり石の下面に他の両側回遊型ヨシノボリ属よりも大型の卵を産卵する。孵化直後から底生生活を開始して一生を河川で過ごす。孵化後満2年で成熟して繁殖に加わると考えられる。

## 2. 分布

日本固有種で、富山県神通川付近及び静岡県富士川以西の本州、四国、九州北部、対馬、五島列島に自然分布する。県内では中部の富士川から西部にかけて広く自然分布するが、中部の蒲原・庵原地方では興津川以外のごく小さな河川のほか、天竜川・大井川・安倍川などの大河川の標高の高い区間の上流部の本支川にも分布しないなど、分布の空白域も存在する。近年、自然分布域である富士川よりも東の東部・伊豆の狩野川水系で、導入個体群の定着が確認されている。

## 3. 生息環境

主に河川上中流域に生息するが、西部の浜名湖流入河川では下流域上部(Bb-Bc域)にも生息する。淵の周辺から平瀬にかけての緩流部で多くみられる。

## 4. 生息状況

県内では富士川以西の多くの河川で確認されており、生息密度の高い河川も多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

生活史を通して、河床材料の堆積・浸食が卓越する環境が必要であり、湛水域が形成されるとその区間では確認されなくなるため、河川改修・護岸整備(13)や砂防ダムや堰堤の建設(25)による生息環境の悪化や消失が個体数減少の原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

地域によって遺伝子・形態が異なる集団が存在することが報告されている。

## 8. 主な文献

北原佳郎・加藤健一・石川 均・品川修二・室伏幸一 (2013) 三島市で採集されたカワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* (Mizuno, 1960). 東海自然誌, (6): 27-33

Shimizu, T., N. Taniguchi & N. Mizuno (1993) An electrophoretic study of genetic differentiation of a Japanese freshwater goby, *Rhinogobius flumineus*. *Japan Journal of Ichthyology*, 39(4): 329-343

吉郷英範 (2011) 分布域東限に生息するカワヨシノボリ(硬骨魚類綱:スズキ目ハゼ科)の形態. 比和科学博物館研究報告, 52: 339-358

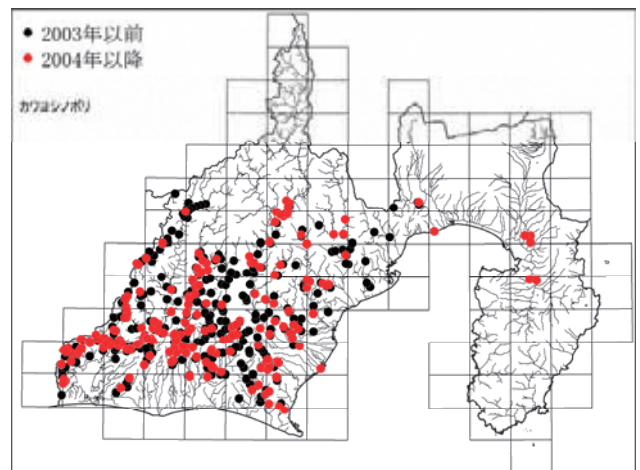
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、庄原市立比和自然科学博物館魚類資料 (HMNH-P 612-620、5958-5961、5968-5978、12074-12088、6933-6948)

(北原佳郎・板井隆彦・渋川浩一)



上: 富士川水系 2016年8月24日 北原佳郎  
下: 大井川水系 2015年8月26日 北原佳郎





# ビリンゴ *Gymnogobius breunigii* (Steindachner, 1880)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)/ 西部・伊豆 要注目種(N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 7 cm のハゼ科魚類。尾柄が細い。両眼間を通る眼上管（開孔は 3 対）がある。成熟前の個体の第 1 背鰭は黒く縁どられる。メスの婚姻色は顕著で、背鰭・腹鰭・臀鰭が黒くなる。繁殖期は福岡県では 1 月下旬から 4 月下旬。繁殖場所は河口汽水域の砂泥底干潟で、アナジャコなどの生息孔のほか、ゴカイ類の巣穴を拡張して利用する。砂泥底表面から 5~10 cm の深さの壁面に産卵する。稚魚は初春から初夏にかけて浅海域に出現し、河口や内湾の汽水域に移動する。泥底や砂泥底の中層を群がりて浮遊する。寿命は 2~3 年で、生後約 1 年（全長 3.7~5.6 cm）で成熟する。



©2019 Y.Kitahara

## 2. 分布

国外ではサハリン南部、沿海州、朝鮮半島南岸、渤海、黄海、国内では北海道の太平洋・日本海側から種子島、壱岐、対馬、五島列島に分布する。県内では西部の浜名湖、佐鳴湖、浜名湖に流入する河川（都田川水系）、伊豆の仁科川、那賀川、岩科川、青野川に限られ、生物地理学的に興味深い。

## 3. 生息環境

河口汽水域や汽水湖でみられ、岸際の流れが緩い泥底や砂泥底の場所を好む。

## 4. 生息状況

西部と伊豆に限定的に分布するが、西部の浜名湖流入河川、伊豆の那賀川、岩科川では比較的生息密度が高く、生息状況は安定していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削（13）や浚渫・干潟域の埋め立て（14）、河口域の水門建設（25）による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

かつて本種には学名 *Chaenogobius castanea* があてられていたが、Stevenson による分類学的検討によって本種に対し *Gymnogobius breunigii* が適用された。

## 8. 主な文献

道津喜衛（1954）ビリンゴの生活史. 魚類学雑誌, 3: 133-138

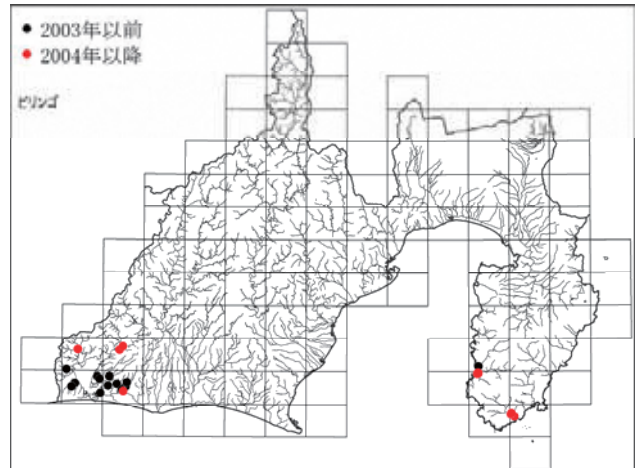
乾 隆帝・品田裕輔・川岸基能・大畑剛史・井原高志・鬼倉徳雄（2011）津屋崎入江におけるビリンゴ *Gymnogobius breunigii* (Steindachner, 1880) とチクゼンハゼ *Gymnogobius uchidai* (Takagi, 1957) の産卵状況. 日本生物地理学会会報, 66: 165-171

Stevenson, D. E. (2002) Systematics and distribution of fishes of the Asian goby genera *Chaenogobius* and *Gymnogobius* (Osteichthyes: Perciformes: Gobiidae), with the description of a new species. *Species Diversity*, 7(6): 251-312

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料（SPMN-PI）、横須賀市自然博物館魚類資料（YCM-P17030~17034）

青野川水系 2015年9月30日 北原佳郎



（渋川浩一・板井隆彦・金川直幸・北原佳郎）

# イセゴイ *Megalops cyprinoides* (Broussonet, 1782)

(=ハイレン)

イセゴイ科 Megalopidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・東部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 100 cm のイセゴイ科魚類。「レプトセファルス」と呼ばれる葉形仔魚の発育段階を経る。本種の葉形仔魚の尾鰭は大きく二叉し、臀鰭は背鰭よりも大きく、その始部は背鰭のほぼ中央下にあるため、ウナギ類の葉形仔魚と容易に区別できる。孵化後約 1 カ月の葉形仔魚期を経て変態し、葉形仔魚から稚魚に変態する際、体長が収縮する。体長約 3 cm で成魚と同様の体形となり鱗が形成される。成魚の背鰭の最後の軟条は伸長する。産卵場所や成熟体長については不明。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島南岸、台湾、インドー西太平洋、日本では黒潮の影響を受ける地域を中心に、太平洋側では青森県、日本海側では秋田県まで分布するが、九州以北は稀であり、とくに日本海側では確認例が少ない。県内では西部の浜名湖、佐鳴湖、天竜川、太田川、菊川、箴川、中部の大井川、瀬戸川、安倍川、巴川、波多打川、三保半島、東部の新中川、伊豆の伊東大川水系唐人川で確認されている。

## 3. 生息環境

成魚は内湾などの沿岸の浅場、仔稚魚は河口汽水域から感潮域上流の純淡水域に生息し、河川では緩流部でみられる。

## 4. 生息状況

県内の西部から東部にかけて確認されているが、確認頻度が低いほか、生息が確認されたいずれの河川でも生息密度は低い。また、河川で確認されているのは葉形仔魚か稚魚である。大正時代には、かつて天然記念物指定されていた伊東市の浄ノ池から流出する唐人川からも記録されているが、温泉の枯渇や水質悪化などによってみられなくなった。駿河湾内では仔魚調査で葉形仔魚が採集されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

幼魚が河口汽水域から感潮域上流の純淡水域の緩流部に生息していることから、河口域における浚渫(14)や護岸や河床の整備(13)による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

浜名湖地方では、メナダあるいはセスジボラをイセゴイと呼ぶ。

## 8. 主な文献

望 典隆・塩澤成子・長坂美紀・久保田 正 (2001) 駿河湾に出現するカライワシ目、ソトイワシ目及びウナギ目の葉形仔魚. 東海大学海洋学部紀要, 52: 43-55

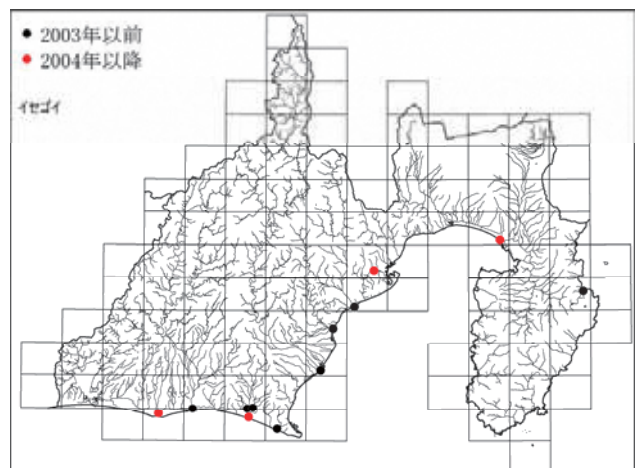
塚本洋一・沖山宗雄 (1993) イセゴイの初期生活史における成長様式. 魚類学雑誌, 39(4): 379-386  
魚類写真資料データベース. <http://fishpix.kahaku.go.jp/fishimage/index.html>. KPM-NR0043477 (秋田県: 20070828)

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-h-700020)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P17001~17002)



上: 葉形仔魚 天竜川 2013年10月24日 北原佳郎  
下: 稚魚 新中川 2010年9月7日 加藤健一



(板井隆彦・渋川浩一・北原佳郎)

### 1. 種の解説

全長約 200 cm の大型のウナギ科魚類。体側に不規則な斑紋がある。背鰭基部は胸鰭後端と肛門の間地点より前方にある。シラス期には尾鰭基底に縦帯状の黒色斑がある。産卵場は西マリアナ海嶺南部海域と考えられる。繁殖期は不明である。本州でのシラスウナギの溯上時期は、秋から初冬と考えられる。

### 2. 分布

国外ではインド-西太平洋、国内では茨城県、千葉県、東京都、静岡県、三重県、和歌山県、四国、九州、沖縄県に分布する。県内では西部の浜名湖、菊川、中部の大井川、小坂川、富士川、伊豆の石部の小流、大浜川、河津川、伊東大川水系、烏川で確認されている。

### 3. 生息環境

河川の中・下流域に生息する。堆積した落葉や水草などの中、平瀬からトロの転石の下や岸際の植生、岩盤の割れ目や巨石の間などでみられる。

### 4. 生息状況

県内各地で「ゴマウナギ」の地方名があるほか、標本も西部から伊豆にかけて得られているが、確認頻度が低く、いずれの河川でも生息密度は低い。確認された大部分は河口付近のシラス期のものだが、近年、全長 1 m 以上の大型個体も確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川中流域の岸際植生、巨岩や礫などが多く存在する場所に生息していることから、河川中・下流域における浚渫(14)や護岸や河床の整備(13)による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

### 6. 保護対策

和歌山県富田川、徳島県母川、長崎県樺島、鹿児島県指宿市、千葉県館山市では、生息地が国や市の天然記念物に指定されている。

### 7. 特記事項

かつて天然記念物に指定されていた伊東市の浄ノ池では、本種やユゴイなどの南方系魚類がみられたが、温泉の枯渇などによって天然記念物から解除され、現在では池自体が埋め立てられており存在しない。

### 8. 主な文献

青島秀治(2015) 浜名湖の主?~大きなオオウナギ~. はまな, 550: 8

Kuroki, M., J. Aoyama, M. J. Miller, T. Yoshinaga, A. Shinoda, S. Hagiwara & K. Tsukamoto (2009) Sympatric spawning of *Anguilla marmorata* and *Anguilla japonica* in the western North Pacific Ocean. *Journal of Fish Biology*, 74: 1853-1865

西 源二郎・今井貞彦(1969) 屋久島産オオウナギ幼期の生態ならびに形態的研究. 鹿児島大学水産学部紀要, 18: 65-76

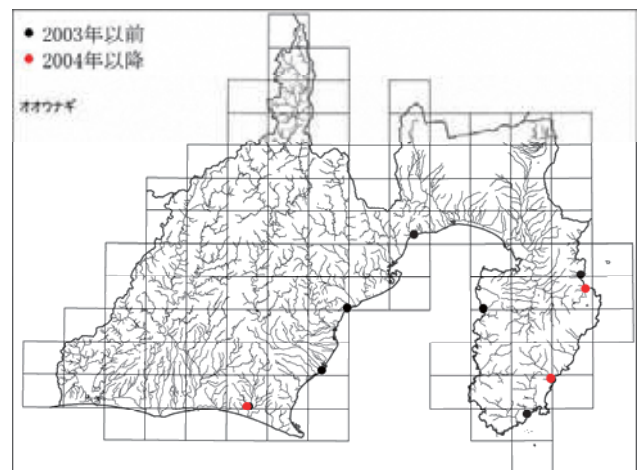
多部田 修(1994) オオウナギ. 水産庁 編, 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(Ⅰ), pp. 335-341. 日本水産資源保護協会, 東京.

### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40777)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI 12230) (板井隆彦・鈴木邦弘・北原佳郎)



上: 飼育個体 石部の小流 2004年6月6日 安藤晴康  
下: シラス期 菊川水系 2017年11月3日 北原佳郎





# ガンテンイシヨウジ *Hippichthys (Parasyngnathus) penicillus* (Cantor, 1849)

ヨウジウオ科 Syngnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 18 cm のヨウジウオ科魚類。体色は、背中側では緑色を帯びた茶褐色、腹側では黄色を呈し、体側には黒く縁どられた白色の斑紋が散在する。オスは尾部腹面に発達した育児嚢をもち、メスが育児嚢に産卵する。オスは、卵が孵化するまで保護する。繁殖期は、本州では夏季と考えられ、県内では6月にオスの抱卵個体が確認されている。孵化後の仔魚は、沿岸や藻場及び河川汽水域で見られることから、河川汽水域と海を回遊する回遊魚と考えられる。体長約 12 cm で成熟して繁殖に加わる。

## 2. 分布

国外では上海、インドー西太平洋の温・熱帯域、国内では千葉県から種子島までの太平洋沿岸と石川県、九州北・西岸、瀬戸内海に分布する。県内では西部の浜名湖、都田川水系都田川と花川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、中部の庵原川、伊豆の青野川、稲生沢川で確認されている。

## 3. 生息環境

河川汽水域から湾奥部に生息し、河川汽水域では、ヨシ帯付近や枯れ草・枯れ枝が滞留する淵や平瀬などの緩流部、泥底や砂礫底のカキ礁で見られる。

## 4. 生息状況

県内では河口域の発達した河川の汽水域だけで確認されている。生息が確認されたいずれの河川でも生息密度は低い。未成魚のほか、西部の菊川や中部の庵原川で抱卵したオスが確認されていることから、県内河川でも再生産している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域の緩流部でヨシ・枯れ草や泥・砂礫底のカキ殻がみられるような場所に生息しているため、河口域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

近年、静岡県以東での確認事例が増加している東京湾では再生産していることが示唆されている。

## 8. 主な文献

- 北原佳郎 (2006) 静岡県庵原川河口で採集されたガンテンイシヨウジ. 兵庫陸水生物, 58: 103-105  
酒井 卓・瀬能 宏・加納光樹 (2018) 東京湾におけるガンテンイシヨウジ *Hippichthys penicillus* の採集記録と北限個体群の確立の可能性. 日本生物地理学会会報, 30: 5-10  
Watanabe, S., Y. Watanabe & M. Okiyama (1997) Monogamous mating and convention sex roles in *Hippichthys penicillus* (Syngnathidae) under laboratory conditions. *Ichthyological Research*, 44(3): 306-310

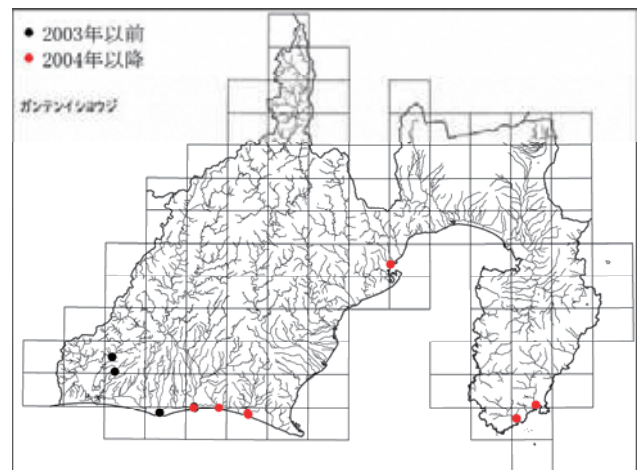
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40590, 43490)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P 17006~17007)、徳島県立博物館魚類標本 (TKPM-P 12992~12993)

(金川直幸・北原佳郎)



稲生沢川 2015年9月25日 北原佳郎



# カワヨウジ *Hippichthys (Hippichthys) spicifer* (Rüppell, 1838)

ヨウジウオ科 Syngnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 17 cm のヨウジウオ科魚類。体色は、茶褐色、腹側では黄色を呈し、軀幹部には約 13~15 条の白色横帯がある。頭部の模様は雌雄で差がみられ、メスでは頭部下面に黒色斑紋が散在するほか眼窩後方の斜帯が明瞭であるが、オスでは黒色斑紋はなく眼窩後方の斜帯も不明瞭である。オスは尾部腹面に発達した育児嚢をもち、メスが育児嚢に産卵する。オスは、卵が孵化するまで保護する。繁殖期は、沖縄島より北では夏季から秋季と考えられる。沖縄島では、冬期に繁殖活性が低下するものの、周年にわたって産卵していることが示唆されている。汽水域と海を回遊する回遊魚で、体長約 11 cm で成熟すると考えられる。

## 2. 分布

国外では台湾、海南島、インド-西太平洋、国内では千葉県小櫃川から種子島・屋久島までの太平洋沿岸と琉球列島に分布する。県内では西部の太田川、菊川、中部の勝間田川、坂口谷川、庵原川、伊豆的那賀川、青野川で確認されている。

## 3. 生息環境

河川汽水域に生息し、ヨシが生育する緩流部や泥・砂礫底のカキ礁でみられる。

## 4. 生息状況

県内では河口域の発達した河川だけで確認されている。生息が確認されたいずれの河川でも生息密度は低い。未成魚も確認されているが、県内河川で再生産しているか否かは不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域の緩流部でヨシや泥・砂礫底のカキ殻がみられるような場所に生息しているため、河口域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

中部では、同属のアミメカワヨウジ *Hippichthys (Hippichthys) heptagonus* が確認されている。

## 8. 主な文献

- Ishihara, T. & K. Tachihara (2009) The maturity and breeding season of the bellybarred pipefish, *Hippichthys spicifer* in Okinawa-jima Island rivers. *Ichthyological Research*, 56(4): 388-393  
北原佳郎 (2008) 静岡県伊豆地域青野川で採集されたカワヨウジ. 兵庫陸水生物, 60: 139-142  
山川宇宙・瀬能 宏 (2016) 相模湾流入河川及び沿岸域で記録された注目すべき魚類 16 種. 神奈川自然誌資料, (37): 44-52

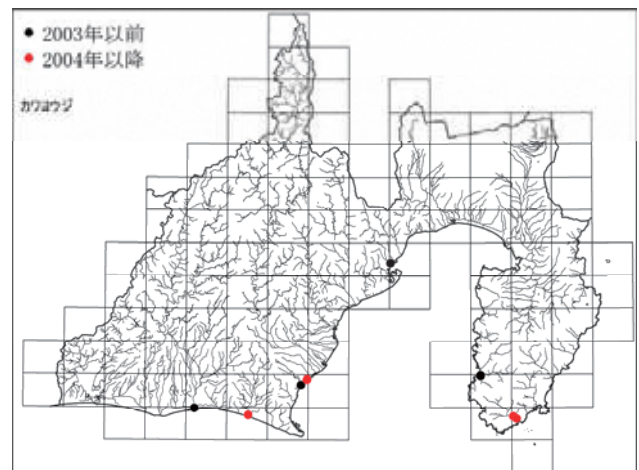
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI12233)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P17005)、徳島県立博物館魚類標本 (TKPM-P12991、16478)

(金川直幸・北原佳郎)



上：太田川 2015年6月28日 北原佳郎  
下：青野川 2005年11月13日 北原佳郎



# テングヨウジ *Microphis (Oostethus) brachyurus brachyurus* (Bleeker, 1853)

ヨウジウオ科 Syngnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/西部・中部・東部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 25 cm のヨウジウオ科魚類。吻は長く、躯幹部は太い。体色は茶褐色を呈し、鰓蓋後方に暗赤色の縦条を持つ。吻から躯幹部にかけて淡色の斑紋が散在する。オスの育児嚢はあまり発達せず、両側の骨板で保護される程度である。繁殖期は、本州では9月で、メスがオスの育児嚢に産卵する。オスは、育児嚢に産み付けられた卵が孵化するまで保護する。卵は約1週間で孵化する。孵化後の仔魚は海に流下し、両側回遊魚と同様に川と海を回遊していると考えられる。体長約 13 cm で成熟して繁殖に加わると考えられる。

## 2. 分布

国外では台湾、スリランカからソサエティ諸島の東インドー太平洋、国内では相模湾から種子島までの太平洋沿岸と琉球列島に分布する。県内では西部の馬込川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、中部の栃山川、瀬戸川、小坂川、庵原川、富士川、東部の狩野川、伊豆の宇久須川、岩科川、五十鈴川、青野川、大賀茂川、稲生沢川、河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

河川汽水域から感潮域上部の純淡水域に生息する。ヨシが生育する場所や枯れ草・枯れ枝が滞留する淵や平瀬などの緩流部で、それらに擬態して植物の枝や葉の周辺の表層や中層に浮いている。

## 4. 生息状況

県内の広域に分布し、県内で確認されている河川産ヨウジウオ類では最もよくみられるが、生息が確認されたいずれの河川でも生息密度は低い。しかし、抱卵したオス以外にも未成魚も確認されていることから、県内河川でも再生産していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域の緩流部でヨシや枯れ草などがみられるような場所に生息しているため、本種の個体数減少は、河口域における護岸整備(13)や浚渫(14)による生息環境の悪化や消失が原因となると考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

隣県の神奈川県酒匂川でも抱卵したオスが確認されており、周辺地域において再生産している可能性が示唆されている。

## 8. 主な文献

中里 靖・藤田矢郎(1986)伊豆, 相模, 房総におけるテングヨウジの分布と産卵, 卵発生及び仔魚前期. 水産増殖, 33(4): 230-239

山川宇宙・瀬能 宏(2016)相模湾流入河川及び沿岸域で記録された注目すべき魚類 16 種. 神奈川自然誌資料, (37): 44-52

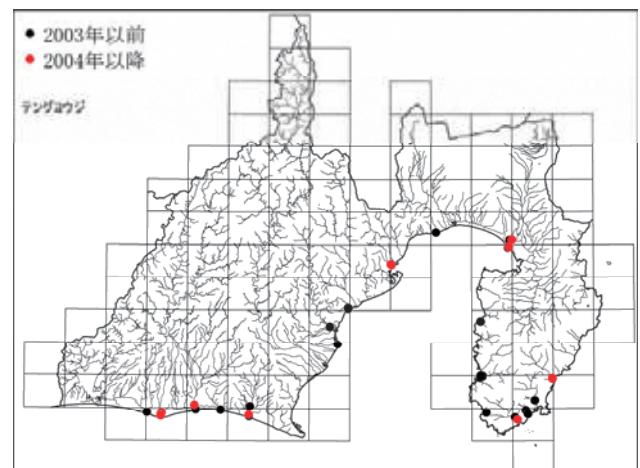
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3258, 3296, 40764, 43471)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI 28464)

(板井隆彦・北原佳郎)



太田川 2016年10月4日 北原佳郎





# イッセンヨウジ *Microphis (Coelonotus) leiaspis* (Bleeker, 1853)

ヨウジウオ科 Syngnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・東部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm のヨウジウオ科魚類。吻は突き出るが比較的短く、吻端から鰓蓋にかけて1本の明瞭な黒条がある、鰓蓋の隆起線は不明瞭で、下隆起線は不明瞭である。背鰭条数は多く 50 本以上。体側には明瞭な黒色斑点はない。県内での繁殖期は不明だが、沖縄島では6~12月で、メスがオスの育児嚢に産卵する。オスは育児嚢をもち、産み付けられた卵が孵化するまで保護する。淡水域で孵化後の仔魚は海に流下し、海で成長した後に河川へ加入する両側回遊魚である。

## 2. 分布

国外では台湾南部、香港、ジャワ島、西太平洋、国内では神奈川県相模川以西、静岡県、和歌山県、高知県、鹿児島県の黒潮が洗う太平洋岸河川から琉球列島にかけて分布する。県内では西部の天竜川、中部の興津川、東部の狩野川、伊豆の古宇川、岩科川、青野川、稲生沢川、河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口域から中流域の純淡水域に生息する。主に下流域でみられるが、天竜川では河口から約 14 km 上流の瀬でも確認されている。流水環境に適応しており、ツルヨシなどの岸際植生付近の緩流部のほか、平瀬や早瀬でも確認されている。

## 4. 生息状況

県内の西部から伊豆にかけて確認されているが、確認された河川が少ないほか、いずれの河川でも生息密度は低い。成長した個体もみられるが、県内に定着しているかは不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

仔魚が海域で成長後に河川へ加入すること、河口域から中流域の岸際植生付近や早瀬・平瀬などに生息することから、河口域における浚渫(14)や護岸や河床の整備(13)による生息環境の悪化や消失が原因となる。また、河川横断構造物(25)(落差:50~70 cm)によって溯上が阻害されている事例もみられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

伊豆では、同属のタニヨウジ *Microphis (Lophocampus) retzii* が確認されている。

## 8. 主な文献

Ishihara, T. & K. Tachihara (2008) Reproduction and early development a freshwater pipefish *Microphis leiaspis* in Okinawa-jima Island, Japan. *Ichthyological Research*, 55(4): 306-310

環境アセスメントセンター (2009) 水生生物生息状況等調査業務委託(河津川) 報告書. 環境アセスメントセンター, 静岡, 35 pp.

北川捷康 (2008) 天竜川下流部の魚類 その2—一気になる2種—. 遠州の自然, (31): 37-38

前田健・立原一憲 (2006) 沖縄島汀間川の魚類相. 沖縄生物学会誌, 44: 7-25

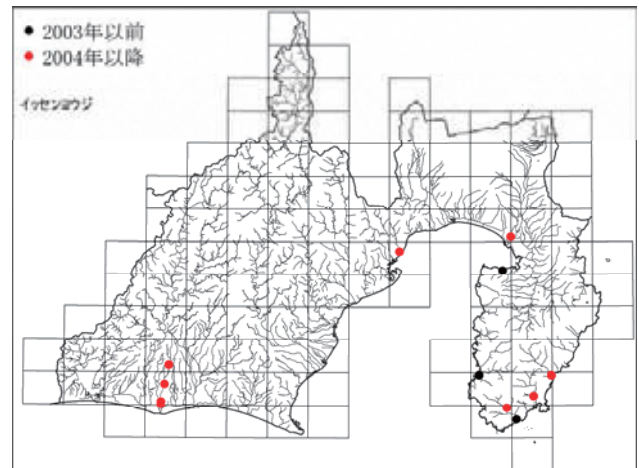
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)

(板井隆彦・北原佳郎)



天竜川 2017年9月8日 北原佳郎



### 1. 種の解説

全長約 120 cmのアカメ科魚類。体高が高く、側扁し、頭部は吻端が尖り下顎が出る。第1背鰭の棘は強く第3棘が最も長い。成魚の体色は銀白色であるが、幼魚ではオリーブ色の地色に緑みを帯びた黄色の斑模様がある。眼はルビー色に輝く。初夏に海域で産卵し、生まれた仔稚魚は河口域のアマモ場で約1年を過ごし、塩分の濃い河口や海域へ移動する。

### 2. 分布

日本固有種。静岡県から鹿児島県にかけての太平洋沿岸から記録されており、主要生息地は高知県と宮崎県に限られる。県内では西部の浜名湖、中部の勝間田川で確認されており、勝間田川が分布の東限とされたきたが、その後、南伊豆町小稲、神奈川県相模川、東京湾で採集され、記録が更新された。

### 3. 生息環境

汽水域から沿岸域にかけて生息し、純淡水域へは進入しない。昼間は岩陰などに群れで身を潜め、夜間に摂餌回遊を行う。県内の捕獲事例の多くが定置網などによるため、生息環境の詳細は不明である。

### 4. 生息状況

県内ではきわめて稀である。1970年に浜名湖の定置網で漁獲されたのが初記録で、浜名湖ではその後散発的に記録が残るが、2010年に突如として大量に漁獲された。これらの大部分は全長15 cm前後の1歳魚だが、稚魚や未成魚も記録されている。しかし、これら個体の本県への来遊時期や来遊年齢、本県水域における越冬可否などは不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内では減少が示唆される状況にはないが、アマモ場の減少に伴う稚魚の生息場の消失(14)、護岸整備などによる未成魚の生息環境の破壊(13)が懸念される。また、アカメ資源全体については、主分布が局所的(61)、個体数の急減に伴う遺伝的多様性の低下(62)、飼育目的の幼稚魚に対する採集圧(41)が脅威となっている。

### 6. 保護対策

宮崎県では野生動植物の保護に関する条例によって、捕獲等の禁止、適切な取扱いや生息地保存の推奨が図られている。

### 7. 特記事項

アカメ科全体では、他種は熱帯・亜熱帯域に分布するのに対し、本種だけが温帯域に分布し、かつ純淡水域に進入しない。このことは、アカメ科魚類の生物地理や進化を検討する上で重要である。

### 8. 主な文献

内田喜隆(2005) 四万十の怪魚アカメの生活史. 海洋と生物, 27(1): 24-29

川嶋尚正(2013) 伊豆半島小稲地先で採捕された成魚のアカメ. 魚類学雑誌, 60(2): 192-193

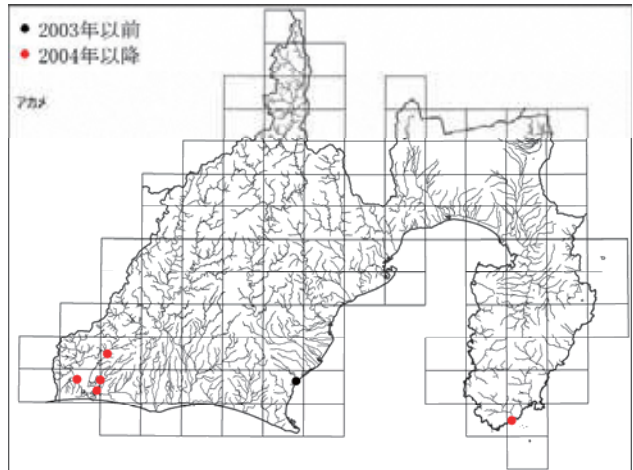
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料(SPMN-PI 40699~40701)、東京海洋大学博物館(MTUF-35447)

(鈴木邦弘・板井隆彦)



浜名湖 2010年10月13日、鈴木邦弘



## ユゴイ *Kuhlia marginata* (Cuvier, 1829)

ユゴイ科 Kuhliidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 20 cm のユゴイ科魚類。体は側扁する。体色は銀白色で、体側背方に暗色小斑点が散在する。尾鰭、背鰭、臀鰭の後縁が黒く縁どられる。回遊性魚類で、産卵は海で行い、仔稚魚は海で育った後、河川中流域に溯上し成長すると考えられているが、詳しい生活史は不明である。

### 2. 分布

主に琉球諸島以南の亜熱帯・熱帯地域に分布し、日本では黒潮の影響を受ける太平洋岸の水域から記録されている。県内では西部の都田川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、中部の安倍川、波多打川、富士川、伊豆の西浦河内川、古宇川、井田大川、八木沢川、五十鈴川、青野川、大浜川、稲生沢川、河津川、鳥川、伊東宮川、大川川で確認されている。

### 3. 生息環境

河川河口域から中流域に生息し、主に淵から流れの緩い瀬にかけてみられる。

### 4. 生息状況

県内での確認の多くは全長 5 cm 未満の未成魚で、水温が低下する冬期にはみられなくなる。しかし、いくつかの河川では越冬個体が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

河口域に水門が設置された河川では、河口域の環境が大きく変わり、本種が確認されなくなった(25)。また水路化、護岸整備(13)や水質の悪化(31)による生息環境の悪化が減少原因となっているとみられる河川がある。

### 6. 保護対策

保護対策はとられていないが、伊豆地域にその保護が必要と考えられる河川がある。

### 7. 特記事項

かつて伊東市の唐人川の水源地であった浄ノ池は、温泉排水の流入によって水温が高く、本種のほかオオウナギ、オキフエダイなどの南方性の魚類が生息しており、これを貴重として池は国の特別天然記念物に指定された。しかし、土砂や下水の流入によって生息環境が悪化し、1982年に指定解除された。現在、池は埋められて存在しない。なお、河津川の支川では、本種の小型から大型個体のほか、多くの南方系の水生動物がみられる。しかし、近年、河川の改修に伴う淵の消失と水質悪化によって生息環境が悪化している。かつての伊東市の「浄ノ池」に類似した貴重な生息地であり、生息環境の保全対策が望まれる。

### 8. 主な文献

板井隆彦(1974) 琉球列島の河川に生息する魚類の食性 I—1973年夏一。琉球列島の自然と保護に関する基礎研究, I: 175-185

北川捷康(2011) ユゴイの新産地と採捕場所の特色。東海自然誌, (4): 39-41

黒田長禮(1925) 静岡県伊東浄ノ池の魚類。内務省天然記念物調査報告, 動物の部: 65-81

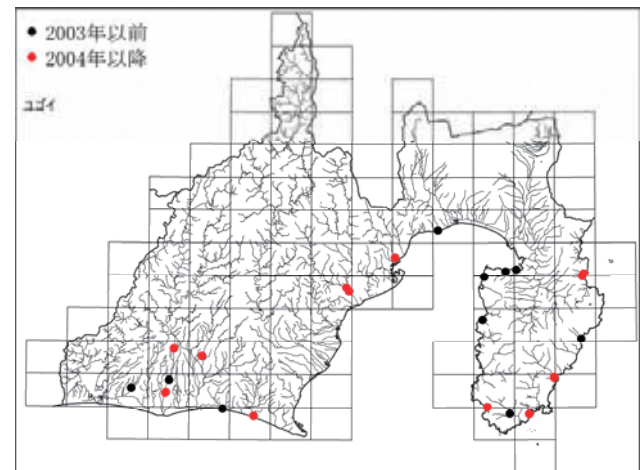
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40564~40565, 40773)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI 13765~13769)

(板井隆彦・鈴木邦弘)



河津川水系 2010年4月22日 鈴木邦弘





## オオクチユゴイ *Kuhlia rupestris* (Lacepède, 1802)

ユゴイ科 Kuhliidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 45 cm のユゴイ科魚類。体は側扁し、体高が高い。体色は銀白色で、体側の各鱗に小斑点がある。各鱗の後縁は黒く縁どられない。尾鱗の上下に黒色の斑点があるが、成長とともに不明瞭になる。回遊性魚類で、産卵は海で行い、仔稚魚は海で育った後、河川中流域にまで溯上して成長すると考えられるが、詳しい生活史は不明である。水生・陸生の昆虫や底生動物、魚類などを捕食して生活する。

### 2. 分布

主に琉球列島以南の亜熱帯・熱帯地域に分布し、国内では黒潮の影響を受ける太平洋岸の水域から記録されている。県内では西部の菊川、中部の大井川、伊豆の八木沢川、大浜川、河津川で確認されている。

### 3. 生息環境

河川の河口域から中流域に生息し、主に淵から流れの緩い瀬にかけてみられる。

### 4. 生息状況

県内では大小さまざまな河川で確認されているが、同属のユゴイに比べて確認河川数が少ない。多くの河川で確認されているのは全長 5 cm 未満のごく若い未成魚で、水温が低下する冬期にはみられなくなる。しかし、越冬したと考えられる全長 30 cm 以上の個体がえられた河川もある。ただし、この河川における繁殖の有無については未調査である。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内では津波対策として河口域に水門が設置される河川が増えているが、そのような河川では、河口域の環境が大きく変わり、建設後確認されなくなったところがみられる(25)。また護岸や水路全体の整備(13)や水質の悪化(31)による生息環境の悪化が影響していると考えられる河川がある。

### 6. 保護対策

保護対策はとられていないが、伊豆地域にその保護が必要と考えられる河川がある。

### 7. 特記事項

河津川の支川では、本種の小型から中型個体のほか、多くの南方系の水生動物がみられる。しかし、近年、河川の改修に伴う淵の消失と水質悪化によって生息環境が悪化している。その支川はかつての伊東市の「浄ノ池」に類似した生息条件を有する貴重な生息地であり、生息環境の保全対策が望まれる。

### 8. 主な文献

板井隆彦(1974) 琉球列島の河川に生息する魚類の食性 I—1973年夏—。琉球列島の自然と保護に関する基礎研究, I: 175-185

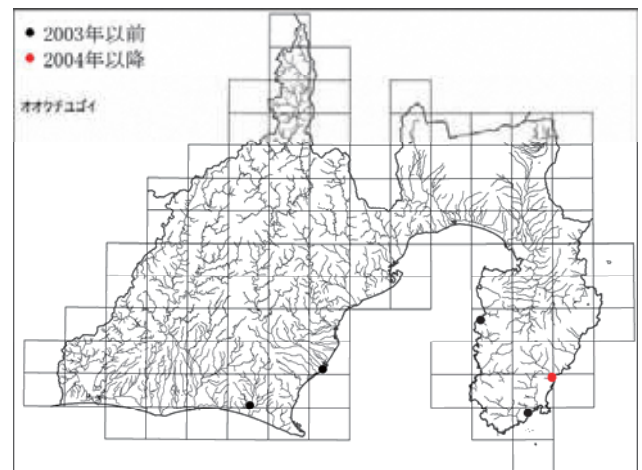
### 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40702, 40774)

(板井隆彦・鈴木邦弘・小林正明)



河津川水系 2013年4月22日 鈴木邦弘



# チチブモドキ *Eleotris acanthopoma* Bleeker, 1853

カワアナゴ科 Eleotridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・東部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 12 cm のカワアナゴ科魚類。頬にある横列の孔器列の 4 列目が、縦列の孔器列を横断する。体色は淡褐～黒褐色を呈するが、体色変化が著しい。明色時には眼の後方・後下方に 3 本の暗色帯、胸鰭と尾鰭の基部にそれぞれ暗色斑が 2 つみられる。沖縄島での繁殖期は 5～12 月で、汽水域から淡水域の石の下面に産卵する。体長 2.8 cm 以上で成熟すると考えられる。

## 2. 分布

国外ではインドー太平洋、国内では小笠原諸島、伊豆諸島、千葉県から与那国島に分布する。県内では西部の佐鳴湖、馬込川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、新野川、中部の勝間田川、瀬戸川、小坂川、大谷川放水路、東部の狩野川、塚田川、伊豆の八木沢川、那賀川、岩科川、五十鈴川、殿田川、青野川、大賀茂川、稲生沢川、河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口汽水域から下流の淡水域に生息し、汽水域でよくみられる。泥・砂泥底でカキ礁がみられる場所、岩や倒木の下などの障害物がある場所でみられる。

## 4. 生息状況

県内では主に河口域の発達した河川で確認されている。伊豆の青野川では稚魚から成魚までが確認されており、再生産している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口から下流域における護岸整備(13)や浚渫(14)による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

沖縄島では繁殖期以外にも河川への仔稚魚の加入が確認されており、より南方からも仔稚魚が供給されていることが示唆されている。

## 8. 主な文献

前田 健・山崎 望・立原一憲 (2005) チチブモドキとテンジクカワアナゴの繁殖習性と初期発生. 2005 年度日本魚類学会年会講演要旨: 84

Maeda, K., N. Yamasaki & K. Tachihara (2007) Size and age at recruitment and spawning season of sleeper, genus *Eleotris* (Teleostei:Eleotridae) on Okinawa Island, Southern Japan. *The Raffles bulletin of Zoology*, 14: 199-207

Onikura, N., J. Nakajima, T. Nishida, R. Inui, K. Eguchi, M. Nakatani & S. Oikawa (2009) Spawning sites of *Eleotris acanthopoma* (Perciformes:Eleotridae) in the Kitagawa and Sumiegawa Rivers, Kyushu Island, Japan. *Ichthyological Research*, 56(1): 105-107

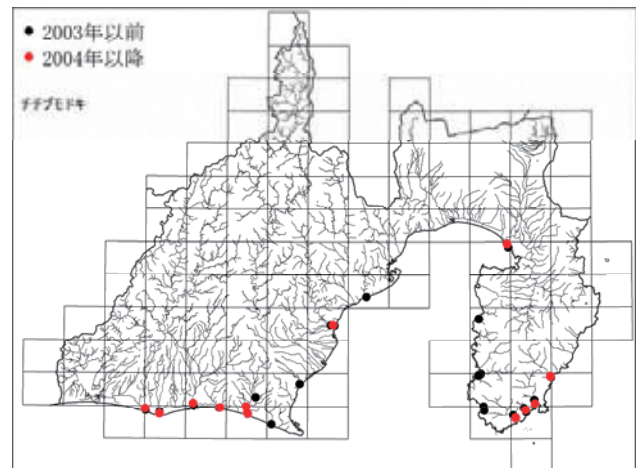
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3277, 40599, 40766, 43431, 43459, 43472)、宮内庁生物学研究所魚類資料 (BLIP 20101375)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P 17012~17014)、和歌山県立自然博物館登録標本 (WMNH-2011-PIS. 294)

(金川直幸・北原佳郎)



上: 成魚 稲生沢川 2015年9月29日 北原佳郎  
下: 未成魚 菊川水系 2017年12月3日 北原佳郎



# テンジクカワアナゴ *Eleotris fusca* (Schneider, 1801)

カワアナゴ科 Eleotridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆：要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm のカワアナゴ科魚類。体色は暗褐色または褐色で、体側に不規則な模様がある。体色変化は著しい。明色時には、眼の後方・後下方に 3 本の暗色帯がみられる。鰓蓋から腹部にかけて赤みを帯びる。頬にある横列の孔器列は 8 本で、4 列目と 6 列目が縦列の孔器列を横断する。沖縄島では体長 5 cm 以上で成熟し、5~12 月に繁殖する。淡水域の石の下面に産卵する。県内での繁殖などの生態は不明である。

## 2. 分布

国外ではインドー太平洋、日本国内では小笠原諸島、千葉県、神奈川県、和歌山県、高知県、宮崎県から与那国島の黒潮の影響が及ぶ地域に分布する。県内では西部の菊川、中部の大幡川、瀬戸川、小坂川、安倍川水系丸子川、大谷川放水路、富士川、伊豆の八木沢川、那賀川、大賀茂川、河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

下流域から中流域の純淡水域に生息する。川岸にツルヨシなどの植物群落のあるところや緩流部の泥底にある転石や倒木など障害物の下に潜む。

## 4. 生息状況

県内では 1998 年頃から確認されている。確認されたいずれの河川でも確認頻度、生息密度ともに低い。確認された個体の多くは未成魚だが、成熟サイズの個体もわずかに確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

下流域から中流域にかけての護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失があげられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

近年、神奈川県や千葉県など、静岡県以東でも確認事例が増加している。

## 8. 主な文献

Maeda, K. & K. Tachihara (2005) Recruitment of amphidromous sleepers, *Eleotris acanthopoma*, *Eleotris melanosoma*, and *Eleotris fusca* into the Teima River, Okinawa Island. *Ichthyological Research*, 52(4): 325-335

Maeda, K., N. Yamasaki & K. Tachihara (2007) Size and age at recruitment and spawning season of sleeper, genus *Eleotris* (Teleostei : Eleotridae) on Okinawa Island, Southern Japan. *The Raffles bulletin of Zoology*, 14: 199-207

山川宇宙・瀬能 宏 (2015) 相模湾とその周辺地域の河川及び沿岸域で記録された注目すべき魚類 18 種—近年における暖水性魚類の北上傾向について。神奈川県立博物館研究報告 (自然科学), (47): 35-57

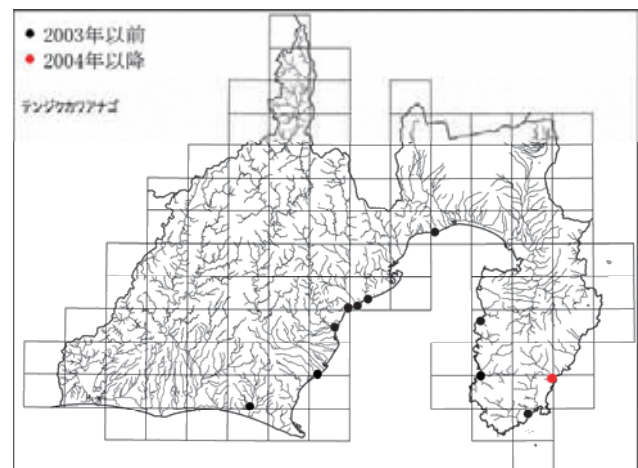
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 43447)、宮内庁生物学研究所魚類資料 (BLIP 20101372)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI 12243)

(板井隆彦・金川直幸・北原佳郎・渋川浩一)



上：成魚 河津川水系 2017年11月26日 北原佳郎  
下：未成魚 河津川水系 2015年9月29日 北原佳郎





# オカメハゼ *Eleotris melanosoma* Bleeker, 1853

カワアナゴ科 Eleotridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 部会注目種(N-III) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm のカワアナゴ科魚類。体色は淡褐～黒褐色を呈するが、体色変化が著しい。明色時には、眼の後方・後下方に 3 本の暗色帯、胸鰭と尾鰭の基底上部に暗色斑が 1 つみられる。また、鰓蓋から腹部にかけて赤みを帯びる。頬にある横列の孔器列の 3 列目と 4 列目が、縦列の孔器列を横断する。未成魚の尾鰭は黒褐色で、周縁が細い透明帯に縁どられる。汽水域で産卵するが、繁殖期、産卵場所や成熟体長は不明。

## 2. 分布

国外ではインドー太平洋、国内では小笠原諸島、群馬県、神奈川県、静岡県、和歌山県、高知県、愛媛県、大分県、宮崎県から琉球列島に分布する。県内では西部の都田川水系笠子川、天竜川、菊川、箴川、中部の勝間田川、湯日川、大井川、瀬戸川、小坂川、新川、巴川、伊豆の青野川、河津川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口汽水域から感潮域最上流付近の純淡水域に生息する。河口のカキ殻帯、ツルヨシなどの岸際植生付近の緩流部、砂礫底の緩流部にある石や倒木の下などでみられる。ウナギ捕獲用に石を円錐状につみあげた「いしぐろ」の中から複数の大型個体(体長 89.7~171 mm)が採集された事例もある。

## 4. 生息状況

県内では他のカワアナゴ科魚類に比べて確認頻度及び生息密度が低い。また、確認の多くは当歳魚と考えられる。中部の新川では体長 8.7 cm の成魚と考えられる個体も確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域や下流域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

記載年は Kottelat (2011) に準じた。

## 8. 主な文献

Kottelat, M. (2011) Pieter Bleeker in the Netherlands East Indies (10 March 1842 – ca. 21 September 1860) : new biographical data and a chronology of his zoological publications. *Ichthyol. Explor. Freshwaters*, 22(1) : 11-94.

高橋弘明・橋本健一 (2004) 高知県で採集されたオカメハゼ *Eleotris melanosoma* Bleeker の大型個体. 南予生物, 13: 31-33

山川宇宙・瀬能 宏 (2015) 神奈川県内におけるカワアナゴ属魚類の分布. 神奈川自然誌資料, (36) : 63-68

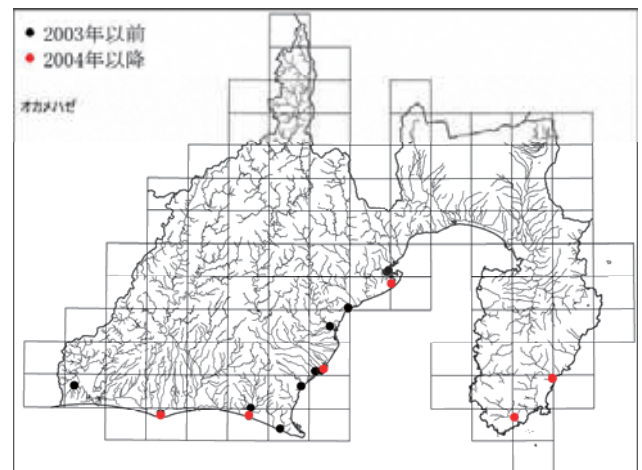
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3288, 43460)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P 17015)、徳島県立博物館魚類標本 (TKPM-P 12983~12986)

(金川直幸・北原佳郎)



上：成魚 河津川水系 2018年3月27日 北原佳郎  
下：未成魚 太田川水系 2018年10月6日 北原佳郎



# カワアナゴ *Eleotris oxycephala* Temminck & Schlegel, 1845

カワアナゴ科 Eleotridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・東部・伊豆：要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 25 cm のカワアナゴ科魚類。頬にある縦列の孔器列を横断する横列の孔器列がない。体色は淡褐～黒褐色を呈するが、変化が著しい。明色時には、頭腹面に白色の小斑が散在し、眼の後方・後下方に 2 本の暗色帯、胸鰭と尾鰭の基部に暗色斑が 2 つみられる。未成魚の尾鰭は黒褐色で、周縁が透明に縁どられる。繁殖期は 7～8 月と考えられており、野外では河口域付近にある池底の竹筒の内側面や河川下流域の石、飼育下では水槽の底や壁面、素焼き土管の内側面に球形卵を産卵した事例がある。また、孵化後満 1 年のオス個体（体長 14 cm）が成熟した事例がある。

## 2. 分布

国外では済州島、中国、国内では茨城県・福井県以西の本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では全域の各河川で確認されている。

## 3. 生息環境

河川汽水域から中流域に生息し、とくに淡水域でよくみられる。ヨシ類などの抽水植物や岸際植生が生育する緩流部、岩、倒木の下や河床に置かれた竹筒内などでみられる。また、「柴漬け」によって複数の稚魚・未成魚が採集されたという報告もある。

## 4. 生息状況

東部の狩野川、中部の小坂川、大幡川以西の河川では比較的多くみられる。その他の河川では生息密度はあまり高くない。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域から中流域における護岸や河床の整備(13)、河口付近の浚渫(14)による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

明仁親王(1967)は、カワアナゴ属 4 種について分類学的に比較検討し、各種の頭部孔器の配列が顕著に異なることを報告した。

## 8. 主な文献

明仁親王(1967) 日本産ハゼ科魚類カワアナゴ属の 4 種について. 魚類学雑誌, 14(4/5): 135-166

松尾敏生・高濱秀樹(2001) 飼育条件下で観察されたカワアナゴの求愛産卵行動. 魚類学雑誌, 48(1): 53-57

道津喜衛・藤田矢郎(1959) カワアナゴの生態・生活史. 長崎大学水産学部研究報告, 8: 191-195

道津喜衛・宮本兼夫・松尾敏生・小野幸代・高濱秀樹(2004) カワアナゴ(ハゼ亜目魚類)の採卵, 仔魚飼育と発生. 長崎大学水産学部研究報告, 85: 1-8

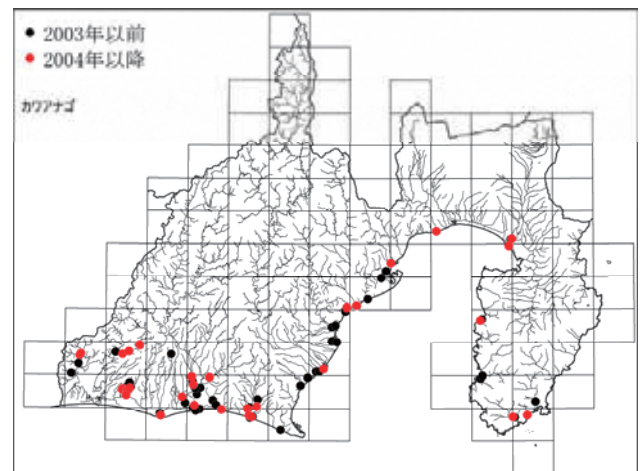
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3289, 43448)

(金川直幸・北原佳郎・渋川浩一)



上：成魚 八木沢川 2015年9月30日 北原佳郎  
下：未成魚 都田川水系 2016年7月7日 北原佳郎



# カマヒレマツゲハゼ *Oxyurichthys cornutus* McCulloch & Waite, 1918

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 15 cm のハゼ科魚類。眼上に細くて短い糸条の突起が 1 本ある。第 1 背鰭は鎌状で基部後方に暗色の突起があり、第 1 棘条が糸条に著しく伸長する。背鰭や胸鰭に顕著な暗色の点列斑紋がある。体側背部の各鱗に小黑点がある。仔魚は海域で浮遊期を過ごし、稚魚から成魚は汽水域で生息・産卵すると考えられるが、生活史の詳細については不明である。

## 2. 分布

国外では西部太平洋、国内では静岡県、和歌山県、種子島、屋久島、奄美大島、沖縄島、久米島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。県内では西部の太田川、弁財天川、菊川、中部の波多打川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口汽水域でみられ、泥底から砂泥底の場所を好み、泥底に巣穴を掘って生息する。

## 4. 生息状況

主に西部の河口干潟域が発達した河川でみられるが、各河川での生息密度は低い。定着の有無は不明だが、弁財天川では全長約 8.5 cm の個体が確認されていることから、越冬している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備・掘削 (13) や浚渫・干潟域の埋め立て (14)、河口域の水門建設 (25) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

静岡県レッドデータブック (2004) の本種の項で「本種あるいはマツゲハゼと考えられる個体が中部地域の波多打川河口でえられており」との記述があるが、マツゲハゼではなく本種であることが確認されている。

## 8. 主な文献

Pezold, F. & H. K. Larson (2015) A revision of the fish genus *Oxyurichthys* (Gobioidei : Gobiidae) with descriptions of four new species. *Zootaxa*, 3988(1): 1-95

前田 健・立原一憲 (2006) 沖縄島汀間川の魚類相. 沖縄生物学会誌, 44: 7-25

渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏 (2017) 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の 1 未記載種と日本産同属魚類の分類の現状. 東海自然誌, (10): 43-55

鈴木寿之・瀬能 宏・坂本勝一・岩田明久・藍澤正宏 (2000) ナガセハゼの記録及びマツゲハゼに関する分類学的問題. 伊豆海洋公園通信, 11(6): 2-6

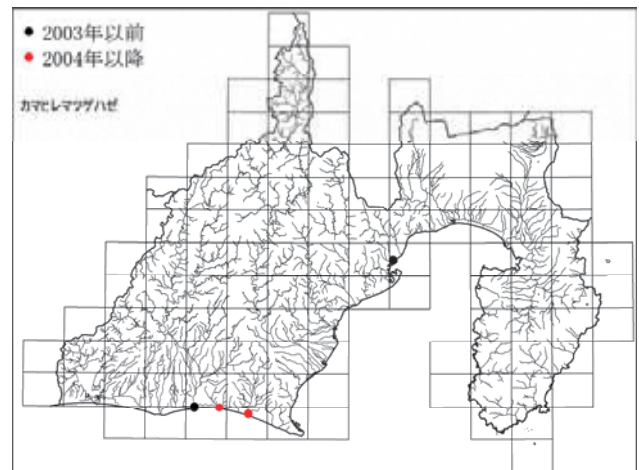
武内啓明・玉井隆章・北野 忠 (2010) 静岡県で採集されたノボリハゼ属及びサルハゼ属魚類. 南紀生物, 52(2): 105-108

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40563, 40598)、近畿大学農学部魚類資料 (KUN-P 41278, 41720)



菊川 2017年10月8日 北原佳郎



(渋川浩一・板井隆彦・北原佳郎・森口宏明)



# タネハゼ *Callogobius tanegasimae* (Snyder, 1908)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 12 cm のハゼ科魚類。体は細長く、頭部には縦横にはしる皮質の隆起がみられる。頬と鰓蓋及び第 1 背鰭より前方の背側には鱗がない。胸鰭と尾鰭も長い。成魚の体色は茶褐色を呈するが、幼魚は乳白色地で体側に黒褐色の太い横縞模様が 2~4 本ある。汽水域で産卵し、両側回遊魚と同様に川と海を回遊していると考えられる。

## 2. 分布

国外では台湾、フィリピン、国内では神奈川県、静岡県、三重県、和歌山県、高知県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県に分布する。県内では西部の太田川、菊川、中部の勝間田川、坂口谷川、小坂川、巴川、波多打川、伊豆の西浦河内川、岩科川、青野川、大賀茂川、稲生沢川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口付近から内湾の汽水域にかけて生息する。泥・砂泥底でカキ礁の間隙などでみられるほか、テッポウエビ類と共生する例もみられる。

## 4. 生息状況

県内では河口域の発達した河川の汽水域だけで確認されている。太田川、巴川、青野川では比較的個体数が多い。また、青野川では年間を通して確認されており、再生産していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因となる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

ミトコンドリア DNA 塩基配列による系統解析の結果、西表島産の個体は、和歌山県・沖縄島のものと明瞭に異なることから、沖縄諸島と八重山諸島の間での地理的隔離の存在が示唆されている。

## 8. 主な文献

荒尾一樹・大和 剛・石田 淳 (2008) 静岡県の河口域で採集された魚類。豊橋市自然史博物館研究報告, (18): 29-32

環境アセスメントセンター (2009) 水生生物生息状況等調査業務委託 (稲生沢川) 報告書。環境アセスメントセンター, 静岡, 33 pp.

向井貴彦 (2006) 日本-琉球列島のタネハゼにおけるミトコンドリア DNA の種内系統。日本生物地理学会会報, 61: 45-49

前田 健 (2016) 両側回遊とは? バリエーションから考える。海洋と生物, 38(4): 350-355

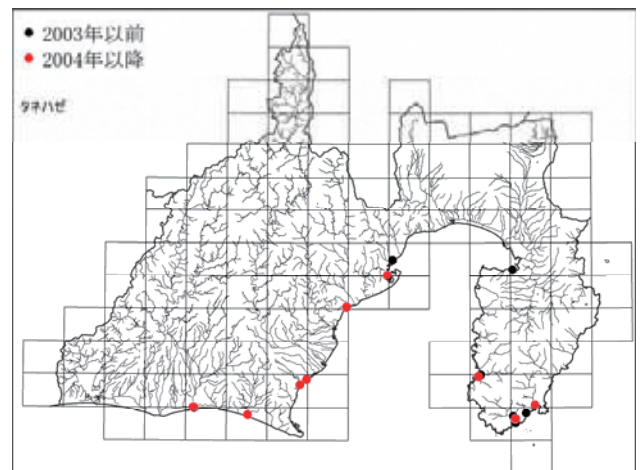
武内啓明・玉井隆章・北野 忠 (2010) 静岡県で採集されたノボリハゼ属及びサルハゼ属魚類。南紀生物, 52(2): 105-108

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40767)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NR 66802)



上: 成魚 巴川 2015年5月5日 北原佳郎  
下: 幼魚 小坂川 2016年8月18日 北原佳郎



(北原佳郎・渋川浩一)

# ナンヨウボウズハゼ *Stiphodon percnopterygionus* Watson & Chen, 1998

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 5 cm のハゼ科魚類。吻が丸く、口は下面に位置する。オスでは、第 1 背鰭が鎌形に伸長し、頭部が輝青緑色のものや頭部から尾柄までが輝青色のものなど色彩の変異がみられる。メスでは、第 1 背鰭が伸長せず、体側には吻端から尾柄中央と眼の後方から尾柄上端に至る黒色縦帯がみられる。雌雄ともに体長約 2 cm で成熟する。沖縄島での繁殖期は 5~12 月で、淡水域の石の下面に洋ナシ形の小型卵を産卵する。孵化後に海へ下り、2 カ月半~5 カ月で河川を遡上する。

## 2. 分布

国外では台湾、グアム、パラオ、国内では小笠原諸島、静岡県、和歌山県、高知県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県に分布する。県内では西部の菊川水系、伊豆の河津川水系で確認されている。

## 3. 生息環境

河川中流から渓流域に生息し、流れの緩やかな淵や平瀬の中層や河床の転石上でみられる。

## 4. 生息状況

全体的に個体数は少なく、個体数の年変動があるため、増減を把握しにくい。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13) による生息環境の悪化や消失、河口周辺の海岸整備 (14) による仔稚魚の河川加入への影響が原因と考えられる。また、観賞用に流通している例もみられるため、業者や愛好家による捕獲圧の影響 (41) も懸念される。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

これまで、本種の学名には *Stiphodon elegans* (Steindachner) があてられてきたが、Watson & Chen (1998) によって新種記載され、*Stiphodon percnopterygionus* と命名された。

## 8. 主な文献

北原佳郎 (2012) 静岡県伊豆地域で採集されたナンヨウボウズハゼ. 兵庫陸水生物, 63: 43-48

Yamasaki, N. & K. Tachihara (2006) Reproductive biology and morphology of eggs and larvae of *Stiphodon percnopterygionus* (Gobiidae : Sicydiinae) collected from Okinawa Island. Ichthyological Research, 53(1): 13-18

Yamasaki, N., K. Maeda & K. Tachihara (2007) Pelagic larval duration and morphology at recruitment of *Stiphodon percnopterygionus* (Gobiidae : Sicydiinae). The Raffles Bulletin of Zoology, supplement, 14: 209-214

Watson, R. E. & I. -S. Chen (1998) Freshwater gobies of the genus *Stiphodon* from Japan and Taiwan (Teleostei: Gobiidae: Sicydiini). *aqua*, 3(2): 55-68

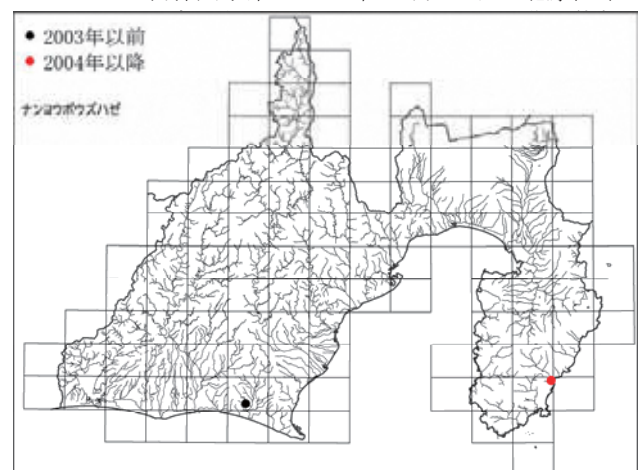
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI)、宮内庁生物学研究所魚類資料 (BLIP20101356~20101369)、和歌山県立自然博物館登録標本 (WMNH-2011- PIS. 289~293)

(北原佳郎・渋川浩一)



上: オス 河津川水系 2010年11月22日 北原佳郎



# ノボリハゼ *Oligolepis acutipennis* (Valenciennes, 1837)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種): 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 9 cm のハゼ科魚類。目から上顎の後端後方に伸びる黒色帯がある。口の後端は目の後縁を越えない。体側には大小の縦列斑が交互に並ぶ。第1背鰭は大きく「のぼり状」で、尾鰭は尖る。仔魚は海域で浮遊期を過ごし、稚魚から成魚は汽水域で生息、産卵すると考えられるが、生活史の詳細については不明である。

## 2. 分布

国外ではインド、西部太平洋、国内では千葉県、静岡県、和歌山県、高知県、宮崎県、鹿児島県、五島列島、種子島、琉球列島に分布する。県内では西部の天竜川、太田川、弁財天川、菊川、中部の小坂川、伊豆の青野川で確認されている。

## 3. 生息環境

河口汽水域でみられ、泥底から砂泥底の場所を好み、泥底に巣穴を掘って生息する。

## 4. 生息状況

主に河口干潟域が発達した河川でみられるが、各河川での生息密度は低い。定着の有無は不明であるが、菊川では全長約 7 cm の個体が確認されていることから、越冬している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の個体数減少は、河口域における護岸整備・掘削 (13) や浚渫・干潟域の埋め立て (14)、河口域の水門建設 (25) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

日本では、本属の種は本種とクチサケハゼ *Oligolepis stomias* の2種が分布する。クチサケハゼは静岡県でも確認されており、本種と同所で採集される例が多い。

## 8. 主な文献

北原佳郎 (2008) 静岡県伊豆地域初記録の魚類. 南紀生物, 50(1): 85-90

前田 健・立原一憲 (2006) 沖縄島汀間川の魚類相. 沖縄生物学会, 44: 7-25

リバーフロント整備センター 編 (2006) 中部の河川魚類図鑑. 国土交通省中部地方整備局中部技術事務所, 名古屋, 16 + 146 + 69 + 12 pp.

武内啓明・玉井隆章・北野 忠 (2010) 静岡県で採集されたノボリハゼ属及びサルハゼ属魚類. 南紀生物, 52(2): 105-108

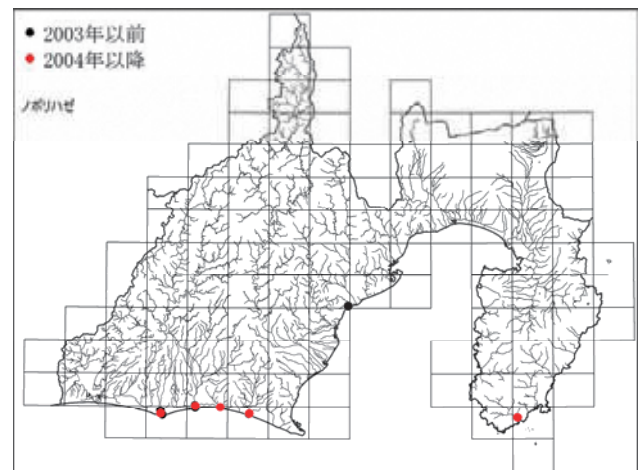
## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 43454)、宮内庁生物学研究所魚類資料 (BLIP 20070245)、近畿大学農学部魚類資料 (KUN-P 41715~41717)

(渋川浩一・板井隆彦・北原佳郎・森口宏明)



菊川 2010年11月24日 森口宏明





# ヒナハゼ *Redigobius bikolanus* (Herre, 1927)

ハゼ科 Gobiidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)/ 西部・中部・東部・伊豆 要注目種(N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 3 cm の小型のハゼ科魚類。体は側扁して体高が高い。体側には黒色斑が並び、鱗の外縁が褐色に縁どられる。成熟したオスは頭部が大きく発達して下顎後端が眼の後縁を越えるほか、第 1 背鰭が伸長する。繁殖期は、沖縄島では 4~12 月、四国では 7~9 月で、県内の状況については不明である。汽水域潮間帯から淡水域のカキ殻の内側や石の底面に長楕円形の小型卵を産卵する。オスは孵化後約 3 カ月で 2 次性徴を示し体長 19.8 mm 以上、メスは体長 18 mm で成熟する。

## 2. 分布

国外では台湾、サイパン島、バリ島、ニューカレドニア、南アフリカ、国内では太平洋側では東京湾から西表島、日本海側では福井県、兵庫県、隠岐、対馬、五島列島に分布する。県内では西部の馬込川、天竜川、太田川、弁財天川、菊川、箴川、中部の萩間川、勝間田川、坂口谷川、栃山川、瀬戸川、小坂川、新川、巴川、庵原川、波多打川、東部の狩野川、塚田川、伊豆の西浦河内川、岩科川、青野川、大賀茂川、稲生沢川、河津川、伊東大川などで確認されている。

## 3. 生息環境

河口汽水域から感潮域最上流に生息し、泥・砂泥底でカキ礁がある場所、淵などの泥底の緩流部、ツルヨシなどの岸際植生付近で見られる。

## 4. 生息状況

河口域が発達した河川では個体数が多く、周年みられるほか、当歳魚を含むさまざまな体サイズの個体も確認されており、再生産していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口汽水域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

## 7. 特記事項

かつては、ビコールヒナハゼ *Gobius bikolana*、イチマツハゼ *Stigmatogobius minutus* などとされていたが、明仁親王・目黒 (1975) による分類学的検討によって現在の和名・学名が妥当であると報告された。

## 8. 主な文献

明仁親王・目黒勝介 (1975) ヒナハゼの学名について. 魚類学雑誌, 22(1): 49-52

道津喜衛・深川元太郎・吉田隆男・濱崎将臣 (2008) ヒナハゼ (ハゼ科魚類) の生活史研究. 長崎県生物学会誌, 64: 48-62

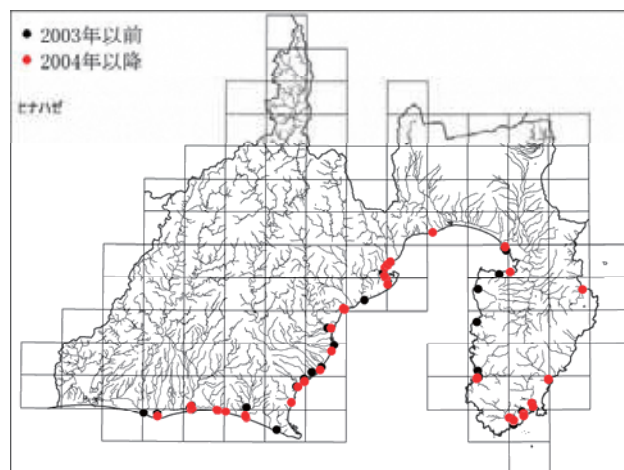
前田 健・山崎 望・立原一憲 (2004) 沖縄島におけるヒナハゼの生活史. 2004 年度日本魚類学会年会講演要旨: 55

## 9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 3248, 3292, 40626, 40762, 434561, 43468)、宮内庁生物学研究所魚類資料 (BLIP 20101376)、横須賀市自然博物館魚類資料 (YCM-P 17021~29)、和歌山県立自然博物館登録標本 (WNNH-2011-PIS. 295~300)



萩間川 2015年6月24日 北原佳郎  
上: オス 下: メス



(金川直幸・板井隆彦・北原佳郎・渋川浩一)

1. 種の解説

全長約 5 cm の小型のハゼ科魚類。体色は黒褐色、胸鰭基部上部に三角形の白色斑があり、体側には柿色の小斑が散在する。第 1 背鰭は雌雄ともに伸長せず、中央に透明帯があり、オスでは黒色斑がある。繁殖期は 7~9 月で、汽水域の石の下面やカキ殻内に長楕円形の小型卵を産卵する。成長がよいものでは孵化後満 1 年で繁殖に加わると考えられる。

2. 分布

国外の記録は、標本に基づく慎重な検討が必要である。国内では千葉県、神奈川県、静岡県、三重県、和歌山県、徳島県、高知県、愛媛県、長崎県、佐賀県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県に分布する。県内では西部の馬込川、太田川、菊川、弁財天川、中部の萩間川、勝間田川、坂口谷川、小坂川、巴川、庵原川、伊豆的那賀川水系岩中島川、青野川、稲生沢川など、河口域の発達した河川で確認されている。

3. 生息環境

河口付近から内湾の汽水域に生息し、泥底から砂泥底でカキ礁がみられる場所などでみられる。

4. 生息状況

県内では、生息密度が高い河川は少ないが、青野川では個体数が多く、周年みられるほか、産卵事例や当歳魚も確認されており、再生産していると考えられる。

5. 減少の主要因と脅威

河口域における護岸整備 (13) や浚渫 (14) による生息環境の悪化や消失が原因と考えられる。

6. 保護対策

特別な保護対策はとられていない。

7. 特記事項

明仁親王 (1984) によって学名 (種小名) 不詳のまま和名が付された。未記載種と思われ、現在、渋川らによって分類学的検討がなされている。

8. 主な文献

北原佳郎・板井隆彦 (2006) 静岡県におけるクロコハゼ *Drombus* sp. の分布及び定着状況. 2006 年度日本魚類学会年会講演要旨: 66

Onikura, N., R. Inui, K. Eguchi, T. Nishida & J. Nakajima (2008) Spawning site of “Kuroko-haze” (*Drombus* sp.) (Pisces, Gobiidae) in eastern Kyushu Island, Japan : New record from the field. *Biogeography*, 10: 13-16

Shibukawa, K., T. Suzuki & H. Senou (2013) Diversity of sand or sandy mud-dwelling gobiine genera in brackish estuaries and adjacent areas in southern Japan. Abstracts of 9th Indo-Pacific Fish Conference: 21

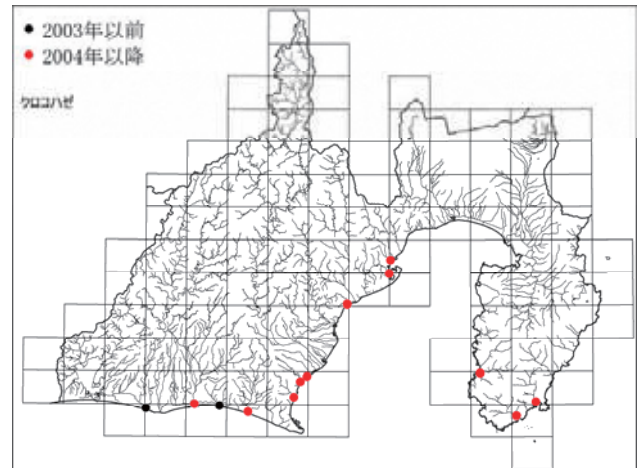
9. 標本

ふじのくに地球環境史ミュージアム魚類資料 (SPMN-PI 40765)、神奈川県立生命の星・地球博物館魚類資料 (KPM-NI 16633)

(北原佳郎・渋川浩一)



上：オス 太田川 2015 年 10 月 10 日 北原佳郎  
下：メス 勝間田川 2015 年 6 月 28 日 北原佳郎



## 6. 昆虫類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

静岡県において 2017 年までに記録された昆虫の種数（種・亜種）（本調査で対象とした目に限る）は、トンボ目 11 科 100 種、ゴキブリ目 6 科 13 種、カマキリ目 2 科 7 種、バッタ目 12 科 149 種、ナナフシ目 1 科 7 種、ハサミムシ目 4 科 13 種、カメムシ目（水生種）16 科 63 種、コウチュウ目 114 科 4,923 種、チョウ目（ガ類）52 科 1,870 種、チョウ目（チョウ類）5 科 159 種、合計 7,306 種であり、2004 年版と比較して 792 種増加した。とりわけコウチュウ目で 766 種が新たに記録されている。

静岡県は富士山、伊豆半島、南アルプス、長い海岸線など、地質や地勢が変化に富み植生も豊かであることから、昆虫相も南方系の種から北方系の種に至る多くの種が生息し、コウチュウ目・チョウ目（チョウ類）・トンボ目・バッタ目はいずれも全国 5 位以上で、全国的にもきわめて豊かな県である。

### (2) 調査の概要

文献調査と現地調査を合わせて実施した。文献調査は 65 年間のデータが集積されている静岡昆虫同好会誌「駿河の昆虫」を主体に各種の報告書などを調査した。現地調査は南アルプス、富士山、伊豆地域、その他の山間地などについて、それぞれの地域を年ごとに主要調査区域として調査した。調査の方法は、ライトトラップ、ベイトトラップなどによるトラップ法、見つけ採り法、スウィーピング法、ビーティング法など目的とする種の採集に適した様々な方法により行った。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

レッドリストの評価の対象とした種は静岡県に土着している種とした。したがって、この種の中には下記の種は入らない。

ア 台風などの自然現象により、あるいは明らかに人為的な行為により、他の地域から一時的に飛来・運ばれた種

イ 何らかの理由で飛来あるいは運ばれ、次の世代が発生したものの、継続的には続かないとみられる種

ただし、自然現象あるいは人為的に分布を拡大し、現在、確実に定着しており、今後も定着が見込まれる種は含まれる。

### (4) レッドリスト種の改訂で明らかになったこと

前回（2004 年）のレッドリスト種（絶滅～要注目）は 155 種であった。これと比較して本書に掲載されたレッドリスト種は 198 種となり 43 種増加した。このうち絶滅となったものは、2004 年では 2 種であったが、今回では 6 種となり 4 種増加した。絶滅のおそれのある種の内訳は、絶滅危惧 I A 類（CR）20 種、絶滅危惧 I B 類（EN）14 種、絶滅危惧 II 類（VU）26 種となり、絶滅を含む総数は 2004 年の 45 種から今回の総数は 66 種となり、21 種増加している。

絶滅及び絶滅危惧のランクが高くなった種を見ると草原性の種の衰亡が顕著である。

### (5) 減少の主要因と脅威

減少の要因としては一般的には、①各種の開発や土地利用などによる生息地の減少や悪化、②気候の変動、③他の動物との関係、④採集圧、などが考えられる。

草原性の昆虫に関してみれば、富士山では各種の開発によるほか、以前のように採草、火入れをしなくなったため草原は縮小し、質の低下をきたしている。また耕作地や森林の周辺の草地も草刈りが行われなくなったことによりやぶ状となり多様性が失われている。さらに、農・林道の舗装の影響が大きい。トンボをはじめとする水生の昆虫に関しては、農薬の影響や、外来生物の影響が大きい。



また、ニホンジカの影響は特に大きく、昆虫の食餌植物が食害に遭うだけでなく、吸蜜植物の被害も大きく、また成虫の行動空間がなくなることの影響も大きいと思われる。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

新たに絶滅 (EX) にランクされた種はチョウ目 4 種 (アカセセリ、チャマダラセセリ、スジグロチャバネセセリ、シルビアシジミ) である。

アカセセリは富士山西麓の草原に 1976 年頃まで、チャマダラセセリは富士山の草原に 1995 年まで、スジグロチャバネセセリは水窪町に 1975 年まで、シルビアシジミは富士山南麓、富士川堤防に生息し、天竜川堤防には 1993 年頃まで生息していたとみられる。

これらの種の生息地はいずれも草原的環境であるが、種によって生息する草原の状況は自然草原から人の手で管理された草原など微妙に異なる。これらの草原は、自然状態での植生遷移の進行のほか、草刈りなどの人による管理が行われなくなったり、管理の手法が変わったり、あるいはオオブタクサなどの外来植物の侵入などにより、生息に適する環境が失われ絶滅したものとみられる。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

減少の著しい種を保全するためには減少の要因を解明し、それを取り除くことが必要である。一つの要因だけで絶滅に追いやる場合もあれば、様々な要因が重なって減少させる場合も多い。自然界ではいろいろなケースが複雑に絡み合っており、種ごとに異なった影響をあたえており、減少の要因を特定することはなかなか困難である。

絶滅危惧種を保全するためには生態をより詳しく究明し、減少する要因を明らかにし、保全対策の手法につなげなければならない。しかし、絶滅危惧種となっている昆虫類の各種について要因を明らかにすることは困難であるので、要因が単純とみられる一部の種から対策を立てるしかないであろう。

その例を以下に挙げる。これらの保全対策を総合的に行うためには具体的な行動計画の樹立と実施する体制が必要である。

ア ニホンジカ及び外来生物の影響が著しいので、この対策が急務である

イ 保全対策手法が明確であり、保全すべきランクの高い種については集中し、確実に対策を実施する

ウ 法律・条例で定められている地域などにおいて、環境整備を確実に行う必要がある

エ 保全対策の手法が確立していないのでこの研究に力を入れる

オ 民地での保全対策をどのようにするか検討が必要である

カ 農林業の施業の手法や土木工事の工法が大きな課題である

#### (8) 文献 (多くの種で参考とした文献)

高橋真弓 (1971) 富士山の蝶類. 富士山 (富士山総合学術調査報告書) : 966-983. 富士急行株式会社.

高橋真弓 (1975) 南アルプス南部における蝶類各種の記録. 南アルプス・奥大井地域学術調査報告書 : 72-101. 静岡県自然保護協会.

高橋真弓 (1979) チョウ 富士川から日本列島へ. 築地書館, 東京, 243 pp.

清 邦彦 (1988) 富士山にすめなかつた蝶たち. 築地書館, 東京, 180 pp.

諏訪哲夫 (2003) 静岡県の蝶類分布目録. 静岡昆虫同好会, 静岡, 1368 pp.

白水 隆 (2006) 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社, 東京, 336 pp.

岸田泰則 (2011-2013) 日本産蛾類標準図鑑 I~IV. 学研教育出版, 東京.

日本直翅類学会 編 (2006) バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑・北海道大学出版会, 札幌, 687 pp.

(諏訪哲夫)

# スジゲンゴロウ *Hydaticus (Guignotites) satoi* Wewalka, 1975

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅 (EX) ]

## 1. 種の解説

体長 12~15 mm。体はおおむね楕円形で腹背に少し扁平。黒色で、頭部前方、前胸背板両側、翅鞘両側の2縦条は黄褐色、翅鞘の2縦条紋は中央後で融合し縦長のY字状を呈する。肢及び腹面は赤褐色、腹面は網状微細印刻を装い、光沢が鈍い。

水中で生活し、成虫・幼虫ともに肉食性である。成虫は夏季に灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、東南アジアに広く、国内では本州（関東以西）、四国、九州、屋久島、琉球（トカラ中之島）に分布する。県内では伊東市（1959年採集）と榛原郡金谷町（現島田市）（1950年採集）の記録があるのみで、他に古い伊豆半島の昆虫目録中にデータの無い疑問符付きの記録がある。

## 3. 生息環境

主に平野部の水生植物の繁茂した池沼に生息していた。かつては水田や休耕田にも見られたらしい。

## 4. 生息状況

県内では伊東市における採集例以後、追加記録はなく、近年の池沼の調査でも全く確認されなかった。1960年代を境にほぼ全国的に姿を消してしまい、静岡県においても絶滅したと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発（12）や圃場整備（15-2）などによる生息地の消失、農薬などによる池沼の水質汚染（31、32）などが考えられるが、全国的にほぼ一斉に減少した原因は不明である。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種は平地の水田に依存していたため、1950~1960年代に使用された強毒性の農薬の影響を強く受け、さらに圃場整備などによって生息環境が失われて絶滅した可能性が高いという。

## 8. 主な文献

安立綱光（1951）伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島（伊豆国立公園候補地学術報告）, pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

秋山黄洋（1988）静岡県伊東市におけるスジゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース, (81): 7

荻部治紀・高桑正敏（1998）旧神奈川県立博物館に収蔵されていた貴重な甲虫数種について. 甲虫ニュース, (123): 5

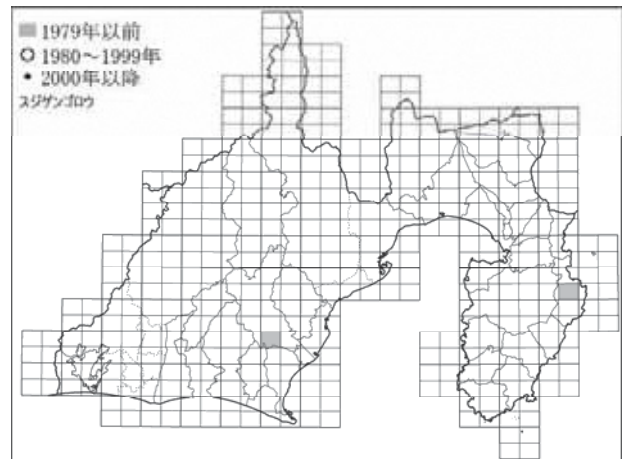
北野 忠（2010）減少する水田の水生昆虫たち. 静岡新聞社・創碧社 編, 静岡県田んぼの生き物図鑑, pp. 26-27. 静岡県農林技術研究所, 磐田.

## 9. 標本

島田市産：神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 H.Ishikawa  
島田市産 1950年8月10日 撮影:石川 均



(多比良嘉晃)

# シルビアシジミ *Zizina emelina emelina* (de l'Orza, 1869)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅(EX)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 25 mm。県内産のチョウの中で最も小型である。翅の表は、オスは明るい青紫色で黒く縁どられる。メスは黒褐色をしている。裏面はオスメスとも灰白色で、黒点が並ぶ。幼虫の食餌植物はミヤコグサやシロツメクサ。幼虫で越冬。5~10月にかけて、年に4~5回の発生とみられたが、詳しく調べられてはいなかった。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島南部、中国南西部、ミャンマーに、国内では石川県を北限とする本州、四国、九州に分布する。県内では富士川と天竜川の堤防、富士山南麓の低地から記録がある。

## 3. 生息環境

県内では河川の堤防やグラウンドなど、幼虫の主な食草であるミヤコグサが生える、草丈が低い芝型草原が生息地となっていた。

## 4. 生息状況

県東部では、富士宮市及び三島市が 1960 年代のはじめ、富士市の富士川では 1970 年頃に絶滅したとみられる。県西部では天竜川の堤防には富士川より 20 年ほど遅くまで生息していたが、1996 年頃の記録を最後にその後記録がない。生息地の状況からみて絶滅したとみられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

セイタカアワダチソウなどの外来種、ススキなど丈の高い植物やクズなどに覆われると、丈の低いミヤコグサは埋もれてしまい、本種は利用できなくなるうえ、ミヤコグサ自体が育たなくなる (54)。ミヤコグサが健全に生育できるような草丈が低い草原が広い範囲で失われ、個体数が維持できなくなったため滅亡したと考えられる。河川の堤防では草刈りが機械化され、一斉に広域の草が刈り取られて、草原の植物相の多様性が失われた (13、16) ことも原因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

神奈川県、愛知県では絶滅したとされるが、関西や千葉県など一部の地域では、シロツメクサを利用して個体数が増加しているところがある。

## 8. 主な文献

高橋真弓 (1961) 三島市のシルビアシジミ. 駿河の昆虫, (36): 987-988

高橋真弓 (1976) 富士川堤防のシルビアシジミ. 駿河の昆虫, (69): 2022

清 邦彦 (1983) 静岡県及び山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書 (1). 駿河の昆虫, (120): 3503-3530

高橋真弓・諏訪哲夫 (1990) 故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について. 駿河の昆虫, (149): 4255-4283

高橋真弓 (2005) 静岡県のシルビアシジミと所蔵標本. 蝶研フィールド, (227): 6-9

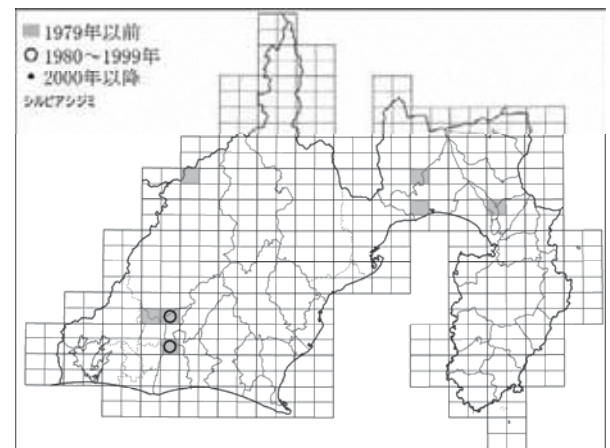
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



浜松市産♂裏面 1993年9月11日 諏訪哲夫採集





# チャマダラセセリ *Pyrgus maculatus maculatus* (Bremer & Grey, 1852)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 絶滅(EX)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN)]

## 1. 種の解説

開張およそ 30 mm。表面は黒褐色の地、裏面は赤茶色の地に小さな白斑をもつ。幼虫の食餌植物はミツバツチグリやキジムシロ（バラ科）。幼虫で越冬。成虫は、5月、8月を中心に年2回発生する。草丈の低い草原を活発に飛び、キジムシロ、タンポポなど各種の花を訪れ、吸蜜する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア、モンゴルなどに、国内では北海道、本州東北・中部、四国に局地的に分布している。県内では富士宮市、静岡市葵区、浜松市天竜区水窪町から記録がある。

## 3. 生息環境

標高 100 m に満たない低山地から 1,300 m を超える山地の広い範囲から記録がある。母チョウは地表の土が露出しているところに生えている食草に産卵する習性があることから、荒れ地状の草地在生息地となる。また、舗装されていない農道や耕作地の周りの草地も生息地となる。草丈の高くなった草原は生息地として適さない。

## 4. 生息状況

浜松市水窪町では、1974年の記録が最後となっている。静岡市では1950年代以降、藁科川流域の標高が 100 m に満たない低山地から 1,300 m を超える井川周辺の山地まで比較的広く分布していたが、1967年の地蔵峠近辺（旧大河内村）を最後に記録がない。富士宮市では富士山の西麓に広く生息し、県内では最後の生息地として近年まで残っていたが、1995年を最後にその後の記録がない。その後の継続した調査で発見されないことや、生息に適した草原が残っていないことからみて県内では絶滅したものとみられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地はいわゆる草原であるが、遷移が進んだ草原は好まず攪乱された荒地に生息する。森林の伐採が進まなくなったこと(71)、あるいは耕作地周辺や農・林道が舗装など整備(24)されたことが絶滅の要因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

全国的に見てもこの種にとって好ましい生息環境が著しく減少している。

## 8. 主な文献

福井順治(1976) 佐久間・水窪の蝶類(I)。駿河の昆虫, (94): 2773-2775

高橋真弓(2007) 静岡県産チャマダラセセリの所蔵標本。蝶研フィールド, 22(7): 16-17

高橋真弓(2009) 静岡県静岡市のチャマダラセセリ。チョウ類保全News, (10): 8-11

諏訪哲夫・高橋真弓(2007) 故小林國彦氏の蝶類標本(I)。駿河の昆虫, (219): 6081-6097

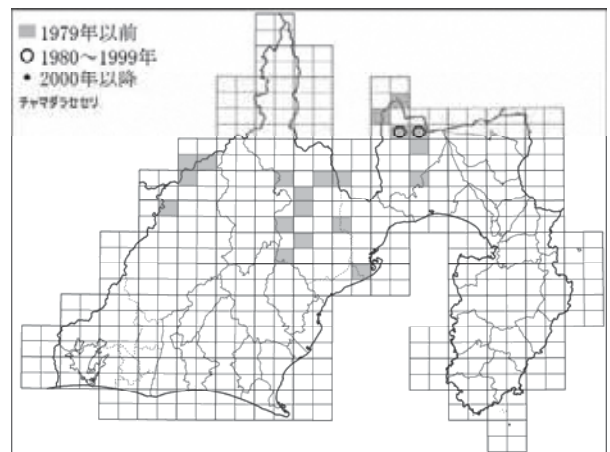
土屋忠男(2011) 静岡県東部蝶の記録(VII)。駿河の昆虫, (235): 6482-6485

## 9. 標本

各産地(多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



富士宮市産♀表面 1992年5月3日 諏訪哲夫採集



(諏訪哲夫)

# スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus leoninus* (Butler, 1878)

セセリチョウ科 HesperIIDae

静岡県カテゴリー 絶滅(EX)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧IA類(CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

開張およそ 30 mm。地色は明るい橙黄色、黒色の縁どりがあがる。裏面は橙黄色で、翅脈上が黒い。幼虫の食餌植物はカモジグサ(イネ科)などが知られるが県内では調べられていない。幼虫で越冬。年1回、8月に発生する。小型で素早く飛び、シデシャジンやヒメジョオンなどの花によく来る。

## 2. 分布

国外では中国の東北部と西部、ロシア南東部、朝鮮半島に、国内では北海道、本州、四国及び九州に局地的に分布する。県内では浜松市天竜区水窪町の兵越峠及び草木からの記録に限られる。

## 3. 生息環境

吸蜜植物の多い、明るい雑木林の林内やその林縁の草地在り生息地となる。

## 4. 生息状況

1973年、浜松市天竜区水窪町の兵越峠において県内で初めて発見され、1975年には浜松市天竜区水窪町の草木で2個体採集されたのを最後に現在に至るまで42年間記録がない。生息地の状況からみて絶滅したとみられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

県境付近の小規模な草地在り発生していたが、樹木の生長によって草原環境が消失し(54)、成虫の活動空間や吸蜜植物が失われたためと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

兵越の長野県側でも草原的な環境がなくなるなど、長野県南部でも草原環境が縮小し、衰亡が顕著となっている。

## 8. 主な文献

福井順治(1976) 佐久間・水窪の蝶類(I)。駿河の昆虫, (94): 2773-2775

高橋真弓・諏訪哲夫(1977) 1974~1976年北遠地方の蝶類採集報告。駿河の昆虫, (97): 2845-2848

清邦彦(1978) 静岡県および山梨県のスジグロチャバネセセリ属。駿河の昆虫, (100): 2922-2928

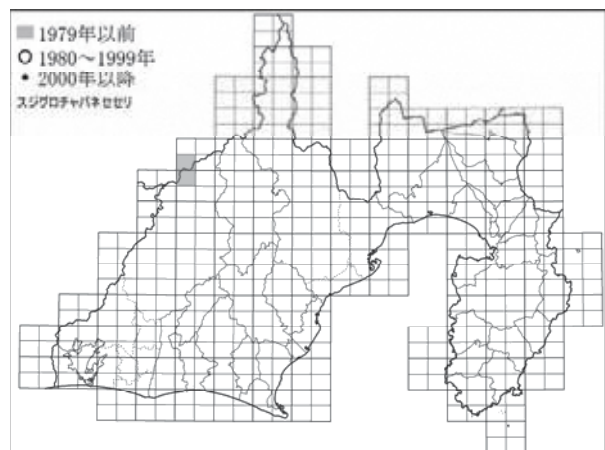
## 9. 標本

浜松市産(2個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
浜松市産♀表面 1975年8月10日 諏訪哲夫採集



# アカセセリ *Hesperia florinda florinda* (Butler, 1878)

セセリチョウ科 HesperIIDae

静岡県カテゴリ 絶滅(EX)変更コード6

[2004年版カテゴリ 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリ 絶滅危惧IB類(EN)]

## 1. 種の解説

開張およそ20~23mm。赤褐色の地に褐色の縁どりと明るい褐色の小斑紋がある。オスには前翅表面に目立つ楔形の性標がある。幼虫の食餌植物はヒカゲスゲに限られる。幼虫で越冬。成虫は7月下旬から現れ8月が最盛期。草原の各種の花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部、中国東北部、朝鮮半島に、国内では本州中部の山地に限って分布する。県内では富士山西北麓の標高800~900mの朝霧高原の山梨県との県境付近からわずかな記録があるのみである。

## 3. 生息環境

山梨県などの例ではヒカゲスゲの生育する湿潤な場所が発生地となっている。1970年代以前の生息地は各種の花が咲き乱れ、きわめて多様性の高い草原であった。また道路の舗装もされておらず適度に攪乱された状況であった。現在ではこのような環境はほぼ失われている。

## 4. 生息状況

県内ではこれまで山梨県との県境付近から数例の記録があるのみである。山梨県の本栖高原には個体数も多く広く生息しており、その生息地の南限が本県にも及んでいた。県内における最後の記録は1976年で、その後の情報は無い。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種は草原の中でもヒカゲスゲが生育する湿潤な環境に生息し、静岡県内では生息に適する草原が植生遷移や道路整備などにより消滅し(54、24)、絶滅したものと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県のかつての生息地に隣接している山梨県本栖高原でも絶滅に近い状況である。

## 8. 主な文献

渡辺始子(1957) 静岡県庵原郡及び富士郡で採集した蝶類. 駿河の昆虫, (18): 460-463

宇式和輝・石川由三(1957) 8月中旬朝霧高原根原付近の蝶. 駿河の昆虫, (19): 479-480

岡本純直(1958) 毛無山を越えて. 駿河の昆虫, (23): 600-602

高橋真弓(1978) 静岡県および山梨県のコキマダラセセリとアカセセリ. 駿河の昆虫, (100): 2929-2936

諏訪哲夫・高橋真弓(2007) 故小林國彦氏の蝶類標本(I). 駿河の昆虫, (219): 6081-6097

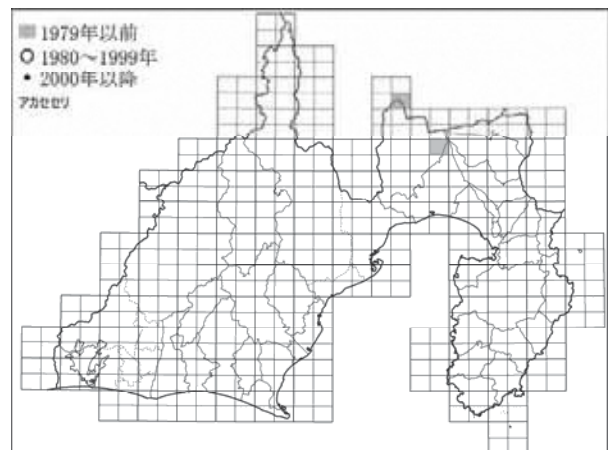
## 9. 標本

富士宮市産(2個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



©2019 K.Kobayashi  
富士宮市産♂表面 1976年8月13日 小林國彦採集





# オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* (C. Felder & R. Felder, 1862)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅 (EX) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅 (EX) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧種 I A 類 (CR) ]

## 1. 種の解説

開張 60~80 mm、ヒョウモンチョウ類の大型種で後翅の外縁に連なる紋が M 型になっていることで他のヒョウモンチョウ類と区別できる。幼虫の食餌植物はスマレ。卵で越冬。成虫は 6 月中旬から発生する。盛夏には活動を中断し 9 月頃から再び活動を始め 10 月下旬に及ぶ。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国南東部に、国内ではかつて本州、四国、九州の山地に広く分布していたが、多くの産地が消滅した。県内では富士山麓から箱根山、伊豆半島北部の山地に広く分布していたが現在では絶滅した。

## 3. 生息環境

食草のスマレの豊富な、明るく開けた草丈の低い、アザミ類、オカトラノオ、マツムシソウなどの生える草原が生息地となる。

## 4. 生息状況

東部の山地に分布していたが、1960 年代には急速に激減したと思われる。1959 年 10 月 10 日伊東市大室山で採集された 2 ♀の標本が残されているほか、1967 年に、やはり大室山で採集された確実な記録を最後に、その後の調査にもかかわらず現在まで記録がなく、生息環境もまったく失われていることから絶滅したと判断される。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生の遷移 (54) により草丈の低い草原が消滅したためと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

全国的に衰亡が著しく現在確実に生息しているのは山口県秋芳台、九州阿蘇山のみとなっている。

## 8. 主な文献

抱井 澄 (1973) 伊豆大室山のオオウラギンヒョウモンとメスアカムラサキ. 駿河の昆虫, (81): 2384-2385

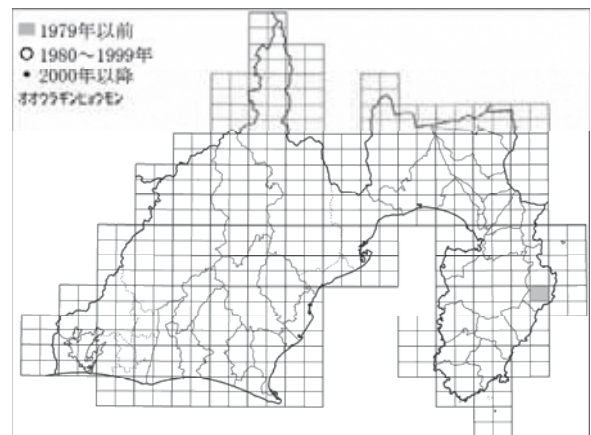
高橋真弓 (1987) 静岡県及び山梨県南部におけるヒョウモンチョウ類の分布と生息地 II. 駿河の昆虫, (137): 3959-3987

## 9. 標本

伊東市産 (2 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



伊東市産♀表面 1959年10月10日 抱井 澄採集



(諏訪哲夫)

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 38~43 mm 程度。オスメスともに胸部、腹部の背面が金緑色のトンボで、同属の近似種アオイトトンボ、オオアオイトトンボとよく似ている。これらよりやや小型で名前の通りに翅が小さく、金緑色の部分も少なめである。成虫は 6 月から池沼で見られ、特に 9~11 月の秋季には目につくようになる。未成熟な個体は生息地の近くの薄暗い林内に移動して生活する。秋季に雌雄が連結して抽水植物の茎に産卵する。卵で越冬し翌春孵化する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア沿海州にかけて分布している。国内では青森県以南の本州、四国、九州に広く分布するが、どの都府県でも生息地はかなり局地的である。県内では西部地方のほぼ天竜川下流付近に限って分布している。

### 3. 生息環境

平地から丘陵地の水生植物が豊富な古い池沼に限って生息し、ヨシ、ガマなどの抽水植物が繁茂した池沼が産地となっている。同属の他種に比べて生息している池沼が著しく限定されている理由としては、水生植物の多様性が必要であることや、移動習性が弱いことなどが考えられているが、詳しいところはわかっていない。

### 4. 生息状況

県内で生息が確認された市町は合併後の浜松市と磐田市の 2 市であるが、両市ともに生息地数が激減してしまった。現在でも確実に生息している場所は、磐田市の桶ヶ谷沼と鶴ヶ池だけである。この両池沼ではかつてはおびただしい数の個体が見られていたが、最近ではごくわずかが確認されるに過ぎず、個体群全体としては衰退の一途をたどっている。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息地であった水生植物の多い池沼が埋め立てや改修によって失われる (12、15-1) 以外にも、農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) も減少の要因となっている。近年の降水量の減少による水生植物への影響が、本種の産卵植物を減少させている可能性もある (71)。

### 6. 保護対策

生息地が限定され、移動性が小さい種と考えられているため、現存する生息地での環境変化が起こらないように配慮する必要がある。本種の生息環境にとって必要な条件を明らかにする研究が急務である。

### 7. 特記事項

全国的にも減少が著しく、環境省 編 (2006) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

- 鵜飼貞行 (1978) 静岡県中部・西部のトンボ類の採集記録. 駿河の昆虫, (102): 3028-3030
- 福井順治 (1983) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の季節消長. 駿河の昆虫, (121): 3533-3538
- 二宗誠治 (2001) コバネアオイトトンボの現状. 昆虫と自然, 36(7): 24-25

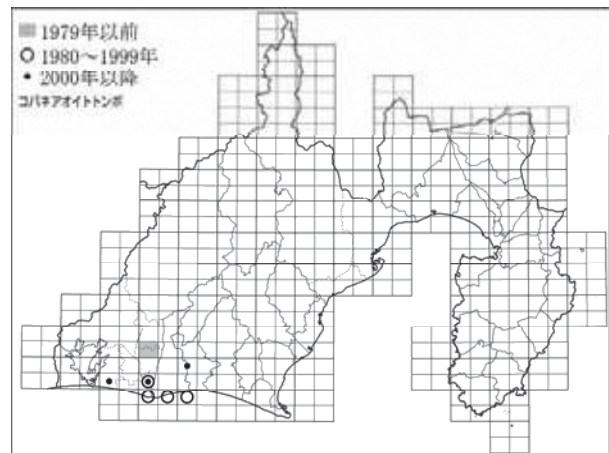
### 9. 標本

磐田市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



磐田市 2011年10月27日 福井順治



# ゲンバイトンボ *Platycnemis foliacea sasakii* Asahina, 1949

モノサシトンボ科 Platycnemididae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 36~40 mm 程度。オスの脛節が白い軍配状に広がっている特異な細身のイトトンボである。成虫は 5~8 月の夏季に流水域に出現し、6~7 月に多く見られる。未成熟な個体も生息地の近くの草むらで生活する。成熟したオスは日中は水辺に戻り、交尾した雌雄がそのまま連結して水生植物の組織内に産卵する。

## 2. 分布

日本特産亜種で宮城県以南の本州、四国、九州にかけて東西の帯状に分布するが、生息地は局地的でどの地方でも点在する程度である。県内では西部だけに記録があり、ほぼ天竜川が遠州平野に出た付近に限って分布している。国外では中国北部に別亜種が分布する。

## 3. 生息環境

平地から丘陵地の河川中流域のうち、水生植物が豊富な緩い流れに生息する。きれいな水が安定して供給されるような環境が必要で、他県では湧水に関わりのある流れに生息する例も多いというが、本県の生息環境は小河川、用水路や小さな溝である。

## 4. 生息状況

県内で生息が確認された天竜川下流域に近い浜松市では 1980 年代に絶滅したと考えられるが、その経過についての詳しいことは不明である。最後に残された生息地とされた磐田市でも、土砂の流入により生息環境が消失し、2000 年を最後に確認できなくなったので県内から絶滅した可能性もある。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息に適した緩い流れのあるところは、人間の生活圏と一致する事が多いため、その岸辺が護岸工事や改修によって植生が破壊される (13) ことが多く、農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) も減少の要因となっている。市街地化の進行によって本種が生息できる環境はほとんど残っていない現状がある。

## 6. 保護対策

現存する確実な生息地が見られない状況では有効な保護対策は立てられないが、既知生息地やその周辺の小河川や溝にはまだわずかな残存の可能性はある。最後に見られた生息地の環境を復元してみることや、その周辺地域の河川の護岸工事や水生植物の除去、水位変動を伴う環境改変を避けておく必要がある。

## 7. 特記事項

全国的にも減少が著しく、環境省 編 (2006) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

福井順治 (1983) 豊岡村のゲンバイトンボとタバサナエ. 駿河の昆虫, (121): 3540

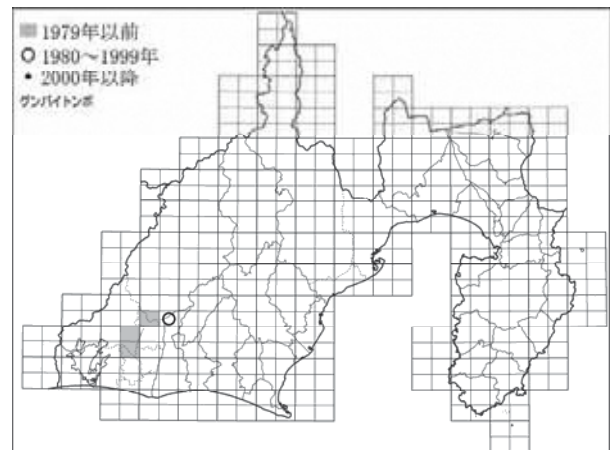
細田昭博 (1985) 浜松市のトンボ相. 駿河の昆虫, (129): 3745-3753

## 9. 標本

磐田市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 1991年6月11日 福井順治



(福井順治)



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

### 1. 種の解説

体長はオスメスともに 28~33 mm 程度。オスは緑地に黒色の斑点、メスは未熟時は橙色、成熟後は緑褐色の小型のイトトンボである。成虫は 5~9 月にかけての夏季に出現し、未成熟、成熟を問わず海水の影響を受ける河口付近のヨシ原に生息する。主に午前中に交尾し、午後にメスが単独でヨシの枯れ茎や葉鞘に産卵する。

### 2. 分布

国外では台湾、中国（香港）に分布する。国内では宮城県以南の本州と九州の都府県に分布し、本州では太平洋側に多いが、山口県と九州（福岡県、大分県、長崎県対馬）にも分布している。どの都府県でも生息地はきわめて局限されている。県内では西部に分布し、太田川と都田川の河口にあたる磐田市と浜松市北区にだけ記録されている。

### 3. 生息環境

海水の影響を受ける河口付近に、いくつかの環境条件がそろっている必要がある。それは、ある程度の広さで安定したヨシ原が保存されていること、海水が浸入しても上流からの淡水によって定期的に薄められて完全な海水の濃度にはならないこと、そして水流が穏やかでヨシの根元に枯れた茎や葉が堆積していることなどである。特に海水の影響がある環境にだけ生息することは、我が国のトンボ類では他に例を見ない。

### 4. 生息状況

県内で生息が確認された 2 市のうち、磐田市では 1990 年 7 月に発見されたが、そのわずか 2 カ月後に水門の工事によって生息地が消滅した。もう一つの浜松市北区でも、発見当時より個体数が少なくなっており、最近ではほとんど確認されていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息地となる河口域では河川改修と護岸工事、橋梁建設（13）などによって微妙な環境が破壊されることが多く、ヨシ原の刈り取り（16）の影響も脅威である。生息地が限られているだけでなく、成虫も移動性が乏しいため生息環境の分断（15-1）による孤立化の進行も問題である。

### 6. 保護対策

生息地のヨシ原の環境を確保することが重要である。河川下流域のヨシ原は護岸工事や、埋め立て、植生の改変、橋梁の建設などで破壊されやすいので水量の変化や、潮の干満への影響も含めて現在の環境を保全することが必要である。

### 7. 特記事項

比較的最近（1971 年）、茨城県涸沼（ひぬま）などで発見されて新種として記載された種であり、県内では 1990 年にほぼ同時に 2 市で発見された。

### 8. 主な文献

加藤哲男（1990）引佐郡のトンボ相（第 1 報）．駿河の昆虫，（152）： 4353-4361

福井順治・加藤哲男（1999）都田川河口におけるヒヌマイトトンボの生態．駿河の昆虫，（185）： 5170-5178

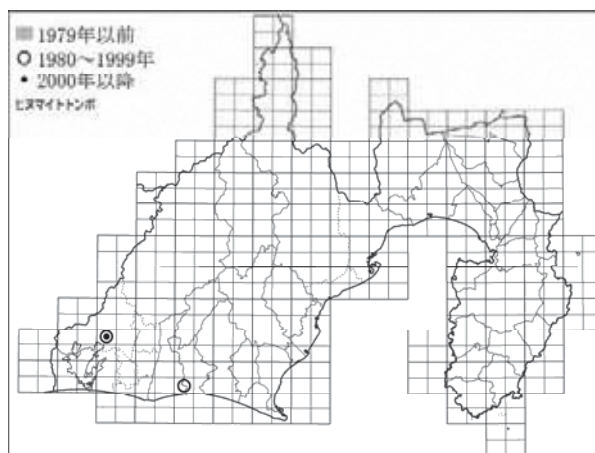
### 9. 標本

浜松市産：ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

（福井順治）



©2019 M.Fukui  
浜松市 2005 年 7 月 9 日 福井順治



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 35~43 mm 程度。オスはほぼ全身が美しい紅色、メスはオリーブ色のやや大型のイトトンボである。成虫は 5~9 月の夏季に池沼で見られ、未成熟な個体は生息地の近くの薄暗い林内に移動して生活する。成熟したオスは日中は水辺に見られ、交尾も水辺で行って雌雄が連結してイヌタヌキモ、サンショウモなど水面に浮遊した水生植物に産卵する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国中部から記録されている。国内では東北地方以南の本州、四国、九州に分布するが、九州以外では太平洋側の都府県に偏る傾向がある。どの地方でも生息地は局地的で点在する程度である。県内では西部だけに見られる。

### 3. 生息環境

平地の水生植物が豊富な古い池沼に生息する。抽水植物や浮葉植物がたくさんあることが必要で、多少の流れがあっても堆積した腐植質が多い富栄養の水域であれば溝や水路にも生息する。周囲の植生が豊富であることや、水位が安定していて水質が汚染されていないことも重要である。

### 4. 生息状況

比較的最近になって県内で生息が確認された種であるが、特異な形態をしているので過去の情報が無い地方には分布していなかったと考えられる。記録がある 3 市のうち、浜松市の生息地は小規模な池沼と水路であり、1980 年代の改修工事によって姿を消した。したがって県内では湖西市と磐田市だけに生息するが、以前は多産した桶ヶ谷沼、鶴ヶ池の両池沼ともに個体数が激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

平地の水生植物の多い池沼や水路は埋め立てや改修によって生息環境として不適になることが多く (12、13、15-1)、農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) も減少の要因となっている。この他にも外来生物による直接的な捕食 (52-3) や、水生植物が食害を受けたことによる産卵植物の消失 (54) も脅威となっている。

### 6. 保護対策

現存する生息地は孤立化しており、残されたそれぞれの生息環境の違いを生かしながら保護していくことが大切である。水域にある抽水植物や浮葉植物だけでなく、周辺部の植生も含めて大きな環境変化が起こらないようにする必要がある。また、捕食性外来動物の侵入を防ぐ対策も急務である。

### 7. 特記事項

本種は 1978 年に磐田市の桶ヶ谷沼で発見されて県内に産することがわかった種であり、続いて浜松市と湖西市で発見されるに至った。

### 8. 主な文献

鶴飼貞行 (1979) 桶ヶ谷沼でベニイトトンボを採集. 駿河の昆虫, (104): 3103-3104

福井順治 (1983) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の季節消長. 駿河の昆虫, (121): 3533-3538

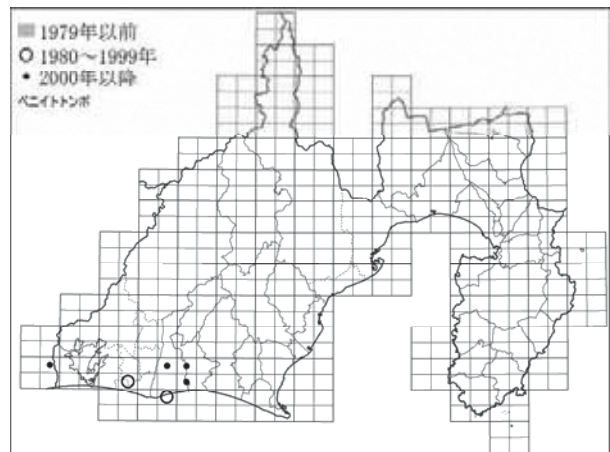
### 9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



磐田市 2004年7月17日 福井順治



# オオイトトンボ *Paracercion sieboldii* (Selys, 1876)

イトトンボ科 Agrionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 28~38 mm 程度。オスは薄青色、メスは薄青緑色の地に黒い斑紋をもつ中型のイトトンボである。同属のセスジイトトンボ、ムスジイトトンボなどによく似ている。成虫は 4~10 月にかけて池沼で見られ、春に出る個体の方が夏に見られるものより大型である。未成熟な個体は生息地の近くの岸辺の草むらで生活することが多く、成熟オスは水草のある水面で活発に行動する。交尾した雌雄は連結して水面付近に浮遊した水生植物に産卵する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に広く分布し、佐渡島、隠岐など離島にも分布するが、生息地はやや限定される傾向がある。県内では東部・伊豆と西部に点々と分布していたが、記録された場所のごくわずかである。

## 3. 生息環境

平地から丘陵地の水生植物が豊富な池沼や湿地、休耕田などに生息する。同属のイトトンボは県内には本種以外に 3 種いるが、本種が最も内陸部に分布する傾向がある。

## 4. 生息状況

県内で生息が確認されている市町は三島市、清水町、伊豆の国市、函南町、掛川市、浜松市、磐田市、湖西市である。1930~40 年代の清水町では多産していたことがわかっており、かつてはもっと広範に分布していた可能性があるが、1970 年代以降に記録された生息地ではどこも個体数は少なかった。現在では確実に生息している場所がなく、直近の記録は 2009 年に伊豆の国市で確認されたものである。

## 5. 減少の主要因と脅威

水生植物の多い池沼は埋め立てなどで直接的に消失 (12) するほか、農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) が進行しており、本種の減少の主な原因となっていると思われる。本種は内陸部のやや涼やかな丘陵地の池沼で発見されている例が多いので、気温の上昇の影響を受けている可能性もある (71)。この他にも池沼に導入された外来生物による直接的な捕食も脅威 (52-3) となっている。

## 6. 保護対策

確実な生息地がないため有効な保護対策は立てられていないが、既知生息地やその周辺の池沼にはまだ残っている可能性があり、護岸工事や水生植物の除去、水位変動を伴う環境改変を避けておく必要がある。特に山間地に残された池沼については、本種がまだ生息している可能性が高いと考えている。

## 7. 特記事項

他県では必ずしも希少な種として扱われていないことが多く、本県で特に減少した理由はよくわかっていない。

## 8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

福井順治 (1983) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の季節消長. 駿河の昆虫, (121): 3533-3538

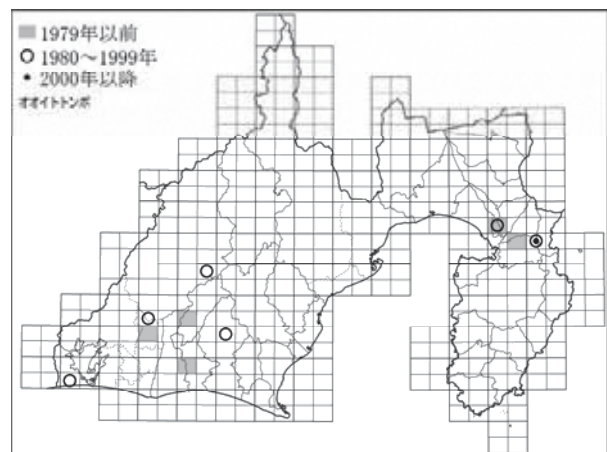
## 9. 標本

掛川市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



掛川市 1990年5月23日 福井順治





### 1. 種の解説

体長オスメスともに 74~80 mm 程度。オスメスともに黒地に黄色の縞模様を持つ大型のトンボである。成虫は 5~9 月に大きな河川に出現するとされるが、県内での成虫の採集や観察の例はない。他県での観察では成熟オスは河川の中央付近を直線的に飛翔し、メスは単独で川の中央部を飛翔し間欠的に打水産卵をする。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシアに分布している。国内では福島県以南の本州、四国、九州に分布するが、生息地はかなり局限されている。県内では西部の都田川下流付近に限って分布しており、同属の近似種であるコヤマトンボが各地に広く分布することと好対照となっている。

### 3. 生息環境

丘陵地から低山地を流れるやや大きな河川の中流域に生息し、緩やかな流れと水質がよいことに加えて、川の底質が砂地であることが重要である。コヤマトンボが広く分布するのに対して本種の生息地が限られる理由としては、幼虫が生息する川底の環境選択性が狭いことが挙げられる。本県の河川は急流域が多いため、本種の生息に適した環境をもつ河川は少ない。

### 4. 生息状況

もともと生息する個体数は多くなかったと考えられ、これまでに成虫が採集された記録はなく、幼虫が記録されているに過ぎない。さらに、県内で生息が確認された都田川でも流域の環境が悪化し、幼虫もほとんど確認されなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13) とダムの建設による水位調整 (25) によって、砂泥底の河川が大きな影響を受けたことが挙げられる。その他には、農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) も減少の要因となっている。

### 6. 保護対策

県内では生息地がきわめて限定されているため、現存する生息地での環境変化が起こらないように配慮する必要がある。特に河川の改修工事によって、川底の砂泥を大規模に動かすような事態が起こらないような対策が欲しい。

### 7. 特記事項

比較的最近 (1979 年) になって本県にも生息することがわかった。全国的にも減少が著しく、環境省 編 (2006) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

福井順治 (1980) キイロヤマトンボを都田川で採集. 駿河の昆虫, (111): 3285

福井順治 (1982) 都田川のトンボ. 駿河の昆虫, (116): 3401-3412

関川文俊・山下真矢 (2006) 浜松市都田町においてキイロヤマトンボを再発見. 駿河の昆虫, (215): 5977-5978

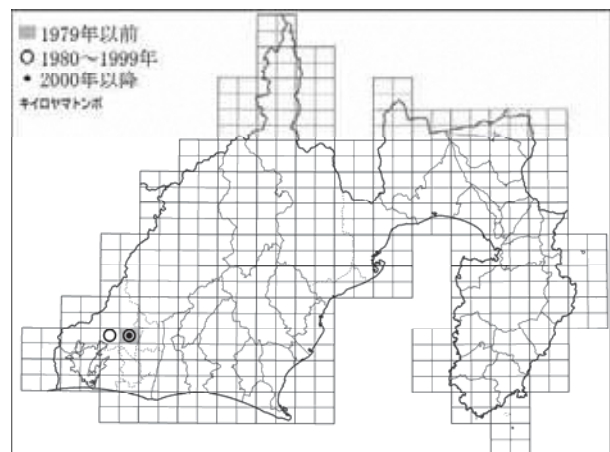
### 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Fukui

浜松市産 1980年6月1日 福井順治



(福井順治)

## エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)

エゾトンボ科 Corduliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 55~65 mm 程度。オスメスともに全身が金緑色で、胸部、腹部に黄色の斑紋がある中型のトンボで、寒地の湿原を主な生息地としていて、湿原の上空でホバリングを交えて飛翔していることが多い。よく似た同属種が多いため、捕獲して形態を確認しないと本種であることは確認できない。県内では記録例が少ないが、6~9 月頃に出現する夏のトンボである。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシアに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、北海道、東北地方、中部山岳では分布は広いが、西南日本では産地はかなり限定される。県内では浜松市浜北区と湖西市にあるそれぞれ 1 例だけが確実な記録である。標本の裏付けのない古い記録はハネビロエゾトンボの誤認である場合が多く信用できない。

### 3. 生息環境

北海道や本州の山岳地帯の場合には、開放的で冷涼な高層湿原に生息し、西南日本では丘陵地や低山地の周囲に樹林がある湿地や廃田で見られる。腐植質が堆積した浅い水たまりがある湿地が好まれる。県内にはこうした環境はほとんど存在しない。

### 4. 生息状況

県内では 1954 年の浜松市浜北区の 1 メス、2004 年の湖西市の 1 オスが確実な記録である。浜松市の産地は開発により消失し、湖西市の産地周辺は遷移の進行により湿原的な環境が消失しかけている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本県には高層湿原はほとんどなく、平地や低山地にも冷涼な水源をもつ湿地が乏しいために、もともと本種の生息に適した環境は少なかった。わずかに残っていた湿地も開発 (15-1、23) によって消失する傾向にも歯止めがかかっていないため、本種の生存は厳しさを増している。寒地系の種であることから、気温の上昇の影響を受けている可能性もある (71)。

### 6. 保護対策

記録が少なく生息域が把握しにくい種であるため有効な保護対策は立てられていない。しかし、既知生息地やその周辺の小規模な湿原的環境にはまだ生息の可能性があり、大きな環境変化を避けておく必要がある。特に湖西連峰の山すそに残された湿地には、本種の生息地があると考えている。

### 7. 特記事項

寒地系種のため東北日本では必ずしも希少な種として扱われていないことが多いが、近隣を含めて西南日本では県版レッドリストにあげている県が多い。

### 8. 主な文献

朝比奈正二郎 (1957) 日本の蜻蛉 (14) . 新昆虫, 10(12): 51-57

福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

### 9. 標本

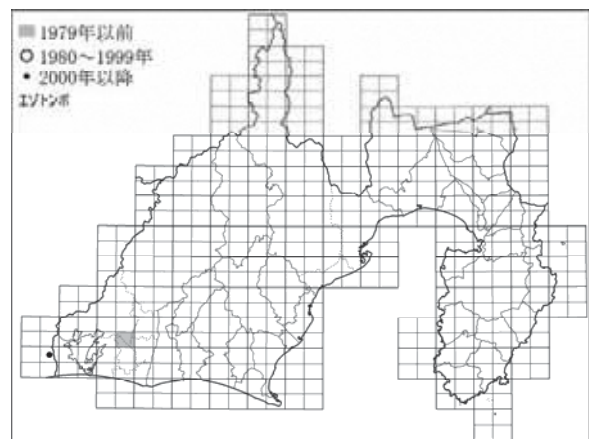
湖西市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



©2019 K. Shirai

湖西市産 2004年8月8日 白井和伸採集



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) ]

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 40~46 mm 程度。オスメスともに茶褐~黒褐色の体色で、翅に特有の斑紋をもつやや太身の中型のトンボである。成虫は 4~6 月の春季に池沼に出現し、未成熟な個体は生息地の近くの枯れ草の草原に移動して生活する。成熟したオスは水辺に戻りなわばり行動をして飛来したメスと交尾して、メスは単独で打水産卵する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島及び中国北部~中部に分布する。国内ではかつては宮城県以南の本州、四国、九州に分布していたが、もともと生息地は極限されていた。各地で減少、絶滅が相次いでいる。県内では西部の平野部に限って分布している。

### 3. 生息環境

平地の水生植物が豊富な池沼で、ヨシ、マコモなどの抽水植物がまばらに生え、腐植物が厚く堆積した環境に生息する。池沼から湿原へと遷移する途中に相当する水生植物の繁茂の状態が、生息環境の条件となっている。

### 4. 生息状況

県内で生息が確認された 2 市では、ごく最近まで両市ともに生息が確認されていたが、浜松市では 2014 年には確認できなくなったため、磐田市以外では安定した生息地はない状況である。また、関東地方ではすでに生息地がないため、磐田市の桶ヶ谷沼、鶴ヶ池は本州の中部地方以東の唯一の現存生息地であり、国内における東限の生息地でもある。

### 5. 減少の主要因と脅威

水生植物の多い自然のままの池沼は埋め立てられやすく、残されていても改修や護岸工事によって植生が失われて、生息できる環境が減少することが多い (12、15-1)。この池沼も農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) によって脅かされている。この他に外来生物の侵入による直接的な捕食も脅威 (52-3) となっている。

### 6. 保護対策

桶ヶ谷沼では環境保全と増殖のための試みが行われているが、沼の水生植物を周囲の植生とともに保全し、捕食する可能性のある外来動物の侵入を防ぐことが必要である。産地の孤立化が進んでいるため、新しい池を作って時間をかけながら生息に適した環境になるように積極的に創出する努力がないと、長期的には保護できない可能性が高い。

### 7. 特記事項

1994 年 3 月には「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種の指定を受け、採集や標本の譲渡が制限されている。

### 8. 主な文献

福井順治 (1988) 静岡県磐田市桶ヶ谷沼におけるベッコウトンボの生態観察. 月刊むし, (212): 5-11  
福井順治 (2001) 磐田市桶ヶ谷沼におけるベッコウトンボの個体数変動. TOMBO, (43): 41-44

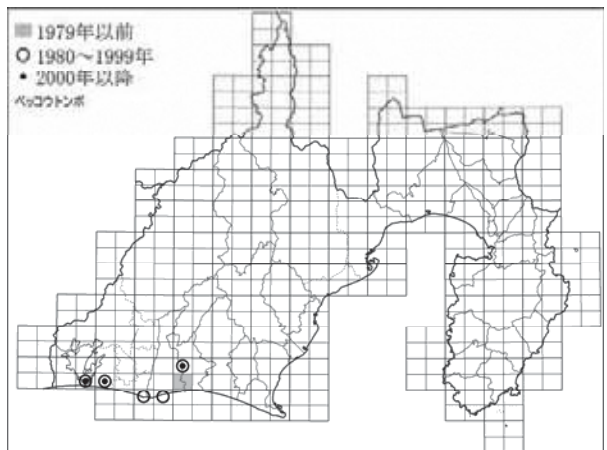
### 9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



磐田市 2012年5月8日 福井順治





# キトンボ *Sympetrum croceolum* (Selys, 1883)

トンボ科 Libellulidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 37~46 mm 程度。オスメスともにほぼ全身が橙黄色で斑紋がなく、翅にも広く橙黄色の部分がある。アカトンボ類の仲間としてはやや太身で、成虫は 7~12 月にかけて出現し、10 月が観察の適期である。成熟したオスは池沼の水面を飛翔したり、岸辺の植物などに静止してなわばり行動を行う。産卵は雌雄が連結して連続的に打水産卵をする。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部~中部、ロシア東部に分布する。国内では北海道から九州まで広く分布するが、生息地はかなり局地的である。県内では東部、中部、西部のいずれにも記録があるが、1970 年以降ではわずかな場所で記録があるにすぎない。

## 3. 生息環境

平地から丘陵地にある開放的なやや大きめの池に生息し、水位が安定していて水質が良好な池沼が主な生息環境である。池沼内の水生植物の繁茂の状況よりも、水温、水質や周囲の木立の存在など植生に敏感な種である可能性がある。

## 4. 生息状況

県内の記録地のうち、東部・伊豆の三島市には古い記録しかなく、西部の磐田市、浜松市でも 1970 年代には姿を消した。静岡市で 2 ヶ所あった生息地も、1 ヶ所は 1990 年代、もう 1 ヶ所も 2000 年には見られなくなったため、確認できる産地は島田市だけとなってしまったが、そこもほぼ壊滅状態である。

## 5. 減少の主要因と脅威

平地や丘陵地の池沼は埋め立てや改修によって環境が改変されることが多く (13)、本種は水質悪化に対する耐性が弱いと考えられるため、特に農薬や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) が脅威である。産地の孤立化によって、個体群の存続が困難になる可能性もある (71)。

## 6. 保護対策

現存する生息地の環境を残すことが最重要の課題であり、ほぼ孤立化した状態になってしまった現状では、当該生息地の環境変化がそのまま絶滅へとつながる危険性があるため、池沼の水生植物や周囲の植生の改変は避けるべきである。水質悪化や外来生物の導入にも注意をする必要がある。

## 7. 特記事項

移動性が大きい種が多いアカトンボ類にあって、偶発的な記録がないことは注目すべきことで、生息地からの分散がほとんどないことも、減少の一因となっているものと考えられる。

## 8. 主な文献

江間修司 (1988) 静岡市諸川池のトンボ相. 駿河の昆虫, (144): 4137-4142

福井順治 (1994) 野守の池とその周辺地域のトンボの記録. 駿河の昆虫, (165): 4690-4692

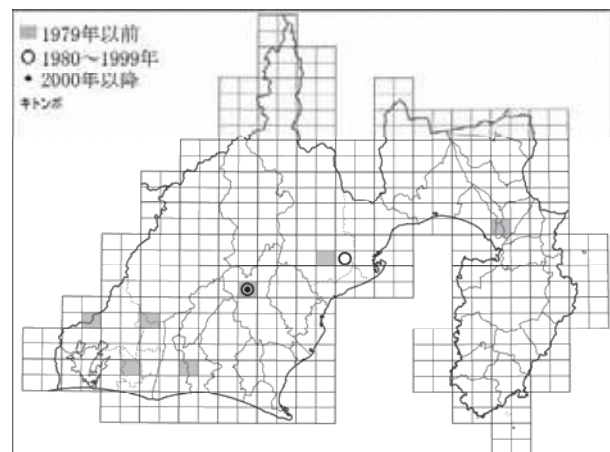
福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

## 9. 標本

島田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



島田市 2008年10月18日 福井順治



(福井順治)

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 45~52 mm 程度。オスメスともにほぼ全身が淡黄褐色で斑紋がなく、翅も全体が淡黄色を呈する。アカトンボ類の中では最大の種で、成虫は 7~11 月にかけて出現し、未成熟な個体は鮮やかな橙黄色を呈して美しい。成熟したオスは池沼の水面を飛翔したり、水辺の周辺の草原に見られ、なわばり行動や探雌飛翔が見られる。産卵は雌雄が連結して行う打水産卵が普通であるが、単独のメスが産卵することもある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部~北部、ロシア沿海州に分布する。国内では青森県以南の本州、四国、九州に分布するが、生息地はきわめて局地的で、どの地方でも産地はごくわずかである。県内では中部と西部の海岸付近を中心に記録されているが、その多くは一時的な移動個体が確認されたものである。

### 3. 生息環境

平地から丘陵地にある水生植物が豊富で、比較的大きく開放的な池沼に生息する。池沼の大きさや水生植物の繁茂の状態だけでなく、水質や水位変動、池沼の周囲の草地的環境があることなど、生息環境として要求する条件が多いと考えられている。

### 4. 生息状況

県内で生息が確認された生息地のうち、何年も続けて確認されたところはほとんどないが、唯一浜松市の生息地だけは連続して記録があった。しかしここでも 1995 年の記録を最後に観察例が途絶えており、現在のところ確実に生息している県内の産地はなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

平地~丘陵地には水生植物の多い池沼がもともと少なく、本種の生息できる環境条件が残っている池沼はほとんどない。生息していた池沼でも護岸工事 (12) などのわずかな環境の変化によって生息に適さなくなったり、農業や生活排水の流入による水質悪化 (31、32) や外来生物の侵入による影響 (52-3) も大きいと考えられる。

### 6. 保護対策

現存する生息地がなくなった状況下では有効な保護対策は立てられないが、かつての生息地やその周辺にはまだわずかに残存している可能性がある。生息が可能と思われる池沼を周辺部の草原的環境も含めて確保することが必要である。

### 7. 特記事項

近隣の県においても確認されないため、東海地方としても危機的な状況にある。全国的にも減少が著しく、環境省 編 (2006) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

細田昭博 (1985) 浜松市のトンボ相. 駿河の昆虫, (129): 3745-3753

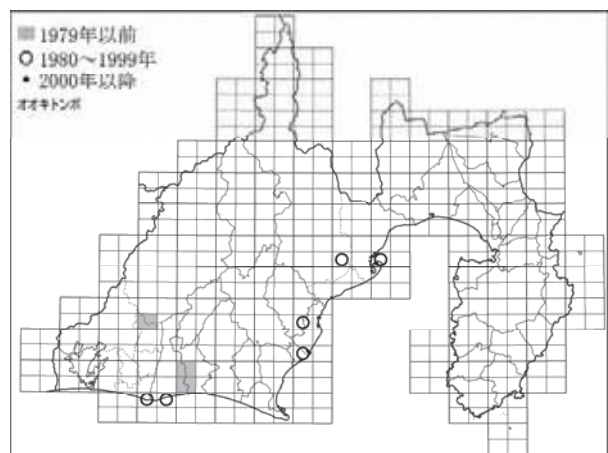
高橋真弓 (1989) 静岡市鯨ヶ池のアカトンボ類. 駿河の昆虫, (145): 4178

### 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M. Fukui  
浜松市 1993年10月22日 福井順治



(福井順治)

### 1. 種の解説

体長オス 15.0 mm、メス 15.0~20.5 mm。ウスイロササキリ *C. chinensis* (Redtenbacher, 1891) に少し似るが、産卵器が異なる。メス産卵器はほぼまっすぐで太くてやや長く、長さは 10 mm 前後ある。雌雄とも翅は通常腹端をわずかに越す程度だが、メスには産卵器先端を越す長翅型が出現する。飛翔能力は小さく、移動性も小さい。緑色型と褐色型があるが、褐色型の方が多い。「ジジジジジ…」と鳴くが、鳴き声は非常に小さく野外では聞き取りにくい。成虫は 8 月中旬以降に出現し 10 月まで見られる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、奄美大島に分布する。県内では伊豆に分布している。

### 3. 生息環境

すべての生息地は、河口部に近い海水の影響を受けるヨシ原である。河川水の塩分濃度と本種の分布との関係は明らかではないが、日本産キリギリス科の種としてみるときわめて特殊な生息環境である。

### 4. 生息状況

個体数は多くない。過去の生息状況は明らかではないが、感潮域のヨシ原のみに生息することから、多くの生息地が失われてきたことが容易に推察される。大賀茂川においては、河川改修により生息地が 200 m に満たない区間に縮小してしまった上、公園整備によりヨシ原が刈り取られ、水際わずか 1~2 m の幅のヨシ原に依存している状況にある。

### 5. 減少の主要因と脅威

原因は明らかではないが、大賀茂川のハマボウ群落は下田市指定の天然記念物であり、このハマボウ保護のためのヨシの刈り取りやハマボウの植樹によりヨシ原の面積が縮小 (16) してきていることも関係があるかもしれない。また、付近にはリゾート施設が多く水質・底質汚染などの影響 (31) も考えられる。

### 6. 保護対策

生息地はハマボウ群落が下田市の天然記念物に指定されているが、イズササキリの生息環境の保護にはつながっていない。

### 7. 特記事項

昔は各地に生息していたものと考えられるが、河川河口部は護岸工事や河床掘削などの河川改修を受けることが多いため、多くの場所で生息環境消失に伴い絶滅してきたことが容易に想像できる。

### 8. 主な文献

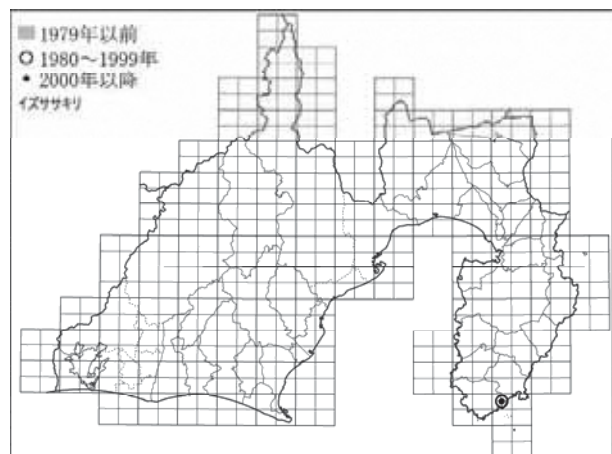
Ishikawa, H. (2004) Discovery of an interesting new species of the genus *Conocephalus* Thunberg, 1815 (Orthoptera, Tettigoniidae) from Izu peninsula, central Honshu, Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 10(2): 271-275

### 9. 標本

下田市吉佐美産：大阪市立自然史博物館所蔵(ホロタイプ)、愛媛大学ミュージアム所蔵(パラタイプ)  
(石川 均)



©2019 H. Ishikawa  
下田市吉佐美 2016年9月10日 石川 均





静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (GR) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (GR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

### 1. 種の解説

体長 11.3~12.8 mm。和名のように扁平な小判形、生時は鮮黄緑色で光沢が強いが、標本にすると黄褐色に変色する。前肢腿節は著しく肥大し鉤状の脛節とともに捕獲脚となり、後肢には長い遊泳毛を具える。

肉食性で、小昆虫や小魚を捕獲して体液を吸汁する。メスはヒシなどの水生植物の組織内に産卵する。

### 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、九州に分布する。国内での分布は局地的。県内では静岡市葵区下の鯨ヶ池、静岡市葵区足久保口組の諸川池、磐田市桶ヶ谷沼の記録がある。

### 3. 生息環境

ヒシ、ヒルムシロなどの浮葉植物や抽水植物が豊富で、流水の流入や湧水のある池沼に生息している。

### 4. 生息状況

現在までに知られていた県内の3ヶ所の生息地のうち、桶ヶ谷沼では1993年前後から、鯨ヶ池では1997年頃から、全く生息を確認できない。諸川池でも数回の調査にもかかわらず、2001年以降確認されていない。諸川池は完全に干上がってしまうことがある。

### 5. 減少の主要因と脅威

湧水量の低下(71)、釣用の撒き餌や薬剤の大量投与に起因する水質汚濁(鯨ヶ池)、植生遷移の進行や富栄養化に伴う水質の悪化(31)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)、捕食者の増加(52-3、52-4)などによって生息環境が悪化し、個体数が激減したと推察される。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は1991年に県の自然環境保全地域に指定されたが、指定時にはすでに絶滅に近い状態であったと考えられる。

### 7. 特記事項

既知の3つの生息地における生息あるいは絶滅を確認するとともに、新たな生息地を発見する必要がある。

### 8. 主な文献

石川 均 (1998) 静岡県産カメムシ類分布資料(1). *Rostria*, (47): 31-33

板井隆彦・金川直幸・小林正明 (1998) 鯨ヶ池の魚類と生息環境. *ざこ*, (14): 15-37

北野 忠 (2000) 静岡県および静岡県近海で確認された水生半翅目. *遠州の自然*, (23): 1-8

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境 桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査. (財)日本野生物研究センター, 東京, 334 pp.

吉澤賢治・北野 忠 (2002) 静岡市諸川池でのコバンムシの生息状況(2000年). 神奈川自然保全研究会報告書, (16): 27-29

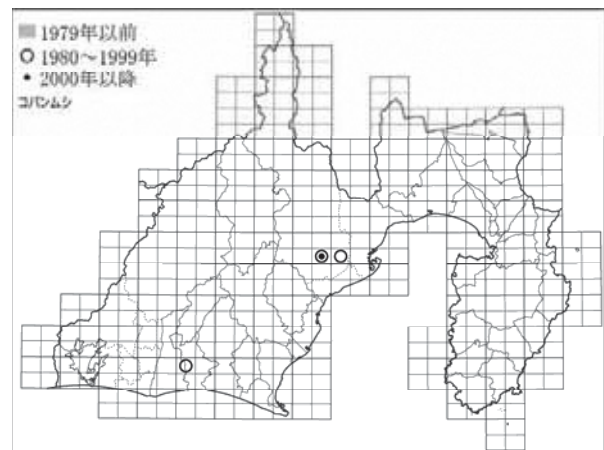
### 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



静岡市産 1986年4月8日 杉浦正義採集



## コガタノゲンゴロウ

*Cybister (Gschwendtnerhydrus) tripunctatus orientalis* Gschwendtner, 1931

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (GR) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) ]

### 1. 種の解説

体長 24~27 mm。体は長卵形で腹背にやや扁平。黒色で前胸背板と翅鞘の側縁は狭く黄褐色。体下面は黒褐色で、腹部第 5~7 腹節両側に褐色小紋を有する。

生活史はゲンゴロウ *Cybister (Scaphinectes) japonicus* Sharp, 1873 とおおむね同様であるが、幼虫は高温により適応し、成虫はより高い移動分散能力を有するという。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では本州、伊豆諸島、小笠原諸島、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では伊豆半島、榛原郡金谷町（現島田市）、小笠郡大東町（現掛川市）で記録があるが、近年の記録は大東町のものだけである。ほかに浜松市における 1963 年の採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

水生植物の繁茂する池沼に生息する。

### 4. 生息状況

県内では記録が少なく、詳細な生息状況は不明である。掛川市における採集例は近くの生息地から偶然に飛来したものと推測されているが、付近にある池沼の調査においては本種の生息を確認することはできなかった。

### 5. 減少の主要因と脅威

農薬・肥料などの流入による水質汚染 (31、32) や、池沼そのものの埋め立て (12) などによって、生息可能な環境が失われた。

### 6. 保護対策

水生植物が生育する池沼を保全する必要がある。

### 7. 特記事項

本州ではすでに絶滅したとされる県がある一方、西日本では 2010 年前後から採集記録が相次いで発表されており、個体数が回復傾向にあると考える研究者がいる。

### 8. 主な文献

安立綱光 (1951) 伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島 (伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

荻部治紀・高桑正敏 (1998) 旧神奈川県立博物館に収蔵されていた貴重な甲虫数種について. 甲虫ニュース, (123): 5

北野 忠・石田和男 (2000) 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14

### 9. 標本

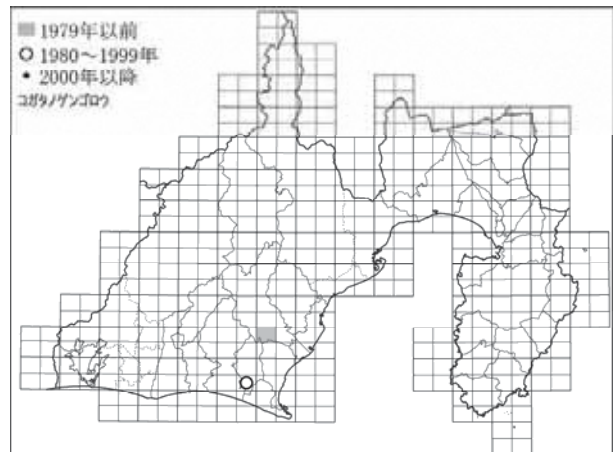
島田市産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵

(多比良嘉晃)



©2019 T.Kitano

掛川市産 1997年11月9日 撮影: 北野 忠



# ホシチャバネセセリ *Aeromachus inachus inachus* (Ménétrières, 1858)

セセリチョウ科 HesperIIDae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 25 mm。表面は黒褐色の地に、前翅に小白点が並ぶ。幼虫の食餌植物はオオアブラススキ。幼虫で越冬。成虫は県内では年 1 回 7~8 月に見られる。乾燥した草原に生息し、各種の花で吸蜜するほか、湿った地面で吸水する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国、台湾に、国内では本州と対馬に分布する。県内では富士山西麓の富士市と富士宮市にのみ採集記録がある。

## 3. 生息環境

富士山南麓と西麓において、火入れや草刈りなどにより維持されてきた乾燥した草原で疎林の周辺が生息地となる。

## 4. 生息状況

富士市では 1961 年、旧芝川町では 1970 年にそれぞれ 1 件の記録があるのみである。富士山西麓の朝霧高原には 1950 年代から 1980 年代までは記録が多いが、1990 年代になって激減し、2003 年が最後の記録となる。各種の土地利用や植生遷移が進んだことにより生息地が失われている。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移 (54) や各種開発 (16) による生息に適した乾燥した草原の減少により、急速に個体数が減少した。

## 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。草刈り、火入れなどを定期的に行うことにより、ワレモコウやオカトラノオなどがある草原の維持が必要である。

## 7. 特記事項

全国的にも草原の衰退が進んでいることから生息地域は減少している。

## 8. 主な文献

石川由三 (1963) 十里木高原 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (42): 1173

大塚義元・影山昌美 (1971) 稲子川上流の蝶 2 種. 駿河の昆虫, (73): 2151

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

高橋真弓 (2003) 2003 年 7 月中旬朝霧カシワ林の蝶. 駿河の昆虫, (204): 5688

諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本 (1). 駿河の昆虫, (219): 6081-6097

清邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 (第 4 報). 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

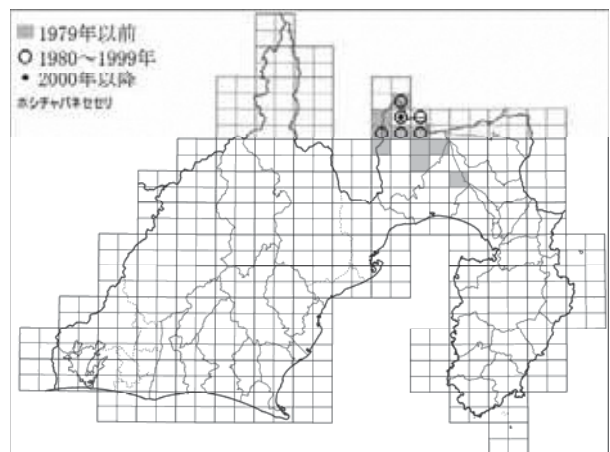
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



富士宮市産♀裏面 1991 年 7 月 17 日 諏訪哲夫採集





# ヘリグロチャバネセセリ *Thymelicus sylvaticus sylvaticus* (Bremer, 1861)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張はおよそ 30 mm。黄褐色の地に黒褐色の縁どりがある小型の種。メスはスジグロチャバネセセリによく似ている。幼虫の食餌植物はカモジグサなどのイネ科。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月中旬に出現し、8 月まで見られる。イヌゴマ、オカトラノオ、ヒメジョオンなどの花でよく吸蜜する。

## 2. 分布

国外では中国、ロシア南東部、朝鮮半島に、国内では北海道西南部、本州、四国、九州に分布するが、中部地方を除いて生息は局所的である。県内では富士山麓の朝霧高原に多くの記録がある。また、飛び離れて静岡市葵区井川の県民の森、静岡市葵区大谷崩、浜松市天竜区佐久間ダム付近からも記録がある。

## 3. 生息環境

富士山では標高 700~1,000 m、静岡市では標高 1,500~2,000 m の山地から発見されている。浜松市天竜区佐久間町では標高 200 m に満たないところの記録である。樹林と草原が適度にまじりあった環境に生息する。

## 4. 生息状況

静岡市の記録は 1988、1994、1998 年、佐久間町の記録は 1972~1976 年及び 1983 年に採集されたものであり、2ヶ所ともその後全く記録はないうえ、好適な生息地が残されているとは考えにくく消滅したと考えられる。富士山西麓の生息地では、1990 年代までは個体数も多く安定して生息していたが、2008~2016 年まで記録がなく絶滅が危惧されていた。2017 年の調査で富士山西麓の一部に生息していることが確認されたが、厳しい状況には変わらない。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移 (54) と各種の土地利用 (16) により生息地となる草原が消失したことによると考えられる。

## 6. 保護対策

半自然草原が人の手により今後も少しでも残されることが望まれる。

## 7. 特記事項

富士山麓には生息地がわずかながら残っており、これらの草原の存続と詳しい生息調査が必要である。

## 8. 主な文献

福井順治 (1976) 佐久間・水窪の蝶類 (I) . 駿河の昆虫, (94): 2773-2775

清 邦彦 (1978) 静岡県および山梨県のスジグロチャバネセセリ属. 駿河の昆虫, (100): 2922-2928

諏訪哲夫 (1988) 静岡市井川峠でヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (144): 4145

天野市郎 (1994) 静岡市中部で再びヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (168): 4773

宇式和輝 (1998) 静岡市大谷崩でヘリグロチャバネセセリを採集. 駿河の昆虫, (183): 5140

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 (第 4 報) . 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

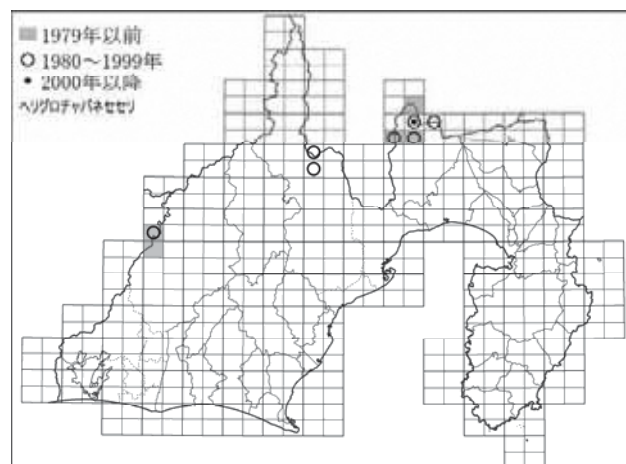
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産卵表面 2000年7月15日 諏訪哲夫採集



# ゴマシジミ *Phengaris teleius kazamoto* (H. Druce, 1875)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠA類 (CR) (要件-①②)変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠA類 (CR) ]

## 1. 種の解説

開張はおよそ 40 mm。表面はオスでは黒褐色の地に青い鱗粉がわずかに散らばることが多く、メスではこの鱗粉がない。裏面は薄い褐色の地色ではっきり目立つ黒い紋が並ぶ。幼虫ははじめワレモコウを食べ、成長するとクシケアリの巣の中でアリの卵、幼虫を食べる。成虫は年 1 回 8 月に出現し 9 月まで見られる。ワレモコウ、ハギ類などで吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸、サハリンに分布し、国内では北海道、本州、九州に分布する。いずれの地域でも生息地は限定されている。県内では富士山麓の富士宮市、裾野市、御殿場市から記録がある。

## 3. 生息環境

富士山の標高 600～1,000 m のワレモコウ、チダケサシ、カセンソウなどの草花が多い多様性の高い草原が生息地となる。

## 4. 生息状況

富士宮市では 1990 年代までは個体数、生息地とも安定していたが、各種の土地利用や開発をはじめ植生の遷移により生息地となっていた草原が失われ、2013 年以降発見できなくなっている。東富士演習場内の御殿場市では 1985 年まで記録があり、裾野市でもわずかな記録があるが、生息地は東富士演習場内立入禁止区域内であることからその後の詳しい状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士山麓においては各種の土地利用や開発 (16) が進んだことに加えて、温暖化が一つの要因とも考えられる植生遷移のより早い進行 (54) により、本種の生息地となる多様性のある草原が失われたことが要因と考えられる。

## 6. 保護対策

半自然草原が人の手により今後も少しでも残されることが望まれる。

静岡県産は本州中部亜種に分類され、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物種に指定 (2016 年) されている。

## 7. 特記事項

全国的に草原の衰退に伴って本種の減少も顕著である。神奈川県ではすでに絶滅している。

## 8. 主な文献

清 邦彦 (1987) 富士山麓の蝶類分布記録. 駿河の昆虫, (138): 3994-4001

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 (第 4 報). 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本 (II). 駿河の昆虫, (220): 6101-6121

高橋真弓 (1970) 1968～1969 年富士火山蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (69): 1991-2013

高橋真弓 (2000) 1995～1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

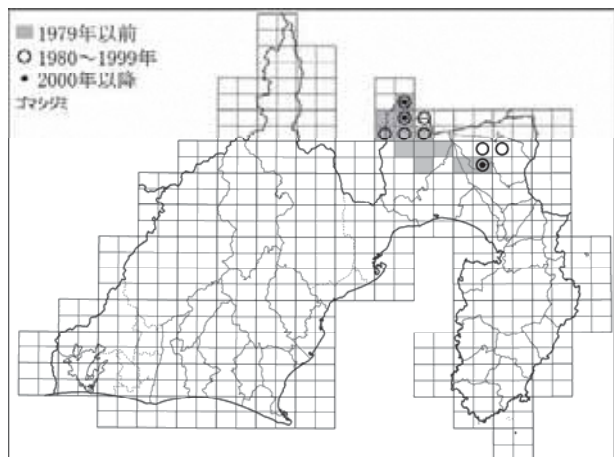
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産♂裏面 2012年8月19日 諏訪哲夫採集



## アサマジミ *Plebejus subsolanus yaginus* (Strand, 1922)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

### 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。オスの翅表は黒褐色の地の上に中央から外側に向けて青色鱗が広がる、メスは暗褐色の地で後翅外縁近くに橙色の三日月形の紋が連続する。幼虫の食餌植物はナンテンハギ。卵で越冬。成虫は6月中旬～7月に発生。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部からアルタイにかけて、国内では北海道と本州中部に分布する。県内では富士山西麓の富士宮市のみから記録がある。

### 3. 生息環境

食草のナンテンハギが生育する比較的乾燥した草丈の低い火山草原や荒地、農耕地の脇などが生息地となる。

### 4. 生息状況

県内では 1953 年に富士宮市上井出で初めて発見され、2000 年代の初めまで朝霧高原に限って生息していた。しかし各種の土地利用や植生の遷移の進行により本種の生息地となる草原が失われ最近では記録がない。

### 5. 減少の主要因と脅威

草原の放置による植生遷移の進行、草刈りの中止、耕作地の放棄などにより、ススキなどの背の高い草の生育 (53)、あるいは幼虫の生育期の過度な草刈りによりナンテンハギ群落が減少したこと (71) が主要な要因とみられる。

### 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。適切な草原の管理を行えば復活できる可能性は残っている。

### 7. 特記事項

神奈川県では絶滅したとされている。

### 8. 主な文献

稲葉 茂 (1981) 富士宮市人穴付近の蝶の記録. 駿河の昆虫, (115): 3392

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

清 邦彦 (2005) 富士宮市周辺の蝶の古い記録・1962 年. 駿河の昆虫, (210): 5829-5839

高橋真弓 (1998) 富士山麓におけるヒメシジミ、アサマジミ、ミヤマシジミの分布と生息地. 富士山自然誌調査報告書, pp. 6-26. 御殿場市.

高橋真弓 (2000) 1995～1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

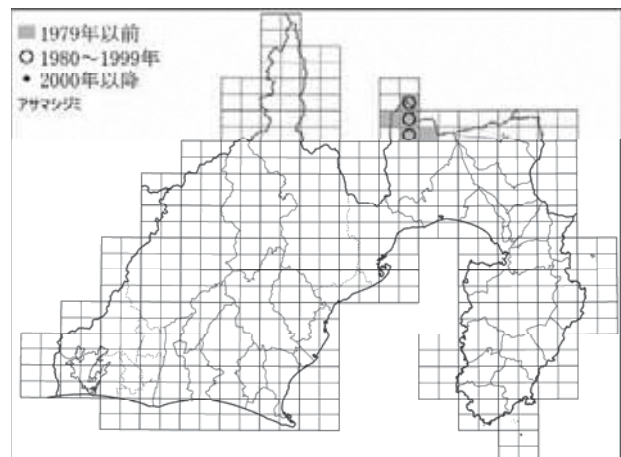
### 9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



富士宮市産♂裏面 1998年6月20日 諏訪哲夫採集





# ヒヨウモンチョウ *Brenthis daphne rabdia* (Butler, 1877)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 45~50 mm。表面は黄褐色の地に黒斑が散らばり、後翅裏面は外側半分が紫色を帯びている。幼虫の食餌植物はワレモコウ (バラ科)。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月下旬から発生し、8 月中旬まで見られる。草原を代表する種で、キリンソウ、カセンソウなどを好んで吸蜜する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部よりシベリアを経てヨーロッパまで広く分布し、国内では北海道、本州東北地方、中部地方に分布するが、いずれの発生地でも局地的である。県内では富士山西麓の富士宮市のみから記録がある。

## 3. 生息環境

富士山西麓の標高 700~1,000 m の、火入れ、草刈りなどにより維持されてきたワレモコウ、キリンソウ、カセンソウなどが生育する乾燥した草原が生息地となる。

## 4. 生息状況

1960 年代までは富士宮市根原から田貫湖、上井出の国有林などに比較的広く生息していた。その後徐々に生息範囲を狭め、野外活動センター東方では 1994 年に生息が確認されたが、その後この産地も消滅したとみられる。現在では朝霧高原のごく一部で少数の個体が 2016 年に確認されたのみとなっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

草原の草刈りや火入れをしなくなり植生遷移が進んだこと (53) や、各種の開発などで生息に適する草原が消滅したこと (16) による。

## 6. 保護対策

特にこの種の保護のために対策はとられていない。草刈り、火入れを継続的に行い、この効果を期待したい。

## 7. 特記事項

全国的にも草原の衰退が進んでいることから生息地域は減少している。

## 8. 主な文献

清 邦彦 (1996) 富士山西麓の草原における蝶類群集の変化 [第 1 報] . 駿河の昆虫, (173): 4863-4880

諏訪哲夫 (1986) 富士山西麓の蝶. 駿河の昆虫, (133): 3853-3855

諏訪哲夫 (2010) 富士山西麓における草原性蝶 3 種の記録. 駿河の昆虫, 232: 6408

高橋真弓 (1987) 静岡県および山梨県南部におけるヒヨウモンチョウ類の分布と生息地 II. 駿河の昆虫, (137): 3959-3987

土屋忠男 (2011) 静岡県東部蝶の記録 (VII) . 駿河の昆虫, (235): 6482-6485

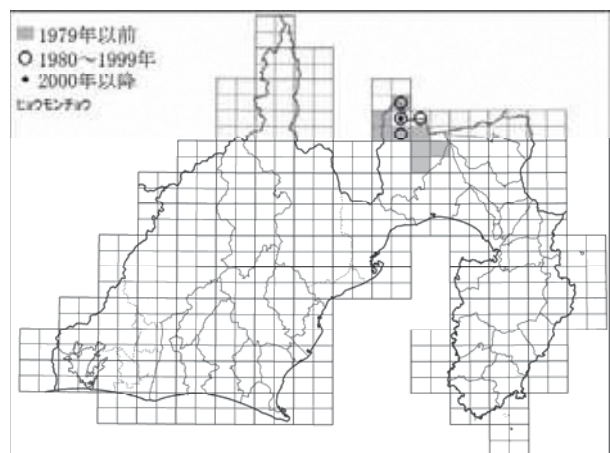
## 9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
富士宮市産♂表面 2009年6月29日 諏訪哲夫採集



# オオイチモンジ *Limenitis populi jezoensis* Matsumura, 1919

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張 90~100 mm。表面は黒褐色の地に白条を持ち、後翅の縁と白条の間に橙色帯をもつ。幼虫の食餌植物はドロノキ、ヤマナラシ。幼虫で越冬。成虫は年 1 回 6 月下旬から発生し、8 月中旬まで見られる。食樹の梢近くを飛翔し、時に溪流沿いの湿った地面において吸水し、動物の糞などでも吸汁する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部よりヨーロッパまでユーラシア大陸の北部に広く、国内では北海道には比較的広く分布するが、本州では關東北部山地と中部地方の亜高山帯に分布する。県内では大井川の最上流部にのみわずかな記録がある。

## 3. 生息環境

ドロノキが生育する標高 1,300~2,000 m の溪流沿いが生息地となる。

## 4. 生息状況

1970 年代まではわずかに採集記録があるが、それ以後目撃情報はあっても、県内ではここ 40 年ほど確実な採集記録はない。

## 5. 減少の主要因と脅威

現在本州においては長野県と岐阜県の一部にのみ生息が確認されている。台風などによる出水でドロノキ林が流失するような被害 (55)、林道の整備などの環境変化 (24) が減少の原因と考えられるが、長野県、岐阜県では採集圧 (41) も懸念される。

## 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。ドロノキの林と落葉広葉樹林を残すことが必要である。

## 7. 特記事項

2012~2014 年に二軒小屋、燕沢、聖平小屋などでの未確認の目撃情報がある。

## 8. 主な文献

加藤顕剛 (1953) 二軒小屋・榎島 (大井川上流) 附近の蝶類. 駿河の昆虫, (4): 55-57

諏訪哲夫 (2008) 県に寄贈された小松庄次郎氏の蝶類標本. 駿河の昆虫, (223): 6183-6191

高橋真弓 (1957) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 4 報). 駿河の昆虫, (17): 433-441

高橋真弓 (1965) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 12 報). 駿河の昆虫, (51): 1407-1417

高橋真弓 (1966) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 14 報). 駿河の昆虫, (56): 1540-1557

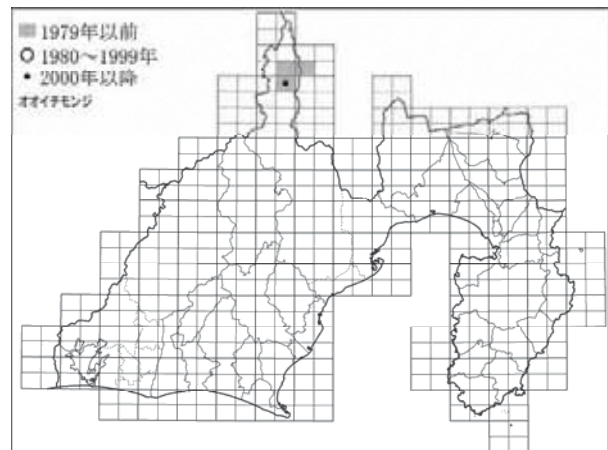
## 9. 標本

静岡市産 (4 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



静岡市産♀表面 1970 年 7 月 25 日 小松庄次郎採集



# ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* Okada & Torii, 1945

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) (要件-①②③) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。表面は暗褐色、裏面は黄褐色で、後翅裏面には目玉模様が並び、銀色の細い線で縁どられる。目玉模様の数や形状は変化に富む。幼虫の食餌植物はイネ科、カヤツリグサ科などの草本で、県内ではショウジョウスゲが記録されている。成虫は年に1回、6月に発生する。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパから南シベリアを経て朝鮮半島に至るユーラシア大陸南部に、国内では長野・群馬県にまたがる乾燥した草原、愛知・岐阜県を中心とした東海地方の湿地、中国地方の湿地と大きく三つの地域に分布する。県内では西部にのみに分布し、磐田原台地、三方原台地の縁（旧浜松市、旧浜北市）と湖西市及び旧三ヶ日町に記録がある。

## 3. 生息環境

洪積台地の縁や丘陵の谷に形成され、シラタマホシクサ、ミカワバイケイソウなど周伊勢湾要素と呼ばれる特異な植生が見られる、東海地方特有の湿地が主な生息地となっている。

## 4. 生息状況

三方原台地東側、磐田原台地と湖西市からは1970年代に姿を消し、三方原台地北側や旧浜北市は1980年代末には見られなくなった。現在県内で確実に産するのは、浜松市北区三ヶ日町のみである。

## 5. 減少の主要因と脅威

根本的には、開発などにより湿地が失われたことによる(15-1)。かつて本種を産した湿地はお互いの距離が比較的近く、個々の湿地は小規模であっても個体は相互に交流していたと推測される。開発によって湿地が孤立化し、個体群の交流がなくなって近親交配が進み消滅した場合も多いと考えられる(62)。特に本県から愛知県東部の産地では、希少化により一層採集者の増加を招いている。

## 6. 保護対策

県立自然公園条例、希少野生動植物保護条例により許可なく採集することは禁止されている。湿原が年々縮小しているので緊急に保護対策を検討・実施する必要がある。

## 7. 特記事項

雨生湿地は、植生や地質の面からも愛知県新城市との連続性が高く、広い範囲全体の保護・保全策が必要である。豊橋市の葦毛湿原では大規模植生回復作業が実施されており、個体数が回復しつつある。

## 8. 主な文献

石川由三 (1962) 6月中旬浜松市四ツ池の蝶. 駿河の昆虫, (38): 1058

大庭俊司 (1970) 磐田原台地のヒメヒカゲとウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (70): 2045

白井和伸 (1989) 愛知県・静岡県産ヒメヒカゲの生活史 (第4報). 駿河の昆虫, (146): 4194-4195

高橋真弓・白井和伸 (1993) 静岡県におけるヒメヒカゲの衰亡. 日本産蝶類の衰亡と保護 第2集, pp. 125-128. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会, 大阪・東京.

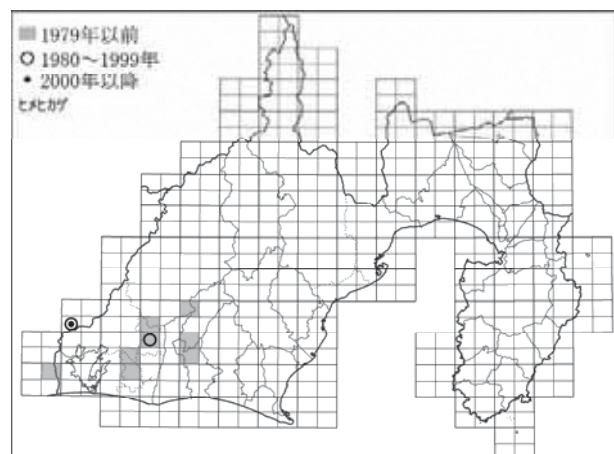
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



袋井市産♂裏面 1974年6月9日 諏訪哲夫採集





# ニホンカワトンボ *Mnais costalis* Selys, 1869

(=2004年版のオオカワトンボ)

カワトンボ科 Calopterygidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長はオス 50~68 mm、メス 47~61 mm。静岡県レッドデータブック (2004) ではオオカワトンボと呼ばれていた。ニホンカワトンボの中部日本以西の個体群であり、本県が個体群としての太平洋側の分布の東限に当たる。翅は地域によって複雑な多型がみられ、県内に分布する個体群は、オスが橙色型、メスが淡橙色型の組み合わせである。成虫はおおむね5月から7月上旬にかけて出現する。

## 2. 分布

国外ではロシア (千島列島) に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では浜松市に分布するほか、静岡市に記録がある。静岡、山梨、長野、新潟各県の西側を結ぶ線より東側にはオスは翅が橙色と無色透明の2型、メスは無色透明のみの組み合わせからなる個体群 (東日本個体群)、西側にはオスは橙色、淡橙色、無色透明の3型、メスは淡橙色と無色透明の2型が出現する個体群が分布する。

## 3. 生息環境

主に平地から丘陵地の、周囲に樹林があり流れ際に抽水植物が繁茂する、比較的開けた清流に生息する。同属のアサヒナカワトンボに比較すると、平坦で明るく開け、ややスケールの大きい河川を選択する傾向がある。

## 4. 生息状況

静岡市にも古い記録があるが、すでに絶滅している。現存する生息地は浜松市のごく一部のみで、比較的狭い範囲に集中している。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川工事によるコンクリート護岸や横断構造物の設置など、河川環境の人工化や流路の変更などによる抽水植物の消失 (12、25)、河川工事による泥水の流入や家庭排水など (31) の人為的要因が考えられる。また台風による大規模な攪乱とそれに伴う流路の変化、抽水植物の消失など、自然災害 (55) による影響も減少要因となっている。

## 6. 保護対策

人為的な河川環境の改変だけでなく、自然災害による生息環境への影響も想定しておく必要がある。台風の影響による流路の変化や河床の攪乱は、産卵基質となる抽水植物の消失につながり、生息にきわめて大きな影響がある。

## 7. 特記事項

西日本個体群は静岡県より西の分布域では決して稀な種ではないが、分布境界にあたる本県では分布はきわめて限られる。地域ごとの多型現象など、個体群ごとの遺伝子レベルでの違いも、本県個体群の重要性の一つである。

## 8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボの記録. 駿河の昆虫, (182): 2091-5110

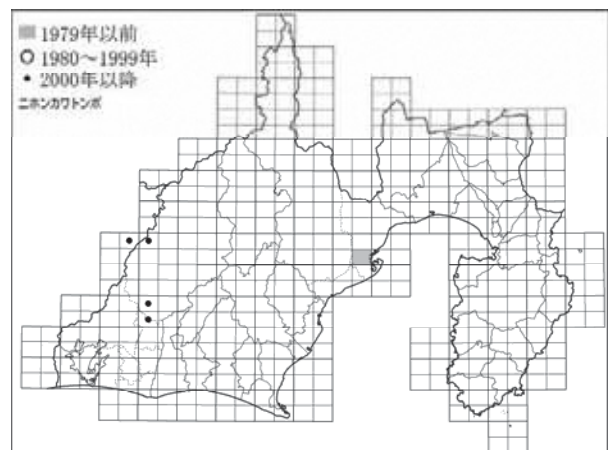
## 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(加須屋 真)



浜松市 2015年5月2日 加須屋 真



# キイロサナエ *Asiagomphus pryeri* (Selys, 1883)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②) 変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

体長はオスメスとも 60~69 mm。やや大型のサナエトンボで、翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。複眼は成熟すると緑色になる。5~7月にかけて出現する。オスは流畔の植物の葉や石などに覆いかぶさるように静止し、縄張りをもつ。産卵はメス単独で主に水面や湿土に腹端を打ち付けて行う。

## 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州と、四国、九州に分布するが産地は限られる。県内での分布は点在し、伊豆半島の松崎町、伊豆の国市、西部の浜松市などに記録がある。

## 3. 生息環境

主に平地から低山地の、周囲に樹林があり、砂泥質の緩やかな流れに生息する。松崎町の産地では水田や休耕田の間を流れる農業用水路に生息している。同属のヤマサナエとは同所的に見られることが多いが、本種は局限される傾向がある。

## 4. 生息状況

確実な生息地は松崎町の1ヶ所である。水田の周囲を流れる細い水路の一角にのみ生息が確認されているが、現在耕作放棄された部分が多く、水路の水面を高茎の湿生植物が倒れ掛かり、開放水面を覆ってしまうため、本種の生息にとって非常に厳しい状態である。本種の分布が限られる要因としては、河川環境や水質、底質などに対する選択性が狭いことによるものと思われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境のほとんどが、人の生活域と重なる河川中流域や農業用水路などである。そのためコンクリート護岸(13)などによる河川環境の変化、生活排水や産業排水、農薬の流入などによる水質の悪化(31、32)、加えて周囲の水田の耕作放棄(53)による水路の鬱閉化などの要因が考えられる。

## 6. 保護対策

すでに長期間にわたって確認されていない産地がほとんどであるが、人目につかずに残存している可能性もある。幼虫の好む底質の維持や復元、良好な水質の確保などが挙げられる。人為的な河川環境の改変だけでなく、耕作放棄による生息環境の悪化については、生息地の水路の開放水面確保など、適度な人の関わりが必要である。

## 7. 特記事項

全国的にも減少が著しく、環境省編(2015)の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

油井雅樹(1996) 松崎町でキイロサナエの生息地を発見. 駿河の昆虫, (175): 4917-4920

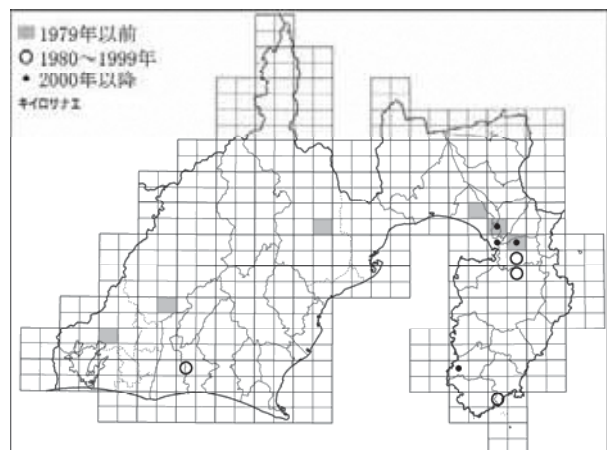
## 9. 標本

松崎町産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(加須屋 真)



賀茂郡松崎町 2005年6月1日 加須屋 真



# フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys, 1854)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②)変更コード1,2

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

体長はオス 45~50 mm、メス 44~49 mm。小型のサナエトンボで、翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。胸部側面には通常2本の黒条があり、これが和名の由来である。体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。複眼は成熟すると緑色になる。5~6月にかけて出現する。オスは水際の植物や地面などに静止して縄張りを持つ。メスは単独で水域に飛来し、ホバリングしながら時々腹端を振って、卵をばらまく。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。静岡、岐阜、滋賀、福井各県以西に分布する。静岡市付近が分布の東限にあたり、県内はもともと産地が少ない。静岡市、島田市、掛川市、袋井市、磐田市、浜松市などに記録がある。

## 3. 生息環境

主に丘陵地や低山地に囲まれた田園地帯の、周囲に樹林があり、抽水植物や浮葉植物、沈水植物などが豊富な池沼に生息する。

## 4. 生息状況

静岡市の鯨ヶ池では1990年代前半、磐田市桶ヶ谷沼では1990年代中頃を最後に記録が途絶えている。現在確実な産地は静岡市の一産地のみであり、年変動はあるものの、個体数は決して多くはない。

## 5. 減少の主要因と脅威

コンクリート護岸などによる抽水植物の消失(12)、家庭排水流入による水質悪化(31)、水生植物の過剰な除去(71)、コイなど捕食性魚類の人為的な放流(52-3)などの要因が考えられる。水質の変化に敏感な種であると思われ、磐田市桶ヶ谷沼では大きな環境変化が認められていなかった1990年代中頃を最後に記録が途絶えている。

## 6. 保護対策

護岸工事など構造的な環境の改変だけでなく、家庭排水などによる水質の悪化やヘドロの堆積などに注意が必要である。また釣りをしやすくするための水生植物の過剰な除去や、釣りの対象となる魚類の人為的な放流が行われると、生態系そのものに影響を与える。釣り餌の過剰な投入も水質悪化やヘドロ堆積の一因となり、注意すべきである。

## 7. 特記事項

分布域全体で減少が認められるうえ、分布東限に当たる本県ではもともときわめて限られる。

## 8. 主な文献

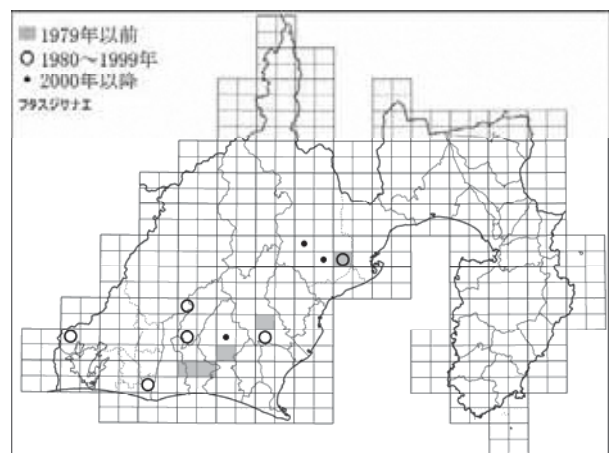
福井順治(1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (109): 3215-3221

## 9. 標本

静岡市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



静岡市 2013年5月12日 加須屋 真



(加須屋 真)



## トラフトンボ *Epithea marginata* (Selys, 1883)

エゾトンボ科 Corduliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長はオス 50~56 mm、メス 50~58 mm。中型のトンボで、体色は黒地に橙黄色の斑紋がある。体色、斑紋ともオスメスでほとんど差がなく、成熟してもあまり変化がない。複眼は未成熟なうちは淡い灰褐色だが成熟するとオスは青灰褐色、メスは緑灰褐色に輝く。翅はほぼ透明で、メスは通常前縁に沿って黒条が発現するが、ほとんど現れない個体もある。4月下旬~6月にかけて出現する。オスは水面上ホバリングを交えて飛翔し、縄張りを形成する。メスは水際の植物などに静止して腹端に卵塊を形成した後、浮葉植物の繁茂する水域に飛来して放卵する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島と中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では島田市、菊川市、牧之原市、掛川市、磐田市、浜松市、古くは三島市でも記録がある。

### 3. 生息環境

主に平地や丘陵地の、周囲に樹林があり、抽水植物や浮葉植物が適度に繁茂する、水質の良好な深くて大きい池沼に生息する。

### 4. 生息状況

産地は西部地域に点在するが、個体数はいずれの産地でも多くない。磐田市、浜松市に現存産地がある。他の市町では改修工事や埋め立てなどの人間活動や、ブラックバスの人為的な導入により産地は消失した。

### 5. 減少の主要因と脅威

水生植物が豊富な比較的大きく深い池沼という環境そのものの消失、コンクリート護岸などによる環境の変化(12)などの要因が考えられる。また家庭排水や化学肥料の流入などによる水質悪化(31、32)も影響を与えている。本種は水面近くを巡回飛翔する性質があり、ブラックバスによる捕食の影響(52-3)を大きく受けていると思われる。

### 6. 保護対策

本種に適した水域とそれに続く陸域の広範な生息環境を保全する。また浮葉植物の確保は本種にとって重要と思われる。また、水面近くを巡回飛翔する習性から、ブラックバスによる食害は大きな影響を及ぼしている可能性があり、あらゆる手段で食害を防ぐ必要がある。現在ブラックバスなどの外来魚が未侵入の環境では、侵入を防止するとともに、重要な生息地では、生態系保全の観点から駆除も考慮すべきであろう。

### 7. 特記事項

産地はもともと限られる傾向があり、減少している地域も多い。

### 8. 主な文献

鵜飼貞行(1978) 静岡県中部・西部のトンボ類の採集記録. 駿河の昆虫, (102): 3028-3030

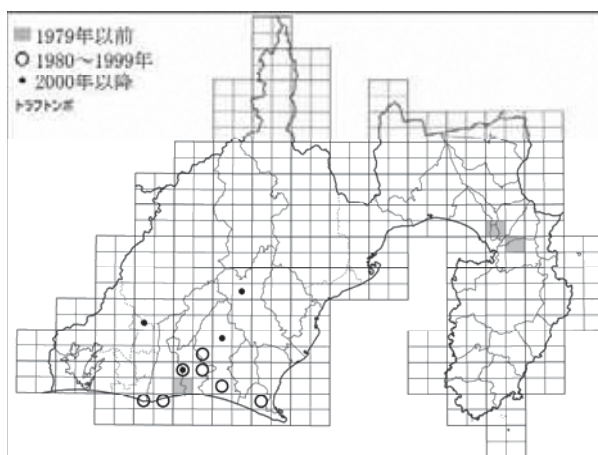
加藤哲夫(1996) 浜北市におけるヨツボシトンボとトラフトンボの記録. 駿河の昆虫, (174): 4913

### 9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2003年5月3日 福井順治



(加須屋 真)

### 1. 種の解説

体長はオスメスとも 17~21 mm。非常に小型のトンボで、日本産では最も小さい。体色はオスでは未成熟なうちは淡い橙褐色だが成熟すると真っ赤になる。メスは黒地に黄色と褐色の斑紋がある。5月中旬~8月にかけて出現する。

オスは水辺の細い植物の茎などに静止して、縄張りをもつ。メスは単独で湿地植物の間の浅い水面に打水産卵する。

### 2. 分布

国外では東アジアから東南アジア、オセアニアに分布する。国内では本州、四国、九州に分布するが、千葉、東京、神奈川、山梨など静岡県東部周辺の各都県には分布していない。県内での記録は西部に限られ、一部を除き天竜川以西である。磐田市、浜松市、湖西市に記録がある。

### 3. 生息環境

主に平地や丘陵地、低山地の、周囲に樹林があり、浸出水などによって生じた、草丈の短い湿生植物が繁茂する湿地に生息する。また抽水植物がまばらに生えた休耕田などに発生することもある。完全な滞水ではなく、常にわずかに新しい水が供給される環境を選択する傾向がみられる。

### 4. 生息状況

県内での確実な産地は天竜川以西に限られる。低山地の山すそなどに生じた浸出水による湿地にみられたが、近年乾燥化が進み、本種の生息が確認できない産地が多い。既知産地周辺の休耕田などに未確認の発生地が存在する可能性もあるが、きわめて厳しい状況である。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息地周辺の道路建設工事 (24) や宅地開発 (23)、湿地の埋め立て (15-1) など人間活動による影響のほか、遷移の進行、湿地の乾燥化 (54) も深刻である。貧栄養の湿地という、ごく限られた環境に依存するため、環境の変化や消失により容易に姿を消す。近年の少雨傾向や温暖化による乾燥化など (71)、自然環境の変化も大きく影響を与えているものと思われる。

### 6. 保護対策

生息環境そのものの保護・保全、あわせて浸出水の確保が最重要であろう。また休耕田の発生地では、土地の借り入れなどによる産地の確保と水源の確保、遷移による草原化を食い止めるための草刈りや除草といった保全活動も検討する必要がある。

### 7. 特記事項

多くの産地でモウセンゴケ、ミミカキグサ、ヒメヒカゲといった湿地性の生物と共存している。

### 8. 主な文献

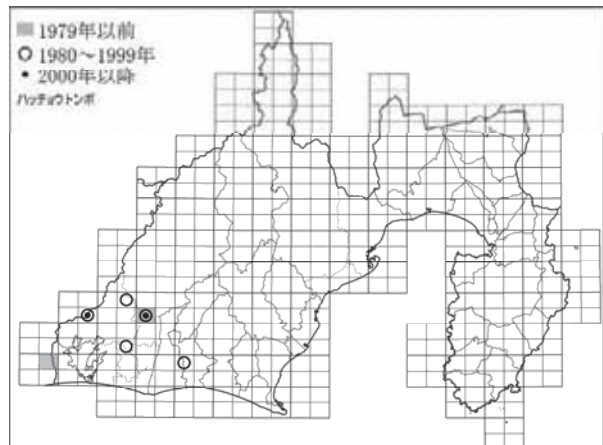
加藤哲男 (1990) 引佐郡のトンボ相 (第 1 報) . 駿河の昆虫, (152): 4353-4361

### 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Kasuya  
浜松市 2008年7月19日 加須屋 真



(加須屋 真)

# ゲンゴロウ *Cybister (Scaphinectes) japonicus* Sharp, 1873

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 34~42 mm。体はおおむね卵形で腹背に少し扁平。背面はやや緑色を帯びた黒褐色で、頭部前半と前胸背板及び翅鞘の側縁部は黄色、肢と黒褐色の胸部中央をのぞく腹面は黄色。オスの背面は滑らかで光沢が強いが、メスでは縮刻を密に装い、光沢はやや鈍い。

成虫は4月頃から活動を始め、11月頃から水中で越冬する。成虫・幼虫ともに肉食性で、他の小昆虫やオタマジャクシなどの水生生物を捕食するが、成虫は昆虫や小魚の死骸も食べる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、シベリアなどに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。かつては日本各地にふつうに見られた。県内では伊豆半島、静岡市駿河区用宗、島田市金谷、磐田郡竜洋町(現磐田市)、浜松市北区引佐町で記録があり、御殿場市で採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

ジュンサイ、ヒルムシロなどの水生植物が豊富な池沼や放棄水田、湿地に生息する。

## 4. 生息状況

近年確認された生息地の中で、数年以上にわたって複数個体が確認されている池は1ヶ所だけであったが、同所においても2001年以降確認されていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼への農薬などの流入(32)や植生遷移(54)に伴う水質悪化(31)、池沼そのものの埋め立てや護岸工事(12)などによって生息環境が失われた。

## 6. 保護対策

水生植物の豊富な、自然度の高い池沼を保全する必要がある。本種は分散移動することがあるようなので、好適な環境の池を作ることによってそこに定着することも十分に考えられる。

## 7. 特記事項

新設されたビオトープの池に出現することがある。

## 8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

荻部治紀・高桑正敏(1998)旧神奈川県立博物館に収蔵されていた貴重な甲虫数種について. 甲虫ニュース, (123): 5

加須屋真・矢地信行(2002)御殿場市3つのトンボ誘致実験池のトンボ. 駿河の昆虫, (198): 5533-5537

北野 忠(2000)静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, 15: 17-24

草間慶一(1983)9 ゲンゴロウ. 杉山恵一 編, 静岡県の重要昆虫-静岡県の自然環境シリーズ-, pp. 130-131. 第一法規出版, 東京.

油井雅樹(1995)静岡県におけるゲンゴロウの記録. 月刊むし, (298): 14-15

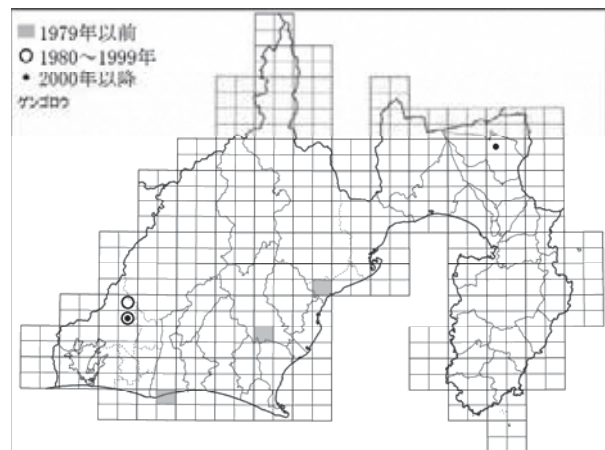
油井雅樹(1997)静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

## 9. 標本

掛川市産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 Y.Tahira  
浜松市北区産 2001年8月12日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)



# オオコブスジコガネ *Trox (Omorgus) chinensis* (Boheman, 1858)

コブスジコガネ科 Trogidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-⑤)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 11.0～13.1 mm。大型で厚みのある体型。頭楯は三角形で、前縁は強く上反する。触角柄部は強く湾曲し、末端手前で第2節と接続する。小楯板は3葉片状。前脚脛節端は円く広がる。

成虫は5月から9月頃まで見られる。夜間しか活動せず、日中は砂中に深く潜っており、夜間に海鳥の死体や打ち上げられた魚の死体などに集まるほか、灯火にも飛来する。成虫で越冬すると考えられている。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、インドシナ半島に、国内では本州、四国、九州、伊豆諸島分布する。県内では伊豆半島と磐田市で記録があり、また、古くは1940年代に静岡市や沼津市で記録されているようであるが、当該文献を入手できなかった。

## 3. 生息環境

自然度の高い海岸に生息するが腐敗物を好むためそれらのない砂浜には生息できず、漂着物や海生動物の死骸が多い海岸に生息する。

## 4. 生息状況

県内でのデータを伴った確実な生息地は磐田市のみであるが、近年は全く確認されておらず、生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸の護岸・公園化(14)、清浄(71)などが生息への脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

東北から九州まで記録はあるが、標本が現存する確実な産地は茨城県から愛知県にかけての特定の沿岸部である。現在生息が確認できる場所は茨城県神栖市のみであるという。

## 8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 編(1985)原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 保育社, 大阪, 514 pp.

川井信矢(2004)オオコブスジコガネの採集と飼育. 鯉角通信, (9): 1-10

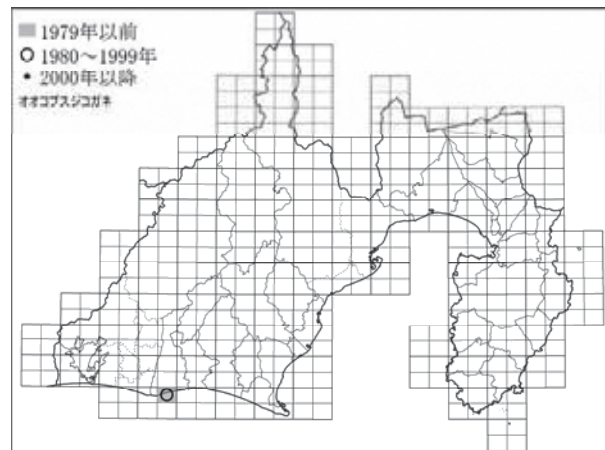
坪井俊久(1978)オオコブスジコガネの採集記録. 駿河の昆虫, (103): 3072

## 9. 標本

静岡市産：東京農業大学所蔵



©2019 Tokyo University of Agriculture  
静岡市産 1943年9月 東京農業大学所蔵



(多比良嘉晃・石川 均)

# クモマツマキチョウ *Anthocharis cardamines hayashii* Fujioka, 1970

シロチョウ科 Pieridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②)変更コード 1, 3, 6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 40 mm。オスは白地に表面前翅半分の先端部分が赤黄色となり、メスはこの部分が灰色の小さい斑紋になる。裏面は後翅が緑の唐草模様となる。幼虫の食餌植物はミヤマハタザオやヒロハコンロンソウ。蛹で越冬。成虫は年 1 回発生し、標高が 1,000 m 程度の場合は 4 月下旬から発生し、2,000 m ほどの場合は 7 月にも見ることがある。溪流沿いを直線的に飛翔し、ミヤマハタザオやモミジイチゴなどで吸蜜する。

## 2. 分布

国外では東はロシアからヨーロッパのユーラシア大陸に広く分布し、国内では本州中部山岳地域のおよそ標高 1,000~2,000 m に生息する高山蝶の一種である。県内では南アルプスに源を発する河川の源流部から記録がある。

## 3. 生息環境

2,000 m を超える高山を源とする河川の渓谷部の河原、崩壊地、時に林道沿いなどで、樹木が点在する攪乱された明るい環境が生息地となる。

## 4. 生息状況

1957 年、静岡市葵区大井川源流西俣において本県で初めて発見された。2016 年現在でも大井川上流域には広範囲に生息しているものの、2000 年代になって激減している。静岡市葵区梅ヶ島の生息地は 1970 年代までは個体数は少なくなかったが、現在では危機的状況である。浜松市天竜区水窪町では 1973 年に発見され、最近まで断続的に少数が確認されているに過ぎない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地となっていた河川や溪流の状況が、大雨による洪水や(55)、法面のモルタルなどの吹き付けなど様々な工事(24)により変化し、これらが頻繁に起こることで植生が回復できないことが大きく影響していると考えられる。また、ニホンジカにより食草をはじめとして、成虫の吸蜜植物も被害を受けていることも要因と思われ(54)、また採集圧も危惧される(41)。

## 6. 保護対策

溪流や山腹の工事の影響は小さくはないが、時間の経過とともに以前の状況に戻り、生息環境が回復することもある。ニホンジカの影響はきわめて大きく、個体数密度を下げる措置を緊急に図る必要がある。

## 7. 特記事項

長野県では県の天然記念物、県の希少野生動植物に指定されている。

## 8. 主な文献

春田俊郎(1958)大井川上流のクモマツマキ. 駿河の昆虫, (21): 552

石川由三(1959)大井川源流地方(5月下旬)の蝶類. 駿河の昆虫, (27): 700-706

小堀 一(2016)クモマツマキチョウの早い時期の記録. 駿河の昆虫, (256): 7007-7008

大庭俊司(1974)1973年水窪町奥地のチョウ報告. 駿河の昆虫, (84): 2450-2452

高橋真弓(1982)大井川水源地方蝶類分布調査報告(第19報). 駿河の昆虫, (117): 3438-3448

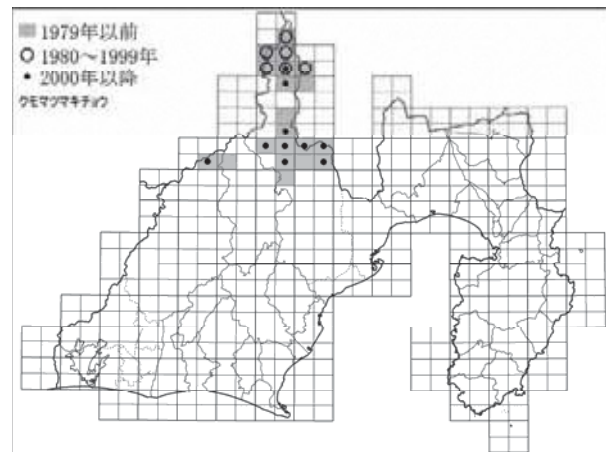
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2015年5月26日 諏訪哲夫採集



### 1. 種の解説

開張およそ 60 mm。翅の表は一様に白色で裏は翅脈に沿って黒色となる。後翅の基部は黄色となる。幼虫の食餌植物はヒロハヘビノボラズやメギ (メギ科)。幼虫で越冬。年 1 回、7 月中旬から発生し、8 月中旬まで見られる。成虫は灌木や高木の上を緩やかに飛翔し、クガイソウ、ミヤマイボタ、ヒヨドリバナの花に吸蜜に訪れる。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国南部、ロシア南東部に分布し、国内では本州中部山岳地域の標高およそ 1,000~2,000 m に限って生息する高山蝶の一種である。県内では静岡市葵区の大井川源流部のみに生息している。

### 3. 生息環境

生息地は亜高山帯の、主に溪流沿いの食樹のヒロハヘビノボラズなどの灌木を混じえる林縁で、ヒヨドリバナなどの吸蜜植物の多い斜面でよく見られる。

### 4. 生息状況

静岡市の北部に限って生息し、1959 年静岡市葵区梅ヶ島の記録の 1 件をのぞくとすべて大井川源流に限られる。1951 年が確実な最初の記録で、西俣、東俣からは多くの記録があり、最下流の記録は畑薙第 1 ダムである。1990 年代までは大井川源流各地に個体数も多かったが、近年は個体数が激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

道路法面の崩壊や各種の工事 (24) などにより、林縁に生育する食草や成虫が吸蜜する花が減少したことが考えられる。また、植生遷移により森林化が進み、食草の生育に影響を及ぼしている (54)。

### 6. 保護対策

長野県では保護活動が行われている。本県でも何らかの対策が緊要である。

### 7. 特記事項

隣接の長野県と山梨県では絶滅危惧 I B 類 (EN) にランクされ、県の天然記念物に指定されている。

### 8. 主な文献

- 天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上流部の蝶類採集報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003
- 池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫 (2014) 大井川上流 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737-6738
- 高橋真弓 (2000) 大井川水源地方蝶類分布調査布告 (第 24 報). 駿河の昆虫, (191): 5360-5361
- 宇式和輝 (1960) 安倍川上流地方蝶類分布調査報告—1959 年夏—. 駿河の昆虫, (30): 781-798
- 宇式和輝 (2006) 大井川源流域・二軒小屋地域の蝶 [I・2000 年]. 駿河の昆虫, (216): 5983-5993

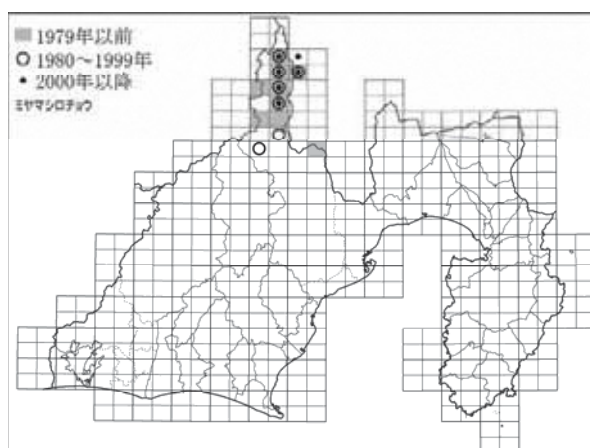
### 9. 標本

静岡市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2015 年 7 月 24 日 諏訪哲夫採集





# ベニモンカラスシジミ *Fixsenia iyonis surugaensis* (Fujioka, 1981)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②) 変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 25~30 mm。翅の表は黒褐色、裏は茶褐色をしている。翅の表には赤い斑紋があり、特にオスでは大きく広がる。幼虫の食餌植物はクロウメモドキ。卵で越冬。成虫は年に1回6月に発生する。地味な色に加え、薄暗い森林の中に住み、人目に触れることは少ない。

## 2. 分布

国外では中国大陸西部に、国内では長野県南部から静岡県北部、紀伊半島、中国山地、四国山地と大きく四つの地域に分布する。県内では浜松市天竜区水窪町のみから記録がある。

## 3. 生息環境

幼虫の食樹であるクロウメモドキが生育する薄暗く、やや湿った林縁または林縁に近い林内を好む。石灰岩が露出するような場所との結びつきが強い。

## 4. 生息状況

県内では1975年、浜松市天竜区水窪町において初めて発見された。それ以降記録の発表が採集者を招きかねないためか、公表された記録は少ない。記録地点は天竜川支流の水窪川水系に限られ、天竜川本流や支流の気田川水系からは見つかっていない。成虫の生息地の状況や習性から成虫を採集することは大変困難で、これまでほとんどが卵あるいは幼虫で記録されたものである。

## 5. 減少の主要因と脅威

クロウメモドキはもともと多い木ではないが、一層減少が目立つ。植林内では下草刈りで切られる

(71) 一方、放置された林床は暗くなりすぎて、若木が育たない(53)。加えて近年ではシカの食害(54)により若木が食われてしまい、古い木が寿命で枯死し、新たに更新されない。さらに道路改修(24)、河川改修(13)などの際にしばしば切られている。採集圧は一時ほどではないがまだ残っている(41)。

## 6. 保護対策

食餌植物に対するニホンジカによる食害を守るため緊急な対策が必要である。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福井順治(1976a) ベニモンカラスシジミに関する新知見. 東海自然誌, (2): 45-46

福井順治(1976b) 佐久間・水窪の蝶類(Ⅱ). 駿河の昆虫, (95): 2793-2796

白井和伸(2004) 水窪町におけるベニモンカラスシジミについて. 駿河の昆虫, (205): 5711

諏訪哲夫(2002) 静岡県水窪町のベニモンカラスシジミ生息地の消滅と過去の記録. 駿河の昆虫, (200): 5593

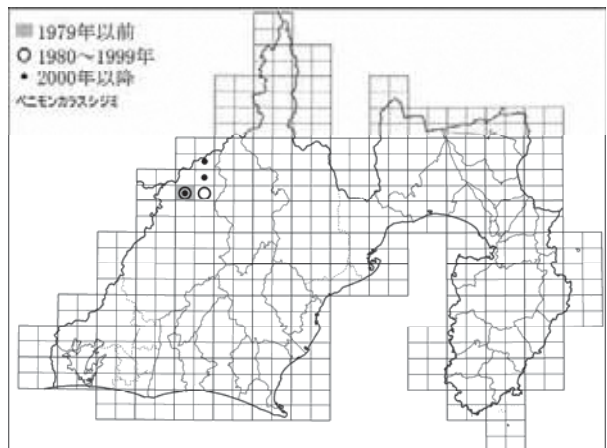
## 9. 標本

浜松市産(少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
浜松市産♀裏面 2013年5月12日羽化 諏訪哲夫飼育



# ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus* (Butler, 1878)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 30 mm。オスの表面には青色が広がり外縁は 1.5 mm ほどの黒色の縁どりがあり、裏面は白色の地に黒点が散らばり、特に後翅の縁に橙色の三日月形の紋が連続する。メスの表面は黒褐色でわずかに後翅に三日月形紋が現れる。幼虫の食餌植物はノアザミ、ヨモギなどが主体であるが、食性の幅はたいへん広く 10 科 30 種以上にも及ぶ。卵で越冬。年 1 回 6 月中旬から発生し、8 月上旬まで見られる。草原に生息し各種の花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国東北部よりヨーロッパにかけて広く、国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では富士山麓の標高 800~1,800 m の草原や火山荒原から記録がある。

## 3. 生息環境

富士山麓に広がる標高 800~1,800 m の草原や火山荒原に生息する。キリンソウ、チダケサシ、カセンソウ、ワレモコウなどが生育する多様性豊かな草原が主な生息地であるが、メイゲツソウ、フジアザミ、カリヤスモドキなどがパッチ状に広がる火山荒原にも局地的に生息している。

## 4. 生息状況

小山町では 1988 年籠坂峠、裾野市では 1977 年日本ランド、富士市では 1988 年東白塚、富士宮市では 2000 年代の初めの記録が最後となるなど、多くの生息地が失われた。現在は御殿場市の標高 1,500~1,800 m の地域のみとなっている。ここのパッチ状の植生は拡大しているように見えるが、本種の生息地は拡大していない。

## 5. 減少の主要因と脅威

各種の開発 (16) により草原が減少し、残された草原も採草のための火入れなどをしなくなったことによる草原の質の低下 (53) と、遷移の進行により (54)、本種の生息に適さなくなったためと考えられる。

## 6. 保護対策

御殿場市の生息地が小山町須走富士山登山道に向けて拡大していくことが期待される。

## 7. 特記事項

生息する草原の衰退が全国的に顕著であり、本種は神奈川県ではすでに絶滅しており、山梨県では準絶滅危惧 (NT)、愛知県では絶滅危惧 I A 類 (CR) にランクされている。

## 8. 主な文献

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶。駿河の昆虫, (144): 4153-4155

諏訪哲夫 (2008) 県に寄贈された小松庄次郎氏の蝶類標本。駿河の昆虫, (223): 6183-6191

高橋真弓 (1977) 富士腰切塚および二ツ塚のヒメシジミについて。駿河の昆虫, (99): 2914

高橋真弓 (2000) 1995~1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録。駿河の昆虫, (190): 5321-5332

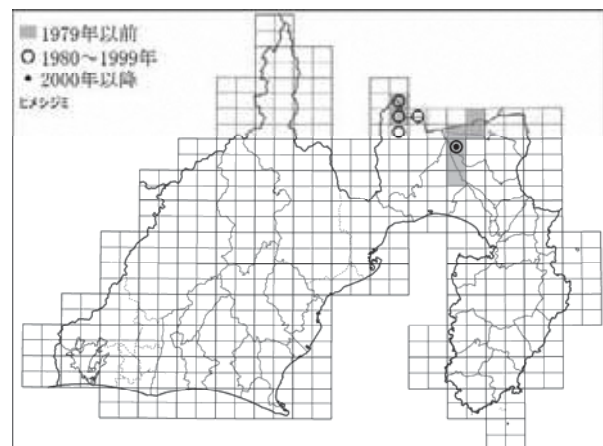
谷川久男 (2014) 富士山御殿場口のチョウ。駿河の昆虫, (246): 6771

## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 T.Suwa  
御殿場市産♀裏面 2016 年 7 月 30 日 諏訪哲夫採集



(諏訪哲夫)

# コヒオドシ *Aglais urticae esakii* Kurosawa & Fujioka, 1975

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-①②) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 50 mm。表面は赤褐色の地に黒色の紋がある。裏面は前翅の一部が黄褐色となるが後翅など一様に枯葉状の黒褐色。斑紋はオスメス大差ない。幼虫の食餌植物は本県では記録がないが他県の例などではコバノイラクサなど。成虫で越冬。春休眠から覚めた個体が山を下りて産卵し、7月中旬頃から成虫が現れる。飛び方は敏速で高山の各種の花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島のほかユーラシア大陸に広く、国内では北海道及び本州中部山岳地帯に分布し、本州では高山蝶の一種である。県内では南アルプスの農鳥岳、赤石岳、悪沢岳など 3,000 m 級の高山のほか、西俣、東俣などの溪谷、標高の低い樫島からも記録がある。

## 3. 生息環境

成虫は高山の石礫の多い尾根やお花畑で見られるほか溪流沿いでも記録されている。食草となるイラクサ類は湿潤な場所を好むことから溪流沿いに生育しており、成虫の発生場所となる。羽化後高山帯へ移動したものが高山で観察される個体である。

## 4. 生息状況

1950年代から1960年代に、大井川源流部の西俣、東俣の溪流部から記録があるほか、農鳥岳、赤石岳、上河内岳、悪沢岳などの高山帯から記録がある。1970年代には報告された記録はなく1980年代には荒川小屋、悪沢岳、1990年代には聖岳での目撃記録しかない。2000年以降の記録は報告されていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内において発生が確認されたことはないが、県外の例では食草の生育する溪流沿いが主な発生地となっている。シカによる食草の食害 (54) が原因の一つと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上部の蝶最終報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003

堀口真之 (1964) 大井川水源地方の蝶. 駿河の昆虫, (47): 1277-1280

白井和伸 (2003) 南アルプスの蝶類調査記録 (1998年). 駿河の昆虫, (202): 5641-5644

高橋真弓 (1962) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第9報). 駿河の昆虫, (39): 1067-1075

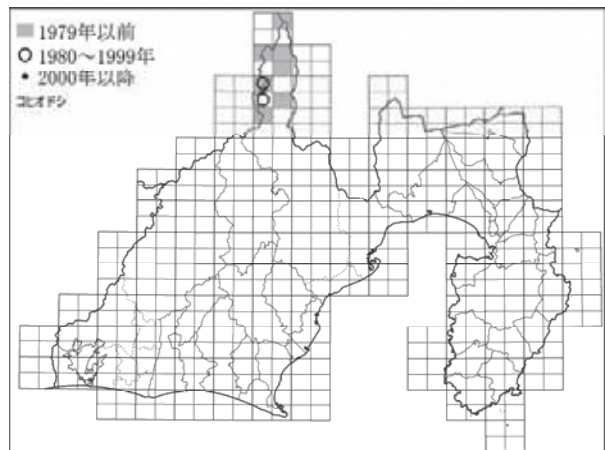
富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

## 9. 標本

静岡市産 (3 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



静岡市産♂表面 1955年8月17日 高橋真弓採集



(諏訪哲夫)



# ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata nipponica* Murayama, 1969

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN) (要件-①②③)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。翅の表面は一様に黒褐色をしている。裏面は暗褐色と白色の細かい波模様があり、前翅に1個、後翅に3個の目玉模様がある。幼虫の食餌植物は各種のイネ科、カヤツリグサ科の草本。幼虫で越冬。成虫は東部では年に1回、西部では年2回発生する。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国、台湾に、国内では本州、神奈川県（絶滅）以西の西日本に限られる。県内では東西二つの分布域に分かれる。一つは原野谷川以西で、西日本一帯に連続する。もう一つは、富士川以東の、富士山南西麓~東南麓の地域及び伊豆半島北部から記録がある。

## 3. 生息環境

平地や低山地の、草地と林の境目の明るい場所に生息する。いわゆる里山の周辺や、用水、小河川の土手、河川の堤防、湿地など様々なごくふつうの環境から見つかる。

## 4. 生息状況

中伊豆地域では1960年代には姿を消し、函南町、旧伊豆長岡町などでは1980年代の終わりには記録が途絶えている。富士地域は1970年代には姿を消した。西部においては旧引佐町は1970年代の終わり頃、旧掛川市が1980年代の終わり頃、旧天竜市、旧豊岡村は1990年代に姿を消している。現在生息が確認されているのは、伊豆では伊東市、西部では森町、旧浜北市、旧三ヶ日町の限られた地域のみである。

## 5. 減少の主要因と脅威

各種の開発(23)、道路建設(24)に加え、里山の荒廃が進んだため、低山地や人里近くの雑木林そのものが失われた。残された林にしても、放置され、活動空間が失われた(53)。また、農道の舗装による微気候の変化(71)も無視できない。産地の孤立化で近親交配(62)が進むと、世代交代ができなくなる。以前ほどではないが採集圧(41)もあり無視できない。

## 6. 保護対策

里山の保全や環境整備が図られることで本種の存続も期待できる。

## 7. 特記事項

神奈川県、山梨県では絶滅したとされる。日本産種の分類上の扱いについては検討すべき点もある。

## 8. 主な文献

大庭俊司(1970) 磐田原台地のヒメヒカゲとウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (70): 2045

清 邦彦(1963) 富士南麓のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (44): 1177-1178

白井和伸(1986) ウラナミジャノメ分布調査. 駿河の昆虫, (135): 3922-3923

諏訪哲夫(1989) 静岡県西部のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (145): 4184

高橋真弓(1962) 1962年静岡県東部のウラナミジャノメ. 駿河の昆虫, (39): 1081-1082

高橋真弓(1965) 静岡県とその周辺における *Ypthima* 属の分布. 駿河の昆虫, (52): 1430-1446

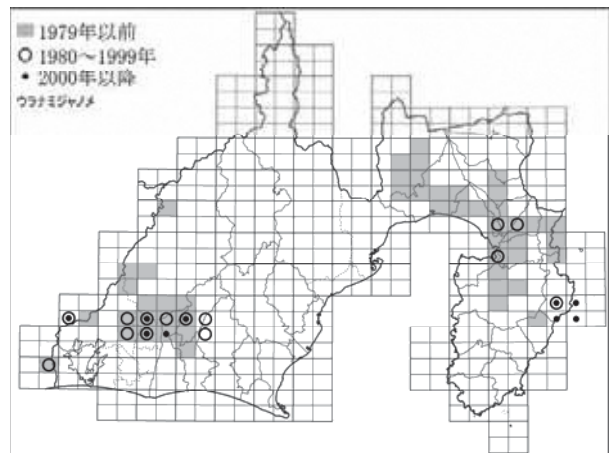
## 9. 標本

各産地(多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



周智郡森町産♂裏面 2012年6月13日 諏訪哲夫採集



# オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 変更コード 6, 7

[2004 年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張オス 40 mm 内外、メスは 50 mm を超える。オスの触角はやや鋸歯状。前翅は黒ずんだ暗褐色、中室下縁に沿う黒色条と中室端に 1 小白点を呈する。後翅は黄白色。成虫は年 1 化、7~8 月に出現する。大型の湿生単子葉植物の borer で、ガマの茎内から幼虫がえられている。

## 2. 分布

国外では、イラク、中国（黒龍江省）、ロシア南東部に、国内での産出は局地的で北海道、本州、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町天竜川河口（遠州浜）で記録がある。

## 3. 生息環境

ガマなどの生育する湿地。

## 4. 生息状況

磐田市桶ヶ谷沼では 1986 年の記録があるのみで、2002 年の調査まで生息が確認されていた浜松市南区松島町天竜川河口（遠州浜）の生息地は最近消失した。

## 5. 減少の主要因と脅威

磐田市桶ヶ谷沼で確認できない理由は不明だが、本種の生息環境である湿地環境は、開発（15-1）、遷移（54）などで減少している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

環境省 編（2015）の改訂版レッドデータブックに記載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

小木広行（1982）オオチャバネヨトウとキスジウスキヨトウの幼虫．誘蛾燈，（87）： 11-13

浦山幸夫（1988）磐田市桶ヶ谷沼の蛾．駿河の昆虫，（142）： 4083-4088

枝恵太郎・四方圭一郎（2011）ヤガ科キリガ亜科．岸田泰則 編，日本産蛾類標準図鑑 II，pp. 323-367．学研教育出版，東京．

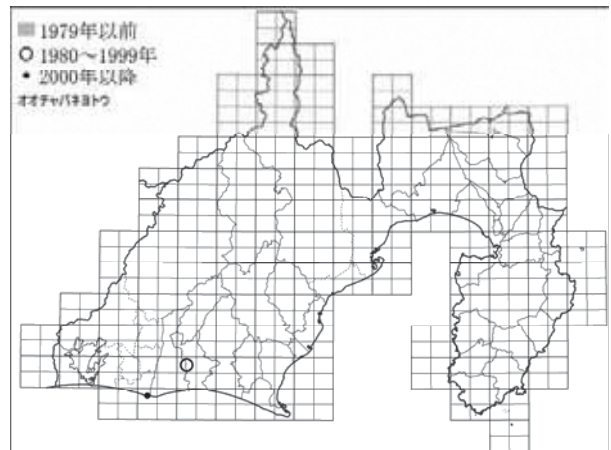
## 9. 標本

浜松市南区松島町産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（枝恵太郎）



©2019 Y.Urayama  
浜松市産♂表面 2000年6月14日 浦山幸夫採集



# モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)

イトトンボ科 Coenagrionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長はオス 23~32 mm、メス 22~31 mm。小型のイトトンボで、体色はオスでは黄緑色の地に前胸部や腹部背面に黒条斑があり、腹端は鮮やかな朱橙色である。メスは未成熟なうちは淡い橙黄色だが成熟するにつれ黄緑色になり、腹部背面には黒い縦条が現れる。5月下旬~8月にかけて出現する。オスは抽水植物などに静止して縄張りをもつ。メスは単独で、柔らかい抽水植物の水面近くの生体組織に産卵する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島から中国中部、極東ロシアに、国内では北海道の函館周辺と本州、四国、九州に分布する。県内では東部・伊豆と西部に既知産地があるが、中部では確認されていない。御殿場市、裾野市、磐田市、浜松市、湖西市などに記録がある。

## 3. 生息環境

主に平地や丘陵地、低山地の草丈の短い湿生植物が繁茂する湿地や水田、休耕田などに生息する。ハッチョウトンボやハラビロトンボ、ヒメアカネなどと同所に見られることが多い。幼虫は乾燥に対してはある程度の耐性がみられ、御殿場市の例では水が完全に抜かれ、ひび割れた湿土の割れ目から多くの生きた幼虫を採集したことがある。

## 4. 生息状況

県内での既知産地は、ほとんどが湿地化した休耕田であり、放置すれば短期間で遷移が進行し、草原化してしまう環境である。御殿場市の一産地は、駐車場にするため埋め立てられ消失した。また別の御殿場市の産地は、休耕田を利用したハス観賞池であり、発生数は多いが、毎年出現期の終盤頃に殺虫剤を散布される。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地環境の減少 (15-1) が主要因と考えられる。また水田やその周辺の生息地では、農薬や化学肥料の影響 (32) も可能性がある。不安定な環境に生息するため、幼虫はある程度の乾燥には耐えられるようであるが、水の供給が長期間途絶えると、乾燥に耐えられず死滅する可能性がある。遷移が進行中の不安定な湿地を転々と移動する (53) ものと思われ、湿地環境の著しい減少に伴い、激減したものと考えられる。

## 6. 保護対策

自然状態の湿地には確実な産地がなく、現存産地はいずれも休耕田である。現存する自然湿地を、適度な植生管理により保全するとともに、休耕田の産地では土地所有者などに協力を仰ぐなど、生息環境の確保が重要であろう。

## 7. 特記事項

全国各地で減少しており、絶滅した可能性のある県も複数ある。

## 8. 主な文献

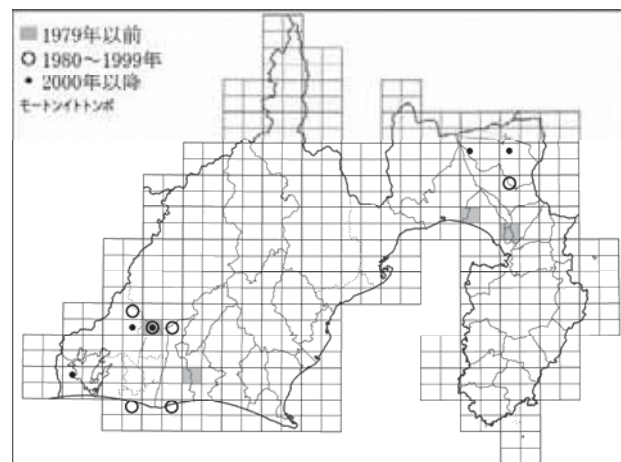
加藤哲男 (1990) 引佐郡のトンボ相 (第1報). 駿河の昆虫, (152): 4353-4361

## 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Kasuya  
御殿場市 2014年6月29日 加須屋 真



(加須屋 真)



### 1. 種の解説

体長はオス 66~79 mm、メス 66~77 mm。腹部第3節のくびれがなく、寸胴な中型のヤンマ。体色や斑紋はオスメスでほとんど差がなく、全身が鮮やかな黄緑色で、翅胸前面と腹部背面に黒色条がある。オスは成熟すると地色がやや青みがかかる。オスは密生したヨシなどの抽水植物の間を縫うようにして飛翔し、メスを探す。メスは密生するヨシなどの間に潜り込むように飛翔し、これらにつかまり単独で葉や茎の生体組織に産卵する。4月下旬~8月初めにかけて出現する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア極東に分布する。国内では北海道道南、本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市、浜松市、湖西市など西部に記録が集中するが、東部の駿東郡清水町に古い記録がある。

### 3. 生息環境

主に平地や丘陵地のヨシ、ガマ、マコモなど高茎抽水植物が繁茂し腐植物が堆積したやや泥深い池沼や緩流、ヨシ原湿原に生息する。特にヨシが繁茂した環境を好む傾向があり、ヨシの存在は本種の生息に重要な要素と考えられる。

### 4. 生息状況

磐田市、浜松市には産地が現存する。近年では産地は天竜川下流域周辺にほぼ限られる。いずれの産地も以前に比べ、個体数は減少傾向である。

### 5. 減少の主要因と脅威

主な生息環境であるヨシ原湿原の埋め立て(15-1)などによる消失や、護岸工事などによる抽水植物の消失(12)が主要因と考えられる。本種の保全、個体数の維持には、比較的大きな面積のヨシ原の確保が必要である。

### 6. 保護対策

主な生息環境である豊かなヨシ原を含んだ湿地・池沼環境を、周辺を含め、広範囲に保全する。家庭排水や化学肥料の流入による水質汚染や富栄養化、農薬の流入などにも留意が必要である。富栄養で泥深い環境に生息するため、堆積物や泥に潜り込む性質のあるアメリカザリガニには、特に注意が必要であろう。

### 7. 特記事項

全国的に産地は限られ、地域によっては減少が著しい。

### 8. 主な文献

細田昭博(1985) 浜松市のトンボ相. 駿河の昆虫, (129): 3745-3753

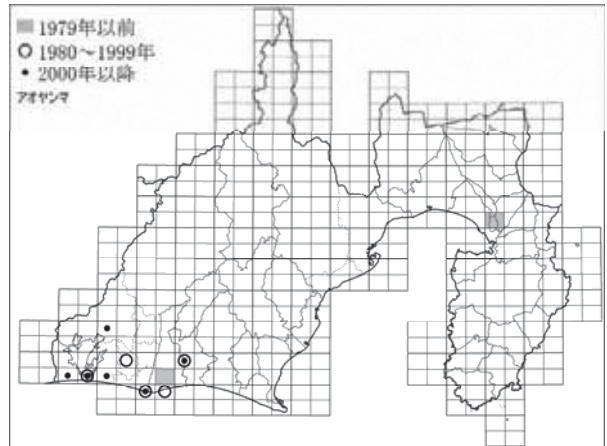
福井順治(1995) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の羽化殻調査. 駿河の昆虫, (169): 4775-4781

### 9. 標本

磐田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2002年6月21日 加須屋 真



(加須屋 真)

# ホンサナエ *Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更コード1,6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長はオス 49~53 mm、メス 49~55 mm。ずんぐりとした中型のサナエトンボで、体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。翅胸前面の黄色斑は正面から見てZ字を向き合わせた模様である。胸部側面には通常1本の黒条がある。複眼は成熟すると緑色になる。5~6月にかけて出現する。成熟オスは岸辺の砂地や石の上などに静止して縄張りをもつ。メスは単独で、岸辺に静止して腹端に卵塊を形成した後、水面を打水し産卵する。

## 2. 分布

日本固有種とされ、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では狩野川水系に分布する。

## 3. 生息環境

主に平地から丘陵地、低山地を流れる河川中流域や小川、用水路などに生息するほか、芦ノ湖や山中湖など湖の湖畔にもみられる。オスは瀬石のごろごろし、比較的早い流れに隣接したやや緩やかな岸辺に縄張りをもつ。

## 4. 生息状況

県内の確実な産地は伊豆の狩野川水系にほぼ限られる。しかし2000年以降確認されておらず、現状はきわめて憂慮される。本調査での確認は、三島市街地を流れる湧水河川で、近くの住民により羽化が偶然撮影されたものであり、何らかの理由で卵または幼虫が非意図的に移入された可能性も排除できない。

この河川は柿田川から取水した水をろ過せずに流下させているとのことなので、取水元である柿田川には残存している可能性が示唆される。

## 5. 減少の主要因と脅威

一般的にはコンクリート護岸などによる環境変化(13)、家庭排水流入(31)、コイなど大型捕食者の人為的な放流(52-3)などの要因が考えられる。しかし狩野川水系では河川環境に大きな変化が認められないまま、確認できない状況が続いている。人為的な河川環境の改変だけでなく、降水量の変化など自然環境の変化(71)も影響している可能性がある。台風の影響による河床の大規模な攪乱(55)は、生息に大きな影響を与えている可能性がある。

## 6. 保護対策

できる限り現状を維持し人為的改変を行わないようにしながら、経過観察を続けることが必要であろう。

## 7. 特記事項

近年各地で減少傾向が著しく、東北~北陸地方では特に顕著である。静岡県以西の個体群は西日本個体群とされ、東日本個体群とは若干の差があるという。

## 8. 主な文献

加須屋 真 (1992) 田方郡のトンボの記録(第2報). 駿河の昆虫, (158): 4504-4509

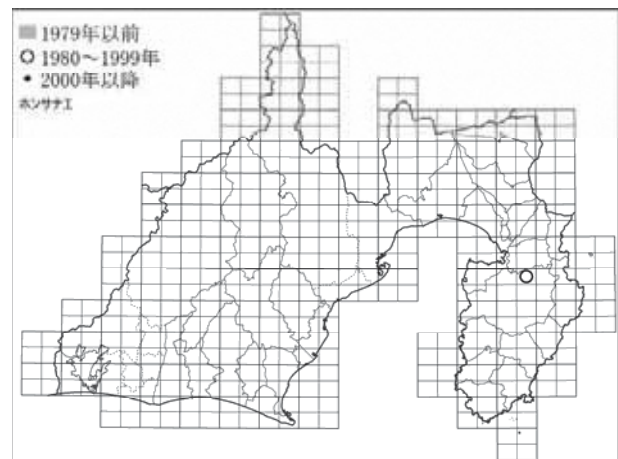
油井雅樹 (1998) 伊豆地方で採集・観察したトンボの記録. 駿河の昆虫, (182): 5111-5117

## 9. 標本

伊豆市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



伊豆市 1998年5月23日 加須屋 真



(加須屋 真)

## コサナエ *Trigomphus melampus* (Selys, 1869)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更コード1, 3, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長はオス 40~47 mm、メス 41~47 mm。小型のサナエトンボで、体色は黒地に黄色斑がある。翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。胸部側面には通常1本の黒条がある。複眼は成熟すると緑色になる。4~6月にかけて出現する。オスは水辺の植物の葉や石などに静止し、縄張りをもつ。産卵はメス単独で、腹端に卵塊を作り水際の植物上を打空して行う。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州に分布する。北海道や東北及び山地帯では比較的ふつうだが、西南日本ではほとんどが高標高の冷涼な環境に限られる。県内では沼津市、富士市、富士宮市、静岡市、島田市、川根本町、森町、浜松市などに記録がある。1950年代には旧韮山町、駿東郡清水町などでも記録がある。

### 3. 生息環境

主に丘陵地から山地の、周囲に樹林があり、抽水植物や浮葉植物、沈水植物などが豊富な池沼や湿地に生息する。

### 4. 生息状況

近年生息が確認できない産地や、消滅した産地が多く、安定した産地はごく限られる。沼津市(旧戸田村)の産地は、暖地では珍しい海岸近くの産地であり、寒冷地に分布の中心がある本種の生息地として特筆に値する。

### 5. 減少の主要因と脅威

沼津市(旧戸田村)の産地は富栄養化が進み(54)、水質の悪化(31)が懸念される。富士市の産地はコイが放流されており、本種に捕食圧(52-3)を与えている。富士宮市の産地は、湿原の遷移・乾燥化(54)が認められ、本種の生息環境である池塘の縮小や消失がみられる。

### 6. 保護対策

生息環境と良好な水質を保全すること、コイなど生態系に強い影響を与える生物の導入を防ぐこと、導入が確認された場合は駆除することが必要である。遷移の進行による生息環境の変化については、湿原全体の保全計画を策定する必要がある。

### 7. 特記事項

北海道や東北ではもともと稀な種ではないが、特に関東地方などでは減少が著しい。本県での分布はきわめて限られる。

### 8. 主な文献

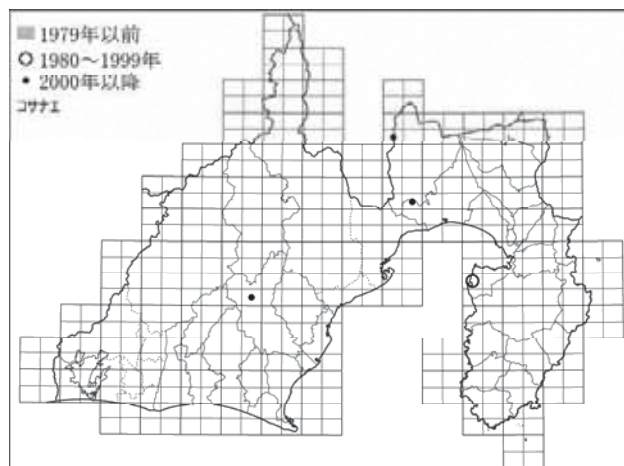
福井順治(1985) 静岡県とその周辺部におけるコサナエ属サナエトンボの記録. 駿河の昆虫, (129): 3754-3764

### 9. 標本

島田市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



富士宮市 2011年6月25日 加須屋 真



(加須屋 真)



# タバサナエ *Trigomphus citimus tabei* (Asahina, 1949)

サナエトンボ科 Gomphidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

体長はオスメスとも 43~47 mm。小型のサナエトンボで、翅胸前面の黄色斑は正面から見てL字を向き合わせた模様である。胸部側面には通常1本の黒条がある。体色はオスメスともに黒地に黄色斑がある。複眼は成熟すると緑色になる。4~6月にかけて出現する。オスは水際の植物や地面に静止して縄張りをもつ。メスは単独で水域に飛来し、ホバリングしながら卵をばらまく。

## 2. 分布

朝鮮半島から中国東北部にかけて分布するタイリクタバサナエの日本固有亜種で、国内では静岡、岐阜、滋賀、福井各県以西の本州と、四国、九州に分布する。静岡県は太平洋側の分布の東限にあたり、東部・伊豆はもともと分布していない。県内では島田市、磐田市、浜松市、湖西市に記録があるほか、静岡市に古い記録がある。

## 3. 生息環境

主に平地や丘陵地、低山地などにある田園地帯の、周囲に樹林や草地がある浅く緩やかな小川や用水路、谷戸の奥に作られた灌漑用ため池などに生息する。完全な止水ではなく、河川や用水路が流入し、水の入れ替わりがある池沼を好む傾向がある。

## 4. 生息状況

丘陵地、低山地の農地周辺の開発行為や管理放棄による遷移により失われた産地が多い。一方浜松市浜北地区や引佐地区では、休耕田を利用したビオトープの一部で定着の可能性も確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

主に農地周辺に生息するため、農業近代化による水路やため池の環境変化(12、13)、農業排水の流入による水質汚染(31、32)が主要因と思われる。農業用水路のコンクリート化(15-2)は、水底の泥に潜り込む習性のある本種幼虫に大きな影響を与える。

## 6. 保護対策

良好な水質の維持のため、家庭排水や農業・畜産排水等の流入に注意が必要である。また生息地周辺に植生があることも重要な要素であり、生息地周辺のやや広範囲な環境保全が必要である。

## 7. 特記事項

静岡県より西の地域では稀な種ではないが、分布東限に当たる本県では分布はきわめて限られる。

## 8. 主な文献

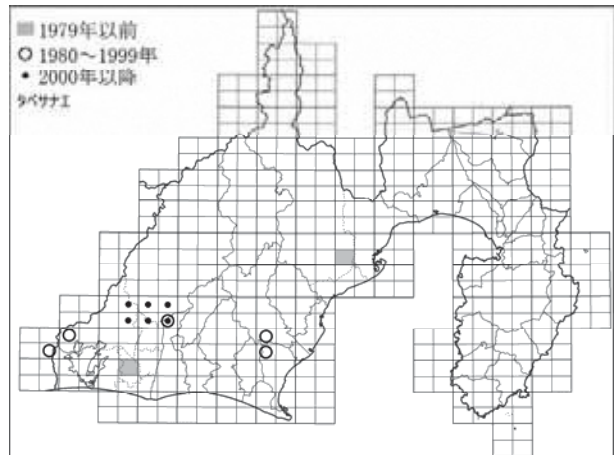
福井順治(1980) 浜北市・天竜市とその周辺のトンボの記録。駿河の昆虫, (109): 3215-3221

## 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Kasuya  
浜松市 2017年4月30日 加須屋 真



(加須屋 真)

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

体長はオス 58~64 mm、メス 61~66 mm。体色はオスメスあまり差がなく、ほぼ全身が鈍い金属光沢のある黒緑色で、翅胸側面などに黄色斑がある。6~9月にかけて出現する。オスは流れの上などを頻りにホバリングしながら飛翔し、縄張りを形成する。産卵はメス単独で、流れのやや緩く浅いよどみなどにホバリングしながら降下し、腹端を水面や砂泥底を打つようにして行う。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では北海道の一部と本州、四国、九州に分布するが、産地はかなり局地的である。県内では東伊豆町、富士宮市、静岡市、菊川市、袋井市、浜松市などに記録がある。

### 3. 生息環境

主に丘陵地や低山地の湿地や湿原の細流、湧水に関わる抽水植物や沈水植物が繁茂する清流などに生息する。他県では比較的大きな河川の河川敷内を流れる水生植物が豊富な小分流で見られることがある。

### 4. 生息状況

各産地とも個体数は少ない。東伊豆町では低山地の湿原を流れる細流、静岡市では低山地に囲まれた耕作地周辺の伏流水由来の小河川、小笠山では樹林に囲まれた沢の細流に生息している。いずれの産地でも様々な条件により、水温が年間を通じてあまり上がらないことが共通している。このことが本種の生息条件の一つである可能性がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内にはもともと本種に適した環境そのものが少なく、そのためもともと産地、個体数ともに少ないものと推察される。各産地とも現状では大きな人為的改変は認められない。しかしほとんどが湧水、伏流水に関わる産地のため、著しく降雨の少ない状態が長期間続くような場合(71)、影響が出ている可能性がある。

### 6. 保護対策

湧水、伏流水の確保のため水源林の確保が重要である。そのためには生息地周辺の広範囲にわたる自然環境の保全が必要であろう。

### 7. 特記事項

分布域は広いが環境選好性が狭いため、産地はもともと限られる。近年各地で減少傾向である。

### 8. 主な文献

福井順治 (1979) 日本平・久能山その周辺のトンボの記録. 駿河の昆虫, (107): 3155-3160

江間修司 (1988) 静岡市諸川池のトンボ相. 駿河の昆虫, (144): 4137-4142

油井雅樹 (2002) 伊豆半島におけるトンボの採集記録(1998~2001年). 駿河の昆虫, (199): 5563-5565

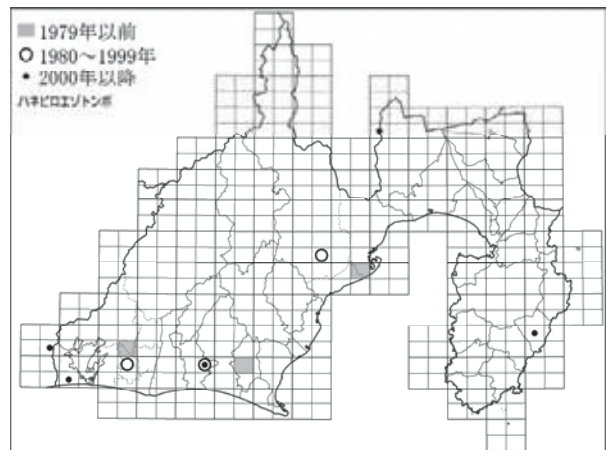
### 9. 標本

静岡市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(加須屋 真)



袋井市 2011年8月8日 福井順治



# ホッケミズムシ *Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura, 1905)

ミズムシ科 Corixidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

体長 9.5~11.5 mm。淡黄色で背面は多数の細い黒色横条斑を装う。前胸背板の黒色横条はおおむね直線状で9~10条、半翅鞘のものは細かく波曲あるいは各々連絡し後方ほど顕著。体は腹背にやや扁平な短円筒形で、翅端は狭く丸まる。肢は前肢では著しく短く、跗節は1節から成り厚みのあるサジ状、腹面は広くえぐられ長毛・剛毛と短棘(オスのみ)をそれぞれ列生、末端の爪は1本で細い鉤状、中肢は細長く、末端に甚だ細長い2本の爪を具え、後肢は脛・跗節が扁平で長毛を密に列生した遊泳脚となり、跗節は2節、爪は1本で跗節第2節末端と癒合する。

成虫は秋から春にかけて多く見られ、早春に繁殖する。

## 2. 分布

日本固有亜種で、山形県以南の本州、四国、九州に分布する。本州の東北地方、北海道、千島と、国外の樺太、朝鮮半島、中国北部に分布する個体群は基準亜種 *Hesperocorixa distanti distanti* (Kirkaldy, 1899)、とされる。県内では磐田市桶ヶ谷沼、浜松市西区篠原町の記録があり、浜松市南区松島町、浜松市西区坪井町での採集例がある。

## 3. 生息環境

ヨシやガマなどの抽水植物が繁茂する池沼に生息する。

## 4. 生息状況

県内では採集例が少なく、詳細な生息状況は不明である。磐田市桶ヶ谷沼では数回調査したが、全く生息は確認できなかった。浜松市南区松島町の生息地では2000年前後まで相当数が見られたが、近年は非常に少なくなった。他の生息地では単発的に確認されるにすぎない。

## 5. 減少の主要因と脅威

桶ヶ谷沼では静岡県自然環境保全地域として十分な保全対策が講じられてきたはずであるが、コバンムシなど、他の数種の水生昆虫とともに全く見られなくなってしまった。減少の要因として、池自体の富栄養化や腐植質の堆積に起因する水質の悪化(31)、外来魚やアメリカザリガニなどによる捕食圧(52-3)の増加が考えられる。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。浜松市南区松島町では数ヶ所の池が存在する公園として管理されているが、池の水生生物に対する保護対策は特に講じられてはいない。

## 7. 特記事項

浜松市松島町のホッケミズムシの生息する池は人工的な池であるので、同様な環境の池を人為的に作ることによって、生息地が増加する可能性が考えられる。

## 8. 主な文献

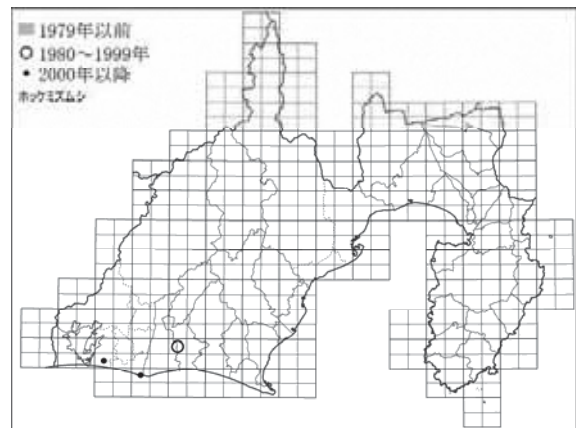
杉山恵一 編(1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査-。(財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa  
浜松市産 2014年12月18日 石川 均採集



(多比良嘉晃)



# カワラハンミョウ *Chaetodera laetescripta circumpictula* W. Horn, 1938

ハンミョウ科 Cicindelidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②③)変更コード9

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

体長 14~17 mm。背面は暗緑灰色で翅鞘は外縁に沿って多少とも波状に汚黄白色、静岡県産の個体は翅鞘会合部の白紋が無いが、発達しないものが多い。腹面は紫銅色の金属光沢を有する。体はおおむね細長いヒョウタン形、肢は細長い。

成虫は 6~9 月に出現し、砂上で他の小昆虫などを捕食する。幼虫は砂中に深い縦穴を掘り、巣穴の入り口で待ち伏せして、オオハサミムシなどの小昆虫を捕食する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、濟州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア東部などに、国内では北海道、本州、伊豆大島、四国、九州に分布する。県内では静岡市清水区三保海岸と浜松市遠州灘海岸の記録がある。

## 3. 生息環境

海岸の砂浜や大河川の砂質の河川敷に生息する。国内の分布は局所的で、相当広範囲の砂地がないと生息していないようである。

## 4. 生息状況

三保海岸では砂浜の浸食防止のための客土により生息地は破壊された。浜松市遠州灘海岸では安定的に生存しているようである。同海岸の 1ヶ所の生息地では 10 数年間生息情報がなかったが、最近再発見された。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸の道路建設 (24) や護岸工事 (14) による生息環境の変化、車両の走行や人の踏み付け (51) による生息環境の破壊、砂浜の浸食防止のための客土による生息地の埋没 (51)、外来植物の侵入による生息地の植物被度の変化 (54) などが原因で減少した。また、浜松市遠州灘海岸は現存する数少ない生息地であるので、愛好者による高い採集圧 (41) が懸念される。

## 6. 保護対策

浜松市遠州灘海岸では巨大地震に備えた防潮堤が建設されるため、静岡県浜松土木事務所と有識者を中心として熱心な保全活動が行われている。

## 7. 特記事項

石川県以西の日本海側と大陸に分布する個体群は基準亜種 *Chaetodera laetescripta laetescripta* (Motschulsky, 1860) とされる。

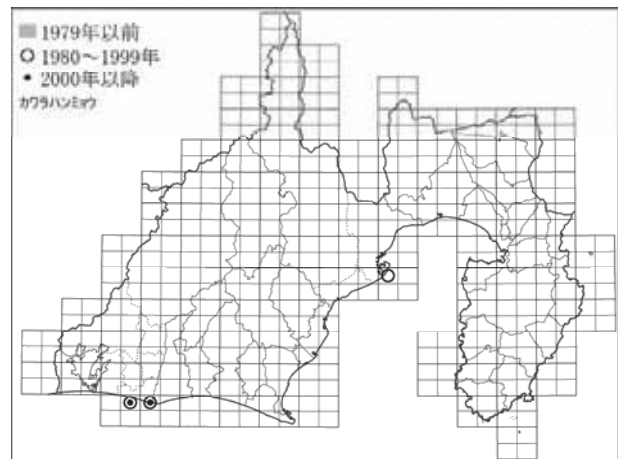
## 8. 主な文献

- 芦田 久 (1998) カワラハンミョウの分布と変異. 月刊むし, (330): 5-9
- 平井克男 (2005) カワラハンミョウ 遠州浜の記録. 駿河の昆虫, (209): 5826
- 平井克男 (2014) カワラハンミョウの調査記録. 駿河の昆虫, (246): 6768
- 多比良嘉晃 (1999) 絶滅か? 三保のカワラハンミョウ. 静岡の甲虫, 11(1/2): 62-63
- 多比良嘉晃・松本雅道 (2000) 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71

## 9. 標本

浜松市産、静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



# キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky, 1859)

コツブゲンゴロウ科 Noteridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 6

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

体長 3.0~3.4 mm。黄赤褐色で強い光沢を有し、前胸背板前方と基半会合部両側の縦条及び側縁部をのぞく翅鞘は黒褐色、翅鞘側縁の黄赤褐色部は中央前と 3/4 付近で内側斜め後方へ広がる。半長球形で背面は凸隆し、腹面はほぼ平坦、翅鞘には 9 条内外のやや強い点刻列を具える。

## 2. 分布

国外では台湾、中国、東南アジア、インドなどに、国内では本州（関東地方以南）、四国、九州に分布する。国内の分布はきわめて局地的であるが、最近では各地で新産地が発見されている。県内では周智郡森町、磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町から記録されており、磐田市鶴ヶ池で採集例がある（未発表）。森町の記録（井上，1995）は溪流で得られているので誤認の可能性はある。

## 3. 生息環境

水生植物の豊富な比較的浅い池沼に生息する。

## 4. 生息状況

桶ヶ谷沼では 2014 年に生息を確認することができた。松島町でも最近確認されているものの、個体数は減少した。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化（54）、農薬・肥料などによる水質汚染（32）、池沼そのものの埋め立て（12）などが考えられる。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

成虫は水中のイグサの茎や根に尾端を差し込む行動をとり、これを呼吸法の一つと推察する報告がある。

## 8. 主な文献

阿部光典（1988）ゲンゴロウ類の分布に関するメモ．甲虫ニュース，（81）： 7

井上智雄（1995）太田川上流・吉川の流水動物相調査(1)．昆虫と自然，30(13)： 23-26

北野 忠・記野直人・長谷川洋・北山 昭（2000）静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録—本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として—．甲虫ニュース，（129）： 7-9

Kudo, Y. & H. Kojima (2010) Observation of the respiratory strategy of *Neohydrocoptus bivittis* (Coleoptera, Noteridae). *Elytra, Tokyo*, 38: 85-86

## 9. 標本

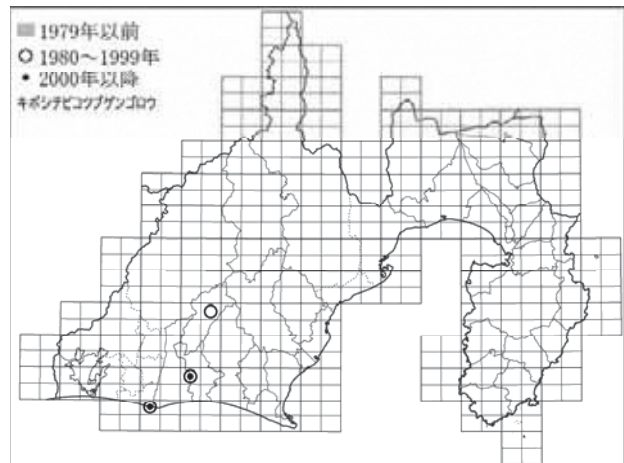
磐田市産：神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa

浜松市産 2014年7月23日 石川 均採集



## ニセコケシゲンゴロウ *Hyphydrus orientalis* Clark, 1863

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD)]

### 1. 種の解説

体長 3.8~4.5 mm。体は短卵形。背面は黄褐~黄赤褐色で光沢は雌雄とも強いが、メス(静岡県産)は光沢を欠く。複眼間には小さな2暗色紋を持つ個体が多い。前胸背後縁は両側をのぞき暗色となり、その暗色紋の前縁は中央部が切れ込む。ケシゲンゴロウ *Hyphydrus japonicus japonicus* Sharp, 1873 に似て外見での区別は困難である。オス交尾器中央片が逆馬蹄形であることで、それが長楕円形・板状で先端部が扇状に広がるケシゲンゴロウと区別される。

成虫は7~12月にえられている。

### 2. 分布

国外では台湾、中国、東洋区に、国内では本州(静岡県)、南西諸島(沖縄本島、西表島、与那国島)に分布する。県内では浜松市南区松島町で記録があり、他に浜松市西区篠原町での採集例がある(未発表)。

### 3. 生息環境

池沼、水田、湿地などの止水域に生息する。

### 4. 生息状況

浜松市南区松島町ではヨシやガマなどが繁茂する池の水深の浅い場所に多く生息していたが、現在は確認できなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内においては、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)などが考えられるが、全くいなくなった原因は不明である。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

本種に似たケシゲンゴロウとは同所的(同じ池)には確認されず、住み分けをしていると考えられている。

### 8. 主な文献

Biström, O. (1998) Dytiscidae: III. The *Hyphydrus* Illiger species of China (Coleoptera). Jach & Ji(eds.), Water Beetles of China II, pp. 93-100. Zoologisch-Botanische Gesellschaft in Österreich and Wiener Coleopterologenverein, Vienna.

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭(2000)静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-. 甲虫ニュース, (129): 7-9

森 正人・北山 昭(2007)改訂版図説日本のゲンゴロウ(第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

### 9. 標本

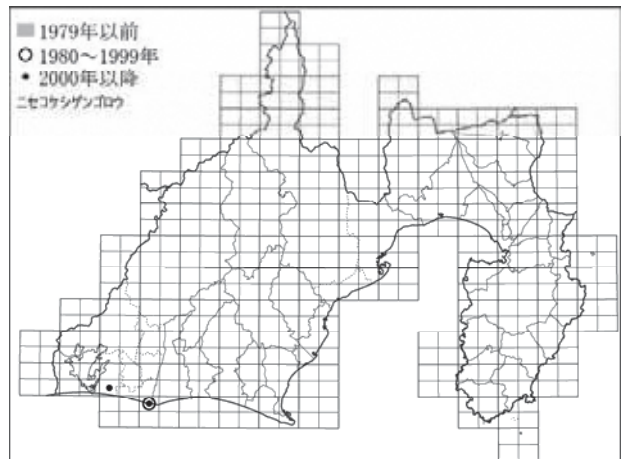
浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃・石川 均)



©2019 Y.Tahira

浜松市南区産 1999年10月23日 多比良嘉晃採集





# キタノツブゲンゴウロウ *Laccophilus vagelineatus* Zimmermann, 1922

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧IB類(EN)]

## 1. 種の解説

体長 3.3~3.5 mm。体は逆卵形で、コウベツブゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* Sharp, 1873 に似るが、本種の方がやや小さく、上翅の基部近くの黄色横帯がより太く目立つ。オス交尾器中央片の先端近くは三角形に張り出す。

成虫は灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外ではロシア、中国、韓国に、国内では本州（静岡県、茨城県）に分布する。県内では磐田市福田、浜松市南区松島町・西区入野町・篠原町で記録があり、浜松市南区白羽町での採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

水深 50 cm ほどの水生植物が豊富な人工池や放棄養鰻池などで確認されている。

## 4. 生息状況

浜松市南区松島町では、2002年頃までは1回の調査で複数個体が確認されていたが、近年は明らかに個体数が減少している。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニの増加による水生植物の減少(54)などが要因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

コウベツブゲンゴロウと形態的に似ていることから、過去のコウベツブゲンゴロウの記録に本種が混同されている可能性がある。また、本種を「中国からの養鰻に利用される稚鰻や他魚種の輸入に伴い移入した可能性が高い」と考える研究者もいる。

## 8. 主な文献

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘(2008)第5章1項6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県産業部振興局研究調整室 編, 静岡県戦略課題研究「快適空間『佐鳴湖』の創造」研究報告書, pp. 470-523. 同室, 静岡.

疋田直之(2015)コウチュウ目. 茨城県自然博物館総合調査報告書 2013年-茨城県の昆虫類およびその他の陸生無脊椎動物の動向-, pp. 39-40.

森 正人・北山 昭(2007)改訂版図説日本のゲンゴロウ(第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

Kamite, Y., N. Hikida & M. Sato(2005) Notes on the *Laccophilus kobensis* species-group (Coleoptera, Dytiscidae) in Japan. *Elytra*, 33(2): 617-628

## 9. 標本

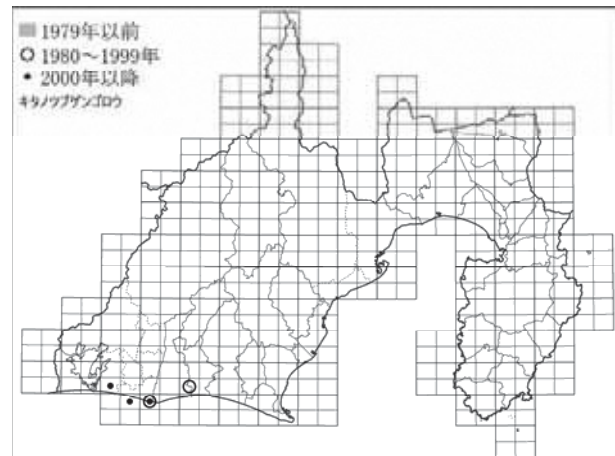
浜松市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(多比良嘉晃・石川 均)



©2019 Y.Tahira

浜松市南区産 2014年11月10日 多比良嘉晃採集



# ルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisius* Sharp, 1873

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更コード 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 3.9~4.7 mm。体は逆卵形で幅広い。背面は淡黄褐~黄褐色で微細な網状印刻に密に覆われ、やや強い光沢がある。前胸背の前縁中央部と後縁は暗色。上翅には 6~7 条の暗褐~黒色の輪郭をもつ縦条を並列するが不規則に断続、合着する。触角、口枝は黄褐色で先端は暗色、腹面は黄褐色、肢は黄褐~茶褐色。

成虫は 3~12 月に見られる。成虫、幼虫ともに肉食とされる。

## 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町で記録があり、他に掛川市兼政池での採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

平野部から丘陵の浮葉植物などの豊富な池沼、湿地、ため池、放棄水田、河川周囲の池に生息する。

## 4. 生息状況

県下での最近の記録は少なく、詳細な生息状況は不明であるが、生息地、個体数とも減少が著しい。磐田市桶ヶ谷沼では 1990 年頃以降、確認されなくなったようである。浜松市南区松島町でも、2000 年代初め頃までは多数生息していたが、近年はほとんど見られなくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内では植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化 (54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊 (54) などが脅威となっている。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

アメリカザリガニの侵入によって本種を含む水生昆虫が絶滅した場所もあると聞く。

## 8. 主な文献

神奈川県立博物館 編 (1995) 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, (8): 1-66

北野 忠・石田和男 (2000) 遠州地方で採集された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14

北野 忠・記野直人・長谷川洋・北山 昭 (2000) 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-. 甲虫ニュース, 129: 7-9

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. 財団法人日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

森 正人・北山 昭 (2007) 改訂版図説日本のゲンゴロウ (第 2 刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

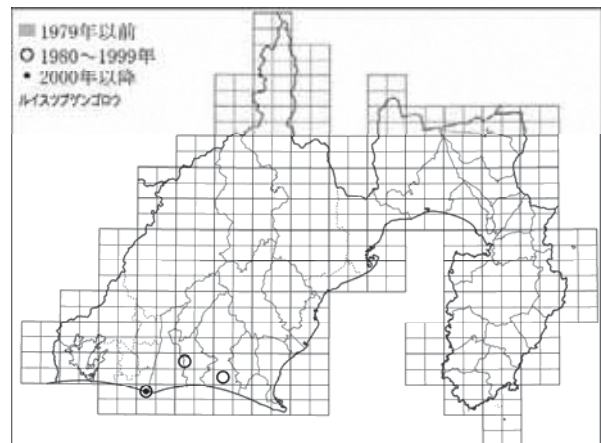
## 9. 標本

磐田市産：神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵

(多比良嘉晃・石川 均)



©2019 Y.Tahira  
浜松市南区産 2002年5月6日 多比良嘉晃採集



# オオミズスマシ *Dineutus (Spinodineuttus) orientalis* (Modeer, 1776)

ミズスマシ科 Gyrimidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長8~10 mm。体は長楕円形、黒色で金銅光沢を帯び、前胸・上翅の両側平圧部は黄色、体下面・口枝・肢は黄褐色。上翅側縁後方と翅端には棘突起がある。

成虫は3月中旬から出現し、産卵期は4~8月で、水草の茎の表面などに産卵する。幼虫期間は約20日。11月には水面から姿を消し、枯れ葉の下などで越冬する。成虫は水面を巡回しながら移動し、水面に落ちた小昆虫を捕食する。幼虫はアカムシやボウフラなどを捕食する。

## 2. 分布

国外ではサハリン、シベリア、朝鮮半島、中国、ベトナムに、国内では北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。県内では伊豆半島、沼津市井田、静岡市清水区折戸・駿河区用宗、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区二俣町などで記録があり、伊豆市小下田、菊川市東横地・本所、掛川市入山瀬、磐田市鶴ヶ池などで採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

河川の上流、水田、池沼などに生息する。

## 4. 生息状況

県内には広く分布するが、生息地は多くない。2000年前後には非常に個体数が多かった生息地もあったが、近年、各所で個体数が激減し、まったく確認できない場所もある。

## 5. 減少の主要因と脅威

埋め立て(12)による生息環境の消失、農薬汚染(32)、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)などが脅威であるが、それだけでは説明できないほど個体数が減少している。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

磐田市桶ヶ谷沼では2007年に確認例があるようである。

## 8. 主な文献

- 北野 忠 (2000) 静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, (15): 17-24  
草間慶一 (1983) VI甲虫類(鞘翅目). 杉山恵一 編, 静岡県の重要昆虫, pp. 114-156. 第一法規出版, 東京.  
森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ(第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.  
森本 桂 監修 (2007) 新訂原色昆虫大図鑑 第II巻(甲虫篇). 北隆館, 東京, 526 pp.  
坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類(II). 駿河の昆虫, (98): 2871-2878  
由比雅樹 (1997) 静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

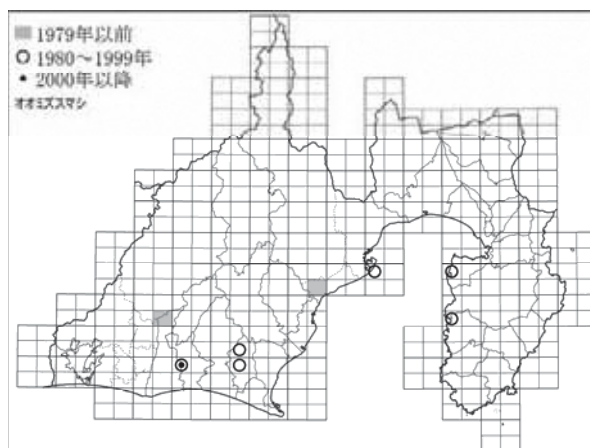
## 9. 標本

掛川市産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃・石川 均)



©2019 H.Ishikawa  
掛川市入山瀬産 1984年8月16日 石川 均採集





### 1. 種の解説

体長 6.0~7.5 mm。黒色で光沢を有するが、メスでは翅鞘の光沢が曇る。肢は黄褐色。体は短倒卵形で背面は適度に凸隆し腹面は平坦、翅鞘は 11 条の点刻列を装う。オス交尾器中央片の末端は幅広く裁断状を呈する。

成虫は 1 年中見られ、水面を遊泳し、水面に落ちた小昆虫などを捕食する。幼虫も肉食性で、アカムシ(ユスリカ科幼虫)などの水中の小動物を捕食する。

### 2. 分布

日本固有種とされ、北海道、本州、四国、九州、種子島、対馬に分布する。県内では伊豆半島、富士宮市麓、掛川市佐夜鹿、袋井市豊沢、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区二俣町、浜松市北区引佐町で記録があり、他に富士宮市沼久保の富士川、島田市神谷城、掛川市高御所で採集例がある(未発表)。

### 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川に生息する。開放水面を巡回しているところを発見することが多い。きわめて小規模な水域に生息していることもある。

### 4. 生息状況

県内の記録は少なく、生息状況の詳細は不明である。磐田市桶ヶ谷沼では近年の数回の調査では全く確認できなかった。また、各地の池沼の調査においても近年確認されなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

開発などによる池沼の埋め立て(12)、農薬・肥料などによる水質汚染(32)、植生遷移の進行や富栄養化に伴う水質悪化(54)、侵略的外来生物アメリカザリガニの植生の食害による水環境の変化(54)などが考えられるが、最近の急激な減少の原因は不明である。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

袋井市愛野の池では以前多数生息していたとの情報がある。

### 8. 主な文献

- 井上智雄(1991) 環境指標を目的とするポンドスウィッピングの試み. 昆虫と自然, 26(14): 14-15
- 北野 忠(2000) 静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川県自然保全研究会報告書, (15): 17-24
- 杉山恵一 編(1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.
- 田村正人(1962) 富士農場およびその付近の昆虫目録. 東京農業大学短期大学農業科・東京農業大学日本植物園研究所, 31 pp.
- 坪井俊久(1977) 天竜市二俣町の甲虫類(Ⅱ). 駿河の昆虫, (98): 2871-2878

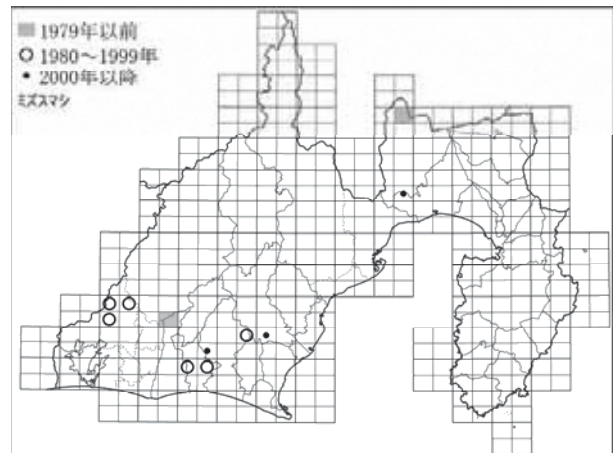
### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



浜松市産 1999年5月8日 石川 均採集



# コミズスマシ *Gyrinus (Gyrinus) curtus* Motschulsky, 1866

ミズスマシ科 Gyrinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①)変更コード6

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

体長 4.9~5.6 mm。黒色で鋼様の光沢があり、肢は黄褐色。体は短楕円形で長さは幅の約 1.8 倍、背面はよく凸隆し腹面は平坦、翅鞘は 11 条の点刻列を装う。オス交尾器中央片は先端に向かい細まり、末端は弧状を呈する。

成虫は水面を遊泳し、水面に落ちた小昆虫などを食べる。

## 2. 分布

日本固有種と考えられ、北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では樺太に分布するとされていたが、同地の個体は *Gyrinus sachalinensis* Kamiya, 1936 の誤同定のものである。県内では磐田市桶ヶ谷沼の記録があり、富士宮市沼久保の富士川での採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼や流れの緩やかな小河川に生息する。

## 4. 生息状況

県内の記録は一例しかなく、詳細な生息状況は不明である。磐田市桶ヶ谷沼では近年の調査において全く確認されていない。富士宮市沼久保では河川敷にある池から流れ出た小流でミズスマシ *Gyrinus (Gyrinus) japonicus* Sharp, 1873 とともにえられた。

## 5. 減少の主要因と脅威

磐田市桶ヶ谷沼では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う水質悪化 (54)、侵略的外来生物アメリカザリガニの植生の食害による水環境の変化 (54) などが減少の要因と考えられる。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

かつては、各地の水田、池、小川などにふつうであったとされるが、近年、全国的に激減している。

## 8. 主な文献

中根猛彦 (1987) 日本の甲虫 (81) . 昆虫と自然, 22(12): 36-40

Nilsson, A. N., M. Lundmark, S. K. Kholin & N. Minakawa (2001) A faunistic review of the *Gyrinus* species of the Far East of Russia (Coleoptera: Gyrinidae). *Koleopterologische Rundschau*, 71: 27-35

佐藤正孝 (1977) 日本産ミズスマシ科概説 (3). 甲虫ニュース, (39): 1-4

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

## 9. 標本

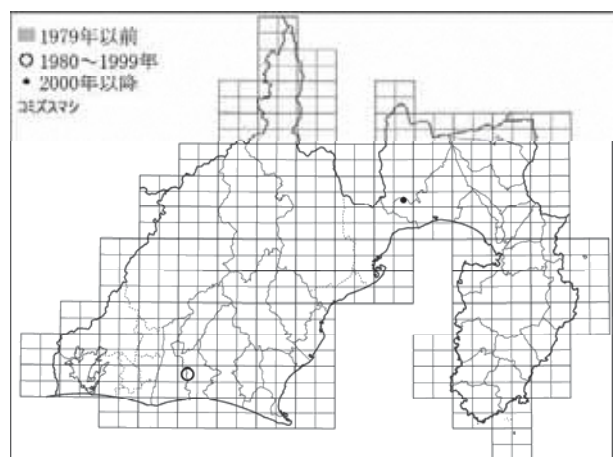
富士宮市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y. Tahira

富士宮市産 2000年12月3日 多比良嘉晃採集



### 1. 種の解説

体長 4.6~5.2 mm。黒色で鋼様の著しい光沢があり、肢は黄褐色。体は短楕円形で長さは幅の約 1.9 倍、背面はよく凸隆し腹面は平坦、翅鞘は 11 条の点刻列を装う。オス交尾器中央片末端は広く丸まる。

止水性のミズスマシで、植物の間の水面を旋回し、開放水面にはあまり出でてこない。肉食性で、水面に落ちた昆虫などを食べ、幼虫も水中でアカムシ(ユスリカ科幼虫)などの小水生生物を捕食する。成虫は灯火に飛来することがある。

### 2. 分布

日本固有種と考えられ、本州、四国、九州に分布している。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町で記録があり、他に牧之原市白井で採集例がある(未発表)。

### 3. 生息環境

水生植物が豊富で水質が良好な池沼や流れの緩やかな小河川に生息する。

### 4. 生息状況

磐田市桶ヶ谷沼では近年の調査において全く確認されていない。浜松市南区松島町では 2001 年頃までは個体数がきわめて多かったが、近年は激減した。

### 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)や、侵略的外来生物アメリカザリガニの植生の食害による水環境の変化(54)などが考えられるが、最近の急激な減少の原因は不明である。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

浜松市南区松島町では 2 月の採集例がある。

### 8. 主な文献

北野 忠・石田和男(2000) 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14

杉山恵一 編(1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

### 9. 標本

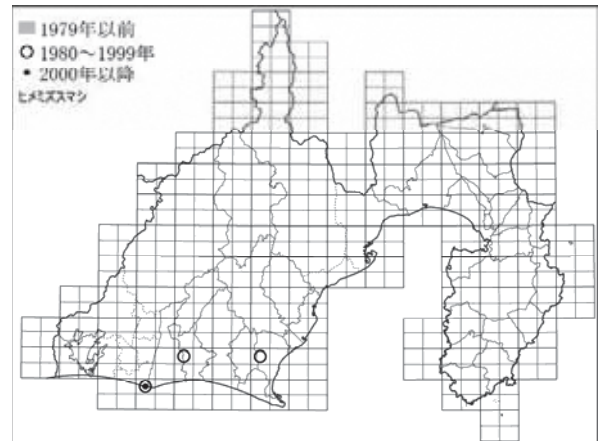
浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa

浜松市産 2014年10月1日 石川 均採集





# ヨツボシカミキリ *Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件①)変更コード5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類(EN)]

## 1. 種の解説

体長8~14 mm。体は赤~赤褐色。上翅は中央から前方に2対の明色紋があり、その周辺は暗色部が広がるが時に明色紋は縦につながる。前胸背は縦長で、背面は浅く密に点刻されて小毛をまばらに生やし、正中部の無点刻部以外に光沢はない。各腿節は後半が強く肥大し、中脚脛節は基半が強く湾曲する。

成虫は5~8月に出現し、クリの花の咲く時期に多く、好んでクリの花を訪れるほか、ブナ科の薪に集まり、また灯火にもよく飛来する。幼虫は各種の広葉樹特にブナ科の枯れ材を食べる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島~インドシナ半島、台湾に、国内では北海道(南部)、本州、四国、九州、飛鳥、佐渡島、隠岐、淡路島、対馬、壱岐、屋久島、伊豆新島、奄美大島、徳之島に分布する。県内では下田市、伊豆市湯ヶ島、静岡市葵区安倍川水源地域、静岡市葵区田代二軒小屋・赤石温泉・東河内温泉、榛原郡川根本町奥泉、菊川市加茂、周智郡森町三倉、磐田市鶴ヶ池、浜松市中区東伊場、浜松市浜北区於呂、浜松市北区滝沢町、浜松市天竜区二俣町・水窪町・佐久間町佐久間ダム・佐久間町中部など県内各地で記録があり、他に、榛原郡川根本町水川、菊川市半済の採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

落葉広葉樹林、常緑広葉樹の自然林から2次林まで、また農山村から緑の多い住宅地まで広範に生息する。

## 4. 生息状況

県内では富士山周辺をのぞくほぼ全域から記録があり、普通種とされていた。しかし、菊川市半済における1990年の採集例(未発表)以降、確実な採集例が見あらず、現在の生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

森林伐採(11)や里地・里山の管理放棄による環境変化(53)が影響していると考えられるが、それだけでここまで衰亡することは考えられないので確実な要因は不明(99)である。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

各地の平地から山地に個体数も多く生息していたが、1970~1980年代以降に全国各地で減少し、現在はほとんどすべての地域で確認できなくなっている。

## 8. 主な文献

草間慶一・多比良嘉晃(1979)大井川上流域のカミキリ 第2報. 東海自然史, (3): 62-71

草間慶一・多比良嘉晃・市川恭治(1986)甲虫類. 長島ダム建設地周辺環境調査報告書, pp. 183-237. 建設省中部地方建設局長島ダム工事事務所.

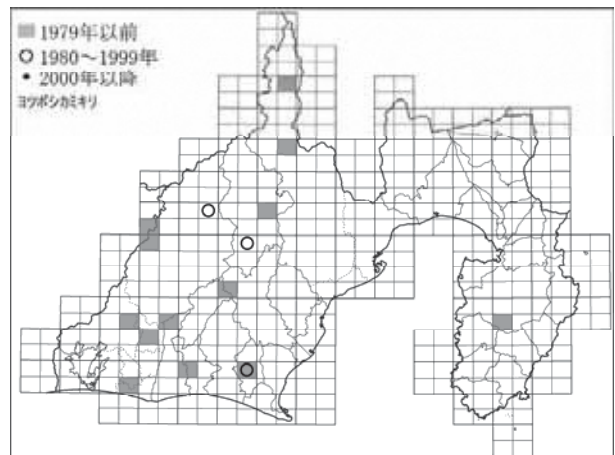
## 9. 標本

川根本町産：川根本町資料館やまびこ所蔵



©2019 T.Sakai

川根本町奥泉産 1978年6月18日 撮影：酒井孝明



(多比良嘉晃・石川 均)

# ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech, 1889

アゲハチョウ科 Papilionidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 55 mm。翅には黄と黒の条紋があり、後翅の後部に赤斑をもつ。年 1 回 3 月下旬～4 月中旬に発生する。幼虫の食餌植物は東部ではランヨウアオイとカギガタアオイ、西部ではヒメカンアオイ。蛹で越冬。タチツボスミレなどのスミレ類の青色の花を好み、モミジイチゴやカタクリなどでも吸蜜する。

## 2. 分布

日本の固有種であり、本州のみに分布する。県内の分布は東西 2 地域に分断され、東の分布地域は安倍川より東方で富士市、富士宮市まで、西の分布地域は磐田原台地を東限として愛知県境までの低山地である。

## 3. 生息環境

春に林床まで光が届くような低山地の雑木林や、成虫の吸蜜植物（スミレなど）の多い明るい林縁、あるいは森林が伐採された明るい空間などが生息地となる。

## 4. 生息状況

安倍川より東で富士川より西の静岡、清水、由比、蒲原の地域では地域による差はあるが 1980 年代初めまで生息していたがそれ以降記録がない。芝川、富士宮地域では 2014 年頃までは確認されたが現在は大変厳しい状況となっている。一方西の分布地域でも湖西市をはじめ多くの産地が失われたが、旧引佐町と旧天竜市境では安定して生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

拡大造林による低山地の雑木林の減少と、林業の衰退のためスギ・ヒノキ林を伐採しなくなったことにより生息に適する環境が激減したためとみられる (71)。

## 6. 保護対策

富士宮市及び浜松市では条例により採集が規制されている。生息地の環境整備が必要。林、林床、林縁の除伐や草刈りなどにより食草のカンアオイ類、スミレなどの吸蜜植物の生育環境を整備すれば生息密度の増加や生息地の拡大が期待できる。

## 7. 特記事項

関西地方ではシカやイノシシにより、カンアオイや吸蜜植物が食べつくされ、生息地が失われている例がある。

## 8. 主な文献

- 石井昌司 (1959) 1959 年に採集したギフチョウの記録. 駿河の昆虫, (26): 659
- 諏訪哲夫 (2015) 富士宮市天子ヶ岳・長者ヶ岳のギフチョウの衰退. 駿河の昆虫, (251): 6875-6876
- 高橋真弓 (1972) 愛知県境宇利峠付近のギフチョウ. 駿河の昆虫, (78): 2293
- 高橋真弓・諏訪哲夫 (1990) 故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について. 駿河の昆虫, (149): 4255-4283
- 渡辺一雄 (1966) 静岡県磐田原のギフチョウについて. 駿河の昆虫, (55): 1526-1527

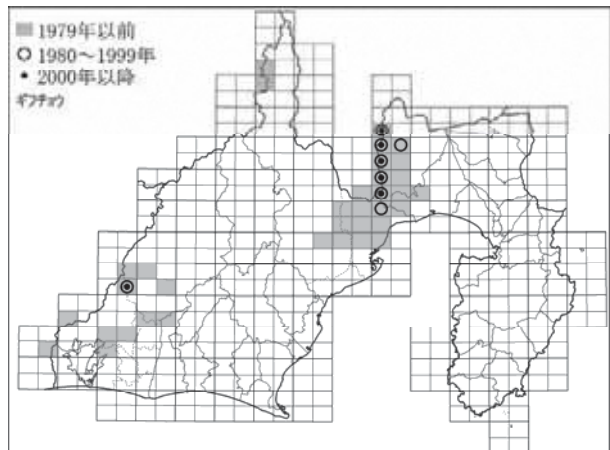
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



富士宮市産♂表面 2013年4月16日 池谷 正採集



# ヒメシロチョウ *Leptidea amurensis amurensis* (Ménétriès, 1858)

シロチョウ科 Pieridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 40~45 mm。翅の表裏ともにほぼ白色で前翅の先端に黒斑がある。胴体・翅の形ともに細く、飛び方も弱々しい。蛹で越冬。幼虫の食餌植物はツルフジバカマ (マメ科)。成虫は4月中旬から9月中旬に3回発生し、草原に咲くアキノタムラソウ、ツルフジバカマなどの花で吸蜜するほか、オスは湿った路面において集団で吸水することもある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東北部、モンゴルなどに、国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では小山町・御殿場市・裾野市・富士市・富士宮市・旧芝川町の富士山麓から記録がある。静岡市からは1953~1963年に4例の記録がある。

## 3. 生息環境

低山地から標高およそ 1,100 m、幼虫の食餌植物ツルフジバカマの生育する草原に広く生息するほか、かつては富士宮市沼久保のような鉄道線路の法面などの小規模な草地や堤防も生息地であった。

## 4. 生息状況

富士宮市には生息地が多く、かつては個体数もかなり多かった。旧芝川町は1953年、小山町は1965年、富士市は1974年が最後の記録。現在は富士宮市の朝霧高原の一角に細々と生息しているほか、御殿場市と裾野市では東富士演習場に個体数は少ないものの比較的安定して生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士山麓の草原が、草地造成や造林のほか各種の開発 (16) や、採草や火入れをしなくなって植生遷移が進行 (54) するなど、1970年代から急速に消滅・衰退したことにより本種は大きな影響を受けている。

## 6. 保護対策

この種のための保護対策は講じられていない。朝霧高原の一部で草刈りが行われており、この作業が生息地保護に効果をもたらすことを期待したい。また、東富士演習場内は開発からは守られ、演習のための場内管理が行われ、結果として草原が維持され、本種の生息につながっている。

## 7. 特記事項

草原の消滅・衰退は全国的にも急速に進行しており、本種の存続が危惧されるところが多い。

## 8. 主な文献

鈴木英文 (1963) 静岡市内でヒメシロチョウ採集. 駿河の昆虫, (44): 1214

増田和夫 (1966) 駿東郡小山町の蝶類. 駿河の昆虫, (53): 1452-1453

清 邦彦 (1975) 富士南麓久沢新田付近の蝶. 駿河の昆虫, (88): 2589-2590

清 邦彦 (1987) 富士山の蝶類分布記録. 駿河の昆虫, (138): 3994-4001

高橋真弓 (2000) 1995~1999年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

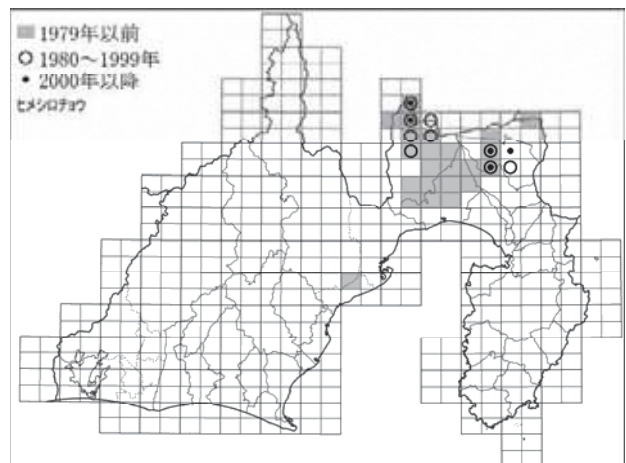
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



御殿場市産♀表面 2015年7月30日 諏訪哲夫採集





### 1. 種の解説

開張およそ 65 mm。オスの翅表は濃黄色、メスは蒼白色、4翅に1個ずつの橙赤色の小斑をもつ。幼虫の食餌植物はクロツバラ (クロウメモドキ科)。成虫は8月上旬より現れ、成虫で越冬する。翌春になって産卵し、母チョウは長生きで7月下旬まで見られることがある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島から中国東北部、極東ロシア沿海州に、国内では本州中部地方と東北地方の一部に分布する。県内では富士山東麓～西麓に記録がある。

### 3. 生息環境

食樹であるクロツバラが多く、アザミ類やマツムシソウが生育する草原が生息地となる。

### 4. 生息状況

富士宮市、御殿場市、小山町から記録がある。小山町では1990年が最後となる。御殿場市では1988年の記録以降2011年に記録されている。富士宮市では1984年頃までは記録が多かったが、その後記録はごく少なくなり、2009年以降は2件のみとなっている。

### 5. 減少の主要因と脅威

各種の土地利用 (16) や植生遷移の進行 (54) などにより、食樹のクロツバラが激減していることが要因の一つとみられる。

### 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。草刈り、火入れなどを定期的に行うことにより草原を維持することが必要であり、同時に食樹のクロツバラを植栽すれば個体数の回復が期待できる。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

- 増田和夫 (1966) 駿東郡小山町のヤマキチョウについて. 駿河の昆虫, (56): 1538-1539  
 鈴木英文 (1978) 静岡・山梨県のヤマキチョウ属について. 駿河の昆虫, (100): 2937-2944  
 相澤和男 (1985) 静岡県富士宮市および山梨県下部町におけるヤマキチョウの採集記録. 駿河の昆虫, (13): 3788  
 高橋真弓 (2009) 富士山富士宮口高鉢駐車場で採集した蝶類-ヤマキチョウなどの記録. 駿河の昆虫, (247): 6790-6791  
 諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539  
 高橋真弓 (2014) 2013年, 富士山静岡県側山麓における蝶類の採集記録. 駿河の昆虫, (247): 6790-6791

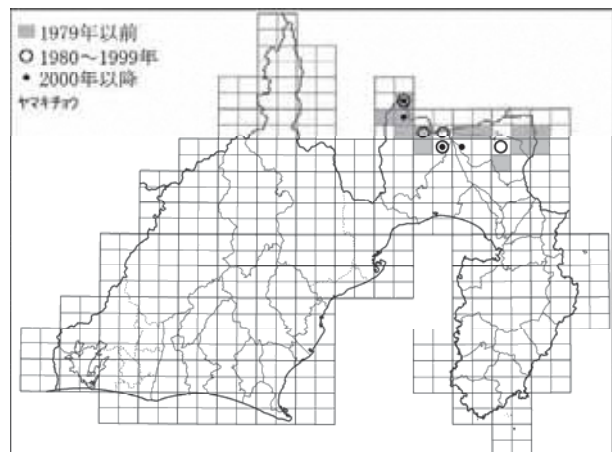
### 9. 標本

富士宮市産 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



富士宮市産♀表面 2009年8月28日 高橋真弓採集



# ウラナミアカシジミ *Japonica saepestriata saepestriata* (Hewitson, 1865)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表裏とも地色は橙黄色、裏面には一面黒条がある。幼虫の食餌植物はクヌギ・コナラ、遠州ではおそらくアベマキ。卵で越冬。年1回6月上旬より発生し、7月まで見られる。クリの花を特に好みよく吸蜜に訪れる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国に、国内では本州と北海道、四国の一部に分布する。県内では伊豆半島、標高およそ 100~700 m の富士山麓及び浜松市とその周辺から記録がある。

## 3. 生息環境

里山・低山地の若いクヌギ・アベマキ林に多く、コナラの林でも発生する。

## 4. 生息状況

2000年代初めまで富士市、富士宮市、沼津市などの低山地のクヌギ林を中心に記録があるが、その後クヌギ林の減少と共に個体数はかなり減少している。一方旧大仁町や伊東市ではクヌギ・アベマキ林が良い状態で維持され、安定して生息している。また、西部の記録はこれまでごくわずかであったが、調査の結果湖西市などには少ないながら確実に生息していることが判明した。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地が住宅地郊外や低山地であるため、宅地造成をはじめとする各種の開発(23)の影響を大きく受けている。また、本種は若いクヌギ林に好んで発生するが、クヌギ・アベマキ林の伐採・更新が以前ほど行われなくなった(53)ことも要因の一つと考えられる。

## 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。里山のクヌギ林の保全・更新が望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

伊藤勝啓(2015)ウラナミアカシジミを県西部2箇所を確認. 駿河の昆虫, (252): 6918

匂坂友和(1961)1960年天竜市熊地区における蝶類覚え書. 駿河の昆虫, (33): 861-866

諏訪哲夫・高橋真弓(2007)故小林國彦氏の蝶類標本(1). 駿河の昆虫, (219): 6081-6097

高橋真弓(1967)静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608

高橋真弓(2002)2002年伊豆半島南部におけるウラナミアカシジミなどの記録. 駿河の昆虫, (200): 5605

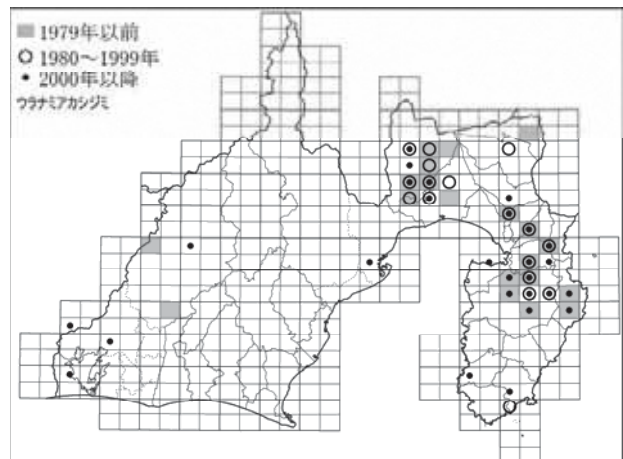
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



伊豆市産の裏面 2015年6月13日 諏訪哲夫採集



# ハヤシミドリシジミ *Favonius ultramarinus ultramarinus* (Fixsen, 1887)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 40 mm。オスの翅表は前翅、後翅とも青緑色に輝くが、メスではほぼ一様に灰褐色。幼虫の食餌植物は県内ではカシワのみ。卵で越冬。年 1 回、7 月上旬に出現し、8 月中旬まで見られる。夕方、オスはテリトリーを作って活発に飛翔する。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部などに、国内では北海道、本州、九州に分布している。県内では富士宮市の富士山西麓に限って分布している。

## 3. 生息環境

富士山西麓の標高 700~1,000 m の草原に生育するカシワ林の疎林に限って生息する。

## 4. 生息状況

富士宮市の富士山西麓に限って生息している。隣接する富士市、裾野市、御殿場市からは記録がない。本県では 1955 年に初めて発見され、その後 2000 年頃までは個体数も多く、安定して生息していた。しかしその後カシワ林の伐採や、他の樹木が繁茂して疎林ではなくなったことから、本種の生育に適さない森林が多くなり、本種の個体数も減少している。最近の調査ではカシワ林は少ないながら残り、比較的広い範囲で本種も比較的安定して生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士山麓の各種の開発 (16) と、採草をしなくなったことなどにより植生遷移 (54) が進み、他の樹木の生長によりカシワ林が被圧され、本種の生息にとって適さない林になったことによると考えられる。

## 6. 保護対策

保護対策は講じられていない。カシワ林の保護と周辺の草原の草刈りや火入れなどの管理が望まれる。

## 7. 特記事項

神奈川県では絶滅危惧Ⅱ類 (VU)、愛知県では絶滅危惧ⅠB類 (EN) にランクされている。

## 8. 主な文献

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 4 報]. 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

諏訪哲夫 (1986) 富士山西麓の蝶. 駿河の昆虫, (133): 3853-3855

高橋真弓・諏訪哲夫 (1990) 故稲葉茂氏所蔵蝶類標本目録の発行について. 駿河の昆虫, (149): 4255-4283

高橋真弓 (2000) 1995~1999 年富士山麓における蝶類採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (190): 5321-5332

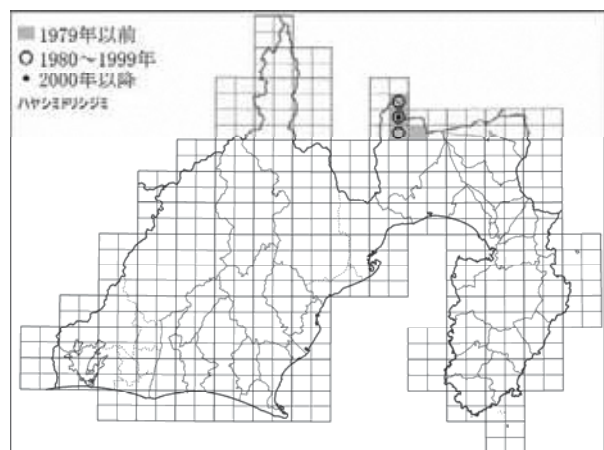
## 9. 標本

富士宮市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産♀裏面 2016年7月22日 池谷 正採集





# クロシジミ *Niphanda fusca fusca* (Bremer & Grey, 1852)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。オスの翅表は暗紫色に光るが、メスは一様に暗褐色を呈する。オスは6月下旬から発生し、メスは8月末まで見られる。本種の生活史は特異で、1~2 齢はアブラムシやキジラミの分泌液を食べ、3 齢以降はクロオオアリに養われ、その巣の中で成長し幼虫で越冬する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部に、国内では本州、四国、九州に分布する。生息地は一般に局所的。県内からは伊豆、東部（富士山麓）、中部（静岡市）、西部などの低山地から広く記録があるが、いずれの地域でも局所的である。

## 3. 生息環境

アブラムシやキジラミ、クロオオアリが生息する雑木林や周辺に草地を伴う人手が加わった遷移の途中の不安定な里山が生息地となる。

## 4. 生息状況

2000 年頃までは県内から広く記録があったが、最近では里山の環境が悪化したことなどにより、生息地は非常に少なくなった。しかし富士山麓ではまだ安定して生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や雑木林の手入れをしなくなったこと (53) により里山の環境が悪化していることが要因の一つとみられる。また特にクロオオアリとの共生関係のため生息環境が微妙に制限されている。

## 6. 保護対策

富士宮市では「特定希少野生動植物」に指定され (2011 年 3 月)、許可のない採集は禁止となっている。そのほかでは特にこの種の保護のための対策はとられていない。雑木林の存続と管理を行えば個体数の増加も期待できる。

## 7. 特記事項

神奈川県では絶滅したとみられる。該当標本は富士宮市の許可を得て採集したものである。

## 8. 主な文献

諏訪哲夫・高橋真弓 (2007) 故小林國彦氏の蝶類標本 (Ⅱ) . 駿河の昆虫, (220): 6101-6121

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011 年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

高橋真弓 (1969) 浜石岳のクロシジミ. 駿河の昆虫, (66): 1921

高橋真弓 (1992) 東伊豆町細野高原 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (160): 4551

高橋真弓 (2013) 静岡県および山梨県で採集されたクロシジミの所蔵標本 (1951~2007) . 静岡昆虫同好会 60 周年記念誌, pp. 178-181. 静岡昆虫同好会, 静岡.

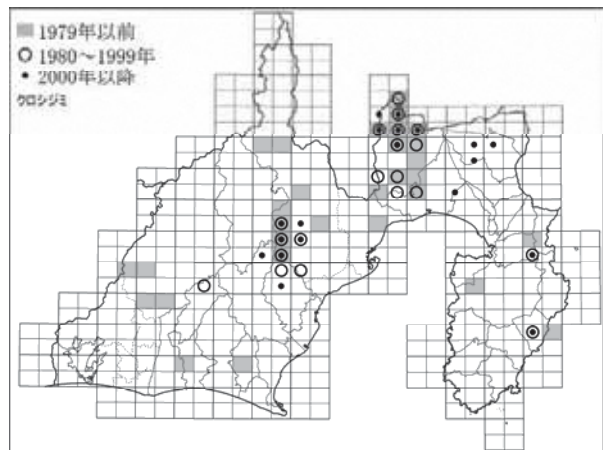
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
富士宮市産♀裏面 2014年7月11日 諏訪哲夫採集



# クロツバメシジミ *Tongeia fischeri japonica* Fujioka, 1975

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②③) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 25 mm。翅の表は黒褐色、裏は褐色を帯びた白色で黒斑があり、尾状突起をもちその基部が薄い橙色となる。オスメスとも同じ斑紋なので区別しにくい。メスは翅形の丸みが強く、やや大きい。幼虫の食餌植物はツメレンゲ (ベンケイソウ科)。幼虫で越冬。成虫は4月下旬～11月初めまで、年に4～5回発生すると思われるが、詳しくは調べられていない。小型のうえ、主に崖に生息するため、地味で目立たない。

## 2. 分布

国外ではウラル、シベリア、モンゴル、中国北部から朝鮮半島、サハリンに、国内では本州中部、中国、四国、九州に分布する。県内では北遠の浜松市天竜区水窪町・佐久間町・龍山町から記録がある。

## 3. 生息環境

幼虫の食草であるツメレンゲが生育する石積みや崖、露岩地などが生息地となる。

## 4. 生息状況

県内では 1969 年に水窪町において初めて発見され、その後佐久間町、龍山町でも発見された。食草のツメレンゲが生育する場所は道路の法面、民家の石垣、残された巨岩などで、絶えず人による改変で生息地の消滅が危惧されている。今のところ生息地は各所に点在していることもあってある程度安定している。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路改修などで石積みをコンクリート擁壁にしたり、崖や露岩地にコンクリート吹き付けをしたりすると (24)、ツメレンゲごと産地が失われることになる。また、本種は産地ごとに微妙な斑紋の変異が見られるため、1980年代から1990年代にかけて一部の愛好家の間で採集圧が高まった。最近は小康状態であるが、依然として人気は衰えず、採集圧は減っていない (41)。

## 6. 保護対策

生息地となる食草のツメレンゲの生育する道路法面の石積みや露岩地の保全が図られることが望ましい。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

榎本孝之 (1993) 磐田郡龍山村でクロツバメシジミを採集。駿河の昆虫, (164): 4676

福井順治 (1976) 佐久間・水窪の蝶類 (II)。駿河の昆虫, (95): 2793-2796

諏訪哲夫 (1970) 静岡県水窪町でクロツバメシジミを採集。駿河の昆虫, (68): 1981

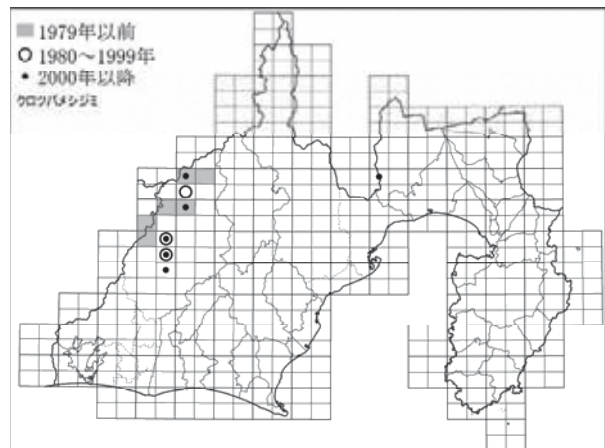
## 9. 標本

浜松市産 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
浜松市産♀裏面 2012年10月11日 諏訪哲夫採集



# ミヤマシジミ *Plebejus argyrognomon praeterinsularis* Verity, 1921

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 30 mm。オスの翅表は青色、メスは暗褐色で、裏面は黒斑の他にオレンジ色の紋が目立つ。幼虫の食餌植物はコマツナギ (マメ科)。卵で越冬。成虫は年 4~5 回発生し、5 月上旬~10 月まで見られる。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸北部から北米大陸北部にかけて広く、国内では本州特産で、東北地方の一部、関東・中部地方に分布する。県内では天竜川、大井川、安倍川、興津川、富士川の各河川及び富士山麓の一部から記録がある。

## 3. 生息環境

主に大河川のコマツナギが多い堤防や河川敷のほか、富士山麓の荒原的な環境にも生息する。コマツナギがクズや外来植物などに覆われて衰退するため、生息地が消滅していく。

## 4. 生息状況

1960 年代にはすでに富士川では姿を消し、富士山西麓からは 1990 年代終わり以降記録がない。現在は富士山の東麓の火山草原、興津川、安倍川、大井川及び天竜川の河川敷に残されているが、生息範囲はどの地域においても狭められる一方である。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川敷や堤防などにおいては植物群落遷移の進行 (54)、外来植物の繁茂、改修工事や草刈りによるコマツナギ群落の刈り込み、公園化など様々な要因 (13)、近年の集中豪雨による河川の荒廃 (55) が考えられる。採集庄 (41) は高く、気田川の産地は報告されて数年で消滅した。

## 6. 保護対策

県立天竜高校では授業の一環として天竜川の生息地の保護に取り組んでいる。また、興津川上流の堤防では地元住民によりコマツナギの保護に配慮した草刈りが行われている。コマツナギの生育に配慮した、生息地とそれに続く周辺の環境の整備を行えば、個体数と生息地の拡大が期待できる。

## 7. 特記事項

日本産は、大陸の原名亜種とは別亜種とされているが、独立した別種の可能性がある。この場合、日本特産種となる。

## 8. 主な文献

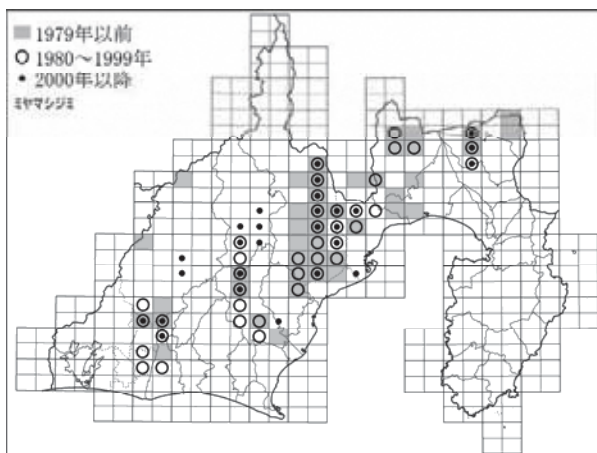
- 斉藤伸行 (2015) 2013~2015 年, 旧本川根町のミヤマシジミ. 駿河の昆虫, (251): 6897
- 清 邦彦 (1982) 富士川のミヤマシジミ. 駿河の昆虫, (116): 3413-3426
- 清 邦彦 (1983) 静岡県及び山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書(1). 駿河の昆虫, (120): 3503-3530
- 高橋真弓 (1957) 静岡県及びその附近におけるミヤマシジミの分布. 駿河の昆虫, (18): 464-474
- 高橋真弓 (1995) 1994 年天竜川・大井川・安倍川・興津川・富士川水系におけるミヤマシジミ分布調査報告. 駿河の昆虫, (169): 4781-4785
- 高橋真弓 (2004) 安倍川流域におけるミヤマシジミの衰亡と現存標本. 駿河の昆虫, (206): 5741-5746

## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵 (白井和伸・諏訪哲夫)



川根本町産♂裏面 2015年9月12日 諏訪哲夫採集





# フタスジチョウ *Neptis rivularis insularum* Fruhstorfer, 1907

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード 1, 3, 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 50 mm。表面は黒褐色の地色に白い帯が 2 筋あり、これが和名の由来となっている。裏面は地色がチョコレート色となる。幼虫の食餌植物はシモツケ、アイズシモツケ（バラ科）。幼虫で越冬。年 1 回の発生で、6 月中旬から発生し 8 月中旬まで見られる。林縁や灌木上を緩やかに飛翔し、クガイソウなどの花で吸蜜するほか、動物の糞などでも吸汁する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国、モンゴル、ヨーロッパなどに、国内では北海道、本州中部以北に分布する。県内では小山町富士山須走口登山道、静岡市葵区大井川上流及び安倍川源流、川根本町南赤石林道から記録があり、北遠地方からの記録はない。

## 3. 生息環境

垂直分布は標高およそ 1,000～1,600 m に生息する、亜高山性の種である。食草のある林縁や草原のほか、林道法面などでも見られる。

## 4. 生息状況

小山町の富士山須走で 1997 年と 2000 年に、川根本町南赤石林道では 1992 年に記録されたが、それ以降確認されない。静岡市葵区大井川源流域には 1950 年代から各地で多くの個体が記録されているが、2000 年以降個体数は激減している。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路法面や灌木を交えた草地が、植生遷移やニホンジカの食害 (54) を受けて、食草となるシモツケやアイズシモツケに加えて訪花植物などが減少したため (54) と考えられる。

## 6. 保護対策

ニホンジカの食害から食草や訪花植物を守るため、ニホンジカの個体数を減少させる対策が望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫 (2014) 大井川上流 7 月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737

諏訪哲夫 (1993) 南赤石林道 9 月上旬の蝶. 駿河の昆虫, (164): 4679-4680

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺におけるミスジチョウ属 *Neptis* の分布. 駿河の昆虫, (60): 1667-1714

谷川久男 (2000) 富士山須走口馬返～標高 1700m の蝶. 駿河の昆虫, (191): 5372

宇式和輝 (2008) 大井川上流域・二軒小屋地域の蝶 [IV・2006 年]. 駿河の昆虫, (224): 6208-6222

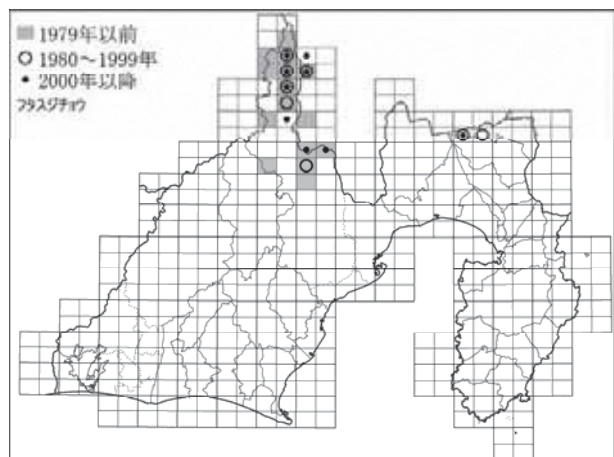
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産の表面 2016 年 7 月 19 日 池谷 正採集



静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

体長はオス 57～63 mm、メス 55～59 mm。オスの体色は金属光沢の強い金緑色、メスはやや銅色がかかる。翅はオスでは濃紺で縦脈が金緑色、横脈が紫藍色なので、開閉すると青藍色に輝く。メスはほぼ黒く、薄い乳白色の擬縁紋がある。成虫はおおむね 4 月下旬から 7 月上旬にかけて出現するが、清水町柿田川では 12 月上旬まで見られることがある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部から中央シベリアにかけて、国内では本州、九州に分布するが、産地は比較的限られる。県内での記録は伊豆・東部の伊豆市、伊豆の国市、三島市、駿東郡清水町の狩野川水系に限られていたが、浜松市佐久間町でも記録された。

### 3. 生息環境

主に平地から丘陵地の、周囲に樹林があり抽水植物や沈水植物が繁茂する比較的水温が低い清流に生息する。水温が比較的低いこととともに、適度に速い流れが確保されることも条件の一つである。移動性が弱く、羽化水域からあまり離れないので、生息地の水辺周辺に、休息や摂食のための草地や樹林が必要である。

### 4. 生息状況

清水町柿田川がよく知られた産地で、環境そのものが保全されており、現在最も安定した産地である。狩野川水系の各河川に不連続に生息している。河川工事の影響で抽水植物が減少し、それに伴って消失した生息地や、流路の変化や水量の減少などにより、激減した産地がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

河川工事による河床や岸辺の攪乱や横断構造物の設置など、河川環境の人工化や流路の変更などによる抽水植物の消失 (13)、河川工事による泥水の流入や家庭排水など (31) の人為的要因が考えられる。大見川流域では夏期の流量の減少と、それに伴う抽水植物や水中の石などへの藻類の付着 (71) がみられた後に姿を消した。

### 6. 保護対策

人為的な河川環境の改変だけでなく、自然環境の変化による生息環境の消失も想定しておく必要がある。特に夏期の流量減少は大きな影響を与える可能性がある。また河川工事による流路の変化や河床の攪乱は、産卵基質となる抽水植物の消失につながり、生息にきわめて大きな影響がある。

### 7. 特記事項

分布域は広いものの産地は局限される。県内での分布も同様である。

### 8. 主な文献

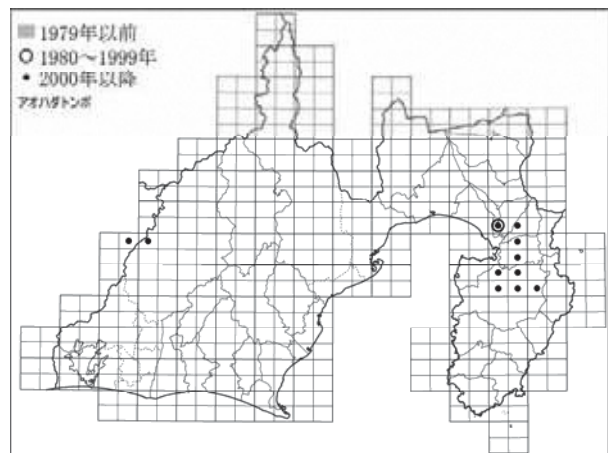
福井順治 (1986) 柿田川湧水群のトンボ相. 駿河の昆虫, (136): 3948-3955

### 9. 標本

伊豆市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



清水町 2013年11月8日 加須屋 真



(加須屋 真)

# オツネトンボ *Sympetma paedisca* (Brauer, 1877)

アオイトトンボ科 Lestidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 35~41 mm 程度。オスメスともに全身が淡褐色で濃褐色の不規則な斑紋をもつ目立ちにくいトンボであり、成熟しても体色はほとんど変わらないが、オスの複眼は青みを帯びる。ホソミオツネトンボとは体形や斑紋が異なるほか、前翅と後翅の縁紋が重ならないことで区別できる。成虫で越冬するため成虫がほぼ 1 年を通じて出現しており、繁殖期の 3~5 月と越冬前の 9~11 月にはよく見られる。春季に池沼に飛来して雌雄が連結して抽水植物の葉や枯れた茎などに産卵する。幼虫期は短く、夏季には羽化して未成熟な個体は林内などに移動して生活する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシアからヨーロッパにかけて分布している。国内では北海道、本州、四国、九州に広く分布するが、四国、九州など暖地では生息地はかなり局地的である。県内では浜松市南区遠州浜など西部には記録が多く、中部、東部ではほとんど記録がない。

## 3. 生息環境

平地から山地の池沼に生息し、ヨシ、ガマなどの抽水植物が繁茂した場所に見られる。繁殖期の春季には池沼で見られるが、夏季から秋季には水辺を離れた森林内や林縁、草原などで生活し、越冬場所も水辺付近ではないため、かなりの距離を移動していると思われる。

## 4. 生息状況

県内ではこれまでに生息が確認された 37 メッシュのうち、この 10 年余の間に記録があったのは 4 メッシュだけであった。多産地の 1 つである浜松市南区遠州浜（松島町）ではまだ記録があるが、個体数は激減しており、同じく多産地であった磐田市桶ヶ谷沼と鶴ヶ池では記録されなくなった。夏季、秋季に水辺以外で確認される記録も減少している。

## 5. 減少の主要因と脅威

水生植物の多い池沼が減少 (12) することもあるが、池沼への農薬や生活排水の流入による影響 (31、32) が個体数の減少の要因となっている可能性がある。成虫で氷点下の低温にも耐えられる北方系の種であり、猛暑・干ばつが頻発する最近の高温傾向の気象条件の影響 (71) も考えられる。

## 6. 保護対策

現存する生息地では大きな環境変化が起こらないようにする。農薬の影響を受けやすい種である可能性もあるため、本種の生息地ではその影響を排除できるように配慮する必要もある。

## 7. 特記事項

関東や北陸など全国的にも減少傾向が著しい地方が多い。

## 8. 主な文献

鵜飼貞行 (1978) 静岡県中部・西部のトンボ類の採集記録. 駿河の昆虫, (102): 3028-3030

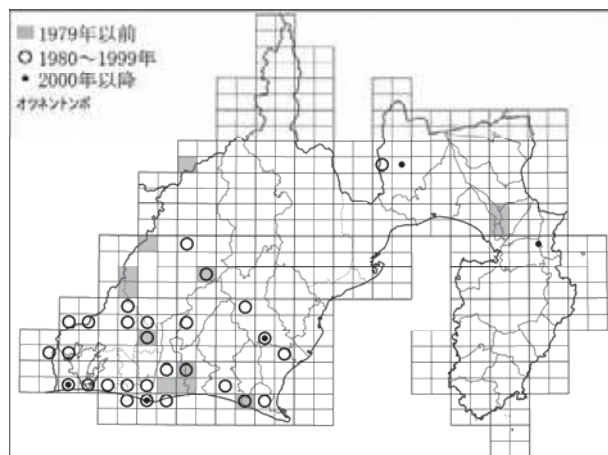
福井順治 (1983) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の季節消長. 駿河の昆虫, (121): 3533-3538

## 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



©2019 M.Fukui  
浜松市 2011年4月4日 福井順治



(福井順治)



# ホソミオツネトンボ *Indolestes peregrinus* (Ris, 1916)

アオイトトンボ科 Lestidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 33~42 mm 程度。未成熟な時は全身が淡褐色で濃褐色の斑点をもつが、成熟するとオスは青色となり、メスも薄い青色になる個体が多い。オツネトンボとは体形や斑紋が異なるほか、前翅と後翅の縁紋が重ることによって区別できる。成虫がほぼ 1 年を通じて出現しているが、繁殖期の 3~5 月と越冬前の 9~11 月に見ることが多い。春季に池沼や水田に飛来し、雌雄が連結して抽水植物の茎に産卵する。幼虫期は短く、6~8 月にかけて羽化した個体は、草原や林縁などに移動して生活し成虫で越冬する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に分布している。国内では本州、四国、九州には広く分布するが、北海道や南西諸島では単発的な記録のみである。県内では東部、中部、西部いずれにおいても記録された地点は多いが、多数の個体が見られる池沼や湿原は少ない。

## 3. 生息環境

平地から山地の抽水植物が繁茂した池沼、湿地、水田や緩い流れに生息する。こうした環境では繁殖期の春季に見られるが、夏季から秋季には、主として山地の林縁や草原などで見ることが多い。

## 4. 生息状況

県内ではこれまでに生息が確認された地点はかなりの多く 74 メッシュに及ぶが、この 10 年余の間に記録があったのは 5 メッシュだけであった。1990 年から 2004 年の 15 年間に確認されたメッシュが 38 であったので、最近になって特に減少傾向が顕著になったことがわかる。多産地の 1 つであった富士宮市小田貫湿原ではまだ記録があるが、個体数は激減している。

## 5. 減少の主要因と脅威

これまで全国的にも減少している種とは考えられてこなかったもので、幼虫の生育地として水田に依存する割合が高い地域では、近年水田で使用されている農薬の影響 (32) が考えられる。一方で山地の緩い流れで生育する場合には、減少の理由を推測することが難しい (99)。本種は成虫で越冬するため低温には耐えられるが、暑さに弱い場合には最近の高温傾向の気象条件の影響 (71) もありうる。

## 6. 保護対策

もともと広範に分布・生息している種であり、特定の生息地を保全することでは対応できないが、現存する主要な生息地の環境を守る必要はある。水田に依存していて農薬の影響を受けやすい種であるため、その影響を排除できるように配慮する必要がある。

## 7. 特記事項

本種の減少傾向はまだ気づかれていない地方が多く、都道府県版レッドリストにも掲載された例は少ないが、今後の経過を注目する必要がある種である。

## 8. 主な文献

加藤哲男 (1990) 引佐郡のトンボ相 (第 1 報). 駿河の昆虫, (152): 4353-4361

福井順治・加須屋 真 (1991) 田方郡のトンボ類の記録. 駿河の昆虫, (153): 4373-4375

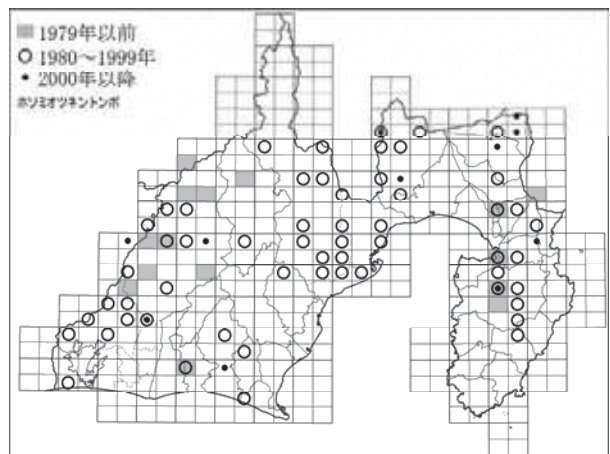
## 9. 標本

浜松市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(福井順治)



袋井市 2011年11月1日 福井順治



### 1. 種の解説

体長はオス 75~87 mm、メス 75~88 mm。腹部第3節がくびれず寸胴な形をしたやや大型のヤンマである。体色はオスメスほとんど差がなく、黒地に黄色または黄緑色の斑紋がある。胸部側面に2本の黒色条がある。翅の基部に鮮やかな橙色斑があり、これが和名の由来の一つである。6~9月にかけて出現する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では東北南部と関東以西の本州、四国、九州に分布するが、産地は限られる。県内では三島市、駿東郡清水町、静岡市、牧之原市、磐田市、浜松市などに記録がある。

### 3. 生息環境

主に平地や丘陵地の、周囲に樹林があり、ヨシ、ガマ、マコモなど高茎の抽水植物が豊富な湿地や池沼に生息する。また放棄水田で見つかることもある。

### 4. 生息状況

記録地は県内各地に点在するものの、確実な産地は少なく、どの産地でも個体数は少ない。特に環境変化が激しい都市部周辺では見られなくなっている。本種は主に朝夕の薄暗い時間帯に活動するため、生息状況を把握しにくいという点もある。

### 5. 減少の主要因と脅威

湿地環境の減少や消滅 (53、54)、湿地及びその周辺の開発行為 (15-1) などの要因が考えられる。三島市では宅地造成 (23) により産地は消滅した。

### 6. 保護対策

本種は樹林に囲まれた湿地を好む傾向がみられること、また、朝夕の摂食飛行時に湿地周辺の開けた草原上を飛び回ることから、湿地環境とその周辺の、やや広範囲にわたる環境保全の必要がある。

### 7. 特記事項

全国的に産地が限られ、安定した産地が少ない。

### 8. 主な文献

福井順治 (1980) 浜松市南部でネアカヨシヤンマを採集. 駿河の昆虫, (126): 3674-3675

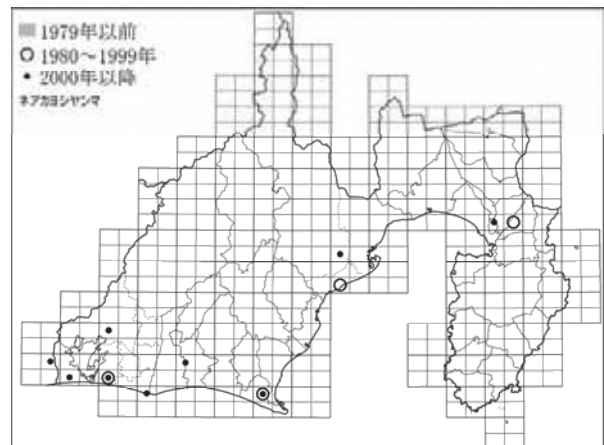
鶴飼貞行 (2001) 静岡県中部から愛知県東部にかけて記録したトンボについて. 駿河の昆虫, (193): 5399-5414

### 9. 標本

静岡市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



清水町 2012年8月20日 加須屋 真



(加須屋 真)

### 1. 種の解説

体長オスメスともに 66~77 mm 程度。未成熟時は全身が淡褐色であるが、成熟するとオスメスともに頭部・胸部と腹部の前部が淡緑色、腹部の中後部は黒~褐色を呈する。複眼が大きく体形は細身でオスの尾部付属器、メスの尾毛は細長い。成虫は 7~11 月にかけて出現し、夏季には日中は薄暗い林内の枝に静止しており、早朝と夕方に林縁で摂食飛行をする。秋季には日中にも水田や湿地に飛来してオスはホバリングを交えて飛行し、メスを待って連結・交尾を行う。メスは単独で湿った土や柔らかな朽ち木に産卵し、卵で越冬する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に分布する。国内では青森県以南の本州、四国、九州に広く分布するが、近年では激減した地域も多い。県内では平地から低山地を中心に東・中・西部のほぼ全域から広く確認記録がある。

### 3. 生息環境

平地から丘陵地の水田、湿地、池沼や河川敷の水たまりに生息し、近隣に樹林があるところが好まれる。ため池や用水池のような安定した水域よりも、水田や河川敷などのように一時的に水がたまる水域が生育環境となっている。

### 4. 生息状況

県内では平地から低山地を中心にほぼ全域の 57 メッシュでふつうに見られたが、各地で激減しており最近の 10 余年の調査では 8 メッシュしか確認できなかった。1990~2004 年に確認されたメッシュ数が 32 であったことから、減少傾向がはっきり見られる。

### 5. 減少の主要因と脅威

幼虫の生育地として水田に依存する割合が高い種と考えられるので、近年水田で使用されている農薬の影響 (32) が主要因と考えられる。湿地や河川敷の水溜まりなどが開発や河川改修で失われること (13) も、生育地の減少になっている。

### 6. 保護対策

水田に依存していて農薬の影響を受けやすい種であるため、まずはその影響を排除できるように配慮する必要がある。もともと広範に分布・生息している種であったが、確実に生息している主要な生息地の環境を維持する必要がある。

### 7. 特記事項

全国的にも本種の激減は注目されるようになっており、本県でも減少傾向が顕著であるので、今後の経過を注目する必要がある種である。

### 8. 主な文献

細田昭博 (1985) 浜松市のトンボ相. 駿河の昆虫, (129): 3745-3753

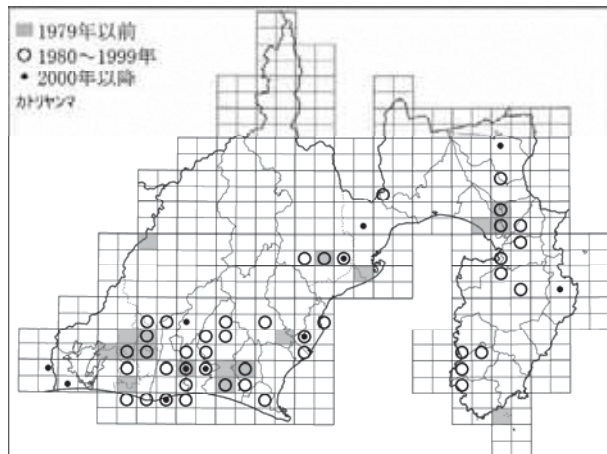
福井順治 (1990) 小笠郡と掛川市のトンボ相. 駿河の昆虫, (152): 4341-4352

### 9. 標本

静岡市産:ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2011年10月31日 福井順治



(福井順治)



# ヨツボシトンボ *Libellula quadrimaculata asahinai* Schmidt, 1957

トンボ科 Libellulidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長はオス 39~52 mm、メス 38~49 mm。黄褐色でずんぐりとした中型のトンボで、翅の前縁の結節部分に褐色斑があり、これが和名の由来になっている。体色はオスメスともほとんど差がなく、黄褐色の地色に黒色の条斑がある。4月下旬~6月下旬にかけて出現する。

## 2. 分布

種 *quadrimaculata* は、国外ではユーラシア大陸に広く分布し、複数の亜種が知られている。国内産は亜種 *asahinai* とされている。日本固有亜種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊東市、東伊豆町、三島市、小山町、富士宮市、静岡市、御前崎市、磐田市、浜松市、湖西市に記録があるほか、御殿場市、富士市に未発表の記録がある。

## 3. 生息環境

主に平地から丘陵地、低山地の、抽水植物が繁茂する湿地や池沼、放棄水田などに生息する。

## 4. 生息状況

富士宮市の小田貫湿原や磐田市桶ヶ谷沼は個体数も多く確実な産地であるが、その他では個体数が少なく確実な産地とは言い切れない。比較的個体数の多い御殿場市の複数の産地はいずれも放棄水田で、今後の土地利用の変化に伴い消失する可能性が高い不安定な産地である。

## 5. 減少の主要因と脅威

三島市では、湿地の宅地開発 (15-1) により産地は消滅した。東部の生息地の多くが放棄水田であり、これらは用地転用があれば消滅する産地である (23)。磐田市桶ヶ谷沼は安定的な産地であるが、過去にアメリカザリガニの異常繁殖 (52-3) により激減した。富士宮市小田貫湿原は、遷移の進行による乾燥、草原化とそれに伴う湿原内の池塘の狭小化、消失の影響 (54) が懸念される。

## 6. 保護対策

湿原そのものを保全すること、遷移の進行による草原化を食い止め、湿地環境を維持することが重要である。またアメリカザリガニが生息する産地では、異常繁殖に対し常に監視する必要がある。

## 7. 特記事項

寒冷な地域に分布の中心があり、本県での産地は比較的限られるが、近年東部の御殿場市では、複数の生息地が確認された。

## 8. 主な文献

福井順治 (1987) 田貫湖と小田貫湿原のトンボ. 駿河の昆虫, (138): 3985-3994

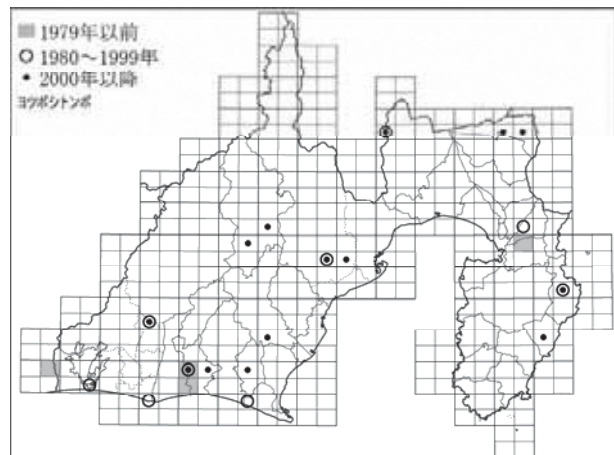
福井順治 (1995) 磐田市桶ヶ谷沼におけるトンボ類の羽化殻調査. 駿河の昆虫, (169): 4775-4781

## 9. 標本

磐田市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



磐田市 2011年4月29日 加須屋 真



磐田市桶ヶ谷沼は安定的な産地であるが、過去にアメリカザリガニの異常繁殖 (52-3) により激減した。富士宮市小田貫湿原は、遷移の進行による乾燥、草原化とそれに伴う湿原内の池塘の狭小化、消失の影響 (54) が懸念される。

(加須屋 真)

# マイコアカネ *Sympetrum kunckeli* (Selys, 1884)

トンボ科 Libellulidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 28~40 mm 程度。胸部側面に小黒点があり黒条が発達して縞模様のように見える。成熟したオスの顔面が青白いことが特徴で、アカトンボ類の仲間としては小型である。成虫は 6~11 月にかけて出現し、9~10 月に観察されることが多い。成熟したオスはヨシなどの抽水植物が密生した湿原の植物などに静止してなわばり行動を行う。メスが飛来すると交尾態となって近くに静止し、交尾終了後は連結態となって連続的に打水産卵をする。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア極東に、国内では北海道から九州まで広く分布するが、生息地はかなり限られている。県内では東部から西部まで各所に記録があり、西部には産地が多く磐田市桶ヶ谷沼・鶴ヶ池や浜松市南区遠州浜（松島町）は多産地として知られていた。

## 3. 生息環境

平地から丘陵地にあるヨシ、マコモ、ヒメガマなどが密生した池沼や湿原に生息し、開放的なため池にはあまり生息しない。海岸や河口付近に成立した砂丘後背湿地や、降水量の多い時期だけにできる一時的な水辺に生息する例が多い。

## 4. 生息状況

県内で記録がある 33 メッシュのうち、2005~2016 年に生息が確認されたのはわずか 9 メッシュにとどまっており、減少傾向が顕著である。今回記録があった場所でも個体数がわずかなところがほとんどであった。かつては多産地であった磐田市桶ヶ谷沼でも、近年は個体数が非常に少ない状態が続いている。

## 5. 減少の主要因と脅威

ヨシやヒメガマの多い池沼や湿地は埋め立てや開発で失われることが多く（12、15-1）、生息可能な環境が少なくなっている。猛暑や干ばつなどの異常気象（71）が続いて湿原が干上がることも脅威である。

## 6. 保護対策

海岸や河口付近の湿原が主要な生息地であるため、防災対策などで改変されやすいこうした場所の工事に際しては生息地の環境を残す配慮が必要である。

## 7. 特記事項

生息地から離れた山地や市街地で発見された例が少ないので、アカトンボ類としては移動性があまりない種である。

## 8. 主な文献

細田昭博（1985）浜松市のトンボ相．駿河の昆虫，（129）： 3745-3753

福井順治（1990）小笠郡と掛川市のトンボ相 駿河の昆虫，（152）： 4341-4352

福井順治・加須屋 真（1998）朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録．駿河の昆虫，（182）： 5091-5110

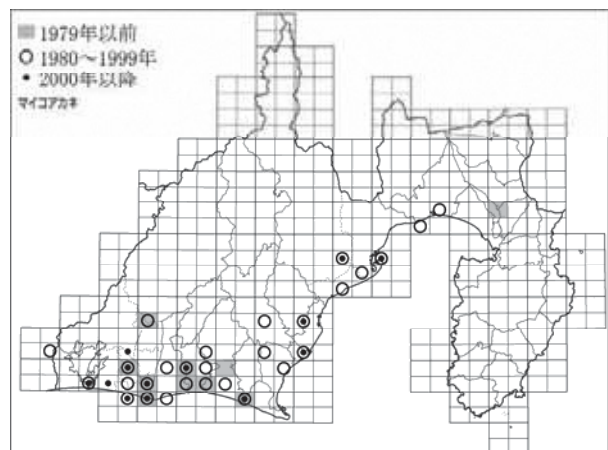
## 9. 標本

磐田市産：ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

（福井順治）



©2019 M.Fukui  
浜松市 2010年9月22日 福井順治



# クチナガコオロギ *Velarifictorus aspersus borealis* Gorochov, 1985

コオロギ科 Gryllidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更コード 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 11~14 mm、メス 14~16 mm。各地にふつうに生息するツヅレサセコオロギ *V. micado* (Saussure, 1877) によく似るが、オスは顎が長く、メスは産卵管が短いことから容易に区別できる。後頭部が淡色となることも特徴の一つである。鳴き声は、「リュッ、リュッ」と切って鳴き独特である。昼間は多くの場合、単独又はペアで、石や枯葉の下などに潜んでいる。行動はあまり素早くなく、跳びはねるよりも歩き回る方が多い。

## 2. 分布

国外では韓国、中国に、国内では静岡県以西の本州、四国、九州に分布する。県内では天竜川以西に数ヶ所産地があるだけで、局所的な分布をする。

## 3. 生息環境

ほとんどの生息地は、墓地や庭、人家付近にある、よく手入れされた丈の低いチガヤなどの草地である。比較的乾燥した場所を好むようである。

## 4. 生息状況

成虫発生数は年による変動が大きい、いずれの生息地においても、通常個体数は多くない。近年生息が確認出来ない産地がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境に変化がない場合の減少要因は不明 (99) であるが、生息地は局所的で人間活動と重なる場合が多く、宅地開発や道路工事などの小さな開発 (23、24) でも姿を消すと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

過去に伊豆半島にも分布するという報告がされたが、現在まで再確認はない。

## 8. 主な文献

Gorochov, A. V. (1985) On the fauna of Gryllidea (Orthoptera) of China. *Ent. Obozr.*, 64: 89-107

石川 均 (1991) クチナガコオロギを浜北市で採集. 駿河の昆虫, (156): 4464

石川 均 (1993) クチナガコオロギの産地追加. 駿河の昆虫, (164): 4681

杉本 武 (1980) 静岡県におけるクチナガコオロギの新産地. 駿河の昆虫, (108): 3179-3180

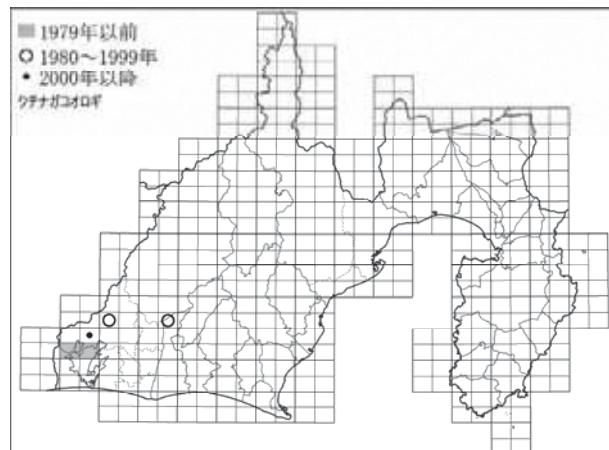
## 9. 標本

浜松市北区三ヶ日町産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(石川 均)



浜松市北区三ヶ日町 2017年9月13日 石川 均





### 1. 種の解説

体長オス 6.0~6.8 mm、メス 7.1~8.6 mm。小さなコオロギの一種で、生息地の砂の色に似た体色、模様をしていて見事な保護色となっている。マダラスズ *D. nigrofasciatus* (Matsumura, 1904) やカワラスズ *D. furumagiensis* (Ohmachi & Furukawa, 1929) に少し似ているが、メスの産卵管が長いことで容易に区別できる。成虫は6~12月まで見られる。海浜性種ではなく、砂地性の種である。

### 2. 分布

国外では沿海州、ハバロフスク南部、中国、インド、スリランカなどに、国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では東部、中部、西部に分布している。

### 3. 生息環境

海岸の砂浜では、最も内陸寄りの場所に生息している。河川では砂地が広がる場所に生息している。いずれの場所も、植生は貧弱で全くないこともある。

### 4. 生息状況

海岸の砂浜の生息地では生息密度は低く確認できなくなった場所もあるが、河川の生息地では大きな変化はなく生息しているように思われる。なお、遠州浜や中田島砂丘では個体数が多い。

### 5. 減少の主要因と脅威

海浜部の生息地はオフロード車の走行 (71) が目立ち環境条件の悪化が続いているが、河川の生息地は以前と変わらない場所が多い。

河川の生息地は富士川、安倍川、大井川、天竜川で知られているが、海浜部の生息地は焼津市以西に限られる。防潮堤工事による生息環境の縮小 (14)、植生遷移 (草地化) (54) も脅威となる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

富士川や安倍川の河原に生息する個体群の体色は黒みが強く、西部の海岸や砂丘に生息する白みの強い個体群とは一見違う種に見える。

コオロギ科を細分して、本種はヒバリモドキ科 Trigonidiidae とされることがある。

### 8. 主な文献

杉本 武 (1976) 安倍川、藁科川下流域の河川敷周辺に生息する鱗翅目および直翅目昆虫。安倍川動植物生態調査第二次報告書, pp. 10-26. 建設省中部地方建設局静岡河川工事事務所, 静岡。

杉本 武 (1977) 大井川下流域の河川敷及びその周辺の昆虫相調査。大井川動植物生態調査第一次報告書, pp. 41-50. 建設省中部地方建設局静岡河川工事事務所, 静岡。

杉山高史 (2004) 焼津市石津浜海岸のバッタ類の採集・目撃記録。駿河の昆虫, (208): 5798-5799

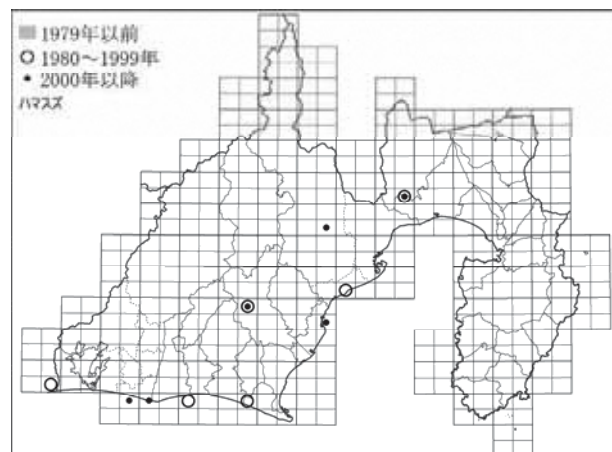
### 9. 標本

富士宮市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(石川 均)



富士宮市朧島 2014年9月15日 石川 均



# アマギクチキウマ *Anoplophilus amagisanus* Ishikawa, 2003

カマドウマ科 Raphidophoridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 16.5~19.4 mm、メス 12.6~17.0 mm。黒褐色に黄褐色の斑紋を混じえ、真鍮様の金属光沢がある。生時は苔が生えたような薄黄緑色をかすかに帯びる。産卵器は赤褐色で、下片の鋸歯数は通常7。富士山、関東山地に分布するクチキウマ *A. acuticercus* Karny, 1931 に似るが、産卵器の鋸歯数が多いことで識別できる。

## 2. 分布

静岡県固有種で、伊豆半島の天城山だけに分布する。今までに確認された場所は天城連峰の旧二本杉峠と猫越岳付近の稜線部に限られている。

## 3. 生息環境

稜線部のブナ林やイヌツゲ林、アセビ林に生息し、樹皮下や朽ち木内、樹上の重なり合った枯れ葉の間などに潜んでいる。

## 4. 生息状況

現在までに採集されたのは10個体程度にすぎない。より大型で分布の広いオオクチキウマ *A. major* Ishikawa, 2003 と混生するが、オオクチキウマが各所で見られるのに対し本種は局所的で生息密度はかなり低いと思われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認された個体数は少なく生息状況の変化を十分に把握できていないが、ニホンジカにより林床植生が食害されることによる林内の乾燥化などの環境変化(54)が、本種の生息に影響を及ぼす可能性が高い。

## 6. 保護対策

特になし。皮子平では防鹿柵により囲って植生の保護を行っている場所があるが、その付近ではまだ本種の確認はされていない。

## 7. 特記事項

静岡県の伊豆半島、それも天城山の稜線部付近にのみ生息する固有種である。生息数が少ないため、環境変化を起こさないようなニホンジカの個体数管理が望まれる。

## 8. 主な文献

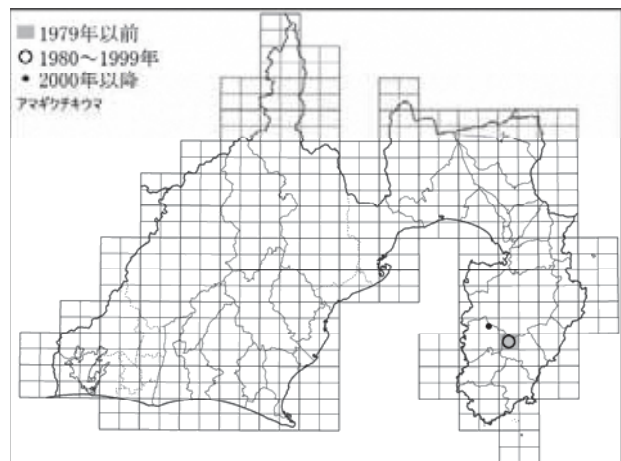
Ishikawa, H. (2003) *Anoplophilus* species in Japan. (Orthoptera, Raphidophoridae, Proterogrophilinae). *Tettigonia*, (4): 7-23

## 9. 標本

伊豆市湯ヶ島産：大阪市立自然史博物館所蔵（ホロタイプ）



伊豆市湯ヶ島 猫越岳 2012年8月2日 石川 均



(石川 均)

# ヤマトバッタ *Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910)

(=ヤマトマダラバッタ)

バッタ科 Acrididae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長(翅端まで) オス 27~32 mm、メス 34~39 mm。  
生息地の環境に合わせた保護色となり、明るい砂地では白っぽく、暗い砂地では暗色を呈する。遠州浜、中田島砂丘では緑色型も出現する。よく飛び、後翅は淡いブルーをしている。年1化で、初夏に成虫が出現し、晩秋まで見られる。

## 2. 分布

日本固有種で、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では焼津市石津浜以西の砂浜海岸及び富士川、安倍川などの大河川の河原に分布する。

## 3. 生息環境

国内では海岸や河川の低水敷で植物がまばらに生えた砂地に生息する。海岸ではより内陸側の部分、河川では規模の大きな河川に限られ主に礫床の中で広く砂地となっているところに住む。

## 4. 生息状況

遠州灘海岸の生息地では、天竜川河口から太田川河口にかけてや弁財天川河口付近で生息数は多いものの、その他では生息数は少ない。また、中田島砂丘や遠州浜の砂地には広範囲に多数生息している。河川では、富士川で比較的多いが、安倍川では生息密度が低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地へのレジャー車両の乗り入れ(71)により、生息環境が悪化、縮小している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

現時点では絶滅のおそれがあるほどの状況にはないが、静岡県レッドデータブック(2004)時よりもさらに生息環境の悪化が進んでいる点で注目していく必要がある。全国的に生息地は減少している。

## 8. 主な文献

浜口哲一(1996) 浜松市中田島砂丘のヤマトマダラバッタ. バッタリギス, (107): 67

石川 均(1987) ヤマトバッタ内陸部に産す. 月刊むし, (202): 5

石川 均(1998) ヤマトバッタの安倍川での追加記録. 駿河の昆虫, (181): 5087

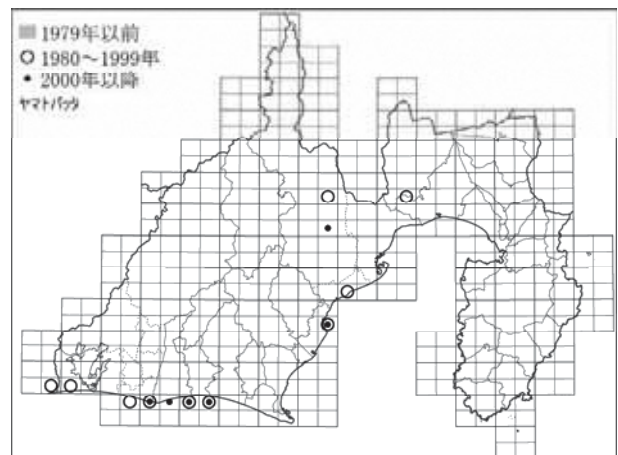
杉山高史(2004) 焼津市石津浜海岸のバッタ類の採集・目撃記録. 駿河の昆虫, (208): 5798-5799

## 9. 標本

浜松市産: 平塚市博物館所蔵



浜松市南区中田島 2014年9月17日 石川 均



(石川 均)



# カケガワフキバッタ *Parapodisma awagataensis* Ishikawa, 1998

バッタ科 Acrididae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 19.9~23.3 mm、メス 22.2~31.5 mm。鱗片状の短い翅をもつフキバッタの一種である。緑~黄緑色の体で、オスでは体側に黒斑をもつものが多い。県内では主として天竜川以西に分布しているヒメフキバッタ *P. etsukoana* Kobayashi, 1986 によく似ているが、分布域が異なる。成虫は7~10月まで見られる。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県内にのみ生息する。大井川と天竜川に挟まれた地域に分布が限定されている上、牧ノ原台地南部や北部山岳地には分布しない。

## 3. 生息環境

耕作地脇や林縁部などの草地に生息し、特に草刈りなどで最低年一度は人の手の入る環境によく見られる。いわゆる里山の昆虫といえる。

## 4. 生息状況

基準産地である掛川市栗ヶ岳の草地では個体数は比較的多いが、その他の産地では少ない。耕作放棄に伴う周辺草地の植生遷移の進行、宅地開発などによる生息地そのものの消失が今もなお続き、各所で生息地の分断が顕著になっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移 (54) や開発による生息地の消失と分断化 (23、24) が、本種の存続にとって大きな脅威といえる。

## 6. 保護対策

分布の中心である掛川市では条例により「指定希少野生動植物種」に指定され (平成 18 年)、生息環境の保全も図られている。世界農業遺産に指定された茶草場農法は、カケガワフキバッタの生息地保全に大きな貢献をしていると考えられる。

## 7. 特記事項

静岡県固有の昆虫であり、里山に生息していて分布域も狭いので絶滅に向かわないよう注目を続けていく必要がある。

## 8. 主な文献

石川 均 (1992) 静岡県のミカドフキバッタ属について. バッタリギス, (94): 27-31

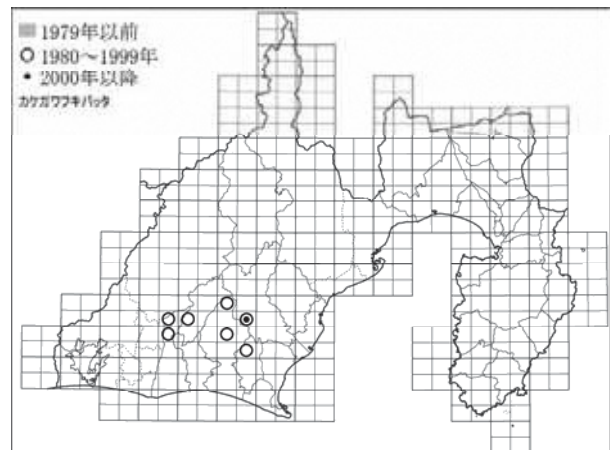
Ishikawa, H. (1998) A new *Parapodisma* species (Orthoptera, Acrididae, Catantopinae) from Shizuoka Prefecture, central Honshu, Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 4(1): 173-178

## 9. 標本

掛川市産: 国立科学博物館所蔵 (ホロタイプ、パラタイプ)、大阪自然史博物館所蔵 (パラタイプ)、愛媛大学ミュージアム所蔵 (パラタイプ)



掛川市東山 栗ヶ岳 2008年8月13日 石川 均



(石川 均)

### 1. 種の解説

体長 7.5~9.0 mm。淡黄色で背面は多少とも不規則な多数の黒色横条を装い、前胸背板の横条は太く明瞭で 5~7 条、半翅鞘では縦に連絡して不規則な格子状を呈する。体はおおむね短円筒形で後方に細まり、前肢は短い捕獲脚、中肢は細長い把握脚、後肢は扁平な遊泳脚となる。成虫は秋から春にかけて個体数が多いが、夏にも見られる。おおむね植食性と考えられ、藻類などの内容物を吸収するようである。

### 2. 分布

国外では台湾、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼の記録があり、磐田市鶴ヶ池、浜松市南区松島町、浜松市西区坪井町、浜松市北区引佐町別所での採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

ヨシやガマなどの抽水植物が繁茂する、比較的深い池沼に生息する。

### 4. 生息状況

県内では生息地は限られているが、生息地での個体数は多かった。浜松市南区松島町では、2005 年頃までは多数見られたが、近年個体数が著しく減少している。磐田市桶ヶ谷沼では直近の調査において複数個体が確認されたものの、近似のホッケミズムシ *Hesperocorixa distanti hokkensis* (Matsumura, 1905) が激減あるいは絶滅したと考えられることから、今後の動向が注目される。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化 (54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊 (54) などが脅威となる。

### 6. 保護対策

桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

直近の桶ヶ谷沼の調査では、地下水を汲み上げて放流している場所付近でのみ生息が確認された。

### 8. 主な文献

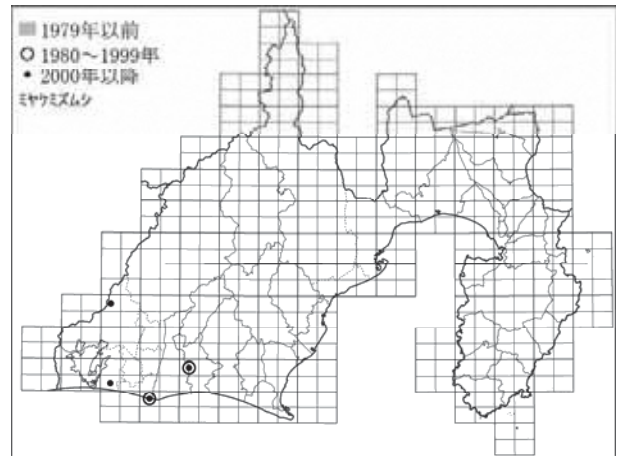
杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-。 (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

### 9. 標本

浜松市産、磐田市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H. Ishikawa  
浜松市産 2015年10月1日 石川 均採集



(多比良嘉晃)

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

体長 28~38 mm (大顎を除く)。一見クワガタムシを思わせる大型の甲虫で、体は黒色、頭部は大きく、大顎はよく発達し、体長の約 1/8 の長さには達する個体もある。前肢脛節は多少とも掌状に広がって掘削脚となる。

成虫は夏季に見られ、夜行性で、昼間は砂地に深い坑道を掘って潜っており、夜間に砂上に出て活発に活動し、他の小昆虫を捕食する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インドなどに広範囲に、国内では本州、四国、九州に局所的に分布し分布する。県内では牧之原市相良・波津、御前崎市池新田・門屋、掛川市浜野、磐田市竜洋中島、浜松市天竜区二俣町で記録がある。

### 3. 生息環境

海岸や大河川下流域の砂地に生息している。

### 4. 生息状況

県内では遠州灘海岸から牧之原市の駿河湾沿岸にかけての海浜に生息するが、個体数は多くない。

### 5. 減少の主要因と脅威

海岸の護岸工事 (14) や河川改修 (13)、海岸への車両の乗り入れ (71) などによって生息地が消滅・破壊されるおそれ大きい。また、大型で格好が良いので愛好家に人気があり、高い採集圧 (41) にさらされている。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

かつて個体数が多かった御前崎市池新田浜岡砂丘の産地は公園化された。

### 8. 主な文献

- 原木直美 (1986) 浜岡砂丘の灯火で採集した甲虫類. 静岡の甲虫, 4(1/2): 14-16
- 平井克男 (1993) 静岡県産ゴミムシ類採集記録 (I). 静岡の甲虫, 10(2): 14-24
- 平井剛夫 (2005) 相良町の海岸でオオヒョウタンゴミムシを採集. 駿河の昆虫, (211): 5864
- 大庭俊司 (2015) 磐田市竜洋中島の側溝で採集した甲虫 2 種. 駿河の昆虫, (250): 6863
- 田形和弘 (1987) オオヒョウタンゴミムシ相良にも産す. 静岡の甲虫, 5(1/2): 29
- 多比良嘉晃・松本雅道 (2000) 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71
- 竹林大介 (2013) 牧之原市 (旧相良町) の海岸でのオオヒョウタンゴミムシの採集記録. 駿河の昆虫, (242): 6668
- 坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (II). 駿河の昆虫, (98): 2871-2878

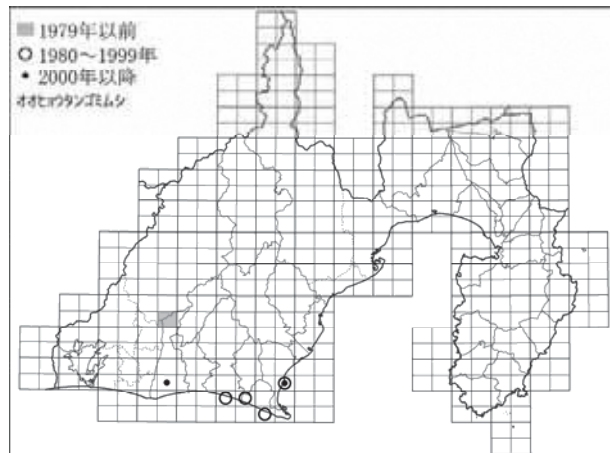
### 9. 標本

御前崎市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

御前崎市産 1983年7月8日 石川 均採集



(多比良嘉晃)



# コマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus acuminatus* Motschulsky, 1859

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 2.0~2.5 mm。体はやや細い卵形。背面は網状印刻に覆われるがやや不明瞭で光沢は強い。頭・胸部は黄赤褐色、上翅は暗黄赤褐色。上翅はやや大きな点刻をやや密に装い、時に不明瞭な点刻列となる。腹面は黄赤褐色で印刻は弱く光沢が強い。触角、口枝、肢も黄赤褐色。

前胸腹板突起は三角形で側縁は縁どられ、後肢基節前縁の隆起線列を欠く。

## 2. 分布

国外では台湾、東南アジア、フィリッピン、インドからイランまで広く、国内では本州（福島県以南）、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町で記録があり、他に南伊豆町、浜松市西区大平台・篠原町・村櫛町での採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

池沼や湿地、放棄水田など水生植物が豊富な止水域に生息する。

## 4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。現在のところ、西部と伊豆で確認されているが、近年、浜松市南区松島町では確認されていない。磐田市桶ヶ谷沼では2016年の採集例がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

全国的には、開発による湿地の消失（12、13、15-1）、圃場整備による乾田化（15-2）、耕作放棄による遷移の進行（53）、水質汚濁（31）、農薬汚染（32）により減少傾向にある。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

近似種にマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus subtilis* Sharp, 1882 やサメハダマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus stridulus* Biström, 1997 があるが、本種は後肢基節前縁の隆起線列を欠く点で区別できる。

## 8. 主な文献

北野 忠・石田和男（2000）遠州地方で採集された水生鞘翅目．遠州の自然，（23）： 9-14

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭（2000）静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-．甲虫ニュース，（129）： 7-9

森 正人・北山 昭（2007）改訂版図説日本のゲンゴロウ（第2刷）．文一総合出版，東京，231 pp.

杉山恵一 編（1990）桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-．財団法人日本野生生物研究センター，東京，334 pp.

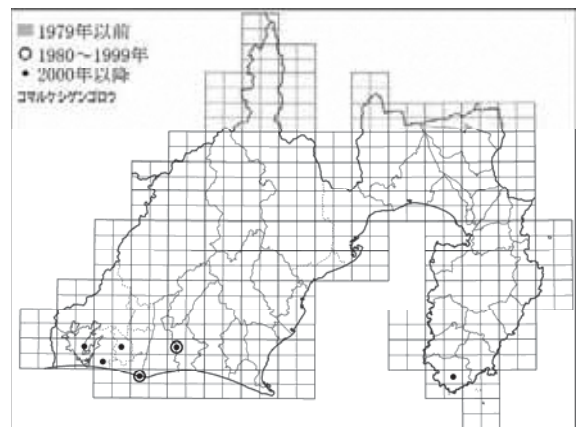
## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃・石川 均）



南伊豆町産 2008年9月2日 酒井孝明採集



# コウベツブゲンゴロウ *Laccophilus kobensis* Sharp, 1873

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 3.4~3.8 mm。体は逆卵形。背面は微細な網状印刻に密に覆われ弱い光沢がある。頭部、前胸背は黄土色。前胸背は前・後縁の中央がしばしば暗色となる。上翅は淡褐~茶褐色で稀に緑色がかり、基部は濃色でその後方に浅いV字状の淡色の横帯があり、2~3条の不明瞭でやや不規則な点刻列がある。触角、口枝は黄褐色で先端は暗色、肢は黄褐~茶褐色。

## 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、四国、九州、南西諸島（石垣島、西表島）に分布する。県内では三島市北沢湿地、沼津市西浦足保、磐田市鶴ヶ池・桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町、浜松市西区雄踏町で記録がある。

## 3. 生息環境

低地の池沼、湿地、放棄水田などの止水域に生息する。

## 4. 生息状況

県内での個体数はもともと少なかったが、最近の記録は少なく、特に西部では確認が困難になっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化（54）、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊（54）などが脅威となる。また、農薬（32）、水質汚染（31）、捕食性外来生物の侵入（52-3）も脅威である。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

本州中部以北の個体では黒化が著しく、上翅の斑紋が不明瞭になり体も小型となる。

## 8. 主な文献

Kamite, Y., N. Hikida & M. Sato (2005) Notes on the *Laccophilus kobensis* species-group (Coleoptera, Dytiscidae) in Japan. *Elytra, Tokyo*, 33(2): 617-628

神奈川県立博物館 編 (1995) 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, (8): 1-66

北野 忠・石田和男 (2000) 遠州地方で採集された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭 (2000) 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケンゲンゴロウを中心として-. 甲虫ニュース, (129): 7-9

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

細田昭博 (2011) ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

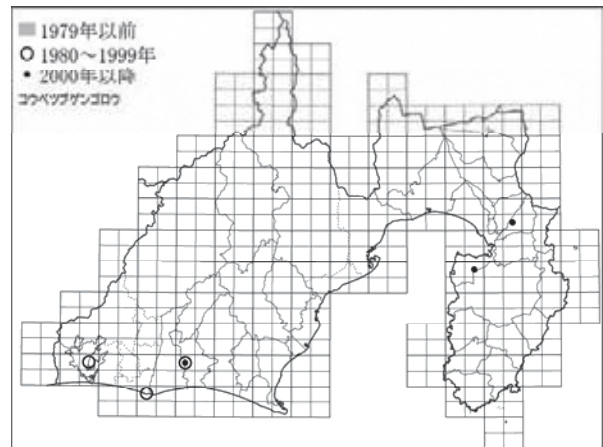
森 正人・北山 昭 (2007) 改訂版図説日本のゲンゴロウ (第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

## 9. 標本

磐田市産：神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



沼津市産 2004年8月17日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃・石川 均)

### 1. 種の解説

体長 8.0~10.0 mm。体は長楕円形。弱い金属光沢を帯びた黒褐色。頭部前縁部と頭頂に黄赤褐色の2楕円紋をもち、前胸背の両側は幅広く黄褐色で、前縁・後縁に沿って微細な点刻を装う。上翅は肩部から後方へ徐々に広がる黄褐色の帯紋があり、後半にはその帯紋を2分する暗色条が認められる。帯紋の内側中央と翅端前に黄褐色の小紋があるが、時に帯紋と合する。上翅には不明瞭な4点刻列がある。触角、口枝、肢は黄褐色。

夜間、灯火に飛来することがある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国などに、国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市南区松島町から記録があり、賀茂郡東伊豆町、菊川市西方、浜松市南区白羽町での採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼やため池、水田、放棄水田に生息し、ヨシなどが生えている比較的大きな池に生息していることが多い。

### 4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。浜松市南区松島町では2000年代初め頃まではきわめて多産していたが、最近は個体数の減少が著しい。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化（54）、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊（54）などが要因で個体数が減少しているものと思われる。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

分布は広いが生息地は局地的である。

### 8. 主な文献

北野 忠・石田和男（2000）遠州地方で採集された水生鞘翅目．遠州の自然，（23）：9-14

北野 忠・記野直人・長谷川洋・北山 昭（2000）静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-．甲虫ニュース，129：7-9

森 正人・北山 昭（2007）改訂版図説日本のゲンゴロウ（第2刷）．文一総合出版，東京，231 pp.

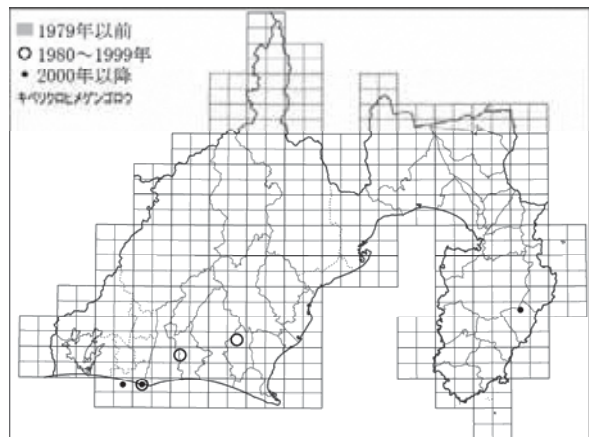
杉山恵一 編（1990）桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-．（財）日本野生生物研究センター，東京，334 pp.

### 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Ishikawa  
浜松市産 2015年10月1日 石川 均採集



（多比良嘉晃・石川 均）



### 1. 種の解説

体長 20~25 mm。黒色で光沢を有し、触角基部、肢の転節及び脛節の一部、腹部第 3・4 腹節両側の小紋などは黄赤褐色。体は卵形で腹背にやや扁平、翅鞘には 3 条のまばらな点刻列を有する。

成虫・幼虫ともに肉食性、8・9 月頃に新成虫が出現し、そのまま成虫越冬、幼虫は 5~8 月に見られる。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。国内の分布はやや局地的であるが、生息地での個体数は比較的多いといわれる。県内では賀茂郡南伊豆町、袋井市小笠山、浜松市天竜区青谷、浜松市北区引佐町で記録があり、浜松市北区三ヶ日町での採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼、休耕田、水田脇の水溜まりなどに生息する。

### 4. 生息状況

県内では主に西部から数例の記録があるが、いずれの場所でも個体数は少ないようである。浜松市北区引佐町の 1ヶ所の池ではかなり多産するといいい、同所では最近も複数個体が確認されている。西部以外では賀茂郡南伊豆町で 1 例の記録があるだけである。

### 5. 減少の主要因と脅威

池沼への農薬などの流入 (32)、植生遷移の進行や富栄養化に伴う水質悪化 (54)、池沼そのものの埋め立てや護岸工事 (12) などによって生息環境が失われている。

### 6. 保護対策

水生植物の豊富な、自然度の高い池沼を保全する必要がある。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

神奈川県立博物館 編 (1995) 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, (8): 1-66

北野 忠 (2000) 静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, 15: 17-24

北野 忠・石田和男 (2000) 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, 23: 9-14

松井正道・松井正文 (1996) 静岡県からのゲンゴロウ類 2 種の記録. 月刊むし, (307): 38-39

森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231 pp.

静岡県 (1994) 中遠・東遠広域都市計画 小笠山総合運動公園環境影響評価書.

油井雅樹 (1995) 静岡県におけるゲンゴロウの記録. 月刊むし, (298): 14-15

油井雅樹 (1997) 静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

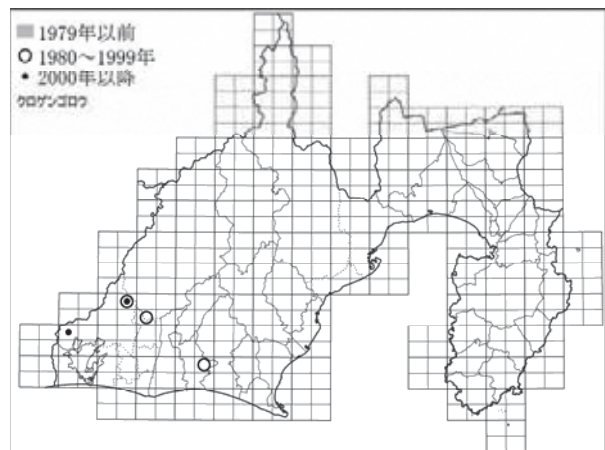
### 9. 標本

南伊豆町産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 Y.Tahira

浜松市北区産 1998年5月12日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

体長 33~40 mm。長楕円形で背面は凸隆し、腹部はおおむね平坦、黒色で触角及び口枝などは多少とも赤褐色、背面は滑沢だが頭・胸部腹面には濃黄褐色の微毛をピロード状に密生する。肢は比較的細く、中・後肢附節内縁に褐色の遊泳毛を具える。

成虫は雑食性で、水草や水中の腐食した陸上植物を好んで食し、魚や昆虫などの死骸も食べる。幼虫は肉食性で、モノアラガイなどの淡水性巻貝を好んで食する。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では伊豆半島、賀茂郡南伊豆町一色、御殿場市仁杉・二枚橋、三島市平成台、磐田郡竜洋町（現磐田市）、浜松市天竜区二俣町、浜松市浜北区、浜松市浜北区堀谷・四大地、浜松市北区引佐町東久留女木・霧山・四方浄・的場で記録があり、御殿場市山之尻・柴怒田、富士宮市下稲子などで採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

平地からやや山地の水生植物の豊富な池沼、水田や水田脇の水溜まりなどに生息する。

### 4. 生息状況

県内では伊豆、東部、西部から記録されており、東部の御殿場市では直近の調査でも複数個体が確認された。西部では近年でも複数ヶ所の生息地が確認されているが、個体数は多くない。

### 5. 減少の主要因と脅威

農薬・肥料などによる水質汚染（32）、開発に伴う池沼の埋め立て（12）による生息環境の減少などが考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

アメリカザリガニが生息する水域では繁殖しないという

### 8. 主な文献

加須屋 真（1992）三島市でガムシを採集．駿河の昆虫，（160）： 4555

北野 忠（2000）静岡県で採集された水生鞘翅目．神奈川県自然保全研究会報告書，（15）： 17-24

北野 忠・石田和男（2000）遠州地方で確認された水生鞘翅目．遠州の自然，（23）： 9-14

酒井孝明（2017）南伊豆町におけるガムシの記録．駿河の昆虫，（260）： 7123

高林勝彦（1992）浜北市でガムシを見つける．遠州の自然，（15）： 59

坪井俊久（1977）天竜市二俣町の甲虫類（Ⅱ）．駿河の昆虫，（98）： 2871-2878

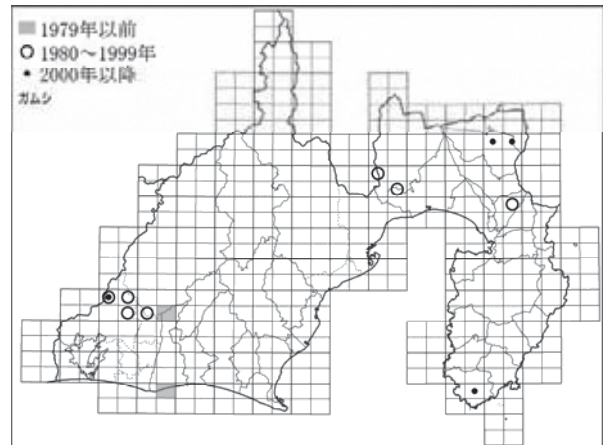
油井雅樹（1997）静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録．駿河の昆虫，（179）： 5021-5023

### 9. 標本

富士宮市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Ishikawa  
富士宮市産 1990年7月11日 石川 均採集



（多比良嘉晃）

# コガムシ *Hydrochara affinis* (Sharp, 1873)

ガムシ科 Hydrophilidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更コード 1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

体長 15~18 mm。触角柄部、口枝は黄褐色、各腹節両側の斑紋、脚は赤褐色。背面は一様に微細な点刻を密布する。各上翅には4条の点刻列とその両側に各1条の細点刻列を有し、外縁近くにも点刻列がある。体下は細毛を密生し、胸板棘状突起は後基節間に終わる。

成虫は草食性で水草を食べるが、繁殖期には動物質も食べる。幼虫は肉食性でヒメモノアラガイなどをよく食べる。メス成虫は水面近くに水草を絡めた卵嚢を作りその中に産卵する。成虫は夜間、よく灯火に飛来する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、極東ロシア、東アジア一帯に、国内では本州、四国、九州分布する。県内では伊豆半島、富士宮市麓、静岡市清水区蒲原町、藤枝市前島、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区二俣町・両島、浜松市浜北区根堅・於呂、浜松市南区松島町、浜松市西区志都呂町などで記録があり、伊豆市湯ヶ島、下田市田牛・箕作、御殿場市山之尻・柴怒田、富士宮市下稲子、焼津市中島、菊川市牛淵・加茂、浜松市南区中田島町、浜松市浜北区竜南などで採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

水田や河川敷、海岸後背湿地の水溜まりなど、不安定な浅い止水域で繁殖し、ため池など安定した水域では繁殖しないとされる。

## 4. 生息状況

県内には広く分布し、個体数も少なくなかったが、近年、減少傾向にある。

## 5. 減少の主要因と脅威

減少の程度や原因は不明である（99）。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

近似種のエゾコガムシ *Hydrochara libera* (Sharp, 1884) も静岡県に分布しているものと思われるが、未だ確認できていない。

## 8. 主な文献

北野 忠（2000）静岡県で採集された水生鞘翅目．神奈川自然保全研究会報告書，（15）：17-24

北野 忠・石田和男（2000）遠州地方で確認された水生鞘翅目．遠州の自然，（23）：9-14.

杉山恵一 編（1990）桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-．（財）日本野生生物研究センター，東京，pp. 334.

坪井俊久（1977）天竜市二俣町の甲虫類（II）．駿河の昆虫，（98）：2871-2878

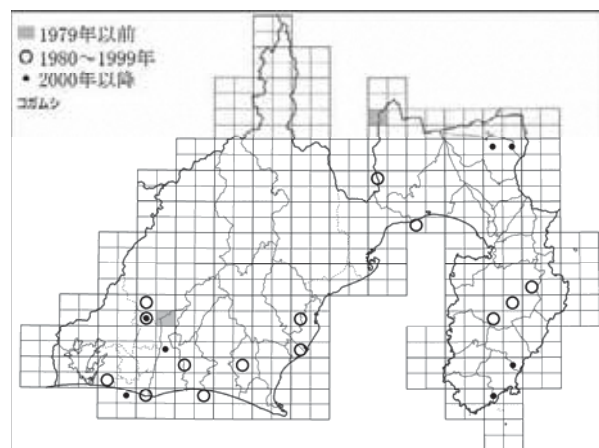
## 9. 標本

下田市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H. Ishikawa

下田市箕作産 2009年6月25日 石川 均採集



（多比良嘉晃・石川 均）



# ヒゲコガネ *Polyphylla (Gynexophylla) laticollis* Lewis, 1887

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 9

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 31~38 mm。茶褐色で翅鞘は黄白色鱗片からなる不規則な多数の小斑を装う。体の輪郭はおおむね長円形、触角は 10 節からなり、オスでは端部 7 節が前方へ著しく伸長して片状部を形成、その長さは頭部と前胸部の長さの和に等しい。メスの片状部は 5 節で、オスに比べて著しく小さい。

幼虫は海岸や河川の砂質地の土中にいて、植物の根を食害する。成虫は 6~9 月頃に出現、夜間活動性で昼間は砂の中にもぐって潜み、夕刻から活発に飛翔して周辺の灯火に飛来する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島から中国大陸にかけて（別亜種）、国内では本州、四国、九州に（基準亜種）分布する。県内では伊豆半島、伊豆の国市古奈、静岡市富沢、榛原郡川根本町奥泉、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区横山・二俣町・渡ヶ島、浜松市浜北区根堅・於呂で記録があり、他に富士宮市沼久保、島田市などで採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

幼虫は主に海岸や河川中・下流域の砂質地の土中に生息する。

## 4. 生息状況

県内では平地~低山地に広く生息しているが、個体数は多くない。近年、灯火に飛来する成虫の個体数が減少している。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発や河川改修、コンクリート護岸、河川敷の公園化など (13) による生息環境の破壊・改変によって生息範囲が狭められている。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

成虫はほとんど後食しないようである。

## 8. 主な文献

平井克男 (1990) 静岡市富沢のヒゲコガネ. 静岡の甲虫, 8(1/2): 30

加藤 徹・多比良嘉晃 (2005) 里山における甲虫の多様性と調査手法としての各種トラップの特性-静岡県林業技術センターの甲虫-. 静岡県林業技術センター研究報告, (33): 29-71

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (I). 駿河の昆虫, (97): 2852-2859

土屋忠男 (2014) 伊豆地方における甲虫目の記録. 駿河の昆虫, (246): 6755-6761

渡辺一雄 (1982) 遠州地方産昆虫分布資料 (1). 遠州の自然, (5): 21-23

## 9. 標本

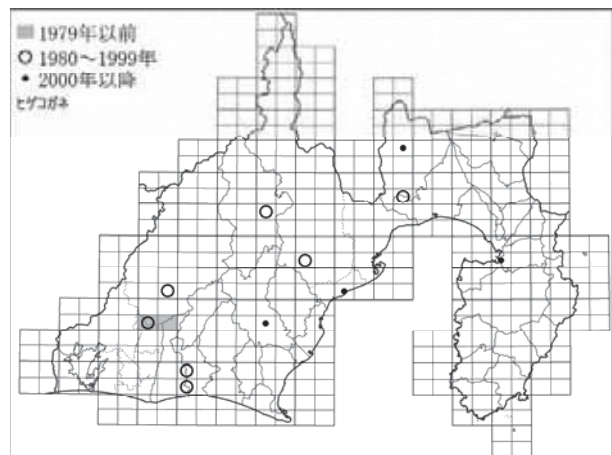
静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikaw

静岡市産 2016年8月10日 石川 均採集



# ヤマトオサムシダマシ *Blaps japonensis* Marseul, 1879

ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 22 mm 内外。体は黒色で、光沢は鈍い。おおむねヒョウタン形で厚みがあり、翅鞘の背面はほぼ平坦、同末端は急に細まって後方へ突出する。触角は細く、先端 4 節はおおむね数珠状で金褐色微毛を密生し、肢は比較的長い。翅鞘は会合部で左右癒合し、飛翔能力を欠く。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国北部に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では富士市千本浜海岸、静岡市清水区由比、磐田市竜洋中島、浜松市天竜区二俣町の記録があり、他に静岡市清水区山切・駿河区小鹿の採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

古い木造の民家の床下や納屋の藁くずの下などの主として屋内に生息し、人目に触れる機会は少ない。古い木造家屋を取り壊す際に見つかることがある。また、最近、大河川にかかった橋の下の乾燥環境に生息していることが報告された。

## 4. 生息状況

県内の採集例は少ないので、詳細な生息状況は不明である。県内でも橋の下の乾燥環境に生息している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

古い木造家屋はいずれ建て替えられたり、撤去されてしまうので、本種の生息可能な環境は確実に減少している (71)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

港湾地区に多く、自然の山野では見られないことから、日本から記載された種ではあるが、中国や台湾からの古い時代の移入種とみなす研究者もいる。

## 8. 主な文献

大庭俊司 (2015) 磐田市竜洋中島の側溝で採集した甲虫 2 種. 駿河の昆虫, (250): 6863

杉山高史 (2004) 千本浜海岸におけるヤマトオサムシダマシの採集記録. 駿河の昆虫, (208): 5800

田形和弘・多比良嘉晃 (1988) 建屋内で捕獲された甲虫類 (I). 静岡の甲虫, 6(1): 21-23

坪井俊久 (1976) ヤマトオサムシダマシの採集例. 月刊むし, (64): 29

坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (III). 駿河の昆虫, (99): 2893-2902

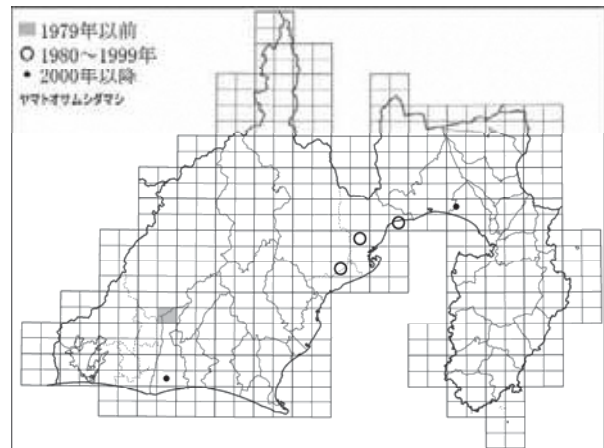
## 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



清水区山切産 1991年11月17日 田形和弘採集



# ガガブタネクイハムシ *Donacia (Cyphogaster) lenzi* (Schonfeldt, 1888)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 6.1~7.3 mm。体は黒色で背面は暗い緑銅~青銅色の金属光沢を帯び、腹面は銀白色の微毛を密生し光沢を欠く。触角第2・3節はほぼ等長、後肢腿節は肥大し下面端方に1鋭棘と2~3小歯を具え、オスの腹部第1節腹面(第3腹節腹板)中央に1対の小隆起を有する。

成虫は6~8月に出現し、ジュンサイやヒルムシロの葉上において葉を食害、幼虫は水中(土中)で同じく根を食害する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、台湾、フィリピンに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では浜松市北区引佐町の2ヶ所のため池で採集例があるが、具体的なデータは未発表である。

## 3. 生息環境

ジュンサイやヒルムシロなどが生育する池沼に生息する。

## 4. 生息状況

県内では2ヶ所の池に生息していることが確認されており、生息地での個体数は少ない。県内にはジュンサイやヒルムシロが生えた池が少なく、かつ、十分な調査は行われていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

ため池の埋め立て(12)や管理放棄(53)、農薬・肥料などの流入による水質汚染(32)、植生遷移の進行に伴う水環境の悪化(54)などが本種の生息の脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

ガガブタネクイハムシという和名がつけられているが、ガガブタを食害することは疑わしいという。

## 8. 主な文献

長谷川道明・吉富博之(1998)愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48

林 成多(2005)日本産ネクイハムシ図鑑-全種の解説-. 月刊むし, (408): 2-18

野尻湖昆虫研究グループ(1985)アトラス・日本のネクイハムシ-化石同定の手引き. 同グループ, 大阪, 182 pp.

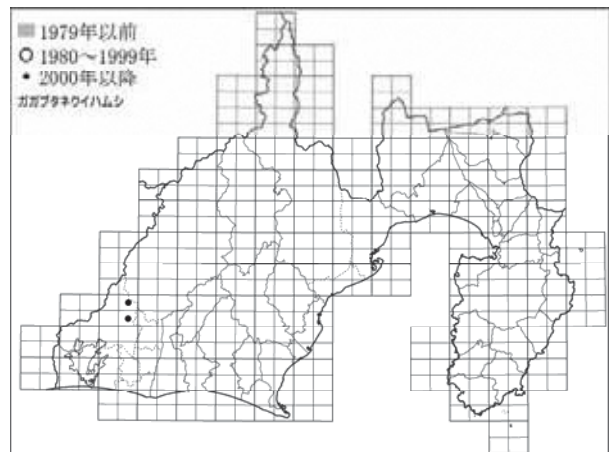
## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira  
浜松市北区産 2000年6月26日 多比良嘉晃採集





# オオルリハムシ *Chrysolina virgata* (Motschulsky, 1860)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 9~14 mm。金緑色で前胸背板中央と上翅会合部両側及び側縁付近の縦条は金赤紫色であるが、変異がある。後胸及び腹部腹面は赤銅色。おおむね長円形で後方はやや広がり、背面は膨隆する。前胸背板は大小の粗点刻を装い、両側は縦に窪み巨大な点刻を不規則に具え、上翅は粗大点刻を多少とも列状に並べる。

成虫は 6~10 月に出現し、シロネ、ヒメシロネなどのシソ科植物上に見られ、成虫・幼虫ともにこれらを摂食する。老熟幼虫で土中で越冬するといわれる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、シベリアに、国内では本州、佐渡、九州（大分県）に分布する。国内における分布は局地的で、本州では太平洋側の静岡県と日本海側の福井県より北の各地と三重県、山口県から、九州では大分県から記録されている。県内では富士宮市朝霧高原で確認されているが、詳細なデータは未発表である。

## 3. 生息環境

シソ科のシロネ、ヒメシロネ、エゴマなどが生育する湿性草原に生息する。

## 4. 生息状況

富士宮市朝霧高原では個体数は少なくないようであるが、最近では確認していない。インターネット上では 2010 年と 2017 年に朝霧高原において確認した内容の記事が掲載されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移の進行や乾燥化が進むことなどで生息環境が変化し (54)、本種の生息に影響を与える可能性がある。

## 6. 保護対策

富士宮市朝霧高原の生息地は国立公園内にあって、無秩序な開発などによって生息地が破壊されるおそれは小さいと考えられる。

## 7. 特記事項

静岡県の個体群は、背面が金緑色で前胸背板と各上翅の中央が金赤紫色、後胸腹板は赤銅色を呈する型である。

## 8. 主な文献

岩井大輔・八木 剛 (2003) 日本におけるオオルリハムシの地理的分布. *Japanese Journal of Entomology* (N. S.), 6: 105-110

木元新作・滝沢春雄 (1994) 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 秦野, 539 pp.

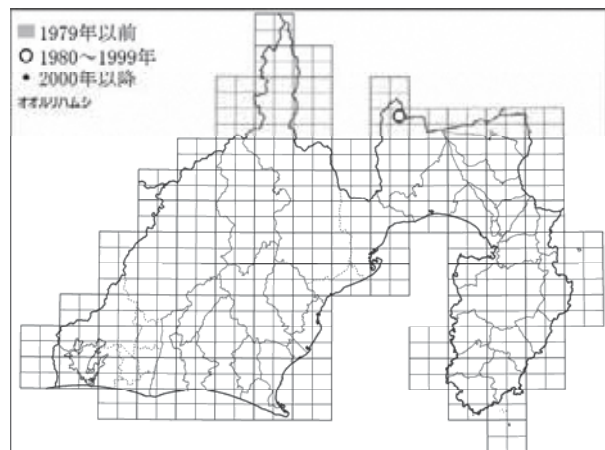
## 9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira  
富士宮市産 1994年8月15日 多比良嘉晃採集



### 1. 種の解説

体長 3.8~4.2 mm。体は黄褐~赤褐色、おおむねダルマ形で背面は強く隆起し、吻は比較的太短いがよく突出、前胸背板は顆粒を装い、翅鞘は粗い点刻を縦列し、肢は頑強で短く、前肢脛節末端の外角は細長く突出し、後肢脛節末端には三日月形の外室を有する。

海岸に打ち上げられたアマモの下や砂中に埋まったアマモに見られ、成虫・幼虫ともにこれらを食する。成虫はほぼ一年中見られるようであるが、5・6月頃に最も個体数が多い。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島と極東ロシアに、国内では北海道、本州、九州の海岸部に局地的に分布する。確認されている生息地は多くなく、基準産地の三重県津市阿僧浦海岸と愛知県南知多町内海海岸ではすでに絶滅したとされる。県内では浜松市南区米津町、浜松市西区篠原町・舞阪町、湖西市新居町・白須賀の記録がある。

### 3. 生息環境

砂浜が発達した自然海岸の打ち上げられたアマモの下などに生息する。礫浜では、アマモが漂着していても生息は確認されないという。

### 4. 生息状況

愛知県豊橋市表浜海岸から浜松市南区米津町に至る遠州灘海岸に不連続的に生息し、一部地域では個体数は少ない。浜名湖の奥部では見られない。

### 5. 減少の主要因と脅威

護岸工事 (14) や海岸への車両の乗り入れ (71) は本種の生存に壊滅的な打撃を与えるおそれがある。また、生活排水などの流入による湖水の汚染 (31) で食草のアマモが減少することも大きな脅威である。

### 6. 保護対策

愛知県境付近の遠州灘海岸は数少ない自然海岸であるので、現状のままでの保全が必要である。

### 7. 特記事項

愛知県知多半島と三重県阿僧浦海岸では、最近、約 60 年ぶりに再発見された。

### 8. 主な文献

- 長谷川道明・蟹江 昇 (1992) 豊橋市表浜海岸の海浜性甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48  
 長谷川道明・金 郁彦・大場裕一 (2016) 知多半島で確認されたハマベゾウムシについて. 豊橋市自然史博物館研究報告, (26): 19-21  
 松本雅道 (2003) 遠州灘沿岸におけるハマベゾウムシの分布と漂着アマモ量. 漂着物学会誌, 1: 1-5  
 多比良嘉晃・松本雅道 (2000) 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71

### 9. 標本

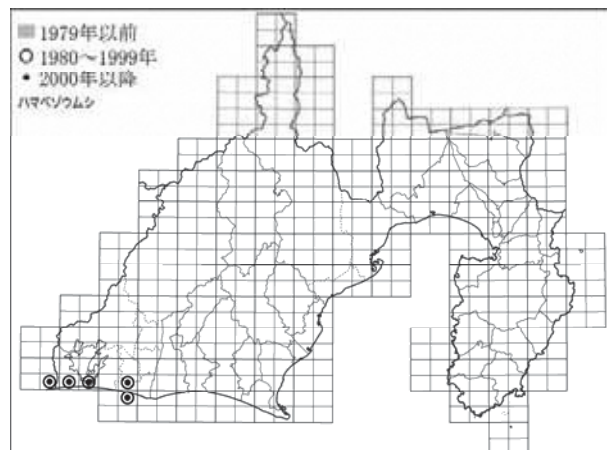
浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa

浜松市産 2014年7月14日 石川 均採集



# ウラクロシジミ *Iratsume orsedice orsedice* (Butler, 1882)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1, 3, 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。オスの表面は一面真珠色、メスは外側が広く黒褐色で内側は灰白色をしている。裏面はオスメスとも地色は明黒褐色で後翅に W 型の白線がある。幼虫の食餌植物はマンサク。卵で越冬。年 1 回標高の低い地域では 6 月、高い地域では 7 月に発生する。夕方活発に飛翔する。

## 2. 分布

国外では台湾、中国西部に、国内では北海道南部、本州、四国、九州に局地的に分布している。県内では大井川の中・上流部、浜松市（旧引佐町、旧天竜市）から記録が多く、天竜区水窪町や龍山町でも採集されている。富士山周辺や伊豆半島からは記録がない。

## 3. 生息環境

標高およそ 700～1,400 m の山地の渓谷が主な発生地であるが、浜松市北区から天竜区にまたがる渋川・枯山地区のように低山にも見られる。

## 4. 生息状況

2000 年代の初めまでは大井川の上流部や引佐町に生息していたが、県内各地で食樹のマンサクが樹病により大量に枯死し、その影響が本種にも及び、最近の 10 年間はおくわずかな記録しかない。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内で食樹のマンサクが樹病により枯死したため (71) 本種の生息に大きく影響している。マンサクの更新は進んでいない。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

天野市郎 (2000) 静岡県中川根町蕎麦粒山でウラクロシジミを採集. 駿河の昆虫, (189): 5310-5311

稲葉 茂 (1986) 静岡市井川湖周辺の蝶覚え書. 駿河の昆虫, (133): 3874

白井和伸 (2001) 1990 年代に引佐町で採集した蝶の記録について. 駿河の昆虫, (193): 5418-5419

諏訪哲夫・稲葉 茂・太田公夫・白井和伸・高橋真弓 (1986) ミドリシジミ類の幼生期における分布調査と飼育結果. 駿河の昆虫, (133): 3860-3861

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608

宇式和輝 (2008) 大井川源流域・二軒小屋地域の蝶 [IV・2006 年] 駿河の昆虫, (224): 6208-6222

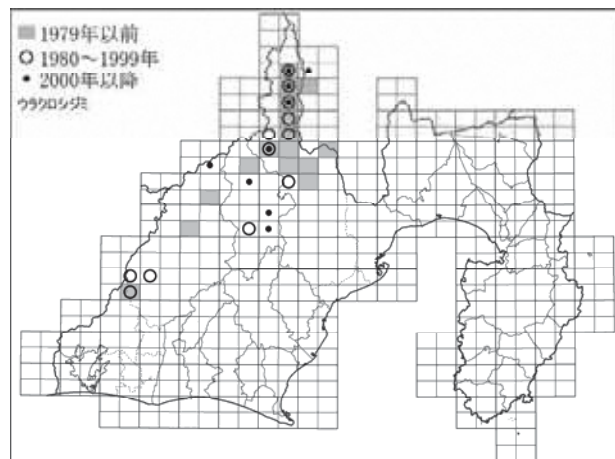
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♂裏面 2014年7月24日 天野市郎採集





# ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières, 1857)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 60 mm、メスはやや大きい。高標高になるにつれ小型になる傾向がある。翅表は明橙色の地色の全面に黒斑が広がる。後翅裏面の中央に銀色斑が筋状に現れ、和名の由来となっている。後翅裏面の外半分は赤紫色を帯びる。食餌植物はスミレ類。幼虫で越冬。年 1 回 6 月に羽化し、盛夏には休眠し秋再び姿を現す。

## 2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国からヨーロッパ北部にかけて広く、国内では北海道から九州まで広く分布している。県内では南アルプスやそれに続く山間地をのぞく広い地域から記録がある。

## 3. 生息環境

草原性種であり、蜜源が豊富な草地に多く、疎林や林縁にも見られる。いわゆる里山の環境は好適な生息地となる。

## 4. 生息状況

1990 年代までは個体数は決して多くないものの、県内に広く生息していたが、2000 年以降伊豆、中部、西部において激減している。ただし、東部の富士山麓には今のところ安定して生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

草地の遷移の進行、さらにシカやイノシシによる草花の食害 (54) により蜜源となるオカトラノオやアザミ類が生育するような良好な草地環境が失われている。

## 6. 保護対策

里山の環境整備を行うことにより本種の増加につながることを期待したい。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福井順治 (1977) 佐久間・水窪の蝶類 (Ⅲ) . 駿河の昆虫, (96): 2824-2829

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 4 報] . 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

白井和伸 (2001) 1990 年代に引佐町で採集した蝶の記録について. 駿河の昆虫, (193): 5418-5419

諏訪哲夫 (2015) 静岡市葵区突先山でウラギンスジヒョウモンを採集. 駿河の昆虫, (252): 6199

高橋真弓 (1987) 静岡県および山梨県南部におけるヒョウモンチョウ類の分布と生息地Ⅱ. 駿河の昆虫, (137): 3959-3987

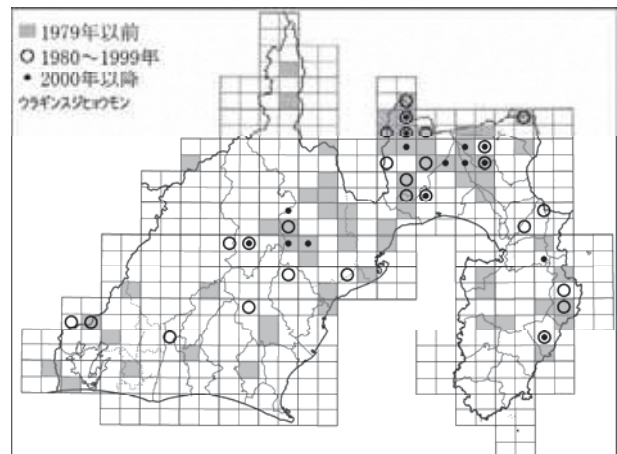
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♂裏面 2015年6月28日 諏訪哲夫採集



# クモガタヒョウモン *Nephargynnis anadyomene ella* (Bremer, 1865)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 60~75 mm。オスの翅表は明橙色、メスは暗橙色の地色をしている。全面に黒斑が広がり、前翅端が大きくせり出す。後翅裏面が雲形模様をしているため和名の由来となっている。幼虫の食餌植物はスミレ類。卵で越冬。年 1 回、大型ヒョウモン類の中では最も早く 5 月初旬に羽化し、夏の休眠を経て秋再び姿を現す。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東部に、国内では北海道から九州まで分布は広い。県内では伊豆半島を含む全域から記録がある。

## 3. 生息環境

平野部から標高 1,400 m の山地まで生息している。成虫の蜜源となるオカトラノオ、ノアザミなどの草本が生育する草地や、ウツギなどのある疎林、林床が明るい落葉広葉樹や針葉樹の疎林や林縁などが生育地となる。

## 4. 生息状況

1990 年代までは生息密度は低いものの県内全域にわたって記録があったが、2000 年以降、目にする機会が一層少なくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

雑木林などの森林の荒廃や草地の遷移の進行 (54)、さらにシカやイノシシによる草花の食害 (54)、ノアザミなどの吸密植物の減少により好適な生息環境が縮小している。

## 6. 保護対策

里山の環境整備を行うことにより本種の増加につながることを期待したい。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

袴田和弘 (2016) 静岡県中・西部におけるクモガタヒョウモンの記録. 駿河の昆虫, (256): 7023

清 邦彦 (2016) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 5 報]. 駿河の昆虫, (255): 6977-6983

諏訪哲夫 (2004) 寸又峡の 6 月の蝶. 駿河の昆虫, (207): 5771

高橋真弓 (1987) 静岡県および山梨県南部におけるヒョウモンチョウ類の分布と生息地 II. 駿河の昆虫, (137): 3959-3987

高橋真弓 (2014) 静岡市津渡野におけるクモガタヒョウモンの記録. 駿河の昆虫, (246): 6774-6775

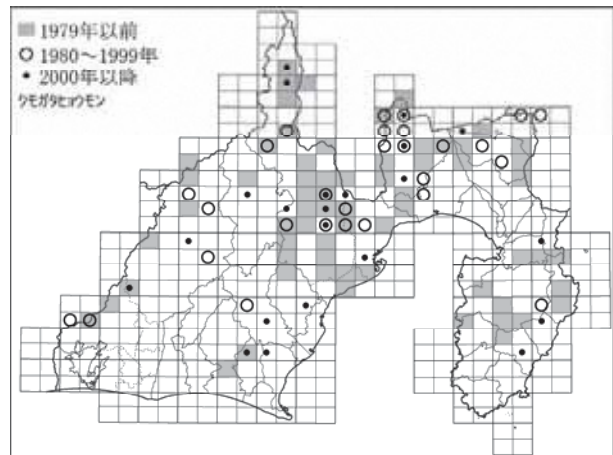
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



川根本町産♀裏面 2008年7月12日 諏訪哲夫採集



# ホシミスジ *Neptis pryori iwasei* Fujioka, 1998

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張 50 mm。翅の表は黒、裏は明るい茶色の地色に白い帯と点が並ぶ。幼虫の食餌植物はシモツケとユキヤナギ。幼虫で越冬。成虫は年 1 回、6~7 月に発生し 8 月まで見られる。最近、天竜川中流から、年に 2 回発生していると推測される個体群が見つかっている。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国東北部、台湾などに、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では富士山麓に広く分布し、静岡市梅ヶ島など中部の一部、西部では旧引佐町周辺の蛇紋岩地帯、佐久間ダムなど天竜川沿いに記録がある。

近畿地方や四国では、ユキヤナギなど栽培植物を利用して分布を拡大している。

## 3. 生息環境

食草のシモツケ類が自生する雑木林の林縁や、灌木を交えた草原が生息地となる。

## 4. 生息状況

富士山周辺では、草原環境の減少によりやや減少傾向とみられるが、まだ安定して生息しているとみてよい。中部では安倍川上流域に記録があるが最近は見ることができない。一方、西部の旧引佐町を中心とする蛇紋岩地帯の産地では 1990 年代以降記録がなく、絶滅した可能性が高いが、佐久間ダム周辺には現在でも細々と生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士山麓では遷移の進行 (54) により疎林や草原環境が縮小し、個体数は減少傾向である。本県西部から愛知県東部にかけての蛇紋岩地帯では、遷移の進行や新東名高速道路の建設 (24) などにより産地が失われた。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

国内産の地理的変異は大きく、最近の研究でいくつかの亜種に分割されるようになった。本県西部から愛知県東部の蛇紋岩地帯産は原名亜種に含まれると考えられ、前翅中室白帯が縮小し、原名亜種の中では変異が顕著な貴重な個体群であったが、残念ながら十分調査、研究されないまま絶滅したことになる。

## 8. 主な文献

木村一好 (2016) 浜松市におけるホシミスジの記録 (2015 年) . 駿河の昆虫, (256): 7020

小堀 健 (2015) 富士市岩本山公園周辺のチョウの記録. 駿河の昆虫, (249): 6825-6831

清 邦彦 (2012) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 4 報] . 駿河の昆虫, (237): 6525-6529

白井和伸 (2006) 静岡県西部から愛知県東部の蛇紋岩地帯のホシミスジについて. 駿河の昆虫, 215 : 5959-5966

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺におけるミスジチョウ属 *Neptis* の分布. 駿河の昆虫, 60: 1667-1714

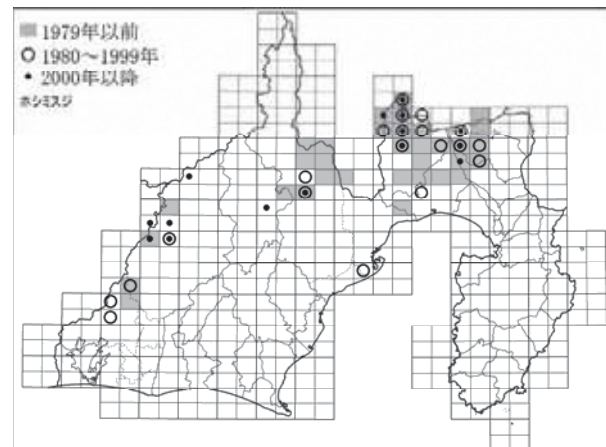
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



©2019 T.Suwa  
浜松市産卵表面 2013年6月9日 諏訪哲夫





# ツマジロウラジャノメ *Lasiommata deidamia interrupta* (Fruhstorfer, 1909)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 55 mm。翅の表裏とも黒褐色で裏面後翅に眼状紋が並ぶ。メスでは前翅の白帯が目立つ。幼虫の食餌植物はヒメノガリヤスなどのイネ科。幼虫で越冬。成虫は標高の低いところでは 5 月下旬～6 月、7～8 月、9～10 月の 3 回、標高の高いところでは 7 月下旬～8 月に 1 回発生し、好んで花に集まり、ニガナ、ヒメジョオンなどで吸蜜する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、モンゴルなどに、国内では北海道、本州、四国に分布するがいずれの地域でも産地は限られる。隣接の愛知県からは記録がない。県内では伊豆半島には記録がなく、富士山本体ではわずかな記録があるのみである。東部では天子山脈の山麓、中部では安倍川、大井川流域、西部では北遠地方の標高 200～1,600 m から記録がある。

## 3. 生息環境

岩や石が露出した崩壊地や林道法面など特殊な環境に限って生息している。

## 4. 生息状況

富士山では 1960 年代まで表口登山道 2 合目の市兵衛沢に数件の記録があるのみで他の場所からは見つかっていない。富士山ではその後記録がなく絶滅したとみられる。安倍川流域では大河内や梅ヶ島の標高 400 m 以上の県道などの道路法面でも発生し、1990 年代には比較的個体数も多かったが、道路の拡幅や舗装、法面の補修で、岩などが露出した自然状態の部分がなくなり、本種の生息に大きく影響している。大井川の源流部では 2000 年以降個体数はかなり減少しているが、危機的とまではなっていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路の改良や法面の補修 (24) で岩などが露出した部分がなくなり、これに伴って本種も生息できなくなった産地が多い。

## 6. 保護対策

道路法面の補修をする際、本種が生育できるような工法が検討されることが望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

白井和伸 (1984) 水窪町のツマジロウラジャノメについて. 駿河の昆虫, (126): 3673-3674

諏訪哲夫 (1978) 静岡県・山梨県のツマジロウラジャノメ. 駿河の昆虫, (100): 2945-2953

高橋真弓 (1968) 富士火山富士宮口 2 合目付近 (富士宮市) の蝶. 駿河の昆虫, (63): 1821-1822

宇式和輝 (2007) 大井川上流域・二軒小屋地域の蝶 [Ⅲ・2004 年]. 駿河の昆虫, (219): 6067-6080

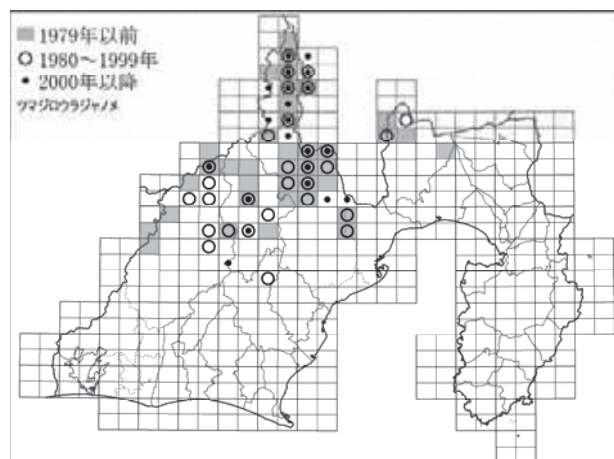
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♀表面 2016年7月27日 池谷 正採集



# ウラジャノメ *Lopinga achine achinoides* (Butler, 1878)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 45~50 mm。翅の表は茶褐色、裏は黄褐色、前後翅の表裏とも目玉模様が縦に並び、後翅裏面の目玉模様の内側に白帯がはしる。幼虫の食餌植物はスゲ類。幼虫で越冬。成虫は年 1 回発生し、6 月末~8 月上旬までみられる。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ中部からユーラシア大陸、朝鮮半島などに広く、国内では北海道、本州中部では広く分布するが、東北、中国地方では遺存的に分布する。県内では富士宮市の天子山脈、静岡市北部、浜松市天竜区から記録がある。

## 3. 生息環境

標高およそ 1,300~2,000 m の林床が明るく、下草としてイネ科、カヤツリグサ科の草本が豊富に生育している落葉広葉樹や針葉樹の疎林の林内やその林縁などが生息地となる。林床がササ類に覆いつくされているような林には生息しない。

## 4. 生息状況

富士宮市毛無山は 1970 年代まで記録があるがその後は調査されていない。大井川上流では、古くから記録は多く安定して生息していたが、最近では激減している。中部では山伏、蕎麦粒山、七ツ峰などから、西部では、常光寺山周辺、竜頭山周辺に記録がある。竜頭山周辺では間伐や枝打ちなど遊歩道周辺の整備などにより、広く疎林環境が生じ個体数が増加した。

## 5. 減少の主要因と脅威

竜頭山周辺とは対称的に、森林がより暗く覆われた状態 (54) となった常光寺山周辺では個体数は激減し、絶滅が心配される。環境整備の重要性が顕著に確認できる好例である。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

竜頭山周辺は本州中部南限の産地であったが、2017 年に愛知県設楽町で発見され、これが南限となった。

## 8. 主な文献

天野市郎 (2006) 静岡市・川根本町境七ツ峰でウラジャノメ. 駿河の昆虫, (216): 5999

福井順治 (1977) 佐久間・水窪の蝶類 (III). 駿河の昆虫, (96): 2824-2829

白井和伸 (2000) 静岡県西部地方のウラジャノメについて. 駿河の昆虫, (190): 5333-5334

諏訪哲夫 (2000) 北遠地方のウラジャノメの記録. 駿河の昆虫, (189): 5012-5013

高橋真弓 (1953~2000) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (1)~(23). 駿河の昆虫, 4~135 掲載各号.

山下 健 (1991) 寸又峡におけるウラジャノメなどの記録. 駿河の昆虫, (156): 4457

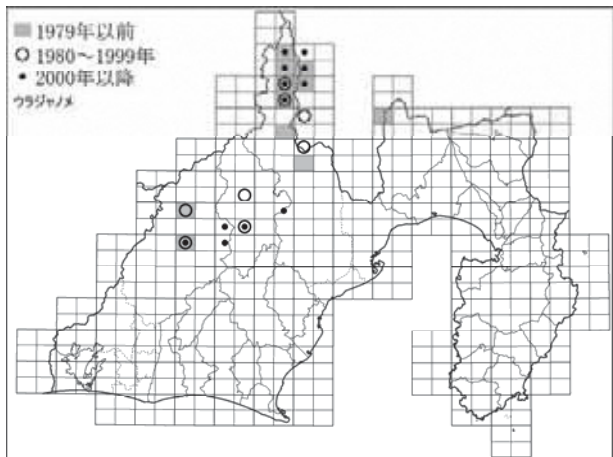
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産の裏面 2014年7月9日 諏訪哲夫採集



### 1. 種の解説

開張 39 mm 内外。オスの触角は基方約 2/3 は鋸歯状、先端部は歯牙状、メスでは糸状。成虫は 7~8 月に採集されている。飼育下では、イネ、メヒシバを食した例がある。イネ科を広く食草とすると考えられている。

### 2. 分布

国外では台湾、中国、ヒマラヤ山脈周辺から、スリランカ、タイ、ベトナム、インドネシアに、国内では本州、四国、九州の南岸部に分布し、既知の北限は伊豆半島とされる。県内では裾野市大野原、伊東市大室山、引佐町三岳山から記録がある。

### 3. 生息環境

既知産地の環境は火山性草原または火入れなどを定期的に行う管理された草原である。

### 4. 生息状況

引佐町三岳山の記録は 1953 年、伊東市大室山からは 1967 年に確認され 1973 年以降記録がない。裾野市大野原の東富士演習場に隣接する草原で 2009 年に発見され (柳田, 2010)、2012 年までは継続的に確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

遷移進行 (54) による生息環境の植生変化。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

渡辺一雄 (1968) 静岡県西部地方のシャチホコガ類. 蛾類通信, (51): 549-550

井上 寛・前波鉄也 (1968) 伊東市南部の分布上興味のある蛾類 II. 蛾類通信, (53): 578-581

柳田慶浩 (2010) 静岡県東富士にてカバイロシャチホコの発見とマエアカヒトリの記録. 蛾類通信, (257): 176-177

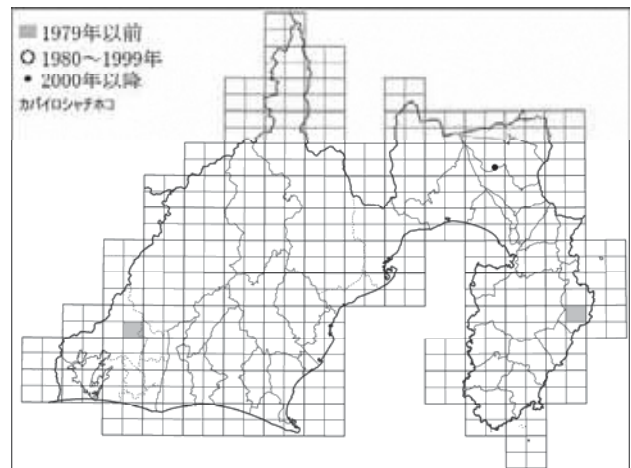
小林秀紀 (2011) シャチホコガ科. 岸田泰則 (編), 日本産蛾類標準図鑑 II, pp. 115-138. 学研教育出版, 東京.

### 9. 標本

裾野市大野原産: 東京大学総合研究博物館所蔵



裾野市産♀表面 2012年6月7日 岸田泰則採集



(枝恵太郎)



### 1. 種の解説

開張オス 21 mm 内外、メス 25 mm 内外。メスは無紋であるが、オスは前翅中室外に斑紋をもち、後翅は全体的に黒っぽくなる個体がある。年 2 化、成虫は 5 月、7~8 月に出現する。

### 2. 分布

国外では中国から記録があるが、別種であろうとされている。国内では本州（伊豆半島以西）、四国、九州、対馬に分布する。県内では伊豆半島（伊東市先原伊豆シャボテン公園・河津町大滝温泉）、裾野市大野原に記録がある。

### 3. 生息環境

全国の採集された環境から考えると、生息環境はいわゆる草原環境と考えられる。

### 4. 生息状況

伊豆半島（伊東市先原伊豆シャボテン公園・河津町大滝温泉）において 1960 年代に採集記録があるほか、柳田（2011）により 2010 年 8 月に裾野市大野原で採集されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

遷移の進行（54）や開発（23）など。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

環境省 編（2015）の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

井上 寛・前波鉄也（1967）伊東市南部の分布上興味のある蛾類. 蛾類通信, (47): 467-469

井上 寛・前波鉄也（1968）伊東市南部の分布上興味のある蛾類Ⅱ. 蛾類通信, (53): 578-581

江波戸俊弥（1968）伊豆大滝温泉の 2 種のドクガ. 蛾類通信, (52): 565

岸田泰則（2011）ドクガ科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ, pp. 139-147. 学研教育出版, 東京.

柳田慶浩（2011）東富士でトラサンドクガの発見とカバイロシャチホコとマエアカヒトリの追加記録.

蛾類通信, 261: 282-283

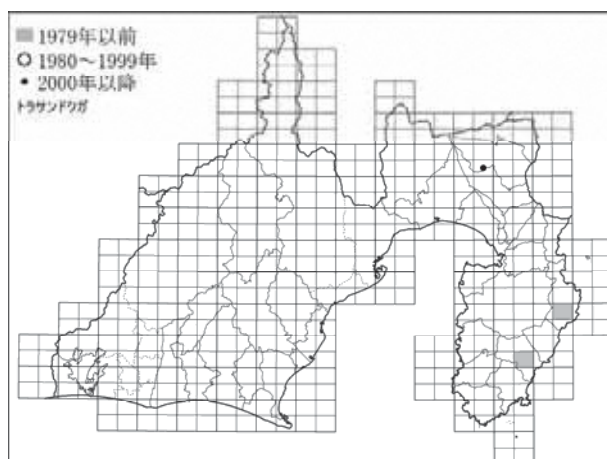
### 9. 標本

伊東市産：東京大学総合研究博物館所蔵

(枝恵太郎)



伊東市産♂表面 1967年7月31日 前波鉄也採集



### 1. 種の解説

開張 50~60 mm 内外。後翅が黒色で黄色い斑のある他の多くのキシタバ類と異なり、後翅は黒色地に白色斑がある。成虫は年 1 化、6 月上旬に出現し、10 月下旬まで見られる。幼虫の食樹はクヌギである。

### 2. 分布

国外では中国、韓半島、ロシア南東部に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では中部と東部・伊豆（三島市・旧葦山町・旧大仁町）で確認されている。

### 3. 生息環境

クヌギの混在する暖温帯の落葉広葉樹 2 次林。

### 4. 生息状況

手元に三島市夏梅木（2002 年 7 月）、伊豆の国市中条（1992 年 7 月）産の標本がある。また 2013 年 7 月に裾野市桃園の記録がある。東部・伊豆のクヌギ 2 次林に生息すると考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

遷移の進行 (54) や開発 (23) など。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

### 8. 主な文献

石塚勝己 (2011) ヤガ科シタバガ亜科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑 II, pp. 244-249. 学研教育出版, 東京.

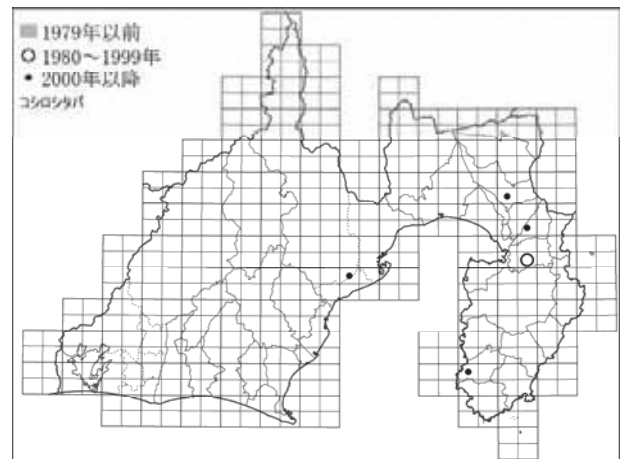
石塚勝己 (2011) 世界の *Catocala*. 月刊むし・昆虫図説シリーズ 1. むし社, 東京, 108 pp.

### 9. 標本

三島市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



松崎町産♀表面 2015年8月26日 石川 均採集



(枝恵太郎)

# クビグロケンモン *Acrionicta digna* (Butler, 1881)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張 43 mm 内外。年 2 化と思われ、4~5 月に出現する成虫は翅表が淡色で斑紋は鮮明で後翅内半部は白色に近い。8 月に出現する成虫は前翅が暗色、後翅内半は淡黄色を帯び、外縁の黒色帯はメスでは特に暗色となる。幼虫はカキツバタで発生記録があるほか、イタドリで幼虫がえられた記録がある。

## 2. 分布

国外では台湾、朝鮮半島、中国（黒龍江省、河南省、湖北省、湖南省）、ロシア南東部に、国内では産出は局地的で北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では賀茂郡河津町大滝温泉、伊東市先原、富士宮市根原（朝霧高原）、浜北市天竜川沿い、浜松市（旧浜名郡雄踏町）、磐田市桶ヶ谷沼で記録がある。

## 3. 生息環境

草地及び湿地。これらの環境は、開発、遷移などで減少している。

## 4. 生息状況

手元に富士宮市小田貫湿原産の標本（1992 年 7 月）があるほか、磐田市桶ヶ谷沼では 1986 年、1999 年の記録が、また最近では富士宮市根原朝霧高原（2016 年 8 月）の記録もある。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士宮市根原（朝霧高原）では生息環境の耕作地化（16）で、生息環境が減少している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

環境省 編（2015）の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

井上 寛・前波鉄也（1967）伊東市南部の分布上興味のある蛾類。蛾類通信，（47）：467-469

浦山幸夫（1988）磐田市桶ヶ谷沼の蛾。駿河の昆虫，（142）：4083-4088

岸田泰則（1989）静岡県朝霧高原で得た分布上興味ある蛾。月刊むし，（224）：27

枝恵太郎・柳田慶浩（2011）ヤガ科ケンモンヤガ亜科。岸田泰則 編，日本産蛾類標準図鑑Ⅱ，pp. 295-303. 学研教育出版，東京.

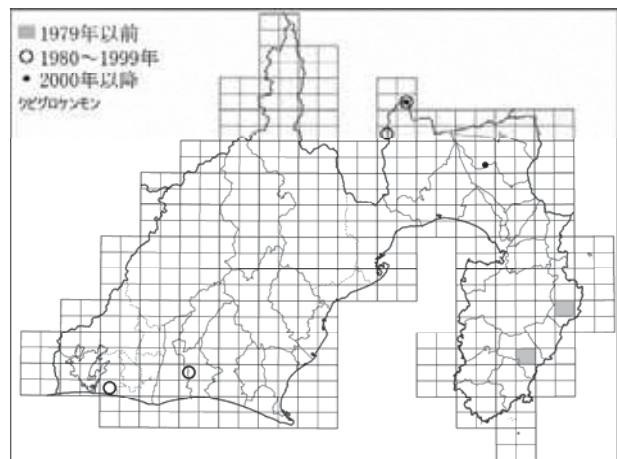
## 9. 標本

富士宮市産：東京大学総合研究博物館所蔵

（枝恵太郎）



富士宮市み上面 2016年8月20日 飯森政宏





# ガマヨトウ *Capsula aerata* (Butler, 1878)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-b) 変更コード 7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

開張 33~42 mm。オスの触角はわずかに鋸歯状、顔は円錐形に突出する。前翅は黄褐色ないし橙褐色。黒ずんだ暗褐色、中室下縁に沿う黒色条と中室端に 1 小白点を呈する。後翅は黄白色。成虫は年 1 化、7~8 月に出現する。大型の湿生単子葉植物の borer で、ガマの茎内から幼虫がえられている。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部に、国内では北海道、本州(青森県、秋田県、岩手県、宮城県、新潟県、石川県、群馬県、千葉県、愛知県、岐阜県)で記録がある。県内では磐田市桶ヶ谷沼・鶴ヶ池で記録がある。

## 3. 生息環境

ガマなどの生育する湿地。

## 4. 生息状況

1999 年 6 月に磐田市桶ヶ谷沼で 1 個体、また最近では 2017 年 6 月に磐田市鶴ヶ池で確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の生息環境である湿地環境は、開発 (23)、遷移 (54) などで減少している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

杉 繁郎 (1982) ガマヨトウ. 井上 寛・杉 繁郎・黒子 浩・森内 茂・川辺 湛・大和田 守, 日本産蛾類大図鑑 1: 751; 2: 366, pl 184. 講談社, 東京.

佐藤力夫 (1984) ガマヨトウはガマにつく. 誘蛾燈, (96): 86

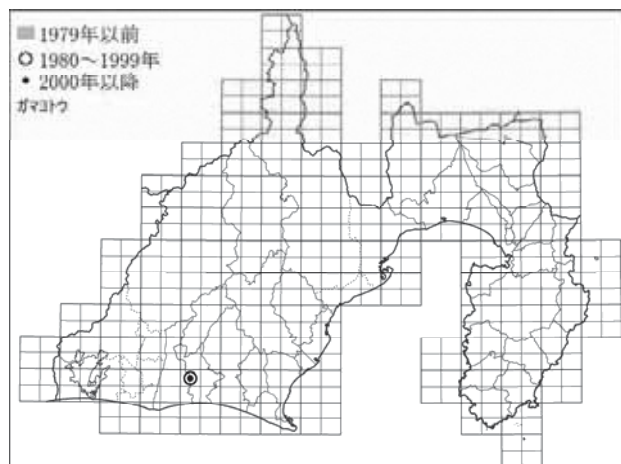
枝恵太郎・四方圭一郎 (2011) ヤガ科キリガ亜科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ, pp. 323-367. 学研教育出版, 東京.

## 9. 標本

磐田市桶ヶ谷沼・鶴ヶ池産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



磐田市産♂上面 2017年6月23日 浦山幸夫



(枝恵太郎)

# フジシロミヤクヨトウ *Sideridis kitti* (Schawerda, 1914)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリ 準絶滅危惧 (NT) (要件-b) 変更コード 7

[2004年版カテゴリ 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリ 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張約 40 mm。オスの触角は微毛状。前翅地色は黒色で内・外横線、環状紋、腎状紋は白色を呈する。亜外縁線も白色で明瞭。成虫は7月に採集される。食草はマメ科ムラサキモメンヅル、ソラマメ属、ゲンゲ属。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパ（主にアルプス山脈）、ウラル山脈南部、中央アジア、トルキスタン、モンゴル、シベリア南部に、国内では富士山のみ分布する。日本唯一の産地であって、富士山における食草ムラサキモメンヅルの分布と一致する。

## 3. 生息環境

富士山5合目（約2,400 m）の森林限界付近に多産する。特に大きな環境の変化は見られない。

## 4. 生息状況

2011年7月の調査では、富士山5合目（約2,400 m）付近において20個体以上確認された。

## 5. 減少の主要因と脅威

観光客の増加による生息環境の悪化 (51)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックに掲載されるようになった種である。

## 8. 主な文献

杉 繁 郎 (1965) *Heliophobus texturatus* (Alphéraky) フジシロミヤクヨトウ (新称) 日本に産す. 蝶と蛾, 16: 50-51

井上 寛 (1971) 4 富士山の高山帯で発見された蛾類ならびに富士特産のヤガについて. 黒田長久 編, 富士山地域の動物相 (in 富士山 富士山総合学術調査報告書), pp. 984-994. 富士急行株式会社・財団法人堀内浩庵会, 富士吉田.

中村正直・山本光人 (1987) フジシロミヤクヨトウの幼虫と蛹 (富士山亜高山帯砂礫地帯の蛾 I). 蛾類通信, (142): 267-270

吉松慎一 (2011) ヤガ科ヨトウガ亜科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑 II, pp. 368-384. 学研教育出版, 東京.

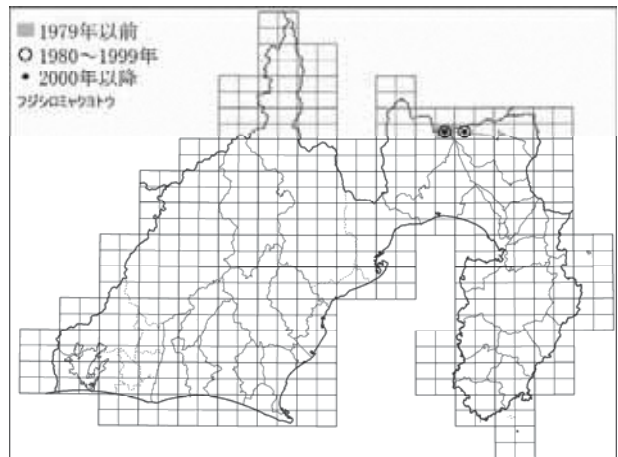
## 9. 標本

富士宮市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(枝恵太郎)



小山町♂上面 2015年7月23日 飯森政宏



### 1. 種の解説

体長 17～50 mm。無翅。肢は黄色。オスのハサミは左右不対象。オスの腹部第 3～7（ときには 3～9）背板側部に隆起縁がある。オスの垂末端腹板の後縁は直線状。体色には変化があり、黒い個体はハマベハサミムシ *A. maritima* (Bonelli, 1832) に似ているが、前胸背板が長いことで識別できる。メスのハサミは長い。

### 2. 分布

国外では韓国に、国内では本州、四国、九州、南西諸島、伊豆諸島などに分布する。県内では伊豆に分布する。県内における記録はほとんどなく、松崎町岩地、下田市吉佐美で採集された記録しかない。

### 3. 生息環境

主に岩石海岸の岩の割れ目や隙間などに住む。小規模な堤防にはその隙間などにも生息する。

### 4. 生息状況

十分な情報がえられていないためよくわからないが、生息密度はかなり低いものと思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

海岸開発、護岸工事など (14)。さらに調査が必要だが、開発による影響を強く受ける種と考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

記載前はハサミムシ茶色長鋏型として知られていた。

### 8. 主な文献

石川 均 (2014) イソハサミムシを下田市で採集. 月刊むし, (526): 15-16

日本直翅類学会 編 (2016) 日本産直翅類標準図鑑. 学研プラス, 東京, 384 pp.

Nishikawa, M. (2008) A new species of the genus *Anisolabis* from Japan and Korea, with notes on the nomenclatural problem of two subspecific names of *Anisolabis maritima* (Bonelli) (Dermaptera: Anisolabididae). *Ins. Matsm. (N. S.)*, 64: 35-51

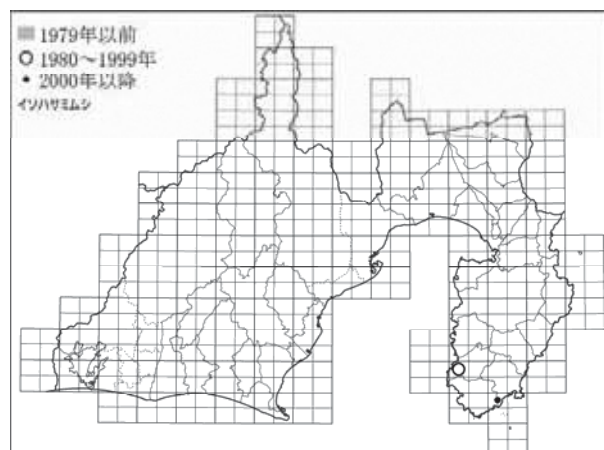
### 9. 標本

下田市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(石川 均)



下田市吉佐美 2018年9月3日 石川 均





### 1. 種の解説

体長 52～66 mm。前肢基節下側の黒紋には真っ黒なものや中央が黄色いものがある。緑色型と淡褐色型が知られる。卵越冬で年1化、卵嚢は石や枯れ木などの下に産付され、丸くふくらんだ楕円形をしている。成虫は9～11月にかけてみられる。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア沿海州、旧北区、東南アジア、アフリカに、国内では本州、四国、九州、南西諸島などに分布する。県内では西部に分布する。

### 3. 生息環境

海岸草地、河川敷や原野、茅場のように適度に管理された草原に生息するが、本土では生息地は限られている。県内の生息地はヨシがまばらに生える湿地である。

### 4. 生息状況

県内における正式な記録はなく、十分な情報がえられていないためよくわからないが、生息密度はかなり低いものと思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

植生遷移進行による樹林化(54)は本種の生息に大きな脅威と考えられる。

### 6. 保護対策

県内の生息地は県立自然公園に指定されているが、本種の保護に直接的効果はない。

### 7. 特記事項

現状では、県内では西部の唯1ヶ所が確実な生息地である。

### 8. 主な文献

日本直翅類学会 編 (2016) 日本産直翅類標準図鑑. 学研プラス, 東京, 384 pp.

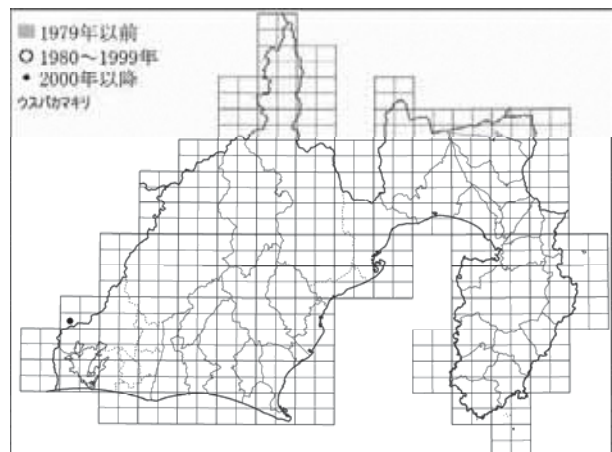
### 9. 標本

浜松市北区三ヶ日町産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(石川 均)



©2019 H. Ishikawa  
浜松市北区三ヶ日町 2013年9月19日 石川 均



# オオオカメコオロギ *Loxoblemmus magnatus* Matsuura, 1986 (“1985”)

コオロギ科 Gryllidae

静岡県カテゴリ 情報不足(DD) (要件-b) 変更なし

[2004年版カテゴリ 情報不足(DD) : 環境省カテゴリ なし]

## 1. 種の解説

体長オス 16~19 mm、メス 17~20 mm。大型のオカメコオロギの仲間で、オスの顔面は他のオカメコオロギのように窪まず、やや突出する。メスはミツカドコオロギ *L. doenitzi* Stein, 1881 によく似ているが、産卵管が長いことで区別できる。鳴き声は同属中で最も低く、「ルッルッルッ…」と太い声で聞こえる。成虫は8~10月に出現する。

## 2. 分布

国外では韓国に、国内では本州（宮城、新潟、埼玉、千葉、神奈川、長野、静岡、三重、滋賀、山口）、四国（徳島）、九州（熊本）に分布するが、いずれの産地も局所的である。県内では御殿場市、裾野市、三島市、伊豆の国市（旧中伊豆町）、東伊豆町、伊東市、富士宮市、静岡市、御前崎市（旧浜岡町）、掛川市（旧大東町）、浜松市（旧浜松市、旧天竜市）に分布しているが、生息地は局所的である。

## 3. 生息環境

海岸砂丘地帯の松林内やその周囲の草地、ススキが疎に生えた草原、火山灰地帯の畑地及びその周囲の草地、大河川の砂礫地など比較的乾燥した環境に生息している。植物が密に生えた環境には通常生息しないが、大室山や東富士演習場ではススキ草原の中に生息している。

## 4. 生息状況

何かの条件によって大発生することがたまに見られるが、ふつうはいずれの生息地でも生息密度は低い。生息地は限定されているうえ確認できなくなった産地も多い。しかし、新たな生息地も確認されていることから減少の程度は十分に把握できていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

草原の人為管理が行われず放棄されると急激に個体数が減少する（53）場合がある。草地開発（16）は、生息の脅威となる。

## 6. 保護対策

東伊豆町の細野高原は、高原内の湿原が県の天然記念物で、その周囲のススキ草原は毎年山焼きが行われ維持されている。また、伊東市の大室山は国の天然記念物でこのススキ草原も毎年山焼きが行われ維持されている。東富士演習場も毎年山焼きが行われている。そのほかの産地では特になし。

## 7. 特記事項

分布が局所的であることから移動能力は小さいと考えられる。静岡県三島市の箱根西麓が基準産地である。

## 8. 主な文献

Matsuura, I. (1985) [1986]. A new species of *Loxoblemmus* (Orthoptera, Gryllidae). *New Entomol.*, 34(1/2): 11-13

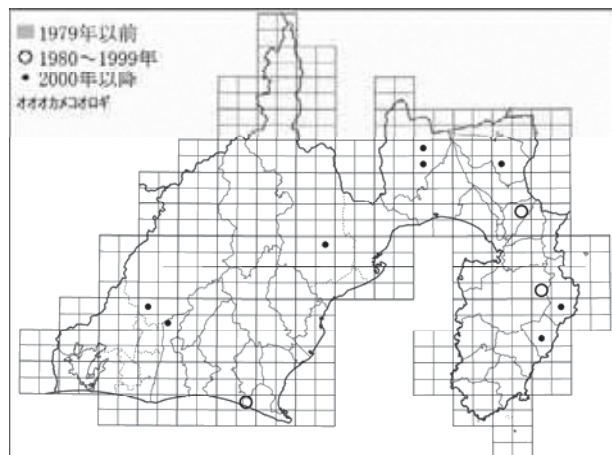
## 9. 標本

三島市産：大阪市立自然史博物館所蔵（ホロタイプ、パラタイプ）

(石川 均)



静岡市葵区足久保 2009年10月3日 石川 均



# アマギササキリモドキ *Gibbomeconema odoriko* Ishikawa, 1999

ササキリモドキ科 Meconematidae

静岡県カテゴリ 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリ 情報不足(DD) : 環境省カテゴリ なし]

## 1. 種の解説

体長オス 9.0~9.7 mm、メス 10.0~10.5 mm。鮮緑色をした小型のササキリモドキ科昆虫で、翅は短く腹部第3節に届く程度である。前胸背板には光沢あるチョコレート褐色の大きな紋があり美しい。オスの第3腹節背板には黄褐色の光沢あるコブ状突起がある。本種の前脚脛節下面には棘がなく、通常そこに可動棘をもつ短翅ササキリモドキ類としては特異である。成虫は8月頃出現し10月まで見られる

## 2. 分布

静岡県内にのみ生息する日本固有属・種で、伊豆半島天城山周辺に分布する。今までに確認された場所はわずか4ヶ所で、詳しいことはわかっていないが標高約400~600 mの間で採集されている。

## 3. 生息環境

森林に生息すると思われるが、詳細は不明である。確認地点付近の植生は、下層植生の豊富なスギ壮齢林及び落葉広葉樹林である。スギ大径木の樹幹で採集される例が多く、スギと関係があると思われる。

## 4. 生息状況

今までに採集されているのは、4ヶ所で合計20個体に満たない。また、基準産地の伊豆市湯ヶ島の滑沢渓谷では最近発見できない。確認が容易でないことから、特殊な生態を有している可能性がある。飼育下ではスギの樹皮下に産卵したという観察例がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

確認された個体数は少なく、また確認が容易でないため生息状況の変化を把握できていないが、生息が確認されている天城山の400~600 mの標高帯における大規模な森林伐採(11)は本種の生息に影響を及ぼすことが考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県の伊豆半島、それも天城山のヤブツバキ帯にのみ生息する固有属・種であるが、生態がよくわかっていない。保全対策が必要となった場合に対応できるように、より詳細な分布状況と生態の解明が望まれる。

## 8. 主な文献

Kano, Y., O. Tominaga, I. Tabata, T. Befu, H. Ishikawa, T. Murai, T. Mitoki, H. Kawakita, H. Toshima & K. Takahashi (1999) Japanese brachypterous Meconematinae (Orthoptera, Tettigoniidae). *Tettigonia*, 1(2): 1-81

瀬長 剛 (2000) アマギササキリモドキの産卵行動をみた. バッタリギス, (145): 65-66

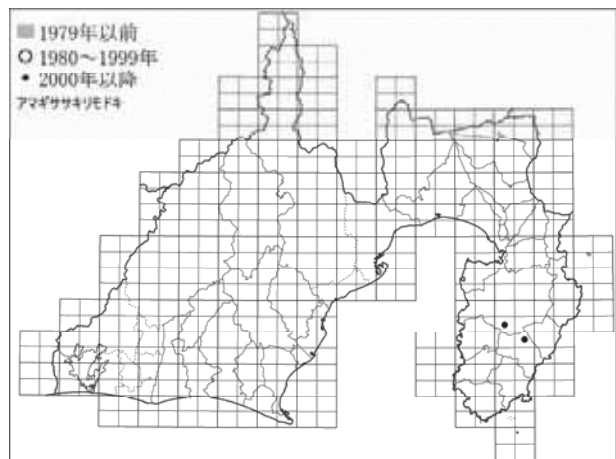
## 9. 標本

伊豆市湯ヶ島産: 大阪市立自然史博物館所蔵 (ホロタイプ、パラタイプ)

(石川 均)



伊豆市湯ヶ島 2014年9月29日 石川 均





# テカリダケフキバツタ *Parapodisma caelestis* Tominaga & Ishikawa, 2001

バッタ科 Acrididae

静岡県カテゴリ 情報不足(DD) (要件-abc)変更なし

[2004年版カテゴリ 情報不足(DD) : 環境省カテゴリ なし]

## 1. 種の解説

体長オス 19.5~25.4 mm、メス 22.0~30.1 mm。翅が小さい高山性のフキバツタの一種である。体色は黒みが強く、特に若齢幼虫期は真っ黒である。メスアカフキバツタ *P. tenryuensis* Kobayashi, 1983 にやや似ているが、より小型で黒い体色とオス尾肢の形状により区別できる。孵化はおそらく 7 月中旬頃と思われ、8 月上旬には中齢幼虫が多く見られ 9 月上旬になると成虫が目立つようになる。成虫は 8 月下旬から 10 月に出現する。

## 2. 分布

南アルプス固有種で、きわめて狭い範囲に分布する種である。今まで確認されているのは光岳周辺、上河内岳付近、聖岳、悪沢岳、池口岳付近、大日影山付近などで、光岳と上河内岳付近以外では生息数はきわめて少ない。生息地は長野県飯田市(旧南信濃村)・下伊那郡大鹿村と静岡県静岡市・川根本町であるが、主要な生息地は静岡市側にある。

## 3. 生息環境

高山にある“お花畑”が主要な生息環境と思われるが、稜線部のガンコウラン群落にも時々見られる。生息地は狭く非常に急傾斜な場所となっている。

## 4. 生息状況

ここ数年個体数に大きな変化は見られていないが、生息密度は一般に非常に低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

減少している情報はないが局所的で個体数が少ないことから、近年高山帯に出現が目立つホンドリツネやニホンザルなどの野生動物による捕食(71)も脅威となりうる。

## 6. 保護対策

生息地のほとんどは国立公園特別保護地区及び第一種特別地域に指定されている。

## 7. 特記事項

高山の厳しい環境に生息していてかつ分布が局所的で個体数が少ないことから、今後も注目していく必要がある。

## 8. 主な文献

Tominaga, O. & H. Ishikawa (2001) A new species of the Genus *Parapodisma* (Orthoptera: Acrididae) from Honshu, Japan. *Tettigonia*, 3: 27-32

株式会社環境アセスメントセンター(1998) テカリダケフキバツタ. 南信濃村動物誌-遠山郷に生きるどうぶつたち-, p. 150. 南信濃村教育委員会, 長野県南信濃村.

四方圭一郎・米山富和・金子岳夫・岸本年郎(2017) 赤石山脈南部上河内岳におけるテカリダケフキバツタの新産地. 伊那谷自然史論集, (18): 35-38

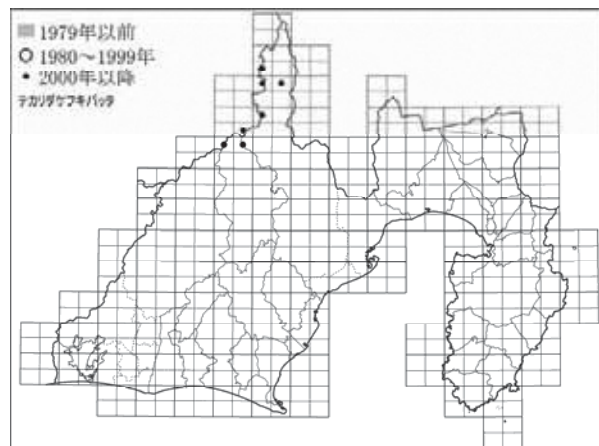
## 9. 標本

静岡市南アルプス光岳産: 大阪市立自然史博物館所蔵(ホロタイプ、パラタイプ)

(石川 均)



南アルプス光岳 2009年9月19日 石川 均



### 1. 種の解説

体長 6.5~9.0 mm。黒色で銀白色微毛を密生、肢は黄褐色だが、前肢腿節は基部を除き黒色。体は細長い紡錘形、長翅型と微翅型が知られ、微翅型の出現率は高いとされる。最普通種のヒメアメンボに似るが、明らかに小型で若干寸詰まりの感がある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア（極東、東シベリア）に、国内では北海道、本州、九州（福岡県）に分布する。県内では静岡市葵区足久保口組諸川池、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町の記録がある。

### 3. 生息環境

ヨシ、ガマなどの抽水植物の豊富な池沼に生息する。抽水植物間の閉鎖水面を好み、開放水面に出ることはほとんどないようである。

### 4. 生息状況

県内では 3ヶ所の池から記録されているに過ぎず、詳細な生息状況は不明である。静岡市諸川池及び磐田市桶ヶ谷沼では数回の調査を行ったが、生息を確認することはできなかった。浜松市松島町の生息地の池の一つでは、2003年まで生息が確認されていたが、その後著しく水質が悪化し、本種を含むほとんどすべての水生昆虫が見られなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)などが脅威となる。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

県内では生息地の数や生息環境の現状を考慮すると、エサキアメンボ *Limnopus esakii* (Miyamoto, 1958) より危機的な状況にあると考えられるが、評価するに足る情報が不足している。

### 8. 主な文献

井上智雄 (1988) エサキアメンボとババアメンボが棲む桶ヶ谷沼. 昆虫と自然, 23(13): 21

北野 忠 (2000) 静岡県及び静岡県近海で確認された水生半翅目. 遠州の自然, (23): 1-8

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

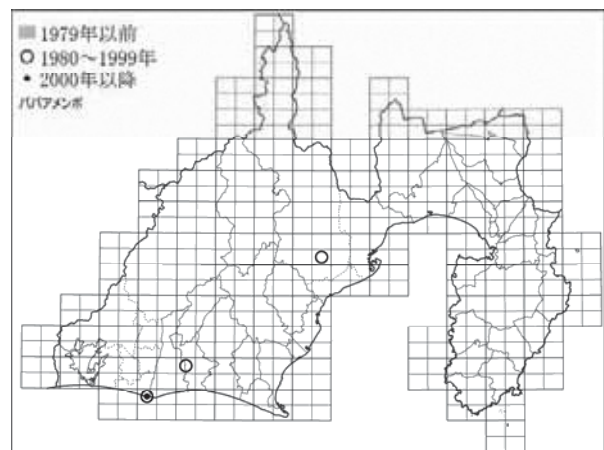
### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira  
浜松市南区産 2003年4月29日 多比良嘉晃採集



### 1. 種の解説

体長 18～22 mm。暗灰褐色で光沢を欠く。おおむね長卵形で、背面はほぼ平坦、前肢は腿節が肥大し、脛節は少し湾曲、跗節は1節で鉤状を呈し、全体として捕獲脚を成す。中・後肢は通常の歩行脚で、中肢はやや短い。尾部の呼吸管はタイコウチと比較してはるかに短い。

湿地の浅い水域のコケや落葉の間、植物の根際などに見られ、肉食性で、小昆虫や小節足動物を捕えて体液を吸汁する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア（ウスリー地方）に、国内では本州と四国に分布する。本州では静岡県西部から愛知県・岐阜県にかけてと兵庫県を中心とした地域とに生息し、四国では香川県に分布する。県内では浜松市中区、湖西市新所・太田・梅田で記録があり、湖西市大知波での採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環

湧水のある湿地に生息する。

### 4. 生息状況

浜松市と湖西市の数ヶ所の湿地から記録されているが、詳細な生息状況は不明である。浜松市の生息地は環境が改変されていて、現在も生息している可能性は低い。湖西市では 2000 年頃には個体数は少ない場所もあったが、採集例が少ないため、評価するに足る情報が不足している。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地は、多くは民有地であり、特に保全措置は取られていないため、開発などによる湿地の消滅（15-1）が危惧される。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

愛知県では、減少しているようではあるものの、未だ多くの生息地が確認されており、県内でも西部、特に浜名湖以西では新たな生息地が発見される可能性がある。

### 8. 主な文献

長谷川道明・佐藤正孝・浅香智也（2005）ヒメタイコウチの分布，付関連文献目録．豊橋市自然史博物館研報，(15)：15-27

井上智雄（1981）浜名湖西岸にヒメタイコウチ．昆虫と自然，16(2)：31

北野 忠（2000）静岡県及び静岡県近海で確認された水生半翅目．遠州の自然，(23)：1-8

渡辺一雄（1964）ヒメタイコウチを浜松市内で採集．駿河の昆虫，(45)：1246

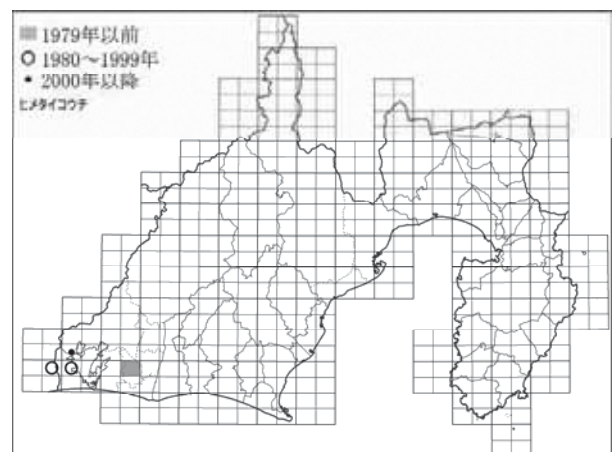
### 9. 標本

湖西市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃）



湖西市産 1992年10月13日 石川 均採集





# ウミホソチビゴミムシ *Perileptus (Perileptus) morimotoi* S. Ueno, 1955

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

体長 1.8~2.3 mm。黒褐色で触角、口器、肢などは黄褐色、おおむね細長いヒョウタン形で腹背に扁平、複眼は比較的小さく、複眼後方の頬は明瞭、口器の大腮はよく発達し前方へ突出し、前胸背板は後方へ強く狭まり、翅鞘は両側ほぼ平行で第3間室に3孔点を有する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、奄美大島に分布するが、局地的である。従来の分布の東限は和歌山県であった。県内では下田市田牛の記録がある。

## 3. 生息環境

河口などの潮間帯に生息し、満潮時には完全に海面下に水没するような石の下に見られる。

## 4. 生息状況

県内では1例の記録があるのみで、詳細な生息状況は不明である。下田市では岩礁海岸にある小規模な砂浜の少し泥質地の石の下からえられているが、生息密度はきわめて低かった。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内の生息地では、生息範囲がはなはだ狭いため、些細な原因(71)で容易に生息環境が破壊されるおそれがある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種は河川敷に生息する同属の他種より暗色である点が特徴の一つであるが、検視個体は未成熟で淡黄褐色を呈しており、成熟個体による検討が必要と思われる。

## 8. 主な文献

多比良嘉晃・松本雅道(2000) 静岡県の海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71

田中昭太郎(1987) 和歌山県の歩行虫類(1). Kinokuni, 26: 24-26

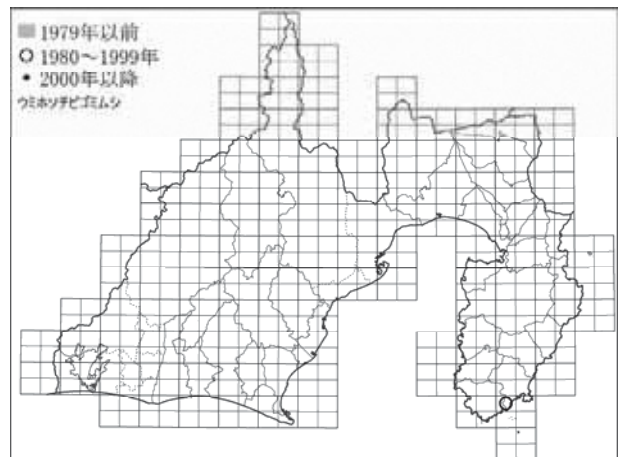
Ueno, S. (1955) Studies on the Japanese Trechinae (III) (Coleoptera, Harpalidae). *Publications of the Seto Marine Biological Laboratory*, 4(2-3): 179-193

## 9. 標本

下田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



下田市田牛産 1999年9月26日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

## コガシラミズムシ *Peltodytes intermedius* (Sharp, 1873)

コガシラミズムシ科 Haliplidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長 3.1~3.6 mm。黄褐色で翅鞘の大点刻列は黒色、翅鞘には数個の多少とも不分明な黒色小斑を装う。体はやや幅広い倒短卵形で、腹背に厚く、翅端は三角形に突出する。後肢基節は板状に大きく発達して腹部第1~5節を覆い、後縁に1鋭棘を具える。

成虫・幼虫ともにアオミドロなどの藻類を食べ、成虫は動物質のものも食べる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシアに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島と浜松市南区松島町で記録があり、下田市茅原野、御殿場市柴怒田・山之尻・中畑、牧之原市白井、浜松市北区引佐町で採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼に生息する。かつては池沼や水田にふつうに見られたらしいが、現在では県内の生息地は局限されている。

### 4. 生息状況

普通種であったと言われるが、県内の記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。御殿場市では水田の一角のイネを植えていない水域や放棄水田の水溜まりなどにも見られた。場所によっては個体数は少なくなかったが、いずれにしても県内での分布は局地的である。

### 5. 減少の主要因と脅威

池沼の埋め立て、ため池の近代的護岸化(12)、農薬・肥料などによる水質汚染(32)、植生遷移の進行や富栄養化に伴う水質悪化(54)、捕食性外来生物の侵入(52-3)などにより生息環境が狭められている。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

御殿場市では直近の調査でも生息が確認された。

### 8. 主な文献

北野 忠 (2011) かつては水生昆虫の楽園 遠州浜の後背湿地. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展「およげ! ゲンゴロウくん~水辺に生きる虫たち~」展示解説書, pp. 90-92. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

北野 忠・石田和男 (2000) 遠州地方で確認された水生鞘翅目. 遠州の自然, (23): 9-14

Vondel, B. J. (1995) Haliplidae: Review of the Haliplidae of China (Coleoptera). in Jach & Ji (eds.), *Water Beetles of China, I.*, pp. 111-154. Zoologisch-Botanische Gesellschaft in Österreich and Wiener Coleopterologenverein, Vienna.

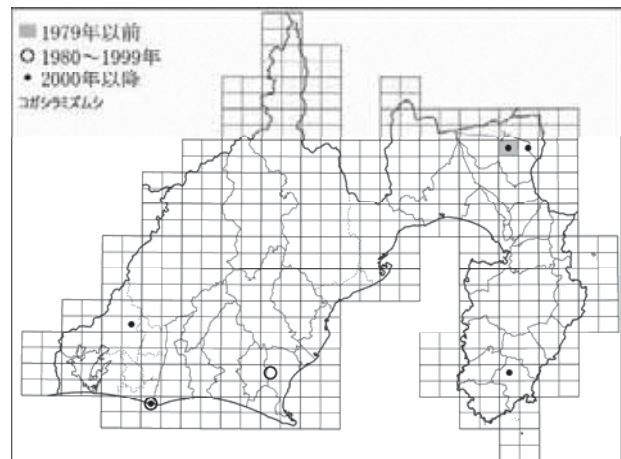
### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 H. Ishikawa

浜松市産 2014年7月23日 石川 均採集



(多比良嘉晃)

# クビボソコガシラミズムシ *Halipus (Haliplinus) japonicus* Sharp, 1873

コガシラミズムシ科 Haliplidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 情報不足(DD) ]

## 1. 種の解説

体長 2.7~3.3 mm。黄褐色で頭部は暗赤褐色、翅鞘の会合部と点刻列の点刻は黒色、各翅鞘中央には 4 小黒斑を歪四辺形に配列するが、しばしば不明瞭。体は倒卵形で翅端は三角形に突出する。前胸背板基部両側は短縦条を具え、後肢基節は板状に発達して腹部第 1~3 節を覆い、後縁は微細剛毛を列生し、棘を欠く。

成虫は、夜間、灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外では中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内ではデータを伴った正式な記録はないが、富士宮市猪之頭、富士宮市沼久保、富士市五貫島で採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

水生植物の豊富な河川のよどみや湧水が流れ込む湿地・池沼・休耕田などに生息する。

## 4. 生息状況

県下での採集例が少なく、生息状況は不明である。富士市五貫島では海岸堆積物の下よりえられた。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼の埋め立てや護岸工事など (12) によって生息環境が失われるおそれがある。本種が確認された富士宮市沼久保の池は釣り人によってブルーギルやブラックバスが放流されており、影響が懸念される (52-3)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

富士宮市沼久保の池の周辺（富士川本流側）は、以前はヤナギ類などが生える一般的な植生の河川敷であったが、近年、公園化されて植生がほとんどなくなったようである。

## 8. 主な文献

中根猛彦 (1985) 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2): 61-67

佐藤正孝 (1984) 日本産水棲甲虫類の分類学的覚書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4

Vondel, B. J. (1995) Haliplidae: Review of the Haliplidae of China (Coleoptera). in Jach & Ji (eds.), *Water Beetles of China, I.*, pp.111-154. Zoologisch-Botanische Gesellschaft in Österreich and Wiener Coleopterologenverein, Vienna.

## 9. 標本

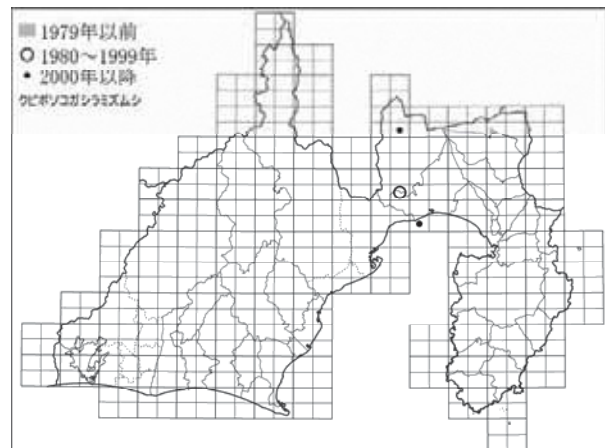
富士宮市産、富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

富士宮市猪之頭産 2006年8月20日 多比良嘉晃採集





## クロホシコガシラミズムシ

*Halplus (Liaphlus) basinotatus latiusculus* Nakane, 1985

コガシラズムシ科 Haliplidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD)(要件-abd)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

### 1. 種の解説

体長 3.5~3.9 mm。黄褐色で翅鞘は各 10 個内外の小さいが明瞭な黒斑を装い、基縁と会合部も細く黒色を呈する。体は倒卵形で翅端は三角形に突出する。前胸背板基部両側に短縦条を欠き、後肢基節は板状に発達して腹部第 1~3 節を覆い、後縁に棘を欠く。

### 2. 分布

日本固有亜種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では浜松市南区松島町で記録されている。基準亜種は朝鮮半島、中国、極東ロシアに分布する。

### 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼、湿地、水田などに生息するが、湧水河川からえられた記録もある。

### 4. 生息状況

採集例が 1 例のみで、詳細な生息状況は不明である。浜松市南区松島町では、水生甲虫類が豊富な池でコガシラミズムシに混じってただ 1 個体が採集された。同池においてはその後の 10 数回の調査においても追加個体は確認されていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

浜松市南区松島町の生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)、ブルーギルなどの捕食者の増加(52-3)などによって生息が困難になっていると考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

本種がえられた池は、その後、種々の水生昆虫が激減している。

### 8. 主な文献

北野 忠 (2011) かつては水生昆虫の楽園 遠州浜の後背湿地. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展「およげ! ゲンゴロウくん~水辺に生きる虫たち~」展示解説書, pp. 90-92. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

中根猛彦 (1985) 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2): 61-67

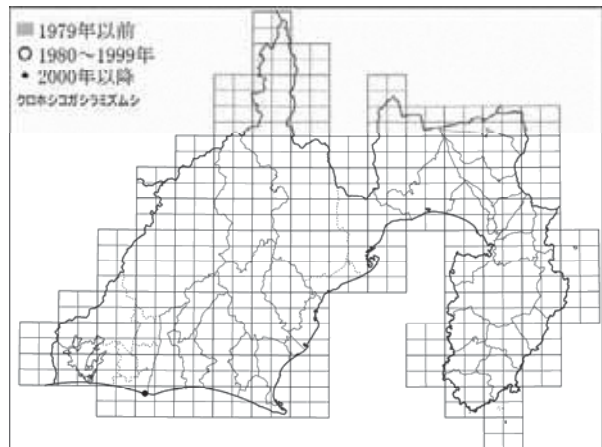
佐藤正孝 (1984) 日本産水棲甲虫類の分類学的覚書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4

### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市南区産 2000年8月26日 撮影: 北野 忠



(多比良嘉晃)

# マダラコガシラミズムシ *Haliphus (Liaphlus) sharpi* Wehncke, 1880

コガシラミズムシ科 Haliplidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 3.0~3.5 mm。黄褐色で翅鞘の肩部をのぞく基縁と会合部は広く黒色、各 6 個内外の明瞭な黒斑を装い、会合部中央斑は背部中央前の紋と合着する。体は倒卵形で翅端は三角形に突出する。前胸背板基部両側に短縦条を欠き、後肢基節は板状に発達して腹部第 1~3 節を覆い、後縁に棘を欠く。

成虫・幼虫ともに植食性で、主にシャジクモ類を食するといわれ、成虫は飼育下では動物質のものも食べるという。

## 2. 分布

国内では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では賀茂郡南伊豆町で記録があり、下田市吉佐美、富士宮市沼久保で採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

平野部の水生植物の豊富な池沼、湿地、水田、水田脇の水路、休耕田などに生息する。

## 4. 生息状況

採集例が少なく、詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼の埋め立てや護岸工事(12)、水田及びその周辺水域の圃場整備(15-2)、農薬・肥料などの流入による水質汚染(32)などによって生息環境が失われている。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

賀茂郡南伊豆町では水田の植物の根際から、下田市吉佐美では海岸堆積物の下よりえられた。

## 8. 主な文献

中根猛彦(1985) 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32(2): 61-67

佐藤正孝(1984) 日本産水棲甲虫類の分類学的覚書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4

佐野慎吾(2017) 伊豆半島におけるマダラコガシラミズムシの記録. 月刊むし, (559): 55

渡辺晃平・日鷹一雅(2013) 四国南西部の水田におけるマダラコガシラミズムシ成虫の発生動態. 保全生態学研究, 18: 101-105

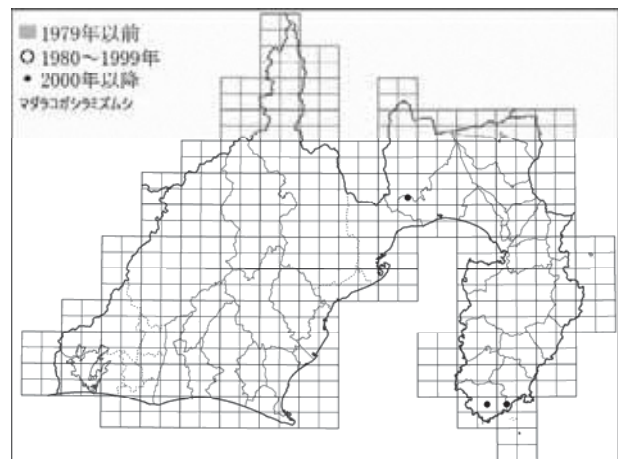
## 9. 標本

富士宮市産、下田市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 Y.Tahira

下田市吉佐美産 2012年5月13日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

# キボシツブゲンゴロウ *Japanolaccophilus niponensis* (Kamiya, 1938)

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 3.0~3.2 mm。幅広い倒卵形で後方へ強く細まり、背面は著しく凸隆する。体は黄赤褐色で強い光沢を有し、上翅は黒褐色で 6 対内外の黄色小斑を装うが、上翅の黄色小斑は種々の程度に変化するという。

清流の流れが緩やかで水深が深いところの水面付近の草、植物の根際、枯れ枝などが溜まっているような場所に見られる。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。国内の分布は広いが、かなり局地的である。県内からの正式な記録はないようであるが、駿東郡清水町柿田川で確認されている（未発表）。

## 3. 生息環境

低山地から山地の清流に生息する。湧水を水源とするとはいえ、平地の柿田川で発見されたことは興味深い。

## 4. 生息状況

県内では柿田川から確認されているだけで、同所における個体数は少ない。県内の詳細な生息状況は不明であるが、県西部地域でも採集されているようで、県内の清流に広く生息している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川工事による河床や岸辺の攪乱 (13) により生息環境が破壊されるおそれがある。

## 6. 保護対策

柿田川は民間団体による熱心な保全活動が行われている。

## 7. 特記事項

本種は採集時に刺激を受けると 20~30 cm ほど跳ねることがある。

## 8. 主な文献

森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231pp.

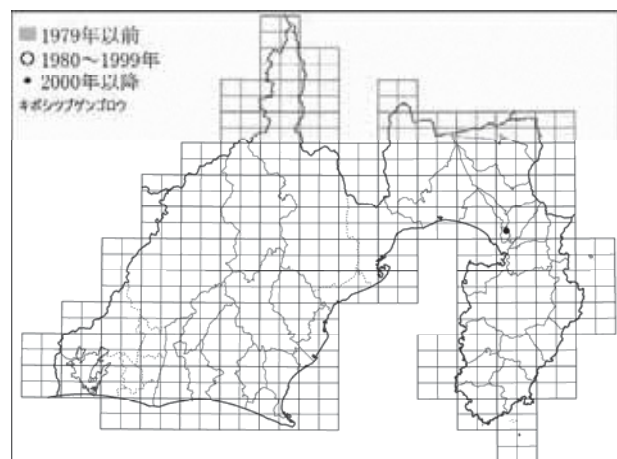
上手雄貴・池田都志也 (2010) 愛知県におけるキボシツブゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース, (170): 30

## 9. 標本

駿東郡清水町産 : 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



清水町柿田川産 2003年10月19日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)



### 1. 種の解説

体長 13~14 mm。背面は黄赤褐色で光沢鈍く、頭部複眼内側と前胸背板中央の小円紋などは黒色、翅鞘は周縁部をのぞき黒色小点斑を密布して暗灰褐色に見え、腹面は黒褐色を呈する。体は卵形で腹背にかなり扁平、背面は全体に明瞭な網状印刻を装う。

幼虫はユスリカ類やガガンボ類の幼虫などを捕食する。

### 2. 分布

国外では済州島、中国に、国内では北海道、本州（中部以北）、伊豆大島、八丈島、九州（宮崎県）に分布する。国内の分布は局地的で、記録がある所は7道県にすぎない。県内では富士市桑崎・大淵、富士宮市猪之頭・北山・村山で記録があり、富士宮市栗倉・山宮で採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

森林内の比較的暗い環境の涸れ沢の落葉が堆積しているような小規模な水域に生息する。このような水域には他の水生生物はほとんど見られない。

### 4. 生息状況

静岡県では富士山山麓部のみから記録されている。涸れ沢に点在する上記のような水溜まりに生息し、生息場所での個体数は多いようである。富士宮市では本種が生息する涸れ沢のすぐ脇まで工場団地が造成され、本種の存続が危惧されたが、涸れ沢自体は残され、個体数はわずかだが最近でも生息していることが確認できた。

### 5. 減少の主要因と脅威

工場団地の造成 (23) や河川改修 (13) の影響で生息環境が破壊・消滅するおそれがある。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

富士市桑崎では直近の調査でも生息が確認された。

### 8. 主な文献

神奈川県立博物館 編 (1995) 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, (8): 1-66

北野 忠 (2000) 静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, (15): 17-24

平井克男 (2009) 富士宮市猪之頭のエゾヒメゲンゴロウ. 駿河の昆虫, (228): 6321

丸山宗利 (1998) 静岡県のゲンゴロウ2種の記録. 月刊むし, (329): 39-40

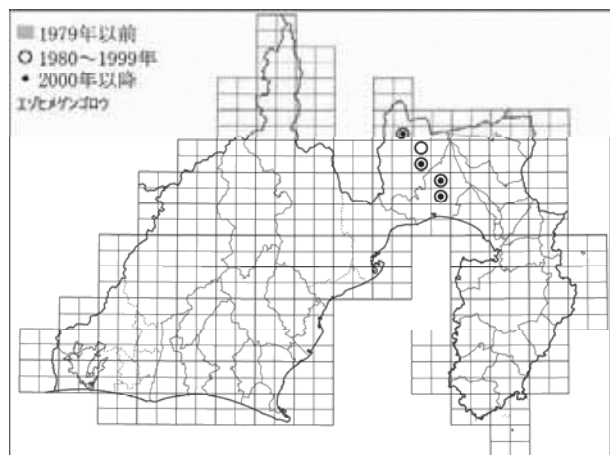
森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231pp.

### 9. 標本

富士宮市産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 H.Ishikawa  
富士宮市産 1986年8月11日 石川 均採集



(多比良嘉晃)

# シワムネマルドロムシ *Georissus kurosawai* Nakane, 1966

マルドロムシ科 Georissidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 1.5~1.6 mm。灰黒色で光沢を欠く。おおむね歪長球形で砂粒様、頭部はイカリ状の溝を有し、前半に顆粒を欠き、前胸背板は大小数対の浅い凹陷を具え、翅鞘は浅い粗大点刻列を有し、間室に顆粒を欠く。

成虫は水辺の砂中からえられ、灯火に飛来する習性がある。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道と本州に分布する。分布は比較的広いが生息地は局地的である。県内では静岡市安倍川上流「大の木」の記録があり、他に駿東郡小山町中島川、静岡市駿河区中島安倍川河口付近で採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

成虫は河川の上・中流域の水辺の砂上などで見出されるが、背面に泥が付着していることが多く、発見は困難である。また、そのような環境に近い場所の灯火に飛来した個体が採集されることが多い。

## 4. 生息状況

県内では採集例が少なく、詳細な生息状況は不明である。静岡市駿河区中島では河川増水後に河川敷の堆積物のシフティングで採集された。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川の改修工事や近代的護岸化など（13）により生息環境そのものが破壊されるおそれがある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種は発見することが困難なだけで、実際には河川の上・中流域に普遍的に生息している可能性がある。

## 8. 主な文献

平井克男（2003）シワムネマルドロムシの記録. 駿河の昆虫, (209): 5828

Nakane, T. (1966) New or little known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, XXIII. *Fragmenta Coleopterologica, Tokyo*, (14): 55-58

佐藤正孝（1981）日本産マルドロムシ科概説. 甲虫ニュース, (53): 1-4

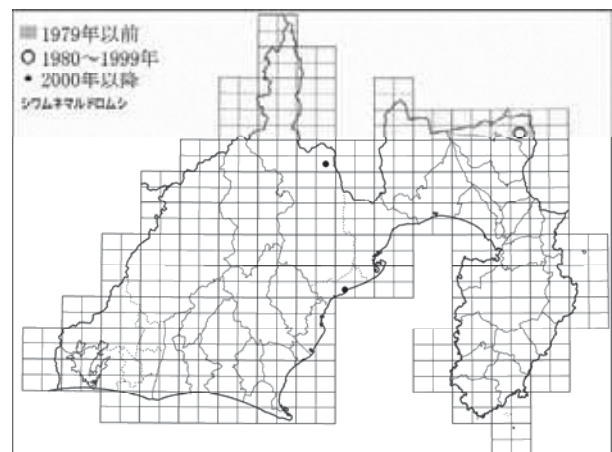
## 9. 標本

静岡市産、小山町産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 Y.Tahira

静岡市駿河区産 2009年10月10日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)

# ヤマトマルドロムシ *Georissus (Neogeorissus) japonicus* M. Satô, 1972

マルドロムシ科 Georissidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 1.4~1.5 mm。灰黒色で光沢を欠く。おおむね歪球形で砂粒様、頭部は小さく、前半は顆粒を装い、後半に顆粒で囲まれた凹陷を具え、前胸背板は 5 凹陷を有し明瞭な顆粒を装い、翅鞘は縦条溝を具え、間室は縦稜条に隆起し密に顆粒列を有する。

県内では海岸後背湿地で見られ、5~10月に採集されている。

## 2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。従来は新潟県から正副基準標本がえられているだけであったが、その後、茨城県と埼玉県で記録されている。県内では浜松市南区松島町で記録があり、他に富士市五貫島富士川河口と浜松市南区中田島町中田島砂丘で採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

池沼に生息し、落葉に付着しているといわれる。県内では海岸後背湿地にできた浅い池に生息しており、岸辺の砂泥上や干上がった池の底部の湿った砂泥上を歩行中の個体が発見される。

## 4. 生息状況

浜松市では複数年にわたり確認されており、個体数も少なくない。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸後背湿地の開発・改修、埋め立てなど(15-1)は本種の生息環境を破壊する直接的な脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

体が微小で砂粒に類似しており、野外で成虫を発見すること自体がきわめて困難であるが、他の場所の同様な環境に生息している可能性はある。

## 8. 主な文献

平井克男(2003) ヤマトマルドロムシの記録. 駿河の昆虫, (201): 5628

岩田朋文・岩田泰幸(2012) 埼玉県におけるマルドロムシ科の追加記録. さやばねニューシリーズ, (6): 18-19

北野 忠(2011) かつては水生昆虫の楽園 遠州浜の後背湿地. 水生昆虫大百科 2011 年度特別展「およげ! ゲンゴロウくん~水辺に生きる虫たち~」展示解説書, pp. 90-92. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

Satô, M. (1972) The georissid beetles of Japan. *The Journal of Nagoya Women's College*, (18): 207-213

佐藤正孝(1981) 日本産マルドロムシ科概説. 甲虫ニュース, (53): 1-4

高野 勉・大桃定洋(2008) 茨城県産甲虫リスト補遺(2). るりぼし, (36): 18-37

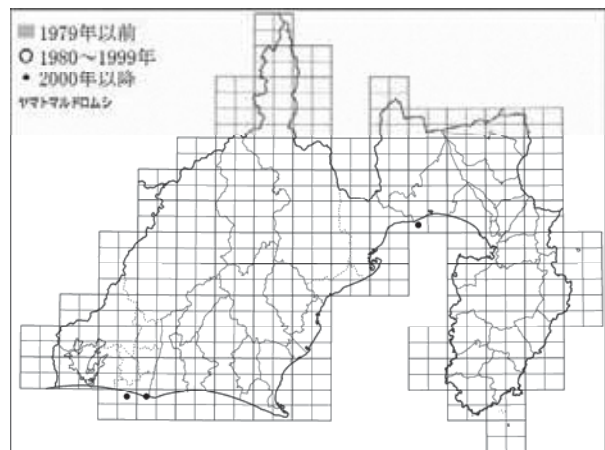
## 9. 標本

浜松市産、富士市産：個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira  
浜松市南区産 2006年6月19日 多比良嘉晃採集





# クロコブセスジダルマガムシ *Neochtebius granulosus* (M. Satô, 1963)

ダルマガムシ科 Hydraenidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 1.45~1.60 mm。黒色で光沢を欠き、背面は大小の顆粒を装う。体は細長いヒョウタン形、触角は短く、第1節は他節より長大、先端部5節は棍棒状の球桿を形成する。

成虫は一年中みられ、春~秋季には岩の表面を活発に歩行し、冬季は岩の隙間の泥土中で、集団で越冬するという。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の関東地方から静岡県にかけての沿岸部と三宅島に分布する。県内では下田市(副基準標本)と伊東市新井の記録がある。

## 3. 生息環境

関東・中部地方の太平洋側の海岸岩礁の潮間帯に生息し、岩礁に生えた海藻類の根際や岩の隙間に見られる。伊東市では満潮時には海面下に完全に水没する岩の根元に堆積した人頭大の石からえられた。

## 4. 生息状況

県内では記録が少なく、詳細な生息状況は不明である。体が微小であることと、生息環境が特殊であることから、本種の発見は一般に困難であるが、少なくとも伊豆半島の自然岩礁海岸には広く生息している可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

岩礁海岸の護岸工事などによる改変(14)は生息環境を喪失させる直接的な脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

千葉県や神奈川県三浦半島の岩礁海岸では広く分布し、個体数も少なくないという。

## 8. 主な文献

浅野 真・川島逸郎・小野広樹(2012) 三浦半島の海浜における昆虫類の記録, 第1報. 神奈川自然誌資料, (33): 65-74

Jäch, M. A. & J. A. Delgado (2014) Revision of the Palearctic species of the genus *Ochthebius* LEACH XXIX. The Asian species of the *O. vandykei* group (Coleoptera: Hydraenidae). *Koleopterologische Rundschau*, 84: 81-100

小野広樹・亀澤 洋・菅谷和希(2012) 千葉県における海岸性甲虫2種の記録. さやばねニューシリーズ, (5): 47-48

Sato, M. (1963) A new intertidal species of the genus *Ochthebius* Leach from Japan (Coleoptera: Hydraenidae). *Transactions of the Shikoku entomological society*, 7: 129-132

多比良嘉晃・松本雅道(2000) 静岡県における海岸性甲虫類. 環境システム研究, (7): 39-71

## 9. 標本

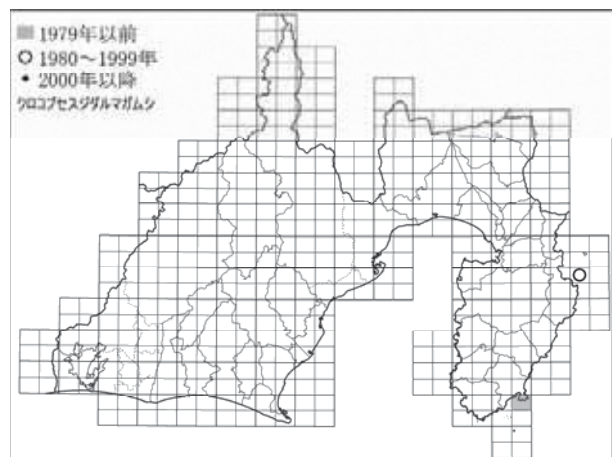
伊東市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y. Tahira

伊東市新井産 1999年9月19日 多比良嘉晃採集



# ダイコクコガネ *Copris ochus* (Motschulsky, 1860)

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abd)変更コード 16

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 18~28 mm。黒色でやや光沢があり、体下面は腹部をのぞき橙褐色の毛を密生する。体は長円形で腹背に強く肥厚し、頭部は大きく扇形に広がり、オスは中央に後方に湾曲した1本の長角を具え、メスでは中央が隆まり横弧状の隆起線を有しその両端に小突起を具える。前胸背板にはオスでは広く二叉に分かれた強大な突起を有しその両側にも小突起を具え、メスは中央前方に明瞭な横弧状隆起線が認められる。

成虫は5~10月に出現、放牧場の新鮮な牛馬などの糞に集まる。夜間よく灯火に飛来する。

## 2. 分布

国外では済州島、朝鮮半島、中国、ロシアに、国内では北海道、本州、佐渡島、伊豆大島、三宅島、式根島、九州、壱岐、五島列島、口永良部島、屋久島に分布する。県内では富士宮市朝霧高原の古い記録があり、1980年代後半の同所での採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

山地・高原の放牧地に生息する。また、シカ糞に依存し、林内に生息する個体群が存在するようである。

## 4. 生息状況

県内からは富士宮市朝霧高原における記録と未発表の採集例があり、近年の情報として朝霧高原産の標本が存在するが、詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

放牧地及びその周辺の環境が著しく悪化したとは考えられないにもかかわらず、一部地域をのぞき全国的に個体数が減少している。飼料への添加物や寄生虫駆除薬などの投与により、糞の質が変化した(71)ためではないかと考えられている。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

インターネット上のオークションでは「静岡県産 2016年採集品」という本種の出品があった。

## 8. 主な文献

川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志(2005)日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群. 六本脚, 東京, 189 pp.

田村正人(1962)富士農場およびその付近の昆虫目録. 東京農業大学短期大学農業科・東京農業大学日本植物園研究所, 31 pp.

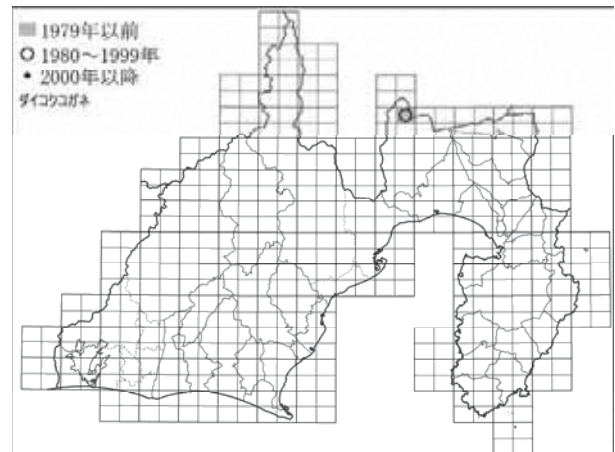
## 9. 標本

富士宮市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(多比良嘉晃)



富士宮市産 2013年9月6日 水田啓之採集



# オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis, 1887

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 22~32 mm。黒褐色で多少とも緑銅~紫銅色の光沢を帯び、翅鞘はしばしば赤褐色を呈する。頭部は小さく両側は板状に隆起し、前胸背板中央に 2 縦隆起条を具え、オスでは稜状に発達、翅鞘背面はほぼ平坦。

成虫は 7~8 月頃出現し、大木の樹洞の内外に見られ、幼虫も樹洞内の腐植質中に生活する。成虫は特有の強い芳香を有する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では本州、四国、九州、屋久島に分布する。県内では静岡市葵区田代大井川上流域、静岡市岩崎県民の森、榛原郡川根本町蕎麦粒山、浜松市天竜区水窪町麻布山・山住山で記録があり、他に富士山、静岡市葵区田代東俣で採集例がある (未発表)。

## 3. 生息環境

大木が存在する自然度の高い森林に生息する。幼虫はミズナラ、カエデ類、スギなどの大木の樹洞内の腐植質に発生するので、それらの大木が存在する環境が必要不可欠である。

## 4. 生息状況

県内の山地森林に広く生息していると考えられるが、詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

過去の森林伐採 (11)、ダム建設 (25)、林道の敷設 (24) などによって一部の生息環境が失われた。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

林道上に落ちている個体を拾うことがある。

## 8. 主な文献

原木直美 (1981) 蕎麦粒山のオオチャイロハナムグリ. 駿河の昆虫, (115): 3399

平井克男 (2017) オオチャイロハナムグリの大井川上流域の記録. 駿河の昆虫, (258): 7078

乙部 宏・城殿 浩 (2000) 静岡県西部の甲虫類の記録若干. 駿河の昆虫, (189): 5310

坪井俊久 (1979) 水窪町山住山の甲虫 2 題. 駿河の昆虫, (104): 3092

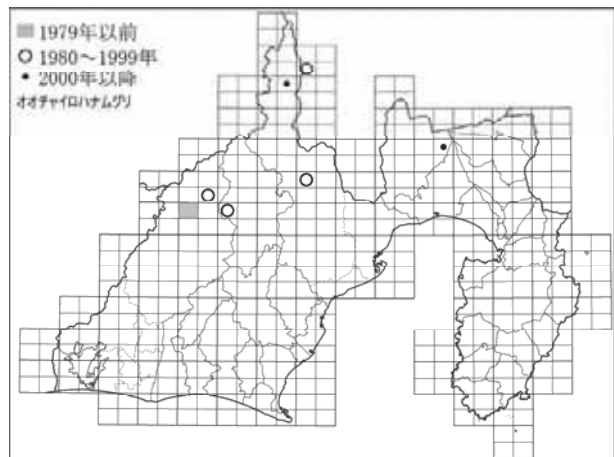
渡辺一雄 (1984) 県民の森の昆虫相. 遠州の自然, (7): 3-28

## 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 1980年8月10日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃)



# アシナガミゾドロムシ *Stenelmis vulgaris* Nomura, 1958

ヒメドロムシ科 Elmidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 2.7~3.2 mm。暗灰茶褐色で光沢はやや鈍く、肢の跗節などは黄褐色、背面は黄褐色毛をやや密生する。体は細長く、翅鞘は両側おおむね平行、頭部は前胸背板前縁とほぼ同幅、両側の複眼は大きく丸く突出し、触角は短く頭幅とほぼ等長、前胸背板は背面に 3 凹陷と両側にくびれがあり、翅鞘は前胸背板より少し幅広い。

成虫は夜間に生息地付近の灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では Tahara-mura (旧磐田郡田原村、現磐田市及び袋井市) (副基準標本) と浜松市浜北区於呂の記録がある。

## 3. 生息環境

比較的大きな河川の中・下流域に生息し、水中に沈んだ流木や竹に付着しているといわれる。

## 4. 生息状況

県内では 2 例の記録しかなく、詳細な生息状況は不明である。浜北市では付近を流れる天竜川に生息していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

周囲からの農薬・肥料や生活排水などの流入による水質悪化 (31、32)、河川改修や護岸整備 (13) の影響で生息環境が減少するおそれがある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種によく似たミヤモトアシナガミゾドロムシ *Stenelmis miyamotoi* Nomura & Nakane, 1958 は本種の同物異名とされた。

## 8. 主な文献

Hayashi, M. & H. Yoshitomi (2014) Taxonomic treatments of two Japanese elmid beetles, *Stenelmis vulgaris* Nomura and *Leptelmis gracilis* Sharp (Coleoptera: Elmidae), with descriptions of their larvae. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 20: 235-244

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘 (2008) 第 5 章 1 項 6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県戦略課題研究 「快適空間『佐鳴湖』の創造」 研究報告書, pp. 470-523. 静岡県産業部振興局研究調整室, 静岡.

Nomura, S. (1958) Drei neue *Stenelmis*-Arten aus Japan. (Coleoptera, Elmidae). *The entomological review of Japan*, 9: 42-45

## 9. 標本

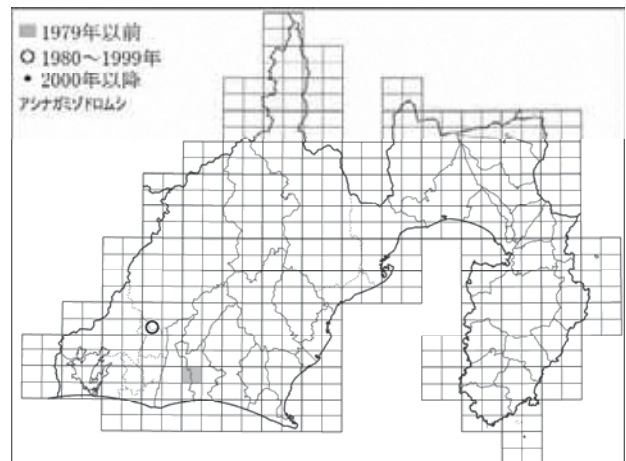
浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 T.Kato

浜松市浜北区産 1999年6月16日 加藤 徹採集



# アオバヒメコメツキモドキ *Anadastus praetermissus* (Janson, 1873)

コメツキモドキ科 Languriidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 4.3~5.7 mm。橙黄色で複眼及び基部 3~4 節をのぞく触角は黒色、小楯板及び翅鞘は藍青色、頭部背面後方、基部をのぞく腹部腹面 (時に腹部全体)、肢の附節などは多少とも暗色を帯びる。体は細長く両側はおおむね平行、触角は 11 節からなり末端 3 節は広がって球桿を形成、前胸背板は長幅ほぼ等しく、中央前で最大幅となり、基部に向かってやや狭まる。

コメツキモドキ科の種はいずれも植食性で、幼虫は多くは生きた植物の茎中に食入するが、本種の生態に関してはほとんど判明していない。

## 2. 分布

国外では比較的最近に韓国から記録され、国内では本州に分布し、福島県、神奈川県、長野県、岐阜県、三重県、兵庫県 (基準産地) などで記録がある。県内では御殿場市印野、裾野市須山、富士宮市根原で採集例がある (未発表)。

## 3. 生息環境

草原的環境に生息する。

## 4. 生息状況

県内では富士山周辺と愛鷹山周辺の草原的環境において採集されているが、詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

草原の植生遷移の進行 (54) や開発 (23) などによって、生息環境が縮小・消滅するおそれがある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

三重県鈴鹿市では湯水した池の中に生えたイネ科植物のスイーピングによって採集されたという。

## 8. 主な文献

Boo, H. J. & H. Park (2014) Taxonomy of Languriinae Crotch (Coleoptera: Cucujoidea: Erotylidae) in Korea. *Korean Journal of Applied Entomology*, 53(4): 441-448

平野幸彦・荻部治紀・高桑正敏・田尾美野留 (1995) 甲虫類. 神奈川県レッドデータ生物調査団 編, 神奈川県立博物館調査研究報告 (自然科学) 第 7 号 - 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 -, pp. 212-254. 神奈川県植物誌調査会, 小田原.

生川展行・市橋 甫・横関秀行・天春明吉・稲垣政志・前川和則・村木武則・官能健次・市川 太・久保田耕平・稲垣順子 (2008) 第 7 節 鈴鹿市のコウチュウ目. 鈴鹿市の自然-鈴鹿市自然環境調査報告書-, pp. 525-691. 鈴鹿市.

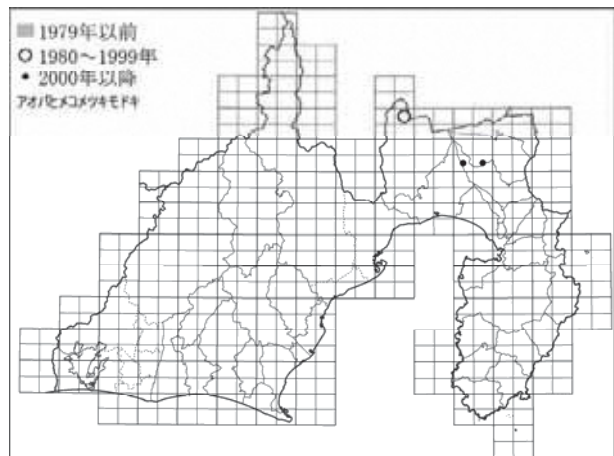
## 9. 標本

富士宮市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira  
富士宮市根原産 1995年7月9日 多比良嘉晃採集



## ナカイケミヒメテントウ

*Scymnus (Neoplus) nakaikemensis* Sasaji & Kishimoto, 1996

テントウムシ科 Coccinellidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長 1.7~2.0 mm。体はおおむね半長球形、橙黄色で、前胸背板基部中央の小紋及び翅鞘基半中央の逆三角形紋と腹面の後胸腹板は黒色。体表は白色の軟微毛を密に装い、翅鞘では縦に少し波曲して配列される。

### 2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。栃木県、群馬県、茨城県、埼玉県、神奈川県、福井県（基準産地）から記録があり、県内では富士市浮島ヶ原の採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

自然度の高い湿原のヨシに生息している。ヨシに特異的に寄生するアブラムシ類などを捕食しているものと考えられるが、生態はわかっていない。

### 4. 生息状況

県内の採集例が1例だけで、詳細な生息状況は不明である。富士市浮島ヶ原では、ヨシ原のヨシをスウィーピングして採集されたが、その後の数回の調査では追加個体はえられず、個体数はきわめて少ないものと判断される。

### 5. 減少の主要因と脅威

富士市浮島ヶ原では、湿地が埋め立てられて畑や水田、工業用地などに改変されており（15-1）、本種の生息環境であるヨシ原が消滅しつつある。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

浮島ヶ原の一角に「浮島ヶ原自然公園」が整備され、きわめて小規模であるが、ヨシ原が保全されている。

### 8. 主な文献

大桃定洋・高橋敬一・西山 明（2011）霞ヶ浦湖畔に残ったヨシ原：稲敷市浮島の甲虫類。茨城県自然博物館研究報告，(14)：75-92

亀澤 洋（2010）埼玉県東部からナカイケミヒメテントウを記録。寄せ蛾記，(140)：19

佐々治寛之・岸本 修（1996）福井県敦賀市中池見湿地の昆虫相とその自然環境保全の提言。付テントウムシ科昆虫新種記載と生活史。福井大学積雪研究室紀要「日本海地域の自然と環境」，(3)：15-36

佐々治寛之・大川秀雄（1998）ナカイケミヒメテントウが栃木県渡良瀬遊水池に分布。月刊むし，(330)：38

松原 豊（1999）神奈川県未記録のナカイケミヒメテントウとツガヒメテントウの採集例。神奈川虫報，(127)：48-49

### 9. 標本

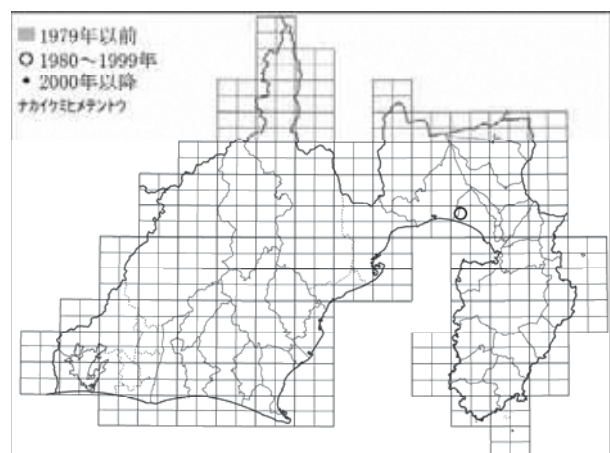
富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃）



©2019 Y.Tahira

富士市柏原産 1999年5月3日 多比良嘉晃採集





# ケブカマルクビカミキリ *Atimia okayamensis* Hayashi, 1972

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 5.5~8.5 mm。黒色で光沢を有し、体表は灰黄色の微毛を密生、翅鞘では 10~20 程度の無毛の小円紋を多少とも不規則に散布し、しばしば縦に連絡することがある。

成虫は 3 月下旬~5 月頃と 9 月下旬~11 月上旬に平地から低山地に出現し、ネズミサシの生木に見られる。幼虫もネズミサシの衰弱木や枯れ木を食害する。

## 2. 分布

日本固有種で、関東地方以西の本州に分布する。県内では浜松市浜北区静岡県立森林公園で 2 例の記録がある。

## 3. 生息環境

ネズミサシが自生するやせた丘陵地や低山地に生息する。

## 4. 生息状況

浜松市浜北区の静岡県立森林公園では、個体数は少ないながら、近年も生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

静岡県立森林公園では、陰樹の成長に伴って林内が暗い環境になると陽樹であるネズミサシが衰退するおそれがある (54)。本種は全発育段階においてネズミサシに依存しているので、この植物の消滅は直ちに種の存続に関わってくる。

## 6. 保護対策

浜松市浜北区の生息地は自然公園として管理されている。

## 7. 特記事項

湖西連峰の愛知県側や富士山の山梨県側で採集記録があり、これらの地域の静岡県側にも生息している可能性が高いが、未調査である。

## 8. 主な文献

市川恭治 (1981) ケブカマルクビカミキリを静岡県内で採集. 月刊むし, (128): 31

市川恭治・奥田宜生・草間慶一 (1988) 静岡県のカミキリムシ. 静岡の甲虫, 6(2): 3-81

大木 裕 (2007) ケブカマルクビカミキリの河口湖町における記録について. 甲虫ニュース, (157): 20

白井勝巳 (1980) 愛知県豊橋市でケブカマルクビカミキリを採集. 月刊むし, (113): 39

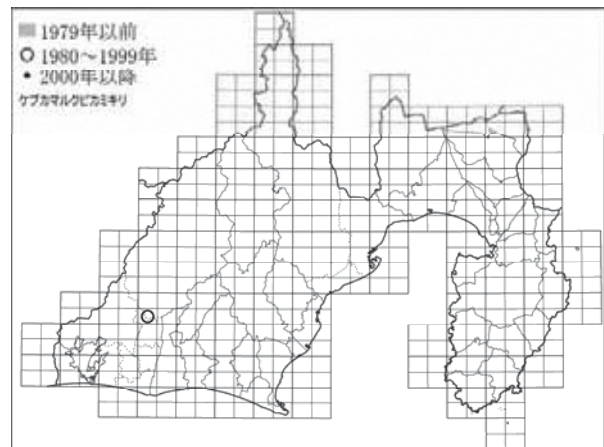
## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



浜松市浜北区産 1981年4月12日 多比良嘉晃採集



## ミドリヒメスギカミキリ

*Palaeocallidium (Palaeocallidium) kuratai* Yokoyama, 1972

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長 8.5~13.0 mm。暗褐色で背面は緑色の金属光沢を帯び、肢は多少とも明色、体はやや細長く腹背にかなり扁平、翅鞘の厚さが薄いので少し脆弱な感がある。

成虫は 7~8 月頃に亜高山帯下部の針葉樹林に現れ、太く樹皮の厚い天然カラマツ生木の樹幹や伐採木上に見られる。幼虫もカラマツの樹皮を食害する。

### 2. 分布

日本固有種で、本州中部（栃木県、群馬県、長野県、山梨県、静岡県）にのみ分布する。県内では静岡市葵区田代の二軒小屋（基準産地）周辺、東俣、広河原などで複数の記録がある。

### 3. 生息環境

亜高山帯のカラマツの大木が生育する原生的な針葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

かつては二軒小屋周辺の貯木場や大井川上流東俣のカラマツ大木の樹幹などに相当数が見られたが、近年の記録はなく、現在の生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息地の大井川上流部では、過去の広域伐採（11）に伴う森林の乾燥化などの環境の変化によって、本種を含む種々の昆虫が減少しているようである。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

最近、富士山の山梨県側から複数個体が記録され、静岡県側にも生息している可能性がある。

### 8. 主な文献

足立一夫（1974）1974年南アルプスカミキリ採り或る記．北九州の昆虫，20(3)：85-92

市川恭治・奥田宜生・草間慶一（1988）静岡県のカミキリムシ．静岡の甲虫，6(2)：3-81

久保田雅久・日下部良康・苅部治紀（2016）富士山でのミドリヒメスギカミキリの記録．月刊むし，(550)：19-20

草間慶一（1975）大井川上流域のカミキリ．静岡県自然保護協会 編，南アルプス・奥大井地域学術調査報告書，pp. 102-133. 同協会，静岡．

草間慶一・多比良嘉晃（1979）大井川上流域のカミキリ 第2報．東海自然史，(3)：62-71

Yokoyama, H. (1972) A new species of genus *Palaeocallidium* from C. Japan (Col., Cerambycidae). *The Entomological Review of Japan*, 24(1/2): 11-13, pl. 4

### 9. 標本

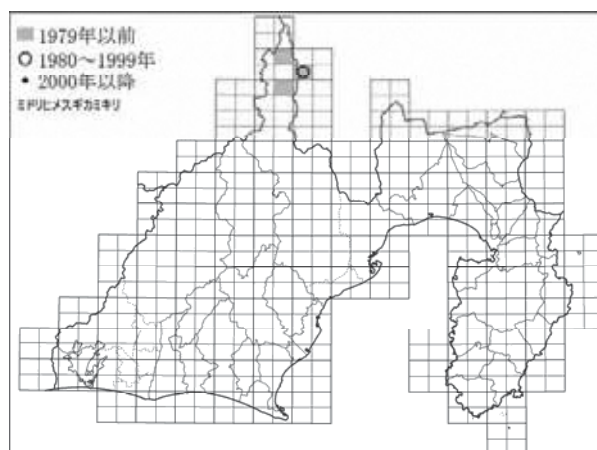
静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃）



©2019 Y.Tahira

静岡市葵区産 1980年7月23日 多比良嘉晃採集



# ヒメビロウドカミキリ *Acalolepta degener* (Bates, 1873)

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 8.5~12 mm。全体灰赤褐色の微毛で密に覆われてビロウド様を呈し、翅鞘では灰白色微毛による不定形・雲状紋を混じ、第3節以下の各節基半も灰白色微毛を密に装う。触角は細長く、オスは体長の約2.0倍、メスでは約1.3倍。

成虫は5~8月に出現し、オトコヨモギやヨモギの枯葉の中や茎上に見られ、葉脈や茎などを後食する。幼虫もオトコヨモギ生体の茎や根を穿孔・食害する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシアに、国内では本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では浜松市浜北区と天竜川下流域の記録があり、駿東郡小山町、富士宮市朝霧高原の採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

高原や丘陵地、大河川、時に海岸などのオトコヨモギやヨモギが安定的に群生する草原的環境に生息する。

## 4. 生息状況

県内では採集例が少ないので、詳細な生息状況は不明である。天竜川下流域では幼虫も確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

山野の開発(23)、河川改修工事(13)などによる草原・半草原環境の消失・面積縮小や、侵略的外来植物のシナダレスズメガヤの分布拡大に伴う生息環境の変化(54)などが大きな脅威となる。また、愛好家の間で人気が高いため、コレクターの強い採集圧(41)を受けるおそれがあり、実際にいくつかの産地で相当数が採集されている。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

近年、多摩川流域に生息することが報告されたが、やはり多くの採集者が現地を訪れているようである。

## 8. 主な文献

長谷川道明(2010)天竜川下流部におけるヒメビロウドカミキリの分布. 豊橋市自然史博物館研究報告, (20): 7-10

市川恭治・奥田宜生・草間慶一(1988)静岡県のカミキリムシ. 静岡の甲虫, 8(2): 3-81

中里俊英(2005)東京都府中市多摩川のヒメビロウドカミキリ. 月刊むし, (413): 45-46

新里達也・武田雅志(2010)多摩川流域におけるヒメビロウドカミキリ個体群の分布と保全. とうきゅう環境浄化財団研究助成成果報告書(一般研究), 31: 1-25

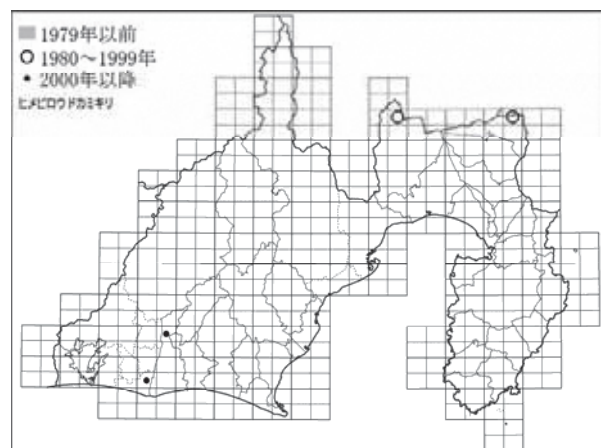
## 9. 標本

浜松市産: 豊橋市自然史博物館所蔵



©2019 H. Ishikawa

駿東郡小山町産 1986年7月11日 石川 均採集



(多比良嘉晃)



# トゲムネアラゲカミキリ *Aragea mizunoi* Hayashi, 1953

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-a)変更コード9

[2004年版カテゴリー 部会注目種(N-III) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 4.7~7.4 mm。黒色で体表は黄白色微毛を密生し、別に直立長毛を装い、前胸背板正中中部後半と小楯板及び翅鞘会合部は黄白色微毛が特に密生して縦条があるように見える。体はおおむね短円筒形、触角はやや長く雌雄ともに体長を多少とも越え、前胸背板両側には三角形の鋭い小突起を具える。

成虫は6月末~7月末頃に出現、サワグルミの生葉に集まり葉脈あるいは枯枝の樹皮を後食すると言われる。幼虫はサワグルミの枯枝の樹皮内部を穿孔・食害する。

## 2. 分布

1属1種の日本固有種で、本州、四国に分布する。分布はきわめて局地的で、本県の伊豆半島のほか、群馬県藤原湖付近、山梨県北杜市須玉町、岐阜県高山市(旧上宝村)、石川県白山、奈良県天川村、徳島県木沢村、高知県など数ヶ所の産地が知られているに過ぎない。県内では大井川筋でも未発表の採集例があるという。

## 3. 生息環境

標高700~1,500 mの山地に生息する。食樹のサワグルミは日本各地の谷筋などにふつうに生えているにもかかわらず、全国的に採集例がきわめて少ないことは説明しがたい。

## 4. 生息状況

県内では故草間慶一博士が伊豆天城山水生地にて採集された原記載に次ぐ2例目の記録と、伊豆半島における2・3例の記録があるとされ、大井川筋でも採集例があるというが、詳細な生息状況は不明である。伊豆半島天城山周辺は多数の観光客が訪れるようになったものの、比較的良好な森林環境が残されており、現在も本種が生息している可能性はある。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路の敷設(24)や森林の伐採(11)などによる生息環境の変化が脅威となりうる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

サワグルミ生木から出ている高所の枯れ枝のスウィーピングなどにより採集できるものと考えられる。

## 8. 主な文献

- 江崎功二郎・井村正行(1999) トゲムネアラゲカミキリの生態に関する一知見. 甲虫ニュース, (125): 11  
草間慶一(1974) 天城山およびその近傍のカミキリ. 東海自然誌, (1): 23-59  
滑田保生(1987) 四国におけるトゲムネアラゲカミキリの追加記録. 月刊むし, (202): 2-3  
露木繁雄(2007) 山梨県でトゲムネアラゲカミキリを採集. 月刊むし, (440): 44

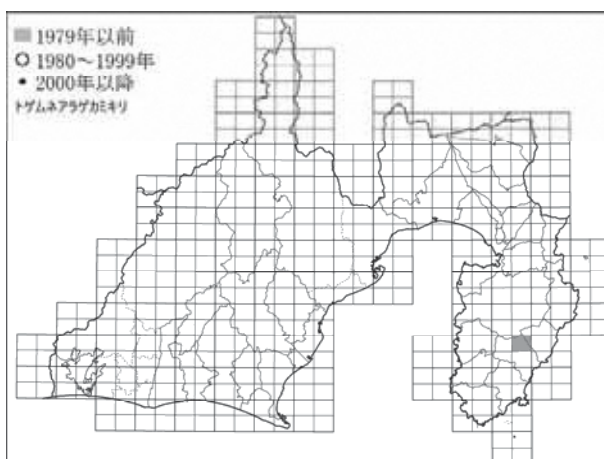
## 9. 標本

伊豆市湯ヶ島産: 神奈川県立生命の星・地球博物館(収蔵予定)

(多比良嘉晃)



©2019 M.Hasegawa  
岐阜県高山市産 1998年 撮影: 長谷川道明



## セラネクイハムシ *Donacia akiyamai* Komiya, 2001

(=2004年版のカワホネネクイハムシ)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abcd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

### 1. 種の解説

体長 5.8~8.4 mm。体は黒色で背面は緑銅~青銅色の金属光沢を帯びる。腹面は銀白色の微毛を密生し光沢を欠く。触角各環節基半や肢は赤褐色。触角第3節は第2節より明らかに長い。上翅端は幅広く切断状。後肢腿節は肥大し下面端方に1鋭棘と2~3小歯を具える。雌雄とも腹部第1節(第3腹節腹板)に1対の小隆起を欠く。

成虫は6~10月頃に出現し、コウホネ類の葉上において葉を食害する。幼虫もコウホネ類の根を食べて成長する。

### 2. 分布

日本固有種で、三重県、兵庫県、広島県(基準産地)に分布する。県内では磐田市鶴ヶ池の記録がある。

### 3. 生息環境

コウホネ類(コウホネ、ヒメコウホネ、オグラコウホネなど)が生育する池沼に生息する。

### 4. 生息状況

県内では磐田市の1ヶ所の池にのみ生息しており、コウホネ葉上に見られる。生息地では個体数は少ない。県内ではコウホネ類が群生している池沼が少なく、かつ、十分な調査は行われていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の生息地では成虫・幼虫ともコウホネに依存しているため、植生の遷移などに伴ってコウホネがなくなると(54)、直ちに種の絶滅につながるおそれがある。

### 6. 保護対策

生息地の池は私有地で、許可なく採集することはできない。

### 7. 特記事項

静岡県レッドデータブック(2004)で掲載したカワホネネクイハムシ *Donacia (Donacia) ozensis* Nakane, 1954は、その種の解説で示唆したとおり、本種の誤同定であった。

### 8. 主な文献

乙部 宏(2006)三重県でセラネクイハムシを発見. 月刊むし, (430): 4-5

Komiya, Y. (2001) Description of a new *Donacia* species (Coleoptera, Chrysomelidae, Donaciinae) from west Japan. *Elytra, Tokyo*, 29: 41-44

林 成多(2005)日本産ネクイハムシ図鑑—全種の解説—. 月刊むし, (408): 2-18

林 成多・桂孝次郎(2001)兵庫県下でセラネクイハムシを発見. 月刊むし, (370): 3-4

平井克男(2014)セラネクイハムシの調査記録. 駿河の昆虫, (246): 6769

### 9. 標本

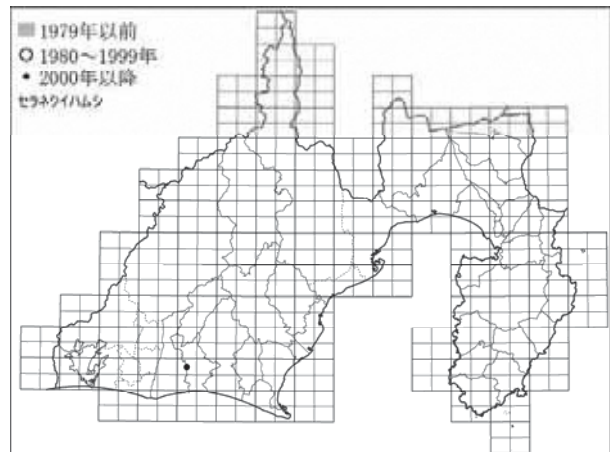
磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

磐田市鶴ヶ池産 2000年7月10日 多比良嘉晃採集



# ツヤネクイハムシ *Donacia (Donaciomima) nitidior* (Nakane, 1963)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 5.0~6.5 mm。体は黒色で表面は金銅色の光沢を有し、第 1 節をのぞく触角各環節の基部、肢の腿節基部及び脛・跗節などは赤褐色を呈する。前胸背板は粗い点刻を装い、一部皺状、翅鞘は明瞭な点刻列を具え、両側は多少とも横皺を装い、各翅端は少し斜めに裁断状を呈する。雌雄ともに腹部第 1 節 (第 3 腹節腹板) に 1 対の小隆起を欠く。

成虫は 3~5 月に出現し、スゲ類の花に集まり花粉などを食する。幼虫は水中 (土中) にあって同じくスゲ類の根を食害するものと思われる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。県内では浜松市浜北区根堅の記録があり、磐田市下野部、浜松市浜北区尾野・四大地、湖西市大知波などで採集例がある (未発表)。

## 3. 生息環境

スゲ類が生育する湿地や放棄水田に生息する。

## 4. 生息状況

県内では西部の湿地に生息しており、カサスゲやアゼスゲなどスゲ類の花や葉上に見られる。生息地での個体数は少なくないところもあった。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地の多くは放棄された水田や現在も使用している水田脇の小湿地などであり、このような湿地は開発 (15-1) や土地の改変 (23) などによって失われるおそれが大きい。実際に、磐田市下野部の個体数が多かった生息地は埋め立てられてしまった。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

体色が青藍色を呈する個体もいる。

## 8. 主な文献

長谷川道明・吉富博之 (1998) 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48

高橋和弘 (1988) ネクイハムシ類 1987 年の採集記録. *Donaciist*, (2): 22

野尻湖昆虫研究グループ (1985) アトラス・日本のネクイハムシ-化石同定の手引き. 同グループ, 大阪, 182 pp.

林 成多 (2005) 日本産ネクイハムシ図鑑-全種の解説-. 月刊むし, (408): 2-18

## 9. 標本

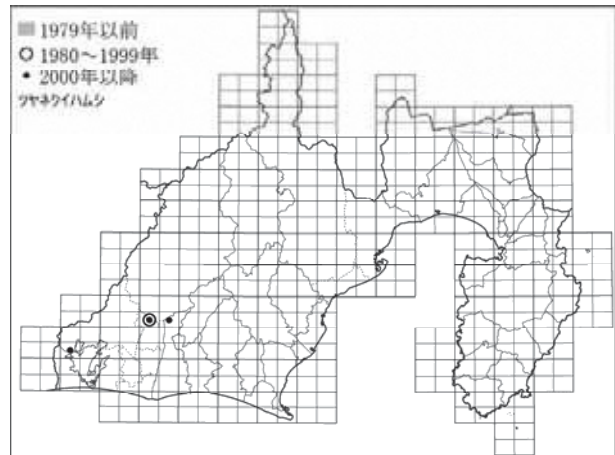
浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

湖西市大知波産 2000年4月17日 多比良嘉晃採集





# キヌツヤミズクサハムシ *Plateumaris (Euplateumaris) sericea* (Linnaeus, 1768)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-bd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 6.5~8.8 mm。黒色で表面は銅・青藍・銅赤色などの金属光沢を有する。前胸背板は横皺を密に装い、明瞭な点刻を欠き、上翅は粗大点刻列を具える。上翅会合部間室が反転することでネクイハムシ属 *Donacia* と区別される。

成虫は4~5月に出現し、スゲ類の花に集まり花粉などを食するほか、スゲ類の開花期でないときには他の花にも集まる。幼虫は水中(土中)にあって同じくスゲ類の根を食害するものと思われる。新成虫は秋に出現して、晩秋の11月にも姿が見られる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、サハリン、シベリア、中央アジア、ヨーロッパに広く、国内では北海道、国後島、択捉島、本州、佐渡島、九州に分布する。県内では賀茂郡東伊豆町稲取、富士宮市猪之頭田貫湖・小田貫湿原の記録があり、他に伊豆市上白岩・日向・持越、沼津市西浦足保、静岡市葵区田代木賊で採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

スゲ類が生育する湿地や川沿いの林間などに生息する。

## 4. 生息状況

県内では伊豆と東部から点々と採集例があり、飛び離れて大井川上流部で生息が確認された。一部の生息地では個体数は少なくない。

## 5. 減少の主要因と脅威

道路脇などに位置する小規模な生息地では、周辺環境の悪化や開発行為など(23)によって生息地が失われる可能性がある。

## 6. 保護対策

一部の生息地は県の天然記念物に指定されるなどして保全されている。

## 7. 特記事項

広い分布域をもつ種であるが、現在までのところ西部での採集例はない。

## 8. 主な文献

長谷川道明・吉富博之(1998) 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48

林 成多(2005) 日本産ネクイハムシ図鑑—全種の解説—. 月刊むし, (408): 2-18

松原 豊(1989) 1988年関東地方で採集したネクイハムシ類. *Donaciist*, (3): 9-10

多比良嘉晃・松本雅道(1993) 小田貫湿原で採集した甲虫類. 静岡の甲虫, 10(2): 25-27

高桑正敏・高橋和弘(1987) ネクイハムシ類 1986年の採集、観察記録. *Donaciist*, (1): 24-26

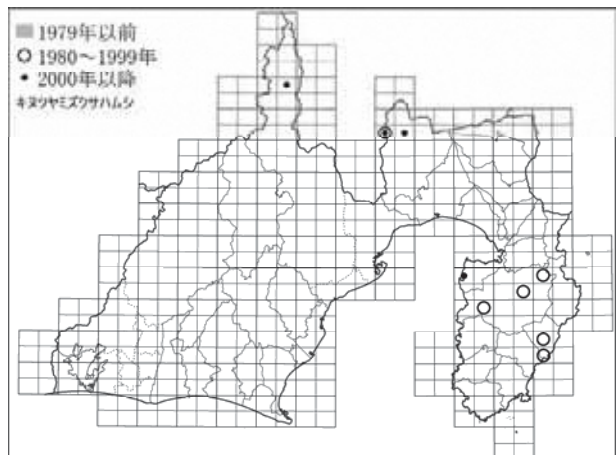
## 9. 標本

伊豆市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



伊豆市産 1996年5月15日 石川 均採集



ババスゲヒメゾウムシ *Limnobaris babai* Chūjo & Morimoto, 1959

ゾウムシ科 Curculionidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-bd) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

体長 3.8~4.2 mm。黒色で強い光沢を有し、背面に白色鱗片を散生する。体はおおむね長楕円形、口吻は細長く少し湾曲する。翅鞘は点刻を含む 10 条の縦条溝を具える。オスの前肢脛節内縁は中央前で鋭く三角形に突出する。

成虫は 4~5 月に出現、スゲ類のスウィーピングによって採集される。成虫・幼虫ともにスゲ類の茎葉を食害する。

2. 分布

日本固有種で、本州と九州に局地的に分布する。県内では賀茂郡東伊豆町入谷で記録があり、他に賀茂郡東伊豆町白田、駿東郡小山町竹之下、富士宮市猪之頭、浜松市浜北区尾野、浜松市北区引佐町で採集例がある（未発表）。

3. 生息環境

平地から丘陵地のスゲ類が生育する湿地に生息する。

4. 生息状況

県内では東部と西部で採集例があるが、いずれの生息地も生息密度は低い。

5. 減少の主要因と脅威

生息地及び生息地周辺の開発や改変 (23)、植生遷移の進行 (54)、湿地の乾燥化 (54) などによって生息環境が失われるおそれがある。なお、浜松市北区引佐町の生息地は大規模道路工事 (24) によって破壊された。

6. 保護対策

東伊豆町の生息地の一つは静岡県の天然記念物に指定されており、他に二つの生息地も自然公園内にあって一応保全が図られている。

7. 特記事項

本種と同様の環境に生息する近縁種にスゲヒメゾウムシ *Limnobaris albosparsa* Reitter, 1910 とスゲノハラジロヒメゾウムシ *Limnobaris japonica* Yoshihara & Morimoto, 1994 が知られているが、今のところ県内における両種の生息は確認されていない。

8. 主な文献

高桑正敏・高橋和弘 (1986) ババスゲヒメゾウムシの伊豆と神奈川県下の記録. 甲虫ニュース, (74): 7  
Yoshihara, K. (2016) The Insects of Japan, Vol. 6. Coleoptera, Curculionidae, Baridinae. Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka, 171 pp.

9. 標本

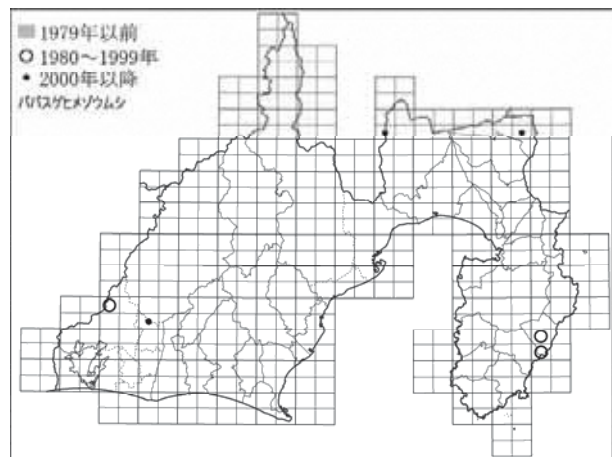
東伊豆町産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

東伊豆町白田産 1998年5月20日 多比良嘉晃採集



## タカネキマダラセセリ

*Carterocephalus palaemon akaishianus* Fujioka, 1970

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 情報不足 (DD) (要件-abcd) 変更コード 4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) ]

### 1. 種の解説

開張およそ 30 mm。翅の表は黒褐色の地に黄褐色の紋が並び、裏面は明るく後翅の黄色い紋が目立つ。幼虫の食餌植物はノガリヤス類 (イネ科)。幼虫で越冬。県内における幼生期の観察例はない。北アルプスでは個体数が多く、年 1 回、6 月末～7 月上旬にかけて羽化する。各種草本の花に集まり、飛翔は素早い。

### 2. 分布

種 *palaemon* は、国外ではヨーロッパからシベリア北部にかけてのユーラシア大陸及び北米北部に分布し、国内では北アルプスと南アルプスに局地的に分布している。県内では南アルプスに分布する。静岡県産は南アルプス固有の亜種である。

### 3. 生息環境

県内で採集された個体の生息地は標高およそ 2,600 m で、大井川最上流部の源頭に生じたノガリヤス類と蜜源となる花が豊富な明るい草付である。

### 4. 生息状況

県内では 2002 年 7 月 20 日、大井川上流三国沢の 1♂ が唯一の記録である。

### 5. 減少の主要因と脅威

一度記録されただけなので、減少・脅威を検討する情報はない (99)。

### 6. 保護対策

南アルプス亜種は、2018 年 2 月 15 日に国内希少野生動植物種に追加指定され、捕獲・採取、譲渡などが原則禁止された。

### 7. 特記事項

本種の習性や生息地の状況からみて土着している可能性が高い。今後十分な調査が必要である。

### 8. 主な文献

岩阪佳和 (2002) 南アルプス (赤石山脈) 大井川最上流部 (静岡県側) でタカネキマダラセセリを採集。房総の昆虫, (28) : 7

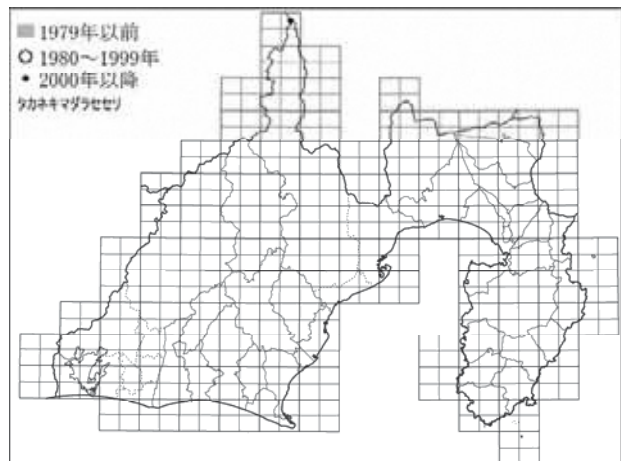
### 9. 標本

静岡県産：個人所蔵 (公的機関所蔵なし)

(白井和伸・諏訪哲夫)



山梨県産♀表面 1982年7月2日 諏訪哲夫採集





## ウミコオロギ (大崩海岸の個体群) *Caconemobius sazanami* (Furukawa, 1970)

(=ナギサスズ)

コオロギ科 Gryllidae

静岡県カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) (要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長オス 8.0~11.5 mm、メス 9.0~13.5 mm。体色は黒~黒褐色で、体背面には斑紋はない。生時は腹面が普通黄緑色だが、死後黄変する。成虫でも翅はなく、細長い脚で岩上を素早く歩き回る。似た種にウスモンウミコオロギ *C. niisatoi* Ishikawa, 2017 があるが、より脚が長く体背面に淡色斑紋をもつことで区別できる。年 1 化で、成虫は 8 月中旬に出現するようになり、12 月上旬まで見られる。

### 2. 分布

国外では韓国に、国内では北海道(含、国後島)、本州、佐渡島、伊豆諸島、対馬、奄美大島に分布する。県内では伊豆半島に広く分布しているが、それ以外では静岡市と焼津市にまたがる大崩海岸で生息が確認されているだけである。

### 3. 生息環境

玉石を敷き詰めた海浜に生息し、県内では海に迫った岩崖地とセットになった海岸に生息する。また、そのような場所ではテトラポッドが設置されても生息可能である。しかし、コンクリート護岸となった場所からは姿を消している。

### 4. 生息状況

大崩海岸においては、生息密度は 2004 年当時に比べ大分低くなっている。

### 5. 減少の主要因と脅威

海岸整備によってコンクリート化したところではほとんど見ることができず(14)、また海浜が波にさらわれ縮小して生息地が狭まっている(55)。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

大崩海岸の生息地は、西は三重県、東は伊豆半島まで分布の空白があり孤立している。

コオロギ科を細分して、本種はヒバリモドキ科 Trigonidiidae とされることがある。

### 8. 主な文献

石川 均 (1986) ウミコオロギの体長についての検討. バッタリギス, (67): 2235-2236

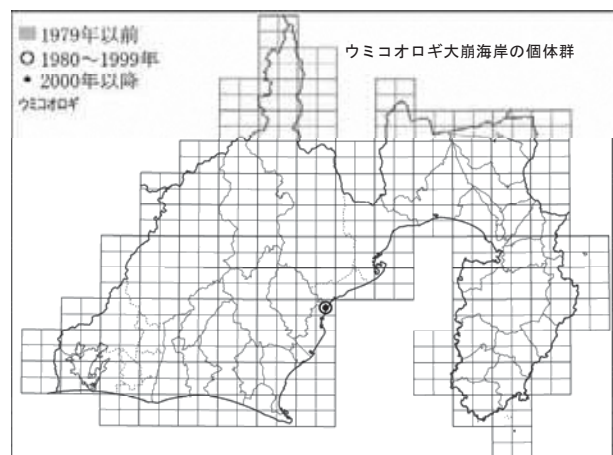
石川 均 (1998) ウミコオロギに関する知見. バッタリギス, (114): 55-58

### 9. 標本

焼津市小浜産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



静岡市駿河区石部 2014年10月24日 石川 均



(石川 均)

# ルリイトトンボ *Enallagma circulatum* Selys, 1883

イトトンボ科 Coenagrionidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更コード5

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 32~38 mm 程度。オスは明るいルリ色の体色、メスは青~緑色の体色に黒斑をもつ中型のイトトンボである。寒冷地の池沼や湖に生息する北方系の種で、成虫は6~9月に出現する。未成熟な個体は水辺を離れて付近の林野へ移動して生活し、成熟すると再び水辺に戻って生殖行動を行う。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシアに、国内では北海道と岐阜県、福井県以北の本州に分布している。北海道では平地の池沼や湖に広く見られるが、本州の生息地はほとんどが山岳地帯に限られる。県内の記録は伊豆市湯ヶ島の天城山の八丁池における1例だけである。

## 3. 生息環境

北海道や本州の山岳地帯の生息地は水生植物が繁茂している池沼や湖であり、冷涼な気象条件のもとにある池沼でなければ生息しないと考えられる。

## 4. 生息状況

80年以上前の1930年の記録以外に確認された例はなく、その後にも現地での調査が試みられたことが何度もあるが発見されていない。周辺部にも生息に適した環境の池沼がないため、県内には現存する生息地はないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

本県には山岳地帯には池沼や湖がほとんどなく、もともと本種の生息に適した環境は少なかった。記録された池沼は、昔は現在よりも水生植物が豊富であったという話もあるので、本種が生息できる環境があった可能性は残る(54)。

## 6. 保護対策

記録地にも現存せず、近隣にも生息地がなく移動性も弱い種であるため、本種に関して有効な保護対策は立てられない。

## 7. 特記事項

文献上に記録があり、過去には生息する環境があった可能性があるものの、現在の国内の分布では隔離された地点での記録であるため要注目種とする。

## 8. 主な文献

朝比奈正二郎(1956)日本の蜻蛉(3). 新昆虫, 9(6): 47-51

福井順治・加須屋 真(1998)朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

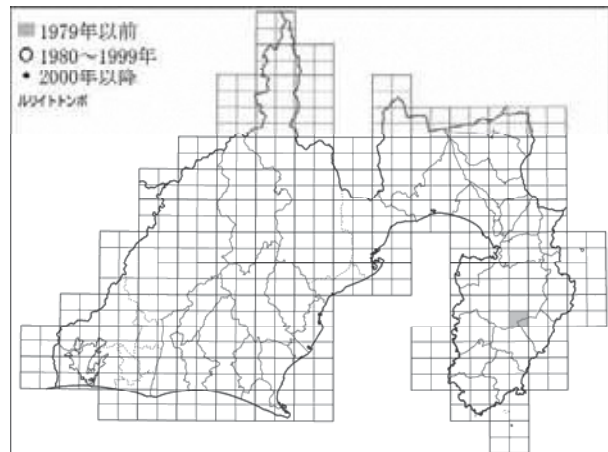
## 9. 標本

天城山八丁池産: 国立科学博物館所蔵(朝比奈正二郎コレクション)

(福井順治)



長野県 2002年7月31日 加須屋 真



# オオトラフトンボ *Epitheca bimaculata sibirica* Selys, 1887

エゾトンボ科 Corduliidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オスメスともに 55~60 mm 程度。オスメスともに橙褐色と黒色の虎斑（とらふ）模様をした中型のトンボである。寒冷地の湿原や水生植物が繁茂したやや大きめの池沼や湖を主な生息地としている。県内では観察例がないが、成熟したオスが開放的な水面上をホバリングを交えて縄張り飛翔をする姿を見ることが多い。6~7月頃に出現する初夏のトンボである。

## 2. 分布

国外では中国、ロシアからヨーロッパまでユーラシア大陸に広く、国内では北海道と本州に分布し、本州では中部地方以北の寒冷地や山岳地域に見られ、産地はきわめて限定されている。県内では富士山頂における 1 例だけが確実な記録である。

## 3. 生息環境

本州の中部山岳地域の場合には、開放的で冷涼な大きめの池沼や湖が生息地となっている。水生植物が豊富な水質のよい池沼が好まれる。

## 4. 生息状況

40 年以上前の 1971 年に、富士山頂の山梨県との県境付近にて採集された 1 オス以外には確認された例はなく、この個体は近隣からの移動個体であると考えられる。県内には定着している池沼は見つかっていないが、隣接した山梨県の富士五湖には分布している。

## 5. 減少の主要因と脅威

北方系の種であるため、温暖な本県には本種の生息に適した環境はもともと少なく、確実に生息している産地も見つかっていない。本種の生息の可能性が残る、標高の高いところにある湖沼や湿原の池塘の環境を残しておく必要がある (12)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックには掲載されていないが、近隣を含めて東北日本では県版レッドリストに入っているところが多い。

## 8. 主な文献

朝比奈正二郎 (1973) 1971 年度に富士山頂で得られた昆虫類について. 富士山西斜面学術調査報告書. 建設省中部地方建設局富士砂防工事事務所.

福井順治・加須屋 真 (1998) 朝比奈博士による静岡県産トンボ類の記録. 駿河の昆虫, (182): 5091-5110

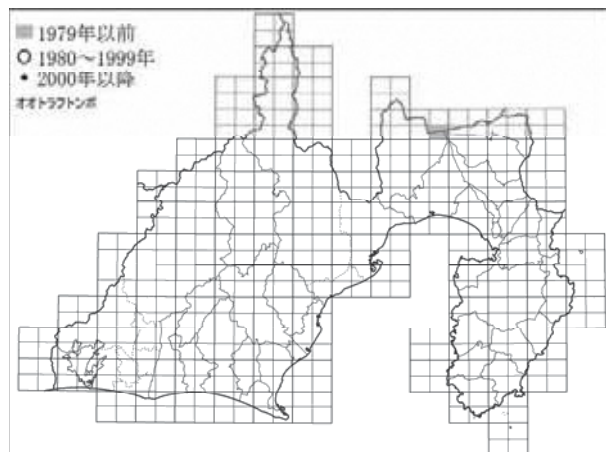
## 9. 標本

富士山頂産: 国立科学博物館所蔵 (朝比奈正二郎コレクション)

(福井順治)



富士山頂産 1971年7月12日 板倉 博採集





### 1. 種の解説

体長オスメスともに 33~40 mm 程度。オスメスともに成熟すると体色が黒化する小型のアカトンボの一種である。丘陵地に生息し、成虫は 7~11 月にかけて出現する。成虫は生息地をあまり離れずに生活し、成熟したオスは水辺で縄張りをもち、メスを見つけると交尾・産卵に至る。産卵は上空から卵をばらまく「打空産卵」である。

### 2. 分布

日本固有種で、本州の東北地方から中国地方までの約半数の県に分布するが、産地は極限される傾向がある。近隣の愛知、三重、岐阜の各県にはわずかに現存産地があるが、全国的には急速に減少している。県内では浜松市に記録がある。

### 3. 生息環境

西南日本では丘陵地のマツ林に囲まれたやや浅く、植生が豊かで岸辺に背丈の低い水生植物がある、水質がよい古いため池が典型的な生息環境である。東北日本の生息地はミズゴケ湿原である。これまでの調査では県内には適した生息環境と判断できる池沼は見つからない。

### 4. 生息状況

愛知県では産地があるが、県内で確認されたものは 2000 年 11 月 4 日に浜松市で採集された 1 オスだけである。記録地は長年の調査がされてきた場所であることと、本種の定着する環境とは条件が異なるため、移動個体が記録されたものと考えられている。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内にはミズゴケ湿原はほとんどなく、丘陵地にも植生に恵まれた浅いため池も乏しいために、もともと本種の生息に適した環境は少なかった。ため池の管理放棄 (53) による過剰な植生の繁茂や、わずかに残っていた湿地も乾燥化が進んで (54)、本種の生息できる環境はさらに消失する傾向にある。

### 6. 保護対策

飛来による記録と考えられ、生息地が把握しにくいことから有効な保護対策は立てられていない。

### 7. 特記事項

記録地は本種の生息する環境とは異なるが、あまり移動性が強い種ではないことを考慮すると、近隣の小規模なため池には生息の可能性は皆無とはいえない。急激に産地が消滅している種で環境省 編 (2015) の改訂版レッドデータブックだけでなく、近隣を含めて県版レッドリストにあげている県が多い。

### 8. 主な文献

荏部治紀 (2000) マダラナニワトンボの生息現状. TOMBO, (42): 26-30

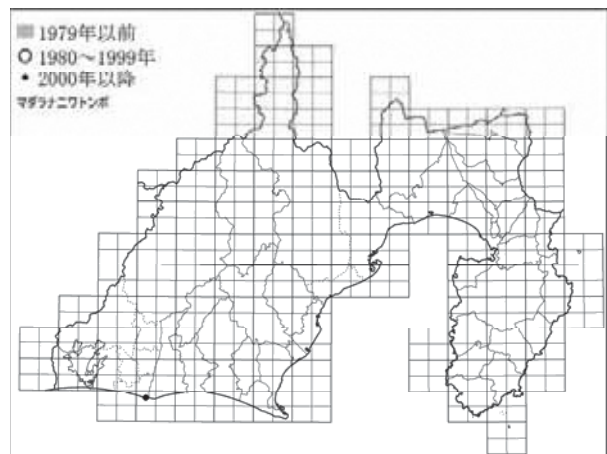
二橋 亮 (2001) 静岡県におけるマダラナニワトンボの記録. TOMBO, (43): 38-39

### 9. 標本

浜松市産: ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



浜松市産 2000年11月4日 二橋 亮採集



(福井順治)

# クギヌキハサミムシ *Forficula scudderii* Bormans, 1880

クギヌキハサミムシ科 Forficulidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更コード 1, 5

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 23.5 mm。3 齢幼虫で越冬し、4 齢を経て 6 月頃成虫となり夏に繁殖する年 1 化型である。やや大型のハサミムシで、オス尾端のはさみは大きく、釘抜き、あるいは栓抜きのように種を誤ることはない。後翅は退化しているため飛ぶことはできないが、灯火に集まることが知られている。

## 2. 分布

国外ではサハリン、朝鮮半島、シベリア東部、中国に、国内では北海道、本州、九州に分布する。本州における分布の西限は長野県伊那、南限は静岡県である。九州からは大分県の記録がある。県内における記録はほとんどなく、富士山麓で確認されているほか、菊川で採集されたという情報(真偽不明)しかない。

## 3. 生息環境

一般に山地性とされ、落葉広葉樹上に生息すると考えられている。一方、平野部の河川沿いで、ヨシ原が見られるような場所で採集された例もいくつかあり、詳しいことはまだわかっていない。県内では富士山麓の落葉広葉樹林の林縁で確認されているほか、菊川の採集例は低湿地部と思われる。

## 4. 生息状況

十分な情報がえられていないためよくわからないが、生息密度はかなり低いものと思われる。北方系の種で、北海道ではふつうに見られる。県内の生息地での詳細な調査が望まれる。県内では 1985 年に採集されているが、その後確認されていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

減少の程度は不明であるが、生息地での開発(11、16)は本種の存続にとって脅威といえる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

富士山周辺の草原や、河川河口部のヨシ原で本種を対象とした詳細な調査が望まれる。

## 8. 主な文献

石川 均(1999) クギヌキハサミムシの生息環境について. バッタリギス, (120): 46

河野勝行(1998) クギヌキハサミムシの分布と棲息環境について. バッタリギス, (119): 9-10

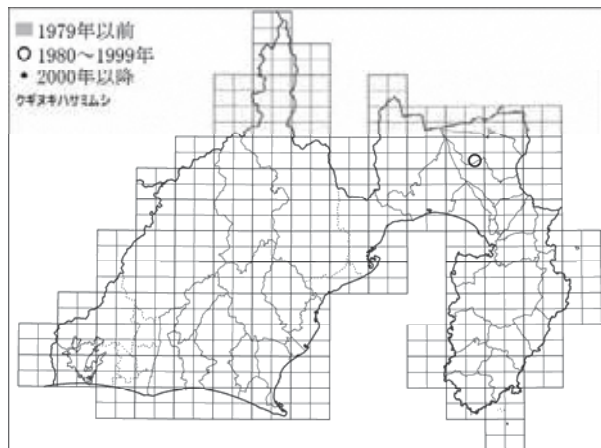
日本直翅類学会 編(2016) 日本産直翅類標準図鑑. 株式会社学研プラス, 東京, 384 pp.

## 9. 標本

裾野市須山産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



裾野市須山産 1985年7月17日 石川 均採集



(石川 均)

# イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott, 1874)

イトアメンボ科 Hydrometridae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 11.2~14.0 mm。暗褐~灰黒色で肢は多少とも淡色。体は細い棒状で、頭部前端は膨大し、複眼は頭部両側の前端から 2/3 よりやや後方に位置し、小さく半球形に突出する。半翅鞘は長翅型と微翅型の 2 型がある。肢ははなはだ細い。オス第 7 腹節腹面は棘状突起を欠き、長毛を密生する。

成虫は水面で活動し、水面に落ちた小昆虫などを捕食する。成虫で集団で越冬する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では本州、四国、九州、対馬、トカラ列島(中之島・宝島)、奄美大島に分布する。県内では伊豆半島、静岡市葵区鯨ヶ池、磐田市桶ヶ谷沼の記録があるが、少なくとも後 2 者の記録は近縁種の誤同定である可能性がある。

## 3. 生息環境

池沼、水田、河川などの水面に生息し、水辺の草間などに見られる。

## 4. 生息状況

かつては全国的にふつうに見られたといわれるが、1960年代以降各地で激減している。県内ではデータを伴った記録はなく、生息状況は不明である。県内各所の水域を調査したが、ヒメイトアメンボ *Hydrometra procera* (Horváth, 1905) とオキナワイトアメンボ *Hydrometra okinawana* Drake, 1951 は多数確認されたものの、本種の生息を確認することはできなかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発(23)や圃場整備(15-2)などによる生息環境の消失、農薬・肥料などによる水質汚染(32)などが脅威となる。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

神奈川県では丘陵地に接した河川後背湿地の水生昆虫や水田雑草が豊富な水田に生息するといいい、県内でもそのような条件の場所を調査することによって、生息地が発見される可能性がある。

## 8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

佐藤卓也(1988)静岡県中西部のタイコウチ, コオイムシ, およびヒメミズカマキリについて. 駿河の昆虫, (143): 4116-4122

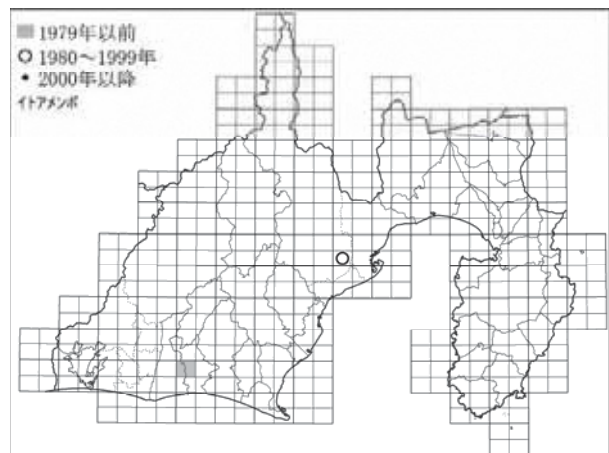
杉山恵一 編(1990)桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

## 9. 標本

なし。



神奈川県愛川町 2017年7月29日 北野 忠



(多比良嘉晃)



# ホソハンミョウ *Cylindera (Cylindera) gracilis* (Pallas, 1777)

ハンミョウ科 Cicindelidae

静岡県カテゴリー 部会注目種(N-I 現状不明) : 変更コード 14

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 10~12 mm。背面は暗青灰色で光沢を欠き、翅鞘両側の中央と翅端前に黄白色で縦長の斑紋を装う。翅鞘会合部後半に赤褐色の縦位の長楕円形斑を有する個体があるという。体はおおむね細いヒョウタン形、後翅は退化し、飛ぶことはできないとされる。

成虫は6~10月頃に出現し、草間や藪の中などの地表を敏速に走り回って小昆虫を捕食する。行動時の姿はアリやある種のハチに似ているという。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部、モンゴル、シベリア、ロシア、ウクライナなどに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では東部の愛鷹山における非常に古い記録と、戦前に西部の三方ヶ原台地で目撃したという記述がある。

## 3. 生息環境

低地から丘陵地の下草の少ない疎林や河畔の草地、果樹園などの耕作地に生息する。植物被度の少ない草地を好むという。

## 4. 生息状況

近年の生息状況に関する情報は全くない。絶滅種との判断を下すには情報不足であるので、現在でも生息可能と考えられる場所において、本種を対象とした調査を行う必要がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修工事などの影響(13)で河川敷の生息環境が減少している。開発など(23)による自然草原の減少や植生遷移の進行(54)に伴う生息に好適な草地の消滅なども一因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

成虫はきわめて敏速に行動し、発見すること自体が困難である。

## 8. 主な文献

岡野喜久磨・真野嘉永(1941) 沼津市・三島市・静岡県駿東郡・田方郡の斑猫科予報. 昆虫世界, 45(528): 237-240.

渡辺一雄(1976) ハンミョウ 身の軽い山道のミチオシエ. 池田二三高・草間慶一・杉本 武・高橋真弓・渡辺一雄, 静岡県の自然 四季の昆虫, pp. 122-123. 静岡新聞社, 静岡.

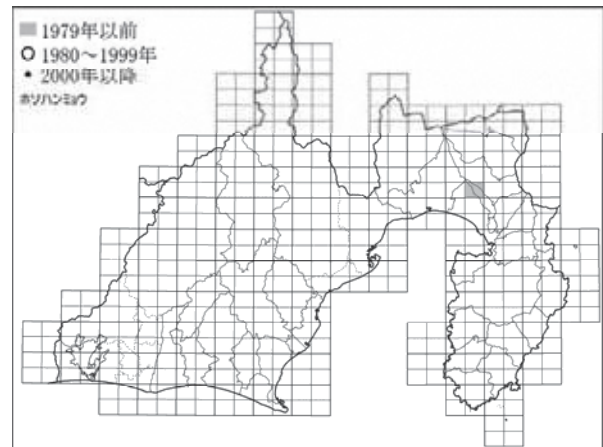
## 9. 標本

なし。



©2019 H.Ishikawa

愛知県産 2007年7月 撮影:石川 均



(多比良嘉晃)

リュウガシメクラチビゴミムシ *Kurasawatrechus ryugashiensis* S. Uéno, 1988

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更コード9

[2004年版カテゴリー 部会注目種(N-III) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長 2.8 mm。暗赤褐色で体表に著しい長毛を散生する。体はおおむね細いヒョウタン形で、複眼及び後翅は退化する。

同属の他種とは、地理的にも分類学的にもかなり孤立しており、特異な種であるという。

### 2. 分布

1987年に浜松市北区引佐町田畑の竜ヶ岩洞付近の「竜ヶ岩の堅穴」(＝戸田の堅穴)で発見され、1988年に新種として記載されたもので、浜松市引佐町三岳「たちすのしゃどう」の標本とともに静岡県の固有種である。

### 3. 生息環境

石灰岩の洞窟内に生息する。

### 4. 生息状況

原記載以降、採集記録は知られておらず、詳細な生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

竜ヶ岩洞は1983年に観光洞としてオープンし、以来950万人以上が入洞したとされ、入洞者による洞内外の環境汚染(18)や、周辺山林の開発(23)などによる洞窟を含む山全体の乾燥化などが懸念される。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

本来、洞窟内だけではなく地下浅層に生息する一群であるので、竜ヶ岩洞周辺の洞窟群あるいは地下浅層に生息している可能性が高く、周辺地域の綿密な調査をする必要がある。

### 8. 主な文献

市橋 甫・天春明吉・稲垣雄二(1983)地底の生物 豊橋を中心とする石灰洞の動物(節足動物). 地底の音, p. 55-64. 三遠洞くつ研究会, 豊橋.

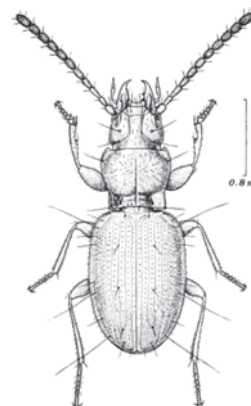
石川 均(1999)草間先生との洞窟探検. 静岡の甲虫, 11(1/2): 4-9

Uéno, S. (1988) Occurrence of a new *Kurasawatrechus* (Coleoptera, Trechinae) near the Pacific coast of Central Japan. *Bulletin of the national museum of nature and science, Tokyo, (A)*, (14): 97-103

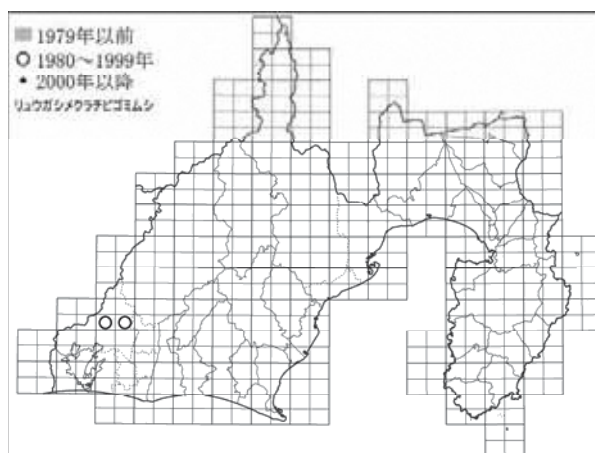
### 9. 標本

浜松市産: 国立科学博物館所蔵(ホロタイプ)

(多比良嘉晃)



Uéno(1988)より



# マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 12~14 mm。黄褐色で光沢を有し、後頭部、前胸背板前・後縁の横帯紋、翅鞘のほぼ全面を覆う密な小点斑などは黒色、体下面は暗赤褐色、肢は暗黄褐色で後肢脛・跗節は暗色。体は短卵形で背面はよく膨隆し、翅鞘には3条のまばらな点刻列を有する。

成虫は4~10月に活動し、肉食性、夜間灯火に飛来することがある。幼虫は主にミジンコ類を食べるといふ。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では掛川市高御所と浜松市南区米津町で記録がある。

## 3. 生息環境

平地から丘陵地の水生植物の豊富な池沼、休耕田、放棄水田などに生息する。

## 4. 生息状況

県内での記録がきわめて少なく、生息状況は不明である。浜松市南区米津町では1970~80年代には安定して生息していたようであるが、その後、海岸後背湿地が改変・整備されて、現在は確認できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼の埋め立てや護岸工事(12)、農薬・肥料などの流入による水質汚染(32)、植生遷移の進行(54)や富栄養化に伴う水質悪化(31)などによって生息環境が失われた。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

近年に西部で目撃したという話があるが、標本は存在していないという。

## 8. 主な文献

細田昭博(2011)ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

北野 忠(2010)減少する水田の水生昆虫たち. 静岡新聞社・創碧社 編, 静岡県田んぼの生き物図鑑, pp. 26-27. 静岡県農林技術研究所, 磐田.

森 正人・北山 昭(2002)改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231 pp.

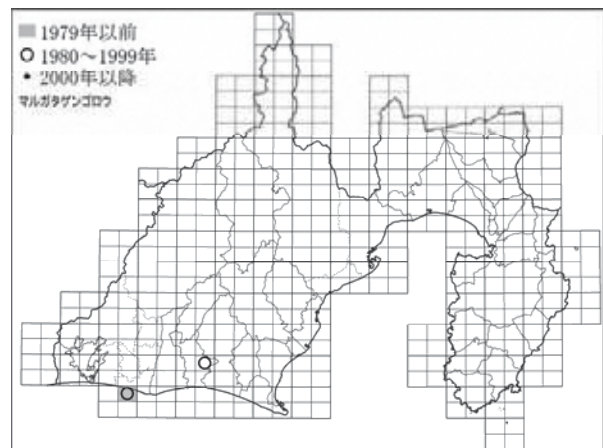
静岡県(1994)中遠・東遠広域都市計画 小笠山総合運動公園環境影響評価書. 473 pp.

## 9. 標本

浜松市産: 磐田市桶ヶ谷沼ビジターセンター所蔵



©2019 T.Kitano  
浜松市産 1979年9月30日 撮影: 北野 忠



(多比良嘉晃)



# コガタガムシ *Hydrophilus bilineatus cashimirensis* Redtenbacher, 1892

ガムシ科 Hydrophilidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

体長 23~28 mm。長楕円形で背面は凸隆し、腹面はおおむね平坦、少し緑褐色を帯びた黒色で、触角柄部及び口枝などは黄褐色、肢の腿節を含む体下面は多少とも赤褐色、背面は滑沢だが腹部を含む体下面には濃黄褐色の微毛をピロード状に密生する。後胸腹板突起は針状に鋭く突出し、第6腹節腹板(外見上の腹部第4節)前縁に達する。

幼虫はガムシ *Hydrophilus* (*Hydrophilus*) *acuminatus* Motschulsky, 1853 と同様に肉食性で、巻貝を食べる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外では中国、台湾、東南アジア、カシミール、インド、スリランカに、国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市福田の採集例があるが、詳細なデータは未発表である。

## 3. 生息環境

平地の水生植物の豊富な池沼、湿地、水田、休耕田などに生息する。

## 4. 生息状況

県内の採集例は1例のみであるので、詳細な生息状況は不明である。近隣の山梨県、愛知県、三重県では最近の採集例もあるので、県内において再発見される可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

全国的には、開発(23)や圃場整備(15-2)などによる池沼・水田などの埋め立てによって生息環境が減少していることなどが原因と考えられている。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

磐田市福田の採集例はライトトラップに飛来した個体である。

## 8. 主な文献

野村周平・溝上誠司・大塚健之(1996) 佐賀県の水生甲虫. 佐賀県の生物編集委員会 編, 日本生物教育会第51回全国大会 佐賀大会記念誌 佐賀県の生物, pp. 249-262. 佐賀県生物部会, 佐賀.

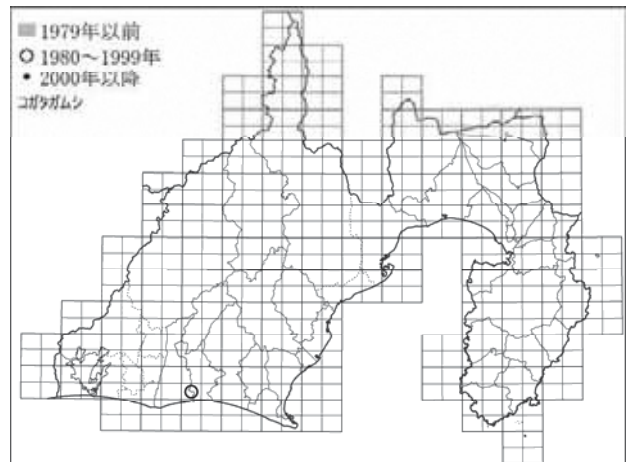
## 9. 標本

磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 Y.Tahira ©2019 H.Ishikawa

磐田市産 1983年8月9-10日 多比良嘉晃・石川 均



(多比良嘉晃)

# ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold, 1877

シデムシ科 Silphidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 14~25 mm。黒色で触角球桿部先端 3 節は橙黄色、翅鞘の肩部後方と翅端前に橙赤色の太い帯状紋を有する。各帯状紋は遊離した小黒点を含まず、前・後縁は強く波曲し、会合縁に達することはない。肢は強壯で、オス前肢附節は横に広がり、後肢脛節は湾曲する。

主にネズミなどの小型脊椎動物の死体に来集して、成虫・幼虫ともに腐肉を食べる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。モンシデムシ属は死体上でつがいとなり、雌雄は死体を土中に埋葬し、幼虫に口移しで給餌する習性がある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル、極東ロシアに、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では静岡市葵区井川峠、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市天竜区二俣町の記録があり、他に磐田市福田の採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

主に平野部の河川敷や草原に生息する。

## 4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。近年全国各地で個体数が減少しているとされる。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や河川改修工事 (13) などによって生息環境が破壊・改変され、生息範囲が狭められている。また、餌となる小動物が減少 (71) したことが要因とする研究者がいる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種を対象とした調査は十分行われていない。

## 8. 主な文献

服部寿夫 (1969) 1968 年安倍川上流における甲虫類の採集記録. 駿河の昆虫, (66): 1911-1918

杉山恵一 編 (1990) 桶ヶ谷沼の自然環境—桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査—. (財) 日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

鈴木誠治 (2003) モンシデムシ最近の話題 (1) 育児行動. 昆虫と自然, 38(10): 32-35

坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (I). 駿河の昆虫, (97): 2852-2859

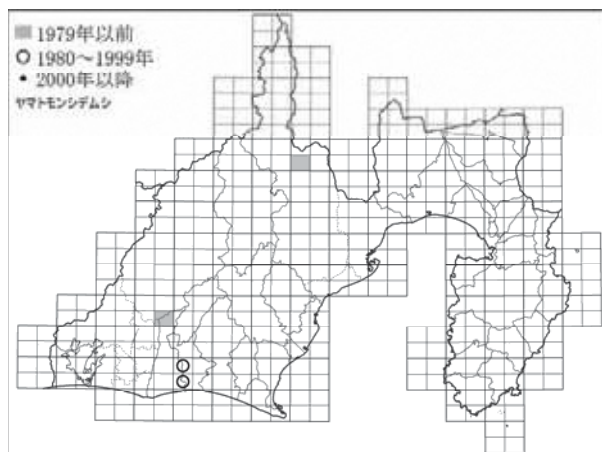
## 9. 標本

磐田市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira ©2019 H.Ishikawa  
磐田市産 1983年8月9-10日 多比良嘉晃・石川均



# オオフタホシマグソコガネ *Aphodius (Aphodius) elegans* Allibert, 1847

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 現状不明(N-I)変更なし

[2004年版カテゴリー 現状不明(N-I) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 11.0~13.0 mm。黒色で中央後方の二大横紋をのぞく翅鞘は黄色。体はおおむね長円形で、背面に強く凸隆し、頭部は大きく、オスは中央前方に1本の小さい角状突起と後方両側に1対の低い隆起を具え、メスではそれぞれわずかに隆まるのみ。前胸背板は粗大点刻を散布し、オスでは中央前方が圧せられる。

成虫は春季と秋季に出現して日向の牛糞に集まる。成虫は夜間、灯火に飛来することがある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、濟州島、台湾、中国、インドシナ半島に、国内では北海道、本州、佐渡島、伊豆諸島、奄岐、四国、九州、対馬、五島列島、トカラ宝島、奄美大島、徳之島、沖縄本島に分布する。県内では富士宮市朝霧高原と浜松市浜北区で記録がある。

## 3. 生息環境

平地から山地の放牧地などに生息する。

## 4. 生息状況

県内の記録が少ないので、詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

農村における牛馬の飼育の衰退や放牧場の減少(71)に伴い、生息地が限られてきている。また、寄生虫駆除薬(イベルメクチン)を投与された牛の新しい牛糞では本種幼虫の生存率が著しく低下するという報告があり、減少の要因の可能性の一つと考えられる(71)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

ウェブ上には、2011年に朝霧高原で採集した内容の記事が掲載されている。

## 8. 主な文献

堀口 徹(2005) オオフタホシマグソコガネについて. 昆虫と自然, 40(2): 21-24

塚本圭一(1991) 日本産食糞性(広義)コガネムシ類の日本列島における分布記載 放牧家畜などの糞処理昆虫についての基礎的研究 16. SAIKAKU, (10): 34-65

渡辺一雄(1986) オオフタホシマグソコガネの乱舞. 遠州の自然, (9): 61

## 9. 標本

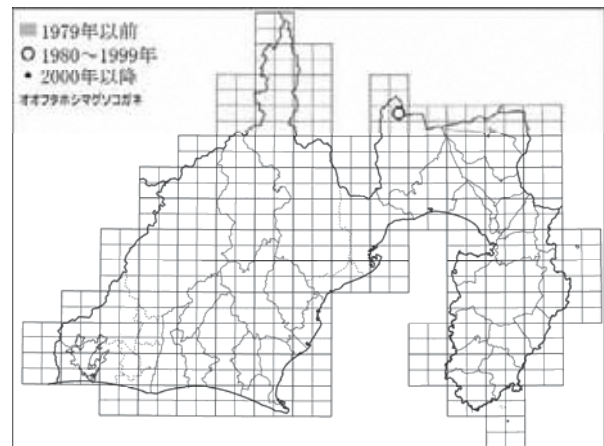
富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 Y.Tahira

富士宮市産 1981年10月25日 多比良嘉晃採集





# ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi* (Janson, 1877)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-I 現状不明) 変更コード 1, 5

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張はおよそ 40 mm。翅の表裏とも赤褐色で、表はメスの前翅先端に黒斑がある。裏面には褐色の縦縞がある。幼虫は半肉食性で、若齢の時は主にブナ科の植物の葉のほか、アブラムシやカイガラムシの分泌物を食べ、中齢以降はアブラムシやカイガラムシを捕食する。卵で越冬。成虫は年 1 回、7 月中旬から発生し 9 月中旬まで見られる。日中の行動は不活発で、主に夕方活動し、ヒメジョオンなどの花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東部に分布し、国内では北海道、本州中部以北に分布する。県内では 1958 年 8 月 18 日、静岡市葵区井川富士見峠で 1 ♀ が採集され、その 54 年後の 2012 年 8 月 19 日、富士宮市根原で 1 ♀ が採集された。

## 3. 生息環境

落葉広葉樹林に生息しているとみられるが、県内での実態は不明である。

## 4. 生息状況

1958 年と 2012 年に 1 個体ずつ採集されたにすぎず、個体数はきわめて少ないが、本種の生態からみて土着していると考えられ、今後の調査によりさらに発見される可能性が高い。

## 5. 減少の主要因と脅威

希少種であり、減少している状況かどうか不明である (99)。

## 6. 保護対策

落葉広葉樹林の存続が不可欠である。

## 7. 特記事項

本県の記録はきわめて少ないが、隣県の山梨県、長野県では稀ではない。愛知県では 1998 年に初めて記録された。

## 8. 主な文献

高橋真弓 (1958) 井川林道 8 月中旬の蝶類. 駿河の昆虫, (23): 609

谷川久男 (2012) 富士宮市根原でムモンアカシジミを採集. 駿河の昆虫, (239): 6594

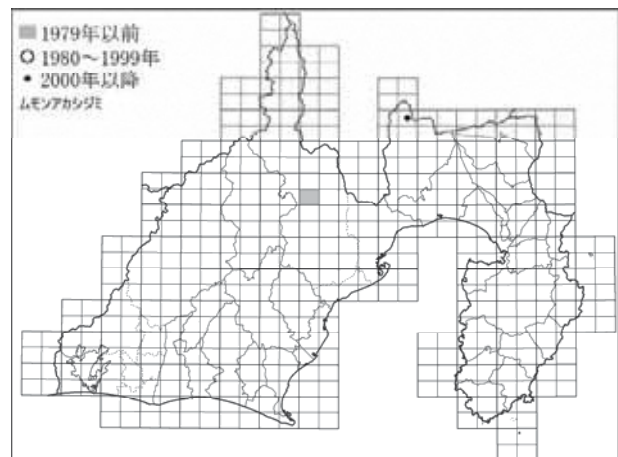
## 9. 標本

静岡市産 (1 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産♀表面 2012年8月19日 谷川久男採集



# ジョウザンミドリシジミ *Favonius taxila taxila* (Bremer, 1861)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-I 現状不明) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35~37 mm。オスの表面は金属光沢のある青緑色、メスの表面は黒褐色。後翅の裏面に W 字型の白い線状の紋がある。幼虫の食餌植物はミズナラ。卵で越冬。年 1 回発生、7 月中旬頃から出現しメスは 9 月まで見られる。

## 2. 分布

国外では日本海を囲むロシア南東部、サハリン、朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州では東北から中国山地まで分布する。県内では大井川源流地域と富士山西麓からわずかな記録があるのみである。

## 3. 生息環境

県内で記録された個体数はきわめて少ないので生息環境を特定することはできないが、県外での生息状況から推測すると食餌植物のミズナラを主体とする落葉広葉樹林が生息地となっていると考えられる。

## 4. 生息状況

大井川源流地域で 1953~1966 年に 5 件、1974 年富士宮市広見上井出林道で 1 件の記録があるのみであった。富士山の記録地点は落葉広葉樹が伐採されてヒノキが植栽され、現在も生息しているとは考えられない。大井川源流地域ではその後、度重なる調査にもかかわらず発見されていなかった。しかし、2017 年の調査で 51 年ぶりに静岡市井川の県民の森で 1♂が採集された。

## 5. 減少の主要因と脅威

きわめて少数の記録しかないため、減少しているかの状況は不明 (99) である。生息にはミズナラを主体とする落葉広葉樹林の存続が不可欠である。

## 6. 保護対策

ミズナラを主体とした落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

## 7. 特記事項

隣県の山梨県や長野県ではかなり個体数の多い種にもかかわらず本県では最も稀な種の一つとなっている。大井川の源流部にはまだ広大な落葉広葉樹林が残されていることから生息している可能性は十分高く今後のきめ細かい調査が必要である。

## 8. 主な文献

遠藤光昭 (1958) 南ア東岳・赤石岳付近蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (24): 620-624

池谷 正 (2017) 静岡市井川でジョウザンミドリシジミを採集. 駿河の昆虫, (260): 7126

稲葉 茂 (1981) 富士宮市人穴付近の蝶の記録. 駿河の昆虫, (115): 3392

高橋真弓 (1953) 大井川水源地方蝶類分布調査報告. 駿河の昆虫, (4): 64-81

高橋真弓 (1966) 大井川水源地方蝶類分布調査報告 (第 14 報). 駿河の昆虫, (56): 1540-1557

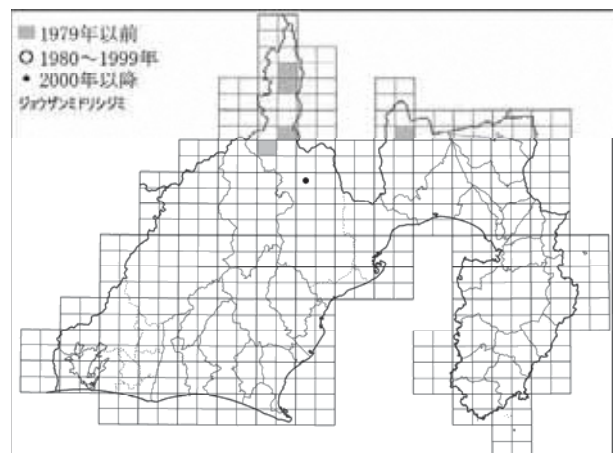
## 9. 標本

各産地 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



富士宮市産♂裏面 1972年6月19日 稲葉 茂採集



# オオヒカゲ *Ninguta schrenckii schrenckii* (Ménétriès, 1858)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-I 現状不明) 変更コード 5

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張 70~80mm。ジャノメチョウ類では最も大型。県内で採集された唯一の個体は 65 mm と小さい。翅の表裏とも灰色を帯びた薄い褐色。後翅表の外縁には黒い斑点が、裏には目玉模様が並ぶ。幼虫の食餌植物はカヤツリグサ科。幼虫で越冬。成虫は年 1 回発生し、7月下旬~8月に見られる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシア南東部、中国東北部・西部などに分布し、国内では北海道、本州に分布する。北海道、東北地方では平地から低山地にかけて広く分布し、関東及び本州中部より南では山地性となる。近畿地方から中国地方にも産地は点在する。県内では浜松市天竜区水窪町大嵐で 1 ♀ が採集されただけである。

## 3. 生息環境

県内では 1 個体のみ記録しかない。隣接する県の状況によると、樹林内やその周辺の湿地など、大型スゲ類が群落をつくるような薄暗い草地に生息する。西三河の山間部では、休耕田を足がかりにして分布を広げているが、本県までは達していない。

## 4. 生息状況

1973年9月13日、浜松市天竜区(旧水窪町大嵐)で採集された 1 ♀ が県内唯一の記録であり、その後の追加記録はない。採集者自身、報告文の中で定着の可能性が低いことを指摘している。

## 5. 減少の主要因と脅威

偶産の可能性が高く、減少とか脅威は想定しにくい。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

近隣では、伊那谷や西三河の山間部に産地が点在するが、地形的にみて自力で飛んできたとは考えにくく、JR 飯田線で運ばれた可能性がある。西三河では、湿地化した休耕田を利用して分布を広げている。

## 8. 主な文献

福井順治 (1977) 佐久間・水窪の蝶類(III). 駿河の昆虫, (96): 2824-2829

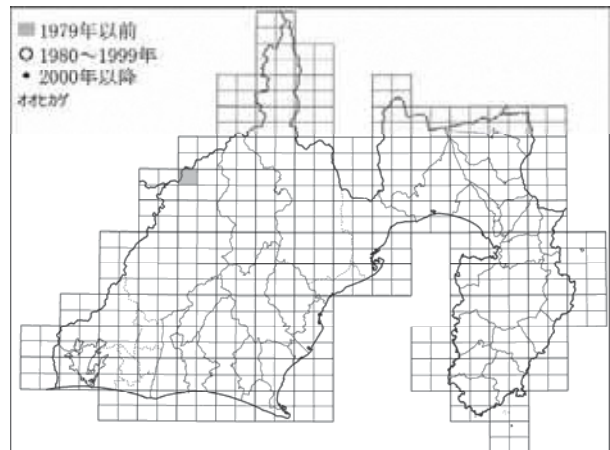
## 9. 標本

浜松市産 (1 個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



水窪町産♀裏面 1973年9月16日 福井順治採集





## フジアキタクロナガオサムシ

*Carabus (Euleptocarabus) porrecticollis pacificus* (Imura & Matsunaga, 2011)

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) ]

### 1. 種の解説

体長 24~33 mm。背面は黒色で、頭部、前胸背板、鞘翅基部及び側縁部は青紫色の光沢を帯びる場合が多いが、本亜種は他亜種に比しより暗色で、特に鞘翅は側縁部をのぞき青紫色光沢を欠くものが多い。前胸背板側縁は前方がより直線的で後方の波曲は弱い。前胸側板側片の顆粒は基亜種に比しやや疎で、鞘翅肩部に鋸歯状の切れ込みをもたない個体が大半である。

春繁殖・成虫越冬型のオサムシであるという。

### 2. 分布

日本固有亜種で、東部の富士山南～西麓、富士市と富士宮市の一部（標高 230~600 m）に分布する静岡県固有亜種である。種アキタクロナガオサムシ *C. (E.) porrecticollis* Bates, 1883 は、主として本州の日本海側、関東平野北縁、濃尾平野北東縁、紀伊半島北部などに分布している日本固有種である。

### 3. 生息環境

ナラ、クリなどからなる落葉広葉樹林やスギ・ヒノキ人工林の林床に生息し、むしろ人工林内に多いようである。

### 4. 生息状況

生息地での個体数は少なくないが、分布域が狭く局限されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

もともと分布が局限している (61) うえ、森林伐採 (11)、宅地開発 (23)、道路建設 (24) などが減少に拍車をかけている。また、市街地に近く訪れるのが容易なため、愛好者による採集圧 (41) も心配され、実際に相当数の採集者が現地に入っている。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

ルイスオサムシ、シズオカオサムシ、マイマイカブリの 3 種と混生しているが、クロナガオサムシ、オオクロナガオサムシの 2 種は本種の分布域の周辺部に側所的に見られ、基本的には住み分けている。

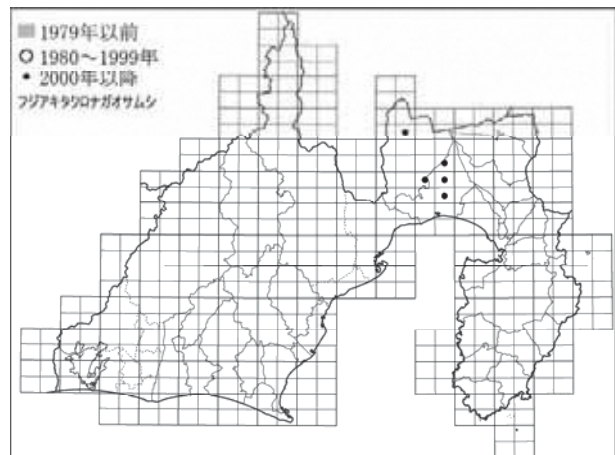
### 8. 主な文献

Imura, Y. & M. Matsunaga (2011) Discovery of an isolated population of *Limnocarabus (Euleptocarabus) porrecticollis* (Coleoptera, Carabidae) from the southern foot of Mt. Fuji in Shizuoka Prefecture, central Japan. *Elytra*, N. S., 1: 1-14

### 9. 標本

富士市大淵産：北海道大学総合博物館所蔵（ホロタイプ）

(多比良嘉晃・石川 均)



# ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1852)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張はおよそ 30 mm。翅表は暗褐色、裏側は黄褐色をしている。後翅裏面には春型は銀色の、夏型は黄褐色の直線の帯があり、銀一文字の名前の由来となっている。幼虫の食餌植物はススキ。幼虫で越冬。成虫は低地では年 3 回発生するが、標高が高くなると 1 回あるいは 2 回となる。

## 2. 分布

国外では中国中部から東北部、朝鮮半島などに、国内では北海道から九州まで広く分布する。県内では富士山麓の草原のほか、静岡市北部の山地、天竜川、太田川、菊川、狩野川などの河川沿いの低地に点在して分布する。

## 3. 生息環境

富士山麓の明るいススキ草原のほか、中・西部では非火山の山地草原や平地を流れる大きな川の河川敷、堤防、あるいは人為的に草地として維持されている場所などが生息地となっている。

## 4. 生息状況

静岡市の大井川上流部などの山地の草原の生息地は 1980 年代の終わりには消滅したとみられる。富士山麓では生息地、個体数ともに減少傾向とみられるが、北伊豆の狩野川流域では比較的安定して生息している。西部では最近の調査が十分ではなく記録がほとんどない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大きな河川の堤防では大型機械による草刈り、また空き地や農耕地の周囲、小河川の堤防なども草刈りの方法や規模など、管理の方法が影響 (13) している可能性があると考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

北條篤史 (2002) 静岡県西部におけるギンイチモンジセセリの分布調査. 駿河の昆虫, (197): 5515-5516

石川由三 (1959) 大井川水源地方 (5 月下旬) の蝶類. 駿河の昆虫, (27): 700-706

清 邦彦 (1976) 富士山周辺のギンイチモンジセセリ. 駿河の昆虫, (94): 2741-2760

清 邦彦 (1984) 静岡県及び山梨県における河川敷・堤防・海岸の蝶覚え書(3), 駿河の昆虫, (125): 3633-3646

白井和伸 (1987) 浜松北高生物部に保管されているチョウの標本について. 駿河の昆虫, (139): 4012-4015

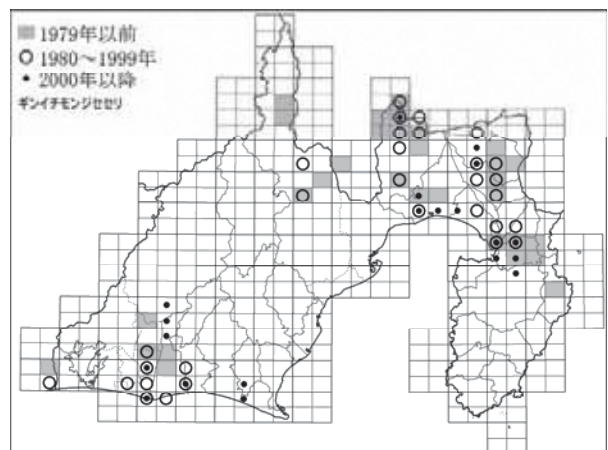
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



御殿場市産♂裏面 2013年5月5日 諏訪哲夫採集



# コキマダラセセリ *Ochlodes venatus venatus* (Bremer & Grey, 1852)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表裏とも全体が黄褐色。幼虫の食餌植物は主にススキ。幼虫で越冬。成虫は年 1 回発生し、7~8 月に見られる。産地により発生の時期が異なることがある。ノアザミなどの花をよく訪れる。

## 2. 分布

国外ではロシア極東地域、朝鮮半島、中国北部・東北部に、国内では北海道と本州に分布する。県内では富士山麓に広く見られるほか、中・西部や伊豆の一部からも記録がある。

## 3. 生息環境

標高およそ 200~1,400 m の低山地から大井川の上流部の山地まで分布する。ススキが多く、成虫の吸蜜に適する草花が見られる明るい草原に生息する。

## 4. 生息状況

伊豆半島では、東伊豆町では細々と生息しているが、他の地域では 1950 年代以降調査不足もあって記録がない。富士山麓では個体数は減少しているように思えるが、まだ安定して生息している。静岡市の山間部ではやや減少している。浜松市北部の竜頭山周辺は最近新しい記録が報告されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

ススキを主体とした草原の代表的な種であり、植生遷移 (54) により樹木が侵入し草原が衰退していくと本種の生息にも影響される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

木村一好 (2016) スーパー林道天竜線のコキマダラセセリ (2015 年) . 駿河の昆虫, (256): 7020

小澤資朗 (2008) 藤枝市, 川根本町でコキマダラセセリ. 駿河の昆虫, (222): 6173

清 邦彦 (2016) 富士山麓の草原における蝶類群集の変化 [第 5 報] . 駿河の昆虫, (255): 6977-6983

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011 年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

高橋真弓 (1978) 静岡県および山梨県のコキマダラセセリとアカセセリ. 駿河の昆虫, (100): 2929-2936

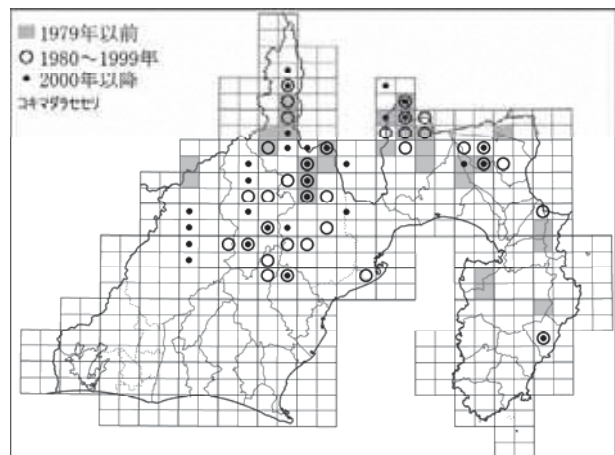
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♂表面 2016年7月19日 池谷 正採集





# オオチャバネセセリ *Polytremis pellucida pellucida* (Murray, 1875)

セセリチョウ科 Hesperidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35~40 mm。表面は黒褐色、裏面は黄褐色の地色にセセリチョウ特有の白斑がある。後翅の白斑の並び方で近縁種との区別ができる。幼虫の食餌植物はネザサなどのタケ・ササ類。幼虫で越冬。成虫は 5 月下旬~6 月中旬(高標高地では 7 月下旬)に第 1 化が、第 2 化は 8 月下旬から現れ 10 月中旬まで見られる。初夏はノアザミ、秋はキツネノマゴなど各種の花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではサハリン、中国中・南部に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島北部から水窪町まで広く記録がある。中部、東部からは記録が多く、西部からは少なかったが、最近の調査で西部にも広く分布していることが判明している。

## 3. 生息環境

主な生息環境は、低山地の水田や茶畑に隣接し、周辺には食草のネザサ群落があり、ノアザミなどの花が多い草地や堤防、あるいは農道の法面などが生息地である。

## 4. 生息状況

1960年代までは中部・東部地域では平野部から 1,000 m を超える山地まで広く生息し、個体数も少ないものではなかった。1970年代に入ると県内多くの地域から記録が途絶え、絶滅が危惧されていた。2010年代になって、県西部地域の調査の進展により菊川市、掛川市、森町などのいわゆる里山には広く生息し、個体数も多いことが判明した。

## 5. 減少の主要因と脅威

中部地域は里山の環境に乏しいうえに耕作地や雑木林の周辺は人手を掛けなくなり植生遷移(54)が進んだことにより好適な生息環境が減少したことなどが要因と考えられる。

## 6. 保護対策

人の手による伝統的な手法で行う農地が残ること、また、農道などの舗装はできる限り控えることが保護につながると考えられる。

## 7. 特記事項

西部地域の低山地では水田や茶畑の周囲の草刈りが頻繁に行われるなど管理がいきとどいており、また食草となるネザサ群落が広く分布し、これらが本種の生息を支えていると考えられる。

## 8. 主な文献

高橋真弓(1989) 静岡県および山梨県南部におけるセセリチョウ科 3 種(ホソバセセリ, オオチャバネセセリ, ミヤマチャバネセセリ)の分布と採集記録. 駿河の昆虫, (148): 4229-4252

山下 健(2000) 本川根町のオオチャバネセセリ, 1999 年も健在. 駿河の昆虫, (189): 5302

袴田和弘(2012) 2012 年菊川市のオオチャバネセセリの記録. 駿河の昆虫, 239: 6589.

諏訪哲夫(2014) 遠州地方におけるオオチャバネセセリの調査(2012 年秋~2013 年). 駿河の昆虫, (245): 6738-6740

蒔苗博道(2015) 裾野市におけるオオチャバネセセリの記録. 駿河の昆虫, (252): 6920

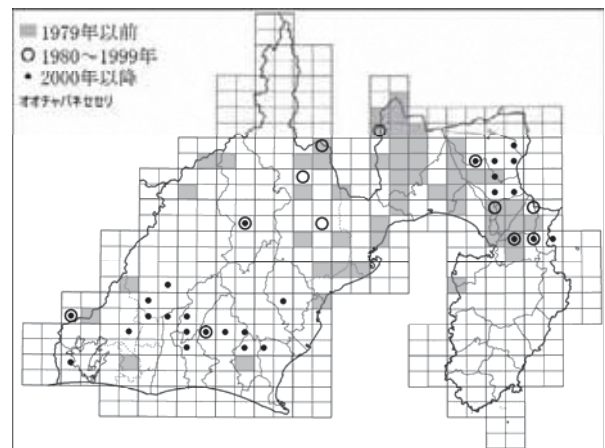
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



袋井市産♀表面 2016年5月27日 諏訪哲夫採集



# オナガシジミ *Araragi enthea enthea* (Janson, 1877)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。翅の表は黒褐色、裏は白地に黒い斑点があり、後翅端はオレンジ色である。幼虫の食餌植物はオニグルミ。卵で越冬。成虫は年1回発生し、7月下旬～8月に見られる。主に夕方活動する。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部・西部、台湾などに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布するが、西日本では局地的となる。県内では富士山麓の一部、静岡市北部及び浜松市天竜区水窪町の山地から記録されている。

## 3. 生息環境

食樹であるオニグルミのある溪流沿いが主な生息地となるが、富士山西麓の朝霧高原のようなところでも生息している。

## 4. 生息状況

県内において成虫の個体数は少ないうえ、活動は主に夕方、あまり活発ではないことから見かけることはかなり稀であり、発表された記録も少ない。冬季、卵の調査では比較的容易に発見できることから、まだそれほど危機的状況にはなっていないとみられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

食樹がオニグルミに限られ、成虫の行動もこの木から離れることもない。産卵も空間に突き出た枝が好まれることから、オニグルミが周囲の樹木に被圧される(54)ようになると本種の生息が困難になる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

天野市郎 (2004) 静岡県ミドリシジミ類の若干の採卵記録. 駿河の昆虫, (207): 5777

浅野 隆 (2008) 静岡県川根本町奥泉と寸又峡温泉でオナガシジミの卵を採集. 駿河の昆虫, (222): 6178

袴田四郎・諏訪哲夫 (1976) 安倍川上流西日影沢の蝶の幼虫2種. 駿河の昆虫, (95): 2810

白井和伸 (2000) 水窪町と周辺のオナガシジミの分布について. 駿河の昆虫, (192): 5385-5387

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608

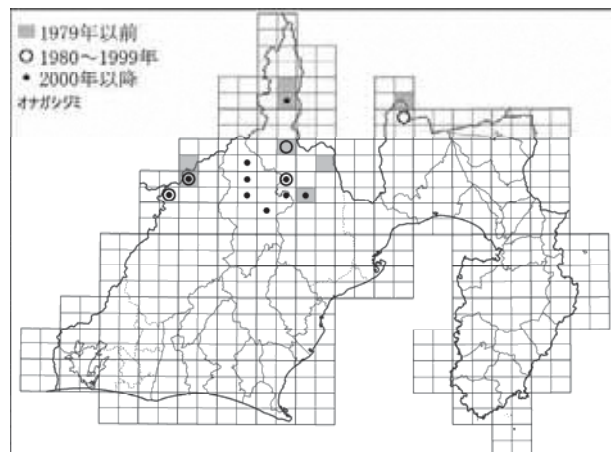
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産♀裏面 2012年7月24日 諏訪哲夫採集



# ウスイロオナガシジミ *Antigius butleri butleri* (Fenton, 1882)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。表面は黒褐色で後翅の下側が白くなる。裏面は薄い褐色の地に目立つ黒斑が多く点在する。オスメスの斑紋の違いはほとんどない。幼虫の食餌植物はミズナラ。卵で越冬。成虫は年1回6月下旬から出現して8月まで見られる。

## 2. 分布

国外では日本海を囲むロシア南東部、朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、九州に分布する。県内では大井川源流部とその支流からわずかな記録があるのみである。

## 3. 生息環境

県内で記録された個体数はきわめて少ないので生息環境を特定することはできないが、県外での生息状況から推測すると食餌植物のミズナラを主体とする落葉広葉樹林が生息地となっていると考えられる。

## 4. 生息状況

1951年寸又川上流で発見され、大井川源流部からも1960年に発見された。他の地域からは記録がない。寸又川ではその後の記録はなく、大井川源流部でも多くの調査にかかわらずこれまでに10件ほどの記録にとどまっている。

## 5. 減少の主要因と脅威

成虫の活動が不活発であることから発見されにくく、希少な種となっているが、特に減少傾向は認められない。ただし、ミズナラを主体とする落葉広葉樹林の代表的な種であることから、各種開発による落葉広葉樹林の伐採(11)は大きな脅威となりうる。

## 6. 保護対策

ミズナラを主体とした落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

小堀 一 (2016) 大井川上流で採集・目撃した蝶5種. 駿河の昆虫, (255): 6990-6991

永井洋三 (1960) 大井川上流のウスイロオナガ. 駿河の昆虫, (32): 860

高橋真弓 (1982) 寸又峡で採集されたシジミチョウ類数種の古い記録. 駿河の昆虫, (118): 3473-3474

高橋真弓 (2000) 大井川上流におけるシジミチョウ類7種の採集記録. 駿河の昆虫, (190): 5348

富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

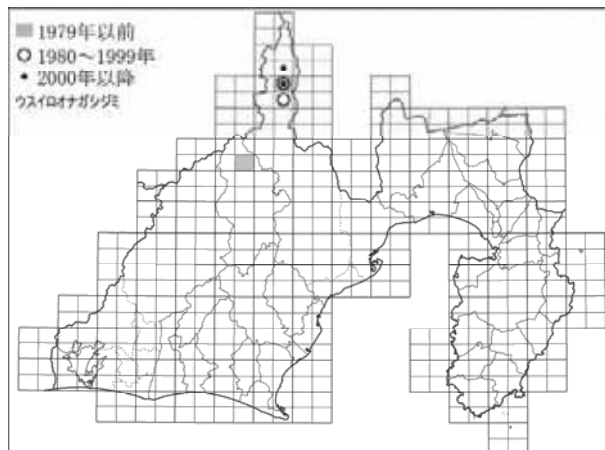
## 9. 標本

静岡市産 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♀裏面 2008年7月24日 宇式和輝採集





# カラスシジミ *Fixsenia w-album fentoni* (Butler, 1882)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張はおよそ 30~35 mm。翅の表裏ともに黒褐色で、後翅裏面には W 型の白線がある。幼虫の主な食餌植物はハルニレであるが本県では確認されていない。卵で越冬。成虫は年 1 回 7 月中旬に発生し、8 月中旬まで見られる。ヒメジョオンなどの花で吸蜜するほか、湿った道路面において吸水する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、サハリン、ロシア、ヨーロッパまで広く、国内では北海道、本州、九州に分布するが、西日本では局地的となる。県内では静岡市大井川源流部、富士宮市西白塚、小山町から記録がある。

## 3. 生息環境

標高 1,000~1,500 m の落葉広葉樹林に生息し、成虫は林縁や明るい森林内の林道沿いなどで見られる。

## 4. 生息状況

県内ではこれまで静岡市北部の大井川源流部におけるわずかな記録にとどまり、きわめて稀な種であった。しかし 2008 年に富士宮市西白塚で 1♂、2009 年には小山町内で複数の個体が発見され、最近の大井川源流部の調査でも数個体が採集され、個体数は少ないものの比較的広範囲に分布し、調査次第では各地から発見される可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

稀種に属し、これまでに採集された個体はきわめて少ない。減少している傾向は現在のところ見られない。

## 6. 保護対策

落葉広葉樹林の存続が欠かせない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

富山 稔・梅沢賢造・青島 弘 (1962) 大井川上流の蝶類. 駿河の昆虫, (38): 1045-1047

天野市郎 (1987) 赤石岳と大井川上流部の蝶類採集報告. 駿河の昆虫, (138): 4001-4003

土屋忠男 (2008) 富士山にてカラスシジミを記録. やどりが, (218): 38

井上勇治 (2009) 静岡県小山町の蝶の記録. 駿河の昆虫, (227): 6287-6288

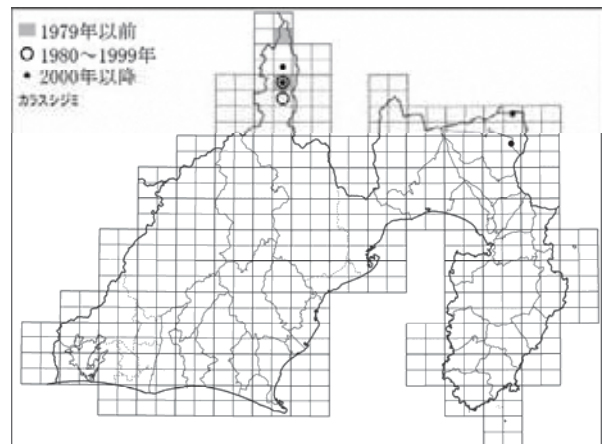
小堀 一 (2016) 大井川上流で採集・目撃した蝶 5 種. 駿河の昆虫, (255): 6990-6991

## 9. 標本

静岡市産 (少数個体) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵



静岡市産♂裏面 2016年7月19日 諏訪哲夫採集



(諏訪哲夫)

# オオミスジ *Neptis alwina* (Bremer & Grey, 1852)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード11,13

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 65~75 mm。表面は黒地に白い筋状の紋が並ぶ。裏面は地色が赤茶色となり斑紋は表面とほぼ同様。オスメスとも斑紋は大差ないが、メスは大きく翅が丸い。幼虫の食餌植物はウメ、スモモなどでほぼ栽培植物に依存している。幼虫で越冬。年1回6月上旬から現れ、8月まで見られる。

## 2. 分布

国外では中国、モンゴル、ロシア南東部、朝鮮半島に、国内では北海道西南部から滋賀県まで分布する。県内では静岡市を東限として、川根本町及び浜松市などの標高 200~1,400 m の山間部に分布している。

## 3. 生息環境

中部及び西部の、植栽されたウメやスモモのある山間地の集落及びその周辺に生息している。大井川上流部の樫島や、さらに上流の標高 1,400 m の二軒小屋にも生息している。

## 4. 生息状況

以前記録のあった標高の低いいくつかの地域から最近記録がなくなるとともに、かつては安定していたやや標高の高い山間部でも個体数が減少したことなどにより、絶滅を危惧するランクは準絶滅危惧 (NT) となっていた。しかし、その後の詳細な調査によりいくつかの新たな産地が見つかるとともに、個体数も安定していることが判明している。

## 5. 減少の主要因と脅威

比較的寒冷な気候条件を好む本種にとって、標高の低い地域で生息が確認できなくなっていることから温暖化による影響 (71) が考えられる。またほとんど栽培植物に依存していることから栽培植物の管理方法 (71) が本種の生息に直接影響していることも考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

神奈川県ではすでに絶滅したとされている。

## 8. 主な文献

斉藤伸行 (2015) 2013~2015年、静岡県西部のオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (251): 6898

諏訪哲夫 (2007) 2007年オオミスジの記録. 駿河の昆虫, (220): 6126-6127

高橋真弓 (1967) 静岡県とその周辺におけるミスジチョウ属 *Neptis* の分布. 駿河の昆虫, (60): 1667-1714

高橋真弓 (2008) 2008年静岡市および山梨県南部におけるオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (226): 6258-6260

高橋真弓・斉藤伸行 (2016) 2015年静岡県中部および山梨県南部におけるオオミスジの記録. 駿河の昆虫, (256): 7005-7006

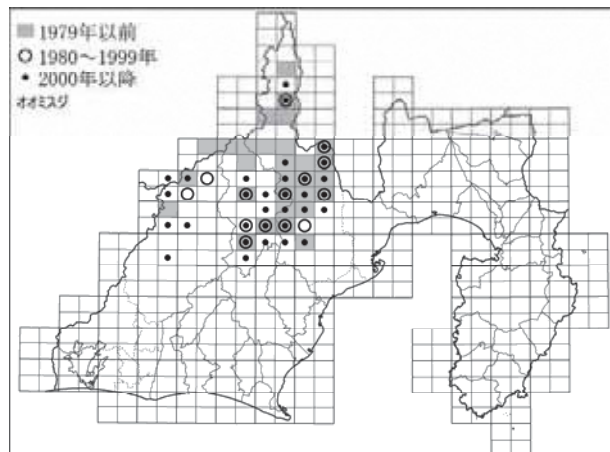
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市産♀表面 2014年8月6日 諏訪哲夫採集



# コムラサキ *Apatura metis substituta* Butler, 1873

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更コード 9

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等 (富士川以西)) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 60 mm。翅表は褐色の地色で、中央に橙色帯がある通常の型と、地色がさらに黒く橙色帯部分が白色に置き換わった、“クロコムラサキ”と呼ばれる遺伝型がある。“クロコムラサキ”のほうが遺伝的に劣性と考えられている。どちらもオスの翅表は紫色に光る。幼虫の食餌植物はヤナギ類。幼虫で越冬。平地では年3回発生するが、標高が増すにつれ発生回数を減らし、高い場所では年1回の発生となる。午後になると樹の梢でなわばりを張る。成虫は樹液に集まる。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパから中央アジアを経て中国、朝鮮半島に至るユーラシア大陸北部に、国内では通常の型は全国的に分布している。しかし、“クロコムラサキ”は、東海地方、北陸地方及び南九州以外ほとんど見られない。県内では通常の型は伊豆半島から北遠地方まで分布しているが、“クロコムラサキ”は東部では稀で、伊豆からは記録がない。

## 3. 生息環境

標高およそ 100 m 未満～1,500 m にかけて、河川の堤防、河川敷などに生育するコゴメヤナギなどのヤナギ林が主な生息地となる。

## 4. 生息状況

今のところ、県内の各河川にはおおむね見られるが、河川敷のグラウンドや公園の整備など各種の開発により、生息地は減少する一方である。湖西市の産地は河川改修のため消失した。理由は不明であるが大井川源流部ではここ3～4年激減している。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川敷の土地利用の進展や河川改修(13)によりヤナギ林の面積が狭められ、生息地が減少した。“クロコムラサキ”は、比較的採集圧(41)が高い。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

遺伝的な二つの型が同所的に見られることが多いが、黒色型“クロコムラサキ”が出現する比率は地域により異なり、大井川中流や安倍川上流で高く、これらの河川の下流部や天竜川では低い。

## 8. 主な文献

深澤政晶 (2016) 静岡県東部のコムラサキ黒色型. 駿河の昆虫, (253): 6940-6941

福井順治 (1977) 佐久間・水窪の蝶類(Ⅲ). 駿河の昆虫, (96): 2824-2829

白井和伸 (2002) 天竜川中・下流域のコムラサキについて. 駿河の昆虫, (197): 5499-5509

高橋真弓 (1954) 静岡県に於けるクロコムラサキ分布(第2報). 駿河の昆虫, (5): 88-94

宇字和輝 (2008) 大井川源流域・二軒小屋地域の蝶 [Ⅳ・2006年]. 駿河の昆虫, (224): 6208-6222

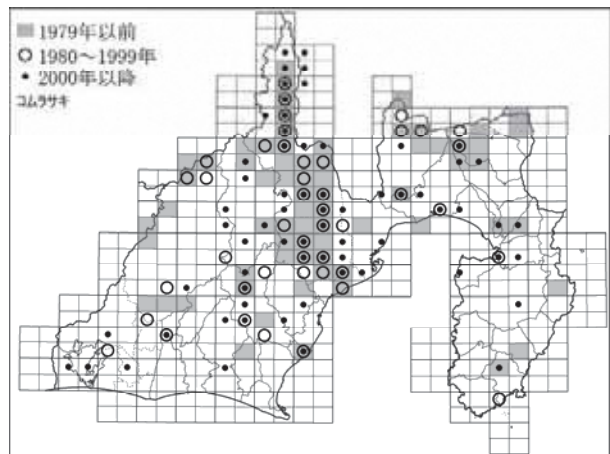
## 9. 標本

各産地(多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産み表面 2015年7月25日 諏訪哲夫採集





# クモマベニヒカゲ *Erebia ligea takanonis* Matsumura, 1909

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 45 mm。黒褐色の地色に橙色の帯があり、その中に黒点が縦に並ぶ。後翅裏面の橙色帯の内側に白い帯がはっきりと現れる。幼虫はイネ科、カヤツリグサ科の草本を食べることが各地から記録されているが、県内では調べられていない。1年目の冬を卵で越し、2年目は幼虫で越冬し、3年目に成虫になるとされるが、はっきりとは調べられていない。高山蝶の一種。

## 2. 分布

国外ではヨーロッパからシベリアを経てサハリン、朝鮮半島北部にわたり広く、国内では北海道大雪山塊と利尻島、本州中部山岳地域に分布する。県内では南アルプスの主稜に産地は多く、浜松市天竜区水窪町中ノ尾根山が日本の南限であり、世界的にも南限となる。

## 3. 生息環境

森林限界付近の高茎草原の“お花畑”や雪崩草原、樹林帯に生じた小草地が分布の中心となるが、開放的な草原ではなく、ある程度樹林を混じえた疎林を好む。垂直分布の下限はベニヒカゲより高いが、森林限界より高い場所では発生していない。

## 4. 生息状況

南アルプス主稜線は、良好な自然環境が保たれており、個体数は多い。シカの食害により“お花畑”の植生が損なわれ、蜜源として成虫が集まる場所が縮小している。

## 5. 減少の主要因と脅威

シカの食害(54)による植生の破壊。登山客増加による踏圧に加え、登山者のストックによる植生破壊(54)も無視できない。

## 6. 保護対策

産地の一部は国立公園特別保護地区に含まれ、採集は規制されている。各地の“お花畑”ではシカ侵入防止柵を設置して高山植物を保護しており、これが本種の保護にも役立っている。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

北條篤史(2003)南アルプス笹ヶ岳の蝶類分布調査. 駿河の昆虫, (204): 5679-5680

中谷貴壽(2000)南アルプス主稜線のベニヒカゲとクモマベニヒカゲ(1)(2)(3). 蝶研フィールド, 169, 175, 181.

白井和伸(2001~2016)南アルプスの蝶類調査記録(1992~2014年). 駿河の昆虫, 194~256 掲載各号.

白井和伸(2013)南アルプス主稜線のベニヒカゲ属近況. 静岡昆虫同好会 60周年記念誌, pp. 122-127. 静岡昆虫同好会, 静岡.

高橋真弓(1953~2000)大井川水源地方蝶類分布調査報告(1)~(24). 駿河の昆虫, 4~191 掲載各号.

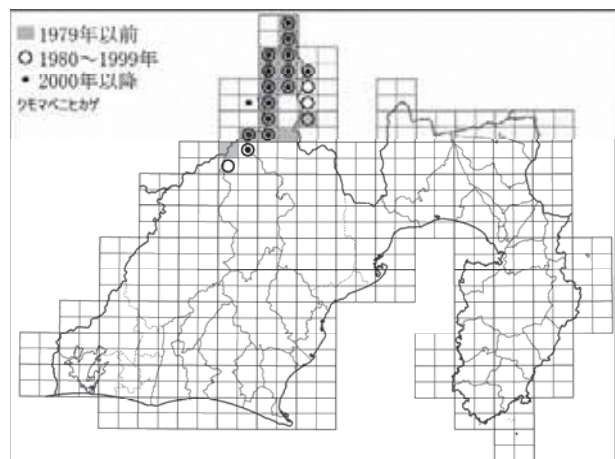
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(白井和伸・諏訪哲夫)



静岡市産み表面 2008年8月9日 諏訪哲夫採集



静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

開張およそ 40~45 mm。黒褐色の地色に橙色の帯があり、その中に黒点が縦に並ぶ。産地ごとに橙色の帯と黒点の現れ方の変異が大きく、特に後翅橙色帯の発達度合いは変異が著しい。また、前衛の山など低標高の産地では大型となる。幼虫の食餌植物はイネ科、カヤツリグサ科であるが、県内では詳しくは調べられていない。成虫は年1回発生し、主に8月に見られる。高山蝶の一種。

### 2. 分布

本種を一括 *neriene* として扱えば、国外ではサハラ、ロシア極東、モンゴル、中国東北部、朝鮮半島などに、国内では北海道、本州の東北から中部山岳地域に分布する。中部山岳地域のものはいわゆる“高山蝶”の一種とされる。県内では南アルプス主稜からは多くの記録があり、それから南へ続く白倉山（水窪町）、大無間山（静岡市井川）、山伏（静岡市梅ヶ島）などがそれぞれの支稜の南限となっている。

### 3. 生息環境

標高 2,000~2,500 m の森林限界付近の“お花畑”に最も多い。沢の源頭などに発達する高茎草原、稜線付近の雪崩草原、樹林帯の縁の小草地など、“お花畑”や、谷筋の草付などの開けた場所に多い。

### 4. 生息状況

南アルプス主稜線は良好な自然環境が保たれており、個体数は多い。一方、前衛の山々や谷筋などの産地の中には静岡市山伏のようにササが大きくなり消滅した産地や、砂防ダム建設などにより減少している場所がある。シカの食害により“お花畑”の植生が損なわれ、蜜源として成虫が集まる場所が縮小している。

### 5. 減少の主要因と脅威

ササが大きくなり消滅した産地や、シカの食害による植生の破壊（54）、登山客増加による踏圧に加え、登山者のストックによる植生破壊（51）も無視できない。

### 6. 保護対策

生息地の一部は国立公園特別保護地区に含まれ、採集は規制されている。各地のお花畑ではシカ侵入防止柵を設置して高山植物を保護しており、これが本種の保護にも役立っている。

### 7. 特記事項

近年の DNA 研究では本州産が日本固有種となる可能性もある。

### 8. 主な文献

紅日影（2004）ベニヒカゲ物語—八ヶ岳高山帯のベニヒカゲの生態—。自刊，69 pp.

中谷貴壽（2000）南アルプス主稜線のベニヒカゲとクモマベニヒカゲ(1)(2)(3)。蝶研フィールド，169，175，181。

白井和伸（2001~2016）南アルプスの蝶類調査記録(1992~2014年)。駿河の昆虫，194~256 掲載各号。

白井和伸（2013）南アルプス主稜線のベニヒカゲ属近況。静岡昆虫同好会 60 周年記念誌，pp. 122-127。静岡昆虫同好会，静岡。

高橋真弓（1953~2000）大井川水源地方蝶類分布調査報告(1)~(24)。駿河の昆虫，4~191 掲載各号。

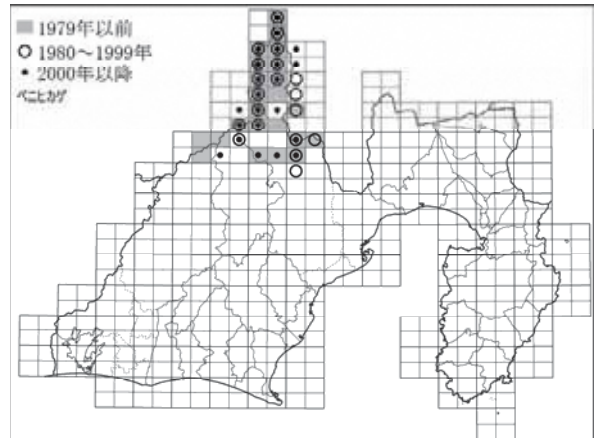
### 9. 標本

各産地（多数）：ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

（白井和伸・諏訪哲夫）



静岡市産♂表面 2006年8月13日 諏訪哲夫採集



# キマダラモドキ *Kirinia fentoni* (Butler, 1877)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード 11, 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧II類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

オスの開張はおよそ 55 mm、メスはやや大きい。褐色の地色に黄褐色の斑紋が散らばる。裏面の後翅の眼状紋が目立つ。幼虫の食餌植物はイネ科、カヤツリグサ科の各種の草本。孵化した幼虫は食を摂らず1齢幼虫で越冬する。成虫は年1回7月下旬に発生し、9月上旬まで見られる。樹液などを吸汁する。

## 2. 分布

国外ではロシア南東部、中国東北部、朝鮮半島に、国内では北海道、本州、四国に分布するがいずれの地域でも生息地は局地的である。県内では富士山麓の標高 600～1,300 m、御殿場市、裾野市、富士市、富士宮市から記録がある。

## 3. 生息環境

富士山麓の標高 600～1,300 m に広がるカシワの疎林や、草原に隣接するクヌギ、ウラジロモミ、アカマツを交えた落葉広葉樹の疎林内などが生息地となる。

## 4. 生息状況

富士市では 1960 年代に愛鷹山越前岳から記録があるが 1970 年代以降記録がない。富士宮市は富士山西麓に 1980 年代後半まで比較的広範囲に生息していたが、その後の記録がない。富士山東麓ではかつて広く生息していたにもかかわらず、自衛隊東富士演習場内は調査できないまま、1990 年頃以降演習場の周辺も含めて情報が途絶え、県内の生息状況は明らかではなかった。しかし、演習場内の立入が可能となり調査したところ、個体数も少なく、安定して生息していることが明らかとなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

富士山西麓では各種の開発 (16) のほか、草原の放置による植生遷移の進行 (54) で、生息に適した「多様性のある草原—疎林—明るい森林」といったパターンが消滅したことが主な要因と考えられる。東富士演習場内は開発が行われることなく、生息環境は保たれ、本種の生息も安定した状況にあるといえる。

## 6. 保護対策

草原と疎林が維持されることが望まれる。

## 7. 特記事項

神奈川県では絶滅危惧 I A 類にランクされている。

## 8. 主な文献

清 邦彦 (1988) 1988 年富士山の蝶. 駿河の昆虫, (144): 4153-4155

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓 (2012) 2011 年, 富士山地域の蝶類の記録. 駿河の昆虫, (237): 6534-6539

高橋真弓 (1963) 愛鷹山越前岳付近 8 月上旬の蝶. 駿河の昆虫, (44): 1209-1210

高橋真弓 (1979) 静岡県および山梨県におけるキマダラモドキ (ジャノメチョウ科) の分布. 東海自然誌, (3): 1-13

谷川久男 (2012) 裾野市須山でキマダラモドキを採集. 駿河の昆虫, (239): 6595

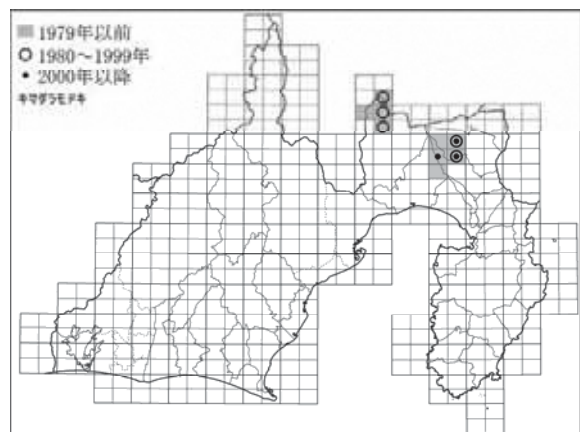
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



裾野市産♀裏面 2012年8月8日 諏訪哲夫採集





# クロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* (Motschulsky, 1861)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)変更コード 11, 13

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) ]

## 1. 種の解説

開張およそ 60 mm。暗褐色の地色の翅表に 3 個、翅裏に 9 個の眼状紋をもつ。年 1 回 7 月上旬より発生し、9 月初旬まで見られる。幼虫の食餌植物はススキ、オオアブラススキなど。幼虫で越冬する。夕暮れ薄暗くなつてから活発に活動する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア南東部に、国内では本州、九州、四国に分布する。県内では安倍川流域以西の山地に分布し、富士山、伊豆半島には分布しない。

## 3. 生息環境

やや暗い谷沿いの雑木林や、その周辺で見られる。日中は林内にいてあまり活動しないが、夕暮れ薄暗くなると林道などの開けた空き地に出てきて活発に活動を始める。

## 4. 生息状況

1980 年代の終わりまでは標高およそ 1,000 m 以下の安倍川以西の山地に比較的広く記録があるが、1990 年代になって特に低山地からの記録が少なくなった。2000 年代の初め以降、調査を各地で綿密に行うことにより各地から生息が確認されるようになった。

## 5. 減少の主要因と脅威

2 次林である雑木林や疎林は人手が入らないと荒廃や植生遷移が進みやすく、暗い樹林になることが要因の一つとみられる (53)。

## 6. 保護対策

里山や山間地の森林の整備が進むことが望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

菊地泰雄・竹内克弥 (2014) 2013 年, 静岡県中・西部のクロヒカゲモドキの記録. 駿河の昆虫, (246): 6776

菊地泰雄 (2015) 静岡県中・西部のクロヒカゲモドキの記録 (2014 年). 駿河の昆虫, (250): 6873

高橋真弓 (1962) 静岡県およびその付近のクロヒカゲモドキの分布. 駿河の昆虫, (40): 1085-1107

高橋真弓 (2008) 2007 年安倍川支流におけるクロヒカゲモドキの分布調査. 駿河の昆虫, (222): 6180

高橋真弓 (2014) 2013 年, 静岡市葵区におけるクロヒカゲモドキの新記録地点. 駿河の昆虫, (246): 6775-6776

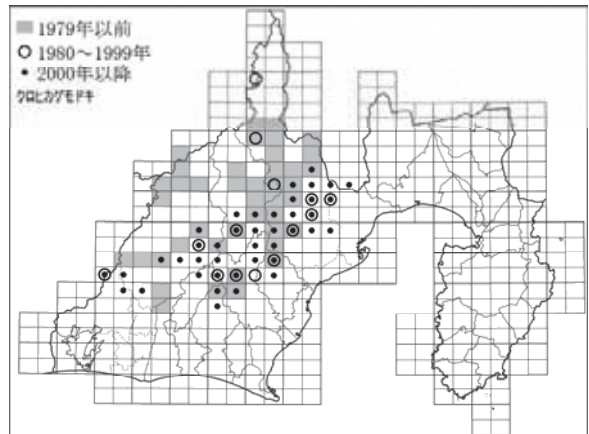
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



静岡市産♀裏面 2013 年 8 月 22 日 鈴木英文採集



# シュゼンジフユシヤク *Inurois kobayashii* Nakajima, 1992

シヤクガ科 Geometridae

静岡県カテゴリー 部会注目種(N-II 分布上注目種等) 変更なし

[2004年版カテゴリー 部会注目種(N-II 分布上注目種等) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張オス 24~28 mm。メスは体長 8~9 mm で翅を欠く。オスの触角は鋸歯状で 51~55 節。メスは糸状。オス前翅の地色は黄褐色、外横線は M1 で角張る場合が多い。外観はフタスジフユシヤクに似るが、メス交尾器に差異がある。成虫は 1 月上~下旬に出現する。幼虫はソメイヨシノで飼育できる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州（静岡県伊豆市修善寺周辺）のみでえられている。

## 3. 生息環境

食樹となるサクラなどが存在する広葉樹林。

## 4. 生息状況

1990 年 12 月~1991 年 1 月にかけて採集された個体に基づいて、新種記載された。その後、1993 年まで調査が行われ成虫が確認されている。現状では国内で伊豆市修善寺のみに生息することになり、分布上注目される。最近では、2013 年 1 月に採集記録がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

特になし。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし

## 8. 主な文献

中島秀雄 (1998) 日本産フユシヤクガ類 (鱗翅目, シヤクガ科) の分類学的, 生態学的研究. *Tinea*, 15 (suppl. 2): 1-246

Nakajima, H. (1992) Descriptions of two new species of *Inurois* (Geometridae, Oenochrominae) from Japan, with special reference of female genitalia. *Tinea*, 13: 209-220

中島秀雄 (2011) シヤクガ科フユシヤク亜科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑 I, pp. 200-203. 学研教育出版, 東京.

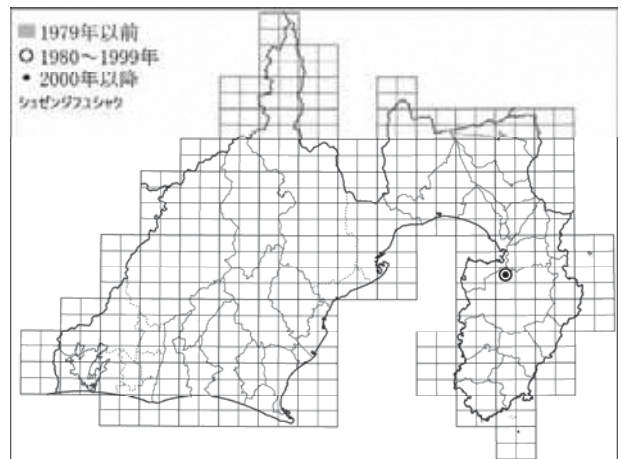
## 9. 標本

伊豆市修善寺産 : 国立科学博物館所蔵 (ホロタイプ)

(枝恵太郎)



伊豆市産♂上面 2013年1月13日 飯森政宏採集



# キタダケヨトウ *Anarta odontites* (Boisduval, 1829)

ヤガ科 Noctuidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-II 分布上注目種等) 変更コード 17

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-I 現状不明) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張約 30~36 mm。オスの触角は微毛状。前翅は暗灰色で内・外横線間はやや暗色を呈し、環状紋は白色、暗色の核を有し、その下方の淡色影に接続する。成虫は7~8月に採集されている。ヨーロッパでは、マメ科、ナデシコ科などの草本を食べるとされる。

## 2. 分布

国外では中部~南部ヨーロッパの山地帯から中近東、モンゴル、チベットから知られ、国内では赤石山脈北岳の標高約 2,600 m 付近、県内では大井川上流小西俣付近の標高 1,800 m での記録があるのみ。

## 3. 生息環境

ヨーロッパでは高山の岩場でまばらな植生環境に生息するとされる。

## 4. 生息状況

北岳の標高約 2,600 m 付近では 1959 年と 1962 年の 8 月上旬に各 1 オス、県内大井川上流小西俣付近の標高 1,800 m では 1968 年 7 月下旬に 1 オスの記録があるのみ。その後小西俣付近において、1998~2001 年の間に調査を実施したが確認できなかった。

## 5. 減少の主要因と脅威

特になし。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

神保一義 (1998) 日本の珍しい蛾 -10- キタダケヨトウ. やどりが, (177): 29

H. Hacker, L. Ronkay & M. Hreblay (2002) Hadeninae 1. -Noctuidae Europaeae, volume 4-, pp. 25-26. pl. 1. Entomological Press, Soro, Denmark.

吉松慎一 (2011) ヤガ科ヨトウガ亜科. 岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑 II, pp. 368-384. 学研教育出版, 東京.

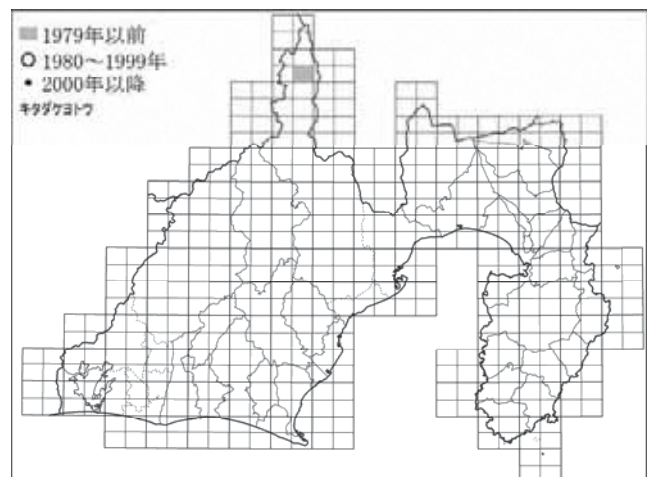
## 9. 標本

静岡市産: 農研機構 農業環境変動研究センター所蔵

(枝恵太郎)



静岡市産♂表面 1968年7月30日 宮下哲夫採集





# オオクサキリ *Ruspolia interrupta* (Walker, 1869)

キリギリス科 Tettigoniidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 38~50 mm、メス 47~53 mm。体は淡緑色で、前胸背板両側部に黄白色の縦条がある。頭部、胸部は大きく、メス産卵器は長い。夕方から活動が活発になり、ススキの上部に出てきて鳴く。多くは「チャキチャキチャキ……」と鳴くが、「ジャー」という早鳴き型、「ジュワジュワジュワ……」と鳴く遅鳴き型もある。成虫は7月下旬~9月に見られ、8月が最盛期である。

## 2. 分布

国外では、朝鮮半島、中国、インド、ネパールに、国内では本州（新潟平野、関東平野など）、九州（平尾台、由布岳山麓）に局所的に分布し、県内では伊豆、東部（富士山麓）に分布する。

## 3. 生息環境

関東地方では海岸河口付近のチガヤやススキなどがまばらに生えた砂地や、広い湿原のヨシ原に生息し、九州では山地の高茎草原に生息する。県内の生息地は広大なススキ草原である。

## 4. 生息状況

生息地での個体数は多いが、高標高地に行くにしたがい減少する。富士山麓では標高 600 m 以下に多く生息するが、それより上部では局所的となる。

## 5. 減少の主要因と脅威

管理放棄による植生遷移の進行 (53、54) があると生息環境の消失となる。現状では継続して山焼きが行われていて、今後も生息環境は維持されるものと思われる。面積の狭い生息地では環境の消失 (16) により姿を消してきた可能性はある。

## 6. 保護対策

ススキ草原維持のための山焼きが行われている。

## 7. 特記事項

広大なススキ草原の環境変化を把握するための指標種として注目していくことが望まれる。

## 8. 主な文献

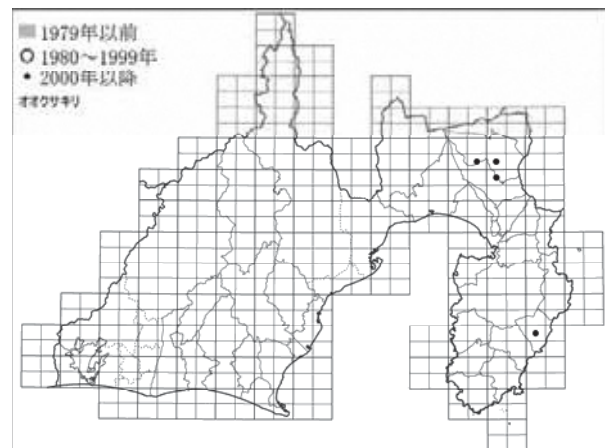
日本直翅類学会 編 (2016) 日本産直翅類標準図鑑. 学研プラス, 東京, 384 pp.

## 9. 標本

裾野市産、東伊豆町産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



裾野市大野原 2016年8月8日 石川 均



(石川 均)

# スルガセモンササキリモドキ *Nipponomeconema surugaense* Yamasaki, 1983

ササキリモドリ科 Meconematidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) 変更なし

2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長オス 14.5 mm、メス 16.5~18.0 mm。体は淡い黄緑色で、前胸背板のチョコレート色の紋がオスでは特に美しい、小型のササキリモドキ科昆虫である。前翅、後翅とも完全で、飛翔する。他に日本から近似の種が3種記載されているが、識別は難しい。成虫は8~10月に見られる。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県、愛知県、長野県などに分布する。県内では大井川上流の畑薙ダム周辺、藤枝市高根山及び浜松市(旧水窪町)兵越峠で確認されている。静岡市赤石温泉が基準産地である。

## 3. 生息環境

ブナ帯のクリ、ミズナラなどの良好に残されている落葉広葉樹林に生息し、スギ、ヒノキなどの人工林地帯では通常見られない。

## 4. 生息状況

通常の採集方法では確認することが難しいため、詳しいことはわかっていない。夜間調査や灯火採集で確認されるが、県内いずれの生息地においても確認される個体数は非常に少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

自然度の高い森林の伐採(11)が本種の生息に脅威となると考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

生息確認地ではこれまでに生息状況に変化はみられていないので、環境変化を把握するための指標種として今後も注目していくことが望まれる。

## 8. 主な文献

石川 均 (2000) スルガセモンササキリモドキのオス尾端の図. バッタリギス, (123): 78

杉山高史 (2008) 志太地域におけるササキリモドキ類の採集記録. 駿河の昆虫, (222): 6167-6168

Yamasaki, T. (1983) *Nipponomeconema*, a new genus of the Japanese Meconematinae (Orthoptera, Tettigoniidae), with the description of four new species. *Annot. Zool. Jpn.*, 56(1): 59-67

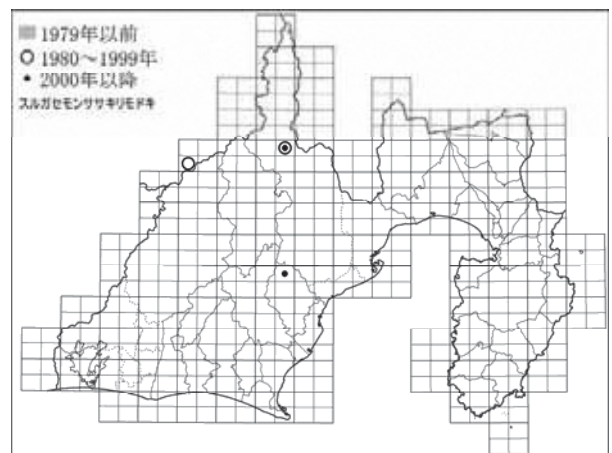
## 9. 標本

静岡市赤石温泉産: 国立科学博物館所蔵 (ホロタイプ、パラタイプ)

(石川 均)



静岡市葵区畑薙 2015年9月24日 石川 均



静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長(翅端まで) オス 31.0~36.0 mm、メス 40.5~44.5 mm。前翅が腹端を大きく越すイナゴであるが、前翅が通常腹端に届かないコバネイナゴ *Oxya yezoensis* Shiraki, 1910 の長翅型と紛らわしい。オスの場合は、正確には交尾器を調べる必要がある。メスでは生殖下板に1対の縦隆起線があることで区別できる。成虫は8月下旬頃出現し、10月まで見られる。

### 2. 分布

国外では台湾、中国、東南アジア、インドなどに、国内では本州、四国、九州南西諸島に分布する。本県における正確な記録はほとんどなく、過去の分布状況は不明である。県内では中部からは記録がなく、伊豆南部の下田市・河津町・南伊豆町、伊豆半島西部の松崎町・西伊豆町・伊豆市土肥町・沼津市井田の水田地帯及び東部の富士川河口、西部の遠州浜湿地、中田島砂丘内の湿地、馬込川河口、都田川河口などで確認されている。そのほか、牧ノ原台地にあるゴルフ場内の池にも生息地がある。

### 3. 生息環境

谷戸の水田地帯では水田内及びその周囲のイネ科草地に生息しているが、広い平野部の水田地帯にはいない。また、河川感潮域のヨシ原は個体数が多く生息適地となっている。

### 4. 生息状況

伊豆半島南部の生息地においては、10年程前には耕作放棄や開発による生息地の消失のため減少した場所が見られたが、近年河川沿いに分布を上流側に広げている場所がある。また、松崎町石部の棚田は生息密度が非常に高い。県内河川河口部のヨシ原ではおおむね大きな変化はなく維持されているが、富士川河口部では2010年9月の台風9号による洪水後姿が見られなくなった。

### 5. 減少の主要因と脅威

耕作放棄(53)による植生遷移(54)、宅地開発などによる生息環境の消失(23)が挙げられるが、分布を拡大している地域も見られ減少の程度は不明である。河川河口部の河床掘削、河川改修(13)は脅威となる。洪水による生息地への影響も生じている(55)。

### 6. 保護対策

松崎町石部の棚田では無農薬の稲作が行われていることから良好な生息環境が維持されている。

### 7. 特記事項

コバネイナゴは乾燥したイネ科草地にも生息するが、ハネナガイナゴは県内では湿性草地に限られる。

### 8. 主な文献

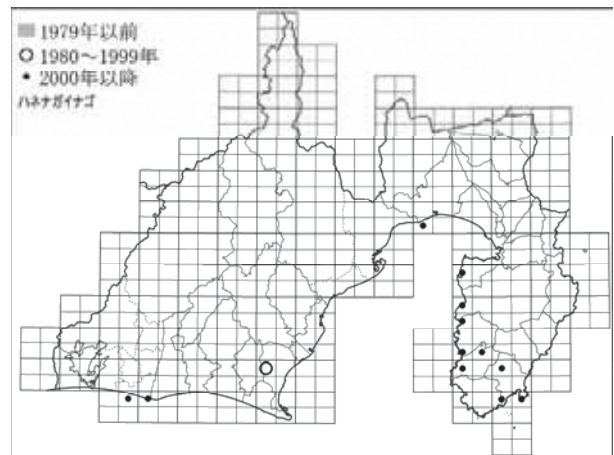
石川 均(1988) ハネナガイナゴは回復しつつあるのか. バッターギス, (78) : 2785-2786

### 9. 標本

富士市五貫島産ほか : 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



下田市吉佐美 2008年9月27日 石川 均



(石川 均)



静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

体長(翅端まで) オス 30.0 mm、メス 37.5~41.3 mm。前胸背板が濃褐色を呈することが和名の由来となっている。生時は複眼に縦の縞模様が目立つ。後脚腿節内側と基部をのぞく後脚脛節は赤い。成虫は7月下旬から10月頃にかけて見られる。人の気配ですぐに飛び立つが遠くに飛翔することはなく、丈の高い植物群落に潜り込むため確認が難しい。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、沿海州南部、中国、インドなどに、国内では本州、四国、九州、対馬、南西諸島に分布する。県内では天竜川以西の浜松市(旧浜北市・引佐町・三ヶ日町)の数ヶ所及び大井川、安倍川、富士川の下流域河川敷に分布するほか、東伊豆町、伊東市、裾野市、御殿場市のススキ草原に分布する。

### 3. 生息環境

西部の生息地は、湿地付近にある、よく茂っているがあまり背丈の高くないススキやヨシなどのイネ科草本を主とした草地である。中部河川敷の生息地はチガヤ、カワラケツメイ、カワラヨモギなどの生育する背丈の低い乾燥気味の草地である。ただし、いずれの生息地も背丈の低い草地に隣接して背丈の高く密なススキなどの草がセットで立地している。東部、伊豆では広大なススキ草原に生息する。

### 4. 生息状況

ふつう生息密度は低い、大河川の河川敷やススキの草原では生息密度の高い場所が多くある。

### 5. 減少の主要因と脅威

環境が維持されれば問題ないが、河川敷の公園化(13)は生息環境消失につながる。また、移動能力が小さくないため生息環境の分断(23、24)が脅威となる。

### 6. 保護対策

裾野市と御殿場市の生息地は自衛隊演習場内にあり、生息環境は維持されている。東伊豆町と伊東市の生息地も毎年山焼きが行われて生息環境が維持されている。

### 7. 特記事項

生息には低茎草地と高茎草地のセットが必要で、ある程度の面積も必要と考えられる。

### 8. 主な文献

内田正吉(2013) 消えゆく河原の生きものたち。エッチエスケー、東京、146 pp.

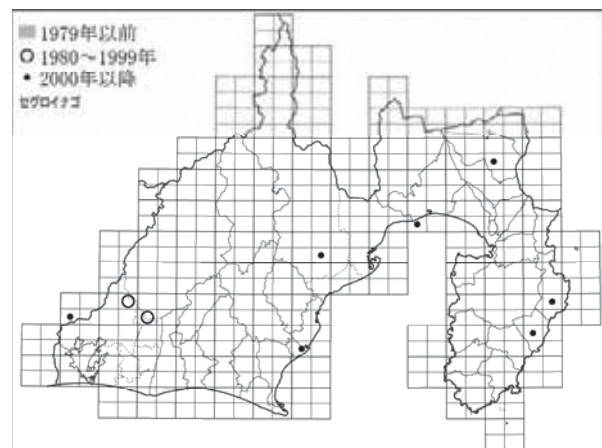
渡辺一雄(1983) 遠州地方産昆虫分布資料(2)。遠州の自然、(6): 10-12

### 9. 標本

浜松市北区三ヶ日町産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



富士市五貫島 2011年11月5日 石川 均



(石川 均)

### 1. 種の解説

体長オス 16.0~20.7 mm、メス 18.3~23.5 mm。体全体黄色みが強い点で、近縁の他のヒナバッタ類から区別される。通常は前翅に斑紋を欠く点も特徴となっている。6月頃成虫が出現し、10月までは見ることができる。

### 2. 分布

国外ではロシア、中国、モンゴルに、国内では北海道、本州に分布する。北海道の記録は誤同定の可能性がある。静岡県からは正式に記録されたものはないが、東部と中部に分布する。富士山中腹と南アルプス南部の標高 1,300~1,500 m 付近で採集されている。静岡県が分布の南限となる。

### 3. 生息環境

ブナ帯の林道沿いにあるイネ科の草地や牧場、スキー場周囲の草地などで、日当たりは良く草丈は高くない場所である。

### 4. 生息状況

ある程度面積的にまとまった草地では生息数は多い場合があるが、県内ではふつう生息密度は低く、生息環境は連続していないため局所的な分布をしている。遷移の進行によって姿を消した場所もある。

### 5. 減少の主要因と脅威

遷移の進行(54)、草地開発(16)などによる生息環境の悪化により生息地が消失した場所がある。道路沿いの小規模な草地は知らない間に消失するが多い。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

野澤(1950)によりヒジグロヒナバッタ *Ch. fumatus* (Shiraki, 1910) の名で南アルプスに産するとされているのは本種である。

### 8. 主な文献

石川 均(1999) タカネヒナバッタは大陸からやってきた. バッタリギス, (120): 48

石川 均(2008) 日本産ヒナバッタ類とその見分け方. 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター 編, 大阪市立自然史博物館叢書-④鳴く虫セレクション, pp. 61-69. 東海大学出版会, 秦野.

野澤 登(1950) バッタの解説(1). 新昆虫, 3(3): 25-27

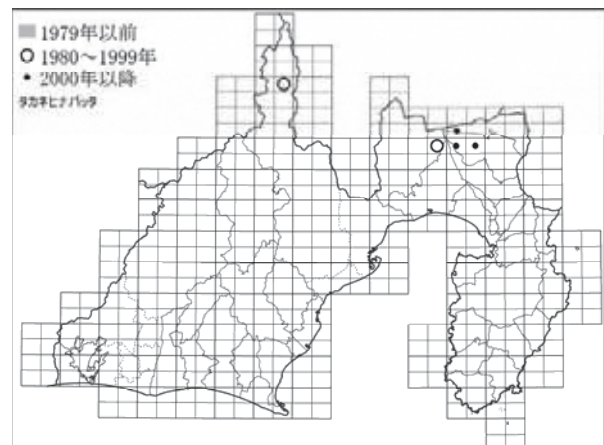
### 9. 標本

静岡市葵区田代産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(石川 均)



©2019 H. Ishikawa  
御殿場市太郎坊 2008年8月14日 石川 均



### 1. 種の解説

体長オス 11~14 mm、メス 14~16 mm。高山性の小型のヒナバッタで、オスの前翅はやや短く、後翅は極端に縮小し飛ぶことはできない。メスの前翅は紡錘形で小さい。褐色型と緑色型がある。八ヶ岳の亜種 ヤツコバネヒナバッタ *Ch. f. yatsuanus* Yamasaki, 1968 によく似るが、オスはさらに小型である。成虫は 8 月に出現し、10 月末の積雪時までは見られる。

### 2. 分布

南アルプス高山帯に分布する南アルプス固有亜種である。県内では、農鳥岳、塩見岳から茶臼岳付近まで生息する。基準亜種はロシア、中国、モンゴルに分布する。国内には他に、亜種エゾコバネヒナバッタ *Ch. f. strelkovi* Bey-Bienko, 1949 が北海道東部、東北地方北部に分布し、亜種ヤマトコバネヒナバッタ *Ch. f. yamato* Yamasaki, 1968 が関東山地の浅間山、本白根山周辺、亜種ヤツコバネヒナバッタが八ヶ岳に分布し、他に未記載の亜種フジコバネヒナバッタ *Ch. f. ssp.* が富士山、キソコマコバネヒナバッタ *Ch. f. ssp.* が中央アルプスに分布している。

### 3. 生息環境

標高 2,300 m 付近の亜高山帯上部から、聖岳、塩見岳、農鳥岳など標高 3,000 m を超す山頂まで、ヒメノガリヤスなどのイネ科草本の生育するところに生息する。

### 4. 生息状況

通常個体数は多くないが、聖平付近のようにイネ科草が広く見られる場所では個体数は非常に多い。生息地は連続しているわけではなく、ハイマツ群落などにより分断されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

特に減少が著しいという事実はない。しかしながら、稜線付近によく見られるため、登山者による植物の踏みつけによる生息環境悪化及び登山者による直接的な踏みつぶしが心配される (51)。

### 6. 保護対策

生息地のほとんどは南アルプス国立公園の特別保護地区や第一種特別地域であるため、採集圧や開発行為のおそれはほとんどない。

### 7. 特記事項

開発による影響はないが、近年の急激な温暖化による環境の変化が生息地縮小をもたらすことが考えられる。なお、キツネやサルなど野生動物の餌として重要な位置を占めている可能性がある。

### 8. 主な文献

Ishikawa, H. (2003) A new subspecies of *Chorthippus fallax* (Zubovskiy, 1899) from the Akaishi mountains, central Honshu, Japan (Orthoptera: Acrididae). *Jpn. J. syst. Ent.*, 9(1): 121-125

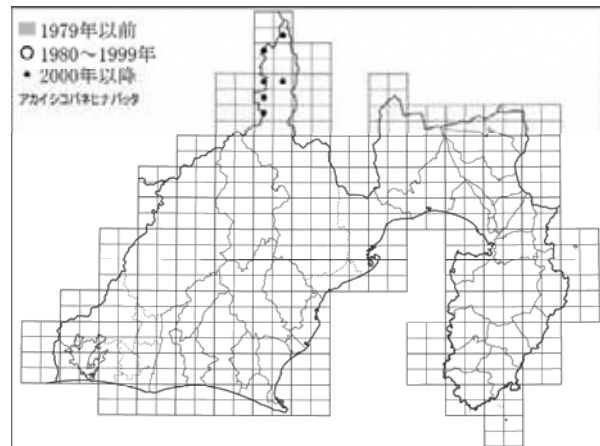
### 9. 標本

静岡市葵区田代産：大阪市立自然史博物館所蔵（ホロタイプ、パラタイプ）、愛媛大学ミュージアム所蔵（パラタイプ）

(石川 均)



©2019 H. Ishikawa  
静岡市葵区田代 2010年9月19日 石川 均





### 1. 種の解説

体長オス 14.0~16.9 mm、メス 20.0~25.3 mm。高山性の小型のヒナバッタで、オスの前翅はやや短く、後翅は極端に縮小し飛ぶことはできない。褐色型だけが確認されている。メスの前翅は紡錘形で小さい。南アルプスの亜種アカイシコバネヒナバッタ *Ch. f. akaishicus* Ishikawa, 2010 によく似るが、触角が短い点で区別できる。成虫は8~9月に出現する。

### 2. 分布

富士山固有亜種(未記載)で、山梨県と静岡県に分布する。高山性のバッタで県内の主要生息地は宝永火口付近にある。国内には他に、亜種エゾコバネヒナバッタ *Ch. f. strelkovi* Bey-Bienko, 1949 が北海道、東北地方北部に分布し、亜種ヤマトコバネヒナバッタ *Ch. f. yamato* Yamasaki, 1968 が関東山地の浅間山、本白根山周辺、亜種ヤツコバネヒナバッタ *Ch. f. yatsuanus* Yamasaki, 1968 が八ヶ岳に分布し、亜種アカイシコバネヒナバッタが南アルプス、他に未記載の亜種キノコバネヒナバッタ *Ch. f. ssp.* が中央アルプスに分布している。

### 3. 生息環境

宝永火口のような草本がまばらな荒原に生息する。標高 2,300 m 程度の亜高山帯上部でも、雪崩跡に成立したまばらなイネ科草本の生育するところには生息するが、そのような場所は一時的と考えられ遷移の進行とともに姿を消す。

### 4. 生息状況

宝永火口付近では個体数は多いが、そのほかでは多くない。生息範囲は標高 2,400 m 付近から 2,800 m 付近までと狭い。

### 5. 減少の主要因と脅威

特に減少が著しいという事実はない。しかしながら、登山道付近によく見られるため、登山者による直接的な踏みつぶし(51)が心配される。

### 6. 保護対策

生息地のほとんどは富士箱根伊豆国立公園の特別保護地区であるため、採集圧や開発行為のおそれはほとんどない。

### 7. 特記事項

開発による影響はないが、近年の急激な温暖化による環境の変化が生息地縮小をもたらすことが考えられる。アカイシコバネヒナバッタ同様に氷期の遺存種である。温暖化の影響に対する環境指標性が高いと考えられる。今後の分類学的整理が望まれる。

### 8. 主な文献

石川 均 (2010) フジコバネヒナバッタ. NPO 法人静岡県自然史博物館ネットワーク 編, しずおか自然史, pp. 170-171. 静岡新聞社, 静岡.

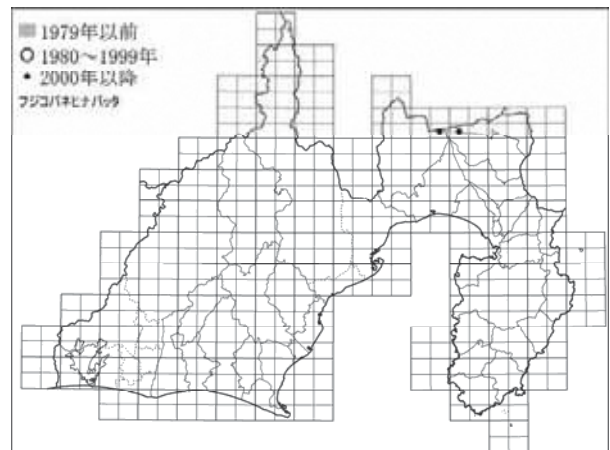
### 9. 標本

御殿場市宝永火口産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)

(石川 均)



©2019 H. Ishikawa  
御殿場市富士山宝永火口 2008年9月5日 石川 均



静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

体長 7.0~11.0 mm。黒色で半翅鞘は茶褐色、銀白色微毛を装い、体側では密生して銀白色の縦条を形成する。肢は黄褐色。体は細長く、両側はおおむね平行、日本産の他のアメンボに比較して、一見して華奢な印象がある。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では沼津市大平、静岡市野丈浅畑川、磐田市桶ヶ谷沼・鶴ヶ池、浜松市南区松島町、浜松市西区大平台佐鳴湖で記録があり、伊豆の国市葦山多田大沢池、富士宮市沼久保、静岡市葵区足久保口組諸川池・芝原麻機遊水池、静岡市駿河区下川原安倍川河川敷、菊川市東横地丑池、浜松市南区白羽町、浜松市西区篠原町などで採集例がある(未発表)。

### 3. 生息環境

ヨシ、ガマなどの抽水植物の豊富な池沼に生息する。抽水植物間の閉鎖水面で生活し、開放水面に出ることはほとんどない。

### 4. 生息状況

県内では各地で生息が確認され、個体数の多い生息地も複数見られた。公園などとして保全されている場所もあることから、全生息地において直ちに絶滅が危惧される状況にはないが、今後の動向に注目していく必要がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

開発(23)などによる生息環境の消失、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)などが脅威となる。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

成虫はほぼ一年中見られる。

### 8. 主な文献

- 井上智雄(1988)エサキアメンボとババアメンボが棲む桶ヶ谷沼. 昆虫と自然, 23(13): 21  
 加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘(2008)第5章1項6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県戦略課題研究「快適空間『佐鳴湖』の創造」研究報告書, pp. 470-523. 静岡県産業部振興局研究調整室, 静岡.  
 北野 忠(2000)静岡県および静岡県近海で確認された水生半翅目. 遠州の自然, (23): 1-8  
 杉山恵一 編(1990)桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. 財団法人日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.  
 矢崎充彦(2001)エサキアメンボ愛知県に産す-東海地方におけるアメンボ科分布資料-. 佳香蝶, 53(207): 39-41

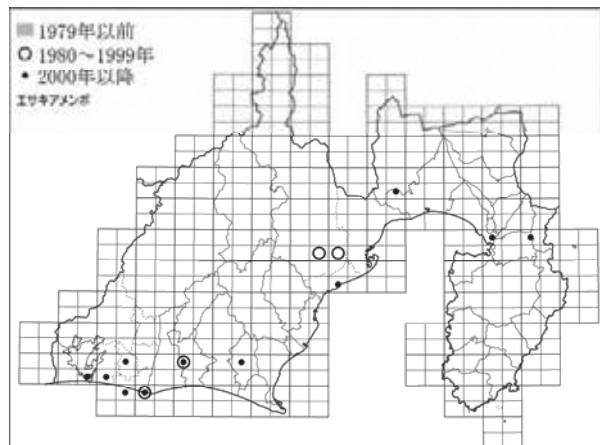
### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa  
 浜松市産 2014年10月1日 石川 均採集



静岡県カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) 変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)

### 1. 種の解説

体長 17~20 mm。黄褐~暗褐色。体はおおむね卵形で、背面はほぼ平坦、前肢は腿節が肥大し、脛節は少し湾曲、跗節は1節で末端の爪とともに鉤状を呈し、全体として捕獲脚をなす。中・後肢は通常の遊泳脚で、中肢はやや短い。

成虫・幼虫とも水中で他の小昆虫や淡水産貝類などの水生生物を捕えて体液を吸汁する。メスはオスの背面に卵を産み付け、オスは卵が孵化するまで保護することで有名。

### 2. 分布

国外では極東ロシア、朝鮮半島、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島、静岡市葵区足久保口組諸川池、掛川市大坂、磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町、浜松市浜北区平口・都田町、浜松市北区引佐町東久留女木・霧山・伊平、細江町中川、浜松市西区雄踏町宇布見、湖西市新所・白須賀で記録があり、下田市箕作、沼津市西浦足保、菊川市潮海寺、浜松市南区白羽町、浜松市西区篠原町・坪井町・馬郡町、浜松市北区引佐町別所・三ヶ日町福長、湖西市古見などで採集例がある (未発表)。

### 3. 生息環境

池沼や湿地、水田脇の水溜まりなどに生息するが、近年水環境の喪失・悪化などにより全国的に減少している。

### 4. 生息状況

県内では東部をのぞく各地から記録があり、特に西部で採集例が多い。個体数の多い場所も少なくなく、現在のところ、県内において減少傾向は認められないようであるが、全国的には生息地が減少していることから、今後その動向について注目する必要がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や圃場整備 (15-2) などによる生息環境の消失、農薬・肥料などによる水質汚染 (32) などが脅威となる。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

記録はないが、東部にも生息している。

### 8. 主な文献

北野 忠 (2000) 静岡県および静岡県近海で確認された水生半翅目. 遠州の自然, (23): 1-8

佐藤卓也 (1993) 静岡県中部・西部におけるタイコウチ科, コオイムシ科について. 駿河の昆虫, (164): 4655-4656

油井雅樹 (1997) 静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

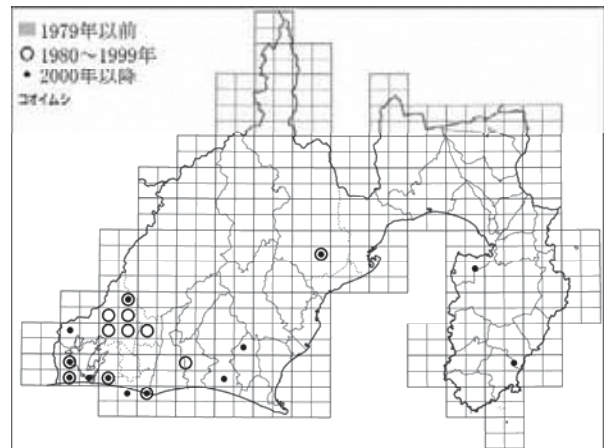
### 9. 標本

下田市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa  
下田市箕作産 2003年9月7日 石川 均採集





# タガメ *Lethocerus deyrollei* (Vuillefroy, 1864)

コオイムシ科 Belostomatidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード 11

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 48～65 mm。灰褐～褐色で背面は半翅鞘の膜質部をのぞき、金褐色短鱗毛を多少とも密生し光沢が鈍い。体はおおむね長円形で、後部は少し細まる。前肢は腿節が強く肥大し、脛節は少し湾曲、跗節は3節ではなはだ短小、末端に1本の鉤状の爪を具え、全体として強大な捕獲脚を成す。中・後肢は通常の遊泳脚で、腿・脛・跗節の内縁あるいは外縁に長毛を生じ、末端の爪は2本。尾端の呼吸管は短小。

成虫・幼虫ともに水中のカエルやオタマジャクシ、小魚などを捕えて体液を吸汁する。メスは6～7月頃、イネ科植物や木の杭などの水面より上の部分に卵塊として産下し、オスは卵が孵化するまで世話をする。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国、極東ロシア、アッサムなどに、国内では本州、四国、九州、対馬、琉球に分布する。県内では伊豆半島、浜松市中区高町、浜松市浜北区宮口、浜松市天竜区、浜松市北区引佐町四方浄・伊平、浜松市北区三ヶ日町の記録があり、他に浜松市北区引佐町東久留女木・別所での採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

丘陵地から山地の水生植物の多い池沼や水田、水田脇の水路などに生息する。

## 4. 生息状況

かつては各地の平地から丘陵地の水田や池沼にふつうに見られたらしいが、近年では西部各地の記録しかないようである。西部では、1990年代前半から散発的に記録されるようになり、場所によっては最近も安定的に生息しており、個体数は少なくないところがある。今後の生息状況の動向について注目する必要がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発(23)や圃場整備(15-2)などによる生息環境の消失、農薬・肥料などの流入による水質汚染(32)、植生遷移の進行(54)に伴う生息環境の変化などが本種と本種の餌になる小動物・昆虫類他の生存を脅かすと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

水田を繁殖地として利用する場合、水田に水が入る5～8月のみに現れて繁殖し、その生活史は稲作の農事暦と同調的であるという。

## 8. 主な文献

石川 均・朝倉俊治(1992) タガメ、静岡県に健在。駿河の昆虫, (157): 4488

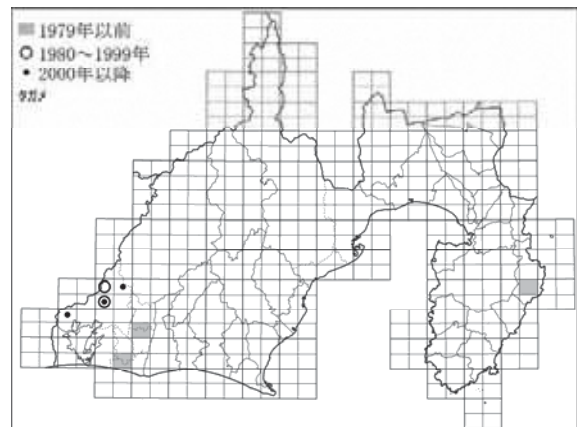
北野 忠(2000) 静岡県および静岡県近海で確認された水生半翅目。遠州の自然, (23): 1-8

## 9. 標本

伊東市産: 平塚市博物館所蔵



浜松市産 1991年8月20日 朝倉俊治採集



(多比良嘉晃)

### 1. 種の解説

体長 5.0～5.9 mm。小型のミズムシで、コミズムシ類 (*Sigara* 属) に似ているがやや細型。顔(頭部腹面)は非常に短く三角形で、口(下唇)の横溝を欠く。前脚の附節は細長く、太い剛毛が列生する。前胸背板には黒色の横帯があり、その斑紋パターンはコミズムシ類と基本的に同じである。

成虫は一年中見られる。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、インドに、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼の記録しかないが、静岡市葵区麻機遊水地、榛原郡吉田町、菊川市東横地、磐田市鶴ヶ池、浜松市南区松島町、浜松市西区大平台・篠原町・坪井町・馬郡町・舞阪町などで採集されている(未発表)。

### 3. 生息環境

ヨシやガマなどの抽水植物が繁茂するやや深い池沼など、安定した止水域に生息する。

### 4. 生息状況

全国的には分布が限られているが、県内では中部から西部にかけて点々と生息地が確認されている。生息地によっては生息密度の高い場所もある。新たに出現した池などで大発生することがあるという。

### 5. 減少の主要因と脅威

良好な池沼の減少(12)、水質悪化(31)、捕食性外来魚の侵入(52-3)が脅威となる。

### 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

### 7. 特記事項

コミズムシ類(植物性プランクトンや藻類食)と異なり肉食性が強いようで、長剛毛が列生した前肢附節で他の水生昆虫やミジンコ類を捕食するという。

### 8. 主な文献

林 正美・宮本正一(2005) 半翅目 Hemiptera. 川合禎次・谷田一三 編, 日本産水生昆虫-科・属・種の検索-, pp. 291-378. 東海大学出版会, 秦野.

杉山恵一 編(1990) 桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査および立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

矢崎充彦・石田和男(2008) 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60(234): 165-200

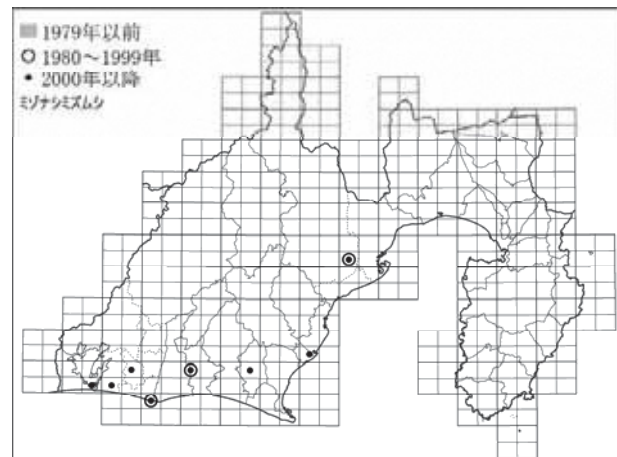
### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

浜松市南区産 2015年2月18日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# アイヌハンミョウ *Cicindela (Cicindela) gemmata aino* Lewis, 1891

ハンミョウ科 Cicindelidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 16～19 mm。背面は暗赤銅～暗緑銅色、体下面は緑～青紫色に、胸側は赤紫色に光る。上唇は黄白色、横長で前縁はほぼ直線状。頭は毛を散生し、上翅の点刻は濃青色、凹点は緑色に光る。翅端紋は弦部を有する。成虫はおもに3～6月に活動し、小昆虫などを捕食する。幼虫は生息場所の砂地に穴を掘って潜み、穴の入り口付近を通りかかった小昆虫などを捕食する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、シベリア南東部に、国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。県内では狩野川水系猫越川・黄瀬川、大井川水系大井川・長尾川、天竜川水系天竜川・気田川・石切川・杉川・大千瀬川など、河川の上・中流部で記録がある。大井川本流では樫島(標高約1,120 m)での採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

比較的大きな河川の中流域から上流域にあたる日当たりのよい、礫が散在する砂地河原に生息する。

## 4. 生息状況

県内における詳細な生息状況の報告はないが、狩野川水系では生息密度の高い生息地が多く存在していることが確認されている(未発表)。大小の礫が散在する砂地河原で生息密度が高く、礫の少ない砂地河原では生息密度が低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修(13)の影響で生息環境が減少している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

愛知県では、夜間や雨天時は石下を休息場所としているということが観察されている(蟹江・長谷川, 1994)。

## 8. 主な文献

浅野 隆 (2011) 浜松市気田川水系のアイヌハンミョウの記録. 駿河の昆虫, (233): 6445

浅野 隆 (2011) 天竜川水系のアイヌハンミョウの記録. 駿河の昆虫, (236): 6520

浅野 隆 (2013) 大井川水系のアイヌハンミョウの記録. 駿河の昆虫, (244): 6725

榎戸良裕 (1989) 伊豆半島でアイヌハンミョウを採集. 月刊むし, (226): 8

榎戸良裕・鈴木 裕 (2013) 静岡県御殿場市からアイヌハンミョウを記録. 月刊むし, (512): 47-48

石川 均 (1997) 接岨峡で採集したハンミョウの記録. 駿河の昆虫, (179): 5036

蟹江 昇・長谷川道明 (1994) 愛知県におけるアイヌハンミョウの分布. 豊橋市自然史博物館研究報告, (4): 47-48

森本 桂 監修 (2007) 新訂原色昆虫大図鑑 第□巻(甲虫篇). 北隆館, 東京, 526 pp.

乙部 宏・城殿 浩 (2000) 静岡県西部の甲虫類の記録若干. 駿河の昆虫, (189): 5310

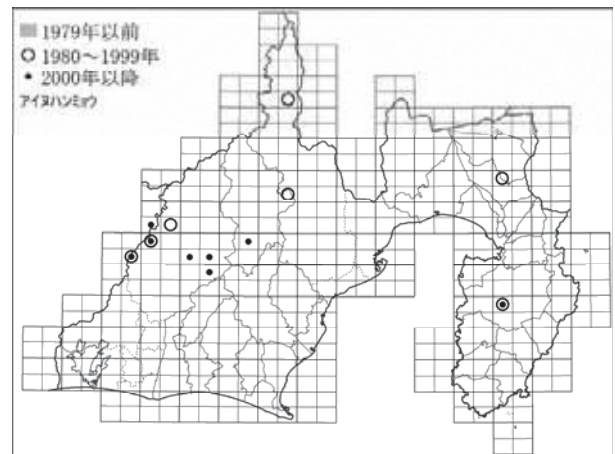
## 9. 標本

伊豆市産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

伊豆市田沢産 2014年5月23日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)



### 1. 種の解説

体長 15～20 mm。黒色で光沢を有する。体はおおむねヒョウタン形、口器の大顎はよく発達して前方に突出し、前胸背板は幅広く前角は前方に三角形に突出、前肢脛節は掌状に変形して掘削脚となる。

成虫は夏季に出現し、昼間は砂中深く、あるいは海岸に打ち上げられた海藻類や流木などの下に潜み、夜間に砂上を徘徊して他の小昆虫や小節足動物などを捕食する。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島、沼津市桃里千本浜海岸、静岡市清水区三保半島で記録がある。

### 3. 生息環境

海岸の砂浜に生息する。オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus* Olivier, 1795 のように河川の砂地に生息することはないようである。

### 4. 生息状況

かつて記録のあった静岡市清水区駒越南～折戸の海岸は養浜のための土砂搬入により絶滅した可能性が高いが、その北東の三保海岸では最近健全に生息していることが確認された。

### 5. 減少の主要因と脅威

海岸の保全工事 (14) や車両の乗り入れ (71) などにより、一部地域の生息環境の破壊が著しい。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

未確認であるが、下田市須崎の海岸でも多数生息しているという。

### 8. 主な文献

安立綱光 (1951) 伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島 (伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

坂倉理一郎・横山謙二 (2016) 静岡市三保半島海浜の昆虫相調査-海浜性甲虫を中心に-. 東海自然誌, (9): 1-24

杉山高史 (2004) 千本浜海岸におけるヒョウタンゴミムシの採集記録. 駿河の昆虫, (208): 5801

多比良嘉晃 (1984) ヒョウタンゴミムシの採集例. 静岡の甲虫, 2(2): 61

多比良嘉晃 (1999) 絶滅か? 三保のカワラハンミョウ. 静岡の甲虫, 11(1/2): 62-63

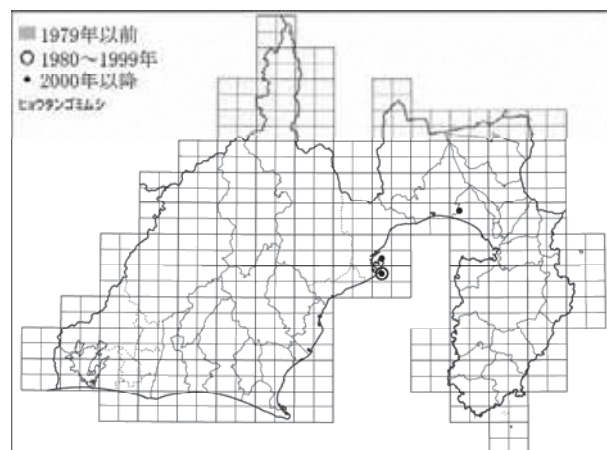
### 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa  
静岡市産 2018年7月20日 石川 均採集



# スナハラゴミムシ *Diplocheila elongata* (Bates, 1873)

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 23～24 mm。黒色で光沢をもつ。上翅は長く、前胸の約3倍の長さで両側はほぼ並行。大顎の上面にはしわがあり、上唇は浅く湾入する。頭楯の前縁は平ら。複眼内側の剛毛は1本。前胸は前方に強く狭まり、基方は後角の前で弱く波曲する。後角は鈍くまるい。基部凹陷は深く線状。第5跗節下面に剛毛はない。

夏季に灯火に飛来することがあるが、詳細な生活史は不明。

## 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では静岡市葵区麻機 (Asabata, near Shiduoka (sic)) における1940年採集の記録があるだけであったが、近年県内で再発見された(未発表)。

## 3. 生息環境

やや湿性の環境を好み、主に池沼周辺や河川敷などの草地に生息していると考えられる。

## 4. 生息状況

県内の確認例がほとんどなく生息状況は不明であるが、個体数は非常に少ないものと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

護岸工事を伴う池沼や河川の開発(12、13)、湿地開発(15-1)または草地の開発(16)による生息地の消失と減少。湿地の植生遷移(53、54)の進行に伴う乾燥化も生息状況を圧迫している可能性がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡市葵区麻機は遊水池や江戸時代から作られていた蓮根のハス田があるので、現在も生息している可能性があるが、未調査である。

## 8. 主な文献

中根猛彦(1985)日本の甲虫(69). 昆虫と自然, 20(9): 18-22

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 編(1985)原色日本甲虫図鑑(Ⅱ). 保育社, 大阪, 514 pp.

高橋 徹(2012)ゴミムシ類-Part C-. 初宿成彦 編, 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録(2). 大阪自然史博物館収蔵資料目録 第44集, pp. 57-170. 大阪市立自然史博物館, 大阪.

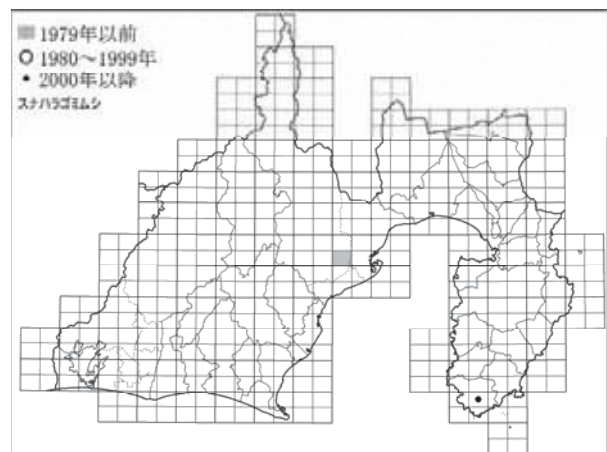
## 9. 標本

静岡市産：大阪市立自然史博物館所蔵



©2019 T.Sakai

南伊豆町産 2008年8月3日 酒井孝明採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# タナカツヤハネゴミムシ *Harpalomimetes orbicollis* N. Ito, 1995

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

体長 10～11.8 mm。体は黒色、触角と脚が黄褐色で、上翅は虹状光沢を帯びる。前胸背の後角は円く、基部凹陷はきわめて浅く不明瞭。

地表徘徊性で、石や落ち葉の下、草の根際などに潜んでいる。浅い湿地で水生昆虫を採集しているとえられることが多い。灯火にも飛来する。

## 2. 分布

日本固有種と考えられ、本州、四国、九州に分布する。県内では磐田市鶴ヶ池、磐田市鮫島、浜松市佐鳴湖周辺（中区富塚町新川）の記録があり、沼津市西浦足保と浜松市南区松島町で採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

平野部の湿地や河川敷に生息する。

## 4. 生息状況

県内の確認例が少なく、生息状況は不明であるが、個体数は少ないものと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

湖沼開発 (12)、河川開発 (13)、湿地開発 (15-1) などによる生息環境の消滅のほか、植生遷移の進行 (54) による湿地の乾燥化も大きな要因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

以前は、東南アジアに分布する *Anisodactylus andrewesi* (Schauberger, 1933) と同種して扱われていたが、日本産は別種であることが判明し、新名が与えられた。

## 8. 主な文献

Ito, N. (1995) Species of the genus *Harpalomimetes* (Coleoptera, Carabidae, Harpalini). *Elytra*, Tokyo, 23: 267-282

笠原須磨生 (1980) タナカツヤハネゴミムシの記録. 甲虫ニュース, (52): 6

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘 (2008) 第5章 1項 6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県戦略課題研究 「快適空間『佐鳴湖』の創造」 研究報告書, pp. 470-523. 静岡県産業部振興局研究調整室, 静岡.

上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 編 (1985) 原色日本甲虫図鑑 (Ⅱ). 保育社, 大阪, 514 pp.

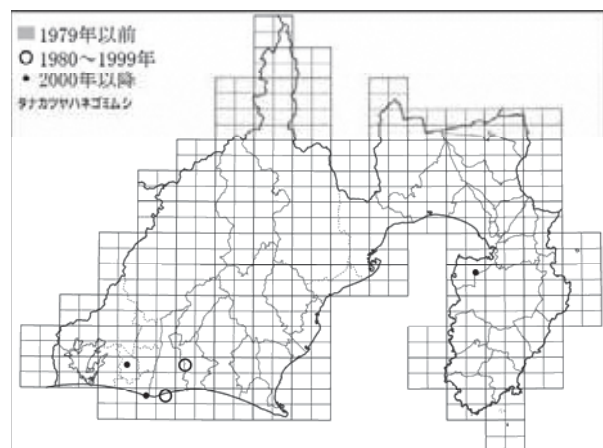
## 9. 標本

浜松市産、沼津市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 Y.Tahira

沼津市産 2004年8月17日 多比良嘉晃採集



(多比良嘉晃・石川 均)



オオサカアオゴミムシ *Chlaenius (Callistoides) pericallus* Redtenbacher, 1867

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

### 1. 種の解説

体長 11~12 mm。頭部は黒色で緑色の金属光沢があり、前胸は朱色、上翅とともに光沢がない。上翅の条溝は細くて小点刻を密に具え、間室は平たくて緑色を帯び、横皺状に細点刻を装う。背面の毛は黄色であるがあまり目立たない。

夜間に湿地の地表を徘徊し、小昆虫やミミズなどを捕食する。新成虫は秋に出現し、水辺周辺の土中や朽ち木の樹皮下で成虫越冬する。

### 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では芝川町（現富士宮市）羽鮒の記録が1例あるだけである。

### 3. 生息環境

平野部や丘陵地の湿地や河川敷、休耕田、水田周辺など湿性環境に生息する。芝川町では水田の畦道に置かれた板の下から採集された。

### 4. 生息状況

県内の確認例がほとんどなく生息状況は不明であるが、個体数は非常に少ないものと考えられる。県内の記録地は、現在は住宅地と化し生息環境は消失した。

### 5. 減少の主要因と脅威

分布が局所的であることに加え、湖沼開発(12)、河川開発(13)、湿地開発(15-1)、圃場整備(15-2)などによる生息環境の消滅のほか、湿地の遷移進行(54)による乾燥化も大きな影響と考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

関東地方を除けば生息確認は単発的。

### 8. 主な文献

石川 均(2000) 静岡県におけるオオサカアオゴミムシの記録. 甲虫ニュース, (131): 15

中根猛彦(1986) 日本の甲虫(72). 昆虫と自然, 21(2): 19-24

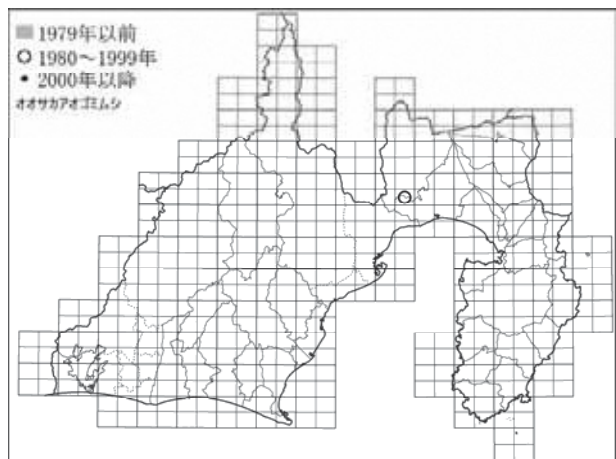
### 9. 標本

富士宮市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Ishikawa

富士宮市芝川町産 1990年7月6日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# アリスアトキリゴミムシ *Lachnoderma asperum* Bates, 1883

オサムシ科 Carabidae

静岡県カテゴリー 要注目種 (N-III 部会注目種) 変更コード1

[2004年版カテゴリー なし:環境省カテゴリー 情報不足 (DD)]

## 1. 種の解説

体長8mm内外。黒色、上翅・爪・腹部先端は赤褐色、密に直立毛を装う。頭部は粗く点刻され、中央のみ平滑。前胸背の側縁は広く上反し暗赤褐色、全体に点刻があり、上反部の点刻は大きく、背部のものは非常に小さい。上翅は条刻され明らかな点刻を含み、間室は粗に点刻され翅端は切断状、爪は基部が広がり櫛歯状となる。

成虫は灯火に飛来する。

## 2. 分布

国外では中国、台湾に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では駿東郡小山町において建物内の出入口付近で採集された記録があるのみで、他に東部の落葉広葉樹林における採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

河川敷の氾濫原に生息することが報告されているが、県内の確認地は河川からやや離れた建物内や山地の森林であり詳細は不明である。

## 4. 生息状況

県内の確認例がほとんどなく、詳細な生息状況は不明であるが、個体数は非常に少ないものと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修や護岸工事などの河川環境の人工化(13)が本種にとって最大の脅威になるといわれる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

河川敷に生息するカワラケアリを寄主とする好蟻性種であることが判明しているが、県内では調査がほとんど行われていない。県内の確認地は河川環境ではないことから、そこではトビイロケアリを寄主としている可能性もある。

## 8. 主な文献

田形和弘・多比良嘉晃(1988) 建屋内で捕獲された甲虫類(I)。静岡の甲虫, 6: 21-23

豊田浩二(2000) アリスアトキリゴミムシとカワラケアリの関連について。甲虫ニュース, (127/128): 11-13

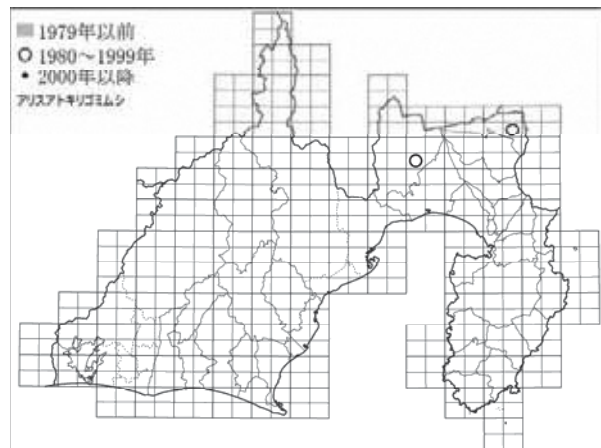
森本 桂 監修(2007) 新訂原色昆虫大図鑑 第II巻(甲虫篇)。北隆館, 東京, 526 pp.

## 9. 標本

富士宮市産、小山町産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa  
富士宮市山宮産 1983年7月26日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# ムツボシツヤコツブゲンゴロウ *Canthydrus politus* (Sharp, 1873)

コツブゲンゴロウ科 Noteridae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

体長 2.4~2.6 mm。体は逆卵形で背面は強い光沢がある。頭部、前胸背は黄~オレンジ色で点刻を欠く。上翅も黄~オレンジ色だが、個体変異や地域変異が著しく、斑紋はほとんど無紋の個体から6紋型の個体まで連続的に変化する。

成虫は一年中見られ、夏~晩秋季に多い。

## 2. 分布

国外では中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。産地はきわめて局地的。県内では磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町、浜松市佐鳴湖周辺(浜松市中区富塚新川、西区篠原町)で記録があり、磐田市鶴ヶ池、浜松市南区白羽町、浜松市西区篠原町・坪井町・村楡町、浜松市北区引佐町・細江町で採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

平野部や丘陵地にある水生植物の多い池沼の浅瀬や水面付近に生息する。

## 4. 生息状況

産地は局所的に限られるが、西部では各地に分布しており、生息地における個体数は多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発による生息地の消失(12、15-1)のほか、植生遷移の進行(54)や富栄養化に伴う生息環境の悪化、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)などにより生息地は減少傾向にある。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

本種は放棄された養鰻池やハス田でもよく見られるが、近年、このような場所はすぐに埋め立てられて、ソーラー発電施設が建設されている。

## 8. 主な文献

阿部光典(1988) ゲンゴロウ類の分布に関するメモ. 甲虫ニュース, (83/84): 5-6.

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘(2008) 第5章1項6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県戦略課題研究「快適空間『佐鳴湖』の創造」研究報告書, pp. 470-523. 静岡県産業部振興局研究調整室, 静岡.

北野 忠・石田和男(2000) 遠州地方で採集された水生甲虫類. 遠州の自然, (23): 9-14

北野 忠・記野直人・長谷川洋・北山 昭(2000) 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-. 甲虫ニュース, (129): 7-9

細田昭博(2011) ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

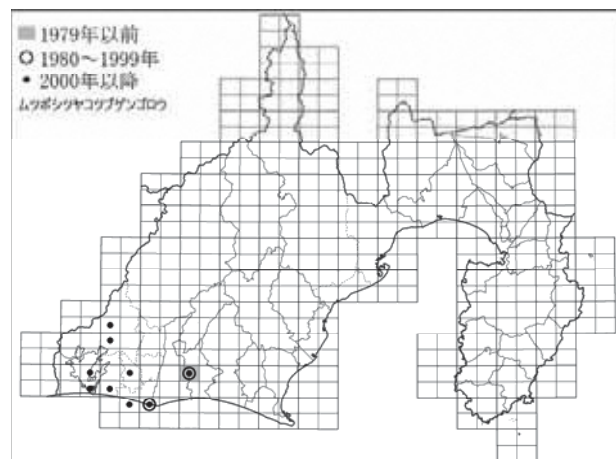
森 正人・北山 昭(2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京, 231 pp.

## 9. 標本

磐田市産: 神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵



©2019 H.Ishikawa  
浜松市南区産 2014年7月23日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)



### 1. 種の解説

体長 3.8～5.0 mm。体は丸形。背面は黄褐～黄赤褐色で、光沢はオスでは強いがメスでは光沢をほとんど欠く個体が見られる。光沢のあるメスは、四国、九州以南に多く見られる。頭部はやや密に点刻されるが、後頭ではややまばらになる。複眼間には小さな2暗色紋をもつ個体が多い。前胸背はやや密に点刻され、両側部をのぞき後縁は暗色となり、ふつうこの紋は中央部で上部が切れ込む。

成虫は一年中見られ、県内では特に秋季に多く確認されている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、極東ロシアに、国内では本州、四国、九州、南西諸島(トカラ、沖永良部島)に分布する。台湾、中国には別亜種が分布する。県内では西部の磐田市桶ヶ谷沼、浜松市南区松島町・米津町、浜松市西区篠原町で記録があるほか、東部の駿東郡小山町、御殿場市山之尻・仁杉・柴怒田、西部の浜松市西区村櫛町での採集例がある(未発表)。

### 3. 生息環境

水生植物の豊富な池沼、湿地、ため池、水田、休耕田、放棄水田に生息する。

### 4. 生息状況

水生植物の豊富な止水域に生息するが、県内の生息地は東部と西部から知られるだけである。近年、浜松市南区松島町の生息地では個体数が著しく減少している。2002年には御殿場市の放棄水田で多数の個体が確認された。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内の既知生息地では、植生遷移の進行や富栄養化に伴う生息環境の悪化(54)、アメリカザリガニによる水生植物群落の破壊(54)などが脅威となる。また、放棄水田などに生息している個体群は、開発による工事(23)や乾燥による陸地化(54)などによって生息地が消失するおそれ大きい。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

かつての普通種だが、都市部周辺では減少傾向が著しいという。

### 8. 主な文献

細田昭博(2011) ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

北野 忠・記野直人・長谷川 洋・北山 昭(2000) 静岡県浜松市松島町におけるゲンゴロウ類の採集記録-本州初記録のニセコケシゲンゴロウを中心として-. 甲虫ニュース, (129): 7-9

森 正人・北山 昭(2002) 改訂版図説日本のゲンゴロウ(第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

油井雅樹(1997) 静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録. 駿河の昆虫, (179): 5021-5023

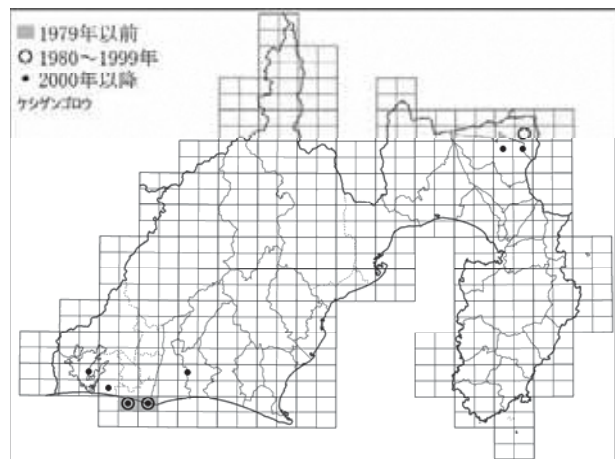
### 9. 標本

駿東郡小山町産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

駿東郡小山町産 2013年11月17日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# キベリマメゲンゴロウ *Platambus fimbriatus* (Sharp, 1884)

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 7~8 mm。体型は長楕円形でやや厚い。黒~黒褐色、弱い金属光沢を具える。頭楯、前頭、頭頂の2紋、胸背両側の三角紋は黄褐色。上翅の黄白斑は、基部黄帯と翅端に達しない側縁の縦条紋からなるが、種々の程度に変異する。腹面、触角、脚は赤褐色。背面は不規則な網目状印刻を具える。前胸背前・後縁に明瞭な点刻列がある。上翅には明瞭でかなり大きな3点刻列を具える。

成虫は春から秋まで見られ、成虫で越冬する。灯火にもよく飛来する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島、富士宮市大鹿窪、静岡市清水区蒲原(富士川)、浜松市東区笠井で記録があり、富士宮市精進川、富士宮市沼久保、浜松市浜北区竜南などで採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

河川の流水やよどみに生息し、岸辺の植物周辺や石下などで見られる。

## 4. 生息状況

県内での記録は少なく、詳細な生息状況は不明であるが、富士川ではまとまって採集された例がある(未発表)。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な生息地が平地を流れる中流域にあるため、護岸などの河川改修工事による環境改変(13)の影響を受けやすい。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

採集データを伴う記録があるのは、富士川本流、富士川支流芝川、天竜川本流の2水系3河川にすぎない。

## 8. 主な文献

安立綱光(1951)伊豆半島の動物 其の二 無脊椎動物. 吉田竜男 編, 伊豆半島(伊豆国立公園候補地学術報告), pp. 137-156. 静岡県・静岡県観光協会, 静岡.

北野 忠(2000)静岡県で採集された水生鞘翅目. 神奈川自然保全研究会報告書, (15): 17-24

細田昭博(2011)ゲンゴロウ類の記録. 遠州の自然, (34): 1-4

丸山宗利(1998)静岡県のゲンゴロウ2種の記録. 月刊むし, (329): 39-40

森 正人・北山 昭(2002)改訂版図説日本のゲンゴロウ(第2刷). 文一総合出版, 東京, 231 pp.

森本 桂 監修(2007)新訂原色昆虫大図鑑 第Ⅱ巻(甲虫篇). 北隆館, 東京, 526 pp.

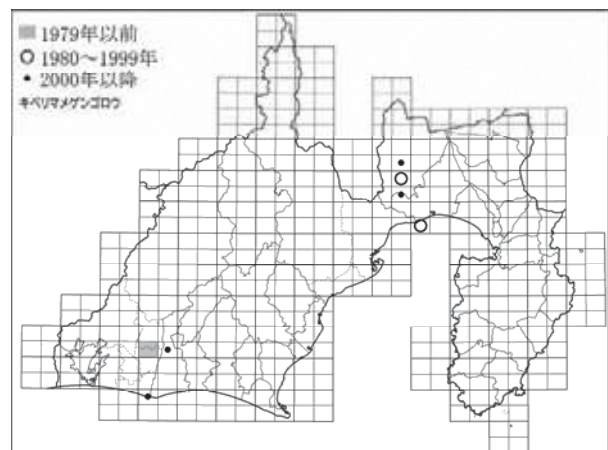
## 9. 標本

磐田市竜洋町産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

磐田市竜洋町産 2013年10月25日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# シマゲンゴロウ *Hydaticus bowringi* Clark, 1864

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 12.5~14 mm。体は卵形で背面はよく膨隆し光沢がある。頭部は淡黄褐色で、後半は黒く全体に微細な点刻を散布する。前胸背も淡黄褐色、前・後縁の中央が黒色で細い正中線でわずかにつながる。小楯板、上翅は黒色で、上翅の縦条、基部直後内方の円紋は黄色。腹面は前胸が黄褐色、上翅側片前方も黄褐色であるが、それより後方は茶褐色で、その他はやや明るい赤褐色で細かく点刻される。

成虫は5~10月頃に見られ、メスは5~8月に水草の茎や葉の表面に産卵する。成虫は上陸して越冬する。成虫は夏季に灯火に集まり、山林内のライトトラップにも飛来することがある。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では北海道、本州、四国、九州、対馬、南西諸島（種子島、屋久島、トカラ中之島、宝島）に分布する。県内では富士宮市麓、伊豆半島、天城山、静岡市清水区由比入山、伊豆の国市浮橋・宗光寺で記録があり、伊豆市冷川、下田市箕作、賀茂郡河津町・東伊豆町・南伊豆町などで採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

平地から丘陵の水草の豊富な浅い池沼、湿地、水田、放棄水田に生息し、時に未舗装道路の轍の溜まり水などにも見られる。

## 4. 生息状況

県内での記録は少なく詳細な生息状況は不明であるが、伊豆半島では個体数が比較的多いようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発（12、15-1）や圃場整備（15-2）による水田や周囲の水路などの消失、湿地や休耕田の植生遷移（54）の進行に伴う陸地化、アメリカザリガニの侵入（52-3）などが脅威である。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

不安定な水域にも見られることから、高い移動能力を有すると考えられる。

## 8. 主な文献

由比雅樹（1997）静岡県西部及び伊豆地方における水生昆虫の記録．駿河の昆虫，（179）：5021-5023

北野 忠（2000）静岡県で採集された水生鞘翅目．神奈川自然保全研究会報告書，（15）：17-24

田村正人（1962）富士農場およびその付近の昆虫目録．東京農業大学短期大学農業科・東京農業大学日本植物学研究所，31 pp.

平井克男（1993）1990年天城山における甲虫類調査記録．駿河の昆虫，（163）：4621-4653

森 正人・北山 昭（2007）改訂版図説日本のゲンゴロウ（第2刷）．文一総合出版，東京，231 pp.

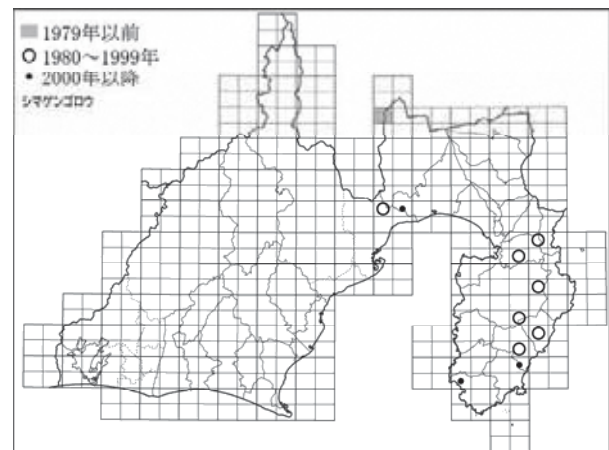
## 9. 標本

下田市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Ishikawa

下田市産 2003年8月25日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)



# マルヒラタガムシ *Enochrus subsignatus* (Harold, 1877)

ガムシ科 Hydrophilidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長5 mm内外。黄赤褐色、頭部後方はやや暗色、前胸背板の4小点紋、上翅肩部内側の1小紋、会合部中央後などは暗色、第3間室中央前と第5間室中央に不分明な暗色縦条を装う。背面は密に小点刻を装い、上翅会合部条溝は中央より始まり、後方に条溝の痕跡がある。体下は黒褐色。中胸腹板は板状に隆起し、前角に歯を具える。

成虫は5～12月に見られ、水草を食べ、幼虫は肉食性であるという。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国に、国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では磐田市桶ヶ谷沼と浜松市佐鳴湖周辺（浜松市中区富塚町、西区大平台・篠原町）から記録されており、浜松市南区白羽町、浜松市西区馬郡町・舞阪町・村楡町、湖西市新所などで採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

水生植物の豊富な止水域に生息する。県内の生息地はハス田放棄地や放棄養鰻池などで、ヨシの茂ったあまり深くない止水域やヨシはまばらで水深の深い止水域などである。

## 4. 生息状況

県内での確認例は少なく詳細な生息状況は不明であるが、生息地での個体数は多い。磐田市桶ヶ谷沼では近年の確認例はないようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

湖沼や河川敷の開発(12、13)、湿地の開発(15-1)、ため池も含めた圃場整備(15-2)、水質汚濁(31)などにより、生息環境が減少している。

## 6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は県の自然環境保全地域に指定されている。

## 7. 特記事項

成虫は水草を食べ、幼虫は肉食性。

## 8. 主な文献

加藤 徹・多比良嘉晃・塩澤靖弘(2008)第5章1項6 佐鳴湖周辺の昆虫相. 静岡県産業部振興局研究調整室 編, 静岡県戦略課題研究「快適空間『佐鳴湖』の創造」研究報告書, pp. 470-523. 同室, 静岡.

杉山恵一 編(1990)桶ヶ谷沼の自然環境-桶ヶ谷沼自然生態調査及び立地条件調査-. (財)日本野生生物研究センター, 東京, 334 pp.

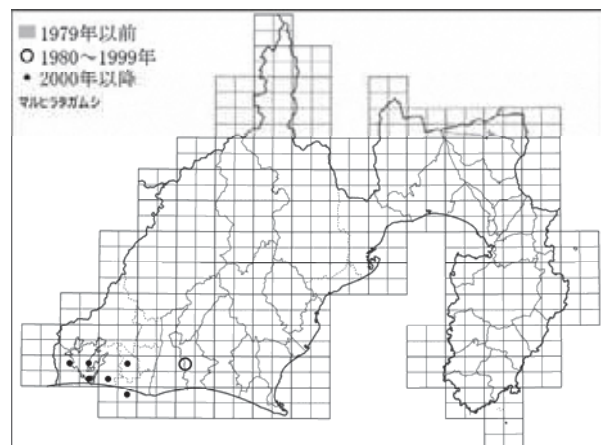
森本 桂 監修(2007)新訂原色昆虫大図鑑 第II巻(甲虫篇). 北隆館, 東京, 526 pp.

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa  
浜松市西区舞阪町産 2015年3月15日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# スジヒラタガムシ *Helochares nipponicus* Hebauer, 1995

ガムシ科 Hydrophilidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 3.8~4.3 mm。黄赤褐色、頭部は両側紋をのぞき黒く、体下は暗赤褐色、口枝、脛跗節は黄褐色。頭胸背はやや密に粗く点刻され、胸側では後方で粗くなる。上翅はより弱く点刻され、各 10 条の強い点刻列を含む条溝を具え、小楯板に沿い短い条溝がある。体下は細毛を密布し、中胸腹板は前方に弱い瘤起がある。

成虫は 2~11 月に見られ、成虫で越冬するものと考えられる。メスは腹部に卵を付着させて保護する。繁殖期は長い。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布する。県内では富士宮市猪之頭小田貫湿原から記録があるのみであるが、富士宮市羽鮎、掛川市倉真、袋井市豊沢、浜松市天竜区青谷、浜松市浜北区四大地、浜松市北区引佐町、湖西市大知波で採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

丘陵地や山間部のため池や水田、湿地に生息する。

## 4. 生息状況

県内での確認例は少なく詳細な生息状況は不明であるが、いくつかの生息地では個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発によるため池や湿地の埋め立て（12、15-1）、ため池を含めた水田地帯の圃場整備（15-2）などにより、生息環境が減少している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

本種は従来、*Helochares striatus* Sharp, 1873 の学名が当てられていた。

## 8. 主な文献

Hebauer, F. (1995) Neues zu den Acidocerina Hansen (*Helochares* d'Orchymont) der indomalaiischen Region (Coleoptera, Hydrophilidae). *Acta Coleopterologica*, 11(3): 3-14

森本 桂 監修 (2007) 新訂原色昆虫大図鑑 第Ⅱ巻 (甲虫篇). 北隆館, 東京, 526 pp.

多比良嘉晃・松本雅道 (1993) 小田貫湿原で採集した甲虫類. 静岡の甲虫, 10(2): 25-27

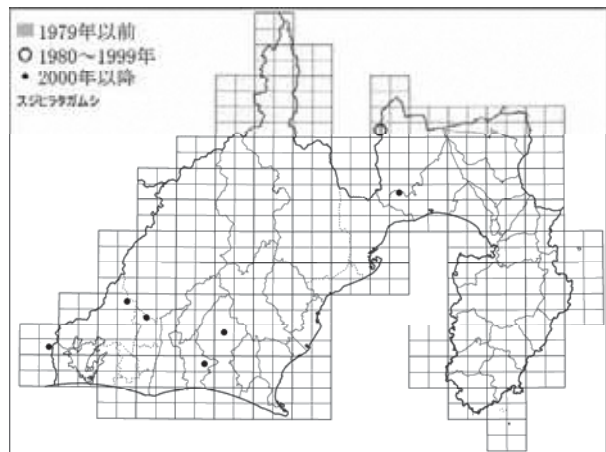
## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 H.Ishikawa

浜松市天竜区産 2014年10月15日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# アカマダラコガネ *Poecilophilides rusticola rusticola* (Burmeister, 1842)

コガネムシ科 Scarabaeidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

体長 16~21 mm 内外。背面は赤褐色で黒色の小紋が点在し、腹面は光沢のある黒色で、中胸突起だけ赤褐色。頭楯の両側は円くの前方でやや湾入する。前胸腹板の中央には褐色の毛をもった突起があり、中胸腹板突起は前方で広がり、前縁は丸まる。

成虫は 4~10 月に見られ、クヌギやコナラの樹液に集まる。幼虫は主に猛禽類などの鳥類の巢内で、雛の食べ残しや腐食物などを食べて発育し巢内で蛹化する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ロシア東部、ベトナムに、国内では北海道から屋久島までの、佐渡島、淡路島、隠岐諸島、五島列島などの島嶼を含めて広範囲に分布する。県内では袋井市法多山の記録があるのみであるが、牧之原市坂口と伊豆市湯ヶ島の採集例がある（未発表）。また、浜松市浜北区静岡県立森林公園でも採集されているとのことである。

## 3. 生息環境

クヌギやコナラなどの樹木が生えた森林に生息する。また、幼虫が発生場所となる猛禽類が営巣可能な大木の存在も重要である。

## 4. 生息状況

県内での確認例は少なく詳細な生息状況は不明である。

## 5. 減少の主要因と脅威

かつては、日本各地の里山の雑木林にふつうに見られたようであるが、里山環境の衰退に伴い、稀な種となった。猛禽類の生息できる豊かな里山環境の保全（11、23、53）が、本種の保護に重要である。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

幼虫は、肉食性のクマタカ、ハチクマ、サシバ、オオタカ、ミサゴ、アカハラダカ、カワウ、コウノトリなどの巢内で育つことが報告されているが、雑食性のハシボソガラスの巢の利用例もある。

## 8. 主な文献

出口可能（1989）小笠山のアカマダラコガネ. 静岡の甲虫, 7(1/2): 19

石川 均・新井 真（2004）アカマダラハナムグリの一生態について. 甲虫ニュース, (148): 13

榎原 寛・阿部 學・新里達也・早川浩之・飯嶋一浩（2004）ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, (148): 21-23

永幡嘉之・越山洋三・梅津和夫・後藤三千代（2013）ハシボソガラスの巣で発育したアカマダラハナムグリ-DNA 解析による土繭内の蛹殻および幼虫死体の種同定-. 昆虫（ニューシリーズ）, 16(2): 104-112

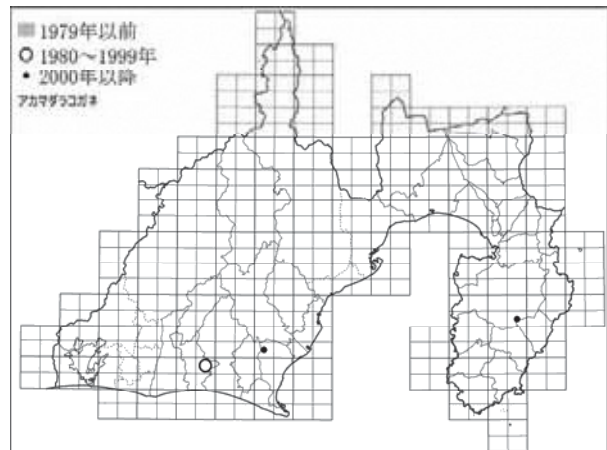
## 9. 標本

牧之原市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（多比良嘉晃・石川 均）



牧之原市産 2003年7月31日 関川文俊採集





# ヒゲナガヒラタドロムシ *Nipponeubria yoshitomii* Lee & M. Sato, 19

ヒラタドロムシ科 Psephenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

体長 2.3~2.8 mm。体は短卵形で腹背にやや扁平、触角、頭部、前胸部は黒色で上翅は茶褐色、腹面は暗褐色で肢は暗黄褐色。上翅は粗大点刻と小点刻を不規則に装い粗造。オスの触角は長く体長よりやや短い程度で強い鋸歯状を呈し、メスの触角は体長の半分に達せず微鋸歯状。

成虫は5~7月頃に出現し、幼虫の発生源である沢沿いの植物上などに見られる。幼虫は水辺から少し離れた場所の湿った落ち葉の裏にいることが多いという。

## 2. 分布

日本固有種で、本州（愛知県、三重県、島根県）に分布する。群馬県からも記録されたようであるが、文献未入手。県内では静岡市葵区梅ヶ島での採集例がある（未発表）。

## 3. 生息環境

幼虫の生息環境はブナ林内の細流脇、染み出し水の周辺などである。

## 4. 生息状況

安倍川流域では複数ヶ所で確認されていて、環境に特に大きな変化は見られないことから安定して生息していると考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境が特殊であり、岸壁の護岸工事（13）が行われると、生息環境が急速に消失する可能性が指摘される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

生態などは不明であるが幼虫は細流の脇や染み出し水周辺の落ち葉を食していると考えられる。

## 8. 主な文献

林 成多 (2009) 日本産ヒラタドロムシ科概説. ホシザキグリーン財団研究報告, (12): 35-85

Lee, C.-F. & M. Satô (1996) *Nipponeubria yoshitomii* Lee and Satô, a new species in a new genus of the Eubriinae from Japan, with notes on the immature stages and description of the larvae of *Ectopria opaca* (Kiesenwetter) (Coleoptera: Psephenidae). *The Coleopterists Bulletin*, 50: 122-134 (SCI)

吉富博之 (1998) ヒゲナガヒラタドロムシ (新称) の採集記録. 甲虫ニュース, (122): 10

吉富博之 (2000) 矢作川水域から見つかった新種 ②ヒゲナガヒラタドロムシ *Nipponeubria yoshitomii* Lee and M. Satô, 1996. Rio ~豊田市矢作川研究所月報~, (26): 4

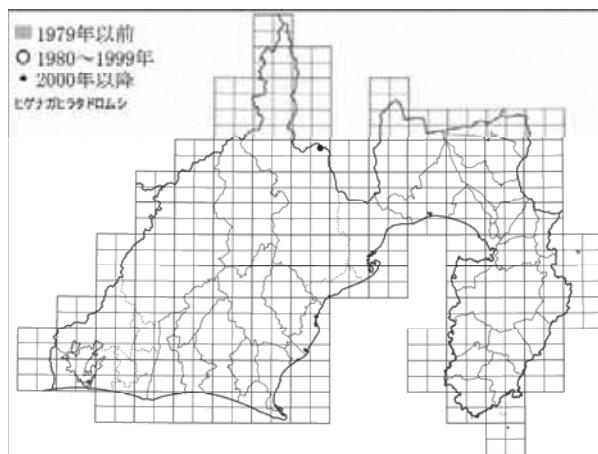
## 9. 標本

静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



©2019 T.Kato

静岡市葵区産 2015年5月30日 加藤 徹採集



(多比良嘉晃・石川 均)

### 1. 種の解説

体長 7~10 mm。黒色で正中部の幅広い黒条をのぞく前胸背板と腹部末端 3 節は淡朱紅色、体は著しく長い長円形で腹背にやや扁平。

成虫は 6~9 月頃まで見られ、7・8 月頃に多く、夜間、ゲンジボタル *Luciola (Luciola) cruciata* Motschulsky, 1854 より弱い光を放ちながら飛翔する。幼虫は主に止水域に生息し、モノアラガイ類などの淡水産貝類を餌としている。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部、シベリア東部、サハリンに、国内では北海道、千島、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆半島、島田市川根町笹間渡笹間川、浜松市天竜区二俣町二俣、浜松市北区都田町都田川、湖西市嵩山の記録があり、伊豆市湯ヶ島温泉、駿東郡小山町中島、裾野市茶畑、静岡市駿河区小鹿、牧之原市白井、御前崎市新野、菊川市半済、掛川市粟本、浜松市北区引佐町四方浄などで採集例がある（未発表）。

### 3. 生息環境

幼虫は水田や流れの緩やかな小川・用水路などに生息し、場所によってはゲンジボタルと混生している。

### 4. 生息状況

普通種であったためか、データを伴った過去の記録は少なく、詳細な生息状況は不明である。記録されないまま消滅した産地も数多くあるものと思われる。

### 5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) や圃場整備 (15-2) による水田の埋め立てや水路の護岸化、農薬・肥料などや生活廃水の流入などによる水質汚染 (32) などによって少なくとも都市近郊の生息地はかなり失われた。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

ゲンジボタルは各地で保護・繁殖の対象となっているが、本種を対象とした保護活動はほとんど行われていない。

### 8. 主な文献

- 松本雅道・栗原 隆・多比良嘉晃 (1999) 静岡県浜松市のホタル科甲虫について. 月刊むし, (343): 20-21  
 坪井俊久 (1977) 天竜市二俣町の甲虫類 (II). 駿河の昆虫, (98): 2871-2878  
 渡辺一雄 (1980) 静岡県湖西市嵩山周辺の昆虫相. 遠州の自然, (3): 53-68  
 山下 健 (2012) 島田市笹間川でヘイケボタルを確認. 駿河の昆虫, (238): 6572

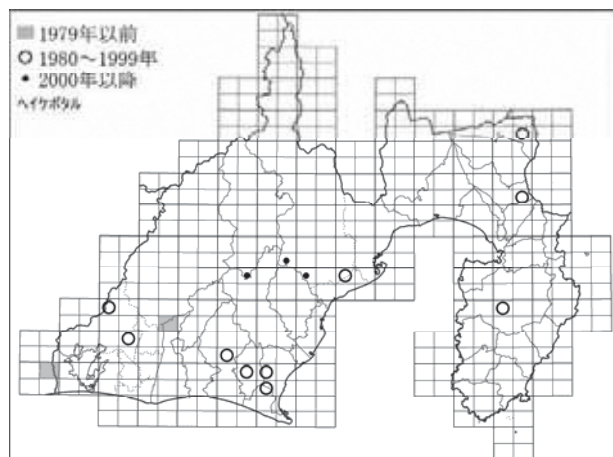
### 9. 標本

御前崎市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(多比良嘉晃)



©2019 H.Ishikawa  
御前崎市新野産 1991年6月11日 石川 均採集



# アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (Faldermann, 1835)

カミキリムシ科 Cerambycidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

/\*-

## 1. 種の解説

体長 10~15 mm。黒色で背面は灰黒色の微毛で覆われ、頭部複眼後方、前胸背板の正中部及び両側、翅鞘合部及び両側にそれぞれ密な灰白色微毛からなる細縦条を装い、下面は全面灰白色微毛で覆われる。触角第3節以下は基半に灰白色毛を装い、白黒のダンダラ状に見える。背面の微毛が灰白色の個体もある。体はおおむね短円筒形で、ずんぐりした感じを受ける。

成虫は5~8月頃出現、アザミ類の植物体上において、茎頂や葉の葉脈部分を食害する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国北東部、沿海州に、国内では本州、四国、九州に分布する。国内の分布は局地的である。県内では賀茂郡東伊豆町、富士宮市北山、天竜市相津で記録があり、御殿場市中畑、富士宮市朝霧高原の採集例がある。

## 3. 生息環境

山地草原に生息する。かつては栽培されていたアサ(大麻)に多数集まっていたとされるが、アサの栽培が禁止されて以来、個体数が激減したといわれる。近年はアザミ類に食草転換したと考えられる個体群が各地で発見されている。

## 4. 生息状況

県内の記録が少なく、詳細な生息状況は不明であるが、賀茂郡東伊豆町と富士宮市朝霧高原ではアザミ類生葉上に少なからず見られる。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発など(23)による生息環境の破壊・消滅や、高い採集圧(41)による個体数の減少が危惧される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

県内産の標本がインターネットオークション上で売買されている。

## 8. 主な文献

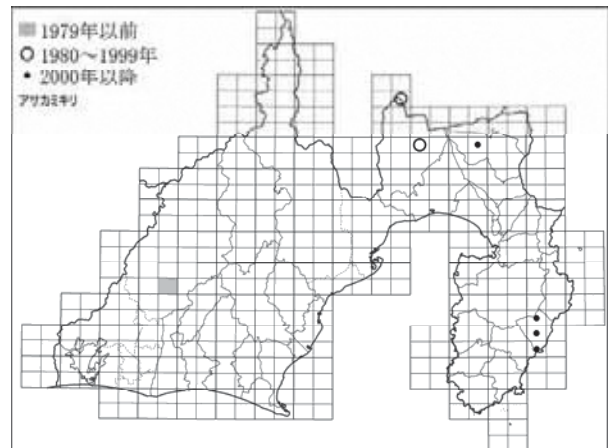
- 市川恭治・奥田宜生・草間慶一(1988)静岡県のカミキリムシ. 静岡の甲虫, 6(2): 3-81
- 石川 均(1982)アサカミキリを富士山麓で採集. 静岡の甲虫, 1(2): 32
- 篠島正彰(2009)細野高原(東伊豆町)でアサカミキリを観察. 駿河の昆虫, (227): 6292
- 篠島正彰(2009)細野高原(東伊豆町)ほかでアサカミキリを観察. 駿河の昆虫, (228): 6325
- 土屋忠男(2014)伊豆地方における甲虫目の記録. 駿河の昆虫, (246): 6755-6761

## 9. 標本

御殿場市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa  
御殿場市中畑産 2016年8月8日 石川 均採集



(多比良嘉晃)



# ゴマギケブカハムシ *Xanthogaleruca nigromarginata* (Jacoby, 1885)

(=クロヘリウスチャハムシ)

ハムシ科 Chrysomelidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし:環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長 4.2 mm 内外。背面は灰黄褐色。前胸背板は 3 黒紋を装い、上翅は暗褐色で会合部と側縁部は黒色、体腹面も黒色で肢は暗褐色を呈する。成虫は 3~8 月に出現、幼虫期は 5~6 月、食草(食樹)はスイカズラ科(レンブクソウ科)のゴマギ。

## 2. 分布

国外では中国南部(香港、海南島)に分布するとされ、国内では本州(青森県、東京都、神奈川県、静岡県)に分布する。県内では裾野市須山での採集例がある(未発表)。

## 3. 生息環境

本来の生息環境は低地~山地のゴマギが生育する良好な落葉広葉樹林と考えられる。

## 4. 生息状況

県内では 1ヶ所だけで確認されていて、周辺地域の調査が十分に行われていないため、詳細な生息状況は不明である。県内では荒地を走る林道脇のゴマギの低木からえられている。

## 5. 減少の主要因と脅威

ゴマギを寄主植物とするため、発生木及び周辺に生育するゴマギの伐採(11, 61)が直接的な脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

県内では成虫は 5~8 月に確認されている。東京都では絶滅し、神奈川県では 2本のゴマギで生息が確認されているだけ(平野, 2006)という。

## 8. 主な文献

林 匡夫・森本 桂・木元新作 編(1984)原色日本甲虫図鑑(□). 保育社, 大阪, 438 pp.

平野幸彦(2006)甲虫類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書, pp. 343-367. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

木元新作・滝沢春雄(1994)日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 秦野, 539 pp.

滝沢春雄(2011)日本産ハムシ科生態覚書(5). 神奈川虫報, (173): 35-51

Takizawa, H. (1982) Notes on Japanese Chrysomelidae (Coleoptera). *The entomological review of Japan*, 37: 55-60

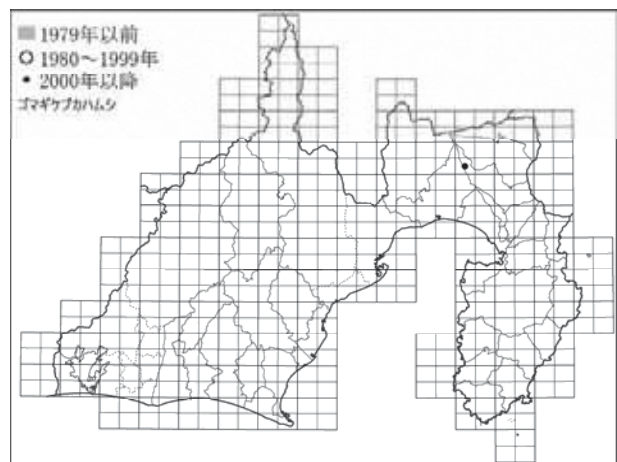
## 9. 標本

裾野市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 H.Ishikawa

裾野市産 2018年8月26日 石川 均採集



(多比良嘉晃・石川 均)

# フジミドリシジミ *Sibatanozephyrus fujisanus fujisanus* (Matsumura, 1910)

シジミチョウ科 Lycaenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 35 mm。オスの表面は灰色を帯びた銀緑色で、メスは一様に褐色。幼虫の食餌植物はブナ、イヌブナに限られる。卵で越冬。成虫は年1回、6月下旬に発生し、メスは8月まで生き残る。ほかのミドリシジミ類の占有行動とは異なり、ブナなどの大木の上をあまり止まることがなくゆっくりと飛翔する。湿った道路面において吸水するほか、ヒメジョオンなどの花で吸蜜することもある。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。県内では個体数は少ないが、伊豆半島、富士山、大井川上流域、天竜川中流域の山地に広く分布している。

## 3. 生息環境

標高およそ 1,000~1,700 m のイヌブナやブナを主体とする極相に近い落葉広葉樹林に生息する。

## 4. 生息状況

県内のブナやイヌブナの大木を主体とする落葉広葉樹林に広く生息している。天城山塊には比較的個体数は多いが、富士山ではあまり個体数は多くない。大井川上流、天竜川中流域では個体数はさほど多くないものの、1,000 m 以上の山地に広く生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

現在は際立った減少傾向はみられないが、開発などによるブナやイヌブナを主体とした落葉広葉樹林の伐採(11)が脅威となる。

## 6. 保護対策

樹齢の高いブナやイヌブナを主体とした落葉広葉樹林の存続が不可欠である。

## 7. 特記事項

本種の基準産地は富士山であり本県にゆかりが深い。ブナ林を代表する種であることから森林の保護保全にも関連する。

## 8. 主な文献

池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫(2014) 大井川上流7月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737-6738

太田雅敏(1993) 伊豆半島のフジミドリシジミについて. 駿河の昆虫, (161): 4598-4599

高橋真弓(1967) 静岡県とその周辺のみドリシジミ類についての覚え書. 駿河の昆虫, (57): 1561-1608

高橋真弓(2003) 7月上旬静岡市(大河内) 仏谷山付近の蝶類. 駿河の昆虫, (203): 5677

山下 健(2001) 寸又川上流フジミドリシジミなどの記録. 駿河の昆虫, (194): 5441

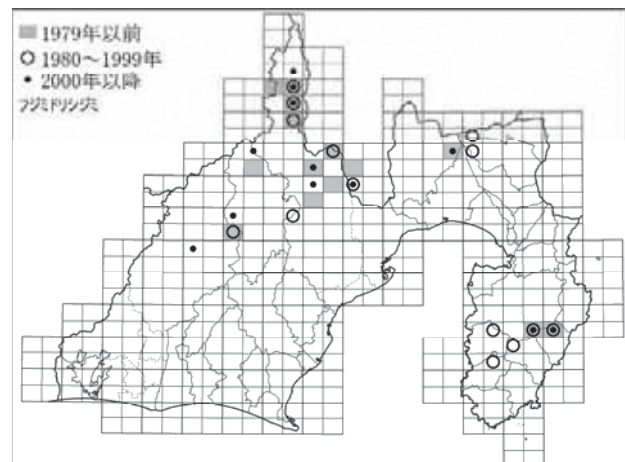
## 9. 標本

各産地(多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



伊豆市産♂裏面 2013年7月3日 諏訪哲夫採集



# ギンボシヒョウモン *Speyeria agalaja fortuna* (Janson, 1877)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 60~70 mm、メスはオスよりかなり大きい。表面は黄褐色の地に黒斑が豹の紋のように散らばる。裏面後翅には多数の銀色の斑紋がある。幼虫の食餌植物はスミレ類。幼虫で越冬。成虫は年1回発生し、6月下旬~8月まで見られる。木本ではウツギ、草本ではクガイソウ、マルバダケブキなど各種の花で吸蜜する。

## 2. 分布

国外ではサハリンからヨーロッパまでユーラシア大陸に広く、国内では北海道、東北地方、中部山岳地域に分布する。県内では富士山麓、南アルプスとその前衛の山地及び北遠地方から記録がある。

## 3. 生息環境

標高およそ 1,000~2,500 m の花の多い草原、林間や道路法面などの草地、あるいはウツギなどを交えた灌木の疎林などが生息地となる。

## 4. 生息状況

1980年代の後半まで富士山麓、南アルプスとその周辺の山岳地帯においてかなりふつうの種として確認されていたが、1990年代以降、各地で個体数が著しく減少した。現在では調査を綿密に行うことにより、やや安定して生息していることが判明した。

## 5. 減少の主要因と脅威

成虫の活動の場所となる草花の多い草原が減少したことが考えられる。草原が減少した要因は、植生遷移(54)の進行のほかシカによる草花の食害(54)が大きいとみられる。

また、近年の気候温暖化の直接的、または間接的な影響(71)を受けている可能性がある。

## 6. 保護対策

シカの食害を防止するための対策が望まれる。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

諏訪哲夫・鈴木英文・高橋真弓(2012) 2011年、富士山地域の蝶。駿河の昆虫, (237): 6534-6539

鈴木英文・諏訪哲夫(2017) 大井川源流部の昆虫類の記録(2014-2016)(第1報チョウ亜目)。駿河の昆虫, (257): 7027-7039

高橋真弓(1987) 静岡県および山梨県南部におけるヒョウモンチョウ類の分布と生息地II。駿河の昆虫, (137): 3959-3987

高橋真弓(2014) 2013年、富士山静岡県側山麓における蝶類の採集記録。駿河の昆虫, (247): 6790-6791

谷川久男(2014) 富士山御殿場口のチョウ。駿河の昆虫, (246): 6771

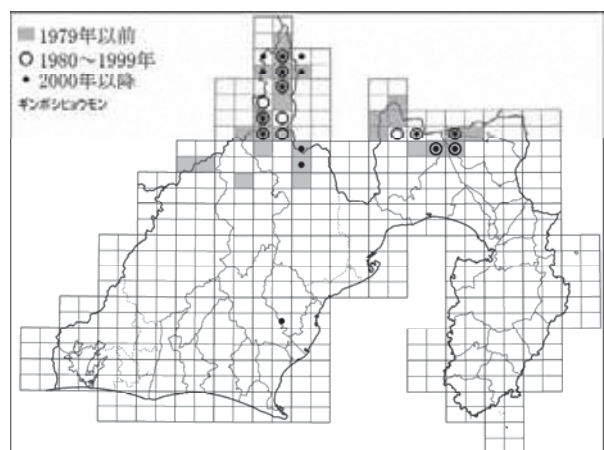
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



静岡市葵区産の裏面 2016年7月18日 諏訪哲夫採集





# オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* (Hewitson, 1863)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

開張 90~100 mm。メスはオスよりかなり大きくなる。オスは前後翅の基半部が紫色に輝く。メスはこれがなく褐色の地に白斑と一部淡黄斑を散らす。幼虫の食餌植物はエノキ、エゾエノキ。4 齢か5 齢幼虫で越冬。成虫は年1回6月下旬から発生し8月まで見られる。樹液や腐った果実、獣糞などで吸汁する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、中国、ベトナム、台湾に、国内では北海道から九州まで分布する。北海道では局地的。県内では伊豆半島、富士山の大部分及び南アルプス高地帯をのぞく山地に分布している。

## 3. 生息環境

幼虫の食樹となるエノキやエゾエノキのほか、成虫の吸蜜源となるクヌギ、コナラなどが多い低山地から標高およそ1,000 mの山地に見られる。

## 4. 生息状況

1960年代までは中部及び小山町などでやや安定して成虫の記録があるが、その後1992年前後と2013年に一時記録が増えたものの現在まで成虫の記録は大変少ない。しかし冬季における幼虫の調査では比較的安定して生息しているといえる。

## 5. 減少の主要因と脅威

各種の開発(23、24)や、植生遷移(54)により食樹となるエノキの消滅や他の樹木による被圧などで生息環境は悪化している。また雑木林の減少(23)により成虫の餌となる樹液が不足していることも要因の一つとみられる。

## 6. 保護対策

特にこの種の保護のための対策はとられていない。生息地となる里山環境の再生と保全が大切である。

## 7. 特記事項

近年、富士山西麓の本来分布していなかった地域から、人為的に野外に放たれた個体に由来するとみられる記録が報告されている。

## 8. 主な文献

池谷 正・鈴木英文・諏訪哲夫(2014) 大井川上流7月中旬の蝶. 駿河の昆虫, (245): 6737-6738

小堀 健(2013) 富士市岩本山公園のオオムラサキ. 駿河の昆虫, (243): 6685-6686

清 邦彦(2004) 富士宮市と芝川町のオオムラサキとゴマダラチョウ. 駿河の昆虫, (206): 5752-5753

清 邦彦(2016) 富士山におけるウスバシロチョウとオオムラサキの分布拡大. 環境Eco選書⑫-チョウの分布拡大, pp. 63-70. 北隆館, 東京.

高橋真弓(1975) 静岡県および山梨県南部におけるオオムラサキとゴマダラチョウの分布. 駿河の昆虫, (92): 2679-2701

高橋真弓・斉藤伸行(2014) 主として静岡県中部および山梨県南部におけるオオムラサキとゴマダラチョウの越冬幼虫調査記録(2003-2015年). 駿河の昆虫, (247): 6779-6785

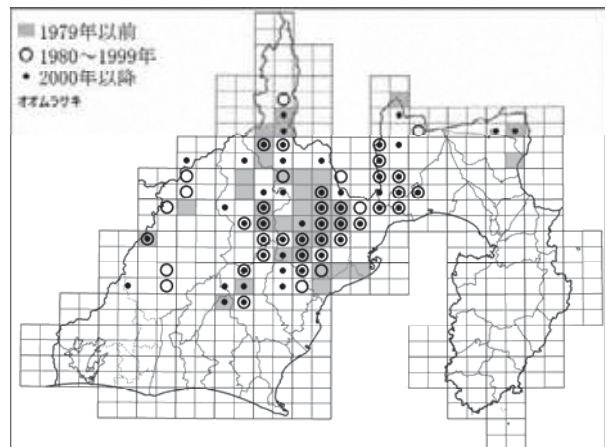
## 9. 標本

各産地(多数): ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(鈴木英文・諏訪哲夫)



静岡市産♀表面 2015年6月22日 池谷 正採集



# サトキマダラヒカゲ *Neope goshkevitschii* (Ménétriès, 1857)

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード9

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 60～65 mm。表面は黒褐色の地に明るい褐色の斑紋が全面を覆う。オスメスとも斑紋に大きな違いはない。幼虫の食餌植物はネザサやモウソウチクなど。蛹で越冬。成虫は5～6月と7月下旬～8月に2回発生する。クヌギなどの樹液や動物の糞などに集まり吸汁する。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布している。南千島の国後島にも生息する。県内では伊豆半島をはじめ標高ほぼ 0～1,000 m の県下全域に分布している。

## 3. 生息環境

主として標高の低い平地や里山のメダケやモウソウチクなどの竹林、ネザサの群落に生息し、時に標高の高いスズタケなどの群落でも採集されることがある。成虫は樹液を吸汁するのでコナラ、クヌギ、ヤナギなどの林が重要となる。

## 4. 生息状況

以前は最もふつうに見かける種であったが、ここ10年ほどは個体数が激減している。その傾向は静岡市とその周辺で顕著である。西部、東部では激減とまではいかななくても個体数が減少している。

## 5. 減少の主要因と脅威

以前は多くの個体が見られた低山地で激減した要因は明らかではないが、竹林が密生し過ぎたこと(54)や成虫の餌となる樹液などを出す雑木林が減少(11、23)していることも要因の一つと考えられる。

## 6. 保護対策

里山が放置されることなく何らかの整備が進めば回復の期待はある。

## 7. 特記事項

減少傾向は他県ではあまり報告されていなく、本県の減少は特異である。

## 8. 主な文献

佐藤卓也 (1994) 静岡市谷津山の蝶について. 駿河の昆虫, (166): 4703-4720

杉本 武・諏訪哲夫 (2013) 静岡大学キャンパス内の昆虫調査Ⅱ. 駿河の昆虫, (244): 6705-6721

諏訪哲夫 (2015) 遠州地方における蝶類の記録 (2015年). 駿河の昆虫, (252): 6912-6914

高橋真弓 (1969) 静岡県とその周辺におけるキマダラヒカゲの“平地型”と“山地型”の分布. 駿河の昆虫, (66): 1884-1903

土屋忠男 (2010) 静岡県東部蝶の記録 (Ⅳ). 駿河の昆虫, (232): 6401-6406

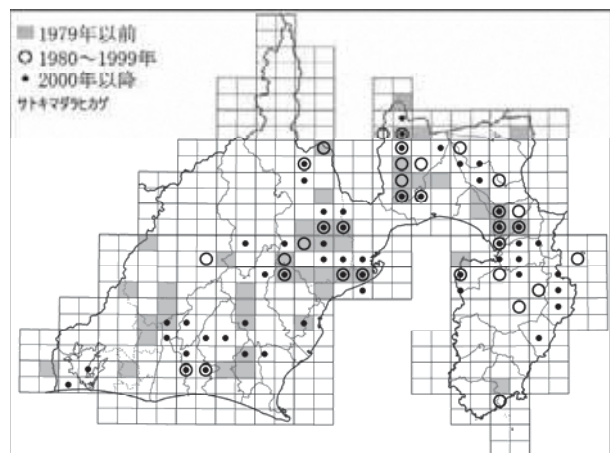
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵

(諏訪哲夫)



掛川市産♂裏面 2015年5月17日 諏訪哲夫採集



# ヒメジャノメ *Mycalesis gotama fulginia* Fruhstorfer, 1911

タテハチョウ科 Nymphalidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-Ⅲ 部会注目種)変更コード9

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張およそ 40～45 mm。翅の表裏とも薄い灰褐色で、表前翅には大小 2 個の眼状紋がある。裏面は前翅と後翅を貫く白黄色の線があり、その外側に複数の眼状紋がある。幼虫の食餌植物は各種のイネ科植物。幼虫で越冬。成虫は 5 月中旬から現れ 10 月まで年 3～4 回発生する。成虫は花で吸蜜することはほとんどなく、果汁や樹液などを吸汁する。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島、台湾、中国中南部、インドシナ半島に、国内では北海道西南部、本州、四国、九州に広く分布する。県内では標高は 0～1,000 m の各地に広く分布している。

## 3. 生息環境

水田の周りの草地や堤防、森林の周辺や明るい林内などに生息し、時に住宅の庭でも見ることがある。

## 4. 生息状況

海岸から山地にかけていたるところで見かけ、個体数も多く最もふつうの種であった。しかし、2000 年代になって静岡市内では減少傾向となり、最近では目撃することがかなり稀になっている。西部ではまだ生息しているところは多いが、個体数は 10 年ほど前に比べて明らかに減少している。減少傾向は伊豆、東部ともに同様である。

## 5. 減少の主要因と脅威

これまで最もふつうの種であったにもかかわらず、減少している原因は不明である (99)。

## 6. 保護対策

里山の整備が望まれる。

## 7. 特記事項

最普通種であった本種が、最近の減少が著しいことは驚きであり、今後の推移を観察していく必要がある。

## 8. 主な文献

- 永井 彰 (2000) 清水市西里・黒川地区における 1999 年の蝶類出現調査. 駿河の昆虫, (191): 5355-5360
- 佐藤卓也 (1994) 静岡市谷津山の蝶について. 駿河の昆虫, (166): 4703-4720
- 諏訪哲夫 (2015) 遠州地方における蝶類の記録 (2015 年). 駿河の昆虫, (252): 6912-6914
- 谷川久男 (1999) 裾野市深良用水古川流域のチョウ. 駿河の昆虫, (187): 5243-5246
- 土屋忠男 (2010) 静岡県東部蝶の記録 (IV). 駿河の昆虫, (232): 6401-6406

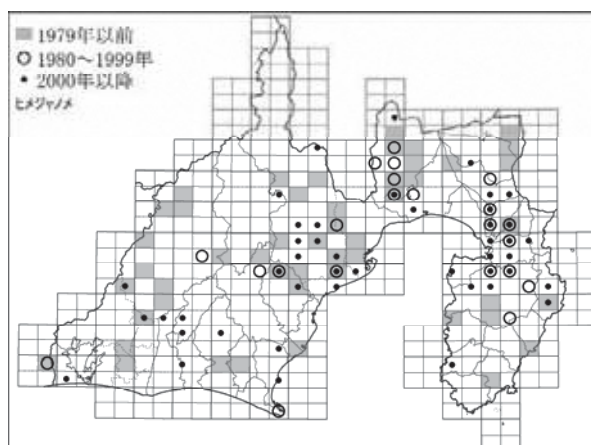
## 9. 標本

各産地 (多数) : ふじのくに地球環境史ミュージアム所蔵 (未登録)

(諏訪哲夫)



磐田市産♀裏面 2015年9月22日 諏訪哲夫採集





# オキナワリチラシ *Eterusia aedeasugitanii* Matsumura, 1927

マダラガ科 Zygaenidae

静岡県カテゴリー 部会注目種(N-III)変更なし

[2004年版カテゴリー 要注目種(N-III 部会注目種) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

開張 60~70 mm。オスの触角は櫛歯状。体は黒色で、青色、緑色の鱗片が多く、前翅の地色は美しい緑色の金属様光沢がある。幼虫はヒサカキを食す。本亜種成虫は年1化、8月下旬~9月に出現する。オスは昼間活動せず、灯火に飛来する。

## 2. 分布

本亜種 *sugitanii* は、国外では韓国可居島に、国内では伊豆半島を東限とし本州、四国、九州、隠岐、対馬、筑前沖ノ島に分布する(大和田, 2013)。県内では伊豆と中部に分布する。そのほか、屋久島・トカラ列島・奄美大島・徳之島・沖縄島・久米島・八重山諸島産それぞれが亜種とされ、合計8亜種が日本に分布する。種としては、台湾、中国、インドシナ、ヒマラヤからインドを経てスリランカまで広く分布している。

## 3. 生息環境

低木層に食樹ヒサカキの混じる樹林。

## 4. 生息状況

伊豆市湯ヶ島で1961年に発見された後、1987年に再度確認された。その後の記録としては手元に1995年8月の標本があるのみ。2000~2001年に調査を実施したが確認されなかった。その後、2014年までの調査で安倍川上流部(静岡市葵区入島)まで数ヶ所で生息地が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

森林伐採(11)や市街地に近い場所での発生地では常夜灯の影響(71)がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

静岡県が分布の東限となっている。また、伊豆市湯ヶ島は孤立した個体群(近い既知産地は愛知県鳳来寺)とされていたが、2001年9月に安倍川流域の静岡市葵区藤代などで確認された。外見は伊豆市湯ヶ島産の個体と変わらない。

## 8. 主な文献

福井昭夫(1963) オキナワリチラシ伊豆半島に産す. 蛾類通信, (32): 224

岸田泰則・矢崎克己・吉本浩(1988) オキナワリチラシの伊豆半島における再発見. 蛾類通信, (145): 317

Owada M. (2001) Further notes on geographical forms of the Chalcosiinae moth *Eterusia aedeasugitanii* (Lepidoptera, Zygaenidae). *Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo*, 37: 293-310

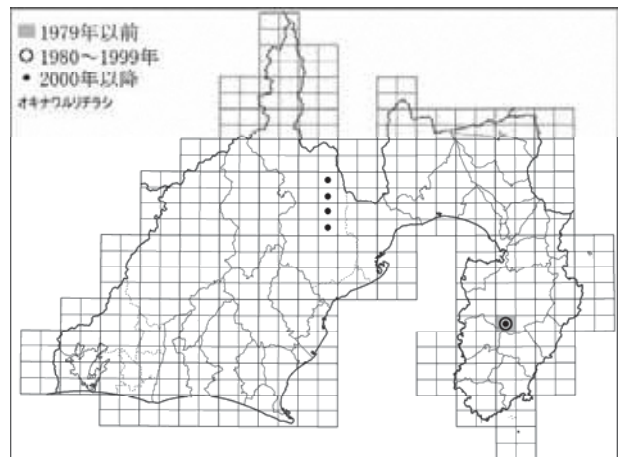
大和田守(2013) マダラガ科ホタルガ亜科. 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則 編, 日本産蛾類標準図鑑Ⅲ, pp. 329-331. 学研教育出版, 東京.

## 9. 標本

静岡市葵区産: 国立科学博物館所蔵



©2019 E.Eda  
静岡市産♂表面 2015年9月5日 枝恵太郎



(枝恵太郎)

## 7. 陸・淡水産貝類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

軟体動物の二枚貝綱及び腹足綱のうち、陸域及び淡水域に生息する種を対象とした。汽水域及び海水域の潮間帯に生息する種のうち、アマオブネガイ科、シラタマアマガイ科、フネアマガイ科、カワザンショウガイ科、トウガタカワニナ科、オカミミガイ科、シジミガイ科はここに含めた。静岡県産の総種数は214種であり、そのうち外来種とされる22種を除き、在来種である192種（腹足綱185種、二枚貝綱7種）を評価対象とした。

対象とした陸・淡水産貝類の生息域は海岸から高山に及び、河川や池の地表の水系のみならず、地下水系からもえられている。陸産貝類は低標高域の多様性が高く、高標高域に生息する種は限られてくる。南アルプスの高山帯から亜高山帯にはナガタネガイが生息する。温帯以下に生息する種は多く、環境の特性に適応した貝類相が成立する。冷温帯の樹林にはヒメギセル、マルクチコギセルなどが生息する。暖温帯の樹林にはヒロクチコギセル、レンズガイなどが生息する。海岸にはヤマトクビキレガイ、ウスコミミガイなどが生息する。湿地にはナタネキバサナギガイなど、河川などの草地にはカタママイマイが生息する。河口域にはタケノコカワニナ、ヤマトシジミなどが生息する。河川や池にはマルタニシ、ヒラマキミズマイマイ、マツカサガイなどが生息する。地下水からはカワネミジンツボが採集されている。

石灰岩地には陸産貝類が多産し、時に石灰岩地特有の種が生息する。静岡県で地表の陸産貝類相に影響を及ぼす規模の石灰岩は地質条件から遠州地方に偏在し、牧之原市の女神山のほか、浜名湖北岸から南アルプスの光岳に至るまで小規模な岩体が点在し多様な陸産貝類が生息する。浜名湖北岸の低標高域の石灰岩地には石灰岩地特有の種が分布する。

陸産貝類は移動能力が乏しいと考えられ、各種の分布域は他の分類群と比較して狭い傾向にある。静岡県と隣接する県にのみ生息する種としては、ホウライジギセル、ツバクロイワギセル、メルレンドルフマイマイ、ミカワマイマイなどが知られる。

### (2) 調査の概要

調査はすべての種を対象とし、静岡県下全域で目視による採集のほか、落葉などを篩別した後持ち帰り室内で分離した。水域では主に水網を用いて採集した。すべての分布記録には標本の裏付けがあり、標本は採集者の手元に保存されている。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

静岡県レッドデータブック(2004)に掲載された種を中心に、その後公表された環境省レッドリスト(2018)に掲載された種のなかで、静岡県に分布する種を加えて検討した。ただし、絶滅が危惧されるか否かは、静岡県での調査結果で判定した。

### (4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は67種で前回の63種より4種増加した。絶滅種は1種、絶滅危惧ⅠA類は7種、同ⅠB類は11種、同Ⅱ類は11種、準絶滅危惧は26種、情報不足が11種であった。静岡県独自のカテゴリーである要注目種に該当する種は判定されていない。環境省レッドリスト(2018)に掲載された種でも、静岡県下では広く分布し、特に減少傾向にあるとは認められない種もある。

### (5) 減少の主要因と脅威

**ア** 各種の開発により生息地の消滅、改変が進むとともに、生息地が分断化している。

**イ** 陸域では、社寺林のような良好な常緑広葉樹林が減少している。残された社寺林でも大径木の枯損や周囲の開発などにより環境が変化している。

**ウ** シカの生息密度の上昇に伴い林床植生の消失や質の低下、土壌の流亡などが起きている。

- エ 石灰岩の採掘や石灰岩地への植林は、かつては重要な減少要因であった。
- オ 島でのみ生息が確認されている種は、生息環境の変化にきわめて弱いことが推測される。
- カ 水域では様々な開発による生息地の消滅、水質悪化が相変わらずある。
- キ 外来種との競合などによる問題が顕在化してきた。タイワンシジミ類など繁殖力の強い移入種による生態系の変化が認められる。
- ク 採集圧の影響は一般に少ないが、頻繁に採集者の訪れる御殿場市のハナコギセルの生息地や、ヤリタナゴの飼育のためのマツカサガイの大量採集は脅威である。

#### (6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

カタヤマガイは日本住血吸虫の中間宿主として 1960 年代頃まで積極的に駆除が行われ、一時は絶滅したと見られていた。しかし、静岡県レッドデータブック (2004) の調査で 1 地点が再発見された。そこでは 2010 年頃まで生息が確認できていたが、生息地の水路が暗渠化され、生息可能な環境ではなくなった。周囲の詳細な調査でも生息が確認できず、絶滅と判断した。

絶滅危惧 I A 類としたハナコギセルの基準産地である御殿場市の神社は採集地として有名であり、著名な研究者を中心とした採集会が行われたこともある。神職の話では近年でも個人の採集者が訪れるという。今回、数度の調査でも生息が確認できなかった。そのほかの生息地もきわめて限定され、特定の樹種の限られた木の樹皮に見られるのみであり、生息可能な環境は脆弱と考えられた。

準絶滅危惧と新たに判定したヤマモトゴマオカチグサとマルクチコギセル、サドタカキビ、タンザワキビは 2004 年以降に静岡県で新たに確認された。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

現在、各々の種に対する保護策はとられていないが、貝類の保護には生息環境そのものの保全が不可欠である。そのため、開発や改変に際しては十分な配慮が求められる。山地の天然林、平野部の社寺林など、良好な森林の保全も重要である。近年は、シカの食害による林床植生の衰退と表土の流亡も影響は大きく、県下全域の山間地に対策が求められる。伊豆から県東部地域のヤマメタニシ、ヤセアナナシマイマイ、オオトノサマギセル、ミヤマヒダリマキマイマイなど、そして県中部から西部地域のスジキビ、サドタカキビ、ヤマコウラナメクジなど、冷温帯から暖温帯上部の林床に生息する種の今後の動向を追跡する必要がある。また、採集圧のある場合、その制限や啓発活動が必要である。

#### (8) 文献 (多くの種で参考とした文献)

東 正雄 (1995) 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社, 大阪, 343 pp.

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

増田 修・波部忠重 (1989) 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82, col.pls. I ~ III, pls., I - XIV.

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第 2 版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

湊 宏 (1988) 日本陸産貝類総目録. 日本陸産貝類総目録刊行会, 和歌山, 294 pp.

(松本雅道)



# カタヤマガイ *Oncomelania hupensis nosophora* (Robson, 1915)

(=ミヤイリガイ)

イツマデガイ科 Pomatiopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅(EX)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

殻高8 mm、殻径3 mmの細長い円錐形をした淡水産の巻き貝。殻は赤褐色で螺層はやや膨らむ。殻口は肥厚し暗色となる。臍孔は狭く開く。風土病として有名な日本住血吸虫症を引き起こす日本住血吸虫の中間宿主である。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州と九州に分布するが、産地は局所的で、利根川下流、富士川中・下流域、広島県、岡山県、筑後川流域に限られる。全国的に生息の減少が著しく、広島県と岡山県、筑後川流域では絶滅した。なお、種としては、国外では中国に分布する。県内では富士川下流域を中心とした富士市や沼津市で古い記録があるが、近年では富士市の住宅地に残された水田の用水路でのみ生息が確認されていた。

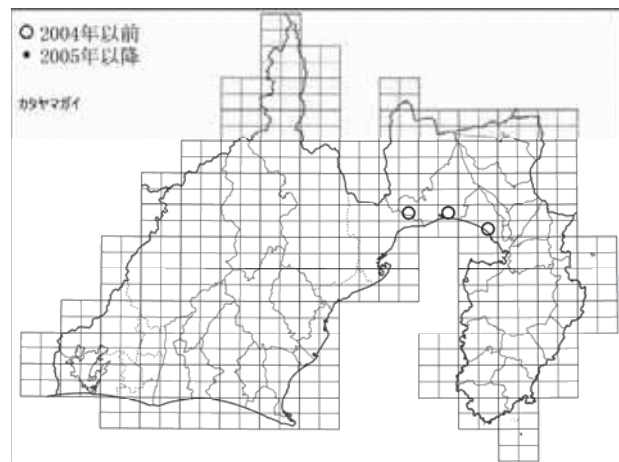


富士市産 2001年10月8日 加藤 徹採集

## 3. 生息環境

本来は大河川の荒廃原の湿地に生息していたが、その耕地化に伴い、水田やその周辺の水路を主な生息地としてきたと考えられる。山梨県の生息地では、本来の水田雑草が残る水田やその周辺の用水路で見られるが、冬期にも湿潤な環境がある場所に限られる。

本県では、かつては富士川下流域と浮島沼周辺の湿地や水田、用水路に生息していたが、近年まで確認されていた生息地は、水田と道路に挟まれた小規模な常水のある用水路（U字溝）だけであった。



## 4. 生息状況

1940年代まではまだ浮島沼周辺に広く分布していたが、その頃から一部を除き生息密度はかなり低かった。1950年代になると生息地は急速に失われていき、富士市と沼津市のそれぞれ1ヶ所だけになった。1961年には富士川西岸で生息地が見つかったが、その直後に火炎放射そして殺貝剤（PCP-Na）の大量散布により駆除された。そして、1962年には富士川以東の生息地で本種は確認されなくなった。富士川西岸では2010年頃まで生息が確認されていたが、唯一生息していた用水路が改修、暗渠化され、生息環境が失われた。なお、その後周辺部でも本種の生息は確認できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

日本住血吸虫の中間宿主となるため、焼却などの防除が実施されたが、近年は行われていない。そのため、水田の乾田化（15-2）や宅地などへの開発（23）、農薬の影響（32）が大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

伊藤二郎・野口政輝・望月 久・浅川 豊（1963）静岡県の日本住血吸虫病(4)富士川町におけるNCP-Na散布による宮入貝の撲滅について. 寄生虫学雑誌, 12(1): 88-93

## 9. 標本

富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（加藤 徹）

# タケノコカワニナ *Stenomelania rufescens* (Martens, 1860)

(=レベックカワニナ)

トゲカワニナ科 Thiaridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類(VU) ]

## 1. 種の解説

河口付近の汽水域に生息する中型の貝。殻高 60 mm、殻径 20 mm 程度と細高い。殻皮は黒褐色でなめらか。縫合は窪まず、縫合下に細かい螺溝がある。カワニナに似るが、より大型で殻頂に向けて直線的に細くなることで区別できる。また、卵胎生であるカワニナと異なり、本種は卵生で科が異なる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布するが、静岡県が分布の東限と考えられる。静岡県では伊豆半島の下田市と松崎町そして富士川河口、浜名湖周辺で確認されている。

## 3. 生息環境

河口域の水底の泥上に生息する。一般には小河川の河口に生息するが、荒廃河川の大川である富士川の河口では、本流ではなく少し離れたワンド状の汽水の池に生息していた。

本種は汽水域の上流寄りに生息するが、純淡水域には生息しない。静岡県の河川は河口域でも比較的勾配が急な河川が多く、本種に適した塩分濃度の範囲は狭く、いずれの生息地でもきわめて狭い範囲にしか生息していない。

## 4. 生息状況

伊豆半島と富士川河口では近年生息が確認されておらず、現在確実な生息地は最近になって生息が確認された浜名湖周辺に限られる。本種は幼生期に浮遊生活をするため、新たな生息地が出現する可能性もあるが、隣県の愛知県(木村, 2009)や岡山県、山口県(福田・木村, 2012)、では絶滅したと考えられており、期待はできない。

## 5. 減少の主要因と脅威

河口域は人間の経済生活による様々な汚染物質が集まる場所であり、水質の悪化(31)による影響が大きいと考えられる。また、水門や堰などの建設(25)による塩分や底質の変動の影響も考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏・木村昭一(2012) タケノコカワニナ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 33. 東海大学出版会, 秦野.

木村昭一(2009) タケノコカワニナ. 愛知県環境調査センター 編, レッドデータブックあいち 2009-動物編-, p. 458. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

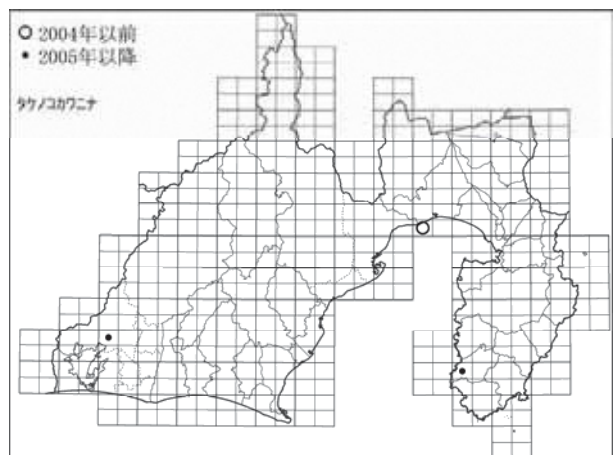
増田 修・内山りゅう(2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

富士市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2013年11月3日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヒダリマキモノアラガイ *Calmenella rezvoji* Lindholm, 1927

ヒラマキガイ科 Planorbidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類(CR+EN) ]

## 1. 種の解説

池沼に生息する淡水貝。殻高6 mm、殻径3.5 mm程度。左巻きで殻は褐色で薄く、表面に毛を伴う螺条がある。体層は著しく膨大し、殻口は全高の3/4を占める。モノアラガイ類に似るが、本種は左巻きである。また、左巻きのサカマキガイとは、螺条の有無で区別できる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の青森県から大阪府にかけて分布する。県内では磐田市の桶ヶ谷沼に唯一の記録がある。

## 3. 生息環境

桶ヶ谷沼は中心部の開水面とその周囲に広がるヨシやマコモなどの湿地に分かれるが、開水面で採集されている。

## 4. 生息状況

個体数はもともと少なかったようで、1970年代でも数個体しか採られていない。その後、1986年に採集されて以来見つかっていない。全国的にも減少が著しく、ほとんどの産地で再発見ができない状況にある。

## 5. 減少の主要因と脅威

桶ヶ谷沼の水源は湧水だけであるが、沼を取り巻く森林のすぐ外側の台地上は農地や工場、宅地と開発が著しく、湧水の水質が悪化し(31)、それが減少の原因と考えられる。

## 6. 保護対策

桶ヶ谷沼は静岡県の自然環境保全地域に指定されているが、本種を保護するような特別な対策は行われていない。

## 7. 特記事項

桶ヶ谷沼は周囲を常緑広葉樹に囲まれた、台地の縁に発達した谷にある沼で、ベッコウトンボをはじめとした希少なトンボが多く生息することで有名である。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

武田由紀夫 (1991) 磐田市桶ヶ谷沼地域の非海産貝類. 遠州の自然, (14): 33-37

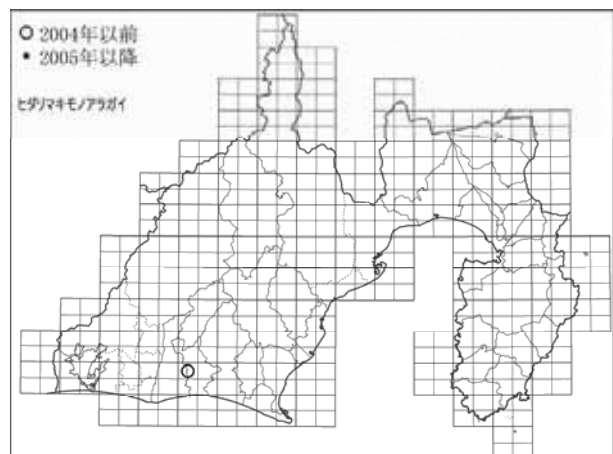
## 9. 標本

桶ヶ谷沼産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



長野県産 2016年11月16日 加藤 徹採集





# ノミガイ *Lamellidea boeningi* (Schmacker & Boettger, 1891)

ノミガイ科 Elasmatinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

海岸近くに生息する微小な陸貝。殻高4 mm、殻径2 mm。殻は褐色で螺塔は高く円錐形。体層は大きく、周縁は丸い。臍孔は狭く開く。内唇には1本の螺状板がある。

## 2. 分布

国外では台湾に、国内では本州から沖縄にかけて分布する。本州では和歌山県と静岡県にのみ分布するが、生息地はいずれも小さな島嶼である。県内では沼津市のごく小さな一つの島にのみ生息が認められるが、他の生息地と非常に隔離された分布の東・北限である。なお、本種は鳥に食べられても一部は生きのまま排泄されることが知られており (Wada *et al.*, 2012)、県内の生息地も鳥に運ばれたものかもしれない。

## 3. 生息環境

沖縄では海岸近くの広葉樹林下の草や木、石灰岩などの上に生息する。本県ではウバメガシの疎林の林床で落葉下やスゲ類の草などに登って生息している。沼津市の産地では島の一部の斜面でのみ生息が確認された。

## 4. 生息状況

生息する島は1,000 m<sup>2</sup>に満たなく、さらに生息地はその一部に限られるため、総個体数は非常に少ないといえる。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種にとって絶滅が危惧される要因はたくさんある。まず、生息地が分布域の隔離された東・北限に当たり、生息に十分適しているとは考えにくいことである(61)。さらに、生息地がきわめて狭く(71)、また海岸改修などの改変(14)を受けやすいことなどである。これらのことから、些細な環境の変化でも本種を絶滅へ追い込むと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Wada, S., K. Kawakami & S. Chiba (2012) Snails can survive passage through a bird's digestive system. *Journal of Biogeography*, 39: 69-73

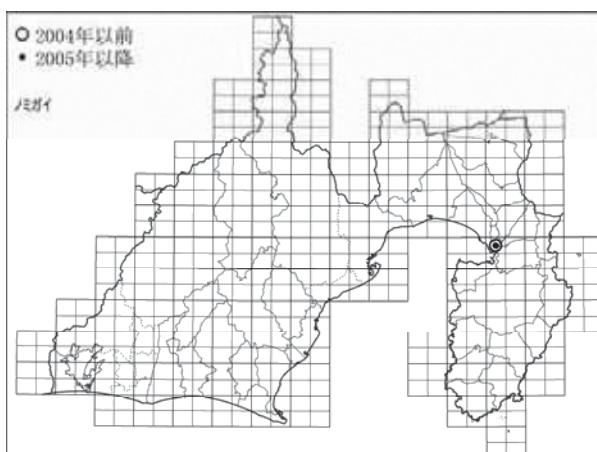
## 9. 標本

沼津市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(加藤 徹)



沼津市産 2012年12月24日 加藤 徹採集



# ハナコギセル *Reinia euholostoma* (Pilsbry, 1901)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

樹上に生活する小型のキセルガイ。殻高 8 mm、殻径 2.5 mm 程度。体殻は小さく、殻の中層は太い。殻口は大きい。殻表は褐色で、白色の縞模様がしばしば現れる。主壁はごく短く、上腔壁も短い。下腔壁は 2 本ある。月状壁はない。

## 2. 分布

日本固有種で、九州中部と四国南西部に分布し、飛び離れて静岡県周辺にも分布する。本州では静岡県と神奈川県西部に分布し、県内では御殿場市から伊豆半島にかけて生息する。

## 3. 生息環境

暖帯の社寺林などの広葉樹の大径木がある林の特定の木の幹に生息する。静岡県ではタブノキやカキノキに生息するのが確認されている。普段はそれらの木の樹皮の割れ目などに潜んでいる。

## 4. 生息状況

生息地はきわめて限定され、その中でもそれぞれ数本の木に見られるのみであり、個体数はきわめて少ないと判断される。なお、基準産地である御殿場市の生息地では、近年生息が確認されていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大径木を含む広葉樹林に生息していたが、そのような林は社寺林などを除いてほとんど消滅してしまった。社寺林でも生息するのはきわめて限定され、さらに生息する木も限定される。これらの数少ない木の枯損(54)は本種の産地の消滅につながるおそれがある。また、御殿場市の生息地では多くの採集者が土地所有者に目撃されており、採集圧も大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

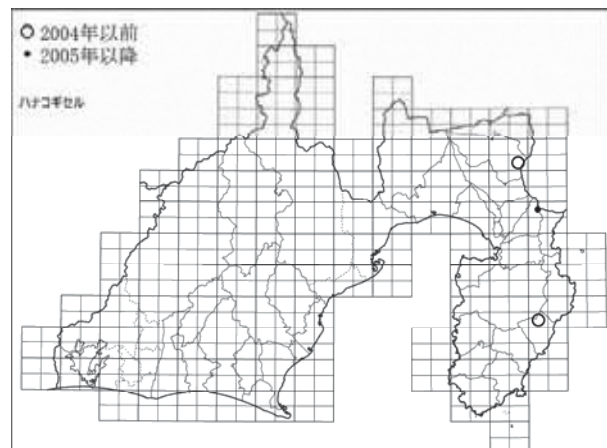
## 9. 標本

函南町産：個人所蔵、御殿場市産：国立科学博物館所蔵、静岡県産：京都大学総合博物館所蔵（平瀬コレクション）

(加藤 徹)



函南町産 2001年11月5日 加藤 徹採集



# オモイガケナマイマイ *Aegista inexpectata* Kuroda & Minato, 1977

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類(CR+EN) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地にのみ生息する小型の陸貝。殻は扁平で、特に上面はほとんど平らである。周縁は著しく竜骨状となる。臍孔は大きく開く。殻径は10 mm程度であるが本県の個体群は14 mmとやや大きい。周縁上の毛がないオオケマイマイの幼貝に似るが、本種には殻の上面の周縁内側にごく浅い窪みがあることで区別できる。

## 2. 分布

日本固有種で、群馬県から愛知県にかけての石灰岩地に分布するが、いずれの産地もきわめて局地的である。県内では浜松市の石灰岩地に分布する。今までに知られている県内の産地は2ヶ所でいずれの石灰岩地も規模は大きくない。

## 3. 生息環境

石灰岩の大きな露頭の岩の隙間に生息する。植生が灌木林程度の未発達な場所で、石灰岩が土壤に埋没せず、露出しているような露頭が生息環境であると考えられる。同じ石灰岩地でも生息地はきわめて狭い範囲内に限定される。

## 4. 生息状況

生息地で死殻を得ることはそれほど難しくないが、生貝はなかなか見つからない。これは本種が石灰岩の隙間に生息するために見つけにくいこともあるが、個体数自体も多くはないと考えられる。浜松市の1ヶ所の産地(黒田・湊, 1977)では近年生貝は見つかっていない。もう1ヶ所の産地も周囲はスギの植林地となり生息範囲は数百㎡を超えない。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩の採掘(17)によりいくつかの石灰岩地が消失したが、そこに本種が生息していたかは不明である。現在では石灰岩の採掘は限定的で本種の生息の脅威とはなっていない。石灰岩地上の灌木林や広葉樹林への植林(71)もかつては重要な減少要因であったと考えられる。現在では生息地がきわめて狭く、個体数も少ないため存続が危ぶまれる状態である(71)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

基準産地がある愛知県では、県の指定希少野生動植物種に指定されている。

## 8. 主な文献

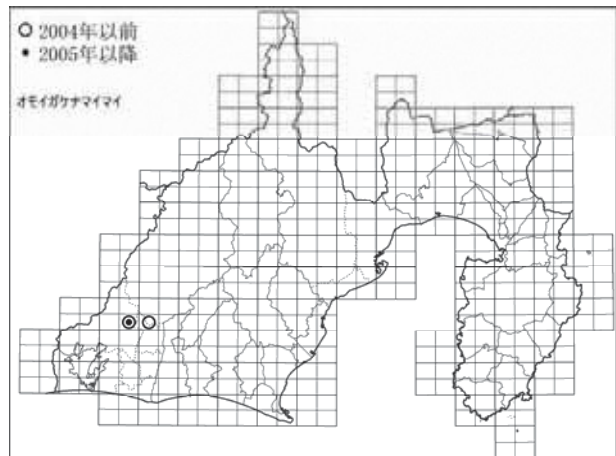
黒田徳米・湊 宏(1977) 愛知県石巻山石灰岩地帯産オモイガケナマイマイ(新種・新称). *Venus*, 36(2): 57-59

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2003年3月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# タメトモマイマイ *Bradybaena phaeogramma* (Ancey, 1883)

(=2004年版のミヤケチャイロマイマイ)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A類(CR)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類(CR) :

環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)(静岡県:該当なし)]

## 1. 種の解説

主に島嶼に生息する中型の陸貝。殻高 19 mm、殻径 26 mm 程度のやや低い円錐形。各層はふくらみ、周縁にはごく弱い角と細い赤褐色の帯がある。殻口は広がり反転する。臍孔は開く。

静岡県の個体群は伊豆諸島の個体群と共通でミヤケチャイロマイマイ (*Phaeohelix miyakejimana*) とされていたが、遺伝子解析や生殖器の形態から奄美諸島に分布するタメトモマイマイや大隅諸島周辺のチャイロマイマイ、八丈島のオナジマイマイモドキと同一種と考えられるようになった (Hirano *et al.*, 2014)。手石島の個体はやや小さく殻高 15 mm、殻径 22 mm。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆大島を除く伊豆諸島と薩南諸島および九州の大隅半島の南端部に分布する。大隅半島南端部をのぞき、生息地は島嶼部に限られる。県内では熱海市沖の初島と伊東市の伊豆半島本土からわずか 700 m ほど沖にある手石島にのみ分布する。

## 3. 生息環境

常緑広葉樹の根元などに生息するほか、手石島では海岸飛沫帯付近の漂着物下などにも見られる。

## 4. 生息状況

初島ではもともと個体数が少なかったが、1989 年 (Kato *et al.*, 1989) 以降生息が確認されない。手石島で本種を見つけることはそれほど困難ではないが、面積がわずか 1.5 ha 程度しかない島なので、全体の個体数はきわめて少ないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

初島では大型のリゾート開発 (23) が行われたことによる環境の悪化や、島の森林の多くを占めるクロマツ林にスプリンクラーなどで散布された殺虫剤 (32) の影響などが考えられる。手石島は本土から 700 m しか離れていないにしろ、本種が島嶼にしか生息が認められないことから、他種との競争にきわめて弱いことが推測される。したがって、競合する種の侵入は脅威である (56-1)。

## 6. 保護対策

手石島は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Hirano, T., Y. Kameda & S. Chiba (2014) Phylogeny of the land snails *Bradybaena* and *Phaeohelix* (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. *Journal of Molluscan Studies*, 80: 177-183

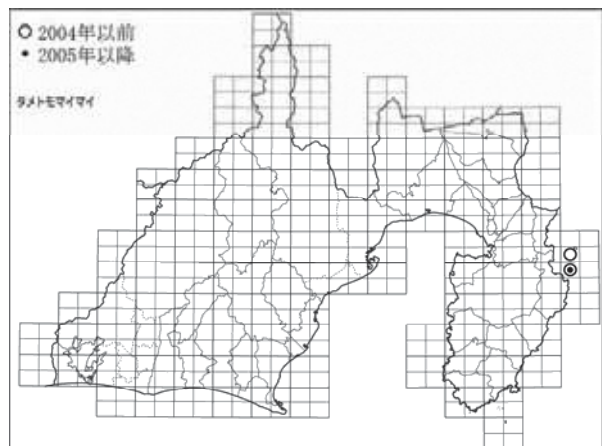
## 9. 標本

伊東市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



伊東市産 2002年5月12日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

小川などに生息する中型の淡水産二枚貝。殻は黒色楕円形で殻長 50 mm 程度。殻のふくらみは弱く、殻表には前半部に粗い顆粒状の模様と後背縁付近に放射肋がある。グロキディウム幼生はオイカワやカワムツなどのコイ科やヨシノボリ類などのハゼ科魚類の鰓や鰭に寄生する。また、本種の外套膜にヤリタナゴが産卵する（ヤリタナゴは本種幼生の寄主にはならない）。

### 2. 分布

日本固有種で、青森県から鹿児島県にかけて分布する。県内では西部の天竜川以西の平野にのみ分布する。

### 3. 生息環境

小川や用水路などの細く緩やかな流れの砂礫底や泥底に生息する。生息地は幼生期の寄主となる魚類の生息が条件である。

### 4. 生息状況

かつては天竜川以西の平地の小川などには広く分布していたと考えられるが、現在でも生息が確認されるのは数ヶ所にすぎない。また、多くの生息地は2面張りの人工的に整備された水路で、個体数は少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

減少は生息地の改変と環境の悪化の影響である。生息地の改変は小川などのコンクリート水路化で、水路底にもコンクリートが張られた場合は、生息は不可能になる(13)。生活排水(31)や各種農薬の流入による水質悪化(32)も個体数の減少に大きな影響を与えている。

また、本種を産卵母貝とするヤリタナゴを飼育する目的で、本種が大量に捕獲されたことがしばしばある(41)。

### 6. 保護対策

ヤリタナゴは静岡県条例で捕獲が禁じられているが、本種の保護対策はとられていない。

### 7. 特記事項

ヤリタナゴの生息地においてその域外繁殖を目的として本種が大量に捕獲された場所では、本種が激減し、その結果ヤリタナゴも激減した。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

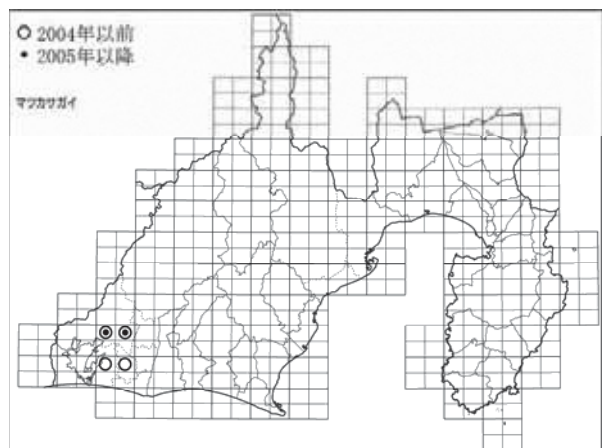
### 9. 標本

浜松市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(加藤 徹)



浜松市北区産 2010年3月4日 加藤 徹採集



# ベニゴマガイ *Diplommatina pudica* Pilsbry, 1902

(=オオヤマベニゴマガイ)

ゴマガイ科 Diplommatinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

広葉樹林の林床に生息する微小な陸貝。殻高 3 mm、殻径 1.5 mm。殻は淡い赤色で表面に密な肋条がある。螺塔は高い円錐形で体層から次体層にかけてが最も太い。腔襞はない。殻口は丸く縁は大きく広がる。

## 2. 分布

日本固有種。紀伊半島南部と伊豆半島にのみ分布する。伊豆半島でもその分布は局地的で、箱根山系と天城山及びその東麓に限られる。

## 3. 生息環境

落葉広葉樹林または常緑広葉樹林の林床の落ち葉の下に生息するが、天城山東麓では溶岩流跡の転石下に見られる。

## 4. 生息状況

天城山の東麓では個体数が少ないが、生息地は限定される。天城山の産地では、近年生息が確認できない場所があり、個体数がきわめて少なくなっていると判断される。

## 5. 減少の主要因と脅威

天城山東麓では別荘地など各種の開発 (23) により生息地は減少するとともに分断化している。残った林でも様々な環境の悪化が懸念される。天城山の良好なブナ林でも明らかに個体数は減っているが、天城山では近年、シカの生息密度がきわめて高くなっており、それによる林床の植生の消失や質の低下、土壌の攪乱などの影響 (54) が考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

伊豆半島の個体群は、当初オオヤマベニゴマガイ *D. oyamai* として記載された (波部, 1943) が、現在ではベニゴマガイのシノニムとされている。

## 8. 主な文献

波部忠重 (1943) 日本産陸産貝類の 2 新種 オオヤマベニゴマガイ及びカンダギセル. *Venus*, 13(1-4): 77-80

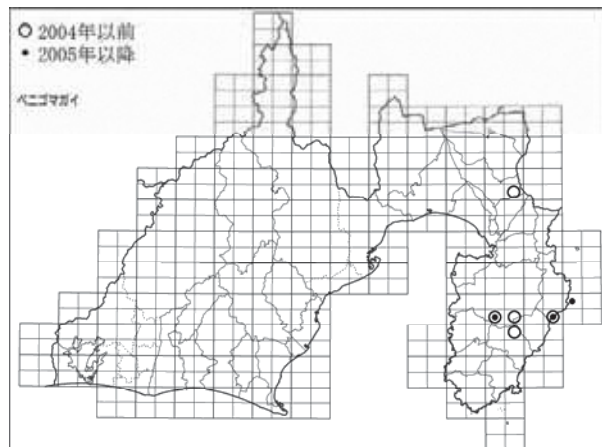
## 9. 標本

伊東市産ほか: 個人所蔵、伊豆天城山産: 国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



伊東市産 2012年11月25日 加藤 徹採集





# マメタニシ *Parafossarulus monchouricus japonicus* (Pilsbry, 1901)

エゾマメタニシ科 Bithyniidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

池沼に生息する小型の淡水貝。殻高 13 mm、殻径 7 mm。殻は淡い褐色で顕著な螺肋がある。螺塔は円錐形だが、殻頂はよく侵食される。殻口は厚くなり黒褐色となる。臍孔は閉じる。蓋は卵形で中心がややへこむ。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州と四国、九州に分布する。分布域は広いが産地は局限される。県内では富士宮市の田貫湖にのみ分布する。

## 3. 生息環境

田貫湖の砂底に生息し、湖底に沈んだ枝や葉などを這っているのが観察できる。同所的にヒメタニシとオオタニシ、移入種と考えられるハベカワニナ(北原, 2015)が見られる。

## 4. 生息状況

生息地は田貫湖の 1ヶ所のみで、一部の湖岸でのみ確認された。生息地でも生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地の周囲は開発(23)が進行しており、環境の悪化が懸念される。また、田貫湖には特定外来生物に指定されているブルーギル(52-3)や移入種のハベカワニナの個体数が多く、生態系の変化(71)が激しい。

## 6. 保護対策

生息地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、保護対策は何もとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

加藤 徹(1998) 静岡県初記録及び新分布の陸・淡水産貝類. 遠州の自然, (21): 15-16

北原佳郎(2015) 静岡県富士宮市の田貫湖で確認されたハベカワニナ. 兵庫陸水生物, 66: 15-18

増田 修・内山りゅう(2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

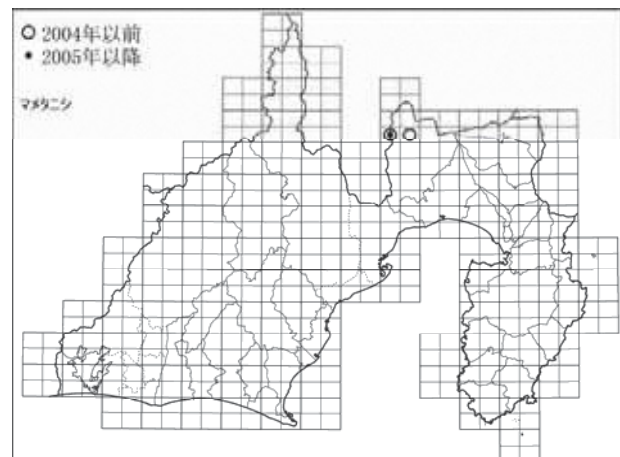
## 9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



富士宮市産 2015年9月5日 加藤 徹採集



# ヤマメタニシ *Blanfordia integra* Pilsbry, 1924

イツマデガイ科 Pomatiopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型の陸貝。殻高 4.5 mm、殻径 3.0 mm の高い円錐形。各層はふくらみ褐色で、口縁は黒ずむ。臍孔は大きく開く。蓋は薄く楕円形で渦巻状の模様がある。

日本海側の個体群と静岡県の個体群は、遺伝的に別種であることが示唆されている (Kameda & Kato, 2011)。

## 2. 分布

日本固有種で、本州に分布する。主に日本海側に分布しており、太平洋側の分布地は静岡県と岐阜県、三重県だけである。県内での分布は伊豆と東部、中部であるが局地的である。いずれも山地で、標高 1,000 m を超える高所に生息地が多い。

## 3. 生息環境

ブナなどのよく残った落葉広葉樹林に分布する。冬期以外はスゲ類などの地表に近い部分の植生上で生活していると考えられる。岐阜県では伊吹山の石灰岩地に産するが、本県では非石灰岩地にのみ分布する。

## 4. 生息状況

現在までに確認された産地は距離的に隔たった4ヶ所のみで、産地は局限される。いずれの産地でも個体数は少ない。小山町の産地以外では、近年生息が確認できない。

## 5. 減少の主要因と脅威

産地はいずれも大径木が残る自然度が高い場所である。このような林はほとんど伐採し尽くされており (11)、産地が失われていったものと思われる。また、本種は林床植生上で生活するが、県内の生息地ではいずれもシカの生息密度が高くなっており、林床植生が失われつつあることの影響が大きい (54) と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

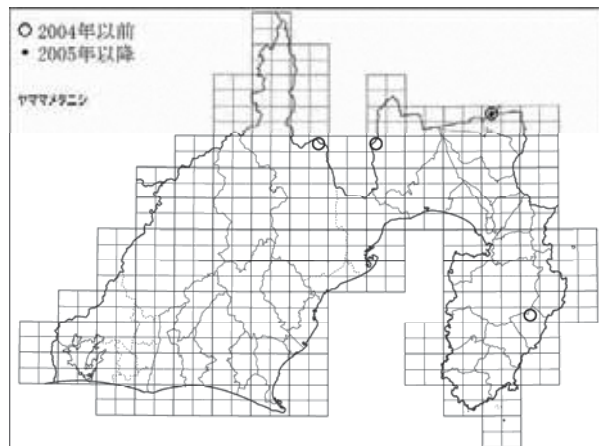
Kameda, Y. & M. Kato (2011) Terrestrial invasion of pomatiopsid gastropods in the heavy-snow region of the Japanese Archipelago. *BMC Evol. Biol.*, 11: 118-131

## 9. 標本

小山町産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



小山町産 2001年9月15日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ナニワクチミゾガイ *Eostrobilops nipponica reikoeae* Matsumura & Minato, 1998

クチミゾガイ科 Strobilopsidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②) 変更コード5

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

丘陵地に生息する微小な陸貝で、比較的新しく記載された亜種である。殻高1.5 mm、殻径2.5 mm。螺塔は低く、臍孔が大きく開き、一見コハクガイ類に似るが、殻口内にある腔襞により容易に区別がつく。腔襞は体壁板が殻口近くに2個、内部奥の殻底に3個ある。

## 2. 分布

日本固有亜種で、基準亜種のマツシマクチミゾガイが山形県から長野、新潟県に分布するのに対し、本亜種は神奈川県から大阪府の太平洋側に分布する。いずれの産地もきわめて局地的で、県内においても湖西市の1ヶ所だけで生息が確認されているにすぎない。

## 3. 生息環境

生息地は寺院の裏の丘陵地のいわゆる社寺林で、スダジイを中心とした常緑広葉樹の比較的大径木で構成された林である。林床は暗く、山頂近くのため乾燥しており、下層植生は少ないが、そこに堆積した落葉下に生息する。

## 4. 生息状況

生息地がきわめて狭く、個体数がもともと少なかったが、近年生息が確認できていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

大阪府の基準産地の植生はコナラなどの二次林である。また、比較的乾燥した場所を好むようなので、原生的な森林環境に依存する種ではないと考えられる。静岡県の生息地は自然度の高い常緑広葉樹林であり、環境の改変は見られないが、近年生息が確認できない原因は不明である(99)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

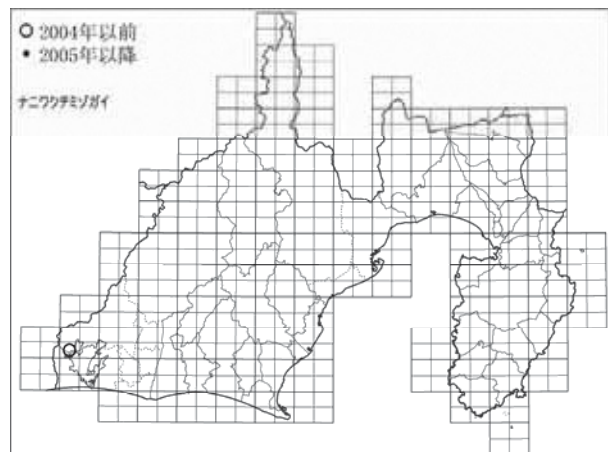
松村 勲・湊 宏 (1998) 大阪府北部で採集されたナニワクチミゾガイ (新亜種). *Venus*, 57(1) : 39-47

## 9. 標本

湖西市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



湖西市産 1999年6月13日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ホウライジギセル *Megalophaedusa ikenoi* (Minato, 1980)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型のキセルガイ。殻高 15 mm、殻径 3 mm 前後。殻は白色で細かい成長脈があるが老成個体ではなくなる。体殻は比較的太く、最も太い次体層まで徐々に太くなるが全体的に細い。上腔襞は短く、下腔襞より短い。

## 2. 分布

日本固有種で、愛知県東部と静岡県西部にのみ生息する狭分布種。県内では浜松市の主に天竜川水系の山地に分布する。

## 3. 生息環境

主に溪流に沿った広葉樹林に生息する。生息地は礫が堆積した不安定な場所に多く、礫間や落葉下に見いだされる。

## 4. 生息状況

個体数はきわめて少なく、1ヶ所で複数の生貝が得られることは少ない。浜松市天竜区龍山町の産地では、小規模の堰堤が建設された後、生息が確認できなくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布域は全国でも有数の林業地帯で、山林のほとんどがスギ・ヒノキ人工林と化し、しかも手入れ不足の林の増加から、多様な生物が生息する環境ではなくなっている (54)。そのため、生息地は局限され孤立化している。また、谷沿いに生息するため、山地災害やその対策工事 (55) に伴う減少も懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

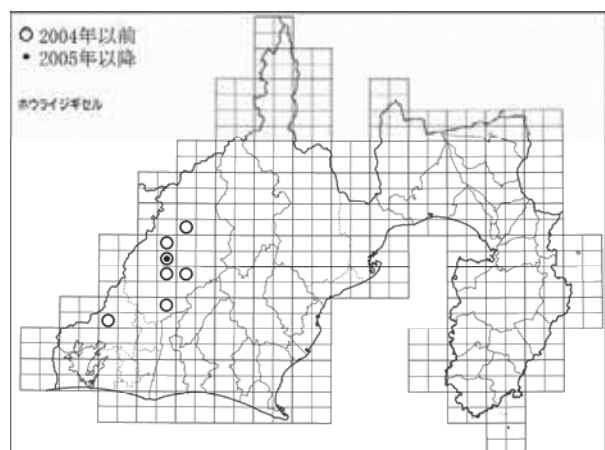
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 1997年9月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# シイボルトコギセル *Reinia sieboldtii* (Pfeiffer, 1846)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

海岸近くの樹上に生息する中型のキセルガイ。殻高 18 mm、殻径 4 mm。殻は顕著な成長脈があり、暗褐色。胎殻は小さく、全高の中心付近で最も太くなる。殻口は卵形で唇縁は白色で大きく外側へ広がる。短い主襞と同じく短い上下腔襞とそれらを結ぶ幅の広い月状襞がある。

## 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布する。本州での分布は局地的で、日本海側では新潟県と島根県、山口県に分布し、太平洋側では伊豆半島周辺にのみ分布する。県内では熱海市及び東伊豆町、熱海市沖の初島に、そして伊豆半島周辺では神奈川県の実籾町に生息する。

## 3. 生息環境

生息地は海岸近くの社寺林などよく残された常緑広葉樹林に限られる。樹上に生息し、タブ、クスノキ、ツバキ、クロガネモチなどの樹幹部で見つかることが多い。コンクリート建造物の壁などでもしばしば見つかるが、周囲によい広葉樹林のあることが条件である。

## 4. 生息状況

県内の生息地は3ヶ所に限られ、どの生息地も生息範囲はきわめて狭く、個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

古くは広葉樹林の伐採(11)や開発により生息地が狭められていったと考えられる。また、生息する樹木が限定されるため、近年ではそれらの樹木の枯死や周囲の木の伐採や枯死による環境の変化(54)によっても減少していると考えられる。

## 6. 保護対策

初島以外の産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

伊豆半島産の個体群はかつてサキグロシイボルトコギセルという亜種として分けられていたが、他の個体群と区別できないとされる。キセルガイ科はDNA解析の結果、属が再編された(Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

加藤 徹(1998) 静岡県初記録及び新分布の陸・淡水産貝類. 遠州の自然, 21: 15-16

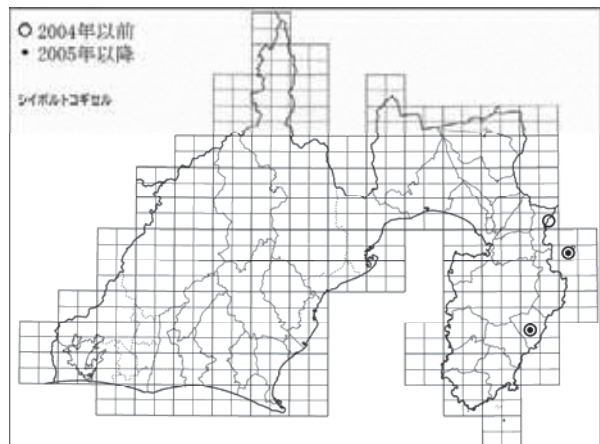
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

熱海市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



東伊豆町産 2000年11月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヒロクチコギセル *Reinia variegata* (A. Adams, 1868)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード 1,6

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

海岸近くの樹上に生息する小型のキセルガイ。殻高9 mm、殻径3 mm。胎殻は小さく体層付近が最も太い。殻は淡い褐色で、不規則に白色の縞模様が現れる。キセルガイ科としては珍しく腔襞はない。殻口は非常に大きく、上板、下板は非常に小さく、奥の方にあり目立たない。

## 2. 分布

日本固有種で、離島（宮城県沖の金華山、伊豆諸島など）をのぞけば関東以西の本州と四国、九州に分布する。本州では主に太平洋側に生息地が点在する。県内では伊豆半島の沼津市から下田市にかけての海岸近くに分布するが、下田市以北の東伊豆地域には分布しない。なお、東伊豆地域の同様な生息環境にはシイボルトコギセルが分布し、混生はしていない。

## 3. 生息環境

海岸近くの社寺林などの常緑広葉樹の大径林に生息する。時にはクロマツが優占する海岸林にも生息することがある。樹上性で、タブ、ヒメユズリハ、クロガネモチなどの幹に着いている。

## 4. 生息状況

個体数の少なくない産地もあるが、産地は局地的で現在は6ヶ所ほどでのみ生息が確認されているにすぎない。また、近年基準産地である西伊豆町田子では生息が確認できず、沼津市では樹木の伐採により生息が確認できなくなった産地もある。

## 5. 減少の主要因と脅威

社寺林のような良好な常緑広葉樹林の減少(54)と、残された社寺林でも周囲の開発(23)などによる環境の変化が主な要因と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

ほとんどの産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 8. 主な文献

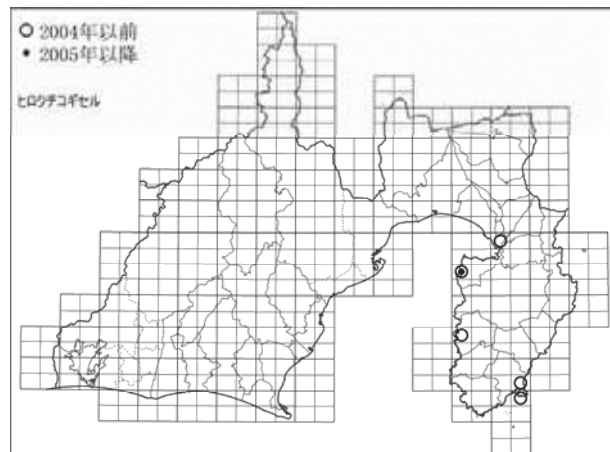
湊 宏 (2002) 金華山の陸産貝類、特にヒロクチコギセルの分布について. ちりぼたん, 32(3): 75-81

## 9. 標本

沼津市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



沼津市産 2000年11月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



## レンズガイ *Otesiopsis japonica* (Möller, 1885)

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリ 絶滅危惧 B類(EN)(要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリ 絶滅危惧 I B類 (EN) : 環境省カテゴリ 絶滅危惧 II類 (VU) ]

### 1. 種の解説

殻高 8 mm、殻径 13 mm の中型の陸貝。殻は薄く半透明な黄褐色で、周縁は著しく角張り、竜骨状となる。県内には似た形態の陸貝はいない。

### 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州から九州にかけて局地的に分布する。県内では東部・伊豆から中部にかけての御殿場市、沼津市、長泉町、静岡市で記録があるが、いずれの産地もきわめて局地的である。

### 3. 生息環境

社寺林などの良好な常緑広葉樹林が残る場所の落葉や倒木の下に生息する。

### 4. 生息状況

各生息地とも個体数はきわめて少なく、死殻を見つけることも困難な状況である。静岡市の複数の産地で、近年生息が確認できていない。

### 5. 減少の主要因と脅威

良好な常緑広葉樹林の減少 (54) や残された社寺林でも周辺の開発 (23) による環境の変化などが影響していると考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

埼玉県では絶滅したという (埼玉県, 2008)。

### 8. 主な文献

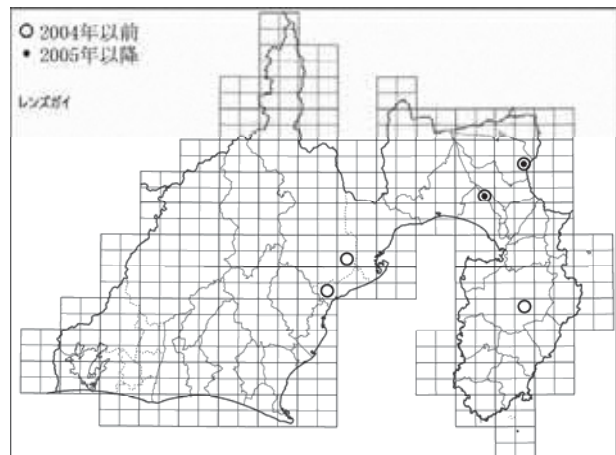
埼玉県 (2008) 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編. 埼玉県環境部みどり自然課, さいたま市, 352 pp.

### 9. 標本

御殿場市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



御殿場市産 2016年3月18日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# カタメマイマイ *Lepidopisum conospira* (Pfeiffer, 1851)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IA類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II類 (VU) ]

## 1. 種の解説

平地や丘陵地に生息する小型の陸貝。殻高 5 mm、殻径 6 mm 程度。螺塔は円錐形で縫合は深く、周縁は丸い。殻は薄い褐色で殻表に鱗片状の殻皮がある。臍孔は小さく開く。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では関東以西の本州と四国、九州に分布するが、産地は局地的である。県内では伊豆半島南部の下田市、南伊豆町そして富士市、浜松市で記録がある。

## 3. 生息環境

陸貝としては珍しく、主に草地環境に生息する。そのため人里の周辺や河川敷などにも生息する。伊豆半島では平地の社寺林の林床で確認されていたが、近年富士川と天竜川の河川敷で生息が確認された。

## 4. 生息状況

伊豆半島では近年生息が確認できていない。富士川、天竜川でも個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の生息地は人里の周辺に多いため、様々な経済活動による生息地の破壊や環境の悪化など (23) が懸念される。河川敷でも毎年増水による個体の流下や生息環境の消失のおそれ (55) があり、また防災工事など (13) による攪乱を受ける不安定な環境下に生息している。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

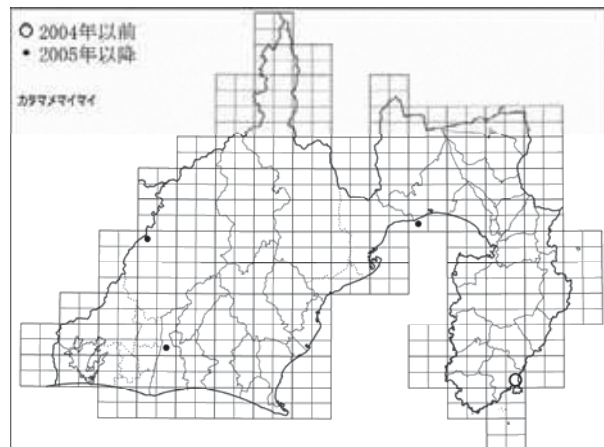
加藤 徹 (2012) 静岡県の各河川で洪水時の漂着物で採集される貝類. 遠州の自然, (35): 15-18

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵あり (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市浜北区産 2011年5月31日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ミカワマイマイ *Euhadra scaevola mikawa* Amano, 1939

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB類(EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I類(CR+EN) ]

## 1. 種の解説

殻高 20 mm、殻径 38 mm の大型で左巻きのマイマイ。ミヤマヒダリマキマイマイの石灰岩地性亜種。ミヤマヒダリマキマイマイに比べ大型で螺塔が扁平で周縁角が顕著。また、殻表には色帯がなく成長脈がきわめて粗い。浜松市天竜区などの非石灰岩地に分布するミヤマヒダリマキマイマイも周縁角がやや鋭く本亜種との中間形を呈するが、本亜種と比べ小型である。また、浜松市北区や湖西市の非石灰岩地に生息する個体は大型であるが、周縁角は本亜種と比べ緩く成長脈も粗くなく、別亜種のヒラヒダリマキマイマイの形態を示す。これらの亜種について最近の研究(川瀬ら, 2015)では、ヒラヒダリマキマイマイとミカワマイマイ(特に静岡県のミカワマイマイ)には遺伝的な差があまりないとされる。しかし、石灰岩地に生息する典型的な型は形態的に明らかな区別がつくため、本書ではこの大型で周縁角が顕著で成長脈がきわめて粗い型をミカワマイマイとする。

## 2. 分布

日本固有亜種で、静岡県と愛知県に分布する。県内では浜松市浜北区と北区の石灰岩地に分布する。

## 3. 生息環境

石灰岩地の広葉樹林に生息する。普段は、露出する石灰岩の下や岩の割れ目などに潜っていて、降雨時や夜間にそこから這い出て活動する。

## 4. 生息状況

石灰岩地でも限られた場所のみ生息し、生息地でも生貝を見つけることはきわめて困難である。超塩基性の石灰岩地では、殻が雨水で分解されにくいですが、浜北市の生息地では古い死殻しか最近は見つからず、絶滅したものと考えられる。そのほか、いくつかの生息地で最近では古い死殻しか見つからない。

## 5. 減少の主要因と脅威

元々個体数が少なかった上に、石灰岩の採掘(17)が行われていった。また、生息地はスギ・ヒノキの植林が行われて本亜種が生息できるような良好な石灰岩地は縮小するとともに分断・孤立化し、それぞれの個体群で個体数は危機的に少なくなっている(71)ものと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

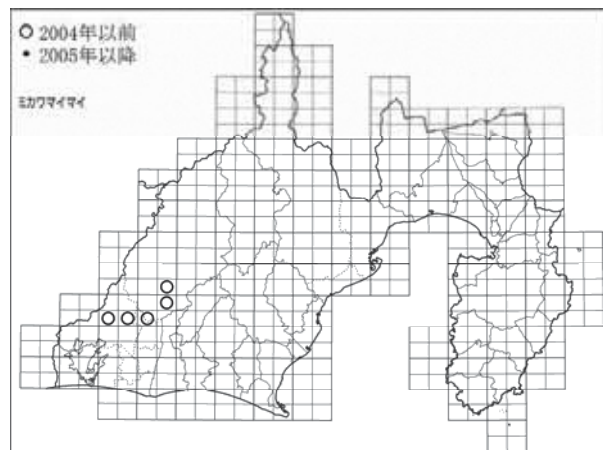
川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊・桜井栄一(2015) ミヤマヒダリマキマイマイ(腹足綱: ナンバンマイマイ科) 種内の形態変異と分子系統. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 5-13

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2003年7月30日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ヤセアナシマイマイ *Satsuma fausta* (Pilsbry, 1902)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B類(EN) (要件-①②)変更コード5

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型の陸貝。殻高 15 mm、殻径 14 mm 程度で高い円錐形をしている。周縁は丸くそのやや下に赤褐色の細い色帯がある。臍孔は開くが、反転した軸唇に広く覆われる。静岡県産の近縁種ではシメクチマイマイに似るが、本種の方が螺塔が高い。また、ニッポンマイマイは周縁に角があることで区別される。

## 2. 分布

日本固有種で、群馬県南部から静岡県にかけての狭い範囲に分布する。県内では東部から中部と伊豆の山地に分布する。分布の西限は安倍川水系で、南限は伊豆半島である。伊豆半島では主に低山地に生息するが、安倍川水系ではブナ帯に生息し、標高 1,500 m 付近にまで生息する。

## 3. 生息環境

広葉樹林の落葉下や倒木の下などに潜む。比較的湿度のある礫地に多い傾向にある。

## 4. 生息状況

産地は少なくないが、個体数はきわめて少ない。近年は個体数が著しく減少しているようで、見いだすのが困難になった。特に、安倍川水系では近年生息が確認できていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の減少と森林を取り巻く環境の変化が大きいと考えられる。特に、すべての生息地でシカの生息密度がきわめて高まったことにより、生息環境である林床の植生の消失や攪乱などによる質の低下の影響 (54) が考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

埼玉県では絶滅とされている (埼玉県, 2008)。

## 8. 主な文献

埼玉県 (2008) 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編. 埼玉県環境部みどり自然課, さいたま市, 352 pp.

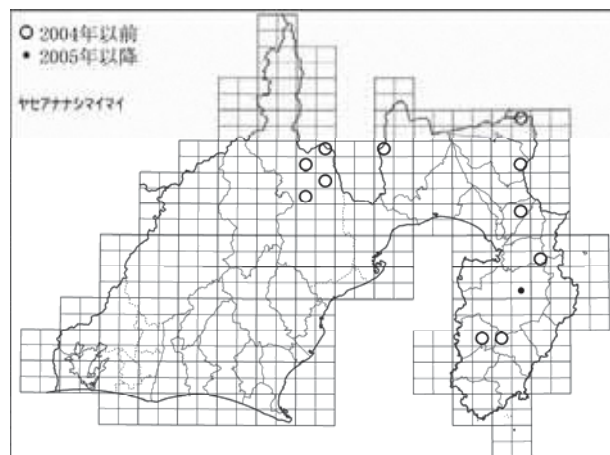
## 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵、御殿場市産: 国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



静岡市葵区産 2002年5月19日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

湿地や池沼などに生息する小型の円盤状の淡水貝。殻径 4 mm、殻高 1 mm 前後。殻は褐色半透明で光沢がある。生態的には右巻きのように見えるが、構造的には左巻き。殻表には成長脈がある。螺塔は大きくへこむ。殻底の中心部はやや突出する。ヒラマキガイモドキに似るが、本種はより小型で螺塔部のへこみがより広い。

### 2. 分布

日本固有種で、本州と四国、九州に分布する。県内では西部の浜松市と磐田市の湿地や池沼にのみ分布する。

### 3. 生息環境

県内においては池沼より、開水面がない湿地に多く生息する。池沼でも周辺部の植生が繁茂する環境に生息する。湿地性のスゲ類やイネ科草本などの根際付近や水中の落葉上に見られる。

### 4. 生息状況

各産地とも個体数は多くない。浜松市浜北区の生息地の湿地は埋め立てられた。また、1986 年に見つかった磐田市の桶ヶ谷沼 (武田, 1991) では、当時はふつうに見られたというが、近年は確認できない。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の古い記録はないが、湿地や池沼の開発による生息地の消滅 (12、15-1) が各地であったと考えられ、現在でも消失する生息地がある。また、水質の悪化 (31) や農薬の流入 (32) などの影響も十分考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

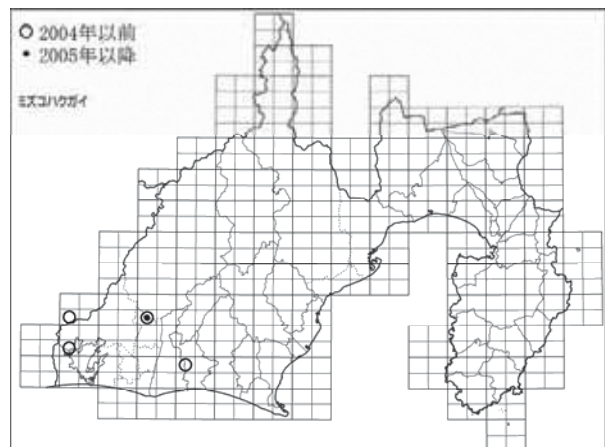
武田由紀夫 (1991) 磐田市桶ヶ谷沼地域の非海産貝類. 遠州の自然, (14): 33-37

### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2002年3月31日加藤 徹採集



(加藤 徹)

# マキシジコミミガイ *Laemodonta manilifera* (H. & A. Adams, 1854)

オカミミガイ科 Ellobiidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

転石海岸に生息する小型の巻貝。殻高7mm、殻径5mm。殻は厚質で臍孔は閉じる。殻表には18本程度の粗い螺肋があり、黄褐色。内唇に2歯、軸唇に1歯、外唇に2歯を持つ。県内に生息する近似種のウスコミミガイはより大型で螺肋数が多い。また、シユジュコミミガイはより小さく、螺肋の彫刻が薄く殻底近くに縫帯がある。

## 2. 分布

国外では西太平洋からインド洋にかけて、国内では房総半島以南に分布する。県内では伊豆半島にのみ分布する。伊豆半島での分布は局地的で、下田市と伊東市、沼津市で確認されているにすぎない。

## 3. 生息環境

転石海岸の潮間帯上部に生息する。半ば砂に埋もれたような転石下に生息し、ナギサノシタタリやサツマクリイロカワザンショウガイ、ヤマトクビキレガイなどと同所的に見られる場合が多い。

## 4. 生息状況

清浄な海岸にのみ見られ、ナギサノシタタリなどに比べ産地は非常に少ない。また、いずれの産地でも個体数は多くない。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種が生息する転石海岸は干潟などと比べ開発などによる改変の影響が少ないが、それでも、護岸工事など(14)による影響は少なくないものと思われる。また、本種の生息地はいずれも集落から離れた自然環境の高い清浄な海岸に限られることから、環境汚染(71)に対して敏感であることが推測できる。

## 6. 保護対策

ほとんどの産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

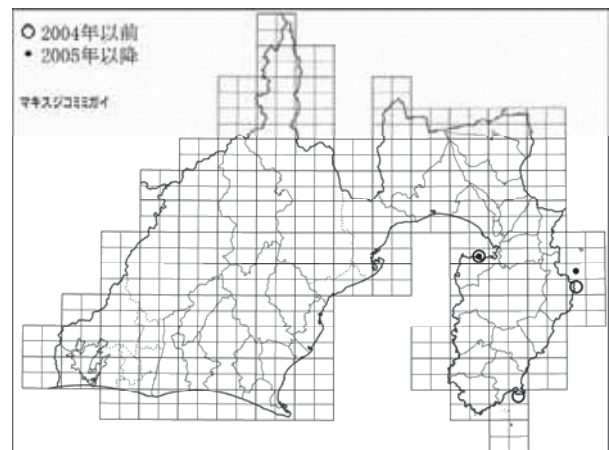
奥谷喬司 編著(2017)日本近海産貝類図鑑 第2版, 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

## 9. 標本

下田市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



伊東市産 2002年5月12日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



### 1. 種の解説

海岸の飛沫帯の転石下などに生息する小型の貝。殻高 9 mm、殻径 5 mm。薄い褐色で殻表には多数の細かい螺肋がある。内唇に 2 歯と軸唇に 1 歯、外唇に 1 歯がある。県内に産する種としてはマキシジコミミガイやシュジュコミミガイに似ているが本種の方が大きく、螺肋がより細く数が多いことで区別される。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では三陸海岸から沖縄にかけて分布する。県内では沼津市と浜名湖のごく一部に分布が確認されているだけである。

### 3. 生息環境

内湾の奥や河口付近の泥に埋もれた石の下などに生息する。浜名湖の生息地は陸側にヨシやウラギクなどが見られる泥底の湖岸に位置する。泥に半ば埋もれた石にはタマキビやカワザンショウガイ、イシマキガイなどが多く見られ、ウスコミミガイはそれらより深い位置に生息し、ヒナユキスズメが同所的に生息する。

### 4. 生息状況

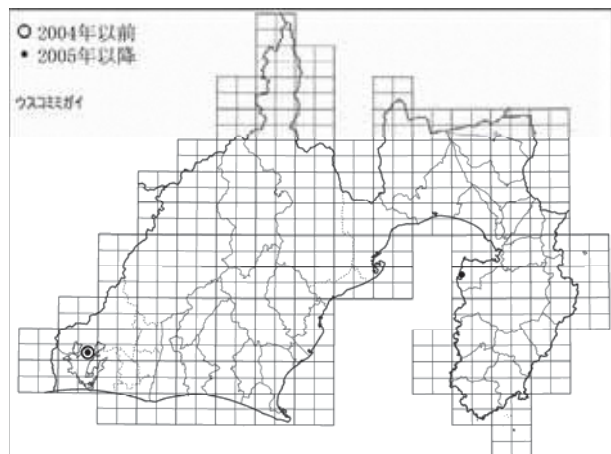
県内では浜名湖のごく一部でのみ生息が確認されていたが、近年沼津市でも生息が確認できた。しかし、いずれも生息範囲は狭く、その個体数もきわめて少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

県内には生息に適した環境が少なく、もともと個体数は少なかったことが考えられる。それに加え、海岸や河口の開発や護岸工事など (13、14) による生息地の減少、また生活排水の流入による生息環境の悪化



©2019 T.Kato  
浜松市北区産 2000年11月11日 加藤 徹採集



(31) などが減少に拍車をかけているものと思われる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

木村昭一 (2012) ウスコミミガイ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 96. 東海大学出版会, 秦野.

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

### 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)

# ナガタネガイ *Columella edentula* (Draparnaud, 1805)

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
(本州以南のナガタネガイ) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝。静岡県の個体群は殻高2.3 mm、殻径1.2 mm、5層と螺塔が太く低い傾向にあった。殻は黄褐色半透明で薄い。螺層は円くふくれ、体層と同じ高さである。殻口は丸く、同じ科に属する多くの種にある歯が本種にはない。臍孔は開く。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道から本州、四国に分布する。北海道では各地に分布するが、それ以外では産地はきわめて局限され、個体数も少ない。県内では標高2,500 mを超える南アルプスの荒川岳と光岳の2ヶ所で生息が確認されているのみである。

## 3. 生息環境

北海道では各種の立地条件下で生息が認められるが、県内では高山帯の矮性低木の下と亜高山帯の石灰岩の露頭で生息が確認されている。

## 4. 生息状況

荒川岳での生息数はきわめて少ない。光岳は荒川岳より多い個体数が確認されているが、生息地は数百㎡程度しかない。

## 5. 減少の主要因と脅威

光岳の生息地は面積がきわめて狭く、最近では生息地のある石灰岩地まで歩道が延び、近年の登山ブームと相まって人の立ち入りが目立ち(51)、環境の悪化が懸念される。

## 6. 保護対策

光岳の生息地は国の原生自然環境保全地域に指定され、荒川岳の生息地は国立公園の特別保護地区に指定されている。

## 7. 特記事項

光岳の生息地は国の原生自然環境保全地域に指定されているが、人の立ち入りは自由にできる状態となっている。

## 8. 主な文献

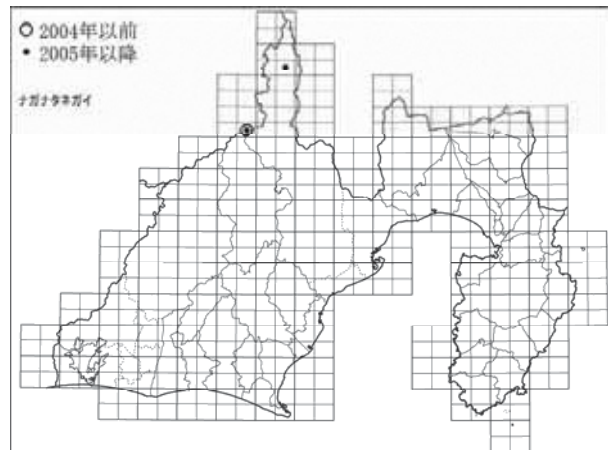
Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

## 9. 標本

静岡市産：個人所蔵(公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 2010年7月25日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# キバサナギガイ *Vertigo hirasei* Pilsbry, 1901

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①②) 変更コード 1, 9

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

微小な陸貝で殻高 1.7 mm、殻径 1.0 mm で殻は赤褐色。殻口には内唇と軸唇にそれぞれ 1 個、外唇に 2 個の歯状板がある。近似種にヤマトキバサナギガイがいるが、図鑑の表示に間違いがあったことなどから、両種が入れ替わって認識されることが多かった(福田, 2010; 和田ら, 2015)。また、ヤマトキバサナギガイは殻が太く、殻口の歯状板が大きく、殻が薄い藁色であることなどで区別される。

なお、浜松市北部の石灰岩地には同所的に同属の 2 種が生息し、キバサナギガイとヤマトキバサナギガイとしているが、福田(2010)と和田ら(2015)によるとキバサナギガイは海岸近くのみ生息するとされ、本種の分類学的位置は検討の余地がある。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国に分布する。いずれの産地も局地的で、個体数も少ない。県内では西部の北遠地区の山地にある石灰岩地でのみ確認されている。

## 3. 生息環境

本種は石灰岩地固有種ではないと考えられるが、県内で見つかったのは石灰岩地に限られる。落葉広葉樹の灌木が生える石灰岩地の岩壁や転石下に生息する。周囲の非石灰岩地にも生息の可能性はあるが、まだ見つかっておらず、生息していたとしてもきわめて密度は低いものと考えられる。

## 4. 生息状況

現在生息が確認されているのは浜松市北部の石灰岩の露頭に限られ、個体数は少ない。同所的にナタネガイモドキやヤマトキバサナギガイが生息しているが、本種の個体数が最も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内で本種が発見されたのは比較的新しく、現在減少しているか否かは不明である。また、生息地の石灰岩の露頭を開発するような動きもない。しかし、生息密度と生息地の面積を考慮したら、本種の存続はきわめて憂慮される状態(71)と考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏(2010) ヤマトキバサナギ. 岡山県レッドデータブック 2009 動物編, p. 338. 岡山県環境文化 部自然環境課, 岡山.

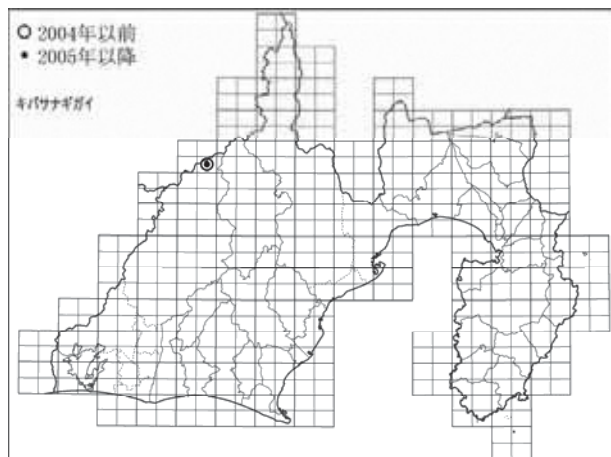
和田太一・川淵千尋・為後智康(2015) 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された希少 腹足類 3 種. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 37-49

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2015年11月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ヤマトキバサナギガイ *Vertigo japonica* Pilsbry & Hirase, 1904

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝。殻高 1.5 mm、殻径 1 mm の卵形。殻は薄い藁色で螺層はふくれる。図鑑での表示に間違いがあったことにより、近似種のキバサナギガイと入れ代わって認識されることが多かった(福田, 2010; 和田ら, 2015)。キバサナギガイは殻がより細く、殻口の歯状突起が小さく、殻がより赤みを帯びる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。県内では下田市、松崎町、静岡市(2ヶ所)、浜松市(3ヶ所)で確認されている。

## 3. 生息環境

主に山地で見ついているが、下田市では海岸の岩場で確認されている。また、浜松市の3ヶ所は石灰岩地であるが、それ以外は非石灰岩地である。非石灰岩地では岩場や礫地で確認されている。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少なく、特に非石灰岩地ではきわめて少ない。生息地はそれぞれ環境条件が異なるが、いずれも自然度が高い好条件の場所に限られる。静岡市の産地では、最初の確認の後、再確認ができていない。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩地の産地はきわめて狭い範囲である。また、非石灰岩地の産地は、いずれも岩場や礫地などの不安定な狭い環境にある上に各産地とも個体数が少ないため(71)、それぞれの産地で絶滅の危機にある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏 (2010) ヤマトキバサナギ. 岡山県レッドデータブック 2009 動物編, p. 338. 岡山県環境文化 部自然環境課, 岡山.

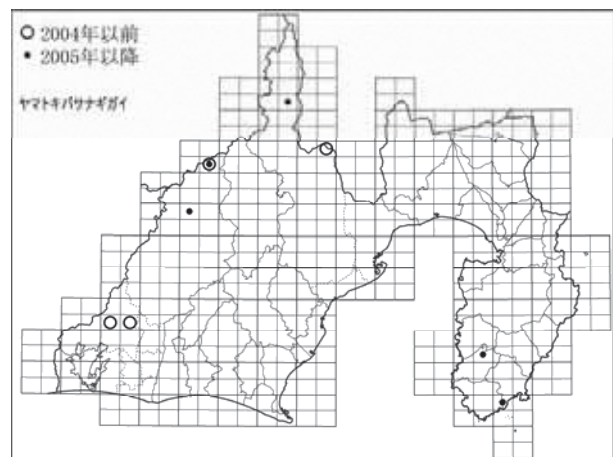
和田太一・川渕千尋・為後智康 (2015) 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された希少 腹足類 3 種. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 37-49

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2010年2月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# オオトノサマガセル *Megalophaedusa rex* (Pilsbry, 1905)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

殻高 40 mm、殻径 9 mm と大型のキセルガイ。殻は濃い褐色を呈し、軟体も暗褐色である。主襞は短く、上腔襞も短くその下にごく短い腔襞が 5 個程度連なる。胎殻が太いのが特徴で、県内にふつうに生息し本種と大きさが同程度のオオギセルは胎殻が小さいことで区別がつく。

## 2. 分布

日本固有種で、関東西部から静岡県中部にかけて生息する狭分布種。県内では伊豆半島と東部から中部にかけての山地に分布し、大井川流域が分布の西限で伊豆半島が南限となる。

## 3. 生息環境

山地の広葉樹林にのみ生息する。谷に沿った比較的傾斜のある湿った礫地で、しかもカンスゲなどの林床植生が豊富で安定した場所で見つかることが多い。

## 4. 生息状況

もともと個体数が多い種ではなかったが、最近ではどの産地も生息数がきわめて少なく、複数の生具を見つけることは困難な状況である。特に伊豆半島では近年得られることが少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

天然の広葉樹林の伐採 (11) と針葉樹の人工造林 (71) が生息地の減少の主要因と考えられる。溪流沿いの森林に多かったが、砂防ダムなどによる環境の変化 (25) も無視できないと思われる。さらに、伊豆半島では、シカの生息密度がきわめて高く、林床植生の食害や踏み荒らしにより林床環境の質が悪化している (54) ことも原因であると考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

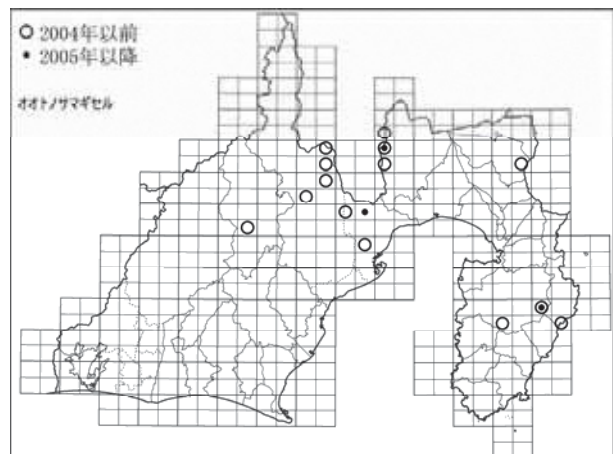
## 9. 標本

富士宮市産ほか：個人所蔵、伊豆天城山産：国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



富士宮市産 1995年5月25日 加藤 徹採集



# ツバクロイワギセル *Megalophaedusa iijimakuniakii* (Minato & Habe, 1983)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類 (VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型のキセルガイ。殻高 10 mm、殻径 3 mm 程度。殻は白色で表面に細かい成長脈がある。胎殻が大きい。主襞、上腔襞とも短く月状襞も短い。下腔襞はない。

## 2. 分布

日本固有種で、長野県南部と静岡県、山梨県西部にのみ生息する狭分布種である。県内では富士宮市より西の山地に分布する。安倍川水系には比較的多くの産地が分布するが、それ以外の地域ではきわめて局地的に分布する。

## 3. 生息環境

山地の広葉樹林に生息する。カンスゲなどが茂る湿った礫地に生息が確認される場合が多い。産地では礫間の比較的深い場所に生息する。基準産地である長野県大鹿村燕岩などは石灰岩地であるが、県内における産地の多くは非石灰岩地で、浜松市北部の産地だけが石灰岩地である。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少なく生貝を見いだすのは難しい。特に、安倍川中流域や天守山地の標高が低い場所での生息数は近年きわめて少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

スギ・ヒノキの人工林化 (71) や開発 (23) などによる広葉樹林の減少が主要因であると考えられる。もともと個体数が少ない上、生息環境はかなり限定されるため、環境の変化には弱い種であると考えられる。このため、近くに道ができたなどという一見些細な変化 (24) でも本種は重大な影響を受けるものと思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

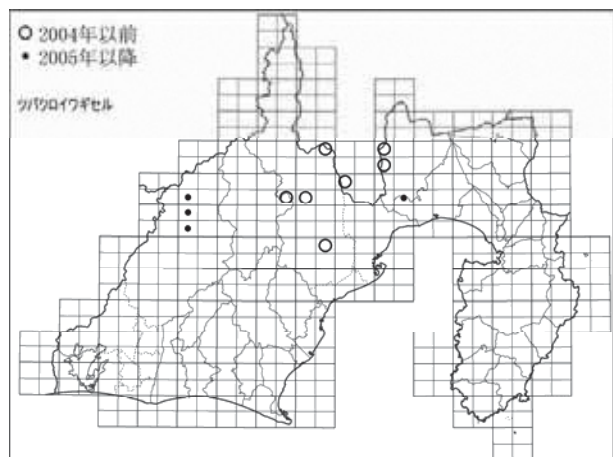
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2016年4月16日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



## マイマイ属の一種 *Euhadra* sp.

(=2004年版のクロイワマイマイ)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU)(要件①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

山地に生息する大型の陸貝。静岡県レッドデータブック(2004)ではクロイワマイマイとされていた種であるが、生殖器の構造などから別の未記載種と考えられるようになった。殻高は23 mm、殻径43 mm程度で、殻は濃い褐色を呈し、1234型の色帯がある。色帯は第1帯と第3帯は色が薄く、第2帯は細い。粗い成長脈があり、それに沿った不規則な黄色い模様が見られる。螺塔は低く周縁は丸い。臍孔は広く開く。軟体は黒褐色で雲状模様がある。

### 2. 分布

日本固有種で、静岡と愛知、長野の3県の県境周辺に分布し、県内では浜松市の標高1,000 mを超える山地にのみ分布する。

### 3. 生息環境

温帯の広葉樹林に生息する。ブナやオオイタヤメイゲツなどを主とする天然林の林床に生息する。

### 4. 生息状況

良好な自然環境が残った広葉樹林にのみ生息するが、個体数は少なく、近年では生貝を見ることはきわめて困難である。

### 5. 減少の主要因と脅威

天然林の伐採(11)による生息環境の悪化が減少の主要因である。浜松市天竜区水窪町の産地ではかつて広大な広葉樹林が広がっていたが、1990年代までにはほとんどヒノキとカラマツの植林地となっしまい、現在では尾根筋にわずかに生息が確認される広葉樹林が残されているにすぎない。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

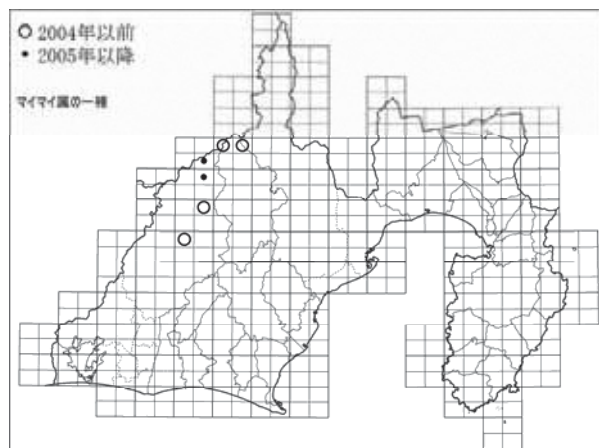
増田 修・波部忠重(1989) 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, 3: 1-82, Color pls., I-III, pls., I-XIV.

### 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 1988年8月6日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# メルレンドルフマイマイ

*Satsuma moellendorffiana moellendorffiana* (Pilsbry & Hirase, 1903)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

中型の陸貝。殻高 20 mm、殻径 27 mm 程度が標準だが、海岸近くの個体は殻高 17 mm、殻径 22 mm 程度と小型である。周縁が丸い円錐形をしている。殻は赤褐色で周縁に細い褐色の帯がある。臍孔は広く開く。亜種のみノブマイマイは螺塔が低く、殻径がやや大きい。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆半島の特産亜種。伊豆半島では付け根付近から先端近くの河津町や松崎町まで広く分布する。なお、亜種のみノブマイマイとは分布が重ならない。

## 3. 生息環境

広葉樹林下に生息する。主に山地の森林に生息するが、時に海岸近くの林にも生息する。タブ、アカガシ、スダジイなどの比較的良好に自然が残った林で見つかることが多い。

## 4. 生息状況

各生息地とも個体数は少ない。近年は生貝を得ることはきわめて難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

伊豆半島は県内の他地域より広葉樹林の面積割合が多い。しかし、首都圏からの距離と風光明媚な立地条件から各種の観光開発が進み(23)、自然環境の悪化が顕著である。

## 6. 保護対策

生息地の一部は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、保護対策は講じられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

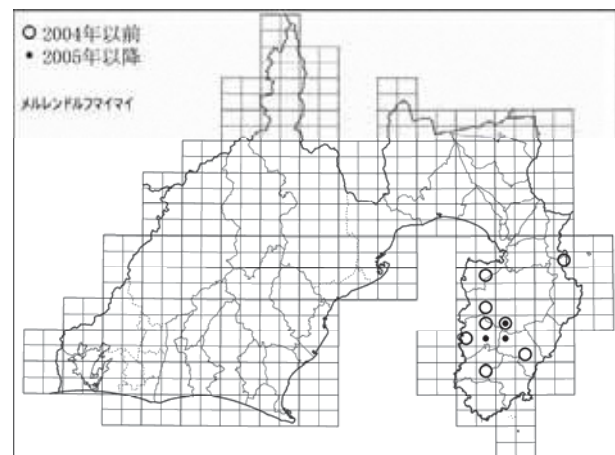
滝沢達夫・反田栄一(1981)メルレンドルフマイマイとミノブマイマイの生殖器の比較. ちりぼたん, 12(1): 4-8

## 9. 標本

西伊豆町産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



西伊豆町産 2007年7月26日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ミノブマイマイ *Satsuma moellendorffiana thaanumi* (Pilsbry, 1924)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-①)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型の陸貝。殻高 20 mm、殻径 30 mm 程度。螺塔は低く、周縁は丸く細い褐色の色帯がある。臍孔は広く開く。軟体部は黒褐色で頸部と眼触角は非常に長い。基準亜種のメルレンドルフマイマイより螺塔が低く殻径がやや大きい。

## 2. 分布

日本固有亜種で、神奈川県西部から山梨県南部、静岡県中部にかけて分布する。県内では富士山周辺から大井川水系までの山地に分布する。富士山周辺や安倍川水系にはいくつかの産地があるが、大井川水系ではきわめて稀である。

## 3. 生息環境

山地の自然度の高い広葉樹林に生息する。標高 800 m 程度より低い暖帯に生息地が多い。

## 4. 生息状況

産地は少なくないが各産地とも個体数は少ない。近年は生貝を得ることはきわめて難しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林は人工林化 (71) や道路 (24) などにより分断され、孤立化したために、移動能力の低い本種をはじめとした広葉樹林に生息する陸貝にとっては、遺伝的多様性の低下も懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

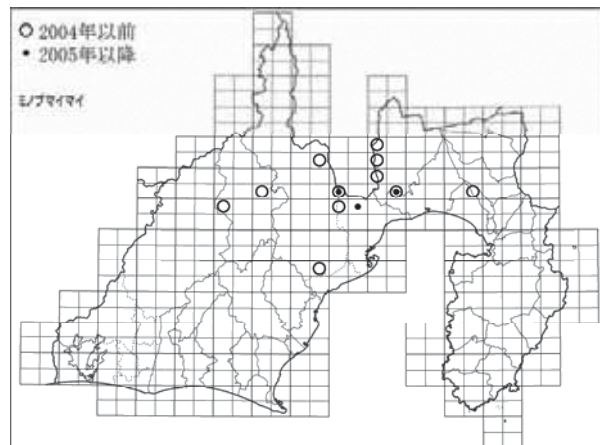
滝沢達夫・反田栄一 (1980) ミノブマイマイの新産地と分布および生殖器について. ちりぼたん, 11(1): 9-11

## 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 1996年10月31日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ベニゴマオカタニシ *Georissa shikokuensis* Amano, 1939

ゴマオカタニシ科 Hydrocenidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-b) 変更コード 1, 6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地に生息する微小な陸貝。殻は赤褐色で殻高 2.5 mm、殻径 1.6 mm。各層はふくらみ、縫合は深い。殻口は円形で半円形の蓋がある。臍孔は閉じる。非石灰岩地にも生息するゴマオカタニシとはよく似るが、この種にある螺状脈が本種にはない。

## 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州から四国、九州にかけて分布する。県内では浜松市北区、浜北区、天竜区南部の一部の石灰岩地にのみ分布する。浜松市北部の石灰岩地や浜松市以外の石灰岩地には分布しない。

## 3. 生息環境

石灰岩の露頭に生息する。石灰岩の岩壁や積み重なった岩塊に付着する。そのような場所に生育する広葉樹の幹に登ることもある。

## 4. 生息状況

本種が生息する静岡県の石灰岩地はいずれも小さく、孤立している。ただし、生息地での個体数は多い。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な減少理由は、石灰岩の採掘 (17) による生息地の消失にある。近年、新たな石灰岩地の採掘は行われていないが、風力発電所や農地造成として失われた生息地がある (23)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Kato M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

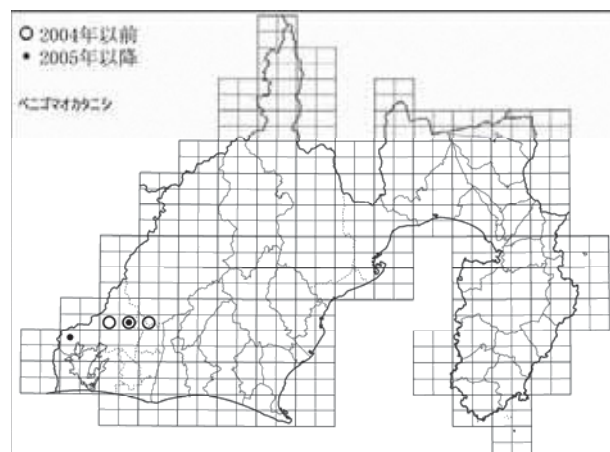
## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



浜松市北区産 2010年11月 加藤 徹採集



# マルタニシ *Cipangopaludina chinensis laeta* (Martens, 1860)

タニシ科 Vivipariidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧(NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

池沼や水田などに生息する中型の淡水貝。殻高 60 mm、殻径 45 mm 程度とタニシ類としては大型だが、オオタニシよりは少し小型である。殻は黒褐色の殻皮をまとう。縫合は深く、螺層は丸くふくらむ。卵胎生で、胎殻の殻頂は尖らず、丸みを帯びる。

## 2. 分布

日本固有亜種で、北海道から沖縄にかけて広く分布する。県内では各地に分布するが、生息地は少ない。

## 3. 生息環境

池沼や水田など流れが緩やかな水底が泥質の淡水域に生息する。

## 4. 生息状況

かつては水田に多く生息していたが、山間地や生態系に配慮した農法を行うような場所でなければ見つけることは困難である。

## 5. 減少の主要因と脅威

水田においては、農薬(32)や水質の悪化(31)そして乾田化(15-2)などにより減少した。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう(2004)日本産淡水貝類図鑑

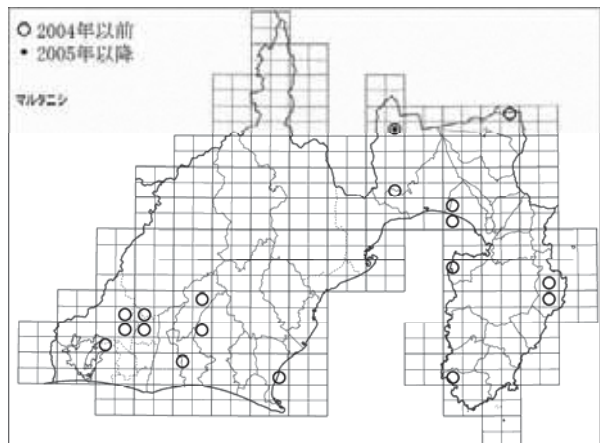
② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 1997年11月 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# オオタニシ *Cipangopaludina japonica* (Martens, 1860)

タニシ科 Vivipariidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

池や小川に住む淡水貝。タニシ類としては大型で、殻高 65 mm、殻径 50 mm。やはり大型のマルタニシと似ているが周縁に弱い角があり、各層の膨らみが弱いことで区別できる。卵胎生で、幼貝は周縁が極端に角張り、そろばん玉型をする。

## 2. 分布

日本固有種で、本州から九州にかけて分布する。静岡県では各地に分布するが、産地は少ない。

## 3. 生息環境

池沼や小川、用水路などに生息する。マルタニシより澄んだ水の場所や深い場所に多く、県内の水田にはほとんど生息しない。

## 4. 生息状況

かつては各地にふつうに生息していたものと思われるが、現在の生息地は少なく、個体数も多くはない。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼の開発 (12) や水質の悪化 (31) により減少しているものと思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑

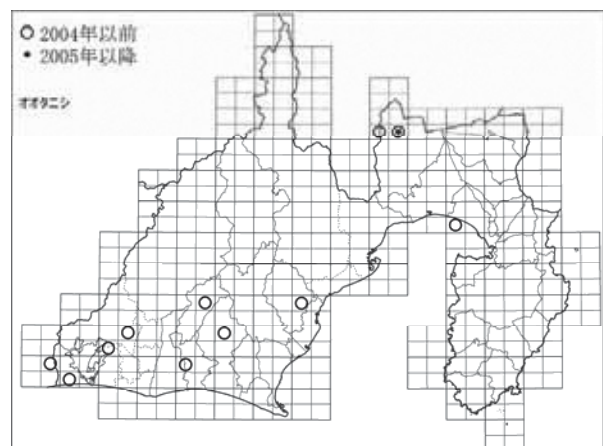
② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

掛川市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



掛川市産 2003年4月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# クロダカワニナ *Semisulcospira kurodai* Kajiyama & Habe, 1961

カワニナ科 Pleuroceridae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

小川などに生息する中型の淡水貝。殻高 30 mm、殻径 10 mm 程度。外見はカワニナに酷似している。カワニナと比べてやや細長く、螺肋が太くて数が少ないが、殻だけで区別するのは困難である。顕著な違いは胎貝の大きさと数で、本種は 1.5 mm で 80 個程度、カワニナは 1 mm 以下で数百個を持つ。

## 2. 分布

日本固有種で、本州の東海地方から中国地方東部にまで分布する。県内では西部の天竜川水系以西の平野に分布する。磐田市の生息地が分布の東限である。

## 3. 生息環境

流れの緩やかな小河川の泥底に生息する。生息地ではカワニナも同所的に見られるが、本種はカワニナのように流れの速い場所や礫底には少ない。

## 4. 生息状況

カワニナに酷似しているため混同され古い記録はないが、かつては天竜川水系や浜名湖周辺の小河川に広く分布していたものと考えられる。しかし、現在は2つの小河川で生息が確認されているにすぎない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息域の小河川は主に農地が広がる平野を流れるが、宅地などへの開発 (23) も進み、生活排水 (31) や農薬 (32) などの流入により多くの場所で消滅していったと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

高見明宏 (1997) クロダカワニナの分布と成員および新生貝の種内変異. VENUS, 56(4): 305-317

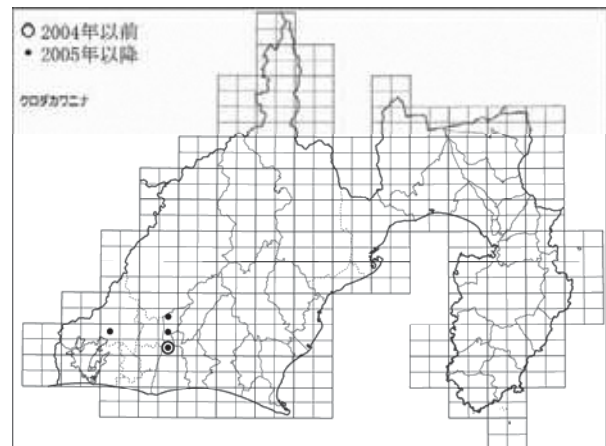
## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



浜松市北区産 2015年11月28日 加藤 徹採集



## ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ *Assimineea* sp.

(=2004年版のムシヤドリカワザンショウガイ)

カワザンショウガイ科 Assimineidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-ab)変更コード 11

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

河口のヨシ原などに生息する小型の貝。殻高 4 mm、殻径 3 mm。殻は赤褐色で光沢があるが、縫合の下には幅の広い淡色帯がある。螺塔は円錐形で縫合は浅く螺層のふくらみが弱い。臍孔は閉じる。

### 2. 分布

日本固有種で、本州の太平洋側から九州にかけて分布する。県内では伊豆半島南部にのみ分布する。生息するのは下田市の大賀茂川と南伊豆町の青野川のそれぞれ河口の少し上流域の干潟に限られる。

### 3. 生息環境

河口付近の干潟の泥上に生息するが、泥上に発達したヨシ原に最も多く生息する。生息地にはカワザンショウガイやクリイロカワザンショウガイも生息するが、本種の個体数が最も少なく、生息範囲も狭い。

### 4. 生息状況

青野川は護岸構造物のために本種の生息が可能なヨシ原はほとんどなくなり、生息数は少ない。大賀茂川の生息密度は低くないが、河川自体が小規模で干潟の面積も狭いため、全体数は非常に少ないと考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

護岸工事などによる干潟の破壊 (13) により生息地が失われた。また、河川上流側の温泉施設や住宅地からの排水による水質の悪化 (31) も懸念される。大賀茂川のヨシ原上にボード・ウォークが建設され、その影響が懸念されたが、今のところ本種の生息状況の変化は見られない。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

本種はムシヤドリカワザンショウガイ *Assimineea parasitologica* Kuroda, 1958 とされていたが、その後の分子系統解析により本州の太平洋側や瀬戸内海、九州に生息する個体群は別種とみなされるようになった (福田, 2012)。ただし、まだ種の記載はされていない。

### 8. 主な文献

福田 宏 (2012) ヒナタムシヤドリカワザンショウ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック, p. 48. 東海大学出版会, 秦野.

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

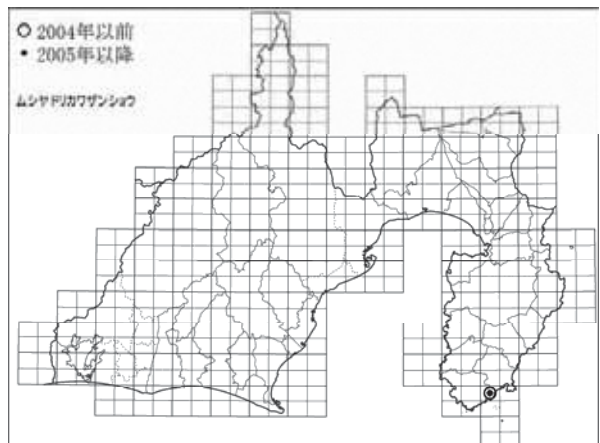
### 9. 標本

下田市産: 個人所蔵、南伊豆町産: 国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



下田市産 2012年5月 加藤 徹採集



# ヨシダカワザンショウガイ *Angustassiminea yoshidayukioi* (Kuroda, 1959)

カワザンショウガイ科 Assimineidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-ab)変更コード 11, 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

河川の下流域から河口付近の草地に生息する小型の貝。殻高 3.5 mm、殻径 3 mm。殻は褐色で光沢がある。色帯はない。縫合は浅く窪み、その直下に微細な 1 本の溝がある。臍孔が狭く開くことで、県内の河口域に生息する他のカワザンショウ類と区別される。

## 2. 分布

日本固有種で、東京湾から九州にかけて分布する。県内では伊豆半島と浜名湖周辺にのみ分布すると考えられていたが、その後、富士市から天竜川にかけての大小の河川の河口域などにも生息することがわかった。なお、天竜川では河口から 18 km 上流にまで分布する (加藤, 2012)。

## 3. 生息環境

他のカワザンショウガイ属の貝類とは違い、水面からかなり離れた草地に生息し、したがって随伴種はヒメコハクガイやナメクジ、ウスカワマイマイといった陸貝となる。

## 4. 生息状況

佐鳴湖や天竜川をのぞき、個体数ほどの産地も少ない。特に伊豆の河川では生息密度が低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境である河口域周辺は、河川の増水による攪乱 (55) や河川改良工事 (13) などの影響が懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特に特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏 (2012) ヨシダカワザンショウ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 46. 東海大学出版会, 秦野.

加藤 徹 (2012) 静岡県の各河川で洪水時の漂着物で採集される貝類. 遠州の自然, (35): 15-18

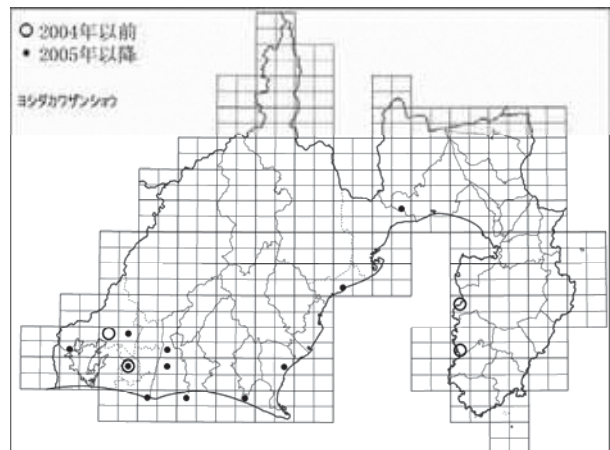
## 9. 標本

掛川市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



掛川市産 2011年5月14日 加藤 徹採集





# ヤマトゴマオカチグサ *Cavernacmella yamamotonis* (Minato, 1973)

(=ヤマトミジンオカチグサ)

カワザンショウガイ科 Assimineidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-b)変更コード1

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

殻高 1.5 mm ときわめて微小な貝。殻には光沢があり、白色半透明で軟体部が透ける。殻は円錐形で臍孔は開く。

## 2. 分布

日本固有種で、伊豆半島から紀伊半島周辺に分布するが、県内では伊豆半島にのみ分布する。伊豆半島においても、東伊豆町と伊豆市でのみ確認されているにすぎない。

## 3. 生息環境

転石海岸の飛沫帯に生息する。汀線から陸側に向かい、植生が見られはじめる付近の積み重なった転石の深い部分に生息する。転石の浅い部分にはヘソカドガイがよく見られる。

## 4. 生息状況

清浄な海岸の深くまで転石が積み重なる環境にのみ生息する。生息地は少なく、生息数も少ない。ただし、本種を見いだすには転石を深くまで掘り下げねばならないため、調査を進めれば他にも生息地が見つかる可能性がある。

## 5. 減少の主要因と脅威

転石海岸は伊豆半島に広くあるが、本種が生息する場所はきわめて限られる。そのため、厳しい生息条件が必要であることが考えられる。生息地の海岸開発は脅威となる (14)。

## 6. 保護対策

既知の産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

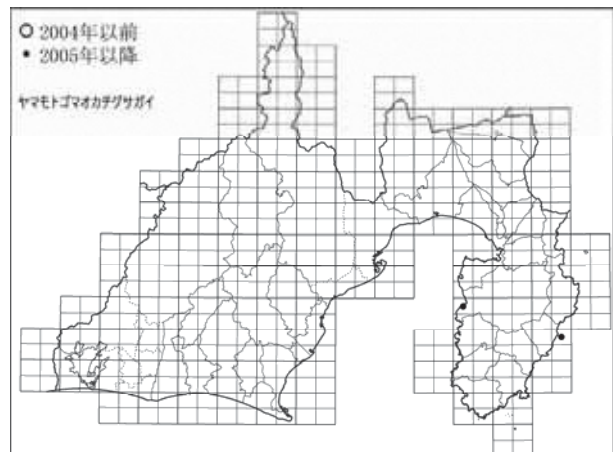
和田太一・川渕千尋・為後智康 (2015) 成ヶ島および紀淡海峡の礫浜海岸飛沫帯上部で採集された希少腹足類3種. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 37-49

## 9. 標本

東伊豆町産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



東伊豆町産 2012年11月 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ホラアナゴマオカチグサ *Cavernacmella kuzuensis* (Suzuki, 1937)

カワザンショウガイ科 Assimineidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I 類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地の洞窟に生息する眼のない微小な陸貝。殻高 2 mm、殻径 1.3 mm で螺塔は円錐形で、殻は薄く半透明で白い。臍孔は狭く開く。海岸の転石下に生息するヤマモトゴマオカチグサとは眼の有無以外きわめてよく似ていて、本種との関係が指摘されている (福田・加藤, 1996)。

## 2. 分布

日本固有種で、東北から沖縄にかけて分布する。県内では浜松市の石灰岩地に分布する。今までに見つかっているのは浜松市北区と浜北区の 5 ヶ所の洞窟のみである。

## 3. 生息環境

石灰岩洞の中の湿った壁面に生息するが、どの洞窟でも生息が確認できるのはごく一部に限られる。

## 4. 生息状況

生息地での生息数は少ない。ただし、人が入れないような場所にも生息している可能性はある。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩洞自体が破壊されたり、観光洞化されることは今後ないと思われるが、それぞれ個体数が少なく、人の出入りも可能であるので、何らかの環境の変化で絶滅する可能性がある (18)。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏・加藤 真 (1996) 真洞窟棲陸貝ホラアナ

ゴマオカチグサの起源-特にヤマモトゴマオカチグサとの関係 (腹足綱: 新紐舌目: カワザンショウガイ科). *Venus*, 55: 81-82

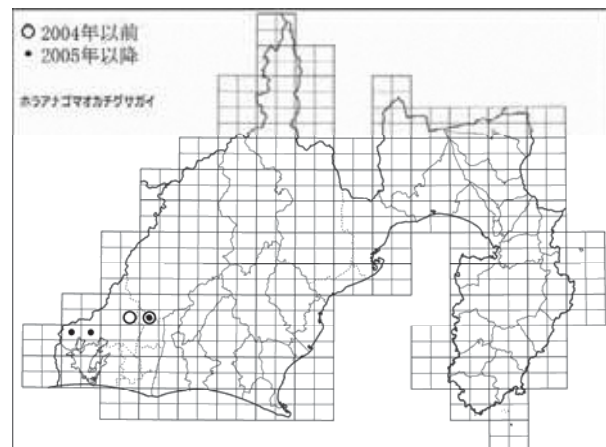
## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato

浜松市北区産 2008年10月 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヤマトクビキレガイ *Truncatella pfeifferi* Martens, 1860

クビキレガイ科 Truncatellidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

海岸の高潮帯に生息する小型の貝。殻高 6 mm、殻径 2.5 mm。殻表には顕著な成長脈がある。亜成貝程度までは高い円錐形をしているが、後に胎殻から数層が脱落し円柱状になる。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島に、国内では北海道から九州に分布する。県内では伊豆半島の海岸にのみ分布する。伊豆半島での分布は広いが局地的である。なお、熱海市沖の初島にも分布する。

## 3. 生息環境

転石海岸の高潮帯付近の石の下に生息する。下面が砂に埋もれたような石の下にすみ、ナギサノシタタリやハマシイノミガイ、サツマクリイロカワザンショウガイなどが随伴種としてよく見つかる。

## 4. 生息状況

清浄な海岸で見つかり、市街地に近い海岸には生息しない。そのため、産地は局地的で少なく、産地でも個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

かつては伊豆半島の海岸にはふつうに分布していたと思われるが、現在では産地は限られる。前述のナギサノシタタリなどの随伴種が見られても本種が見つからない場所が多いため、何らかの環境の変化に弱いものと考えられる。生息地の海岸開発は脅威となる(14)。

## 6. 保護対策

ほとんどの産地は富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、具体的な保護策はとられていない。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

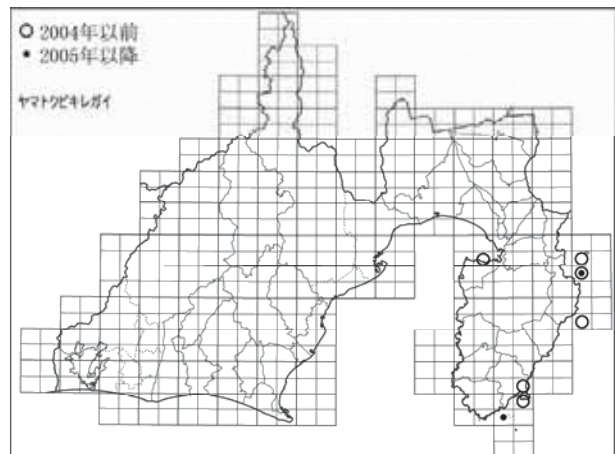
奥谷喬司 編著 (2017) 日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

## 9. 標本

南伊豆町産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



南伊豆町産 2012年11月18日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# モノアラガイ *Radix auricularia japonica* (Jay, 1857)

モノアラガイ科 Lymnaeidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

池沼や川に生息する小型の淡水貝。殻高 10~20 mm、殻径 8~15 mm 程度だが殻の大きさや形状は変異が大きい。殻は褐色で光沢があり、きわめて薄い。体層は著しく膨大し、殻口高は殻高の 3/4 程度を占める。軸唇が反転することで、ヒメモノアラガイなどと区別できる。

## 2. 分布

日本固有亜種で、北海道から九州にかけて分布する。県内では各地の平野から里山にかけて分布する。

## 3. 生息環境

比較的美しい池沼や流れの緩い河川に生息する。

## 4. 生息状況

かつてはどこにでも生息しており、水田などでも最もふつうな淡水貝であった。現在では水田ではほとんど見られず、池沼などでもサカマキガイやヒメモノアラガイなどの外来種はたくさん生息しているが、本種は条件がよくなると見られなくなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

生活排水 (31) や農薬 (32) などの影響が大きいと考えられ、そのような影響が大きい場所ではサカマキガイは見られるが、本種は生息しない。また、ヒメモノアラガイやハブタエモノアラガイなどの近似の外来種が増加しており、それらとの競合 (56-1) の影響も考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

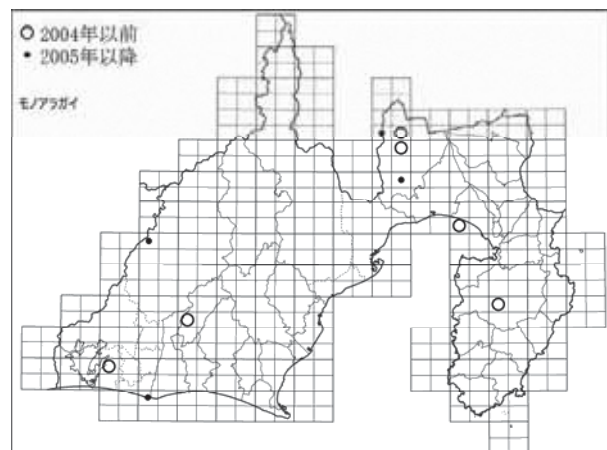
増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2015年11月28日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヒラマキガイモドキ *Polypylis hemisphaerula* (Benson, 1842)

ヒラマキガイ科 Planorbidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

池沼などに生息する小型の円盤状の淡水貝。殻径 5 mm、殻高 1.5 mm 前後。殻は褐色半透明で光沢がある。生態的には右巻きのように見えるが、構造的には左巻き。螺塔中心部はへこみ、殻径の 1/5 程度を残して体層により覆われる。体層上面内側には数本の直径方向の襞がある。殻底は平らで、臍孔はへこむ。

## 2. 分布

国外では東アジアに、国内では北海道から沖縄にかけて分布する。県内でも広い範囲で見つかるが、産地は少ない。

## 3. 生息環境

池沼や流れの緩い小河川に生息する。泥底や水草上に生息する。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少ない。静岡県では近似のヒラマキミズマイマイに比べ、産地も個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

かつては県内各地の流れの緩やかな陸水域にふつうに分布していたものと考えられるが、水質の悪化 (31)、水田の乾田化 (15-2) などにより減少していったものと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

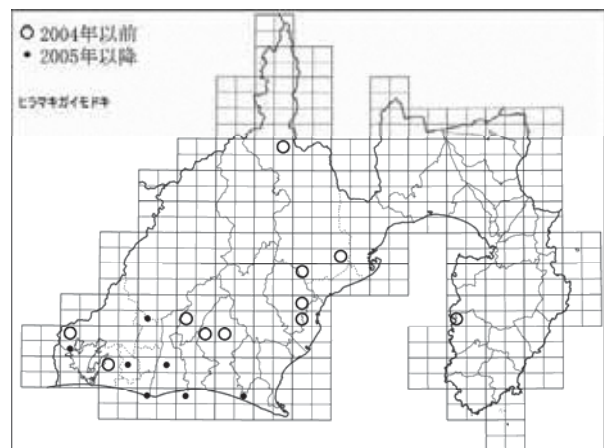
増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

袋井市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



袋井市産 2003年11月3日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ヒラマキミズマイマイ *Gyraulus chinensis spirillus* Gould, 1859

ヒラマキガイ科 Planorbidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

池沼などに生息する小型の円盤状の淡水貝。殻径7mm、殻高1.5mm前後。殻は褐色半透明で、生態的には右巻きのように見えるが、構造的には左巻き。螺旋塔は大きくへこむ。周縁には弱い角がある。殻底は平ら。

## 2. 分布

日本固有亜種で、北海道から沖縄にかけて分布する。県内では各地の低地に分布するが、時に山間の湧水地などにも生息する。

## 3. 生息環境

池沼や小河川の泥底や水草上などに生息する。湧水のあるところで個体数が多い。

## 4. 生息状況

本県に分布するヒラマキガイ科の中では産地・個体数とも最も多く、かつては水田や用水路などにもふつうに生息していたと考えられる。しかし、現在ではそのような場所では湧水があるなどの好条件がないと残ってはいない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生活排水による水質の悪化(31)や水田の乾田化(15-2)の影響が大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑

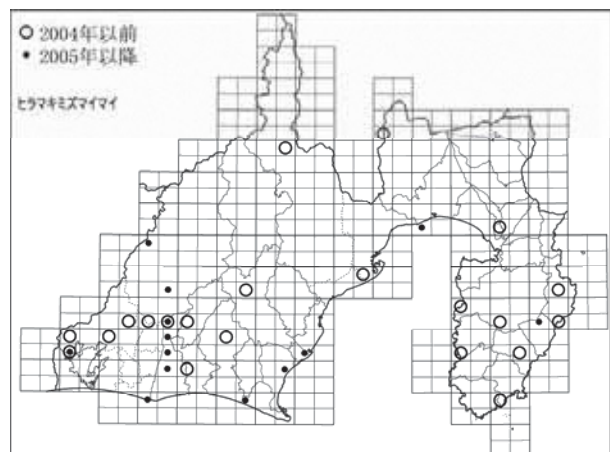
② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2004年5月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# トウキョウヒラマキガイ *Gyraulus tokyoensis* (Mori, 1938)

ヒラマキガイ科 Planorbidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

池沼や川に生息する殻高1mm、殻径7mm程度の円盤状の淡水貝。生態的には右巻きのように見えるが、構造的には左巻き。細かい毛状の突起を伴う厚い殻皮を持ち、周縁角がある。時に、周縁角は外側に薄い膜状に広がる。ヒラマキミズマイマイとよく似ており、同種と見なされることもある。

## 2. 分布

日本固有種で、関東から南西諸島にかけて分布するが、ヒラマキミズマイマイとの混同などから、十分に解明されていない。県内では伊豆半島の一部のみ分布する。

## 3. 生息環境

県内では山中の池や溪流で見ついている。溪流では流れのほとんどない部分に生息する。

## 4. 生息状況

現在生息が確認されているのは人里から離れた場所のみで、集落周辺での生息地は消滅していったものと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

池沼の開発(12)や河川整備(13)、水質の悪化(31)などの影響が大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑

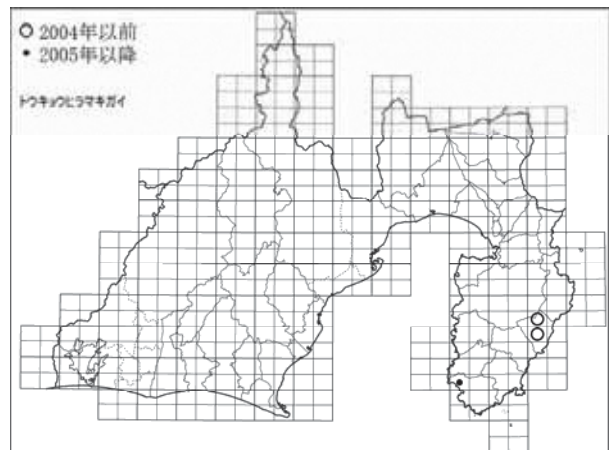
② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

南伊豆町産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



南伊豆町産 2004年7月19日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ナガオカモノアラガイ *Oxyloma hirasei* (Pilsbry, 1901)

オカモノアラガイ科 Saccineidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

湿地の草の上に住む陸貝。殻高 12 mm、殻径 6 mm。殻はきわめて薄く半透明で黄褐色を呈す。体層は著しく膨大する。淡水産のモノアラガイ類と形態が似ているが、系統的に全く異なる。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道南部から九州北部にかけて分布する。県内では各地の平地に分布するが、伊豆半島では生息地が少ない。

## 3. 生息環境

池沼や大小河川の水際付近や湿地に生息する。産地では各種湿生植物の上で生活する。

## 4. 生息状況

県内での生息地はまだ少なくない。また、生息地によっては多産する。しかし、生息地である湿地や池沼は開発が進んだことから、多くの生息地が消滅したのも事実である。また、水際の護岸化による植生の消滅など、生息環境の悪化が進んでいる。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地環境の様々な開発 (12、15-1) による生息地の消滅が大きい。また、水際の護岸化 (13) に伴う植生の消滅や乾燥化などの影響も大きいと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

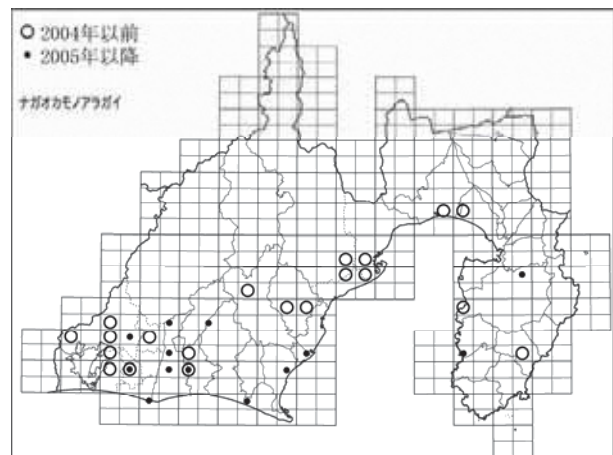
加藤 徹 (2012) 静岡県の各河川で洪水時の漂着物で採集される貝類. 遠州の自然, (35): 15-18

## 9. 標本

磐田市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



磐田市産 2016年10月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ナタネガイモドキ *Pyramidula conica* Pilsbry & Hirase, 1902

ナタネガイモドキ科 Preurodiscidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地に生息する微小な陸貝。殻高 2 mm、殻径 2 mm。殻は黒褐色で粗い成長脈がある。臍孔は大きく開く。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道から本州、四国、九州に分布する。石灰岩地の特産できわめて局地的な分布を呈する。県内では浜松市の天竜区と北区の 2ヶ所の石灰岩の露頭にのみ分布する。

## 3. 生息環境

石灰岩の露頭の岩の割れ目や石の下などに生息する。生息地は石灰岩地の中でも局限されており、植生がほとんどない露頭にのみ生息する。

## 4. 生息状況

産地での個体数は少なくないが、生息地の面積はきわめて狭く、些細な環境の変化で絶滅するおそれがある。

## 5. 減少の主要因と脅威

浜松市北区の生息地の石灰岩地は、石灰岩の採掘 (17) がかつて行われており、生息地が縮小した可能性がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

浜松市北区の生息地の近くには大規模な石灰岩採掘地があり、そこにもかつて生息していた可能性がある。

## 8. 主な文献

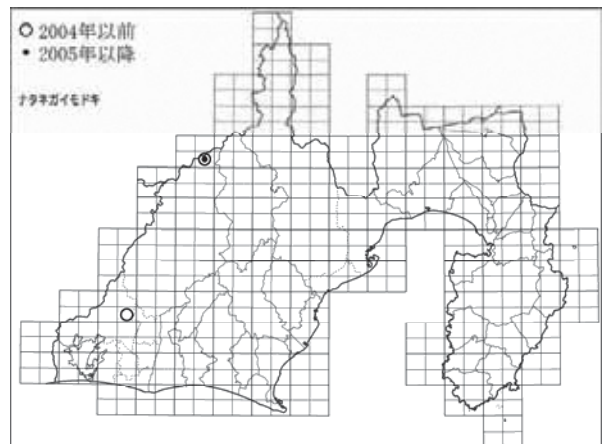
Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2010年2月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ナタネキバサナギガイ *Vertigo eogea* Pilsbry, 1919

キバサナギガイ科 Vertiginidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-b) 変更コード 13

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

湿地や河川敷などに生息する微小な陸貝。殻高 3 mm、殻径 2 mm 程度。殻は褐色で薄い。螺層は丸くふくれる。殻口はゆがんだ半円形で、外唇、内唇、軸唇にそれぞれ 2 歯がある。臍孔は大きく開く。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆と東部から西部にかけての平地に点々と分布する。

## 3. 生息環境

ヨシ群落などがある湿地や小河川に多いが、狩野川、大井川、天竜川といった大河川や、菊川や太田川などの中河川の河川敷にも生息する(加藤, 2012)ことがわかってきた。湿地では泥の上の落ち葉の下などに生息し、大河川の河川敷では漂着物の下やコゴメヤナギ、ハチクなどのやや湿った林床などに生息している。

## 4. 生息状況

天竜川の河川敷では場所によって比較的多くの個体数が見られるが、他の生息地、特に湿地環境では個体数が少ない。沼津市と富士市の境にある浮島沼や藤枝市の産地では、かつては多数の個体が見られたが、埋め立てなどで減少が著しい。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地の開発(15-1)による生息地の消滅が減少の主要因である。浜松市の台地の縁にある小湿地では乾燥化(54)が進んでいることも脅威となっている。河川敷では、増水による攪乱(55)の影響が懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

加藤 徹(2012) 静岡県の各河川で洪水時の漂着物で採集される貝類. 遠州の自然, (35): 15-18

湊 宏(2005) 日本産陸棲貝類の分布資料 5 キバサナギガイ科 ナタネキバサナギガイ. かいなかま, 39(2): 49-57

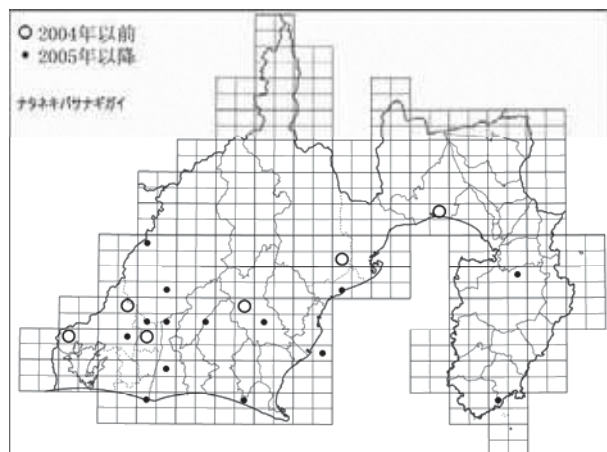
## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2010年2月27日 加藤 徹採集



# クチマガリスナガイ *Bensonella plicidens* (Benson, 1849)

ラッパガイ科 Hypselostomatidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

石灰岩地に生息する微小な陸貝。殻高 2.5 mm、殻径 2 mm。円錐形で殻口は前方に曲がり、内側に多数の歯がある。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布する。県内では浜松市北区周辺の石灰岩地にのみ分布する。生息地はやや局地的で、浜松市以外や浜松市北部の石灰岩地では見られない。

## 3. 生息環境

広葉樹が生える石灰岩露頭の岩の下や割れ目に生息する。随伴種としてベニゴマオカタニシがいるが、本種の方が生息地も個体数もはるかに少ない。

## 4. 生息状況

いずれの産地も生息範囲はきわめて狭く、個体数も多くない。天竜区南部の石灰岩地では近年生貝が得られないなど、各産地とも減少傾向にある。

## 5. 減少の主要因と脅威

石灰岩の採掘 (17) による生息地の消滅が大きい。残された石灰岩地でもそれぞれ生息地は狭く、生息環境も限定的であるため、少しの環境の変化でも影響を受けるものと考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989)

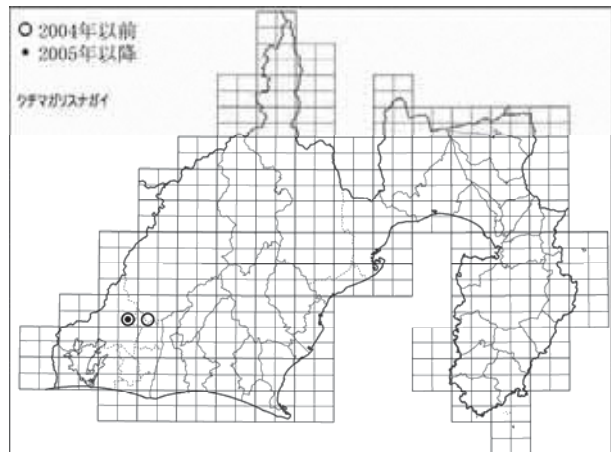
Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市北区産 2010年 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# オクガタギセル *Megalophaedusa dorcas* (Pilsbry, 1902)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する中型のキセルガイ。殻はやや太く、胎殻も太い。殻高 23~35 mm、殻径 5~7 mm 程度と変異に富むが、複数種を含む可能性がある。

## 2. 分布

日本固有種で、北陸から関東・東海にかけて分布する。県内では各地の山地に広く分布するが、伊豆半島での記録は少ない。

## 3. 生息環境

山地の自然度が高い落葉広葉樹林に生息する。林床の落葉下や倒木下などに生息するが、やや不安定な礫地の礫間で見いだされることも多い。

## 4. 生息状況

各産地とも個体数は少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の伐採 (11) や道路建設 (24) などによる環境変化などから各地とも減少傾向にある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編された (Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

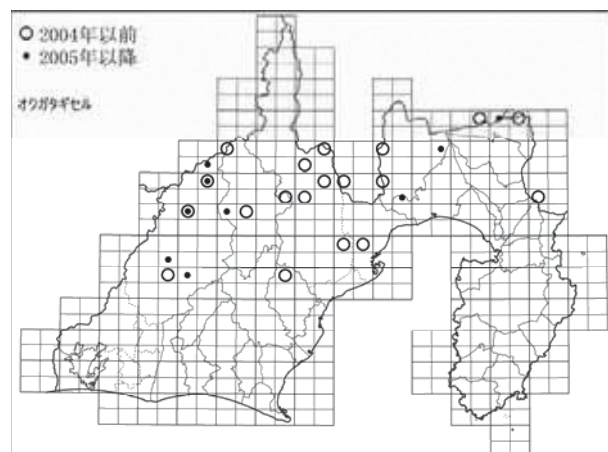
Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市天竜区産 2009年8月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ヒメギセル *Vitriphaedusa micropeas* (Möllerendorff, 1882)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

小型のキセルガイで殻高 10 mm、殻径 2 mm。体層基部の内側にある腔襞は、短い主襞と上腔襞、直線上の月状襞があり、下腔襞はない。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道の南西部と本州の静岡県以北に分布する。県内では各地の山地に分布する。生息地はいずれも標高 1,000 m を超す山岳地である。

## 3. 生息環境

生息地はブナ林で、ブナなどの大径広葉樹の立木の根元や幹のうろなど部分的に枯れた部位または立ち枯れ木に生息する。林床で生貝が見られることはほとんどない。

## 4. 生息状況

生息地は少なくないが、各地とも個体数はきわめて少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息環境が落葉広葉樹の大径木に依存しているのので、原始的な広葉樹林の減少 (11, 54) はそのまま本種の生息数に影響していると思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科は DNA 解析の結果、属が再編され (Motochin *et al.*, 2017)、本種はいくつかの種に分かれる可能性が示唆されている。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017)

Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

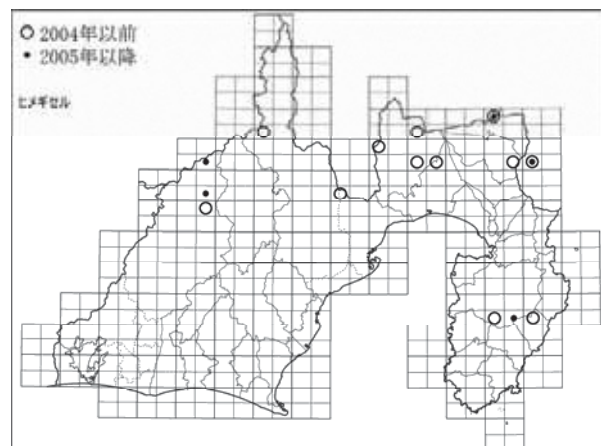
## 9. 標本

河津町産ほか：個人所蔵、御殿場市産：国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



河津町産 2012年7月22日 加藤 徹採集



# スジキビ *Parakaliella ruida* (Pilsbry, 1901)

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝で殻高 2 mm、殻径 3.5 mm。殻は半透明で濃い飴色を呈す。殻の上面の殻表には粗い成長脈が規則的に並ぶ。周縁角は著しく、竜骨状となる。

## 2. 分布

日本固有種で、本州にのみ分布する。県内では東部から西部にかけての山地に分布する。伊豆半島では確認されていない。生息地はいずれも標高 1,000 m 以上の山地である。

## 3. 生息環境

山地のブナ林の林床に生息する。生息するブナ林は大径木が多い自然度が高い場所に限られる。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数は少なく、複数個体を見つけることは困難である。

## 5. 減少の主要因と脅威

原生的環境に生息するが、そのような場所は面積が狭く、森林伐採 (11) の脅威も拭えない現状である。また、近年特に発見が困難になっているが、シカの増加による林床の質の低下 (54) の影響の可能性もある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989)

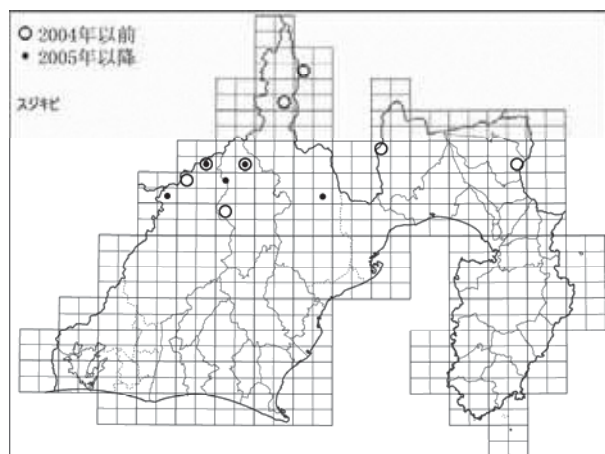
Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kato  
浜松市天竜区産 2015年11月21日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

## カサネシタラ *Sitalina insignis* (Pilsbry & Hirase, 1904)

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

微小な陸貝で、殻高 1 mm、殻径 1.7 mm。殻は褐色半透明できわめて薄い。また、周縁角はきわめて鋭く縫合より上に位置するため、特異な形状となる。

### 2. 分布

日本固有種で、関東以西の本州と四国、九州に分布する。県内では各地の山地に分布するが、東部や伊豆では産地が少ない。ただし、生息密度が低く微小な貝であるため、今後新たな産地が発見される可能性がある。

### 3. 生息環境

自然度が高い広葉樹林の林床に生息する。溪流近くの傾斜が急で不安定な礫地で見つかることが多い。

### 4. 生息状況

いずれの産地でも個体数はきわめて少なく、同時に複数の個体を見いだすことはほとんどできない。

### 5. 減少の主要因と脅威

自然度の高い広葉樹林の減少 (11) や道路建設 (24) などによる林床の改変の影響が大きいと考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989)

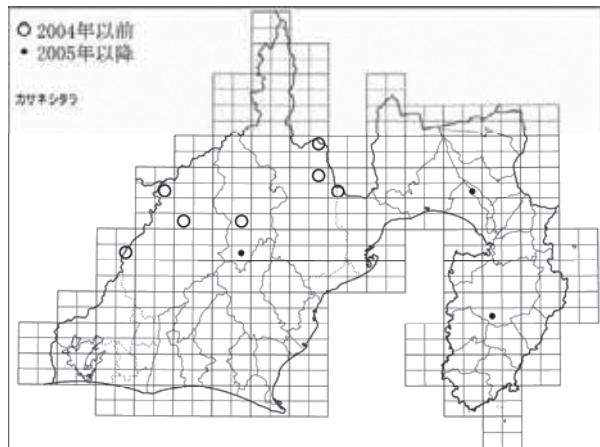
Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

### 9. 標本

静岡市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



静岡市葵区産 2001年2月14日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# イシマキシロマイマイ *Aegista calcicola* (Kuroda, in Masuda & Habe, 1989)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧(NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧II類(VU) ]

## 1. 種の解説

殻高 8 mm、殻径 12 mm 程度の小型の陸貝。殻は薄く、乳白色。殻口付近の周縁に弱い角がある。臍孔は大きく開く。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県と愛知県にのみ分布する。県内では中部から西部にかけて分布する。分布は局地的で、浜名湖の北側付近には生息地が多いが、他の地域にはきわめて少ない。

## 3. 生息環境

広葉樹林の樹上に生息する。石灰岩地では比較的個体数が多く、耕作地の周囲などでも生息することがある。非石灰岩地でも少数が生息する。

## 4. 生息状況

浜名湖北側の石灰岩地以外では元々個体数が少ないが、石灰岩地でも減少傾向にある。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の伐採(11)や道路建設(24)などが考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

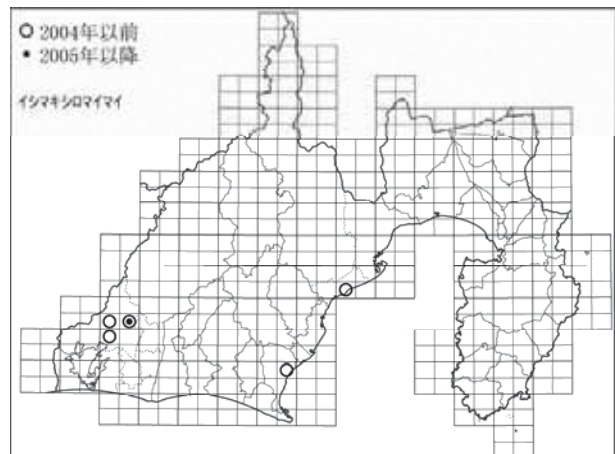
増田 修・波部忠重(1989) 静岡県陸淡水産貝類相. 東海大学自然史博物館研究報告, 3: 1-82, Color pls., I-III, pls., I-XIV.

## 9. 標本

浜松市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



浜松市北区産 1999年11月6日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# ミヤマヒダリマキマイマイ *Euhadra scaevola scaevola* (Martens, 1877)

オナジマイマイ科 Bradybaenidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧(NT) (要件-a) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

大型で左巻きの陸貝。殻高 16 mm、殻径 30 mm 前後であるが、地域によって形態が異なり、伊豆地域の個体群はやや小さい傾向がある。殻は褐色で成長脈が顕著である。周縁は角張るが、県西部地域の個体群は特に顕著である。浜松市西部の低山地より西の個体群は大型で、ミカワマイマイとヒラヒダリマキマイマイという別亜種にされる (川瀬ら, 2015)。

## 2. 分布

日本固有亜種で、本州の関東から静岡県にかけて分布する。県内では西部の低地をのぞくほぼ全域の山地に分布する。

## 3. 生息環境

山地の広葉樹林に生息する。比較的に残った自然林に多くの生息地がある。やや湿った礫地の林床に多い。

## 4. 生息状況

いずれの生息地も個体数は少なく、生貝を見つけることは困難である。

## 5. 減少の主要因と脅威

生息地である良好な自然林は減少しつつある。シカの生息密度が高い伊豆半島で、近年特に減少している印象があるが、シカの食害による林床植生の劣化や表土の攪乱などの影響 (54) がある可能性もある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

川瀬基弘・西尾和久・森山昭彦・市原 俊・桜井栄一 (2015) ミヤマヒダリマキマイマイ (腹足綱: ナンバンマイマイ科) 種内の形態変異と分子系統. *Molluscan Diversity*, 4(1-2): 5-13

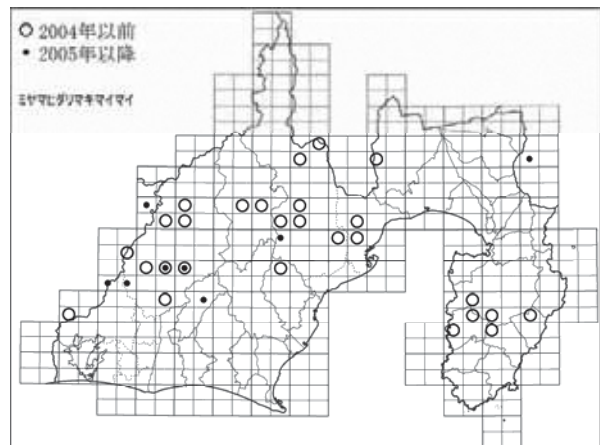
## 9. 標本

駿東郡小山町産ほか: 個人所蔵、伊豆天城山産・西伊豆町産: 国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



小山町産 2016年1月2日 加藤 徹採集



# イシガイ *Nodularia douglasiae nipponensis* (Martens, 1877)

イシガイ科 Unionidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-ab) 変更なし

[2004年版カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

殻長 60 mm、殻高 30 mm 程度の淡水産二枚貝。殻は黒色で表面にさざ波状の模様があるが後に平滑になる。静岡県に生息する近似種にマツカサガイがあるが、本種はより細長く、マツカサガイのような後背部の放射状の模様がな

## 2. 分布

日本固有亜種で、北海道から九州にかけて分布する。県内では大井川以西に分布する。特に浜名湖周辺に産地が多く、天竜川より東には生息地が少ない。

## 3. 生息環境

小川や用水路の泥や砂礫底に生息する。グロキディウム幼生時にオイカワやヨシノボリ類などの鰓や鰓に寄生するので、生息地にはこれらの魚が生息している必要がある。

## 4. 生息状況

浜名湖周辺では稀ではないが、その他の地域では減少が著しい。特に、天竜川以東ではほとんど見られず、島田市の産地では絶滅したと思われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

水路の3面張り化(13)や生活排水(31)、農薬の流入(32)などが考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

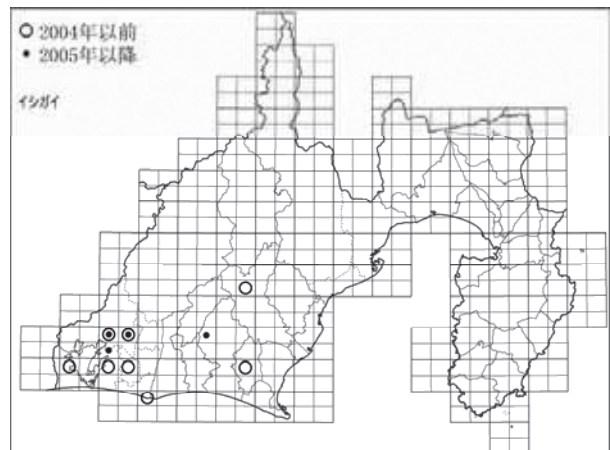
増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

## 9. 標本

浜松市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市北区産 1997年11月3日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



### 1. 種の解説

汽水域に生息する二枚貝。一般に食用に供されるシジミのほとんどは本種である。殻長は 30 mm 程度のものが多いが、地域によって変異が大きく 50 mm 程度になるものもある。殻表面は幼時には黄褐色だがやがて黒くなる。内側は白色か淡青色、淡黄色などで、近似種のマシジミは少なくとも周辺部が紺色を呈す。また、本種は卵生だが、マシジミは卵胎生である。

### 2. 分布

国外では朝鮮半島、ロシアに、国内では北海道から四国、九州に分布する。県内では東部から西部の各河川の河口域や浜名湖周辺に分布する。

### 3. 生息環境

河口の汽水域の泥底や砂礫底に生息する。県内の河川の多くは河口域でも比較的勾配があるため、汽水域が狭く、本種の生息域も狭い。

### 4. 生息状況

浜名湖に注ぐ小河川の河口部では生息密度がやや高い場所も見られるが、他の地域では個体数は少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

河口域は様々な汚染物質が集まるところであるため(31、32)、本種も減少していったものと考えられる。また、流路の整備や堤防や護岸などの工作物の建設(13)などの影響も考えられる。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

かつて、浜名湖の北岸付近は塩分濃度が低く本種が多く生息し、漁獲もされていたが、太平洋との境である今切口の改良により 1950 年代前半に塩分濃度が上昇し生息に適さなくなった。佐鳴湖でもかつては漁獲されていたが、生活排水や肥料成分の流入による富栄養化により一時壊滅状態にまで激減した。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう (2004) 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類。ピーシーズ、東京、240 pp.

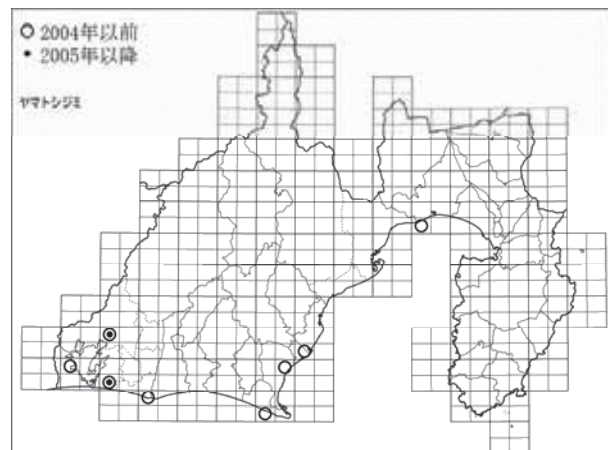
### 9. 標本

浜松市産：個人所蔵、湖西市新居町産：国立科学博物館所蔵

(加藤 徹)



浜松市北区産 1997年10月26日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

淡水の池沼や河川に生息する二枚貝。殻長は20～30 mm程度で地域によって変異が大きい。殻表面は褐色から黒色だが、幼時は黄褐色である。内側は紺色から淡青色だが、周辺部が紺色を呈す。近縁のヤマトシジミは汽水域に生息し、殻内側の色が異なる。また、近年急速に分布を拡げているタイワンシジミ類（複数の系統があると考えられている）は殻表が黄褐色のものが多く、内面の色彩パターンが異なるなどいくつかの区別点があるが、酷似している。

### 2. 分布

日本固有種で、ほぼ全国に分布するが、自然分布は本州と四国、九州と思われる。県内では河川上流部や荒廃河川をのぞく各地の河川や池沼に分布する。

### 3. 生息環境

河川や用水路、池沼などの砂礫底に生息する。

### 4. 生息状況

各地ともふつうに見られたが、個体数は元々それ程多くはなく、商業的な漁獲はほとんど行われていなかった。近年、各地の用水路などでシジミが高密度で生息しているのが見られるが、それはタイワンシジミ類である。

### 5. 減少の主要因と脅威

かつては至る所の陸水域に多数が生息していたが、生活排水（31）などで個体数を減らしていった。2000年代（もう少し前の可能性もある）からは、外来で繁殖力がきわめて強いタイワンシジミ類が急速に生息地を拡大しており、本種を駆逐している（56-1）。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

増田 修・内山りゅう（2004）日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類。ピーシーズ，東京，240 pp.

酒井治己・高橋俊雄・古丸 明（2014）日本産マシジミおよび外来タイワンシジミ類のアロザイム変異と淡水シジミ類の多様性。Venus, 72(1-4): 109-121

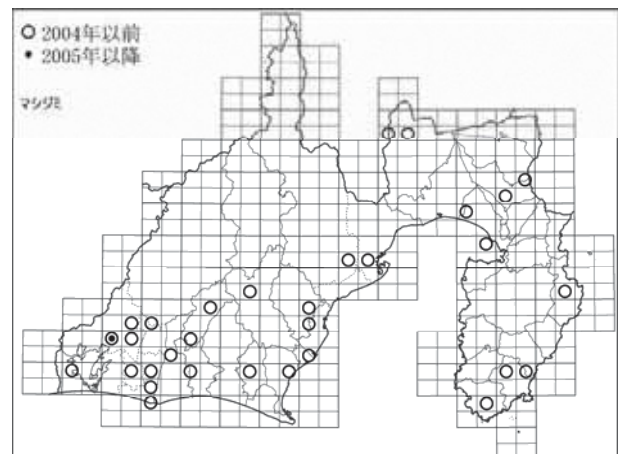
### 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（加藤 徹）



©2019 T.Kato  
浜松市浜北区産 1998年1月29日 加藤 徹採集



### 1. 種の解説

小型の陸貝で殻高 4.5 mm、殻径 5 mm。縫合は深く、周縁は丸い。殻は暗褐色で殻表に成長脈に沿った板状褶がある。体層の周縁付近には 1 列の顕著な毛状突起があるが、近似種のサドヤマトガイには 2 列の毛状突起があり区別される。

### 2. 分布

日本固有種で、本州の静岡県から滋賀県にかけての東海地方に分布する。県内では静岡市と浜松市に生息する。

### 3. 生息環境

林床の礫間や落葉下に生息する。主に石灰岩地で見ついているが、非石灰岩地でも見ついている。

### 4. 生息状況

生息地がきわめて限定され、しかも個体数はきわめて少ないと考えられる。

### 5. 減少の主要因と脅威

比較的最近になって記載された種で生態など不明なことが多いが、個体数がきわめて少ないことから些細な環境の変化(71)にも影響を受ける可能性がある。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

特になし。

### 8. 主な文献

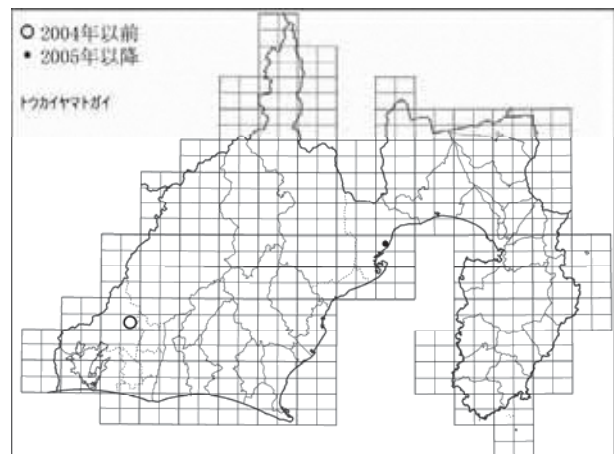
湊 宏 (1985) 日本産ヤマトガイ属の 2 新種. VENUS, 44(2): 81-86

### 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



清水区由比町産 2006年6月13日 石川 均採集



(加藤 徹)



# カワネミジンツボ *Saganoa kawanensis* Habe, in Masuda & Habe, 1989

ミズツボ科 Hydrobiidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abcd)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 情報不足(DD) ]

## 1. 種の解説

地下水に生息する微小貝で、殻径 0.7 mm、殻高 1.5 mm 前後、螺塔は 4~5 層で縫合は深く螺層は多少ふくれ、殻頂は丸い。殻は半透明で白色か淡黄色で殻口は褐色。

## 2. 分布

日本固有種で、今回の調査の結果、大井川水系から愛知県豊橋市にかけて見つかった。浜松市天竜区の標高 550 m の山地でも見ついている一方で、大井川の河口付近の地下水でも見ついている (Kato *et al.*, 2010)。浜名湖北岸周辺の石灰岩地では採集箇所が多い。

## 3. 生息環境

多くは山間部の湧水で発見されているが、大井川河口の地下水でも見ついていることから、山地から平野にかけての地下水に広く生息していると考えられる。

## 4. 生息状況

多くの場所で数個体が採れているにすぎず、生息密度はかなり低いものと考えられる。ただし、それは地下水環境に生息する生物では一般的なことである。

## 5. 減少の主要因と脅威

地下水という特殊な環境に生息しており、生態や生息数の変化などは不明である。山地の地下水に大きな変化はないと思われるが、平野部の地下水はくみ上げによる影響 (71) や汚染 (31) などの影響が懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

なお、大井川河口では、同時にツバサコハクカノコガイも採集されている (Kato *et al.*, 2010)。

## 8. 主な文献

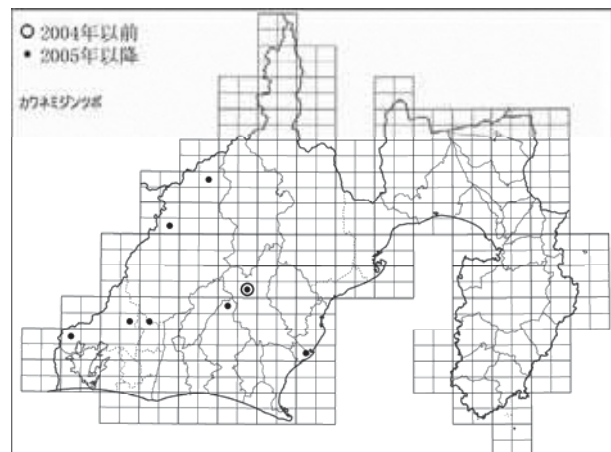
Kato, M., A. Kawakita & T. Kato (2010) Colonization to aquifers and adaptations to subterranean interstitial life by a water beetle clade (Noteridae) with description of a new *Phreatodytes* species. *Zoological Science*, 27: 717-722

## 9. 標本

浜松市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



島田市産 2010年1月31日 加藤 徹採集



(加藤 徹)

# イボイボナメクジ *Granulilimax fuscicornis* Minato, 1987

(=ツブツブナメクジ)

ホソアシヒダナメクジ科 Rathouisiidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT) ]

## 1. 種の解説

小型の殻をもたない陸貝で、伸長時に 30 mm 程度。ナメクジやコウラナメクジ類に似るが、全く異なる分類群に属する。体表には顕著な顆粒状の構造があり、名前の由来となっている。大触角は黒く、体側には先端と末端付近でつながる、2本の平行な暗色の線がある。本州に生息する陸貝では珍しく、他の陸貝を捕食する。

## 2. 分布

日本固有種で、山梨県から四国にかけて分布する。県内では中部以西で少数が見つかるが、発見が難しい種であるため、今後他の地域でも見つかる可能性がある。

## 3. 生息環境

石灰岩地のスギ林下や常緑広葉樹林の落葉下で見つかるが、詳しい生息環境は不明である。なお、本種は他の陸貝を捕食するので、陸貝が豊富な場所であることが生息条件になると考えられる。

## 4. 生息状況

いずれの産地でも 1 個体が採集された程度で、生息密度はかなり低いものと推測される。

## 5. 減少の主要因と脅威

陸貝を捕食することから、他の陸貝も生息する環境が保たれる必要があるが、そのような良好な森林の減少(11, 54)が要因であると考えられる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

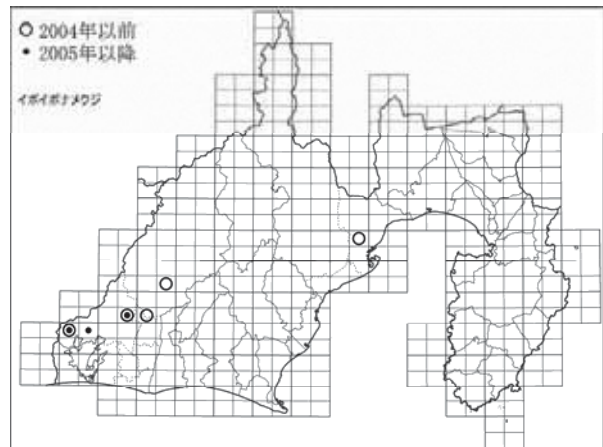
早瀬善正 (2002) ホソアシヒダナメクジ科 2 種の捕食行動. かきつばた, (28) : 6-8

## 9. 標本

浜松市産 : 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



浜松市北区 2017年4月29日 加藤 徹



(加藤 徹)

# シイノミミミガイ *Cassidula plecotrematoides japonica* Möllendorff, 1901

オカミミガイ科 Ellobiidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

河口や内湾奥の泥上や転石下に生息する小型の貝で、殻高15 mm、殻径8 mm。黒褐色で縫合下の1螺旋溝をのぞけば平滑で、シイの実に似る。殻口の外唇に幅広の1歯、内唇に2歯、軸唇に1歯がそれぞれある。

## 2. 分布

日本固有亜種で、神奈川県から九州にかけて分布する。なお、基準亜種は南西諸島以南に分布し多産する。県内では狩野川河口付近での古い記録(大山, 1943)があるだけであったが、近年伊豆半島で新鮮な死殻が得られている。

## 3. 生息環境

河口や内湾奥にできる干潟の陸に近い部分の転石の下や石垣などの隙間に生息する。

## 4. 生息状況

日本本土に分布する本亜種は各地で激減しており、増田・内山(2004)によると関東から九州にかけての内湾ではほぼ絶滅しているとされ、県内での生息も心配される。狩野川河口付近ではカワザンショウガイ類も見られず、絶滅したものと思われる。

## 5. 減少の主要因と脅威

干潟の陸側部分は、埋め立てられたりコンクリート護岸が建設されたりして(13)、本種が生息できる環境が失われていったことが大きな要因であると思われる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

福田 宏・木村昭一(2012)シイノミミミガイ. 日本ベントス学会 編, 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック, p. 94. 東海大学出版会, 秦野.

増田 修・内山りゅう(2004)日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ, 東京, 240 pp.

奥谷喬司 編著(2017)日本近海産貝類図鑑 第2版. 東海大学出版部, 秦野, 1382 pp.

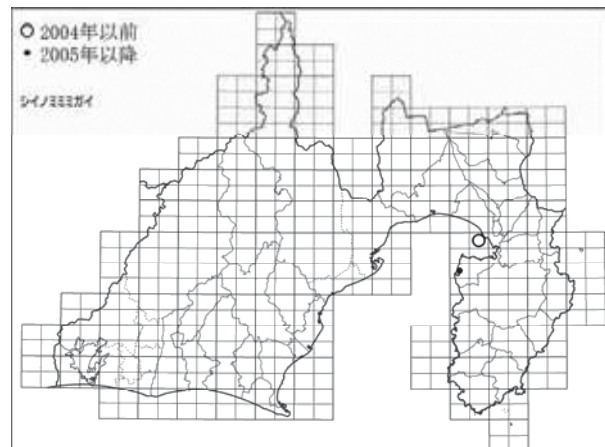
大山 桂(1943)駿河湾産軟体動物目録. 資源科学研究所彙報, 2: 1-47

## 9. 標本

沼津市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



沼津市産 2015年1月29日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# マルクチコギセル *Reinia holotrema* (Pilsbry, 1902)

キセルガイ科 Clausiliidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-b)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし；環境省カテゴリー 絶滅危惧I類 (CR+EN) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型の陸貝。殻高13~14mm、殻径4mmで太い紡錘形。殻口は大きく開き、下板は顕著だが、上板はないか痕跡的。殻表は、各層の上側が白く下側が赤紫褐色に染め分けられ、さらに成長脈に沿った縞模様が顕著である。樹上性でブナなどの広葉樹の幹で生活する。

## 2. 分布

日本固有種で、紀伊半島と九州に分布するが、2016年に静岡県でも生息が確認された(佐藤ら, 2016)。生息地は極端に隔離されている。県内では静岡市の安倍川上流部でのみ確認されている。

## 3. 生息環境

オオイタヤメイゲツやブナの大径木がある自然林でのみ発見されている。また、大径木の周囲でしか発見されておらず、大径木の存在が重要であると考えられる。

## 4. 生息状況

確認地点は2ヶ所しかなく、そこでもわずか数本の大径木とその周辺の樹木でのみ確認されているにすぎず、生息数はかなり少ないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種が生息するブナなどの大径木の減少(54)が大きいと考えられるが、発見されて間もないこともあり、不明なことが多い。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

キセルガイ科はDNA解析の結果、属が再編された(Motochin *et al.*, 2017)。

## 8. 主な文献

Motochin, R., M. Wang & R. Ueshima (2017) Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda: Stylommatophora). *Zoo. J. Linn. Soc.*, 181(4): 795-845

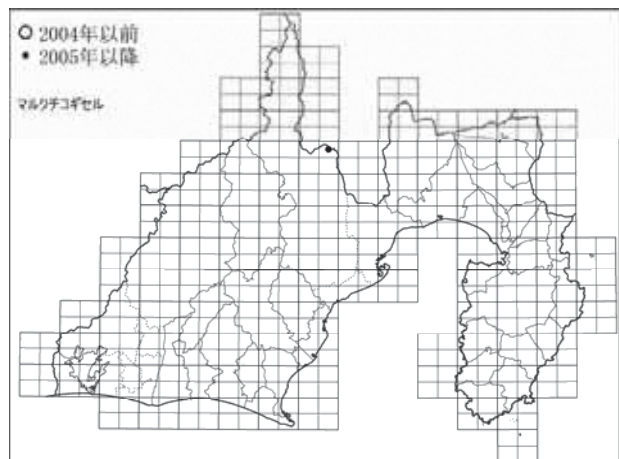
佐藤拓也・大貫貴清・早瀬善正(2016) 静岡県におけるマルクチコギセルの新分布記録. *ちりぼたん*, 46(3-4): 144-149

## 9. 標本

静岡市産：国立科学博物館所蔵 (NSMT-Mo78929)



静岡市産 2018年10月1日 佐藤拓也撮影



(加藤 徹)

# サドタカキビ *Trochochlamys xenica* (Pilsbry & Hirase, 1903)

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-b)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足 (DD) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝。螺塔は高い円錐形で、殻高 3.8 mm、殻径 2.5 mm 程度。殻は黄褐色で薄い。周縁角はあるがはっきりせず、殻底がふくらむ。県内各地に生息するタカキビとはよく似ているが、タカキビは周縁角が鋭く、殻底のふくらみが弱いことで区別がつく。

## 2. 分布

日本固有種で、北陸・関東から近畿地方の本州と四国、九州に分布するが局地的で産地は少ない。県内では浜松市の 1 ヶ所でのみ生息が確認されている。

## 3. 生息環境

広葉樹林の林床の低木上 (矢野, 2004) または落葉下 (埼玉県環境部みどり自然課, 2008) に生息すると考えられるが、県内で確認されている場所は小さな石灰岩の露頭の落葉下である。生息地は近年シカの食害により林床植生の衰退が激しいため、植生上での生息は確認できていない。

## 4. 生息状況

確認されているのはごく狭い範囲で個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

もともと、極く限られた場所にしか生息していなかったものと思われるが、確認数がきわめて少なく不明なことが多い。近年、シカの生息密度が高くなり、林床環境の質の低下 (54) が本種にとっては大きな脅威となっている可能性もある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

埼玉県環境部みどり自然課 (2008) 埼玉県レッドデータブック 2008 動物編. 同課, さいたま市, 352 pp.  
矢野重文 (2004) サドタカキビ. 香川県希少野生生物保護対策検討会 編, 香川県レッドデータブック香川県の希少野生生物, p. 377. 香川自然環境保全調査会, 高松.

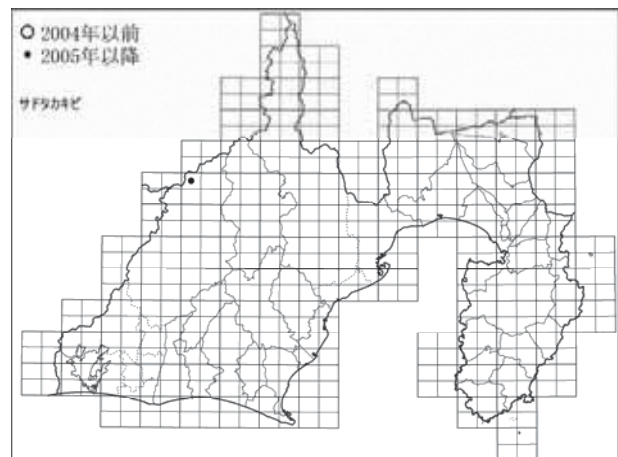
## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(加藤 徹)



浜松市天竜区産 2008年2月2日 加藤 徹採集



# タンザワキビ *Trochochlamys tanzawaensis* Sorita & Kawana, 1983

ベッコウマイマイ科 Helicarionidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD)(要件-b)変更コード4

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 情報不足(DD)]

## 1. 種の解説

山地に生息する微小な陸貝だが、キビガイ類としてはかなり大型で、殻径 6 mm、殻高 4.7 mm。殻は薄く黄褐色で半透明。周縁角は鋭い。県内に広く分布するヒメオオタキキビに似ているが、より大型で螺旋塔がやや低い。

## 2. 分布

日本固有種で、神奈川県の丹沢山地周辺でのみ確認されていたが、今回の調査で静岡県の富士宮市の3ヶ所で生息が確認された。それでも、かなりの狭分布種である。

## 3. 生息環境

静岡県では、落葉広葉樹林の林床において、堆積した礫の隙間で見ついている。

## 4. 生息状況

生息地でも生息範囲は狭く、個体数も少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の伐採(11)は、本種への脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

生息地がきわめて限られることから特殊な生息条件が必要である可能性がある。しかし、種の記載が新しく、県内で発見されたのも最近であり、分布や生態など不明なことが多い。

## 8. 主な文献

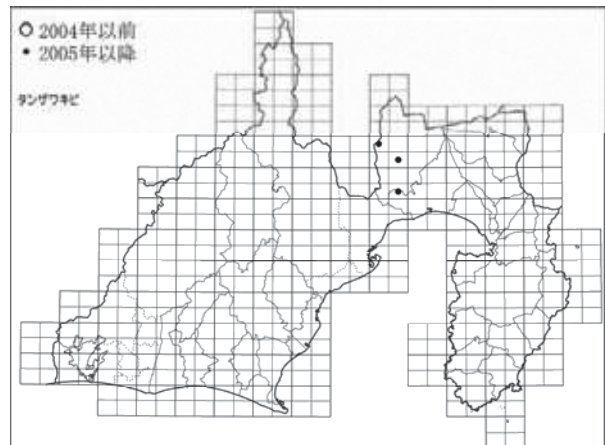
反田栄一・川名美佐男(1983) 関東地方産ベッコウマイマイ科の2新種. *Venus*, 42(1): 35-43

## 9. 標本

富士宮市産：個人所蔵(公的機関の保管不明)



富士宮市産 2016年4月10日 加藤 徹採集



(加藤 徹)



# ヤマコウラナメクジ *Nipponolimax monticola* Yamaguchi & Habe, 1955

コウラナメクジ科 Limacidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する殻のない陸貝。体長 30 mm 程度で、体全体が黒色。体前方の上面に退化した殻を内蔵する外套膜でできた楯がある。近似のオオコウラナメクジは軟体の後半上面に稜角があるが、本種にはない。

## 2. 分布

日本固有種で、本州と四国に分布する。静岡県では浜松市の山岳地で1個体が採集されているにすぎない。

## 3. 生息環境

標高 1,500 m 程度の溪流沿いのブナなどの自然林で、倒木上を這っているところを発見された。生息数が少なく、生態などについては不明なところが多い。

## 4. 生息状況

山地のブナ林などに生息すると考えられるが、個体数はきわめて少ないと考えられる。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内ではもともと生息数が少なかったと思われるが、近年のシカの生息密度の高まりによる林床植生の減少やそれに伴う林床の乾燥化など (54) が懸念される。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

採集例がきわめて少ないため、絶滅の危惧について判断できる知見がえられていない。

## 8. 主な文献

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

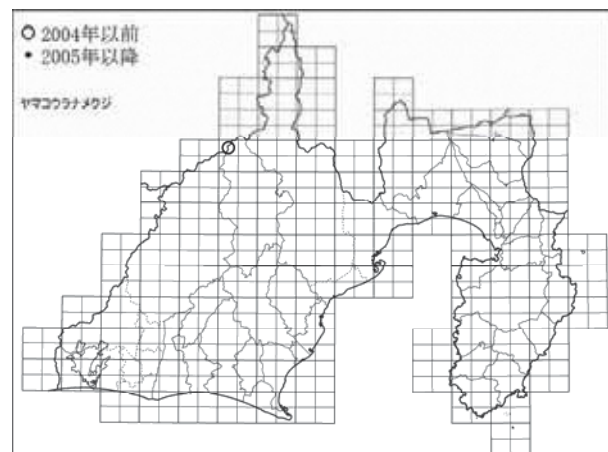
## 9. 標本

浜松市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(加藤 徹)



©2019 T.Kato  
青森県 2012年5月4日 加藤 徹



# オオコウラナメクジ *Nipponarion carinatus* Yamaguchi & Habe, 1955

コウラナメクジ科 Limacidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する陸貝。殻は小さく退化し、軟体上部の外套膜内に痕跡的に残る。伸長時の体長は 35 mm、体の後半は著しい稜角となる。体は褐色で、頭部周辺と触角は黒色を呈す。

## 2. 分布

日本固有種で、本州から四国、九州に分布する。県内では富士山と天城山のブナ林でのみ生息が確認されている。

## 3. 生息環境

生息地はブナやオオイタヤメイゲツ、サワグルミなどの自然度の高い大径林で、湿度が高い林床の朽ち木の周囲などで見られた。

## 4. 生息状況

県内での生息密度はきわめて低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

近年のシカの生息密度の高まりによる林床植生の減少やそれに伴う林床の乾燥化など(54)が懸念される。

## 6. 保護対策

生息が確認された場所の一つは富士箱根伊豆国立公園の特別保護地区に指定されている。

## 7. 特記事項

自然度の高い森林に生息するが、生息密度がきわめて低いため、絶滅の危惧について判断できる知見がえられていない。

## 8. 主な文献

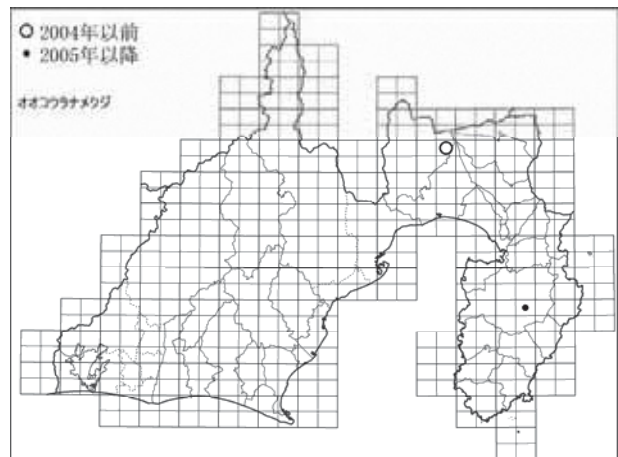
加藤 徹 (1998) 静岡県初記録及び新分布の陸・淡水産貝類. 遠州の自然, (21): 15-16

## 9. 標本

天城山産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 T.Kate  
富士宮市 1995年10月1日 加藤 徹



(加藤 徹)

# コベソマイマイ *Satsuma myomphala* (Martens, 1865)

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-ab)変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

大型の陸貝で殻高 30 mm、殻径 45 mm 程度。螺塔は低く薄い黄褐色で周縁に赤褐色の細い色帯がある。成貝の臍孔は閉じる。本県に生息する近似種としてミノブマイマイがいるが、この種は臍孔が開くことで区別がつく。なお、両種の混生は確認されていない。

## 2. 分布

日本固有種で、関東以南の本州と四国、九州に分布する。西日本では普通種であるが、県内では富士山の周辺にごく局地的に分布するのみである。

## 3. 生息環境

県内では丘陵地の比較的乾燥した落葉広葉樹林で見ついている。

## 4. 生息状況

県内では生息範囲が狭く、4ヶ所でわずかな個体が採集された記録があるにすぎない。一般に稀産種とされるミノブマイマイよりも県内ではさらに稀産で、個体数はきわめて少ないと考えられる。また、近年生貝が見つからない。

## 5. 減少の主要因と脅威

県内ではもともと生息密度がきわめて低いことが背景にあり、道路建設(24)や伐採(11)などの隣接部の些細な環境の変化にも影響を受けている可能性がある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

特になし。

## 8. 主な文献

Kato, M., M. Matsumoto & T. Kato (1989) Terrestrial malacofauna of Shizuoka Prefecture in Japan: Biogeography and guild structure. *Contributions from the Biological Laboratory Kyoto University*, 27: 171-215

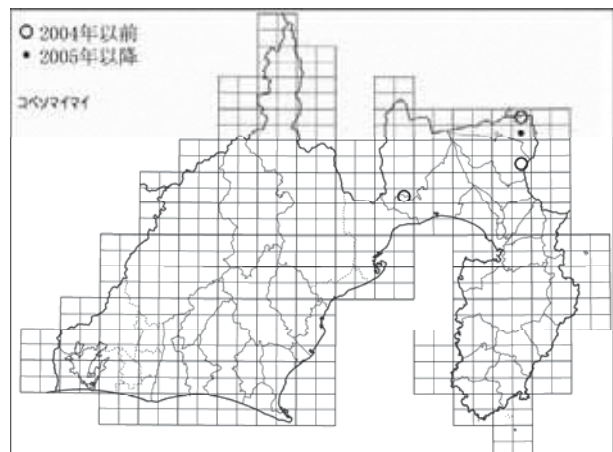
## 9. 標本

富士市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(加藤 徹)



富士市 1984年4月8日 加藤 徹





# ミニビロウドマイマイ *Nipponochloritis takedai* Minato, 1984

ナンバンマイマイ科 Camaenidae

静岡県カテゴリー 情報不足(DD) (要件-abc) 変更なし

[2004年版カテゴリー 情報不足(DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

山地に生息する小型の陸貝。殻高 6 mm、殻径 11 mm。殻表には細かい毛状突起を密生させた殻皮があり、ビロード状を呈す。県内産の他のビロウドマイマイ類より小型で、成貝でも臍孔が大きく開くことで区別される。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県と愛知県にのみ分布する。県内では中部と西部の3ヶ所で見つかっている。浜松市北区引佐町金指が基準産地である。

## 3. 生息環境

丘陵地から山地の広葉樹林下の落葉下や倒木下に生息する。

## 4. 生息状況

各調査地とも生息数はきわめて少ない。

## 5. 減少の主要因と脅威

広葉樹林の伐採(11)は、本種への脅威となる。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

採集例が少なく、不明なことが多いため、絶滅の危惧について判断できる知見がえられていない。

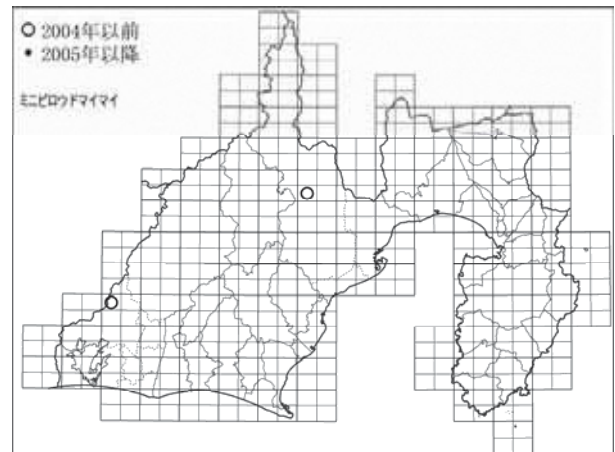
## 8. 主な文献

湊 宏(1984) 静岡県産の珍奇なミニビロウドマイマイ(新種). *Venus*, 43(3): 193-195

## 9. 標本

浜松市産: 国立科学博物館所蔵(パラタイプ)

NO IMAGE



(加藤 徹)

## 8. クモ類

### (1) 静岡県における生息種及び分布の特性

日本国内におけるこの分類群は、国土が南北に長く国内における大きな気温差と山地帯が多く高低差の大きい複雑な地形により、世界でも面積に対する種数は多く、約1,600種の報告がある。静岡県における生息種及び分布の特性も、それに良くあてはまっている。静岡県内における真正クモ類は、これまでの文献、図鑑などの記録及び今回の結果を含めると、1目48科506種が確認され、国内の種数の約1/3を占めている。これには、日本の国土の中心に位置しながら、南アルプスや富士山などの高山域を有するため、北方系のクモの分布が確認されることが大きい。さらに、富士山麓には洞窟や風穴など特殊な環境が多くあることや、南北に流れる天竜川、大井川、富士川などの大川が障壁として機能していることなどにより、移動・分散能力の小さなグループにおいて種分化が進み、地域に固有の種が多いことも県内のクモ類が多様な要因となっている。

### (2) 調査の概要

静岡県レッドデータブック(2004)作成時、本分類群に関しては調査が行われていなかった。そこで、本調査では、まず現地調査により文献の信頼度を量り、静岡県の生息種の実態把握から進める必要があった。そのため、静岡県全域を広く調査の対象としており、特定の地域のみを生息する種、もともと数が少ない種においては、生息の確認できない種もあった。調査方法としては、見つけ採り法、ビーティング法、スウィーピング法により採集した個体を、その場でアルコール標本として持ち帰り、雌雄生殖器の形態により同定を行い、種を決定した。

### (3) レッドリスト種の選定経緯

現地調査及び文献調査を合わせた県内に生息の確認された506種をレッドリスト種選定の対象とした。ただし、外来種として広く知られているクロガケジグモに関しては、対象から除いた。また、地球温暖化による気候変化による高山域への影響、開発などの人的な地形の変化など、今後の県内において考えられる変化を想定した上で、レッドリスト選定の基準とした。

### (4) レッドリストの作成で明らかになったこと

掲載種数は23種である。絶滅のおそれのある種の総数は3種(絶滅危惧ⅠB類(EN)2種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)1種)とした。また、準絶滅危惧(NT)として、7種を掲載した。これらのいずれの種も分布域が狭く、生息環境が限られており、分散能力が低い点が挙げられ、地球温暖化や人的な開発などに対して、これからも厳しい状況が続くといえる。分布域や繁殖環境、分散能力の点で同様な特性を有する13種を要注目種(分布上注目種等(N-II))とした。本分類群は前回調査対象ではなかったため、近年の生息状況に関する変化についての情報は十分ではない。今後も、継続的な調査を実施し、さまざまな面から変化の状況を確認していく必要がある。

### (5) 減少の主要因と脅威

減少の主要因は、レッドリストに掲載した各種のもつ特徴により、大きく3つに分けられる。①分布域が狭い・生息環境が限定される、②空中飛行を行わず分散能力が低い、③高山性種のため高山域にのみ生息する、の3つである。それぞれの種が、この①から③のうちのいずれか、または複数の要件を満たしている。①、②の特徴をもつ種に関しては、開発などによる人的な要因での減少が考えられ、わずかな開発でも大きな影響が出る可能性がある。③に関しては、地球温暖化の影響を受ける形となり、このままの状態が続けば、人間が直接手を加えなくても、絶滅に向かうこととなるであろう。

#### (6) 注目される種のカテゴリー

特に注目される該当種はない。

#### (7) 考えられる保全対策、今後の留意点

レッドリスト種各種の生態的な特性、分布上の特性を理解したうえで、各種に及ぼす影響を排除するような対策を行うことが大切である。また、一見何の変哲もないような場所、環境に生息するクモ類も多いことから、開発などにおいてはできうる限り現在の自然環境を保全することが必要である。地球温暖化に関しては、その影響は徐々に現れるため長期的な視野での対策が必要と考えられる。

#### (8) 文献（多くの種で参考とした文献）

小野展嗣（2009）日本産クモ類．東海大学出版会，秦野，738 pp.

小林久俊（1972）静岡県産真正蜘蛛類相について．Atypus, 59 : 14-19

久米忠夫（1979）静岡県産真正クモ類．静岡県産生物編集委員会 編，静岡県の生物，pp. 136-143．日本生物教育会静岡大会実行委員会，榛原．

（小林俊樹）



# フジマシラグモ *Falcileptoneta caeca* Yaginuma, 1972

マシラグモ科 Leptonetidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-②)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 1.7 mm 前後、オス 1.5 mm 前後である。体は半透明の淡黄色で、腹部背面には斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎に多数の小さい牙堤歯を備える。一般に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節の突起に台座がない。

## 2. 分布

日本固有種で、主に富士山周辺の溶岩洞群とその周辺に分布する。伊東市の古い鉱山跡でも発見されている。

## 3. 生息環境

洞窟や森林（落葉層）の間隙にシート網を張り生息する。地表の人為的な攪乱のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

## 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、特定の洞窟及びその周辺にのみ分布し、生息域が非常に狭い。また、個体数は少なく密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化を大きく受け（11、23）、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の攪乱（51）ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、洞窟のような暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化（71）が減少の一因になる可能性がある。

## 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境・地域に限られているため、減少の主要因と考えられる人的開発をこの種の分布域で行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに十分に留意し、細心の注意を払う必要がある。

## 7. 特記事項

クモは通常、網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

生息状況の把握が望まれる。

## 8. 主な文献

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛。富士山西斜面学術調査報告書，pp. 120-145，建設省中部建設局富士砂防工事事務所。

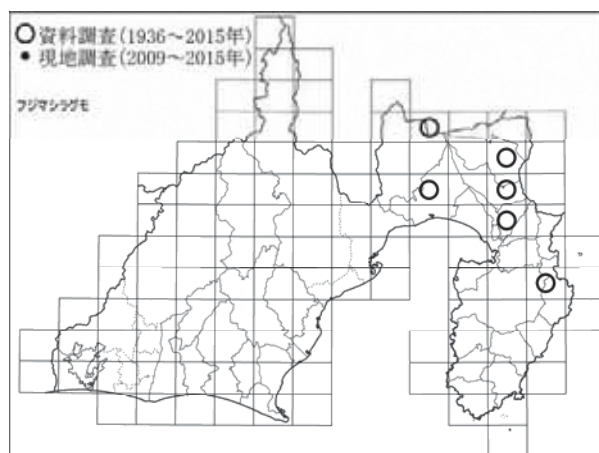
## 9. 標本

裾野市岩波風穴産：国立科学博物館所蔵（ホロタイプ）

（小林俊樹）



©2019 H. Kobayashi  
富士市不動穴産 1973年4月30日 小林久俊採集



# フジホラヒメグモ *Speleoticus uenoi* (Yaginuma, 1972)

ホラヒメグモ科 Nesticidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) (要件-②)

[環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

## 1. 種の解説

体長雌雄 2.9~3.1 mm 前後で、この属の中では小型である。体色は淡く、背甲中央、腹部背面、歩脚の斑紋をすべて欠くのが特徴である。また、眼は原則として8個で2列に並ぶが、洞窟内への適応・分化のためか、本種のすべての眼は退化傾向を示す。特に、前中眼は褐色の点となっている。

## 2. 分布

日本固有種で、静岡県側の富士山（富士山東南側、西側、南西側の裾野）の洞窟及び山梨県、静岡県の富士山周辺の地表に生息する。

## 3. 生息環境

地表近くの湿った薄暗い場所に生息し、多くは洞窟内から見出される。そのため、特定の洞窟・洞窟群とそこからごく近い周辺の良く似た環境でのみ確認される。洞窟の壁面、落葉層や石の間隙に不規則網を張り生息している。

## 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、特定の洞窟及びその周辺にのみ分布し、生息域が非常に狭い。また、個体数や密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発（18）による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。洞窟内の環境変化だけではなく、洞窟外の開発（11、23）による洞窟内の温度や湿度の小さな変化も、この種の減少の脅威となる。このことから、洞窟内の温度、湿度に影響を及ぼす可能性がある地球温暖化（71）も、減少の一因になりうる。

## 6. 保護対策

本種は分布に示した洞窟群を中心にその周辺の限られた地域・環境にしか生息していない。洞窟群立ち入りの禁止などの措置も考えられる。また、環境の変化を受けやすいため、洞窟内だけではなくその周辺の開発の際にも、細心の注意を払う必要がある。

## 7. 特記事項

生息状況に関する情報収集が望まれる。

## 8. 主な文献

Yaginuma, T. (1972) The fauna of the lava caves around Mt. Fuji-san IX. Araneae (Arachnida). *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, 15: 267-334

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛．富士山西斜面学術調査報告書，pp. 120-145，建設省中部建設局富士砂防工事事務所．

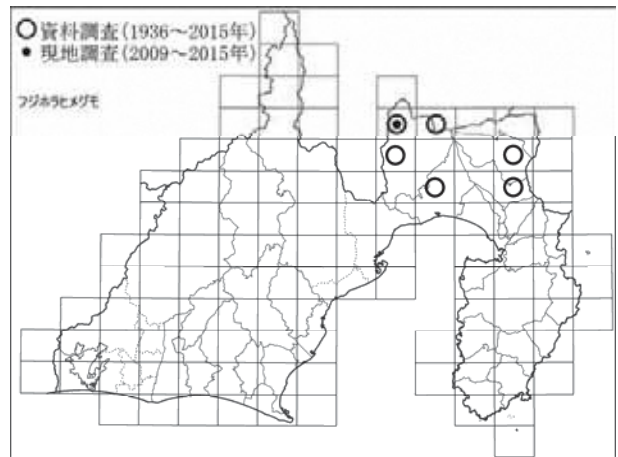
## 9. 標本

富士宮市朝霧高原三ツ池穴産：国立科学博物館所蔵（ホロタイプ）

（小林俊樹）



富士宮市人穴 2018年8月18日 石川 均



### 1. 種の解説

体長メス 13~18 mm、オス 5~8 mm である。メスの背甲は黄褐色ないし淡褐色で、腹部は紫褐色または灰褐色である。オスの体は褐色ないし黒褐色で、メスに比べると著しく小さい。ワスレナグモ属は姉妹群と考えられるジグモ属とよく似る。しかし、前中眼が小さい、下唇が胸板と完全に癒合しない、後外疣の中節が柔軟であるなどの特徴により区別ができる。

芝生や草むらなどよく日光の当たる場所の地中に管状の縦穴住居を造り生息している。住居の深さは 15~20 cm 程度であり、入口は露出するか糸で閉じ、内側はきわめて細くて丈夫な糸で裏打ちされている。

### 2. 分布

国外では韓国、中国に、国内では本州、四国、九州に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部で記録がある。

### 3. 生息環境

畑地、草地、芝生、庭園の植え込みの縁などに生息する。

### 4. 生息状況

県内では広く分布が確認されているが、特定の環境に偏り生息密度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

日本に古くからある里山環境が、開発により減少(23)したことが主要因である。加えて、そういった環境が残る場所、新たに芝生とされた場所であっても、殺虫剤散布(32)による影響がある。それは、本種の個体数減少だけではなく、餌となる昆虫の減少という脅威にもなりうる。また、生息環境に加え、生態が特殊であること(71)も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる草むらの保全が第一である。しかし、実際には開発により減少した環境をもう一度作り出すのは困難である。逆に、庭やゴルフ場などとして増えつつある芝生を生息地として利用する方策も考えられる。また、もうひとつの減少の要因となる殺虫剤の使用方法も考える必要がある。

### 7. 特記事項

巣が目につきにくいいため発見しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

繁殖時以外は巣(住居)の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえて巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

### 8. 主な文献

金野 晋 (1994) ワスレナグモの記録. くものいと, 15: 20

小野展嗣 (2006) 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. 国立科博専報, 42: 255-274

新海 明 (2007) ワスレナグモの全国分布調査結果. Kishidaia, 92: 39-52

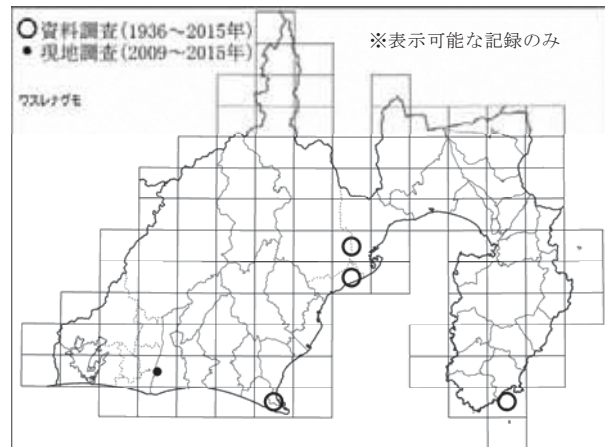
新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

磐田市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



磐田市遠江国分寺跡 2016年8月1日 谷川明男



※表示可能な記録のみ

○資料調査(1936~2015年)

●現地調査(2009~2015年)

ワスレナグモ

(小林俊樹)



# カネコトタテグモ *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch, 1878)

カネコトタテグモ科 Antrodiaetidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b)

[環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長メス 12~15 mm、オス 10~13 mm である。背甲及び歩脚は淡褐色ないし黒褐色で、腹部はやや淡色である。カネコトタテグモ科は日本では 1 属 2 種が知られ、同属のエゾトタテグモとはオス触肢の特徴により区別できる。ジグモ科に近縁だが、馬鋏を有すること、下顎の前側面が突出しないこと、後内疣が細く、基部が離れることなどで区別ができる。

地中に管状の横穴住居を造り、穴の深さは 10~20 cm である。また、入口となる管の先端部の縁に両開きの扉を形成する。

## 2. 分布

日本固有種で、東北地方から近畿地方 (兵庫県) の本州に分布する。県内では東部、中部、西部で記録がある。

## 3. 生息環境

山地の崖、樹林地の傾斜地や林床、草むら、人家や社寺の庭などに生息する。

## 4. 生息状況

どの生息地も特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

里山や社寺といった自然環境に開発 (23) の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周りの森林や草むらの開発 (11,16) により、餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる里山、社寺のような昔ながらの環境の保全が第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

## 7. 特記事項

繁殖時以外は巣 (住居) の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

巣が見つげにくいと発見しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

## 8. 主な文献

細田昭博 (2012) 静岡県のトタテグモ類. 遠州の自然, (35): 1-7

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

八木沼健夫 (1970) 分布資料. Atypus, 54: 27

八木沼健夫・西川嘉朗 (1973) 富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

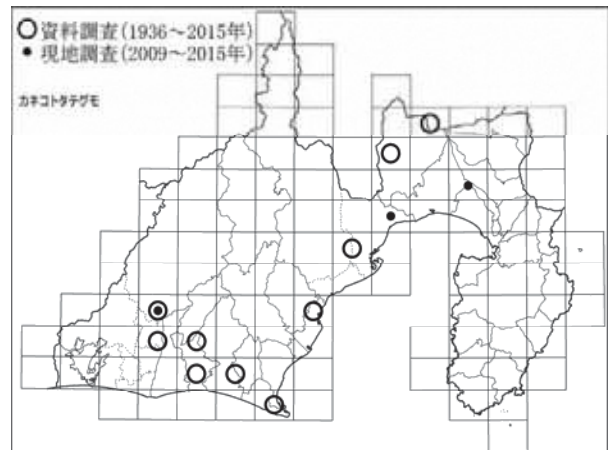
## 9. 標本

駿東郡長泉町・富士宮市産: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



浜松市浜北区根堅 2016年8月1日 谷川明男



# キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (Kishida, 1913)

トタテグモ科 Ctenizidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b)

[環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長メス 12~20 mm、オス 10~15 mm である。背甲及び歩脚腿節は黒褐色、それ以外の歩脚の節はやや赤みを帯びる。腹部は黒褐色または紫褐色で、白色横条の濃さは個体により変化する。同属の他種とはオスの触肢の形状にわずかな差が見られるのみで、メスの形態はよく似ており、変異の可能性も踏まえ多数個体での検討が必要となっている。オキナワトタテグモなどを含め、今後、検討の必要がある。

比較的明るい場所の地中に管状の住居を造る。住居は主に縦穴で、穴の深さは 5 ~7 cm と浅い。また、入口となる管の先端部の縁に片開きの扉を形成する。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州に分布し、現時点での分布の北限は山形県である。県内では東部、中部、西部と熱海市初島の記録がある。

## 3. 生息環境

林床、崖地、人家や社寺の庭などに生息する。

## 4. 生息状況

確認されている生息地点数が少なく特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

里山や社寺といった環境に開発 (23) の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周りの森林や草むらの開発 (11、16) により、餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少圧の影響を受けやすい一因となっている。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる里山、社寺のような昔ながらの環境の保全が第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

## 7. 特記事項

繁殖時以外は巣 (住居) の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

特定の環境に偏り生息密度も低く、巣がみつけにくいいため発見しづらい。県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

## 8. 主な文献

細田昭博 (2012) 静岡県のトタテグモ類. 遠州の自然, (35): 1-7

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. Kishidaia, 80: 141-150

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

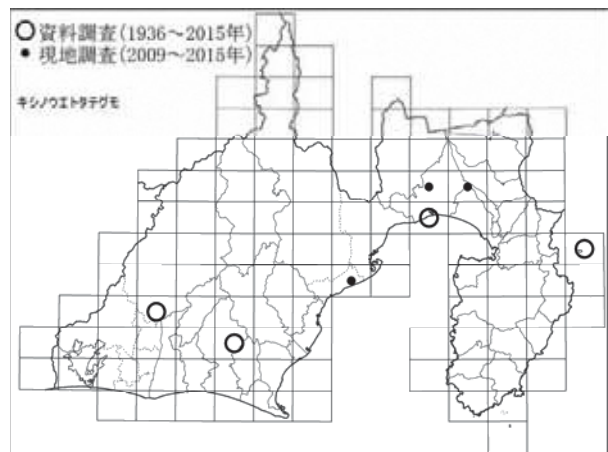
## 9. 標本

駿東郡長泉町産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



富士市岩本山公園 2016年8月25日 谷川明男



# キノボリトタテグモ *Conothele fragaria* (Dönitz, 1887)

トタテグモ科 Ctenizidae

静岡県カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) (要件-b)

[環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

## 1. 種の解説

体長メス 10~12 mm、オス 8~10 mm である。体は黒色または暗紫色で、腹部背面に斑紋がない。本種の住居は特徴的で、大木の樹皮や苔むした岩の上などの表面に造り擬装する。住居で容易にカネコトタテグモやキシノウエトタテグモと区別できる。本種はこれまでにさまざまな和名が提唱されたため、ツクシトタテグモ、カミガタトタテグモなど異名を多く持つ。

岩の壁面や古木の樹皮のくぼみなどを利用し、長さ 2~3 cm の住居を造る。住居は円筒形の袋状で、表面に苔や樹皮を張り付け擬装し、入口は下向きで扉をつける。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、四国、九州、南西諸島、伊豆諸島、小笠原父島に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

神社や寺院、旧家の庭、古い公園、林道沿いなどにある太い樹木の表面、日の当たらない石垣、岩壁の表面のくぼみなどに生息する。

## 4. 生息状況

確認されている生息地点数が少なく特定の環境に偏り、生息地は狭く生息密度も低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

苔むした岩の壁面、古木の樹皮のある社寺が主な生息地であった。そういった場所の整備 (71) により、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周辺の開発 (23) による温度や湿度の変化、餌となる昆虫の減少という 2 次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。また、この種の生態が特殊で、空中飛行をせず分散能力の低いこと (71) も減少の一因となっている。

## 6. 保護対策

本種の主な生息環境となる社寺のような環境に過度な手を加えず、保全することが第一である。その際、生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる周辺的环境にも気を配る必要がある。特に、生息が確認された地域の優先的な保全はもちろん、生息しやすい環境の条件・特徴を詳しく調べることも重要である。

## 7. 特記事項

特定の環境に偏り密度も低く、巣が見つけにくいいため発見しづらい。県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

繁殖時以外は巣 (住居) の中で生活し、扉の近くに来る昆虫を捕らえ巣内に引きずり込む。この捕食方法のため、餌となる徘徊性昆虫の存在は不可欠である。

## 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

新海栄一 (2017) *ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版*. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

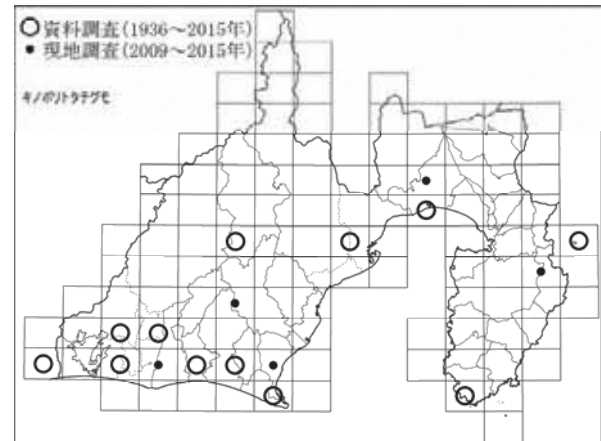
## 9. 標本

伊豆市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



磐田市府八幡宮 2016 年 8 月 1 日 谷川明男





### 1. 種の解説

体長メス 9.5~14 mm、オス 9~11 mm である。背甲は褐色で正中部と両側部は暗色となる。腹部上面は褐色（生時は暗褐色）で黒褐色の斑紋がある。本属は外雌器のキチン化が弱く中央部が膨らみ、オス触肢の基節に突起がなく側杯葉が発達するという特徴をもつ。しかし、本種は雌雄生殖器の構造だけではなく、色彩斑紋により容易に他種から見分けることができる。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。県内では東部で記録がある。

### 3. 生息環境

洞窟内か、それに似た洞窟外の薄暗い岩場の間隙などに生息している。洞窟では岩場の天井や壁面に円網を張る。

### 4. 生息状況

本種を対象とした調査は十分に行われていないため、現在の生息状況は不明である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。洞窟内の環境変化（18）だけではなく、洞窟外の開発（11、23）による洞窟内の温度や湿度の小さな変化も、この種の減少の脅威となる。このことから、洞窟内の温度、湿度が変化する可能性のある地球温暖化（71）も、減少の一因になりうる。

### 6. 保護対策

本種は各地の洞窟、またはそれに似た環境に偏り生息する。しかし、分布が広いため絶滅への意識が弱くなりがちである。生息環境の保全はもちろんであるが、環境の変化を受けやすいため、洞窟内だけではなくその周辺の開発の際にも、細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

生息環境が特殊であること、分布が偏り生息密度も低いことから、発見、採集しづらく、県内の分布を明らかにするには調査の継続が必要である。

### 8. 主な文献

新海栄一（2017）ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版。文一総合出版、東京、407 pp.

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛。富士山西斜面学術調査報告書、pp. 120-145、建設省中部建設局富士砂防工事事務所。

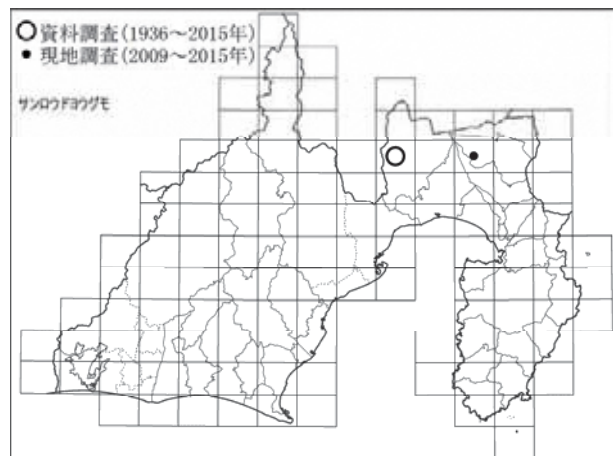
### 9. 標本

富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



富士市浅黄塚 2016年7月20日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 20~30 mm、オス 5~7 mm である。メスの背甲は暗褐色で銀色の毛が多数生えている。腹部上面には黄色と褐色の幅の広い縞模様があり特徴的で、一般的なクモの代表として良く知られている。オスの背甲は褐色で、腹部上面は褐色で暗褐色の斑紋がある。

草原や林縁の草間、小川の草むらや水田の稲の間に垂直円網を張る。

### 2. 分布

国外では台湾、韓国、中国に、国内では本州、四国、九州、伊豆諸島、南西諸島など、日本各地に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

郊外の人家の周辺、樹林地の周辺、水田、河原、草原などの日当たりの良い樹間、草間に生息する。

### 4. 生息状況

南方系のクモで本州中部以南では数が多く、以前は普通に見られた種であるが、近年見かける機会が減り個体数は激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

草原や林といった昔は良く見られた自然環境に開発 (23) の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させている。また、その生息環境、生態により人の目につきやすく、その見た目などさまざまな理由から除去・駆除 (41) が行われる場合も多い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる草原や林のような環境の保全が第一である。それが、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、人的な除去・駆除を防止していくために、生物天敵としての価値についての啓発を行うことも必要と考えられる。

### 7. 特記事項

クモはいつも網の中央にいて、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食する。そのため、本種の生態は、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

### 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. Kishidaia, 80: 141-150

高島春雄 (1937) 春の蜘蛛 下田と天城. Acta Arachnol., 2: 128-130

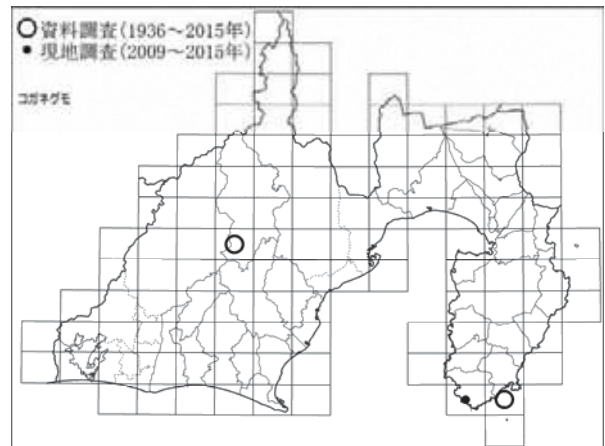
### 9. 標本

南伊豆町産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



©2019 A.Tanikawa  
賀茂郡南伊豆町 2016年8月9日 谷川明男



### 1. 種の解説

体長メス 20~30 mm、オス 15~20 mm である。背甲は明褐色からほぼ黒色まで色々である。腹部上面も明褐色からほぼ黒色まで差があり、緑色や白色を帯びる個体も見られるなど色彩変異が多い。腹部後半には葉状斑があり前方には肩突起がある。同属のヤエンオニグモ、ヤマオニグモと似るが、外雌器の交尾口の向き、オス触肢の亜端部突片の先端の形状で区別できる。

夜間に大型の垂直円網を張り網の中心にいるが、昼間は物陰に潜むという特徴的な生態をもつ。

### 2. 分布

国外では台湾、韓国、中国に、国内では小笠原諸島以外の日本全土に分布する。県内では伊豆、東部、中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

人家、神社、寺院などの建物の周囲に生息する。

### 4. 生息状況

人家付近から山地まで広範囲にさまざまな環境にすむクモで、以前は一般的によく見かけられたが、近年見かける機会が少なくなり個体数は激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

民家の建物構造の変化や市街地化 (71) により、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させている。また、その生息環境、生態により夜間でも人の目につきやすく、その見た目などさまざまな理由から除去・駆除 (41) が行われる場合も多い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境を奪う市街地化について考え、古い民家などの保全を行う必要がある。それは、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、人的な除去・駆除を防止していくために、生物天敵としての価値についての啓発を行うことも必要と考えられる。

### 7. 特記事項

本種は網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食するため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れや光なども関係しているようである。

### 8. 主な文献

池田博明 (2001) 東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

久米忠夫 (1961) 静岡県のクモ (1). *Atypus*, 21: 4-7

小野展嗣 (2006) 相模灘沿岸地域の海浜性クモ類. *国立科博専報*, 42: 255-274

新海栄一 (2017) *ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版*. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

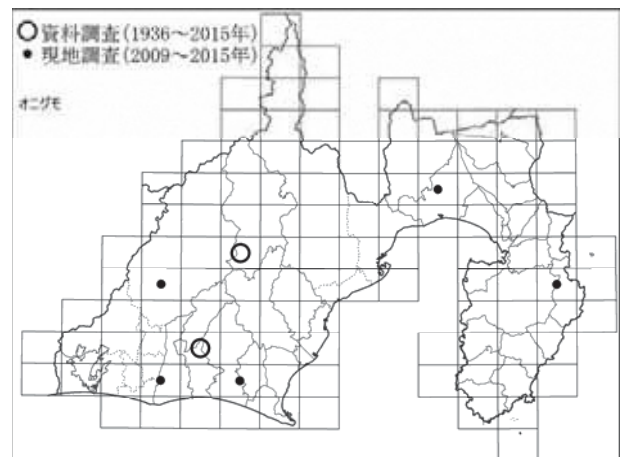
高島春雄 (1937) 秋の蜘蛛 下田と天城. *Acta Arachnol.*, 2: 27-32

### 9. 標本

伊豆市産ほか：個人所蔵 (公的機関の保管不明)



©2019 A.Tanikawa  
袋井市国本 2016年8月1日 谷川明男



(小林俊樹)



### 1. 種の解説

体長メス 12~18 mm、オス 9~10 mm である。背甲は黒褐色、腹部上面は黒褐色で黄色の斑紋があり、後半には葉状斑、前方には肩突起がある。生体では色彩斑紋により他種から見分けることができる。同属のイエオニグモと似るが、外雌器垂体にはしわがあり可動である点、オス触肢の杯葉は側面に位置し、端部突片とほぼ同大の亜端部突片をもつ点で区別できる。

### 2. 分布

国外では韓国、中国に分布し、国内では北海道、本州、四国、九州など、日本各地に分布する。県内では伊豆、中部、西部に分布する。

### 3. 生息環境

神社、寺院に多く見られ、建物の周囲、灯籠、鳥居、及び周辺の樹間に生息する。

### 4. 生息状況

以前は普通によく見かけられたが、近年姿を見ることが少なくなり激減している。

### 5. 減少の主要因と脅威

寺社周辺の自然環境に開発の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因である。一方で、生息環境が維持されても、その周辺の開発 (23) による餌となる昆虫の減少という二次的な影響も本種の減少の脅威になりうる。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる社寺のような人の手のあまり入らない環境の保全が第一である。それが生息場所だけでなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。

### 7. 特記事項

本種は、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食するため網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

### 8. 主な文献

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

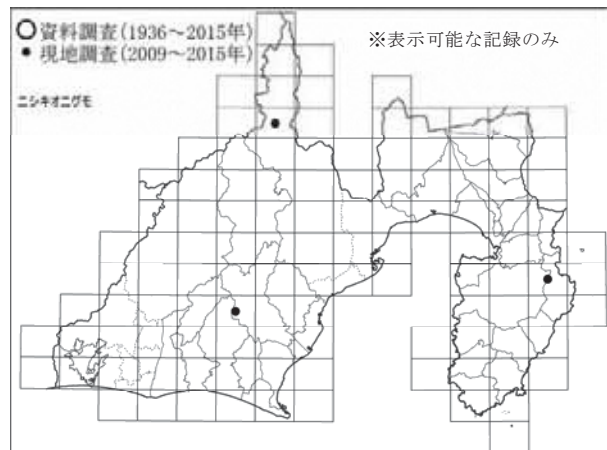
### 9. 標本

静岡市産ほか: 個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



東京都新島村式根島 2014年9月13日 谷川明男



# アケボノユウレイグモ *Belisana akebona* (Komatsu, 1961)

ユウレイグモ科 Pholcidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 2.0 mm 程度である。背甲は円形で暗黄色、頭部は胸部よりやや高い。オスの上顎の中央には親指状の突起がある。同科の他の属は主に 8 眼であるのに対し、本属は 6 眼で左右に 3 眼ずつ 2 群をなすのが特徴で、本種の後中眼は黒色である。腹部は卵形で灰黄色である。オス触肢附節の鉤状突起は淡褐色で、先端部に長い刺を有する。歩脚は淡黄色である。

## 2. 分布

日本固有種で、本州、九州に分布する。県内では東部、中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

溪流沿いの湿った崖地や岩の間などの薄暗いところに生息し、古い家屋の隅や古木の間隙などの暗い所でも確認される。他のユウレイグモと違い、洞内での生息は少ないようである。

## 4. 生息状況

県内に広く分布するが、どの生息地も生息密度は低いようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発（11、23、24）による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。また、住宅の近代化（生息場所となる薄暗い隙間のない住居）（71）などもこの種の減少の脅威となってきたと考えられる。

## 6. 保護対策

本種は、分布は広いが生息密度は低く、他の種に比べ絶滅への保護がしづらい状況であるといえる。生息環境の保全はもちろんであるが、同様の環境の調査により詳しい生息状況の把握が先決であるといえる。

## 7. 特記事項

生息環境が特殊であること、分布が偏り生息密度も低いため、発見・採集しづらく、県内の分布を明らかにするには、調査の継続が必要である。

## 8. 主な文献

池田博明（2001）東京蜘蛛談話会 2000 年度静岡県中川根町合宿報告. *Kishidaia*, 80: 141-150

小林久俊（1974）静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

八木沼健夫・西川嘉朗（1973）富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

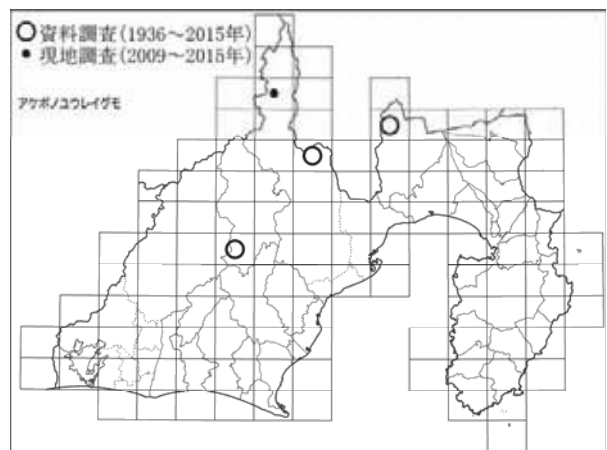
## 9. 標本

静岡県産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



©2019 A. Tanikawa  
埼玉県秩父市 2005 年 7 月 28 日 谷川明男



# カザアナマシラグモ *Falcileptoneta speciosa* (Komatsu, 1957)

マシラグモ科 Leptonetidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 2.2 mm 前後である。頭胸部は褐色、腹部は濁白色体であり、腹部背面には斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎の前牙堤に 7~9 歯がある。一般的に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節先端の突起は太く、根元に指状突起を伴う。

クモは通常網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

## 2. 分布

日本固有種で、長野県松本市安曇の風穴（かざあな）から知られ（基準産地）、県内では中部、西部に分布する。

## 3. 生息環境

洞窟や森林（落葉層）の間隙に不規則なシート網を張り生息する。

## 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化（18）を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱（51）ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、洞窟のような暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化（71）が減少の一因になる可能性がある。

## 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払い行う必要がある。

## 7. 特記事項

この科の種はその生息環境と、クモ類の分散を支える空中飛行を行わない分散能力の低さから種分化が進んでおり、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、洞窟に住む種は洞窟ごとに特化が見られるものが多く、洞窟及びその周辺にのみ分布する。

## 8. 主な文献

小野展嗣（2009）日本産クモ類。東海大学出版会，秦野，738 pp.

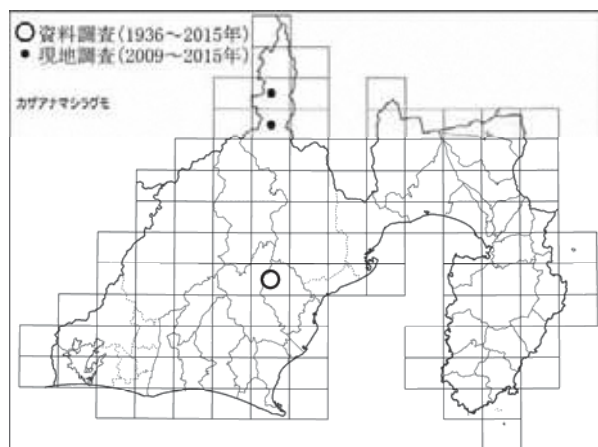
## 9. 標本

静岡市産ほか：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



藤枝市市之瀬産 2005年2月11日 小林久俊採集





# アベマシラグモ *Masirana abensis* (Kobayashi, 1973)

マシラグモ科 Leptonetidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長雌雄 1.8~2.0 mm である。体は淡色。頭胸部は淡黄褐色、腹部は淡灰色で背面に斑がない。歩脚はきわめて細長く、歩脚式は 1, 4, 2, 3 である。上顎に多数の小さい牙堤歯を備える。一般的に、この科の分類は主にオス触肢器官の形質に基づいてなされ、本種の特徴はオス触肢の脛節先端に 1 本の刺状突起と、二叉で堅琴状の刺毛がある。

クモは通常網の上にいるが、小さな振動でも網を伝って間隙に逃げ込む。

## 2. 分布

日本固有種で、本州中部に分布する。県内では中部に分布する。

## 3. 生息環境

洞窟や森林の落葉層の間隙に不規則なシート網を張り生息する。

## 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に比較的多く生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発による環境の変化(11、24)を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱(51)ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く湿った涼しい環境を好むため、地球温暖化による洞窟内外の温度変化(71)が減少の一因になる可能性がある。

## 6. 保護対策

本種は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払い行う必要がある。

## 7. 特記事項

この科の種はその生息環境と、クモ類の分散を支える空中飛行を行わない分散能力の低さから種分化が進んでおり、種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。その中でも、特に淡色の体色を持ち、斑を欠くタイプで種分化が著しい。

静岡市の浅間神社は、本種の基準産地である。

## 8. 主な文献

Kobayashi, H. (1973) Two new spiders of the genus *Saltana* (Leptonetidae: Araneae) from Shizuoka Prefecture. *Acta Arachnol.*, 25: 1-9

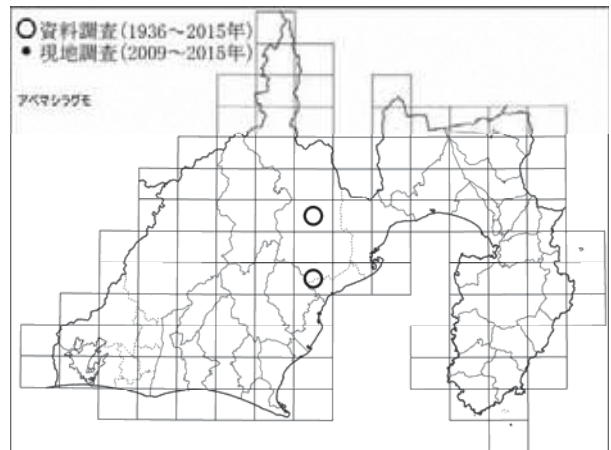
## 9. 標本

静岡市・藤枝市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

(小林俊樹)



藤枝市岡部町産 2005年1月30日 小林久俊採集



### 1. 種の解説

体長雌雄ともに 4.0 mm 前後の小型の種である。背甲は赤褐色で、腹部は象牙色で背面に斑がない。この属はそれぞれの地域で数種の組み合わせで生息し、体長、体色は重要な形質となる。その上で、この属の分類は主に雌雄生殖器の形質に基づいてなされ、本種はオス触肢の膝節突起上の 3 つの大きな歯と外雌器開口部より雲状の濃い部分が存在するのが特徴である。

同属他種では、林内の倒木や石の下、切り通しの崖地などに砂粒などで擬装されたトンネル状の住居(巣)を造るものが確認されている。しかし、本種の巣は不明である。

### 2. 分布

日本固有種で、県内では中部、西部に分布し、愛知県東部まで確認されている。

### 3. 生息環境

森林の落葉層や岩の間隙などの湿度のある地下浅層に生息する。

### 4. 生息状況

石や落葉の移動のない古い雑木林に生息するが、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発(11、23、24)による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱(51)ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度などの変化(71)が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種の生息地は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。どうしても開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、主に洞窟に住む種と洞外に住む種が存在し、本種は洞外にのみ分布する。

### 8. 主な文献

Kobayashi, T. (2006) Ten new species of the genus *Cybaeus* (Araneae: Cybaeidae) from central Honshu, Japan. *Acta Arachnol.*, 55(1): 29-44

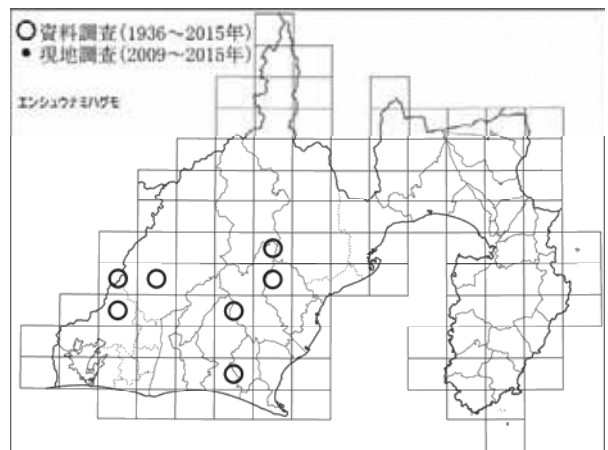
### 9. 標本

静岡市産ほか：個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



詳細不明 谷川明男



### 1. 種の解説

体長雌雄ともに 5.0 mm 前後の中～小型の種である。背甲、腹部はともに象牙色で腹部背面には斑がない。この属はそれぞれの地域で数種の組み合わせで生息し、体長、体色は重要な形質となる。その上で、この属の分類は主に雌雄生殖器の形質に基づいてなされ、本種はオス触肢の膝節上の 2 つの突起と下の突起上の歯、外雌器では開口部より縦に伸びる管と貯精嚢が確認できないのが特徴である。

### 2. 分布

日本固有種で、本州（静岡県・山梨県・長野県南部・愛知県北部）に分布する。県内では中部、東部に分布する。

### 3. 生息環境

森林の落葉層や岩の間隙などの湿度のある地下浅層に生息する。

### 4. 生息状況

山の奥深くで、石や落葉の移動のない古い雑木林に生息し、スギ林のような人間の手の入った環境での生息は稀である。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種の分布の狭さや特殊な生息環境、その生態を考えた際、小規模であっても開発（11、23、24）による環境の変化を大きく受け、減少につながると考えられる。人の侵入による地表の人為的な攪乱（51）ですら、この種の減少の脅威となる。また、今後の追跡調査が必要となるが、暗く涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度などの変化（71）が減少の一因になる可能性がある。

### 6. 保護対策

本種の生息地は人の手の入っていない環境、地域に限られているため、減少の主要因と考えられる開発をこの種の分布域に行わないことが望ましい。開発が必要な際には、生息環境、生態などに細心の注意を払う必要がある。

### 7. 特記事項

同属他種は、林内の倒木や石の下、切り通しの崖地などに砂粒などで擬装されたトンネル状の住居（巣）を造るのが確認されている。しかし、本種の巣は不明である。

この科の種は他の多くのクモ類が行う空中分散を行わないので、分散能力が低く種ごとの分布は非常に狭い範囲に限られる。また、主に洞窟に住む種と洞外に住む種が存在し、本種は洞外にのみ分布する。

### 8. 主な文献

Kobayashi, T. (2006) Ten new species of the genus *Cybaeus* (Araneae: Cybaeidae) from central Honshu, Japan. *Acta Arachnol.*, 55(1): 29-44

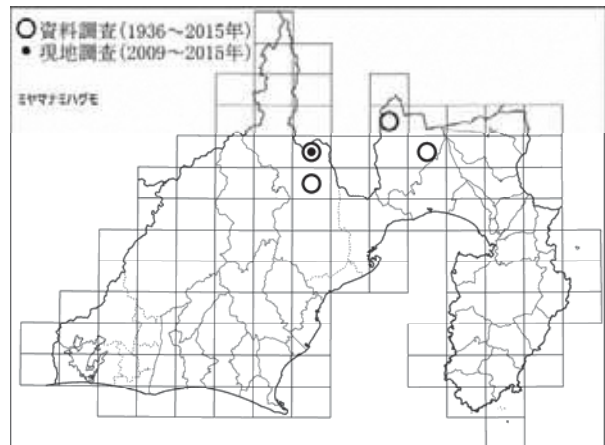
### 9. 標本

富士宮市・静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）

（小林俊樹）



富士宮市西白塚産 1995年7月14日 小林久俊採集





# イナズマクサグモ *Agelena labyrinthica* (Clerck, 1758)

タナグモ科 Agelenidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長 12.0~16.0 mm で、オスはやや小さい。背甲は黄褐色ないし灰褐色で、1 対の黒褐色の側条がある。腹部は淡褐色か灰褐色の地に 1 対の黒褐色の縦条があり、その上にさらに 5~6 対の棒状の白斑が重なる。外見はクサグモとよく似るが、種の分類に重要となる外雌器の陥入部は横長で前部にあり、オス触肢の栓子は板状で短い。

丈の低い下草、枝間に造網し、網はクサグモのものより小さい。網の形は管状（漏斗状）の住居をもつ棚網である。

## 2. 分布

国外では旧北区から広く知られ、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。本種は北方系の種であり、本州高地及び北海道には広く分布するが、その他の地域及び本州の平地では局地的に分布する。県内では東部、伊豆に分布する。

## 3. 生息環境

北方系の種で涼しい環境を好み、北海道以外は主に高地に生息し、主に 1,000 m 以上の高原に生息すると考えられてきた。最近では、海岸地域での生息も明らかになっている。

## 4. 生息状況

主に高地での生息が確認されており、生息地での生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

開発 (23) によって、生息環境が減少したことが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少を加速させている。また、高地などの涼しい環境での生息確認が多いため、地球温暖化による温度変化 (71) が減少の一因になる可能性もある。

## 6. 保護対策

本種の生息環境の保全が第一である。それが、本種の生息場所だけではなく、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本属の基準種である。普段は管状の住居内にいるが、昆虫などの獲物が網にかかった振動で駆けつけ、ラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも本種の生態には関係があると考えられる。

海岸地域での生息が最近、明らかになってきたが、本県での生息状況や保護対策などに関しては、今後、調査により詳細な状況の把握が必要である。

## 8. 主な文献

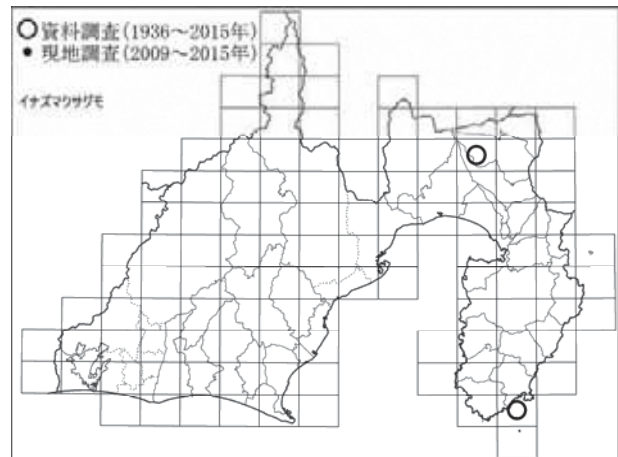
Tanikawa, A. (2005) Japanese spiders of the genus *Agelena* (Araneae: Agelenidae). *Acta Arachnol.*, 54: 23-30

## 9. 標本

富士市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



北海道千歳市 2016年7月23日 谷川明男



(小林俊樹)

# エゾコモリグモ *Pardosa koponeni* Nadolny, Omelko, Marusik & Blagoev, 2016

コモリグモ科 Lycosidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 4.5~8.6 mm、オス 4.6~5.9 mm である。背甲は、メスは赤褐色、オスは黒褐色、正中斑上に銀白色の多数の軟毛が目立つ。額、下顎、下唇、胸板は暗褐色。腹部上面は淡黄褐色で暗褐色の不規則斑がある。脚は、メスは赤褐色、オスは基節から腿節は黒色、他は淡黄色、明瞭な環斑が腿節から脛節にかけて見られる。外雌器のいかり状中央隔壁、オス触肢の細長い刀状中部把持器が特徴である。

比較的乾燥した環境に生息し、6月中旬から8月上旬にメスは扁平で淡黄色の卵囊を腹部末端に付着させ持ち歩く。また、子グモが孵化後も、腹部に乗せ保護することが知られている。

## 2. 分布

本種は北方系の種で、国外ではロシア、中国、韓国に、国内では北海道、本州（和歌山県まで）に分布する。県内では東部、中部に分布する。

## 3. 生息環境

高原や山地の牧場などの草原、針葉樹林に生息する。

## 4. 生息状況

地表や落葉上に多数生息していて、地表の枯れ葉の上や草間を徘徊する。

## 5. 減少の主要因と脅威

高原や山地の自然環境に開発（11、16、23）の手が加わる、牧場などのあり方が変化（71）することで生息環境が減少することが主要因である。生息環境だけではなく、同時に餌となる徘徊性昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種であり高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化（71）が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる自然環境の保全が第一である。それが同時に、餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

餌となる徘徊性昆虫を待ち伏せして捕獲するとされている。

## 8. 主な文献

久米忠夫（1962）静岡県のクモ(2). *Atypus*, 25: 18-21

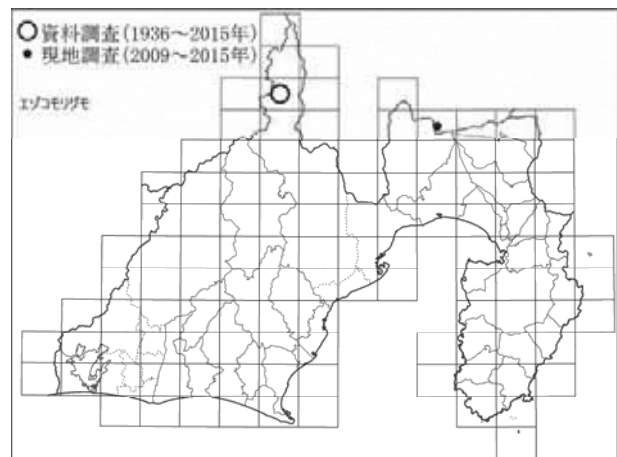
Nadolny A. A., M. M. Omelko, Y. M. Marusik & G. Blagoev (2016) A new species of spider belonging to the *Pardosa* lugubris-group (Araneae: Lycosidae) from Far East Asia. *Zootaxa*, 4072(2): 263-281

## 9. 標本

富士宮市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



北海道千歳市 2016年7月23日 谷川明男



(小林俊樹)

### 1. 種の解説

体長雌雄 3.5~5.0 mm である。背甲は、メスは淡黄褐色、オスは黄褐色で縁は黒い。胸部の正中に黒色縦条がある。歩脚は黄褐色で、オスでは褐色みが強い。腿節末端と脛節に環斑をもつ。腹部背面は乳白色または淡黄褐色で、2~4 対の黒点が並ぶ。外雌器の垂体は短く、オス触肢の腿節長が膝節長の3倍以上、脛節長は膝節長の約2倍であるのが特徴である。

### 2. 分布

国外では韓国、極東ロシアに、国内では北海道、本州、四国まで分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州及び四国では高地にのみ生息する。県内では東部、中部に分布する。

### 3. 生息環境

山地から亜高山帯にかけての、ササや林内の草間などに生息する。

### 4. 生息状況

標高の高いところに限られるが、生息数は多い。

### 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

### 8. 主な文献

小林久俊(1974) 静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

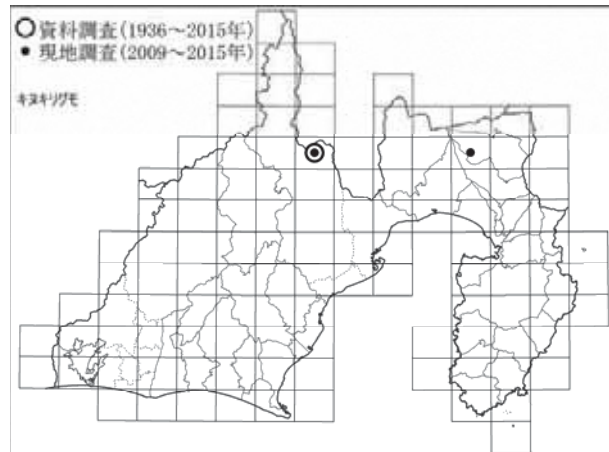
新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

富士市・静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



©2019 A.Tanikawa  
栃木県黒磯市 2002年7月20日 谷川明男



(小林俊樹)



### 1. 種の解説

体長メス 4.1~5.7 mm、オス 3.9~5.2 mm である。体色が全体的に明るい黄褐色であり、また上顎や歩脚が長いことにより、本属の他種と容易に区別ができる。腹部は長い卵形で幅と高さは同じであり、オスはメスより細長い。外雌器は中央に丸い突起があり、中隔はなく、オス触肢は栓子が短く、盾板把持器は卵形で小さい。

草の間などに不規則網を張る。産卵期には草を丸めて住居を造り、その中で卵嚢を保護する。

### 2. 分布

国外では韓国、中国、ロシア（サハリン、シベリア）に、国内では北海道、本州に広く分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では主に高地に生息する。県内では中部に分布する。

### 3. 生息環境

高地の、草原、樹林地の周辺、林道沿いなどに生息する。

### 4. 生息状況

生息地は高地に限られ、生息密度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

高原の自然環境に開発（11、23、24）の手が加わり、生息環境が減少することが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高原など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化（71）が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高原の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

### 8. 主な文献

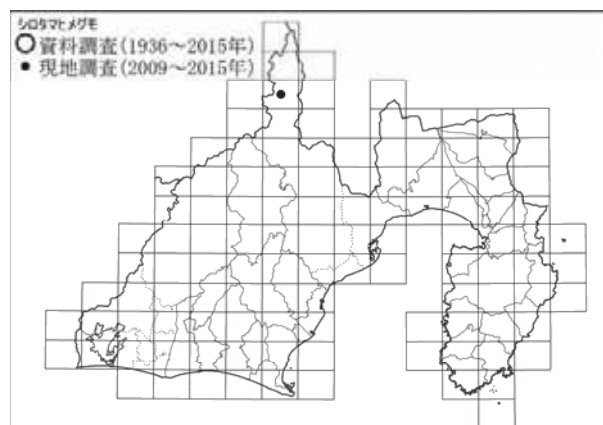
新海栄一（2017）ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

静岡市産：個人所蔵（公的機関の保管不明）



北海道千歳市 2016年4月23日 谷川明男



(小林俊樹)

### 1. 種の解説

体長メス 2.0~2.8 mm、オス 2.1~2.6 mm である。背甲は、卵形で扁平。腹部は、メスは球状、オスは細長く、色彩は変化に富む。外雌器は 1 対の開口部を持ち、輸卵管はその近くで 3 回巻き、受精囊近くで長くなる。オス触肢の盾板把持器は楕円形の突起となり中央部はへこみ、指示器は楕円形の突起となる。

樹木の枝葉に不規則網を張る。

### 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州に広く分布する。北海道では平地でも見られるが、本州では主に高地に生息する。県内では東部、中部に分布する。

### 3. 生息環境

高地の樹林地周辺、林道・溪流沿いなどに生息する。

### 4. 生息状況

生息地は高地に限られ、生息密度は低い。

### 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発 (11、23、24) の手が加わり、生息環境が減少することが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという 2 次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地などの涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化 (71) が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

本種は普通、葉裏に静止していることが多いので、網に気付かないことがある。小さな飛翔性昆虫などを餌としている。

### 8. 主な文献

小林久俊 (1974) 静岡県梅ヶ島温泉のクモについて. *Atypus*, 62: 41-49

新海栄一 (2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

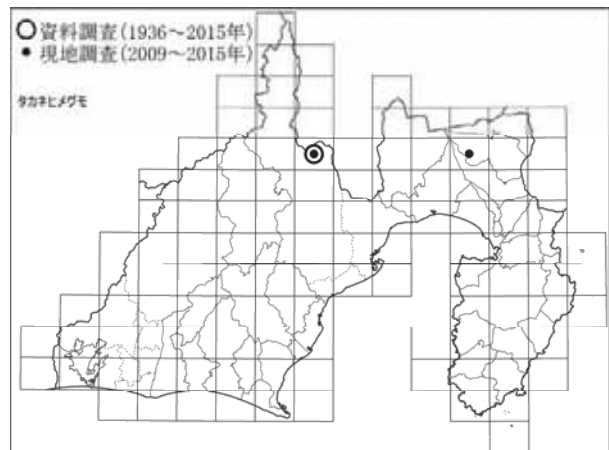
### 9. 標本

富士市・静岡市産：個人所蔵 (公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



山形県小国町 2014 年 6 月 21 日 谷川明男



# ミドリアシナガグモ *Tetragnatha pinicola* L. Koch, 1870

アシナガグモ科 Tetragnathidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 6.5~9.5 mm、オス 4.5~8.0 mm である。本種は同属のハラビロアシナガグモに似るが、本種の腹部上面後方には対になる黒点があることによって、およその見分けができる。詳しくはオス触肢の指示器の先端の形態、メスの上顎上面の牙堤歯の状態等で同定が可能である。

## 2. 分布

全北区に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州まで広く分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州及び四国、九州では高地にのみ分布する。県内では東部、中部に分布する。

## 3. 生息環境

樹林地、草原、河原、林道などの樹木の間、草間に生息する。

## 4. 生息状況

山地から亜高山帯の高地に限られるが、生息地では多数生息している。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種はいつも網の中央にいて、網にかかった昆虫などの獲物をラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

## 8. 主な文献

新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

八木沼健夫・西川嘉朗(1973) 富士山の蜘蛛. 富士山西斜面学術調査報告書, pp. 120-145, 建設省中部建設局富士砂防工事事務所.

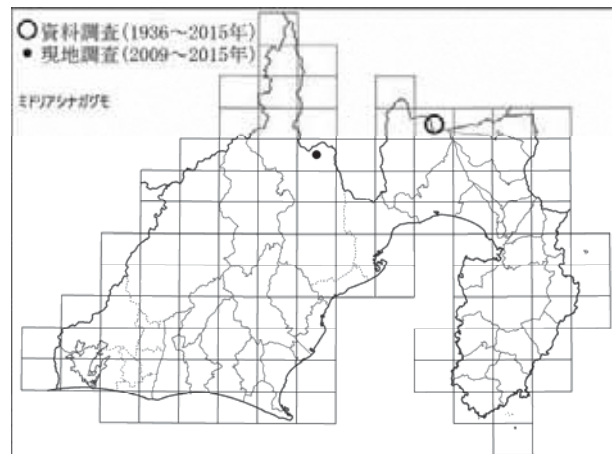
## 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)

(小林俊樹)



詳細不明 谷川明男





# ヤマキレアミグモ *Zygiella disper* (Kulczyński, 1885)

コガネグモ科 Araneidae

静岡県カテゴリー 要注目種(N-II 分布上注目種等)

[環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

体長メス 4.0~6.5 mm、オス 4.5~5.5 mm である。背甲は淡褐色で、頭部は黒褐色である。腹部上面は褐色で黒褐色の弱い葉状斑があり、正中部と葉状斑の外側は白色を帯びる。色彩、斑紋の様子はタイリクキレアミグモときわめてよく似るが、オス触肢の強くキチン化した突片、外雌器の左右にあまり離れない開口が、本種の特徴である。

## 2. 分布

日本固有種で、北海道、本州に分布する。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では山地にのみ生息する。県内では東部に分布する。

## 3. 生息環境

山地から亜高山帯の高地の山小屋、廃屋、岩場などに生息する。生息地周辺の自然環境の変化(湿度、温度など)にも、影響を受けやすい。

## 4. 生息状況

高地に限られ、生息密度は低い。

## 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという二次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化が減少の一因になる可能性が高い。

## 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

## 7. 特記事項

本種の張る垂直円網は隠れ家となる方向の2区画に横糸のない切れ網である。本種はその一端に潜み、網にかかった昆虫をラッピングして捕食する。そのため、網にかかりやすい飛翔性昆虫の生態とも本種の生態は関係が深く、造網には風の流れなども関係しているようである。

## 8. 主な文献

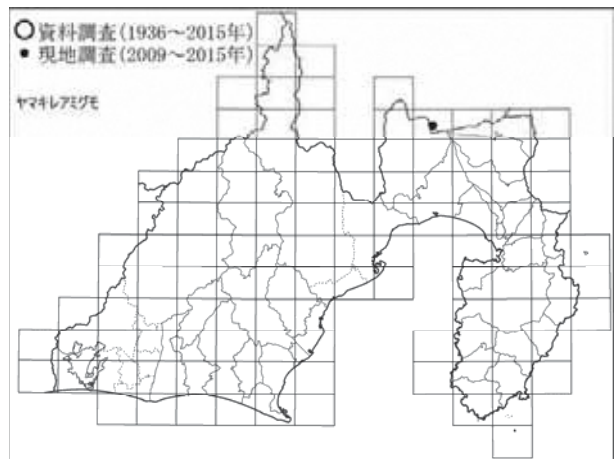
新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

## 9. 標本

富士宮市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



北海道然別湖 2003年8月21日 谷川明男



(小林俊樹)

### 1. 種の解説

体長メス 3.0~4.4 mm、オス 2.4~3.5 mm である。背甲は黒褐色で、中央部はやや明るい。腹部背面は淡褐色か黄白色の地に数対の褐色斑があるが、色彩、斑紋に個体変異が多い。オス触肢の脛節の後側面突起は刺状、腹面突起は指状で先端はやや曲がり、栓子は刺状で非常に短い。外雌器の板状体は非常に小さく、導管は短く、受精嚢は球形である。

### 2. 分布

国外ではネパールから東アジアの山岳地域に広く、国内では北海道、本州に分布している。本種は北方系の種であり、北海道では平地でも見られるが、本州では山地にのみ分布する。県内では中部、東部に分布する。

### 3. 生息環境

山地から亜高山帯の草原、樹林地の周辺、林道などの草間や樹木の枝葉間、花の中や下面に生息する。

### 4. 生息状況

高地に限られるが、生息地では草間や樹枝葉間の葉裏などに多数生息している。

### 5. 減少の主要因と脅威

高地の自然環境に開発(11、23、24)の手が加わり、生息環境が減少したことが主要因となる。生息環境だけではなく、同時に餌となる昆虫が減少するという2次的な影響も本種の減少を加速させる。また、北方系種の特徴である高地など涼しい環境を好むため、地球温暖化による温度変化(71)が減少の一因になる可能性が高い。

### 6. 保護対策

本種の生息環境となる再生がしにくい高地の自然環境の保全が第一である。それが、本種の餌となる昆虫などの供給地となる環境も守ることにつながっていく。また、間接的で別角度となるが、地球温暖化に対する世界規模の対策も本種の保護には必要である。

### 7. 特記事項

本種は歩脚を開いて獲物を待ち、徘徊性昆虫や飛翔性昆虫を待ち伏せして捕獲するとされている。そのため、餌となる昆虫の生態とも本種の生態は関係があるようである。

### 8. 主な文献

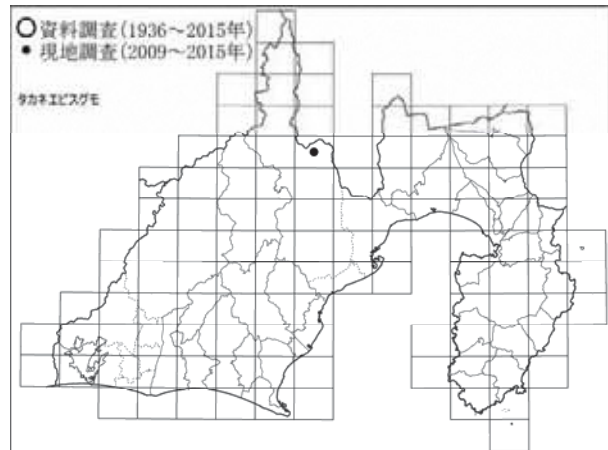
新海栄一(2017) ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版. 文一総合出版, 東京, 407 pp.

### 9. 標本

静岡市産: 個人所蔵(公的機関の保管不明)



詳細不明 谷川明男



(小林俊樹)

調査協力、写真等提供者

調査協力

分類群	氏名
鳥類	今井 敦、河合征彦、小岸順子、木部裕正、小泉金次、武田由紀夫、宮本勝海、望月英夫、山田久子、渡辺義昭、渡部良樹
両生類	森 繁雄
淡水魚類	朝倉俊治、足立京子、大貫貴清、小杉正則、後藤昌徳、近藤多美子、匂坂三十七、佐藤孝幸、佐藤大輔、佐藤拓哉、高見宗広、戸田三津夫、野澤利治、畠山悠佑、藤田美沙子、向井貴彦、綿野好則、麻機湿原を保全する会
昆虫類	和田一郎
クモ類	石川 均

写真等提供者

分類群	氏名
哺乳類	石川 均、大沢夕志、小泉金次、佐々木彰央、佐藤元一、伴野正志、三宅 隆、静岡県森林・林業研究センター、裾野市立富士山資料館
鳥類	新井 真、伊久美隆、小岸順子、小岸宣夫、大杉正也、川合正晃、北川捷康、酒井洋平、中村裕志、峰岸郁生、望月英夫、渡邊修治、公益財団法人日本野鳥の会
爬虫類	加藤英明、加藤健一、山本明男、國領康弘
両生類	石川 均、江頭幸士郎、加藤健一、國領康弘、小長谷尚弘、佐々木彰央、富永 篤
淡水魚類	加藤健一、金川直幸、川嶋尚正、北原佳郎、後藤裕康、小杉正則、渋川浩一、杉浦正義、鈴木邦弘、森口宏明、山田辰美
昆虫類	朝倉俊治、天野市郎、飯森政宏、石川 均、池谷 正、板倉 博、稲葉 茂、宇式和輝、浦山幸夫、枝 恵太郎、抱井 澄、加須屋 真、加藤 徹、岸田泰則、北野 忠、小林國彦、小松庄次郎、古山 暁、酒井孝明、杉浦正義、鈴木英文、諏訪哲夫、関川文俊、長谷川道明、高橋真弓、田形和弘、谷川久男、多比良嘉晃、福井順治、二橋 亮、細田昭博、前波鉄也、水田啓之、宮下哲夫
陸・淡水産貝類	加藤 徹、石川 均、佐藤拓也
クモ類	石川 均、小林久俊、谷川明男



## レッドリスト 2017 公表からの訂正と変更

レッドリスト公表（2017 年 10 月）から、本書発刊までの生息情報の追加や検討により、一部変更や訂正が必要となった。以下に変更及び訂正事項を示す。

### カテゴリーの変更

分類群名	レッドリスト（2017 年 10 月）	本書改訂〔変更理由〕	変更事項
淡水魚類	アカザ 地域別カテゴリー 中部 絶滅危惧 I B 類 (EN)	地域別カテゴリー 中部 EN/★ 〔中部地域の河川で人為的に導入された個体群の存在が示唆された。〕	天然分布域への 移入あり、追加
	チワラスボ属の 1 種 C 地域別カテゴリー 伊豆 なし	地域別カテゴリー 伊豆 EN 〔伊豆地域での記録があるため〕	
	イセゴイ 地域別カテゴリー 伊豆 なし	地域別カテゴリー 伊豆 N-III 〔伊豆地域での記録があるため〕	
	オオウナギ 地域別カテゴリー 東部 N-III	地域別カテゴリー 東部 なし 〔東部地域での記録がないため〕	
昆虫類	クチナガコオロギ 情報不足 (DD)	準絶滅危惧 (NT) 〔生息確認のできない産地があるため〕	ランクの訂正
	ダイコクコガネ 要注目種 (N-I 現状不明)	情報不足 (DD) 〔近年、採集記録が確認された。〕	ランクダウン
	ジャアナヒラタゴミムシ 要注目種 (N-III 部会注目種)	リスト外 〔本年度資料調査により本県での記録がないと判断された。〕	削除

記載事項の訂正・変更

分類群名	レッドリスト (2017年10月)	本書改訂	訂正・変更事項
哺乳類	オオカミ <i>Canis lupus</i> Linnaeus, 1758	ニホンオオカミ <i>Canis lupus hodophilax</i> Temminck, 1839	種名、学名
	ニホンカワウソ <i>Lutra lutra</i> (Linnaeus, 1758)	ニホンカワウソ <i>Lutra lutra nippon</i> (Imaizumi & Yoshiyuki, 1989)	学名
	ミズラモグラ <i>Euroscaptor mizura</i> (Günther, 1880)	ミズラモグラ <i>Oreosceptor mizura</i> (Günther, 1880)	学名
	ニホンザル 伊豆・熱海地域の個体群	ニホンザル 伊豆・愛鷹・熱海地域の個体群	地域個体群名
両生類	ヒダサンショウウオ <i>Hynobius kimurae</i> Dunn, 1923	ヒガシヒダサンショウウオ <i>Hynobius fossigenus</i> Okamiya, Sugawara, Nagano & Poyrkov, 2018	種名、学名
昆虫類	ハマスズ ヒバリモドキ科	ハマスズ コオロギ科	科名
クモ類	フジホラヒメグモ <i>Nesticus uenoi</i> Yaginuma, 1972	フジホラヒメグモ <i>Speleoticus uenoi</i> (Yaginuma, 1972)	学名
	ワスレナグモ ワスレナグモ科	ワスレナグモ ジグモ科	科名
	アケボノユウレイグモ <i>Spermophora akebona</i> (Komatsu, 1961)	アケボノユウレイグモ <i>Belisana akebona</i> (Komatsu, 1961)	学名
	エゾコモリグモ <i>Pardosa lugubris</i> (Walckenaer, 1802)	エゾコモリグモ <i>Pardosa kaponeni</i> Nadolny, Omelko, Marusik & Blagoev, 2016	学名
	ヤマキレアミグモ <i>Parazygiella disper</i> (Kulczyński, 1885)	ヤマキレアミグモ <i>Zygiella disper</i> (Kulczyński, 1885)	学名
	タカネエビスグモ <i>Lysiteles maius</i> Ono, 1979	タカネエビスグモ <i>Lysiteles maior</i> Ono, 1979	学名





# 和名索引・環境省カテゴリー対照表

カテゴリー EX : 絶滅 VU : 絶滅危惧 類 N - : 要注目種 現状不明  
 CR : 絶滅危惧 A 類 NT : 準絶滅危惧 N - : 要注目種 分布上注目種等  
 EN : 絶滅危惧 B 類 DD : 情報不足 N - : 要注目種 部会注目種  
 CR+EN : 絶滅危惧 類 LP : 絶滅のおそれのある地域個体群

哺乳類	(静岡県) (環境省)	ウズラ	(VU) [VU] ……	94
アズミトガリネズミ	(NT) [NT] ……	ウズラシギ	(VU) [なし] ……	108
オヒキコウモリ(伊東の個体群)	(LP) [VU] ……	ウチヤマセンニユウ	(VU) [EN] ……	121
カグヤコウモリ	(DD) [なし] ……	オオアカゲラ	(NT) [なし] ……	136
カヤネズミ	(NT) [なし] ……	オオコノハズク	(DD) [なし] ……	140
カワネズミ	(NT) [なし] ……	オオジシギ	(N- ) [NT] ……	143
キクガシラコウモリ	(NT) [なし] ……	オオセッカ	(EN) [EN] ……	92
クビワコウモリ	(VU) [VU] ……	オオソリハシシギ	(VU) [VU] ……	100
クロホオヒゲコウモリ	(DD) [VU] ……	オオタカ	(NT) [NT] ……	133
コキクガシラコウモリ	(NT) [なし] ……	オオハシシギ	(N- ) [なし] ……	144
コテングコウモリ	(DD) [なし] ……	オオワシ	(N- ) [VU] ……	145
チチブコウモリ	(VU) [LP] ……	オグロシギ	(VU) [なし] ……	99
ツキノワグマ(富士地域の個体群)	(LP) [なし] ……	オジロトウネン	(VU) [なし] ……	106
テングコウモリ	(DD) [なし] ……	オジロワシ	(EN) [VU] ……	85
ニホンウサギコウモリ	(DD) [なし] ……	カンムリウミスズメ	(CR) [VU] ……	74
ニホンオオカミ	(EX) [EX] ……	キリアイ	(VU) [なし] ……	110
ニホンカワウソ	(EX) [EX] ……	クイナ	(NT) [なし] ……	128
ニホンザル(伊豆、愛鷹、熱海地域の個体群)	(LP) [なし] ……	クマタカ	(VU) [EN] ……	115
ニホンモモンガ	(DD) [なし] ……	コアアアシシギ	(VU) [なし] ……	104
ニホンリス	(N- ) [なし] ……	コアジサシ	(EN) [VU] ……	84
ノレンコウモリ	(VU) [VU] ……	ゴイサギ	(N- ) [なし] ……	148
ハタネズミ	(N- ) [なし] ……	コサメビタキ	(VU) [なし] ……	123
ヒナコウモリ	(DD) [なし] ……	コシアカツバメ	(VU) [なし] ……	119
ヒメホオヒゲコウモリ	(N- ) [なし] ……	コジュリン	(VU) [VU] ……	124
ホンドオコジョ	(DD) [NT] ……	コチョウゲンボウ	(N- ) [なし] ……	150
ミズラモグラ	(DD) [NT] ……	コノハズク	(EN) [なし] ……	87
ムササビ	(NT) [なし] ……	コミズク	(EN) [なし] ……	88
モモジロコウモリ	(NT) [なし] ……	ササゴイ	(EN) [なし] ……	82
モリアブラコウモリ	(DD) [VU] ……	サシバ	(VU) [VU] ……	114
ヤマコウモリ	(DD) [VU] ……	サンカノゴイ	(EN) [EN] ……	79
ヤマネ	(DD) [なし] ……	サンコウチョウ	(NT) [なし] ……	137
ユビナガコウモリ	(NT) [なし] ……	サンショウクイ	(EN) [VU] ……	91
鳥類		シノリガモ	(NT) [LP] ……	126
アオバズク	(VU) [なし] ……	シロチドリ	(VU) [VU] ……	98
アカアシシギ	(VU) [VU] ……	セイタカシギ	(NT) [VU] ……	131
アカコッコ	(DD) [EN] ……	ダイシャクシギ	(VU) [なし] ……	101
アカショウビン	(VU) [なし] ……	タカブシギ	(VU) [VU] ……	105
アカモズ	(CR) [EN] ……	タゲリ	(NT) [なし] ……	129
アリスイ	(NT) [なし] ……	タマシギ	(VU) [VU] ……	111
イジマムシクイ	(VU) [VU] ……	チゴモズ	(CR) [CR] ……	77
イカルチドリ	(NT) [なし] ……	チュウヒ	(EN) [EN] ……	86
イヌワシ	(CR) [EN] ……	ツルシギ	(EN) [VU] ……	83
		トモエガモ	(VU) [VU] ……	95
		トラフズク	(DD) [なし] ……	141
		ノビタキ	(N- ) [なし] ……	147
		ハイイロチュウヒ	(N- ) [なし] ……	146

ハイタカ	(VU)	(NT)	113
ハチクマ	(VU)	(NT)	112
ハマシギ	(VU)	(NT)	109
ハヤブサ	(VU)	(VU)	118
ヒクイナ	(VU)	(NT)	96
ヒバリシギ	(VU)	[なし]	107
フクロウ	(NT)	[なし]	134
ブッポウソウ	(CR)	(EN)	76
ヘラシギ	(CR)	(CR)	73
ホウロクシギ	(VU)	(VU)	102
マジロ	(VU)	[なし]	122
ミコアイサ	(NT)	[なし]	127
ミサゴ	(N- )	(NT)	149
ミゾゴイ	(EN)	(VU)	81
ミヤマホオジロ	(NT)	[なし]	138
ミュビシギ	(NT)	[なし]	132
ヤイロチョウ	(EN)	(EN)	90
ヤマシギ	(DD)	[なし]	139
ヤマセミ	(EN)	[なし]	89
ヤマドリ	(NT)	[なし]	125
ヨシゴイ	(EN)	(NT)	80
ヨタカ	(VU)	(NT)	97
ライチョウ	(VU)	(EN)	93

#### 爬虫類

アカウミガメ	(CR)	(EN)	153
オカダトカゲ	(N- )	[なし]	158
クサガメ	(N- )	[なし]	159
シロマダラ	(DD)	[なし]	156
ニホンイシガメ	(NT)	(NT)	154
ニホンスッポン	(DD)	(DD)	155
ニホンヤモリ	(N- )	[なし]	160
ヒガシニホントカゲ	(N- )	[なし]	157

#### 両生類

アカイシサンショウウオ	(CR)	(EN)	163
アカハライモリ中部日本系統	(NT)	(NT)	168
アカハライモリ南伊豆集団	(LP)	(NT)	174
アズマヒキガエル	(N- )	[なし]	175
カジカガエル	(NT)	[なし]	171
タゴガエル	(N- )	[なし]	176
ツチガエル	(NT)	[なし]	170
トノサマガエル	(NT)	(NT)	169
ナガレタゴガエル	(DD)	[なし]	173
ナゴヤダルマガエル	(CR)	(EN)	164
ニホンアカガエル	(VU)	[なし]	167
ネバタゴガエル	(N- )	[なし]	177
ハコネサンショウウオ	(VU)	[なし]	166
ヒガシヒダサンショウウオ	(VU)	(NT)	165
モリアオガエル	(NT)	[なし]	172

#### 淡水魚類

アカザ	(EN)	(VU)	195
アカメ	(N- )	[なし]	222
アブラボテ	(DD)	(NT)	206
アマゴ(サツキマス)	(VU)	(NT)	199

アユカケ(カマキリ)	(VU)	(VU)	201
イシカウシラウオ	(VU)	[なし]	198
イセゴイ(ハイレン)	(N- )	[なし]	216
イッセンヨウジ	(N- )	[なし]	221
イドミズハゼ類の1種	(CR)	(NT)	186
ウツセミカジカ	(VU)	(EN)	202
エドハゼ	(NT)	(VU)	205
オオウナギ	(N- )	[なし]	217
オオクチユゴイ	(N- )	[なし]	224
オカメハゼ	(N- )	[なし]	227
カジカ	(NT)	(NT)	204
カマヒレマツゲハゼ	(N- )	[なし]	229
カワアナゴ	(N- )	[なし]	228
カワバタモロコ	(CR)	(EN)	182
カワムツ	(N- )	[なし]	209
カワヨウジ	(N- )	[なし]	219
カワヨシノボリ	(N- )	[なし]	214
ガンテンイシヨウジ	(N- )	[なし]	218
クルメサヨリ	(DD)	(NT)	208
クロコハゼ	(N- )	[なし]	234
シロウオ	(CR)	(VU)	187
スナヤツメ北方種	(EN)	(VU)	189
スナヤツメ南方種	(EN)	(VU)	190
タカハヤ	(N- )	[なし]	210
タネハゼ	(N- )	[なし]	230
タモロコ	(N- )	[なし]	211
チチブモドキ	(N- )	[なし]	225
チワラスボ属の1種B	(EN)	(EN)	196
チワラスボ属の1種C	(EN)	(EN)	197
テングヨウジ	(N- )	[なし]	220
テングヨウジ	(N- )	[なし]	226
トウカイコガタスジシマドジョウ	(EN)	(EN)	192
トウカイナガレホトケドジョウ	(EN)	(EN)	194
ドジョウ	(DD)	(NT)	207
トビハゼ	(CR)	(NT)	188
ナガレミズハゼ	(CR)	(NT)	184
ナンヨウボウズハゼ	(N- )	[なし]	231
ニシシマドジョウ	(N- )	[なし]	212
ニホンウナギ	(EN)	(EN)	191
ノボリハゼ	(N- )	[なし]	232
ヒガシシマドジョウ	(N- )	[なし]	213
ヒナハゼ	(N- )	[なし]	233
ヒモハゼ	(VU)	(NT)	203
ビリンゴ	(N- )	[なし]	215
ホトケドジョウ	(EN)	(EN)	193
ミナミメダカ	(VU)	(VU)	200
ヤマトイワナ	(CR)	[なし]	183
ヤリタナゴ	(CR)	(NT)	181
ユウスイミズハゼ	(CR)	(NT)	185
ユゴイ	(N- )	[なし]	223

#### 昆虫類

アイヌハンミョウ	(N- )	(NT)	412
アオハダトンボ	(NT)	(NT)	303
アオバヒメコマツキモドキ	(DD)	[なし]	360

アオヤンマ	(VU)	(NT)	……	278	キイロサナエ	(EN)	(NT)	……	264
アカイシコバナヒナバタ	(N-)	[なし]	……	406	キイロヤマトンボ	(CR)	(NT)	……	248
アカセセリ	(EX)	(EN)	……	241	キタダケヨトウ	(N-)	[なし]	……	400
アカマダラコガネ	(N-)	[DD]	……	424	キタノツブゲンゴロウ	(VU)	(EN)	……	287
アサカミキリ	(N-)	[VU]	……	427	キトンボ	(CR)	[なし]	……	251
アサマシジミ	(CR)	(EN)	……	259	キヌツヤミズクサハムシ	(DD)	[なし]	……	368
アシナガミゾドロムシ	(DD)	[なし]	……	359	ギフチョウ	(VU)	[VU]	……	294
アマギクチキウマ	(NT)	[なし]	……	312	キベリクロヒメゲンゴロウ	(NT)	(NT)	……	319
アマギササキリモドキ	(DD)	[なし]	……	343	キベリマメゲンゴロウ	(N-)	(NT)	……	420
アリスアトキリゴミムシ	(N-)	[DD]	……	417	キボシチビコツブゲンゴロウ	(VU)	(EN)	……	285
イズササキリ	(CR)	[DD]	……	253	キボシツブゲンゴロウ	(DD)	(NT)	……	352
イソハサミムシ	(DD)	[なし]	……	340	キマダラモドキ	(N-)	(NT)	……	397
イトアメンボ	(N-)	[VU]	……	376	ギンイチモンジセセリ	(N-)	(NT)	……	387
ウスイロオナガシジミ	(N-)	[なし]	……	391	ギンボシヒョウモン	(N-)	[なし]	……	430
ウスバカマキリ	(DD)	[DD]	……	341	クギヌキハサミムシ	(N-)	[なし]	……	375
ウミコオロギ(ナギサスズ)	(大崩海岸の個体群)				クチナガコオロギ	(NT)	[なし]	……	310
	(LP)	[なし]	……	371	クビグロケンモン	(NT)	(NT)	……	337
ウミホソチビゴミムシ	(DD)	(NT)	……	347	クビボソコガシラミズムシ	(DD)	[DD]	……	349
ウラギンスジヒョウモン	(NT)	[VU]	……	329	クモガタヒョウモン	(NT)	[なし]	……	330
ウラクロシジミ	(NT)	[なし]	……	328	クモマツマキチョウ	(EN)	[VU]	……	270
ウラジャノメ	(NT)	[なし]	……	333	クモマベニヒカゲ	(N-)	(NT)	……	395
ウラナミアカシジミ	(VU)	[なし]	……	297	クロゲンゴロウ	(NT)	(NT)	……	320
ウラナミジャノメ	(EN)	[VU]	……	275	クロコブセスジダルマガムシ	(DD)	[なし]	……	356
エサキアメンボ	(N-)	(NT)	……	408	クロシジミ	(VU)	(EN)	……	299
エゾトンボ	(CR)	[なし]	……	249	クロツバメシジミ	(VU)	(NT)	……	300
エゾヒメゲンゴロウ	(DD)	[なし]	……	353	クロヒカゲモドキ	(N-)	(EN)	……	398
オオイチモンジ	(CR)	[VU]	……	261	クロホシコガシラミズムシ	(DD)	[VU]	……	350
オオイトトンボ	(CR)	[なし]	……	247	ゲンバイトンボ	(CR)	(NT)	……	244
オオウラギンヒョウモン	(EX)	(CR)	……	242	ケシゲンゴロウ	(N-)	(NT)	……	419
オオオカメコオロギ	(DD)	[なし]	……	342	ケブカマルクビカミキリ	(DD)	[なし]	……	362
オオキトンボ	(CR)	(EN)	……	252	ゲンゴロウ	(EN)	[VU]	……	268
オオクサキリ	(N-)	[なし]	……	401	コウベツブゲンゴロウ	(NT)	(NT)	……	318
オオコブスジコガネ	(EN)	[VU]	……	269	コオイムシ	(N-)	(NT)	……	409
オオサカアオゴミムシ	(N-)	[DD]	……	416	コガシラミズムシ	(DD)	[なし]	……	348
オオチャイロハナムグリ	(DD)	(NT)	……	358	コガタガムシ	(N-)	[VU]	……	380
オオチャバネセセリ	(N-)	[なし]	……	389	コガタノゲンゴロウ	(CR)	[VU]	……	255
オオチャバネヨトウ	(EN)	[VU]	……	276	コガムシ	(NT)	[DD]	……	322
オオトラフトンボ	(N-)	[なし]	……	373	コキマダラセセリ	(N-)	[なし]	……	388
オオヒカゲ	(N-)	[なし]	……	385	コサナエ	(VU)	[なし]	……	280
オオヒョウタンゴミムシ	(NT)	(NT)	……	316	コシロシタバ	(NT)	(NT)	……	336
オオフタホシマグソコガネ	(N-)	[なし]	……	382	コバナアオイトトンボ	(CR)	(EN)	……	243
オオミスジ	(N-)	[なし]	……	393	コバンムシ	(CR)	(EN)	……	254
オオミズスマシ	(VU)	(NT)	……	289	コヒオドシ	(EN)	[なし]	……	274
オオムラサキ	(N-)	(NT)	……	431	ゴマギケブカハムシ(クロヘリウスチャハムシ)				
オオルリハムシ	(NT)	(NT)	……	326		(N-)	(NT)	……	428
オキナワリチラシ	(N-)	[なし]	……	434	ゴマシジミ	(CR)	(CR)	……	258
オツネイトンボ	(NT)	[なし]	……	304	コマルケシゲンゴロウ	(NT)	(NT)	……	317
オナガシジミ	(N-)	[なし]	……	390	コミズスマシ	(VU)	(EN)	……	291
ガガブタネクイハムシ	(NT)	[なし]	……	325	コムラサキ	(N-)	[なし]	……	394
カケガワフキバタ	(NT)	[なし]	……	314	サトキマダラヒカゲ	(N-)	[なし]	……	432
カトリヤンマ	(NT)	[なし]	……	307	シマゲンゴロウ	(N-)	(NT)	……	421
カバイロシャチホコ	(NT)	(NT)	……	334	シュゼンヅフユシャク	(N-)	[なし]	……	399
ガマヨトウ	(NT)	[VU]	……	338	ジョウザンミドリシジミ	(N-)	[なし]	……	384
ガムシ	(NT)	(NT)	……	321	シルビアシジミ	(EX)	(EN)	……	238
カラスシジミ	(N-)	[なし]	……	392	シワムネマルドロムシ	(DD)	[なし]	……	354
カワラハンミョウ	(VU)	(EN)	……	284	スジグロチャバネセセリ	(EX)	(NT)	……	240



スジゲンゴロウ	(EX)	[EX]・……	237	ホシミスジ	(NT)	[なし]・……	331
スジヒラタガムシ	(N- )	[NT]・……	423	ホソハンミョウ	(N- )	[VU]・……	377
スナハラゴミムシ	(N- )	[VU]・……	414	ホソミオツネトンボ	(NT)	[なし]・……	305
スルガセモンササキリモドキ	(N- )	[なし]・……	402	ホッケミズムシ	(VU)	[NT]・……	283
セグロイナゴ	(N- )	[なし]・……	404	ホンサナエ	(VU)	[なし]・……	279
セラネクイハムシ	(DD)	[DD]・……	366	マイコアカネ	(NT)	[なし]・……	309
ダイコクコガネ	(DD)	[VU]・……	357	マダラコガシラミズムシ	(DD)	[VU]・……	351
タカネキマダラセセリ	(DD)	[CR]・……	370	マダラナニワトンボ	(N- )	[EN]・……	374
タカネヒナバタ	(N- )	[なし]・……	405	マルガタゲンゴロウ	(N- )	[VU]・……	379
タガメ	(N- )	[VU]・……	410	マルヒラタガムシ	(N- )	[NT]・……	422
タナカツヤハネゴミムシ	(N- )	[DD]・……	415	ミズスマシ	(VU)	[VU]・……	290
タベサナエ	(VU)	[NT]・……	281	ミヅナシミズムシ	(N- )	[NT]・……	411
チャマダラセセリ	(EX)	[EN]・……	239	ミドリヒメスギカミキリ	(DD)	[なし]・……	363
ツマジロウラジャノメ	(NT)	[なし]・……	332	ミヤケミズムシ	(NT)	[NT]・……	315
ツヤネクイハムシ	(DD)	[なし]・……	367	ミヤマシジミ	(VU)	[EN]・……	301
テカリダケフキバタ	(DD)	[なし]・……	344	ミヤマシロチョウ	(EN)	[VU]・……	271
トゲムネアラゲカミキリ	(DD)	[なし]・……	365	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	(N- )	[VU]・……	418
トラサンドクガ	(NT)	[NT]・……	335	ムモンアカシジミ	(N- )	[なし]・……	383
トラフトンボ	(EN)	[なし]・……	266	モートンイトンボ	(VU)	[NT]・……	277
ナカイケミヒメテントウ	(DD)	[なし]・……	361	ヤマキチョウ	(VU)	[EN]・……	296
ニセコケシゲンゴロウ	(VU)	[DD]・……	286	ヤマトオサムシダマシ	(NT)	[NT]・……	324
ニホンカワトンボ	(EN)	[なし]・……	263	ヤマトバタ(ヤマトマダラバタ)	(NT)	[なし]・……	313
ネアカヨシヤンマ	(NT)	[NT]・……	306	ヤマトマルドロムシ	(DD)	[なし]・……	355
ハッチョウトンボ	(EN)	[なし]・……	267	ヤマトモンシデムシ	(N- )	[NT]・……	381
ハネナガイナゴ	(N- )	[なし]・……	403	ヨツボシカミキリ	(VU)	[EN]・……	293
ハネピロエゾトンボ	(VU)	[VU]・……	282	ヨツボシトンボ	(NT)	[なし]・……	308
ババアメンボ	(DD)	[NT]・……	345	リュウガシメクラチビゴミムシ	(N- )	[なし]・……	378
ババスケヒメゾウムシ	(DD)	[なし]・……	369	ルイスツブゲンゴロウ	(VU)	[VU]・……	288
ハマスズ	(NT)	[なし]・……	311	ルリイトンボ	(N- )	[なし]・……	372
ハマベゾウムシ	(NT)	[なし]・……	327	<b>陸・淡水産貝類</b>			
ハヤシミドリシジミ	(VU)	[なし]・……	298	イシガイ	(NT)	[なし]・……	490
ヒゲコガネ	(NT)	[なし]・……	323	イシマキシロマイマイ	(NT)	[VU]・……	488
ヒゲナガヒラタドロムシ	(N- )	[NT]・……	425	イボイボナメクジ	(DD)	[NT]・……	495
ヒヌマイトンボ	(CR)	[EN]・……	245	ウスコミミガイ	(VU)	[NT]・……	458
ヒメシジミ	(EN)	[NT]・……	273	オオコウラナメクジ	(DD)	[NT]・……	501
ヒメジャノメ	(N- )	[なし]・……	433	オオタニシ	(NT)	[NT]・……	469
ヒメシロチョウ	(VU)	[EN]・……	295	オオトノサマガセル	(VU)	[NT]・……	462
ヒメタイコウチ	(DD)	[なし]・……	346	オクガタギセル	(NT)	[NT]・……	484
ヒメヒカゲ	(CR)	[CR]・……	262	オモイガケナマイマイ	(CR)	[CR+EN]・	442
ヒメピロウドカミキリ	(DD)	[NT]・……	364	カサネシタラガイ	(NT)	[NT]・……	487
ヒメミズスマシ	(VU)	[EN]・……	292	カタマメマイマイ	(EN)	[VU]・……	453
ヒョウタンゴミムシ	(N- )	[なし]・……	413	カタヤマガイ	(EX)	[CR+EN]・	437
ヒョウモンチョウ	(CR)	[VU]・……	260	カワネミジンツボ	(DD)	[DD]・……	494
フジアキタクロナガオサムシ	(N- )	[VU]・……	386	キバサナギガイ	(VU)	[CR+EN]・	460
フジコバネヒナバタ	(N- )	[なし]・……	407	クチマガリスナガイ	(NT)	[VU]・……	483
フジシロミヤクヨトウ	(NT)	[NT]・……	339	クロダカワニナ	(NT)	[NT]・……	470
フジミドリシジミ	(N- )	[なし]・……	429	コベソマイマイ	(DD)	[なし]・……	502
フタスジサナエ	(EN)	[NT]・……	265	サドタカキビ	(DD)	[DD]・……	498
フタスジチョウ	(VU)	[なし]・……	302	シイノミミガイ	(DD)	[CR+EN]・	496
ヘイケボタル	(N- )	[なし]・……	426	シイボルトコギセル	(EN)	[なし]・……	450
ベッコウトンボ	(CR)	[CR]・……	250	スジキビ	(NT)	[NT]・……	486
ベニイトンボ	(CR)	[NT]・……	246	タケノコカワニナ	(CR)	[VU]・……	438
ベニヒカゲ	(N- )	[NT]・……	396				
ベニモンカラスシジミ	(EN)	[NT]・……	272				
ヘリグロチャバネセセリ	(CR)	[なし]・……	257				
ホシチャバネセセリ	(CR)	[EN]・……	256				

タトモマイマイ(ミヤケチャイロマイマイ)	(CR)	{LP}	……	443	カザアナマシラグモ	(N- )	{なし}	……	518
タンザウキビ	(DD)	{DD}	……	499	カネコトタテグモ	(NT)	{NT}	……	510
ツバクロイワギセル	(VU)	{VU}	……	463	キシノウエトタテグモ	(NT)	{NT}	……	511
トウカイヤマトガイ	(DD)	{VU}	……	493	キヌキリグモ	(N- )	{なし}	……	524
トウキョウヒラマキガイ	(NT)	{DD}	……	479	キノボリタテグモ	(NT)	{NT}	……	512
ナガオカモノアラガイ	(NT)	{NT}	……	480	コガネグモ	(NT)	{なし}	……	514
ナガナタネガイ	(VU)	{LP}	……	459	サンロウドヨウグモ	(NT)	{なし}	……	513
ナタネガイモドキ	(NT)	{NT}	……	481	シロタマヒメグモ	(N- )	{なし}	……	525
ナタネキバサナギガイ	(NT)	{VU}	……	482	タカネエビスグモ	(N- )	{なし}	……	529
ナニワクチミゾガイ	(EN)	{NT}	……	448	タカネヒメグモ	(N- )	{なし}	……	526
ノミガイ	(CR)	{VU}	……	440	ニシキオニグモ	(NT)	{なし}	……	516
ハナコギセル	(CR)	{CR+EN}	..	441	フジホラヒメグモ	(EN)	{VU}	……	508
ヒダリマキモノアラガイ	(CR)	{CR+EN}	..	439	フジマシラグモ	(EN)	{なし}	……	507
ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ	(NT)	{NT}	……	471	ミドリアシナガグモ	(N- )	{なし}	……	527
ヒメギセル	(NT)	{なし}	……	485	ミヤマナミハグモ	(N- )	{なし}	……	521
ヒラマキガイモドキ	(NT)	{NT}	……	477	ヤマキレアミグモ	(N- )	{なし}	……	528
ヒラマキミズマイマイ	(NT)	{DD}	……	478	ワスレナグモ	(VU)	{NT}	……	509
ヒロクチコギセル	(EN)	{CR+EN}	..	451					
ベニゴマオカタニシ	(NT)	{VU}	……	467					
ベニゴマガイ	(EN)	{CR+EN}	..	445					
ホウライジギセル	(EN)	{CR+EN}	..	449					
ホラアナゴマオカチグサ	(NT)	{CR+EN}	..	474					
マイマイ属の一種	(VU)	{なし}	……	464					
マクスジコミミガイ	(VU)	{NT}	……	457					
マシジミ	(NT)	{VU}	……	492					
マツカサガイ	(CR)	{NT}	……	444					
マメタニシ	(EN)	{VU}	……	446					
マルクチコギセル	(DD)	{CR+EN}	..	497					
マルタニシ	(NT)	{VU}	……	468					
ミカワマイマイ	(EN)	{CR+EN}	..	454					
ミズコハクガイ	(VU)	{VU}	……	456					
ミニピロウドマイマイ	(DD)	{VU}	……	503					
ミノブマイマイ	(VU)	{VU}	……	466					
ミヤマヒダリマキマイマイ	(NT)	{VU}	……	489					
メルレンドルフマイマイ	(VU)	{CR+EN}	..	465					
モノアラガイ	(NT)	{NT}	……	476					
ヤセアナナシマイマイ	(EN)	{VU}	……	455					
ヤマコウラナメクジ	(DD)	{NT}	……	500					
ヤマトキバサナギガイ	(VU)	{VU}	……	461					
ヤマトクビキレガイ	(NT)	{なし}	……	475					
ヤマトシジミ	(NT)	{NT}	……	491					
ヤママメタニシ	(EN)	{CR+EN}	..	447					
ヤマモトゴマオカチグサ(ヤマモトミジンオカチグサ)	(NT)	{VU}	……	473					
ヨシダカワザンショウガイ	(NT)	{NT}	……	472					
レンズガイ	(EN)	{VU}	……	452					
<b>クモ類</b>									
アケボノウウレイグモ	(N- )	{なし}	……	517					
アベマシラグモ	(N- )	{なし}	……	519					
イナズマクサグモ	(N- )	{なし}	……	522					
エゾコモリグモ	(N- )	{なし}	……	523					
エンシュウナミハグモ	(N- )	{なし}	……	520					
オニグモ	(NT)	{なし}	……	515					

まもりたい静岡県の野生生物 2019  
静岡県レッドデータブック <動物編>

平成 31 年 3 月 31 日発行

企画・編集：静岡県くらし・環境部環境局自然保護課

〒420-8601 静岡市葵区追手町 9-6

TEL：054-221-3332 FAX：054-221-3278

E-mail：shizenhogo@pref.shizuoka.lg.jp

事務局 株式会社環境アセスメントセンター

〒420-0047 静岡市葵区清閑町 13-12

TEL：054-255-3650 FAX：054-253-7891

E-mail：kikaku@eac-net.co.jp